





(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第92集

上越新幹線関係  
埋蔵文化財発掘調査報告  
第12集

# 舟橋遺跡

1989

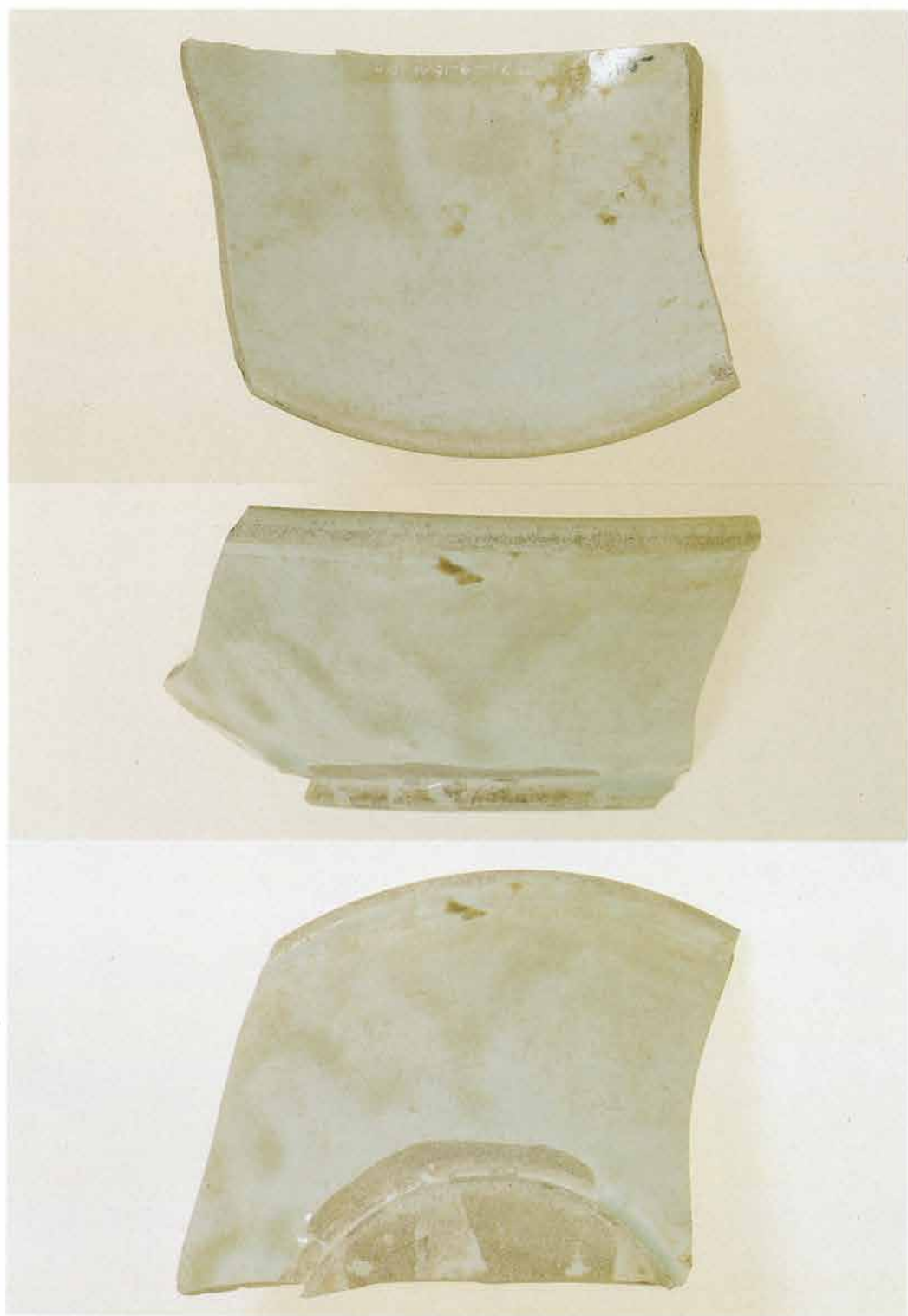
群馬県教育委員会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
東日本旅客鉄道株式会社





巻頭図版1 烏川対岸より望む佐野地区遺跡





卷頭図版2 3区15号住居跡出土白磁碗





## 序

榛名山麓に起源を有する小河川は井野川に集中し、さらに烏川、利根川へと流入します。井野川と烏川の合流部付近には北関東の交通の要衝である高崎市があります。高崎市は古代東国の中心地でもありました。また、交通のうえでも重要な役割を担ってまいりました。

佐野の地は古代東国の中心地の一つであり、国指定特別史跡である山上碑にある佐野のみやけの故地とされている場所でもあります。特に、舟橋は謡曲「鉢の木」の主人公佐野源佐衛門ゆかりの地と考えられている場所でもあります。

調査によりまして古墳時代から平安時代にいたる竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、古墳等を含む複合遺跡であることがわかりました。また、烏川の氾濫原と思われる地域にも連綿とした生活が築かれていたことが実証されました。

上越新幹線の建設は東京との距離をわずか1時間に短縮し、関越自動車道の建設とあいまって、その影響は政治、経済、文化等の面において徐々に広がりつつあります。

調査の実施に当たりまして何かと配慮をいただきました群馬県教育委員会、日本鉄道建設公団、東日本旅客鉄道株式会社をはじめとする関係各位に感謝するとともに、直接調査に当たりました関係者の努力を多とするものであります。

終わりに本報告書が謎多い古代社会の解明資料として県民の皆様に活用され、生涯学習等の教材として生かされるよう期待いたします。

平成元年4月30日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎



# 例 言

1. 本書は上越新幹線建設工事に伴う事前調査として、昭和49年から昭和58年にかけて実施した高崎市上佐野町字舟橋に所在する舟橋遺跡の発掘調査報告書である。
2. 舟橋遺跡は事前調査でNo21地区と命名された地点である。
3. 発掘調査は日本鉄道建設公団の委託を受けて、群馬県教育委員会および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。調査年度・調査機関・担当者は次の通りである。

第一次調査 群馬県教育委員会 昭和49年11月～昭和50年3月

担当者 横沢克明 真下高幸 能登健 調査員 佐藤優美

第二次調査 群馬県教育委員会 昭和50年4月～昭和50年7月

担当者 横沢克明 真下高幸 能登健 調査員 佐藤優美

第三次調査 群馬県教育委員会 昭和53年2月～昭和53年3月

担当者 長谷部達雄 調査員 原雅信 外山政子

第四次調査 群馬県教育委員会 昭和53年4月～昭和53年5月

担当者 長谷部達雄 調査員 原雅信 外山政子

第五次調査 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和57年12月～昭和58年3月

担当者 下城正 関晴彦 女屋和志雄 調査員 外山政子

4. 整理事業は、群馬県教育委員会を通じ、東日本旅客鉄道株式会社の委託をうけて、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が昭和63年1月～平成元年6月にかけて実施した。担当者は次のとおりである。

## 事務担当職員

常務理事 白石保三郎 邊見長雄（平成元年4.1～） 事務局長 井上唯雄 松本浩一（昭和63年4.1～） 管理部長 田口紀雄 調査研究部長 上原啓巳・神保侑史（平成元年4.1～） 庶務課長 定方隆史 住谷進 調査研究部第二課長 桜場一寿 庶務課主任 国定均 笠原秀樹 小林昌嗣 須田朋子 主事 吉田有光 柳岡良宏

## 整理担当職員

専門員 下城正 主任調査研究員 女屋和志雄 井川達雄 調査研究員 大西雅広 嘱託員 坂庭常盤 新井悦子 補助員 山田キミ子 渡辺フサ枝 今井サチ子 五明志津江 岡田美知枝 宇佐美征子 岩渕節子 柴田敏子 茂木順子 杉本万里子 阿部幸江 木暮芳枝 白井和子 井田裕子 平野照美 小林幸枝 光安文子

5. 遺構写真撮影については各調査担当者が、遺物写真については当事業団技師佐藤元彦が担当した。

6. 本書の編集は、井川達雄・大西雅広がおこない、執筆は森田秀策・下城正・女屋和志雄・井川達雄・大西雅広がおこなった。執筆分担は下記の通りである。

第I章 森田秀策 第II章 大西雅広 第III章 大西雅広 第IV章 第1節 井川達雄 大西雅広 女屋和志雄（石製模造品について） 第2節 下城正 第V章 第1節 井川達雄 第2節 大西雅広

7. 本書の作成にあたっては、下記の方々から御協力・御教示をいただいた。記して感謝の意を表する次第です。

前橋市教育委員会 前原豊 加部二生（敬称略）

8. 石器・石製品の石質鑑定については、飯島静雄氏（群馬地質学研究会）にお願いした。

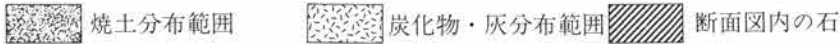
9. 遺構実測の一部は富永測量事務所に委託し、実測図のトレースは株式会社測研に委託して行った。

10. 本書の作成にあたっては、各方面から多大な協力を得た。また、発掘調査に際しては現場で働いていただいた方々をはじめ、遺跡周辺の方々から多大なるご支援をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

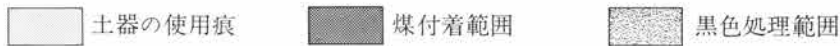
11. 当遺跡出土の遺物・実測図・写真等の調査資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

## 凡 例

1. 地区番号・遺構番号は、調査時点での番号を継承することを原則としたが、番号の重複・遺構種の判断の変更等により、番号を変えたもの・欠番にしたものがある。
2. 遺物番号は、報告書掲載予定のものに対して連続番号を与えた。また、遺物番号は本文・遺物観察表・写真図版・考察を通じて一致する。
3. 遺構図の縮尺は、竪穴住居跡1/60・竈等の微細図1/30・土坑1/60・古墳1/200・溝平面図1/400・火葬跡1/20を原則とした。また、遺物図は1/3を原則としたが例外もある。各遺構・遺物図にはスケール・縮尺を入れてある。
4. 遺物観察表の記載の [ ] は遺存値を、( ) は推定値を表す。
5. 当遺跡の方位は、磁北を基準にしてある。
6. 竈を有する竪穴式住居跡の主軸方位は、竈を施設する壁に直行する方向と磁北との角度を表し、竈のない竪穴式住居跡の主軸方位は長軸線と磁北との角度を表す。
7. 遺構図面に使用したスクリントーンは下記の通りである。



8. 遺物図面に使用したスクリントーンは下記の通りである。



9. 遺構実測図は、完掘した後に作成しているため、平面図に新旧関係は表現されない。
10. 遺物図版内の実線は、異なった遺構出土であることを、一点鎖線は縮尺が異なっていることを表している。
11. 遺物観察表中の色調は、農林水産省水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『標準土色帖』を使用した。



# 目 次

巻頭図版  
序  
例言  
凡例

第 I 章	調査に至る経過	1
第 II 章	調査の方法	4
第 III 章	遺跡の概要	5
第 1 節	遺跡の位置と地形	5
第 2 節	周辺の遺跡	6
第 3 節	遺跡の概要	13
第 IV 章	発見された遺構と遺物	15
第 1 節	古墳時代から平安時代の遺構と遺物	17
第 2 節	縄文時代・弥生時代の遺物	329
第 V 章	調査の成果と今後の問題点	332
第 1 節	舟橋遺跡の古墳時代土器と集落について	332
第 2 節	舟橋遺跡出土の白磁について	346

# 挿図目次

第 1 図	遺跡周辺の地形区分図	5
第 2 図	周辺の遺跡	8
第 3 図	調査区位置図	14
第 4 図	1 区 1 A 号住居跡・1 B 号住居跡	17
第 5 図	1 区 1 A 号住居跡出土遺物	18
第 6 図	1 区 2 号住居跡・2 区 1 号住居跡	20
第 7 図	2 区 1 号住居跡出土遺物	20
第 8 図	2 区 2 号住居跡	21
第 9 図	2 区 2 号住居跡断面図	22
第 10 図	2 区 2 号住居跡出土遺物①	22
第 11 図	2 区 2 号住居跡出土遺物②	23
第 12 図	2 区 3 号住居跡	24
第 13 図	2 区 4 A 号住居跡・4 B 号住居跡	25
第 14 図	2 区 4 A 号住居跡・4 B 号住居跡断面図・エレベーション図、4 A 号住居跡竈断面図	26
第 15 図	2 区 4 A 号住居跡・4 B 号住居跡出土遺物	26
第 16 図	2 区 4 C 号住居跡掘形エレベーション図・断面図	27
第 17 図	2 区 4 C 号住居跡掘形	28
第 18 図	2 区 5 A 号住居跡・5 B 号住居跡	29
第 19 図	2 区 5 A 号住居跡・5 B 号住居跡出土遺物	30
第 20 図	3 区 1 号住居跡	31
第 21 図	3 区 1 号住居跡断面図・エレベーション図、竈断面図・エレベーション図	32
第 22 図	3 区 1 号住居跡出土遺物①	33
第 23 図	3 区 1 号住居跡出土遺物②	34
第 24 図	3 区 1 号住居跡出土遺物③	35
第 25 図	3 区 2 号住居跡	37
第 26 図	3 区 2 号住居跡出土遺物	38
第 27 図	3 区 3 号住居跡	40
第 28 図	3 区 3 号住居跡出土遺物	40
第 29 図	3 区 4 号住居跡	41
第 30 図	3 区 5 号住居跡	42
第 31 図	3 区 5 号住居跡竈平面図・断面図	43
第 32 図	3 区 5 号住居跡出土遺物①	43
第 33 図	3 区 5 号住居跡出土遺物②	44
第 34 図	3 区 5 号住居跡出土遺物③	45
第 35 図	3 区 6 号住居跡	47
第 36 図	3 区 6 号住居跡エレベーション図	48
第 37 図	3 区 6 号住居跡出土遺物	48
第 38 図	3 区 7 号住居跡・8 号住居跡・13号住居跡・14号住居跡エレベーション図	51
第 39 図	3 区 7 号住居跡・8 号住居跡・13号住居跡・14号住居跡	52
第 40 図	3 区 7 号住居跡・13号住居跡竈エレベーション図、14号住居跡貯蔵穴エレベーション図	53
第 41 図	3 区 7 号住居跡出土遺物①	53
第 42 図	3 区 7 号住居跡出土遺物②、8 号住居跡出土遺物、13号住居跡出土遺物①	54
第 43 図	3 区 13号住居跡出土遺物②、14号住居跡出土遺物	55
第 44 図	3 区 9 号住居跡	58
第 45 図	3 区 9 号住居跡出土遺物	58
第 46 図	3 区 10号住居跡	59
第 47 図	3 区 10号住居跡出土遺物	60
第 48 図	3 区 11号住居跡	62
第 49 図	3 区 11号住居跡竈断面図	63
第 50 図	3 区 11号住居跡出土遺物	63
第 51 図	3 区 12号住居跡	64
第 52 図	3 区 12号住居跡出土遺物①	64
第 53 図	3 区 12号住居跡出土遺物②	65



第54図	3区15号住居跡	66
第55図	3区15号住居跡出土遺物①	66
第56図	3区15号住居跡出土遺物②	67
第57図	3区16号住居跡	68
第58図	3区16号住居跡断面図・エレベーション図	69
第59図	3区16号住居跡出土遺物	69
第60図	4区1号住居跡竈平面図・エレベーション図	70
第61図	4区1号住居跡	71
第62図	4区1号住居跡出土遺物	72
第63図	4区2号住居跡	73
第64図	4区2号住居跡断面図・エレベーション図	74
第65図	4区2号住居跡出土遺物①	74
第66図	4区2号住居跡出土遺物②	75
第67図	4区2号住居跡出土遺物③	76
第68図	4区3号住居跡	78
第69図	4区3号住居跡出土遺物	78
第70図	4区4号住居跡・11号住居跡	80
第71図	4区4号住居跡・11号住居跡エレベーション図	81
第72図	4区4号住居跡出土遺物①	82
第73図	4区4号住居跡出土遺物②	83
第74図	4区11号住居跡出土遺物	84
第75図	4区5号住居跡	87
第76図	4区6号住居跡	88
第77図	4区6号住居跡出土遺物	88
第78図	4区7号住居跡	89
第79図	4区7号住居跡出土遺物①	89
第80図	4区7号住居跡出土遺物②	90
第81図	4区8号住居跡・9号住居跡エレベーション図	91
第82図	4区8号住居跡・9号住居跡	92
第83図	4区8号住居跡・9号住居跡出土遺物	93
第84図	4区10号住居跡断面図・エレベーション図	94
第85図	4区10号住居跡	95
第86図	4区10号住居跡出土遺物①	95
第87図	4区10号住居跡出土遺物②	96
第88図	4区10号住居跡出土遺物③	97
第89図	4区12号住居跡	98
第90図	4区12号住居跡出土遺物	99
第91図	4区13号住居跡	100
第92図	4区14号住居跡	101
第93図	4区14号住居跡断面図・エレベーション図	102
第94図	4区14号住居跡出土遺物	102
第95図	5区1号住居跡	103
第96図	5区1号住居跡エレベーション図	104
第97図	5区1号住居跡出土遺物	104
第98図	5区2号住居跡	106
第99図	5区2号住居跡出土遺物	106
第100図	5区3号住居跡竈平面図・断面図	107
第101図	5区3号住居跡	108
第102図	5区3号住居跡出土遺物①	108
第103図	5区3号住居跡出土遺物②	109
第104図	5区4号住居跡	110
第105図	5区4号住居跡出土遺物①	110
第106図	5区4号住居跡出土遺物②	111
第107図	5区5号住居跡・7A号住居跡	113
第108図	5区5号住居跡出土遺物①	114
第109図	5区5号住居跡出土遺物②	115

第110図	5区5号住居跡出土遺物③・7A号住居跡出土遺物①	116
第111図	5区7A号住居跡出土遺物①	117
第112図	5区6号住居跡	121
第113図	5区6号住居跡出土遺物	121
第114図	5区7B号住居跡	122
第115図	5区7B号住居跡出土遺物	123
第116図	5区8号住居跡・同掘形	124
第117図	5区8号住居跡出土遺物	124
第118図	5区9号住居跡	125
第119図	5区9号住居跡出土遺物	125
第120図	5区10号住居跡竈断面図	126
第121図	5区10号住居跡・同掘形	127
第122図	5区10号住居跡出土遺物	128
第123図	5区11号住居跡・15号住居跡エレベーション図	130
第124図	5区11号住居跡・15号住居跡	131
第125図	5区11号住居跡出土遺物①	131
第126図	5区11号住居跡出土遺物②	132
第127図	5区11号住居跡出土遺物③	133
第128図	5区15号住居跡出土遺物①	134
第129図	5区15号住居跡出土遺物②	135
第130図	5区12号住居跡	136
第131図	5区13号住居跡	137
第132図	5区14号住居跡出土遺物①	137
第133図	5区14号住居跡	138
第134図	5区14号住居跡出土遺物②	138
第135図	5区17号住居跡	139
第136図	5区17号住居跡出土遺物	139
第137図	6区1号住居跡	140
第138図	6区1号住居跡エレベーション図	141
第139図	6区1号住居跡出土遺物①	141
第140図	6区1号住居跡出土遺物②	142
第141図	6区1号住居跡出土遺物③	143
第142図	6区2号住居跡	145
第143図	6区2号住居跡竈平面図・エレベーション図・掘形平面図・断面図	146
第144図	6区2号住居跡出土遺物①	147
第145図	6区2号住居跡出土遺物②	148
第146図	6区3号住居跡	150
第147図	6区3号住居跡出土遺物①	151
第148図	6区3号住居跡出土遺物②	152
第149図	6区4号住居跡	154
第150図	6区4号住居跡出土遺物	154
第151図	6区5号住居跡	155
第152図	6区5号住居跡出土遺物	155
第153図	6区6号住居跡エレベーション図・竈断面図	156
第154図	6区6号住居跡	157
第155図	6区6号住居跡出土遺物①	157
第156図	6区6号住居跡出土遺物②	158
第157図	6区7号住居跡	159
第158図	6区7号住居跡エレベーション図	160
第159図	6区7号住居跡出土遺物	160
第160図	6区8号住居跡	161
第161図	6区8号住居跡出土遺物①	161
第162図	6区8号住居跡出土遺物②	162
第163図	6区9号住居跡	163
第164図	6区9号住居跡出土遺物	163
第165図	6区11号住居跡	164

第166図	6区11号住居跡掘形	165
第167図	6区11号住居跡出土遺物①	165
第168図	6区11号住居跡出土遺物②	166
第169図	6区12号住居跡	167
第170図	6区12号住居跡断面図・エレベーション図	168
第171図	6区12号住居跡出土遺物①	168
第172図	6区12号住居跡出土遺物②	169
第173図	6区13号住居跡	170
第174図	6区13号住居跡出土遺物	171
第175図	6区14号住居跡	172
第176図	6区14号住居跡出土遺物	172
第177図	6区15号住居跡	173
第178図	6区16号住居跡	174
第179図	6区16号住居跡出土遺物	174
第180図	6区17号住居跡	175
第181図	6区17号住居跡出土遺物	175
第182図	7区1号住居跡	176
第183図	7区1号住居跡出土遺物①	177
第184図	7区1号住居跡出土遺物②	178
第185図	7区2号住居跡	180
第186図	7区2号住居跡竈エレベーション図	181
第187図	7区2号住居跡出土遺物	181
第188図	7区3号住居跡	182
第189図	7区3号住居跡出土遺物①	183
第190図	7区3号住居跡出土遺物②	184
第191図	7区3号住居跡出土遺物③	185
第192図	7区4A号住居跡	186
第193図	7区4A号住居跡出土遺物	187
第194図	7区4B号住居跡	188
第195図	7区5A号住居跡	189
第196図	7区5A号住居跡出土遺物	189
第197図	7区5B号住居跡	191
第198図	7区5B号住居跡掘形	192
第199図	7区5B号住居跡出土遺物①	193
第200図	7区5B号住居跡出土遺物②	194
第201図	7区6号住居跡	197
第202図	7区6号住居跡出土遺物	198
第203図	7区7A号住居跡・7B号住居跡	199
第204図	7区7B号住居跡出土遺物	200
第205図	7区9号住居跡掘形	202
第206図	7区9号住居跡出土遺物①	203
第207図	7区9号住居跡出土遺物②	204
第208図	7区10号住居跡	206
第209図	7区10号住居跡エレベーション図・竈断面図	207
第210図	7区10号住居跡出土遺物	207
第211図	7区11号住居跡	208
第212図	7区11号住居跡出土遺物	208
第213図	7区12号住居跡	209
第214図	7区12号住居跡出土遺物	209
第215図	7区13号住居跡	211
第216図	7区13号住居跡掘形	212
第217図	7区13号住居跡出土遺物①	212
第218図	7区13号住居跡出土遺物②	213
第219図	7区14号住居跡	214
第220図	7区14号住居跡断面図・エレベーション図	215
第221図	7区14号住居跡出土遺物	215

第222図	7区15号住居跡	216
第223図	7区15号住居跡出土遺物	216
第224図	7区16号住居跡	217
第225図	7区16号住居跡出土遺物	217
第226図	7区17号住居跡	218
第227図	7区17号住居跡竈断面図、掘形	219
第228図	7区17号住居跡出土遺物①	219
第229図	7区17号住居跡出土遺物②	220
第230図	7区18号住居跡	221
第231図	7区18号住居跡出土遺物	221
第232図	7区19号住居跡	222
第233図	8区1号住居跡	223
第234図	8区1号住居跡掘形	224
第235図	8区1号住居跡出土遺物	224
第236図	8区2号住居跡	225
第237図	8区2号住居跡断面図・エレベーション図、竈断面図	226
第238図	8区2号住居跡出土遺物	226
第239図	8区3号住居跡竈断面図・エレベーション図	227
第240図	8区3号住居跡	228
第241図	8区3号住居跡出土遺物①	228
第242図	8区3号住居跡出土遺物②	229
第243図	8区4号住居跡	230
第244図	8区4号住居跡出土遺物	231
第245図	8区5号住居跡	232
第246図	8区5号住居跡出土遺物	232
第247図	8区6号住居跡	233
第248図	8区6号住居跡出土遺物	234
第249図	8区7号住居跡	235
第250図	8区7号住居跡出土遺物	236
第251図	8区11号住居跡竈断面図、貯蔵穴断面図	236
第252図	8区11号住居跡・同掘形	237
第253図	8区11号住居跡出土遺物	238
第254図	8区12号住居跡	239
第255図	8区12号住居跡掘形	240
第256図	8区12号住居跡出土遺物①	240
第257図	8区12号住居跡出土遺物②	241
第258図	8区13号住居跡・同掘形	242
第259図	8区13号住居跡掘形エレベーション図	243
第260図	8区13号住居跡出土遺物	243
第261図	8区14号住居跡	244
第262図	8区14号住居跡出土遺物	244
第263図	8区15号住居跡エレベーション図	245
第264図	8区15号住居跡	246
第265図	8区15号住居跡掘形	247
第266図	8区15号住居跡出土遺物①	247
第267図	8区15号住居跡出土遺物②	248
第268図	8区15号住居跡出土遺物③	249
第269図	8区16号住居跡	251
第270図	8区16号住居跡出土遺物	251
第271図	8区17号住居跡	253
第272図	8区17号住居跡掘形	254
第273図	8区17号住居跡出土遺物①	254
第274図	8区17号住居跡出土遺物②	255
第275図	9区1号住居跡断面図・エレベーション図	256
第276図	9区1号住居跡	257
第277図	9区1号住居跡出土遺物①	257

第278図	9区1号住居跡掘形	258
第279図	9区1号住居跡出土遺物②	258
第280図	9区2号住居跡	260
第281図	9区2号住居跡出土遺物	260
第282図	9区3号住居跡	261
第283図	9区3号住居跡竈断面図・貯蔵穴断面図	262
第284図	9区4号住居跡エレベーション図・竈断面図	262
第285図	9区4号住居跡	263
第286図	9区4号住居跡出土遺物	263
第287図	6区1号掘立柱跡	264
第288図	10区1号柱列跡	265
第289図	1区1号小竪穴跡	265
第290図	9区1号古墳	266
第291図	9区1号古墳断面図	267
第292図	9区1号古墳出土遺物①	267
第293図	9区1号古墳出土遺物②	268
第294図	9区1号古墳出土遺物③	269
第295図	10区1号石槨平面図・断面図	271
第296図	10区1号石槨平面図・側面図・断面図・掘形平面図・エレベーション図	272
第297図	1区1号井戸跡	273
第298図	1区1号井戸跡出土遺物	273
第299図	7区1号井戸跡	274
第300図	6区1号墓壇断面図	274
第301図	6区1号墓壇平面図	275
第302図	6区1号火葬跡	275
第303図	3区4号土坑	276
第304図	3区4号土坑出土遺物①	276
第305図	3区4号土坑出土遺物②	277
第306図	9区10号土坑断面図	278
第307図	9区10号土坑	279
第308図	9区10号土坑出土遺物	279
第309図	9区11号土坑	280
第310図	9区11号土坑断面図・エレベーション図	281
第311図	9区11号土坑出土遺物①	281
第312図	9区11号土坑出土遺物②	282
第313図	3区1号馬骨埋納窆	283
第314図	1区1号土坑・2号土坑・3号土坑・4号土坑・5号土坑	288
第315図	1区6号土坑・7号土坑・2区1号土坑・5号土坑	289
第316図	3区1号土坑・5号土坑・6号土坑・7号土坑	290
第317図	4区1号土坑・2号土坑・6号土坑・7号土坑・8号土坑・9号土坑・10号土坑	291
第318図	5区1号土坑・2号土坑・3号土坑・4号土坑・5号土坑・6号土坑・7号土坑	292
第319図	6区1号土坑・2号土坑・3号土坑・4号土坑・5号土坑・6号土坑・7号土坑 8号土坑・10号土坑	293
第320図	7区1号土坑・2号土坑・3号土坑・5号土坑・6号土坑・7号土坑・10号土坑・11号土坑	294
第321図	7区8号土坑・9号土坑	295
第322図	8区1号土坑・4号土坑・5号土坑・8号土坑・10号土坑・11号土坑・15号土坑 16号土坑・17号土坑・18号土坑・19号土坑・20号土坑・21号土坑	296
第323図	9区1号土坑・2号土坑・3号土坑・5号土坑・6号土坑・15号土坑・16号土坑 石出土状態平面図・断面図	297
第324図	9区1号土坑・2号土坑・3号土坑・5号土坑・6号土坑・15号土坑・16号土坑	298
第325図	9区4号土坑・14号土坑・10区1号土坑・2号土坑・3号土坑・4号土坑・5号土坑	299
第326図	1区2号土坑・3区6号土坑・7号土坑出土遺物	300
第327図	3区1号土坑・4区1号土坑・7号土坑・8号土坑・5区1号土坑出土遺物	301
第328図	6区10号土坑・7区3号土坑出土遺物	302
第329図	8区5号土坑・11号土坑・9区1号土坑・2号土坑・5号土坑・6号土坑出土遺物	303
第330図	1区溝跡	307

第331図	2区・3区・4区溝跡	308
第332図	5区・6区・7区溝跡	309
第333図	8区・9区・10区溝跡	310
第334図	1区1号溝跡・2号溝跡・3号溝跡、2区1号溝跡・2号溝跡、 3区1号溝跡・2号溝跡・3号溝跡断面図・エレベーション図	312
第335図	3区1号溝跡・3号溝跡、4区1号溝跡・2号溝跡、6区1号溝跡・2号溝跡・ 3号溝跡・4号溝跡・5号溝跡・6号溝跡断面図・エレベーション図	313
第336図	7区1号溝跡・2号溝跡、8区1号溝跡・4号溝跡・5号溝跡、9区1号溝跡・ 2号溝跡、10区2号溝跡・3号溝跡断面図・エレベーション図	314
第337図	1区3号溝跡出土遺物①	315
第338図	1区3号溝跡出土遺物②、2区1号溝跡出土遺物、3区1号溝跡出土遺物①	316
第339図	3区1号溝跡出土遺物②、3区3号溝跡出土遺物、4区1号溝跡出土遺物	317
第340図	6区5号溝跡出土遺物	318
第341図	表土出土遺物①	322
第342図	表土出土遺物②	323
第343図	表土出土遺物③	324
第344図	表土出土遺物④	325
第345図	縄文時代の遺物①	330
第346図	縄文・弥生時代の遺物②	331
第347図	舟橋遺跡出土古墳時代土器分類表①	340
第348図	舟橋遺跡出土古墳時代土器分類表②	341
第349図	舟橋遺跡出土古墳時代土器分類表③	342
第350図	舟橋遺跡出土古墳時代土器分類表④	343
第351図	舟橋遺跡出土古墳時代土器分類表⑤	344
第352図	舟橋遺跡出土古墳時代土器分類表⑥	345
第353図	初期貿易陶磁出土遺跡位置図	353
第354図	群馬県内出土の初期貿易陶磁器	354
付 図	舟橋遺跡全体図、基本土層図	

# 図版目次

巻頭図版 1	鳥川対岸より望む佐野地区遺跡
巻頭図版 2	3区15号住居跡出土白磁碗
図版 1	遺跡遠景（南東より遺跡を望む）
	遺跡遠景（佐野崖上より遺跡を望む）
図版 2	遺跡遠景（佐野崖上より遺跡を望む）
	遺跡遠景（鳥川対岸より佐野地区遺跡群を望む）
図版 3	遺跡遠景（鳥川対岸より遺跡を望む）
	発掘調査風景
図版 4	発掘調査風景
	発掘調査風景
図版 5	発掘調査風景
	発掘調査風景
図版 6	発掘調査風景
	発掘調査風景
図版 7	発掘調査風景
	発掘調査風景
図版 8	発掘調査風景
	1区・2区東側道全景（南より）
図版 9	3区本線全景（南より）
	4区西側道全景（南より）
図版 10	5区～10区東側道全景（北より）
	5区～10区西側道全景（北より）
図版 11	5区・6区東側道全景（北より）
	5区・6区東側道全景（南より）
図版 12	5区・6区・7区西側道全景（北より）
	7区～10区東側道全景（北より）
図版 13	7区～10区東側道全景（南より）
	7区本線全景（北より）
図版 14	7区・8区本線全景（北より）
	8区西側道全景（北より）
図版 15	8区本線北半部全景（北東より）
	10区西側道全景（南より）
図版 16	11区全景（東より）
	1区1A号住居跡・1B号住居跡東半部全景
図版 17	1区1A号住居跡・1B号住居跡西半部遺物出土状態全景
	1区2号住居跡全景
図版 18	2区1号住居跡全景
	2区2号住居跡遺物出土状態全景
図版 19	2区3号住居跡全景
	2区4A号住居跡・4B号住居跡・4C号住居跡・5A号住居跡・1号土坑全景
図版 20	2区4A号住居跡・4B号住居跡遺物出土状態全景
	2区4A号住居跡・4B号住居跡・4C号住居跡全景
図版 21	2区5A号住居跡・1号土坑遺物出土状態全景
	2区5A号住居跡・5B号住居跡・1号土坑全景
図版 22	3区1号住居跡・2号住居跡西半部遺物出土状態全景
	3区1号住居跡東半部遺物出土状態全景
図版 23	3区1号住居跡東半部全景
	3区1号住居跡竈
図版 24	3区1号住居跡貯蔵穴遺物出土状態
	3区2号住居跡貯蔵穴周辺遺物出土状態
図版 25	3区3号住居跡遺物出土状態全景
	3区3号住居跡全景

- ☒ 版 26 3区4号住居跡西半部全景  
3区5号住居跡遺物出土狀態全景
- ☒ 版 27 3区5号住居跡全景  
3区5号住居跡竈
- ☒ 版 28 3区6号住居跡遺物出土狀態全景  
3区7号住居跡・8号住居跡・9号住居跡・12号住居跡・13号住居跡・14号住居跡・2号溝跡  
全景
- ☒ 版 29 3区7号住居跡・8号住居跡・13号住居跡・14号住居跡断面及び遺物出土狀態全景  
3区7号住居跡・8号住居跡・13号住居跡・14号住居跡遺物出土狀態全景
- ☒ 版 30 3区7号住居跡・8号住居跡・13号住居跡・14号住居跡全景  
3区7号住居跡全景
- ☒ 版 31 3区7号住居跡竈  
3区8号住居跡東半部遺物出土狀態全景
- ☒ 版 32 3区9号住居跡西半部・12号住居跡遺物出土狀態全景  
3区9号住居跡東半部遺物出土狀態全景
- ☒ 版 33 3区9号住居跡竈  
3区10号住居跡遺物出土狀態全景
- ☒ 版 34 3区11号住居跡遺物出土狀態全景  
3区11号住居跡全景
- ☒ 版 35 3区12号住居跡貯藏穴遺物出土狀態  
3区15号住居跡全景
- ☒ 版 36 3区16号住居跡全景  
4区1号住居跡・2号住居跡・3号住居跡全景
- ☒ 版 37 4区1号住居跡全景  
4区2号住居跡西半部遺物出土狀態全景
- ☒ 版 38 4区2号住居跡東半部遺物出土狀態全景  
4区2号住居跡遺物出土狀態
- ☒ 版 39 4区2号住居跡西半部全景  
4区2号住居跡東半部全景
- ☒ 版 40 4区4号住居跡・11号住居跡遺物出土狀態全景  
4区4号住居跡・11号住居跡東半部掘形全景
- ☒ 版 41 4区5号住居跡西半部遺物出土狀態全景  
4区6号住居跡全景
- ☒ 版 42 4区6号住居跡貯藏穴遺物出土狀態  
4区8号住居跡・9号住居跡遺物出土狀態全景
- ☒ 版 43 4区8号住居跡・9号住居跡・1号溝跡東部分全景  
4区9号住居跡全景
- ☒ 版 44 4区10号住居跡・11号住居跡・12号住居跡全景  
4区10号住居跡全景
- ☒ 版 45 4区10号住居跡竈  
4区12号住居跡遺物出土狀態全景
- ☒ 版 46 4区12号住居跡全景  
4区13号住居跡西半部掘形全景
- ☒ 版 47 4区14号住居跡・1号溝跡西部分・3号溝跡・6号土坑・9号土坑・10号土坑全景  
4区14号住居跡遺物出土狀態
- ☒ 版 48 5区1号住居跡・2号住居跡遺物出土狀態全景  
5区1号住居跡・2号住居跡全景
- ☒ 版 49 5区3号住居跡遺物出土狀態全景  
5区3号住居跡竈遺物出土狀態
- ☒ 版 50 5区4号住居跡遺物出土狀態全景  
5区5号住居跡南東部遺物出土狀態
- ☒ 版 51 5区5号住居跡南東部  
5区7A号住居跡遺物出土狀態
- ☒ 版 52 5区7A号住居跡・7B号住居跡南半部遺物出土狀態全景  
5区7A号住居跡・7B号住居跡南半部全景
- ☒ 版 53 5区6号住居跡南西部遺物出土狀態



- ☒ 版 54 5区8号住居跡東半部・9号住居跡・2号土坑・3号土坑全景  
5区8号住居跡東半部・9号住居跡・2号土坑・3号土坑掘形全景
- ☒ 版 55 5区10号住居跡遺物出土狀態全景  
5区10号住居跡掘形全景
- ☒ 版 56 5区11号住居跡・14号住居跡・15号住居跡遺物出土狀態全景  
5区11号住居跡全景
- ☒ 版 57 5区15号住居跡北西部全景  
5区17号住居跡東半部全景
- ☒ 版 58 6区1号住居跡遺物出土狀態全景  
6区1号住居跡全景
- ☒ 版 59 6区1号住居跡貯藏穴遺物出土狀態  
6区2号住居跡竈遺物出土狀態
- ☒ 版 60 6区2号住居跡・8号住居跡東半部遺物出土狀態全景  
6区2号住居跡西半部全景
- ☒ 版 61 6区3号住居跡遺物出土狀態全景  
6区3号住居跡全景
- ☒ 版 62 6区3号住居跡遺物出土狀態  
6区4号住居跡東半部全景
- ☒ 版 63 6区6号住居跡全景  
6区6号住居跡掘形全景
- ☒ 版 64 6区6号住居跡竈付近遺物出土狀態  
6区7号住居跡遺物出土狀態全景
- ☒ 版 65 6区8号住居跡竈遺物出土狀態  
6区9号住居跡竈遺物出土狀態
- ☒ 版 66 6区11号住居跡遺物出土狀態全景  
6区11号住居跡全景
- ☒ 版 67 6区11号住居跡竈遺物出土狀態  
6区12号住居跡東半部遺物出土狀態全景
- ☒ 版 68 6区12号住居跡東半部全景  
6区13号住居跡遺物出土狀態全景
- ☒ 版 69 6区14号住居跡北東部全景  
6区15号住居跡西半部掘形全景
- ☒ 版 70 7区1号住居跡・7A号住居跡・7B号住居跡全景  
7区1号住居跡遺物出土狀態全景
- ☒ 版 71 7区1号住居跡遺物出土狀態  
7区2号住居跡東半部遺物出土狀態全景
- ☒ 版 72 7区2号住居跡西半部全景  
7区2号住居跡竈
- ☒ 版 73 7区3号住居跡全景  
7区3号住居跡遺物出土狀態
- ☒ 版 74 7区3号住居跡貯藏穴  
7区4A号住居跡・4B号住居跡東半部遺物出土狀態全景
- ☒ 版 75 7区5A号住居跡・5B号住居跡東半部全景  
7区5A号住居跡竈遺物出土狀態
- ☒ 版 76 7区5B号住居跡全景  
7区5B号住居跡内溝
- ☒ 版 77 7区5B号住居跡内溝断面  
7区5B号住居跡貯藏穴遺物出土狀態
- ☒ 版 78 7区6号住居跡西半部遺物出土狀態全景  
7区6号住居跡東半部全景
- ☒ 版 79 7区7B号住居跡竈  
7区9号住居跡遺物出土狀態全景
- ☒ 版 80 7区9号住居跡掘形全景  
7区10号住居跡・11号住居跡東半部遺物出土狀態全景
- ☒ 版 81 7区10号住居跡・11号住居跡東半部掘形全景  
7区10号住居跡遺物出土狀態

- ☒ 版 82 7区12号住居跡全景
- ☒ 版 83 7区13号住居跡全景  
7区13号住居跡掘形全景
- ☒ 版 84 7区15号住居跡・16号住居跡全景  
7区15号住居跡・16号住居跡掘形全景
- ☒ 版 85 7区17号住居跡遺物出土状態全景  
7区17号住居跡竈
- ☒ 版 86 7区17号住居跡掘形全景  
7区18号住居跡西半部遺物出土状態全景
- ☒ 版 87 8区1号住居跡東半部遺物出土状態全景  
8区1号住居跡東半部全景
- ☒ 版 88 8区2号住居跡・3号住居跡全景  
8区2号住居跡遺物出土状態全景
- ☒ 版 89 8区4号住居跡遺物出土状態全景  
8区4号住居跡全景
- ☒ 版 90 8区4号住居跡竈遺物出土状態  
8区5号住居跡竈
- ☒ 版 91 8区6号住居跡西半部遺物出土状態全景  
8区6号住居跡竈遺物出土状態
- ☒ 版 92 8区7号住居跡遺物出土状態全景  
8区11号住居跡西半部遺物出土状態全景
- ☒ 版 93 8区11号住居跡竈遺物出土状態  
8区12号住居跡全景
- ☒ 版 94 8区12号住居跡竈遺物出土状態  
8区13号住居跡西半部全景
- ☒ 版 95 8区15号住居跡遺物出土状態全景  
8区15号住居跡全景
- ☒ 版 96 8区15号住居跡遺物出土状態  
8区17号住居跡掘形全景
- ☒ 版 97 9区1号住居跡西半部遺物出土状態全景  
9区1号住居跡南東隅貯藏穴遺物出土状態
- ☒ 版 98 9区1号住居跡北壁臨貯藏穴遺物出土状態  
9区2号住居跡北西部全景
- ☒ 版 99 9区3号住居跡全景  
9区4号住居跡全景
- ☒ 版100 10区1号柱列・5号土坑・3号溝跡全景  
9区1号古墳墳丘全景
- ☒ 版101 9区1号古墳北東部全景（北東より）  
9区1号古墳北東部葺石（南東より）
- ☒ 版102 9区1号古墳北東部周濠（北東より）  
9区1号古墳北東部周濠（北より）
- ☒ 版103 9区1号古墳北東部周濠（北より）  
9区1号古墳北東部周濠（南東より）
- ☒ 版104 9区1号古墳埴輪出土状態  
10区1号石槨全景
- ☒ 版105 10区1号石槨掘形全景  
1区1号井戸跡遺物出土状態全景
- ☒ 版106 7区1号井戸跡全景  
6区1号墓壙（井戸墓）人骨出土状態全景
- ☒ 版107 3区4号土坑遺物出土状態全景  
9区10号土坑全景
- ☒ 版108 9区11号土坑全景  
9区11号土坑遺物出土状態
- ☒ 版109 3区1号馬齒埋納甕

- 3区1号馬齒埋納甕
- ☒ 版110 1区1号井戸跡・1号土坑・2号土坑・3号土坑・4号土坑・5号土坑・3号溝跡全景  
2区5号土坑全景
- ☒ 版111 3区1号土坑全景  
4区1号土坑遺物出土状態全景
- ☒ 版112 4区2号土坑全景  
4区6号土坑全景
- ☒ 版113 4区9号土坑全景  
4区10号土坑全景
- ☒ 版114 5区2号土坑全景  
5区5号土坑全景
- ☒ 版115 5区7号土坑全景  
6区10号土坑全景
- ☒ 版116 7区2号土坑・3号土坑・5号土坑・6号土坑・7号土坑全景  
8区17号土坑遺物出土状態全景
- ☒ 版117 8区11号土坑遺物出土状態全景  
8区21号土坑遺物出土状態全景
- ☒ 版118 9区1号土坑石出土状態全景  
9区1号土坑全景
- ☒ 版119 9区2号土坑・15号土坑・16号土坑石出土状態全景  
9区2号土坑・15号土坑・16号土坑全景
- ☒ 版120 9区3号土坑石出土状態全景  
9区4号土坑全景
- ☒ 版121 9区5号土坑全景  
9区6号土坑全景
- ☒ 版122 10区1号土坑全景  
10区4号土坑全景
- ☒ 版123 2区1号溝跡全景  
2区2号溝跡全景
- ☒ 版124 3区1号溝跡東部分・3号溝跡全景  
3区1号溝跡全景
- ☒ 版125 3区1号溝跡全景  
3区2号溝跡全景
- ☒ 版126 4区2号溝跡全景  
4区3号溝跡全景
- ☒ 版127 6区1号溝跡南西部全景  
6区1号溝跡東部遺物出土状態全景
- ☒ 版128 6区3号溝跡・4号溝跡全景  
9区1号溝跡遺物出土状態全景
- ☒ 版129 9区2号溝跡・1号土坑・2号土坑・3号土坑・5号土坑・6号土坑・15号土坑・16号土坑  
遺物出土状態全景  
9区2号溝跡・1号土坑・2号土坑・5号土坑・6号土坑・15号土坑・16号土坑全景
- ☒ 版130 10区2号溝跡全景
- ☒ 版131 1区1A号住居跡・2区1号住居跡・2号住居跡出土遺物
- ☒ 版132 2区4A号住居跡・4B号住居跡・5A号住居跡・5B号住居跡・3区1号住居跡出土遺物
- ☒ 版133 3区1号住居跡出土遺物
- ☒ 版134 3区2号住居跡出土遺物
- ☒ 版135 3区3号住居跡・5号住居跡出土遺物
- ☒ 版136 3区5号住居跡・6号住居跡出土遺物
- ☒ 版137 3区6号住居跡・7号住居跡出土遺物
- ☒ 版138 3区8号住居跡・9号住居跡・10号住居跡出土遺物
- ☒ 版139 3区10号住居跡・11号住居跡・12号住居跡出土遺物
- ☒ 版140 3区12号住居跡・13号住居跡出土遺物
- ☒ 版141 3区13号住居跡・14号住居跡出土遺物
- ☒ 版142 3区15号住居跡出土遺物
- ☒ 版143 3区16号住居跡・4区1号住居跡・2号住居跡出土遺物

- ☒ 版144 4区2号住居跡出土遺物
- ☒ 版145 4区2号住居跡出土遺物
- ☒ 版146 4区3号住居跡・4号住居跡出土遺物
- ☒ 版147 4区4号住居跡出土遺物
- ☒ 版148 4区4号住居跡・6号住居跡出土遺物
- ☒ 版149 4区7号住居跡・8号住居跡・9号住居跡・10号住居跡出土遺物
- ☒ 版150 4区10号住居跡・11号住居跡出土遺物
- ☒ 版151 4区11号住居跡・12号住居跡出土遺物
- ☒ 版152 4区12号住居跡・14号住居跡・5区1号住居跡出土遺物
- ☒ 版153 5区1号住居跡・2号住居跡・3号住居跡出土遺物
- ☒ 版154 5区3号住居跡・4号住居跡出土遺物
- ☒ 版155 5区4号住居跡・5号住居跡出土遺物
- ☒ 版156 5区5号住居跡出土遺物
- ☒ 版157 5区5号住居跡・6号住居跡出土遺物
- ☒ 版158 5区6号住居跡・7A号住居跡出土遺物
- ☒ 版159 5区7A号住居跡・7B号住居跡・8号住居跡・9号住居跡・10号住居跡出土遺物
- ☒ 版160 5区10号住居跡・11号住居跡出土遺物
- ☒ 版161 5区11号住居跡出土遺物
- ☒ 版162 5区11号住居跡・14号住居跡・15号住居跡・17号住居跡出土遺物
- ☒ 版163 6区1号住居跡出土遺物
- ☒ 版164 6区1号住居跡・2号住居跡出土遺物
- ☒ 版165 6区2号住居跡・3号住居跡出土遺物
- ☒ 版166 6区3号住居跡・4号住居跡・5号住居跡・6号住居跡出土遺物
- ☒ 版167 6区6号住居跡・7号住居跡・8号住居跡出土遺物
- ☒ 版168 6区8号住居跡・9号住居跡・11号住居跡出土遺物
- ☒ 版169 6区12号住居跡・13号住居跡出土遺物
- ☒ 版170 6区14号住居跡・16号住居跡・17号住居跡・7区1号住居跡出土遺物
- ☒ 版171 7区1号住居跡出土遺物
- ☒ 版172 7区1号住居跡・2号住居跡・3号住居跡出土遺物
- ☒ 版173 7区3号住居跡・4A号住居跡出土遺物
- ☒ 版174 7区5A号住居跡・5B号住居跡出土遺物
- ☒ 版175 7区5B号住居跡出土遺物
- ☒ 版176 7区5B号住居跡・6号住居跡・7B号住居跡出土遺物
- ☒ 版177 7区9号住居跡出土遺物
- ☒ 版178 7区9号住居跡・10号住居跡・11号住居跡・12号住居跡・13号住居跡出土遺物
- ☒ 版179 7区13号住居跡・14号住居跡・15号住居跡出土遺物
- ☒ 版180 7区16号住居跡・17号住居跡・18号住居跡・8区1号住居跡出土遺物
- ☒ 版181 8区1号住居跡・2号住居跡・3号住居跡出土遺物
- ☒ 版182 8区3号住居跡・4号住居跡・5号住居跡・6号住居跡出土遺物
- ☒ 版183 8区6号住居跡・7号住居跡・11号住居跡・12号住居跡出土遺物
- ☒ 版184 8区13号住居跡・14号住居跡・15号住居跡出土遺物
- ☒ 版185 8区15号住居跡・16号住居跡出土遺物
- ☒ 版186 8区16号住居跡・17号住居跡・9区1号住居跡出土遺物
- ☒ 版187 9区1号住居跡・2号住居跡・4号住居跡・1区3号溝跡出土遺物
- ☒ 版188 1区1号井戸跡・2号土坑・2区1号溝跡・3区1号溝跡出土遺物
- ☒ 版189 3区1号溝跡・3号溝跡・4号土坑・6号土坑・7号土坑出土遺物
- ☒ 版190 3区1号土坑・4号土坑・4区1号溝跡・1号土坑・7号土坑・8号土坑出土遺物
- ☒ 版191 5区1号土坑・6区3号溝跡・10号土坑・7区3号土坑・8区5号土坑・11号土坑出土遺物
- ☒ 版192 9区1号古墳出土遺物
- ☒ 版193 9区1号土坑・2号土坑・5号土坑・6号土坑・10号土坑・11号土坑出土遺物
- ☒ 版194 9区11号土坑・表土出土遺物
- ☒ 版195 表土出土遺物
- ☒ 版196 表土出土遺物
- ☒ 版197 縄文・弥生時代遺物

# 第I章 調査に至る経過

## 1. 上越新幹線の建設計画とその対応

我が国で最初の新幹線である東海道新幹線が開通したのは、東京オリンピックの大会開会を目前にした昭和39年10月1日のことであった。その後、昭和45年5月18日、全国新幹線鉄道整備法が公布され、その第一陣として「国土の総合的な均衡ある開発と、国民経済の発展を目指す総合交通体系のひとつとして施行される事業」を目途の上越新幹線が計画された。それによると、東京と新潟を1時間半で結ぶことにより1日行動圏を拡大すると共に、長距離旅客輸送の拡大をはかろうとするものである。

昭和46年1月に基本計画、同年4月には整備計画が決定され、6月には東京と新潟に新幹線建設局が設置されると共に、具体的な建設計画が動き出した。同年10月14日には日本鉄道建設公団から20万分の1地図による路線発表があり、群馬県下では高崎と月夜町野内（上毛高原駅と仮称）の2カ所に駅を設けること、また榛名・中山・大清水トンネル等、特に県北部ではトンネルの多い路線であること等が明らかになった。

高崎市内のルート発表は昭和46年10月から12月まで市内の14カ所の会場で実施された。

こうした動向に対し、昭和47年3月21日、高崎市長を会長とする上越新幹線高崎市対策委員会が発足、同年5月2日には市内の各組織の大部分を結集して高崎地区上越新幹線対策連合会が結成された。この協議会は同年8月1日、路線を地下にせよという主旨の要望書を提出した。鉄建公団は8月15日に地下案は不可能との回答をし、翌48年4月からは地元市民への説明会を始めた。しかし佐野地区の対策委員会は地下案に固執して48年10月に連合協議会から脱退した。49年4月には側道や公害対策についての要望書が出され、50年7月25日に至りようやく高崎市長立会いのもとに側道（両側に各6m巾）や、騒音、振動は環境庁基準を守ることとして合意に達し、大半の地区では50年8月から測量と地質調査が実施されることになった。連合協議会から脱退していた佐野地区では下佐野2区を除き50年3月に至り連合協議会と同じ主旨で合意し、地区説明会を経て50年9月に中心測量を完了した。

## 2. 埋蔵文化財保護対策

昭和30年代後半以後、わが国は高度成長時代に入り、大型の開発計画が次々に企画、実施されるようになった。こうした動きに伴い、全国的に史跡、名勝、天然記念物をはじめ埋蔵文化財包蔵地等はしばしば危機的局面に遭遇し、憂慮すべき事態が頻発した。そこで当時の文化財保護委員会（現文化庁）は建設省や日本国有鉄道、日本道路公団、日本鉄道建設公団等いわゆる国レベルの建設部門省庁との調整に乗り出した。昭和39年5月18日付け、文委記第45号文書により、文化財保護委員会事務局長宮地茂から日本鉄道建設公団副総裁あての「鉄道建設等に伴う史跡、名勝、天然記念物及び埋蔵文化財包蔵地の保護について」の文書により、事業区域内に標記物件が所在

する場合は次の措置をとられたいとし、①原則として除外するものとするか、計画に重大な支障を生ずるものについては事前協議をすること、②事前協議の結果、現状変更または発掘調査もやむを得ないものについては文化財保護法による所定の手続きをとること、③事前の発掘調査による記録保存については公団が各都道府県教育委員会に委託して、経費負担（原因者負担）とすること等を依頼している。その後、昭和41年4月1日付けで、文化財保護委員会と日本鉄道建設公団との間で埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書を締結し、以後、すべての事業区域内における埋蔵文化財の取り扱いはこの覚書により対応されることになった。

上越新幹線建設に伴う群馬県下の埋蔵文化財については、まず昭和46年10月に、20万分の1路線図による新幹線通過市町村（3市3町3村）ならびに建設の概要について説明があり、この時は付近に国史跡の浅間山古墳・大鶴巻古墳（何れも高崎市）や県天然記念物の金島の浅間石（渋川市）等が所在することが判明した。その後、2500分の1路線図による埋蔵文化財包蔵地の分布状況を調査したところ93件の所在が判明し、図面上に照合したところ22カ所の該当があり、分布面積は約20万㎡、発掘を要する面積は約10万㎡とみられた。この段階での上佐野町舟橋遺跡の分布面積は11,500㎡、要発掘調査面積は2,300㎡となった。

群馬県教育委員会は上越新幹線のほかにも関越自動車道や上武道路など、いわゆる三幹線の建設に伴う文化財保護対策が行政的にも大きな比重を占めることは必須な情勢となってきたため、従来、社会教育課の文化財係だったのを昭和47年4月に文化財保護室（室長以下10名）として発足させていた。昭和48年1月から3月にかけて鉄道建設公団と県教委文化財保護室との間で、発掘調査計画や調査経費等について綿密な検討を行い、同年4月1日付けで群馬県教育委員会教育長と日本鉄道建設公団東京新幹線建設局長との間で「上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」及び昭和48年度の「上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結した。尚、昭和48年4月1日、文化財保護課（30名）として陣容を整えここに埋蔵文化財保護対策は本格的になった。

第1年次の昭和48年度は利根郡月夜野町上津の十二原遺跡（48. 5. 7～10. 6）が最初で、同町の大原遺跡（48. 8. 1～10. 6）が併行調査され、この年秋以降は高崎市下小鳥町の下小鳥遺跡（48. 10. 22～49. 3. 30）でも調査が着手された。これらは、まだ何れも用地の正式買収以前の段階であったこと、大規模な発掘調査が初めてということもあって調査体制・調査方法を含めて試行錯誤的なことが多かったものの、それぞれの場所で、多くの成果が得られたのである。

第2年次の昭和49年度は高崎市大八木町の融通寺遺跡（49. 4. 15～50. 2. 15）の一次調査と、熊野堂遺跡（49. 9. 9～50. 3. 28）の一次調査、利根郡月夜野町の大原遺跡（49. 9. 10～10. 16）の二次調査（この年で終了）が行われた。

### 3. 舟橋遺跡の調査に至るまで

昭和49年度に入ってから上佐野や下佐野地区の現地入りについて鉄建側から非公式の話題は出ていた。というのも烏川には長大橋の架橋工事計画があり、また上佐野地区には上信電鉄をまた

ぐ架橋計画等があり、何れも時間を要する建設工事であることから早急に着手したい意向であること、については工事着工以前の期間に埋蔵文化財対策を終了していなければならないことでもあったが、前述のとおり地元の対策委員会の公団への要望事項等があり、打開策を見出せないまま経過していた。

昭和49年8月19日の午後、上佐野町公民館において文化財調査についての地元説明会が開催された。参加者は25人ほどで、鉄建公団側の挨拶のあと、文化財側として県教委文化財保護課と高崎市教委から佐野地区における文化財、文化財調査の方法と成果のみとおしなどについて説明した後、鉄建側から杭打ちと測量について、用地の借地契約についてなどの説明、そして若干の質疑応答があり2時間ほどで終了した。鉄建側による用地問題は別として、文化財調査については協力しようという地元関係者の意向が反映されての説明会であったが、地権者の個々にはまだ種々の意見があるように見え、多少の曲折があるかもしれないという情勢であった。

9月13日に至り、上佐野町舟橋遺跡への現地調査入りについては全面的に了解に達したとの連絡が鉄建側からあり、11月から入って欲しいとの要望があった。限られた調査体制で調査班を組んでいるため、調査入りを要望されても直ちに対応できるわけではない。前述のとおりこの年度は高崎市大八木町で既に2班の調査が進行しており、月夜野町大原遺跡の二次調査に1班が9月10日に入っただけであった。この大原遺跡は前年度、残されたものの作業であったが、この調査を少なくとも10月中に終了しておかなければならなくなった。幸い、大原遺跡の調査は急ピッチで進行し、10月16日には終了することができ、新たに体制を組み11月21日から翌50年3月31日までの昭和49年度一杯の期間、高崎市上佐野町の舟橋遺跡の第一年次の調査に入るという方針を10月末日にたてた。本来なら一つの遺跡が終了次第出土品を整理し、直ちに報告書を作成すべきであるが、現地での作業が優先され、次々に追われることになり、心ならずも整理が後まわしということになっていた。11月7日、鉄建公団高崎工事事務所と共に舟橋遺跡の事前調査に入り、江原区長や関口対策委員長らに案内をしていただき、調査事務所の用地などの借用も決めると共に調査作業員の依頼なども済ませた。翌8日も事務所借用地の借用交渉に現地へ出向いた。こうして11月21日からようやく舟橋遺跡の調査に入ることができたのである。

この舟橋遺跡は、延長575mの区間を次のとおり5期に分けての調査が実施された。

第1次	昭和49年11月21日～50年3月31日	発掘面積	2,400㎡
第2次	昭和50年4月7日～50年6月25日	発掘面積	3,600㎡
第3次	昭和53年2月13日～53年3月31日	発掘面積	552㎡
第4次	昭和53年4月10日～53年5月31日	発掘面積	840㎡
第5次	昭和57年12月1日～58年3月30日	発掘面積	2,210㎡

当初の計画では発掘調査面積は2,300㎡であったが、側道部分が増加したことと、殆ど全面的な遺構の拉がりがみられ、9,602㎡と4倍以上の伸びとなってしまう、時間的にも経費的にも予想以上の対応を要したのであるが、相応の成果をあげることもできたのである。

## 第II章 調査の方法

### 1. 予備調査

舟橋遺跡の調査区域は、南側水田から北側の前橋台地末端部約40mにわたる全長570m、幅12mであった。調査はまず東西軸に平行して東側に2×4m、西側に2×6mのトレンチを4m間隔で設け、調査計画を策定した。なお、水田部分は作付けの関係上テストピットによる調査を行った。その結果、前橋台地末端部分（11区）には遺構は認められず、1区～9区にかけて住居跡を中心とした遺構が確認されたため、この部分の全面調査を行うこととした。

### 2. 本調査

先の予備調査の結果、本調査の範囲は上越新幹線大宮起点センター杭74.8kmから75.1kmまでの全長300m、幅12m（その後、側道工事が具体化したため、幅は24mとなる。）の全面調査を行った。調査区域は、烏川からしだいに遠ざかるように緩く北にカーブしている。このため、グリッドの基準は複数となっている。

調査方法の原則は以下の通りである。

- ①グリッド設定の基準は上越新幹線センター杭に準拠し、3×3mを基本単位とした。
- ②調査区がR3500mの曲線を有しているため、グリッドは60mを一単位として両端のセンター杭を基準に直線に修正している。1・2区、3・4区の方角角は記録が紛失しているため不明であるが、5・6区は333°12'46"、7・8区は334°12'46"、9・10区は335°10'40"である。
- ③グリッドの表示は基準線に平行する南北方向をアラビア数字、直交する東西方向をアルファベットで表記し、表記の基準は南東隅とする。但し、調査中に側道工事計画が具体化し、東西に各6m調査区を拡張したため、東の原点は「Y」となっている。
- ④調査区は南端の上越新幹線大宮起点センター杭74.8kmを基準に南北方向10グリッド（30m）毎に1調査区を設定し、南から1～10区とした。また、予備調査で遺構が確認されなかった前橋台地端部を11区とした。
- ⑤表土の掘削は、バックホーを使用し省力化を図った。
- ⑥遺構番号は調査区毎に付した。
- ⑦遺構実測図は平板を使用し、1/20縮尺を基本とした。また、実測図は遺構毎ではなく、グリッドに沿った「割り付け」により作成した。したがって、遺構が重複している場合でも両者が完掘した段階で実測図を作成しているため、平面図に重複の新旧は表現されない。
- ⑧遺構の写真撮影にあたって、白黒は35mmと6×9を、リバーサルは35mmのみを使用した。



### 第Ⅲ章 遺跡の概要

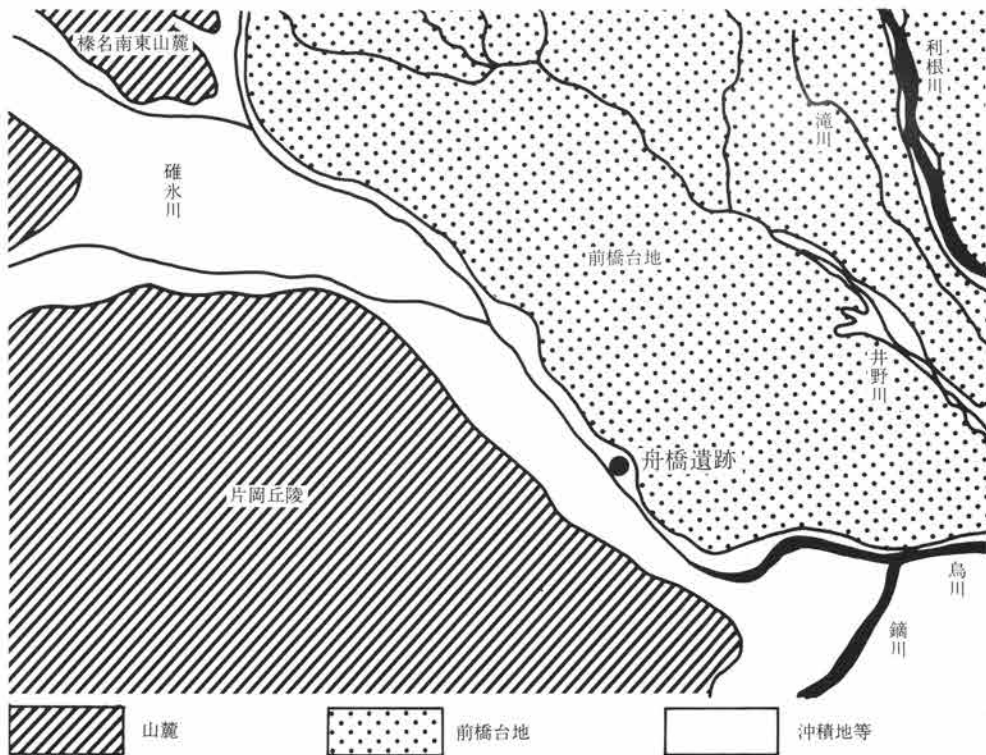
#### 第1節 遺跡の位置と地形

舟橋遺跡は、高崎市上佐野町舟橋に所在し、高崎市街地の南東2.5kmの烏川左岸に位置する。

遺跡の所在する高崎市は、前橋市と共に平坦な台地上にある。この台地は前橋台地と総称され、榛名山の南東麓から南東方向に扇状地状に広がり、北東側を広瀬川に、南西側を烏川によって画され、中央部を流れる利根川は、台地を東西に二分している。この東側には、榛名山や山麓の湧水を源とする中小の河川が北西から南東に流下し、台地南端付近では沖積低地を形成している。これらの低地には矢中遺跡群・柴崎遺跡群・宿大類遺跡群・下之城条里遺構など各地で、浅間B軽石下の水田跡が検出されている。

榛名山西方の角落山に源を発する烏川は、榛名山南西麓に沿って流下し、高崎市で碓氷川と合流する。その後、烏川は水量を増し、右岸では丘陵沿いに氾濫原とその後背湿地を、左岸では前橋台地を侵食し崖線を形成している。この崖線の中程には、幅の狭い旧河道が微高地状地形を巡るように認められ、この一帯は前橋台地に比して2~6m低くなっている。舟橋遺跡を乗せるこの微高地状地形は、ローム層直下にラミナ堆積の砂層やローリングを受けた軽石層が認められるなど前橋台地とは異なり、その成因は定かではない。

今回の調査区は、この微高地状地形の東縁を南東から北西に横切るとなっている。



第1図 遺跡周辺の地形区分図

## 第2節 周辺の遺跡

### 旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺跡は、舟橋遺跡周辺のみならず高崎市域においても雨壺遺跡や八幡中原遺跡などの住居跡覆土から石器が少量出土している程度である。このため、明確に人々の生活が伺えるのは縄文時代になってからである。高崎市域の縄文時代遺跡は、榛名山麓、碓氷川と烏川に挟まれた八幡、豊岡地区や観音山丘陵に多く分布している。これに対し、井野川以南の前橋台地では比較的遺跡数が少ないうえ、住居跡も下佐野遺跡Ⅱ地区が9軒、矢島・増殿遺跡が5軒、宿大類遺跡群が3軒、倉賀野万福寺遺跡2軒など規模も小さく、前者と後者には集落構造の違いも指摘されている。

### 弥生時代

初期弥生と呼ばれる前期から中期初頭に位置付けられる遺跡は、高崎市域では確認されていないが、中期後半になると標識遺跡である竜見町遺跡をはじめ、上並榎南遺跡、巾遺跡、競馬場遺跡、城南小学校遺跡などが烏川に沿って出現してくる。これらの遺跡はいずれも小規模な発掘や工事中の発見であるため、遺跡の規模は不明である。後期になると、この地域において遺跡は未確認であり、かわって井野川に沿って元島名遺跡、鈴ノ宮遺跡、宿大類遺跡群などが帯状に集中する。弥生時代中・後期には、烏川と井野川に沿って遺跡が多く存在するが、両河川間の台地中央部は殆ど未開発であったと思われる。

### 古墳時代

古墳時代前期には、前代に引き続き井野川流域に鈴ノ宮遺跡、上滝遺跡などが分布し、4世紀後半頃に築造された全長95mの前方後方墳である元島名将軍塚古墳がある。一方烏川流域では、弥生時代中期の遺跡よりやや下流の上佐野町から倉賀野町にかけて濃密に分布する。この地域の古式古墳は明確ではないが、直径50m程の円墳で、内部主体は粘土槨とされている下佐野町大山古墳がこれにあてられている。また、下佐野遺跡Ⅰ地区では内行花文鏡を出土した前方後方型の周溝墓が検出されている。中期には引き続き遺跡が多く全長123mの大鶴巻古墳、全長171.5mの浅間山古墳といった大前方後円墳が相次いで築造され、上佐野町には琴柱型石製品を出土したとされる茶臼山古墳も存在する。後期に至ってもこの地域は小規模前方後円墳である漆山古墳をはじめ小円墳が帯状に群をなしている。この時期は、烏川右岸の氾濫源にもようやく集落が進出し始め、標高の低い部分にも銅腕や金糸を出土した石原稻荷山古墳などが築造されている。井野川流域でも鈴ノ宮遺跡をはじめとして、集落や古墳が認められる。終末期の古墳は、烏川右岸に山の上碑との関連が考えられる山の上古墳が著名であり、同じ丘陵には上野三碑のひとつである金井沢碑も立てられている。左岸の倉賀野町には、総社蛇穴山古墳同様に天井、側壁、床を一枚石で構築した横口式石槨状の石室を有する安楽寺古墳が存在する。

### 奈良・平安時代

遺跡の所在する佐野の地（佐野窪町、上佐野町、下佐野町）は、万葉集東歌に4首ほど読まれている。中でも、若い男女の悲恋の物語である朝日の長者、夕日の長者伝説と関わりのある「上毛野佐野の舟橋取り放し親はさくれど吾はさかるがへ」は有名である。奈良時代の集落は不明確であり、高松町から倉賀野町にかけての地域では、下佐野遺跡で8世紀後半の住居跡が確認されている程度である。しかし、後期古墳の分布から下佐野町から倉賀野町にかけての地域に存在する可能性も考えられる。この時期には、烏川と鑄川に挟まれた阿久津町に7世紀末から8世紀初頭の田端廃寺が建造されている。田端廃寺と同範の山王・秋間系複弁七葉鍔瓦は、ていせえじ遺跡（瓦窯跡と推定されている）と水窪遺跡から出土しており、山王廃寺との関わりもあった地域であるとともに、瓦窯や寺が建立されている。

平安時代になると、前代からの集落はその規模を増し、古墳時代以来空閑地や畑地であった遺跡も再び集落化するなど人口の増加と居住域の拡大が認められる。この時期には、それまで遺跡分布が希薄であった烏川、井野川間の台地上にも集落が増加すると共に、矢中町、柴崎町、下之城町などに形成された低地には浅間B軽石下の水田が広がっており、この地域の本格的な開発が開始されたと考えられる。

## 中世

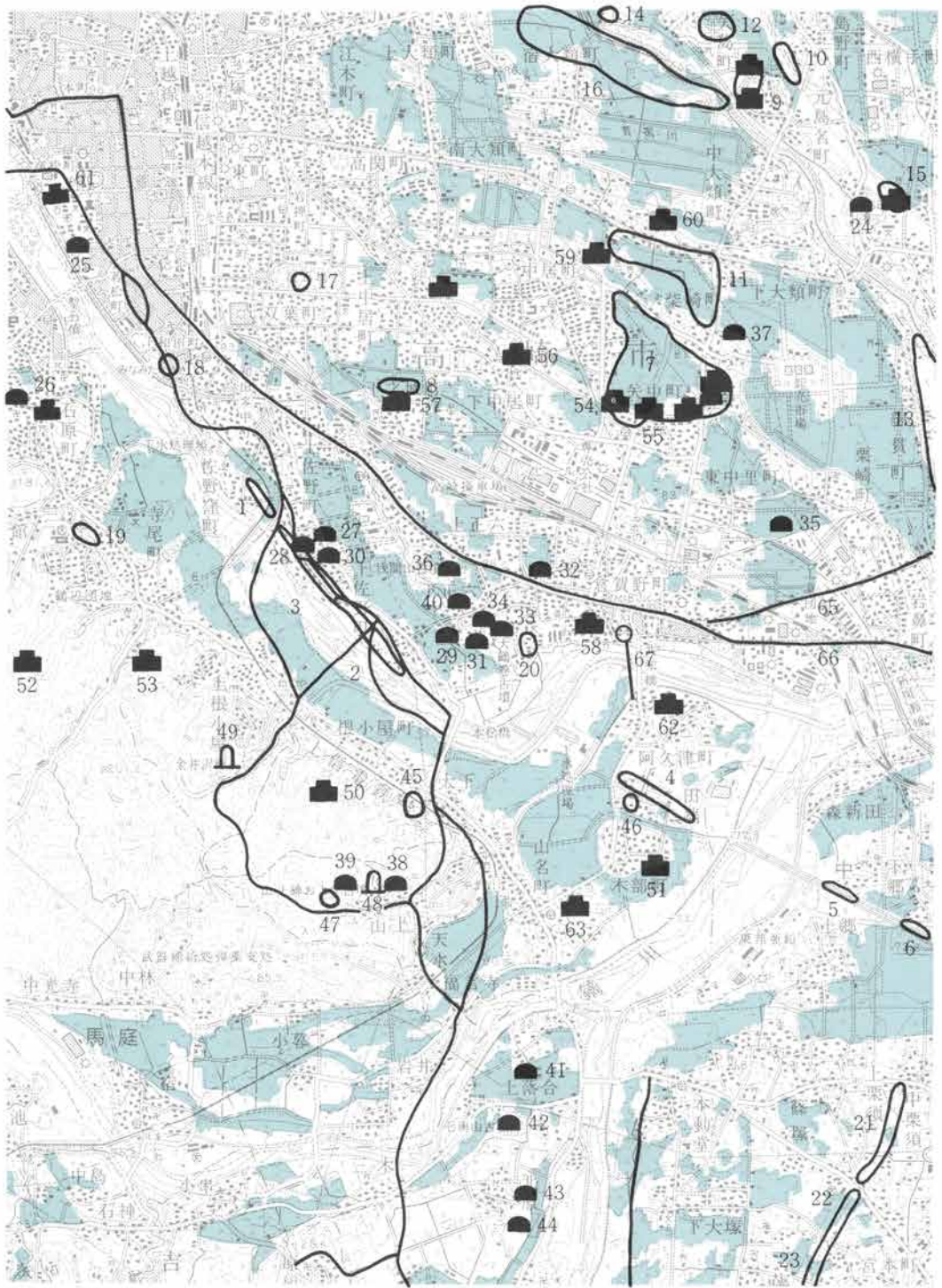
鎌倉時代の武士道精神を表した謡曲「鉢の木」の舞台となっていることに示されるように、政治の中心が京都から鎌倉に移行すると共に、烏川下流域は交通や流通の要衝となり、推定鎌倉街道は佐野付近で烏川を渡河している。また、周辺には倉賀野氏、高井氏、島名氏、大類氏、和田氏などの武士が居を構え、城を築造していった。

## 近世

近世には、中山道の和田、倉賀野宿、江戸船の終点である倉賀野河岸があり、交通と流通の中心地として発展している。

### 注

1. 『熊野堂遺跡第Ⅲ地区・雨壺遺跡』 勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
2. 『八幡中原遺跡』 高崎市教育委員会 1982
3. 『下佐野遺跡Ⅱ地区』 群馬県教育委員会・勸群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1986
4. 『上並榎南遺跡』 日本国有鉄道信濃川工事事務所・勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
5. 横倉興一「榛名山東南麓平坦地における中期後半の問題点」 『東日本における中期後半の弥生土器』 1986
6. 『高崎市史第1巻』 高崎市史編纂委員会 1969
7. 大江正行「田端廃寺の推定一瓦類一」 『田端遺跡』 群馬県教育委員会・勸群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1988



■ 古墳

○ 遺跡

⌒ 石俣

国土地理発行5万分の1地形図を使用

■ 城館

— 道

第2図 周辺の遺跡

水色部分は現水田



第2節 周辺の遺跡

番号	遺跡名	遺跡の概要	所在地	文献
1	舟橋遺跡	本報告。		
2	下佐野遺跡Ⅱ地区	烏川に面した前橋台地上に立地する。平安時代住居跡134軒、近世屋敷、中世井戸、縄文時代住居跡9軒、古墳時代住居跡25軒、方形周溝墓22基などが検出されている。	高崎市下佐野町字長者屋敷、寺前、鍛冶風	1
3	下佐野遺跡Ⅰ地区	烏川に面した前橋台地上に立地する。縄文時代後期・古墳時代・平安時代住居跡、方形周溝墓、長者屋敷天王山古墳、室町時代頃の居館址、が検出されている。	高崎市下佐野町	2
4	田端遺跡	鑄川と烏川の形成した沖積微高地に立地する。縄文時代住居跡2軒、古墳時代から平安時代住居跡250軒、奈良時代頃の水田跡、中・近世の土坑・溝等が検出されている。また、近接地には7C末～8C前半の田端廃寺が推定されている。	高崎市阿久津町、木部町	3
5	中Ⅱ遺跡	鮎川、鑄川、烏川の形成した沖積微高地に立地する。掘立柱建物2棟、奈良時代溝2条等が検出されている。	藤岡市中町中西	4
6	中Ⅰ遺跡	鮎川、鑄川、烏川の形成した沖積微高地に立地する。浅間B軽石以降の掘立柱建物15棟、平安時代住居跡7軒が検出されている。	藤岡市中町字社宮司、中沖	4
7	矢中遺跡群	高崎市矢中町を中心とした低地一帯に、浅間B軽石下の水田が検出されている。低地周辺では、古墳時代方形周溝墓5基、古墳3基、平安時代住居跡7軒、栗原内記・矢中新左衛門屋敷の外郭の一部、下村北館跡等が検出されている。また、矢中村東遺跡出土の「物部私印」は注目される。	高崎市矢中町・東中里町字柴崎境	5、6、7、8、9、10、11、12
8	下之城条里遺構	台地部では下之城址、低地部では浅間B軽石下の水田が検出されている。	高崎市下之城町	13
9	元島名遺跡	元島名城址、桜屋敷、弥生時代住居跡、方形周溝墓が検出されている。	高崎市元島名町	14
10	元島名B遺跡	元島名城外郭部、近世末聖眼寺の廃棄土坑が検出されている。	高崎市元島名町	15
11	柴崎遺跡群	柴崎町の低地一帯に、浅間B軽石下の水田が検出されている。また、浅間B軽石以降の掘立柱建物が1棟検出されている。	高崎市柴崎町字村間、字富士塚前、新堀、下大類町富士塚など	16、17、18
12	鈴ノ宮遺跡	弥生時代住居跡26軒、方形周溝墓7基、古墳時代前期住居跡55軒、方形周溝墓4基、古墳時代後期住居跡15軒、古墳4基、奈良・平安時代住居跡98軒等が検出されている。	高崎市矢島町字鈴ノ宮	19
13	綿貫遺跡	古墳時代前期から平安時代住居跡、10世紀前後の土壇を有する瓦葺建物が検出されている。	高崎市綿貫町	20
14	矢島町村西・増殿遺跡	縄文時代住居跡5軒、古墳時代住居跡10軒、奈良平安時代住居跡16軒、矢島村西城址、中世掘立柱建物11棟等が検出されている。	高崎市矢島町字村西、字増殿	21
15	上滝遺跡	古墳時代前期から奈良時代住居跡13軒、中世館址等が検出されている。館は鎌倉から室町時代と考えられている。	高崎市上滝町	22
16	宿大類遺跡群	縄文時代住居跡3軒、弥生時代住居跡12軒、古墳3基、奈良・平安時代住居跡約98軒、中世土壇墓20基、平安時代から中世の掘立柱建物34棟、浅間B軽石下水田、方50mと30mと推定される天田館址、村北館址が検出されている。なお、住居跡からは八稜鏡、炭化した木製椀が出土している。	高崎市上大類町天田、川押、山鳥、天神、天神久保、万相寺、村北、矢島前、村東など	23、24、25、26、27、28
17	高崎競馬場遺跡	競馬場工事中に弥生時代中期後半の土器が出土した。	高崎市岩押、双葉町	29

第三章 遺跡の概要

番号	遺跡名	遺跡の概要	所在地	文献
18	龍見町遺跡	弥生時代中期後半の土器が出土。龍見町式の標式遺跡である。	高崎市龍見町	29
19	鶴辺遺跡	古墳時代住居跡3・4軒が検出されている。	高崎市寺尾町鶴辺	30
20	倉賀野万福寺遺跡	縄文時代住居跡2軒、古墳時代前期住居跡13軒、同方形周溝墓12基、古墳11基等が検出されている。	高崎市倉賀野町万福寺	31
21	上栗須遺跡	古墳時代前期方形周溝墓、古墳、古墳時代から平安時代住居跡、掘立柱建物等が検出されている。	藤岡市上栗須	32
22	中大塚遺跡	奈良・平安時代住居跡、掘立柱建物、火葬墓が検出されている。	藤岡市中大塚	33, 34
23	下大塚遺跡	奈良・平安時代住居跡、時期不明土坑等が検出されている。	藤岡市下大塚	33, 34
24	元島名将軍塚古墳	4世紀後半頃に築造された全長95mの前方後円墳。明治44年に主体部が調査され、粘土層から獣形鏡1面、石剣などが出土した。	高崎市元島町將軍塚	35
25	頼政神社古墳	径20m程の円墳と思われる。発掘調査により盛土の一部が確認された。	高崎市元宮町143番地	36
26	石原稲荷山古墳	6C後半から末に築造された径30mの円墳。横穴式石室から銅椀金糸、馬具が出土している。	高崎市石原町143番地	36
27	蔵王塚古墳	直径44m、高さ5m、3段築成の円墳で、埴輪を伴う。内部主体は、載石切組積の横穴式石室である。石室からは須恵器片、金銅製金具片などが出土している。	高崎市下佐野町蔵王塚	37
28	漆山古墳	小型前方後円墳で、内部主体は玄室長3.95mの載石積横穴式石室である。	高崎市上佐野町新堀	38 43
29	下佐野古墳群	昭和10年の分布調査で41基が確認されている。このうち4基の発掘、6基の墳丘実測が行われている。	高崎市下佐野町	39
30	上佐野古墳群	漆山古墳、蔵王塚古墳を含む地域に小円墳がある。	高崎市上佐野町	38
31	大山古墳	径50m、高さ10mの円墳で、内部主体は粘土層である。	高崎市下佐野町字翁前	38
32	安楽寺古墳	玄室、天井、床共に凝灰岩の一枚石で構築されており、蛇穴山古墳の石室と同様である。	高崎市倉賀野町上町867	40
33	大鶴巻古墳	全長123mの前方後円墳。器材埴輪、円筒埴輪が認められ、5C前半の築造と考えられる。	高崎市倉賀野町下正六	40
34	小鶴巻古墳	全長は現状で87.5m、主体部は刳抜式の石棺である。6C前半の築造と考えられる。	高崎市倉賀野町下正六	40
35	飯玉山古墳	前方後円墳で、刀剣、勾玉、金環の出土があった。	高崎市栗崎町宮原	38
36	浅間山古墳	全長171.5mの前方後円墳。器材埴輪、円筒埴輪が認められ、5C前葉から中葉の築造と考えられる。	高崎市倉賀野町	40
37	柴崎蟹沢古墳	明治43年に□始元年三角縁神獣鏡、内行花文鏡2面、などが出土した。4C後半から末に築造されたと考えられる。	高崎市柴崎町蟹沢602	40
38	山の上古墳	丘陵の中腹に築造された円墳で、凝灰岩の載石切組積の横穴式石室を有している。山の石碑の碑文から黒壳刀自の墓とされる。	高崎市山名町神谷2104	40 43
39	山の上西古墳	丘陵の南斜面中腹に築造された円墳で、山の上古墳の西250mに位置する。内部主体は凝灰岩の載石を用いた横穴式石室。7C後半頃の築造と考えられる。	高崎市山名町大谷甲2086	40
40	正六古墳群	浅間山古墳から大鶴巻古墳にかけて円墳が7基以上あった。	高崎市下正六、薬師前	38
41	伊勢塚古墳	径20mの円墳で、内部主体は胴張を有する横穴式石室である。石室の側壁は模様積であり、築造は7C中葉頃と推定されている。	藤岡市上落合字岡	42

## 第2節 周辺の遺跡

番号	遺跡名	遺跡の概要	所在地	文献
42	七奥山古墳	全長140mの前方後円墳で、二重の周堀をもつ。6C後半頃の築造と考えられる。	藤岡市上落合字七奥	40
43	白石稲荷山古墳	全長140mの前方後円墳。昭和8年の発掘で後円部に礎床が確認され、石枕、鏡、石製模造品などが出土している。5C前半の築造。	藤岡市白石稲荷原1376	40
44	一 二 天 古 墳	前方後円墳。	藤岡市白石稲荷原1346	38
45	根小屋鹿島神社遺跡	塔を有する寺跡と考えられる。	高崎市根小屋町	41
46	田 端 廃 寺	田端遺跡近接地に、一町半区画の寺院跡が想定されている。7C末に建立され、8C前半に廃絶された。	高崎市阿久津町田端	3
47	でえせえじ遺跡	8C前半頃の瓦窯跡か小寺院と考えられている。	高崎市山名町字大谷	42
48	山 の 上 碑	「辛巳歳」の紀年銘を有しており、681年の建立と考えられている。放光寺の僧長利が母の黒壳刀自のために建立した。近接する山の上古墳の墓碑と考えられる。	高崎市山名町字山神谷	43
49	金 井 沢 碑	神亀3年(726)に、佐野三家子孫が祖先の供養のために立てた碑。	高崎市根小屋町字金井沢	43
50	根 小 屋 城 跡	武田信玄が永禄11又は13年(1570)に築いた見張り城。東西280m、南北250mの囲郭式。	高崎市山名町城山	44
51	木 部 城	囲郭式2重堀の平城。天文から永禄年間に木部氏が築城か。	高崎市木部町	45
52	寺 尾 中 城	標高188mの旧片岡郡の丘陵に築かれた寺尾地域の堡塁。南北朝の築城とされる。	高崎市寺尾町長坂	45
53	茶 白 山 城	応永年間(1420年頃)に寺尾城の堡塁として築城か。	高崎市寺尾町茶白山	45
54	矢 中 七 騎 の 館	大沢屋敷。矢中七騎のうち大沢備後の屋敷。天正年間に居城。栗原屋敷。矢中七騎のうち栗原内記の屋敷。天正年間に居城。松本屋敷。矢中七騎のうち松本九朗兵衛の屋敷。天正年間に居城。	高崎市矢中町	7、9、45
55	矢中新左衛門屋敷	矢中新左衛門の屋敷。永禄年間頃に居城か。	高崎市矢中町宝昌寺	9、45
56	高 尾 屋 敷	高尾佐渡守の屋敷。	高崎市下中居町	46
57	下 之 城	四方向連郭の並郭式。永禄11年(1568)和田業繁が正盛のために築城したと伝えられる。	高崎市下之城町	13
58	倉 賀 野 城	応永年間(1400)頃築かれた倉賀野氏の居城。	高崎市倉賀野町	45
59	高 井 屋 敷	高井左衛門の屋敷。	高崎市柴崎町西浦	44
60	隼 人 屋 敷	天文年間に原隼人が構えた屋敷。	高崎市柴崎町隼人	44
61	和 田 城 高 崎 城	和田城は、正長元年(1428)に和田英信が築いた並郭式の城と推定される。 高崎城は、鳥川左岸の崖上に慶長3年(1598)井伊直政によって築かれた。	高崎市高松町	44
62	木 部 北 城	木部城の支城と考えられるが、全貌は明らかではない。	高崎市阿久津町中組	45
63	山 名 館	山名地区にある唯一の環壕型で、中世館跡と考えられる。	高崎市山名町	46
64	鎌 倉 街 道	鎌倉時代から戦国時代にかけての鎌倉に通じる街道。		47
65	日 光 例 幣 使 街 道	正保4年(1647)日光例幣使のために整備された街道。例幣使は慶応3年(1867)まで続いた。		48
66	中 山 道	慶長5年(1600)年以降整備された街道。近世5街道のひとつ。		49
67	倉 賀 野 河 岸	慶長又は慶安年間に成立したとされる。倉賀野は江戸船の終点であり、中山道の宿駅でもあった。	高崎市倉賀野町	50

### 第三章 遺跡の概要

#### 文献

- 1 「下佐野遺跡II地区」群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1986
- 2 「下佐野遺跡I地区」群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1989
- 3 「田端遺跡」群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1988
- 4 「森遺跡・中I遺跡・中II遺跡」群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1983
- 5 「天王前遺跡-矢中遺跡群(II)-」高崎市教育委員会 1982
- 6 「村北A遺跡-矢中遺跡群(III)-」高崎市教育委員会 1983
- 7 「宝昌寺裏遺跡-矢中遺跡群(IV)-」高崎市教育委員会 1983
- 8 「柴崎前・村北B遺跡-矢中遺跡群(V)-」高崎市教育委員会 1984
- 9 「矢中村北C遺跡-矢中遺跡群(VI)-」高崎市教育委員会 1983
- 10 「矢中村東遺跡-矢中遺跡群(VII)-」高崎市教育委員会 1984
- 11 「矢中村東B遺跡-矢中遺跡群(VIII)-」高崎市教育委員会 1985
- 12 「下村北・砂内遺跡-矢中遺跡群(IX)-」高崎市教育委員会 1986
- 13 「下之城条里遺構の調査」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
- 14 「元島名遺跡」高崎市教育委員会 1979
- 15 「元島名B・吹屋遺跡」群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 16 「村間・富士塚前A遺跡」高崎市教育委員会 1984
- 17 「新堀・根際・吹手西A・富士塚B遺跡-柴崎遺跡群(III)-」高崎市教育委員会 1986
- 18 「東原・富士塚・富士塚前B遺跡-柴崎遺跡群(II)-」高崎市教育委員会 1985
- 19 「鈴ノ宮遺跡」高崎市教育委員会 1978
- 20 「綿貫遺跡」高崎市教育委員会 1985
- 21 「矢島町村西・増殿遺跡-宿大類遺跡群(VII)-」高崎市教育委員会 1986
- 22 「八幡原A・B・上滝・元島名A遺跡」群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
- 23 「天田・川押遺跡-宿大類遺跡群-」高崎市教育委員会 1983
- 24 「川押遺跡(II)-宿大類遺跡群-」高崎市教育委員会 1984
- 25 「山鳥・天神遺跡-宿大類遺跡群(III)-」高崎市教育委員会 1984
- 26 「天神久保遺跡-宿大類遺跡群(V)-」高崎市教育委員会 1985
- 27 「万相寺遺跡-宿大類遺跡群(VI)-」高崎市教育委員会 1985
- 28 「村北・矢島前・村東遺跡-宿大類遺跡群(IV)-」高崎市教育委員会 1985
- 29 杉原莊介・乙益重隆「高崎市附近の弥生式遺跡」『考古学第十巻第10号』東京考古学会 1939
- 30 田島桂男「鶴辺遺跡発掘調査概報」『群馬大学教育学部尾崎研究室調査報告第一輯-昭和37・8年度における発掘調査-』1966
- 31 「倉賀野万福寺遺跡」高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会 1983
- 32 「上栗須遺跡」『年報4』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 33 「中大塚・下大塚遺跡」『年報5』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 34 「中大塚・下大塚遺跡」『年報6』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- 35 「元島名将軍塚古墳」高崎市教育委員会 1981
- 36 「頼政神社古墳の調査」高崎市教育委員会 1974
- 37 「石原稲荷山古墳」高崎市教育委員会 1981
- 38 「群馬県遺跡台帳II-西毛編-」群馬県教育委員会 1972
- 39 尾崎喜左雄「群馬県高崎市佐野古墳群」『日本考古学年報12』日本考古学協会 1957
- 40 群馬県史編さん委員会「群馬県史資料編3-原始古代3古墳-」群馬県 1981
- 41 尾崎喜左雄「上野国古代寺院についての一考察」『史学会報第三輯』群馬師範男子部史学会 1949  
「上野国の信仰と文化」に再録 1970
- 42 須田 茂「でえせえじ遺跡」『群馬県史資料編2-原始古代2弥生・土師-』群馬県 1986
- 43 尾崎喜左雄「上野三碑の研究」尾崎先生著書刊行会 1980
- 44 山崎 一「群馬」『日本城郭体系4-茨城・栃木・群馬-』新人物往来社 1979
- 45 山崎 一「群馬古城址の研究-上巻-」群馬県文化振興会 1971
- 46 山崎 一「群馬古城址の研究-補遺篇上-」群馬県文化振興会 1979
- 47 群馬県教育委員会文化財保護課「群馬県歴史の道調査報告書第17集-鎌倉街道-」群馬県教育委員会 1983
- 48 群馬県教育委員会文化財保護課「群馬県歴史の道調査報告書第2集-日光御幣使街道-」群馬県教育委員会 1978
- 49 群馬県教育委員会文化財保護課「群馬県歴史の道調査報告書第11集-中山道-」群馬県教育委員会 1982
- 50 群馬県教育委員会文化財保護課「群馬県歴史の道調査報告書第13集-利根川の水運-」群馬県教育委員会 1982



### 第3節 遺跡の概要

調査の方法や位置と地形で述べたように、調査区は旧流路に囲まれた微高地状地形の東縁を横切っており、竪穴式住居を中心とした遺構が検出された。竪穴式住居の分布は1区3軒、2区8軒、3区16軒、4区14軒、5区17軒、6区16軒、7区21軒、8区14軒、9区4軒であり、低地に近い部分は少なく、微高地の中心に近い7区が最も多くなっている。このうち古墳時代前期の住居跡は、7区以南に散在している。古墳時代中・後になると北側（7・8区）にも住居跡が出現し、居住域が微高地全体に拡大しているようである。また、9区と10区には円墳と小石塚が築造されており、後期には北側は墓域となった時期がある。この後、7世紀中頃から8世紀末の100年以上にわたり、調査区内から生活の痕跡は何えず、空閑地もしくは畑地として利用されていたと推測される。10世紀になると舟橋遺跡は再び居住地として利用されはじめ、6・7・8区といった微高地中央寄りに住居跡が多く分布している。

中世では土坑・溝・井戸が確認されたのみで、掘立柱建物や竪穴状遺構は認められなかった。しかし、遺物に軟質陶器の鉢や内耳鍋といった調理用具が認められ、調査区内は生活の場もしくは居住域の至近距離にあったと考えられる。近世と認定できる遺構は、9区2・15・16号土坑のみであり、互いに近接している。また、遺物も土坑内の礫に混入していたものである。また、土坑などの断面に浅間A軽石の純層が遺存している部分には畑状遺構が確認でき、再び畑地として利用されていたと考えられる。



第3図 調査区位置図

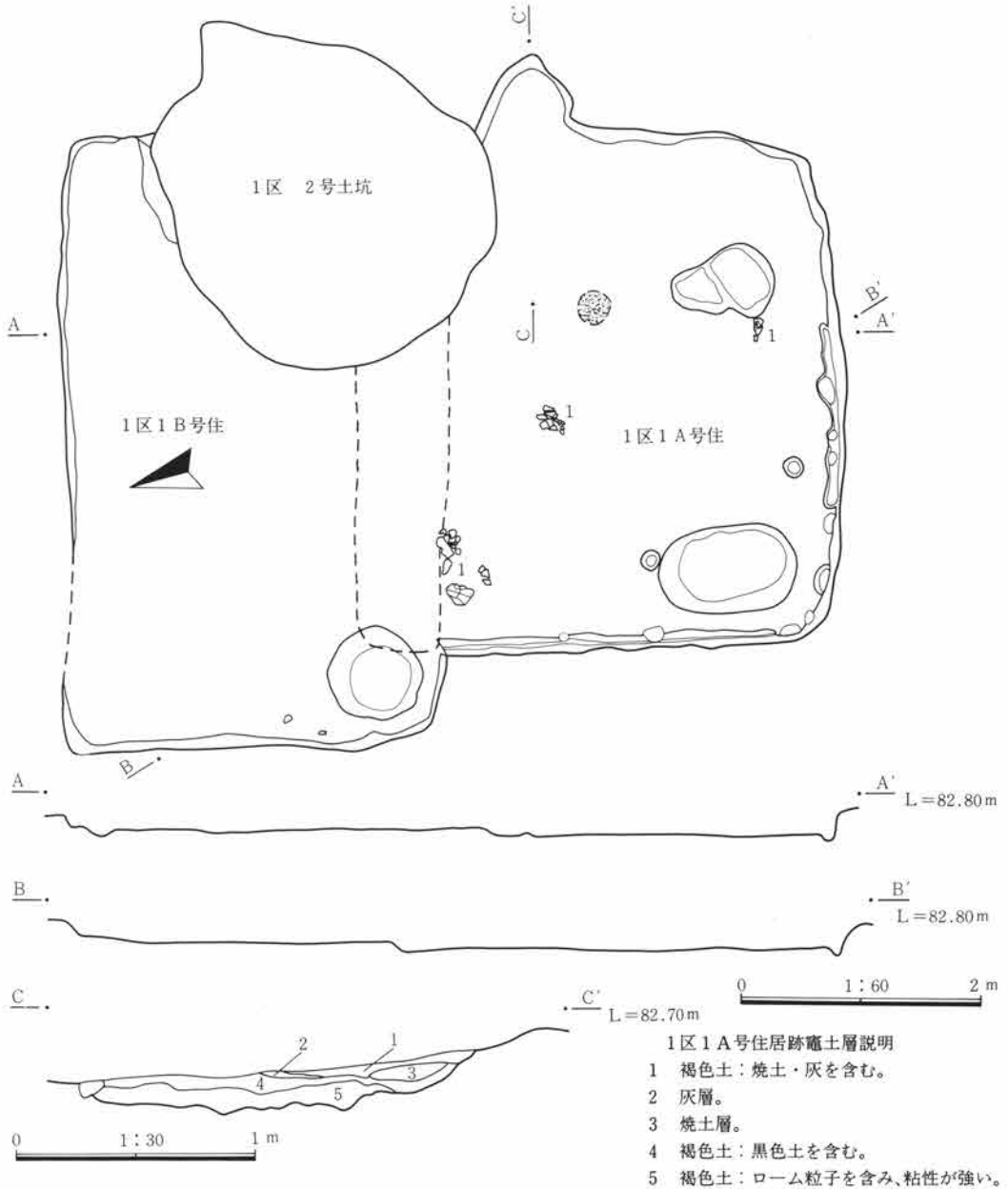
## 第IV章 発見された遺構と遺物



## 第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物

### 1区1A号住居跡

当住居跡は、1区1B号住居跡・1区2号土坑と重複する。新旧関係は、当住居跡の北西部分の床上に、1区1B号住居跡の張床が確認できたことから、当住居跡の方が古い。1区2号土坑と新旧関係は、同土坑が当住居跡の北東部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

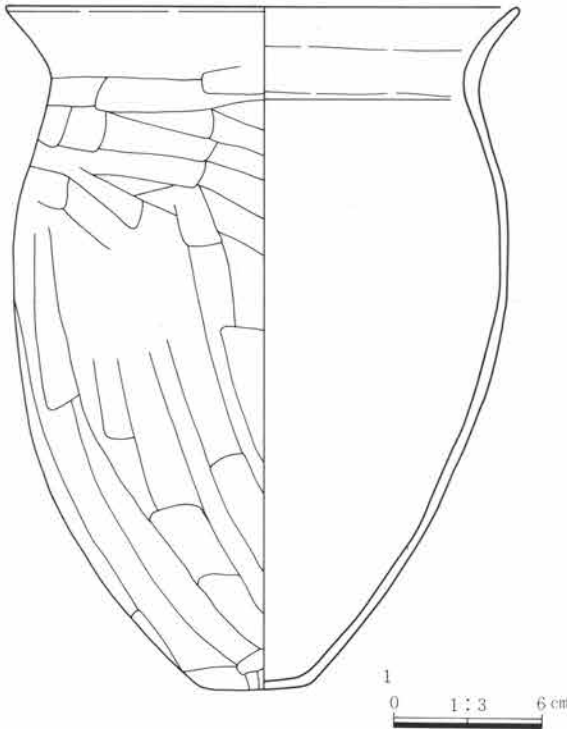


第4図 1区1A号住居跡・1B号住居跡

当住居跡の規模は、東西約4.3mであり、平面形は、隅丸長方形を呈すると推定される。主軸はN-110°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約20cmである。床面は、やや軟弱な部分もあるが、ほぼ平坦である。壁溝は、南壁中央付近から西壁にかけて確認できた。規模は、幅約10cmであり、床面からの深さは約5cmである。

竈は、東壁の中央やや北よりに作られている。袖は検出できなかったが、燃焼部に堆積した焼土・灰を確認することができた。住居内の南東部と、南西部隅から2基のピットを検出できた。南西部隅のピットの規模は、長軸約120cm・短軸約70cm・床面からの深さ約10~15cmであり、平面形は楕円形を呈する。貯蔵穴と考えることも可能である。柱穴は検出できなかった。

遺物の出土は非常に少ないが、住居内の中央部から土師器の甕が出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は8世紀後半~9世紀前半である。



第5図 1区1A号住居跡出土遺物

### 1区1B号住居跡

当住居跡は、1区1A号住居跡・1区2号土坑と重複する。1区1A号住居跡との新旧関係は、当住居跡の張床が1区1A号住居跡の北西部の床上から確認できたことから、当住居跡の方が新しい。1区2号土坑との新旧関係は、同土坑が当住居跡の南東部の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、東西約5.1m・南北約3.2mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-107°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約10cmである。床面は、やや軟弱な部分もあるが、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

竈・柱穴は不明であるが、住居内の南西部隅からはピットが検出できた。規模

は、長軸約80cm・短軸約70cm・床面からの深さ約50cmであり、平面形は楕円形を呈する。貯蔵穴と考えられる。住居内からの遺物の出土は無く、時期の判定は困難であるが、周囲の遺構との関係・住居跡の形態から推定される当住居跡の時期は9世紀である。

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(1区・1A・1B・2号住・2区1号住)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
001	甕 土師器	器高:273mm 口径:207mm 底径:45mm 口縁部～底部3/4残。	径1～2mmの砂粒を含む。軟質。酸化。明赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は口縁部。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部～底部は篋削り。	住居内中央部床直。外面に多量の油煙付着。

### 1区2号住居跡

当住居跡は、2区1号住居跡と重複する。新旧関係は、当住居跡が2区1号住居跡の南西部の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が新しい。

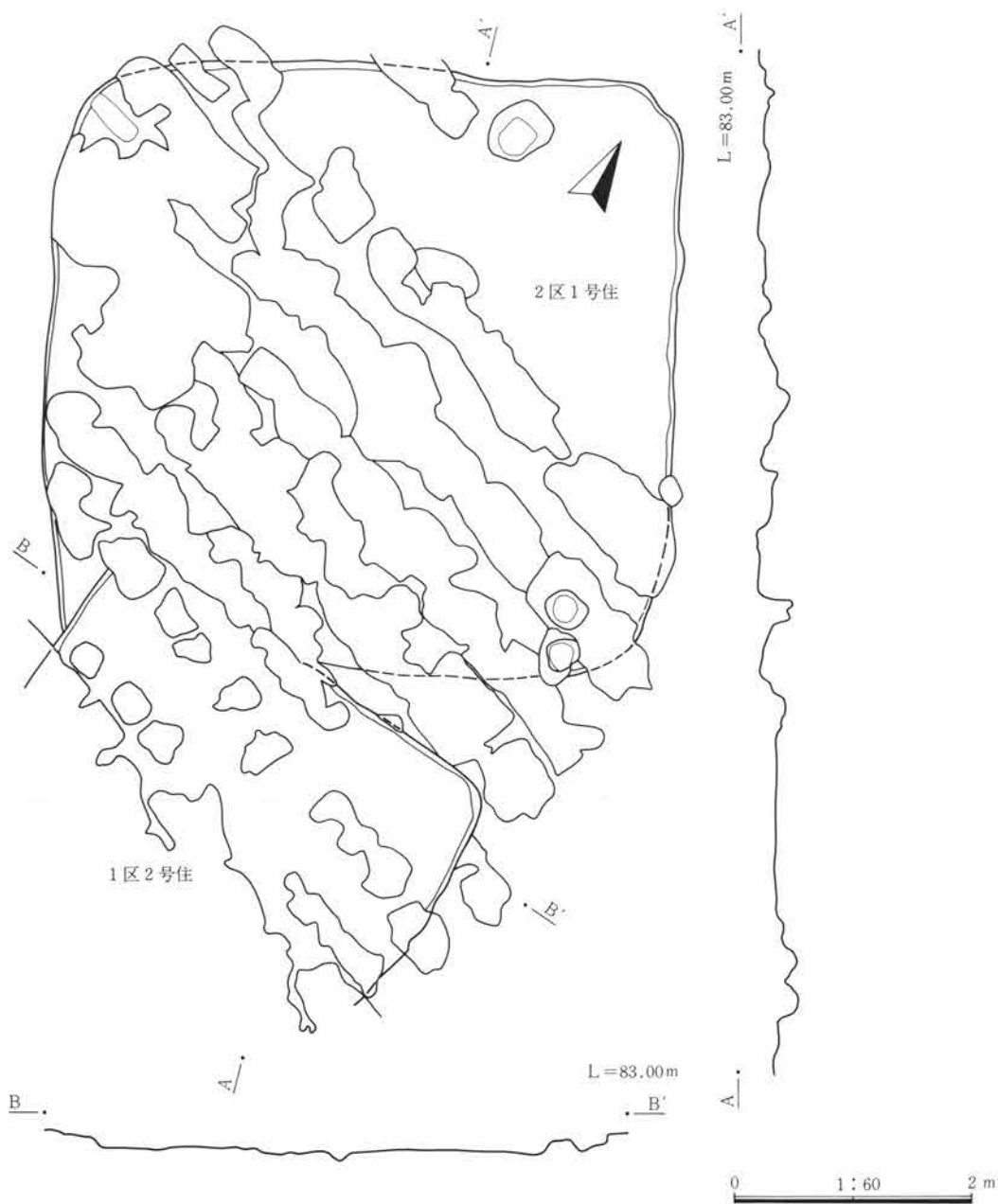
当住居跡の規模は、大部分が最近の耕作により破壊されているが東西約3.8mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈すると推定される。主軸は不明である。確認面までの壁の立ち上がりは、約5～10cmであり、残存状態は非常に悪い。床面は、やや軟弱な部分もあるが、ほぼ平坦である。竈・柱穴・貯蔵穴は、確認範囲からは検出できなかった。遺物の出土は無く、時期の判定は困難である。

### 2区1号住居跡

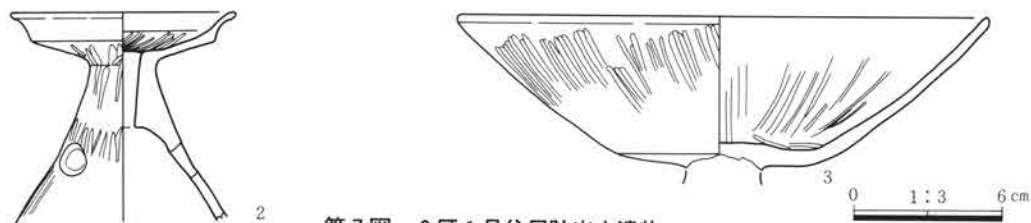
当住居跡は、1区2号住居跡と重複する。新旧関係は、当住居跡の南西部隅の河辺・床が1区2号住居跡により破壊されていることから、当住居跡の方が古い。当住居跡の規模は、東西約5.2m・南北約5.1mであり、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-65°-Eである。確認面から床面までの壁の立ち上がりは、約5～10cmであり、残存状態は非常に悪い。床面は、最近の耕作により南西部の2/3が破壊されている。壁溝は検出できなかった。

住居内中央部のやや北東よりから焼土を確認することができた。炉と考えられる。住居内の北東部から1基・南東隅から2基のピットが検出できた。南東部隅北寄りのピットからは土師器の高杯が出土している。同ピットは床面からの深さが約50cmあり、貯蔵穴と考えることが可能である。柱穴は検出できなかった。

遺物は、前期の高杯のほか、土師器の器台が出土している。住居跡の形態、出土遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀後半である。



第6図 1区2号住居跡・2区1号住居跡



第7図 2区1号住居跡出土遺物



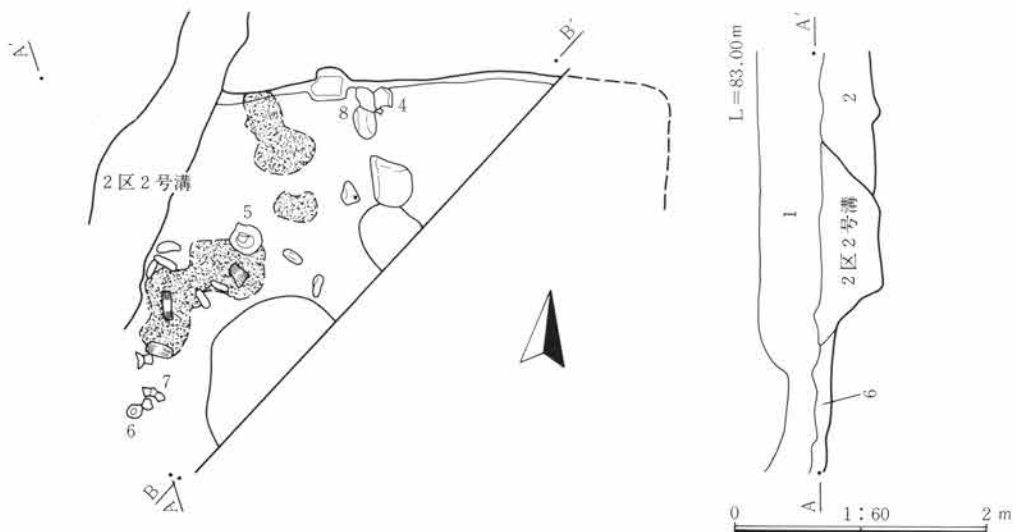
番号	器種 土器種	法量(容高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
002	器台 土師器	器高: [83mm] 口径: (91mm) 底径: 一 口 縁部~脚部上半3/4残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。鈍い赤褐色。	外面口縁部下端に稜を持つ。底部は穿孔。脚部に3カ所の円形穿孔有り。内面: 口縁部は横なで、体部は縦篋磨き、脚部はなで。外面: 口縁部は横なで、体部~脚部は縦篋磨き。	覆土。
003	高杯 土師器	器高: [61mm] 口径: 216mm 底径: 一 底部 ~口縁部残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い黄褐色。	体部~口縁部は直線的に広がる。内外面共に口縁部~底部は篋磨き。	住居内ピット。

## 2区2号住居跡

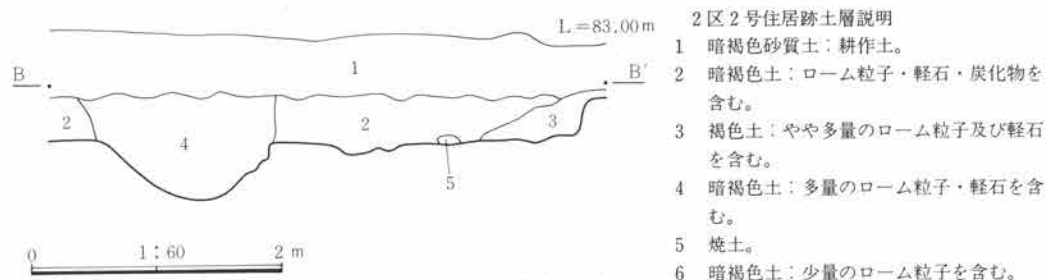
当住居跡は、2区2号溝と重複する。新旧関係は、当住居跡の北西部分が2区2号溝に破壊されていることから、当住居跡の方が古い。当住居跡は、北部分のみ確認であり、規模は不明である。確認範囲から壁溝は検出できなかった。

確認面までの壁の立ち上がりは、約30cmである。床面は、ほぼ平坦であるが、やや軟弱である。炉・柱穴・貯蔵穴は調査範囲からは検出できなかった。住居内の中央付近には、土坑が検出できたが、これは新しいものである。住居内の床上には、全面的に焼土の分布が確認でき、炭化材の分布も見られる。当住居跡は火災を受けたものと考えられる。

遺物は、「S」字状口縁を持つ土師器の台付甕の他、土師器の甕・埴・器台・手捏土器、薦石が出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀後半である。



第8図 2区2号住居跡

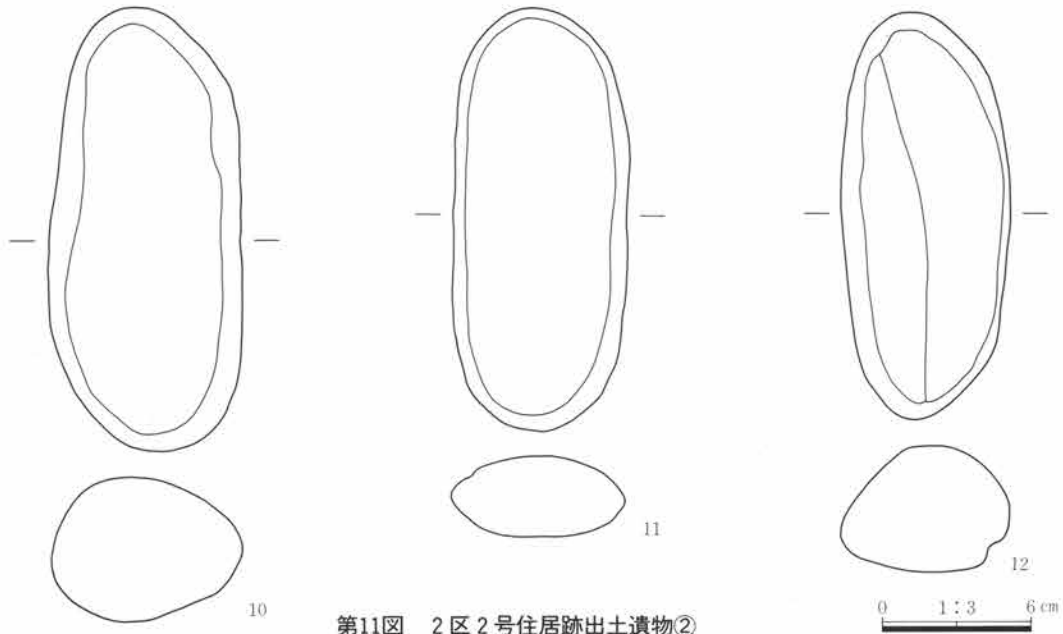


第9図 2区2号住居跡断面図



第10図 2区2号住居跡出土遺物①

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(2区・2号住)



第11図 2区2号住居跡出土遺物②

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
004	手づくね 土器	器高:40mm 口径:(70mm) 底径:38mm 口縁部~底部3/4残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。鈍い橙。	口縁部はほぼ直立。内面:口縁部~体部は横なで、底部はなでで指頭痕が残る。外面:口縁部は横なで、体部は指頭痕が残り、底部はなで。	北壁中央床直。
005	埴 土師器	器高:[75mm] 口径:(96mm) 底径:— 口縁部~体部上半1/2残。	径2~3mmの砂粒を含む。軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾し、広がる。内面:口縁部は横なで、体部はなで。外面:口縁部上半は横なで、口縁部下半は縦筥磨き、体部は筥削り。	北西柱穴内。外面に油煙付着。
006	器台 土師器	器高:94mm 口径:98mm 底径:144mm ほぼ完形。	径2~3mmの砂粒を含む。軟質。酸化。橙。	外面口縁部下端に稜を持ち、脚部は「ハ」字状に広がる。最大径は脚部下端。底部は穿孔、脚部に円形穿孔3カ所。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで、脚部は刷毛目、脚部下端は横なで。外面:口縁部は横なで、体部はなで、脚部は縦筥磨き。	住居内北西部床直。
007	台付甕 土師器	器高:210mm 口径:146mm 底径:85mm 最大径:218mm 口縁部~脚部3/4残。	細かい砂粒を含む。軟質。酸化。淡黄。	口縁部は「S」字状。最大径は体部上半。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部は縦刷毛目後横刷毛目、脚部は斜め刷毛目後なで。	住居内北西部床直。内外面に油煙付着。

第IV章 発見された遺構と遺物

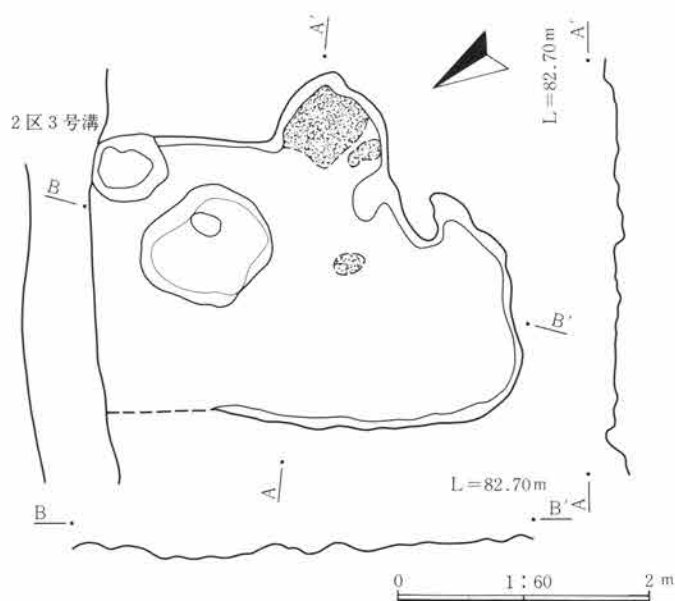
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
008	甕 土師器	器高:[165mm] 口径: 185mm 底径:— 最大 径:235mm 口縁部~体 部上半残。	径2~3mmの砂粒を含 む。軟質。酸化。褐。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部 は横なで、体部はなで、体部上端に指頭 痕が残る。外面:口縁部は横なで、体部 は篋削り後篋なで。	北壁中央床上10 cm。内外面に油煙 附着。
009	薦 石	長:183mm 幅:77mm 厚:42mm 重:1180 g	粗粒安山岩。		住居内中央部。
010	薦 石	長:178mm 幅:78mm 厚:58mm 重:1220 g	粗粒安山岩。		住居内中央部。
011	薦 石	長:169mm 幅:71mm 厚:37mm 重:718 g	粗粒安山岩。		住居内中央部。
012	薦 石	長:162mm 幅:67mm 厚:51mm 重:760 g	粗粒安山岩。		住居内中央部。

2区3号住居跡

当住居跡は、2区3号溝と重複するが、新旧関係は不明である。当住居跡の規模は、東西約3.4m・南北約2.2mであり、平面形は不整形な隅丸長方形を呈する。

当住居跡は、掘形での検出であり、掘形底面からの壁の立ち上がりは、約5~10cmである。主軸はN-50°-Eである。壁溝は検出できなかった。竈は、東側壁の中央部やや南よりに築かれてい

る。袖は確認できなかったが、  
 燃焼部からは焼土の堆積が検出  
 できた。住居内の中央部と北東  
 部隅からは2基のピットが検出  
 できた。両ピットともに浅い皿  
 状であり、形態から柱穴・貯蔵  
 穴とは考えられない。当住居跡  
 からは遺物の出土も無く、時期  
 の判定は困難であるが、周辺  
 の遺構との関係・住居跡の形態  
 から平安時代の住居跡と推定され  
 る。



第12図 2区3号住居跡

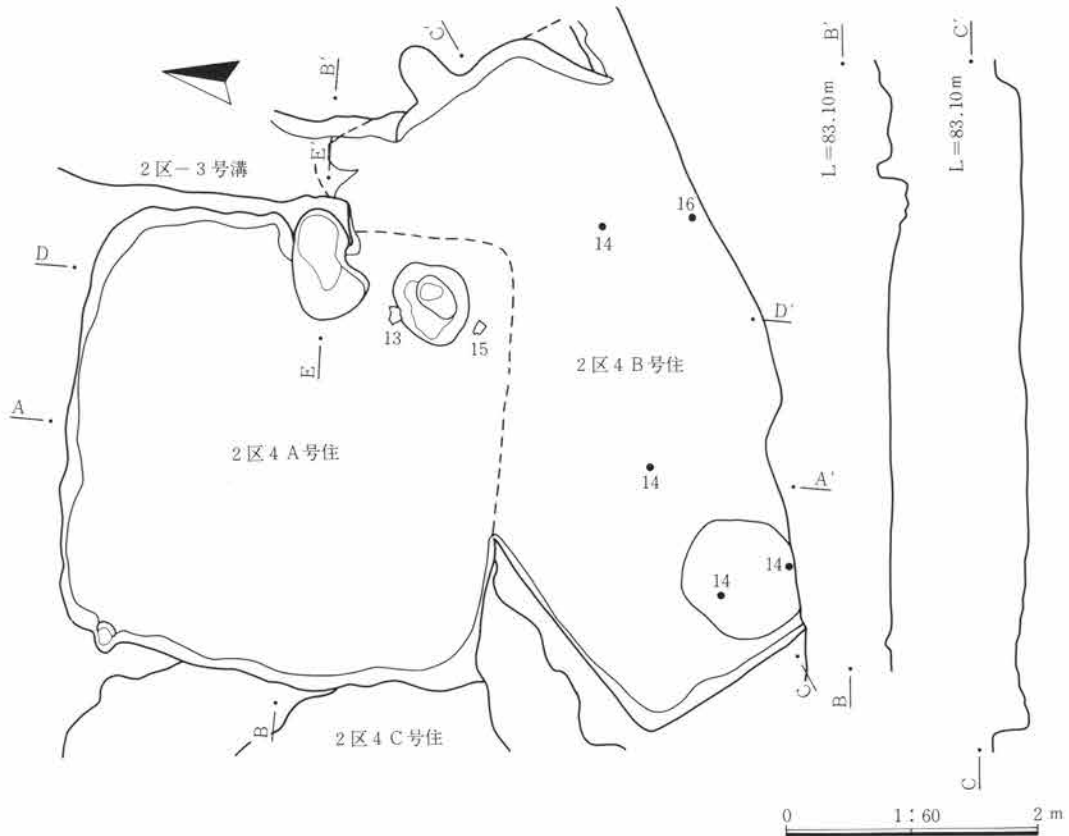
2区4A号住居跡

当住居跡は、2区4B号住居跡・2区4C号住居跡と重複する。2区4B号住居跡との新旧関係は、同住居跡の北東部分の壁・床を破壊して当住居跡の竈・床が作られていることから、当住居跡の方が新しい。2区4C号住居跡との新旧関係は、同住居跡の南東部分を破壊して当住居跡の壁・床が作られていることから、当住居跡の方が新しい。

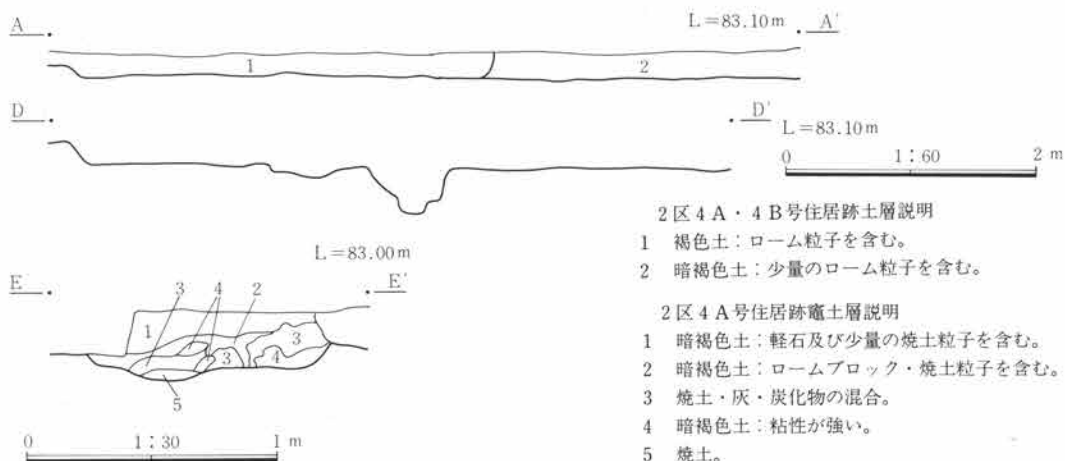
当住居跡の規模は、東西約3.6m・南北約3.5mであり、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-91°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約20cmである。床面は、比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

竈は、東壁の中央付近に作られている。袖の一部と燃烧部に堆積した焼土・炭化物を検出することができた。住居内の南東部隅からはピットが検出できた。規模は、長軸約70cm・短軸約60cm・床面からの深さ約30cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴と考えられる。柱穴は検出できなかった。

遺物の出土は非常に少ないが、貯蔵穴の周囲から土師器の杯が2個体出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は7世紀前半である。



第13図 2区4A号住居跡・4B号住居跡



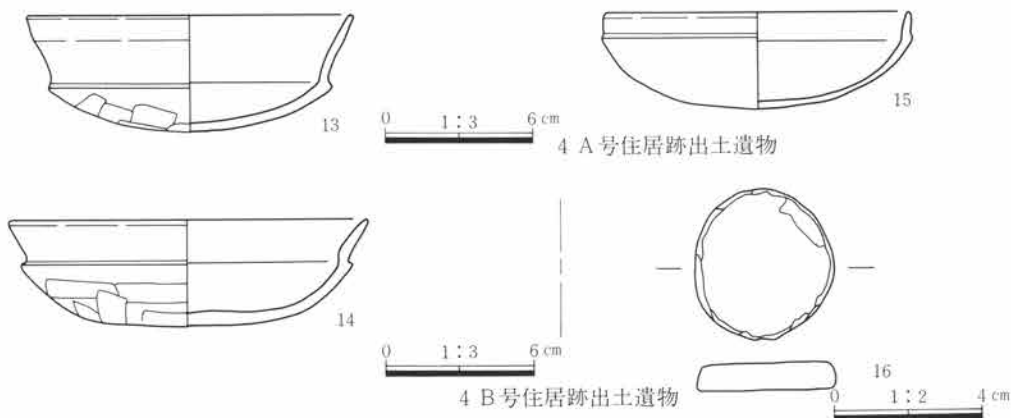
第14図 2区4A号住居跡・4B号住居跡断面図・エレベーション図、4A号住居跡竈断面図

### 2区4B号住居跡

当住居跡は、2区4A号住居跡・2区3号溝と重複する。2区4A号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の北部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。2区3号溝との新旧関係は、同溝が当住居跡の北東部隅の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、東西約5.1mであり、平面形は、隅丸方形ないしは隅丸長方形をなすと推定される。壁溝は検出できなかつた。主軸は、N-53°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約20~25cmである。床面は、比較的硬く、ほぼ平坦である。竈・柱穴・貯蔵穴は、調査範囲では確認できなかつた。

遺物は、土師器の杯・用途不明石製品が出土している。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は6世紀後半である。



第15図 2区4A号住居跡・4B号住居跡出土遺物

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(2区・4A・4B・4C号住)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
013	杯 土師器	器高:47mm 口径:(132mm) 底径:— 口縁部~底部1/2残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	外面口縁部下端に稜を持つ。丸底。内面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。外面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	住居内南東部床直。
015	杯 土師器	器高:39mm 口径:(124mm) 底径:— 口縁部~底部2/5残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。橙。	外面口縁部下端に不明瞭な稜を持つ。丸底。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	住居内南東部床直。

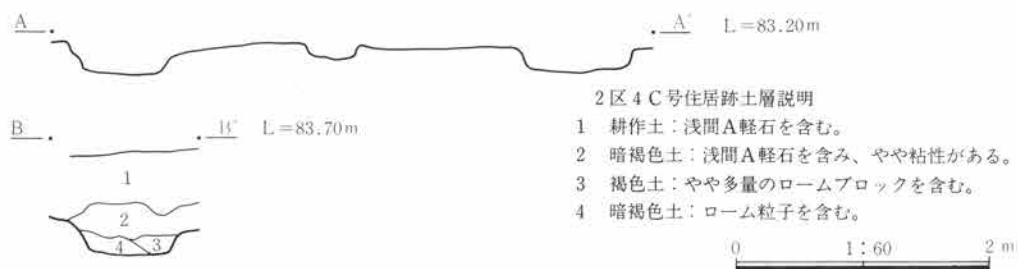
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
014	杯 土師器	器高:42mm 口径:(144mm) 底径:— 口縁部~底部1/3残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	外面口縁部下端に稜。丸底。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	西壁中央床上10cm。
016	円盤状石 製品	径:40mm 厚:8mm 重:12.51g	軽石(二ツ岳)。	両面がきれいに磨られている。	住居内南東部床直。

2区4C号住居跡

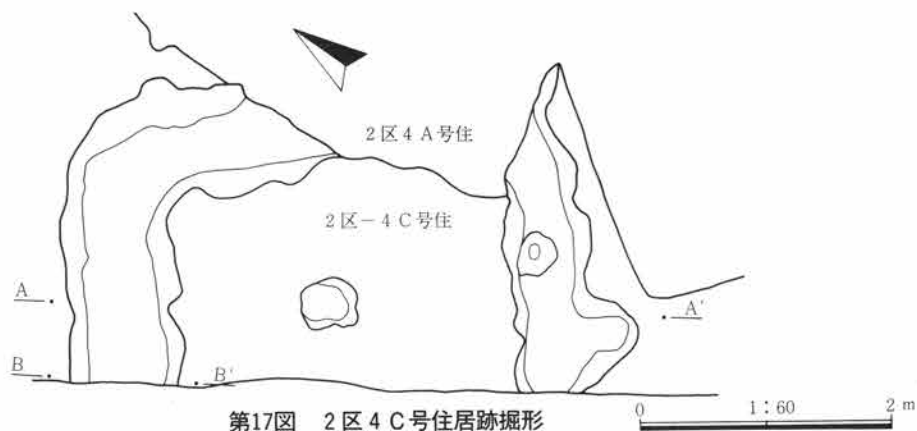
当住居跡は、2区4A号住居跡と重複する。新旧関係は、2区4A号住居跡が当住居跡の南東部分の壁を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、南北約4.1mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。当住居跡は、掘形のみを検出であり、床面は中央部のみに残存していた。溝状の掘形が壁に沿ってめぐり、掘形底面からの壁の立ち上がりは約15~20cmである。中央部の床面は、ほぼ平坦である。

中央部分に長辺約40cm・短辺約30cm・床面からの深さ約10cmであり、平面形は長方形を呈するピットが検出できた。柱穴・貯蔵穴とは考えがたい。炉・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。遺物も検出できず、時期の断定はできないが、周囲の遺構との関係、住居跡の形態から古墳時代前期の住居跡と推定している。



第16図 2区4C号住居跡掘形エレベーション図・断面図



### 2区5A号住居跡

当住居跡は、2区5B号住居跡・2区1号土坑と重複する。2区5B号住居跡との新旧関係は不明であるが、2区1号土坑より当住居跡が古い。南西隅は2区1号土坑に破壊されるが、北壁は僅かに残る。

規模は東西約4.0m・南北約4.9m、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-99°-Eである。残存壁高は約13~18cmである。柱穴は確認されない。深さ約13~25cmの小ピットが北壁と東壁に沿うように5基確認できた。また、中央のピットは当住居跡には伴わないと考えられる。周溝は検出されなかった。

竈は東壁の南隅に構築されている。燃烧部は壁の延長線上にあり、先端は約17cm壁外に張り出す。燃烧部の壁は焼土化している。

南壁付近からは、須恵器・土師質土器碗(17・18)、土釜(19)が出土している。また、中央付近からは土釜(20)、北壁付近からは土師質土器皿(21)が出土している。

### 2区5B号住居跡

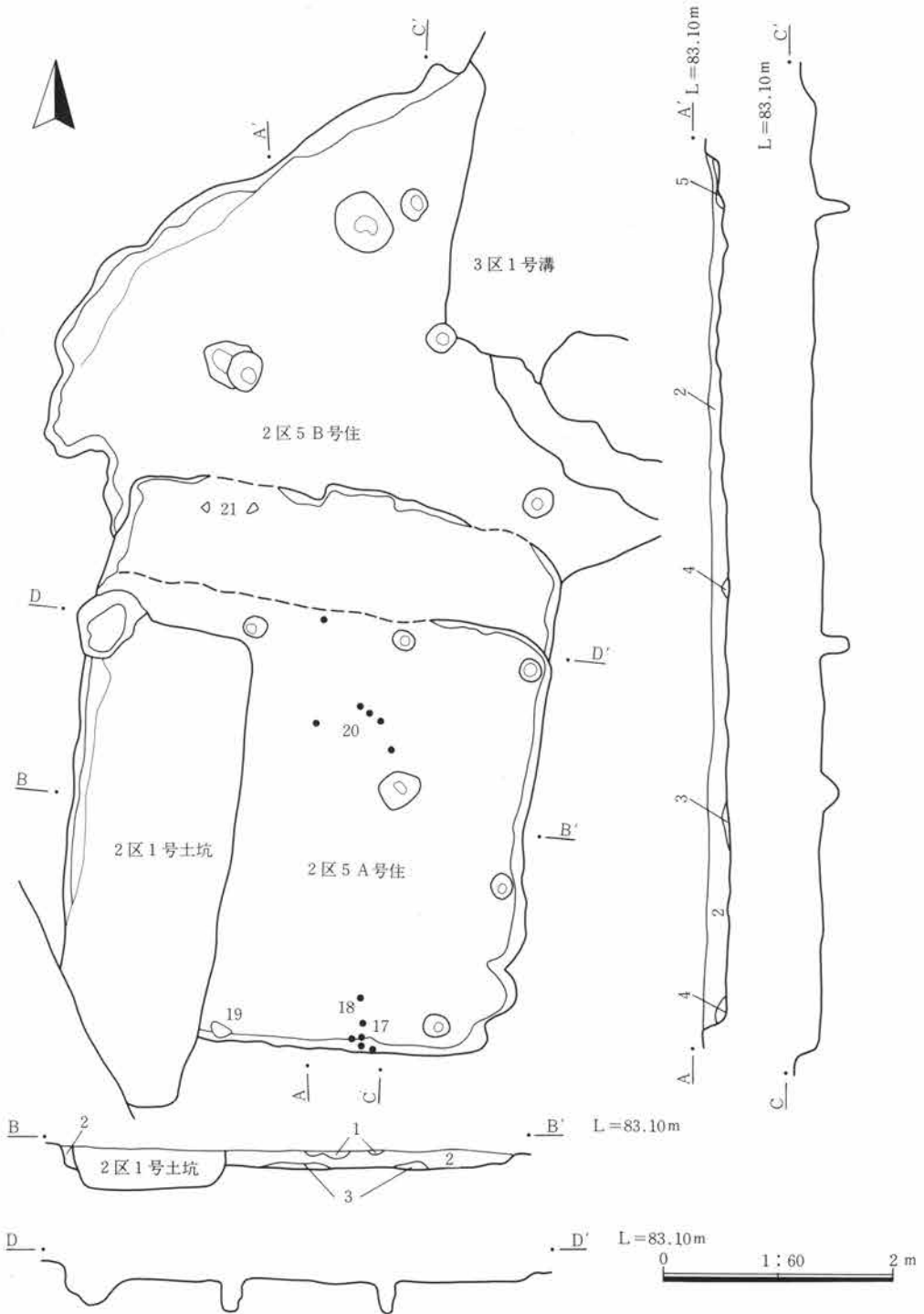
当住居跡は、2区5A号住居跡・3区1号溝と重複するが、新旧関係はいずれも当住居跡が古い。東壁を3区1号溝に、南壁を2区5A号住居跡にそれぞれ破壊される。

規模は南北約4.5mを測るが、東西は不明である。平面形は不整形な長方形を呈する。主軸方位は不明である。残存壁高は約1~13cmであり、残存状態は悪い。柱穴は認められない。6基のピットが確認されているが、本住居跡には伴わないと考えられる。周溝は検出されない。

竈は残存部には認められず、5A号住居か1号溝に破壊されていると思われる。貯蔵穴はみとめられない。



第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(2区4C・5A・5B号住)

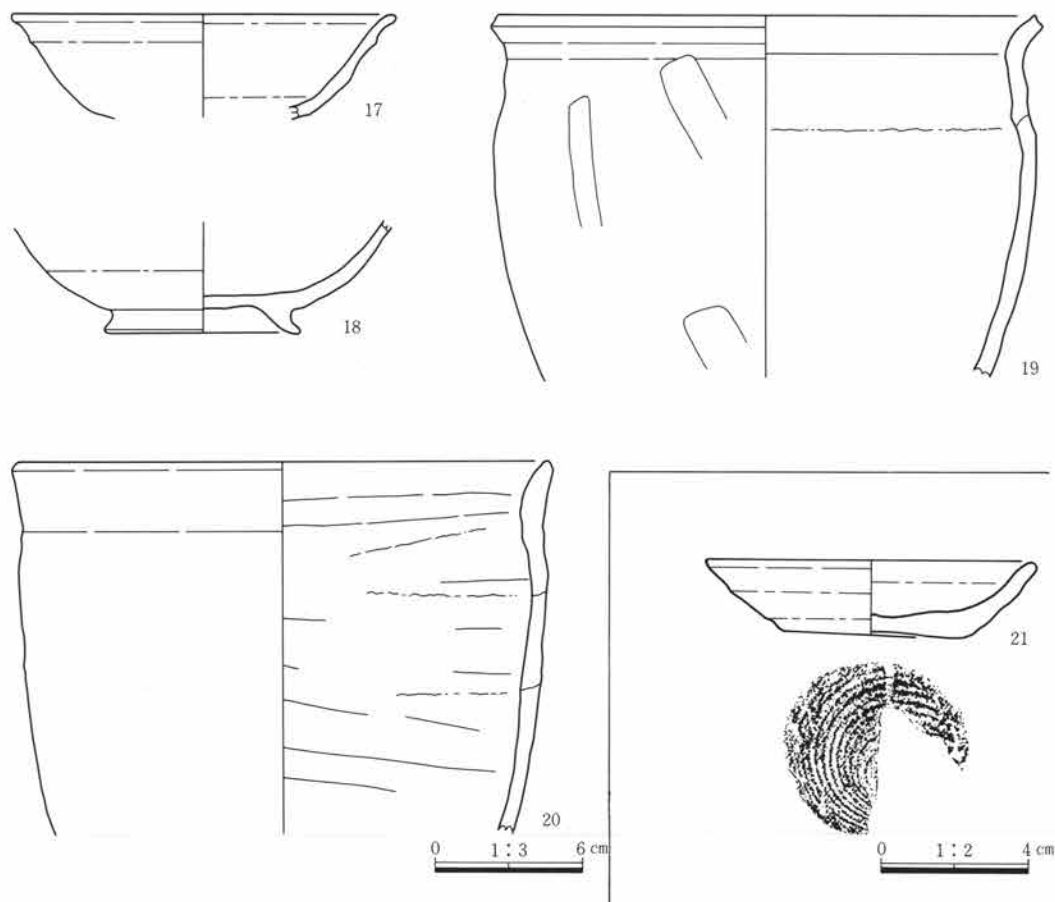


2区5A・5B号住居跡土層説明

- |                               |                          |
|-------------------------------|--------------------------|
| 1 黒色土層：浅間A軽石を含む。              | 3 黒色土層：粘性がある。            |
| 2 褐色土層：ロームブロックを多く含む。硬く縮まっている。 | 4 ロームブロック。               |
|                               | 5 ロームブロックを主体とし、少量褐色土を含む。 |

第18図 2区5A号住居跡・5B号住居跡

第IV章 発見された遺構と遺物



第19図 2区5A号住居跡・5B号住居跡出土遺物

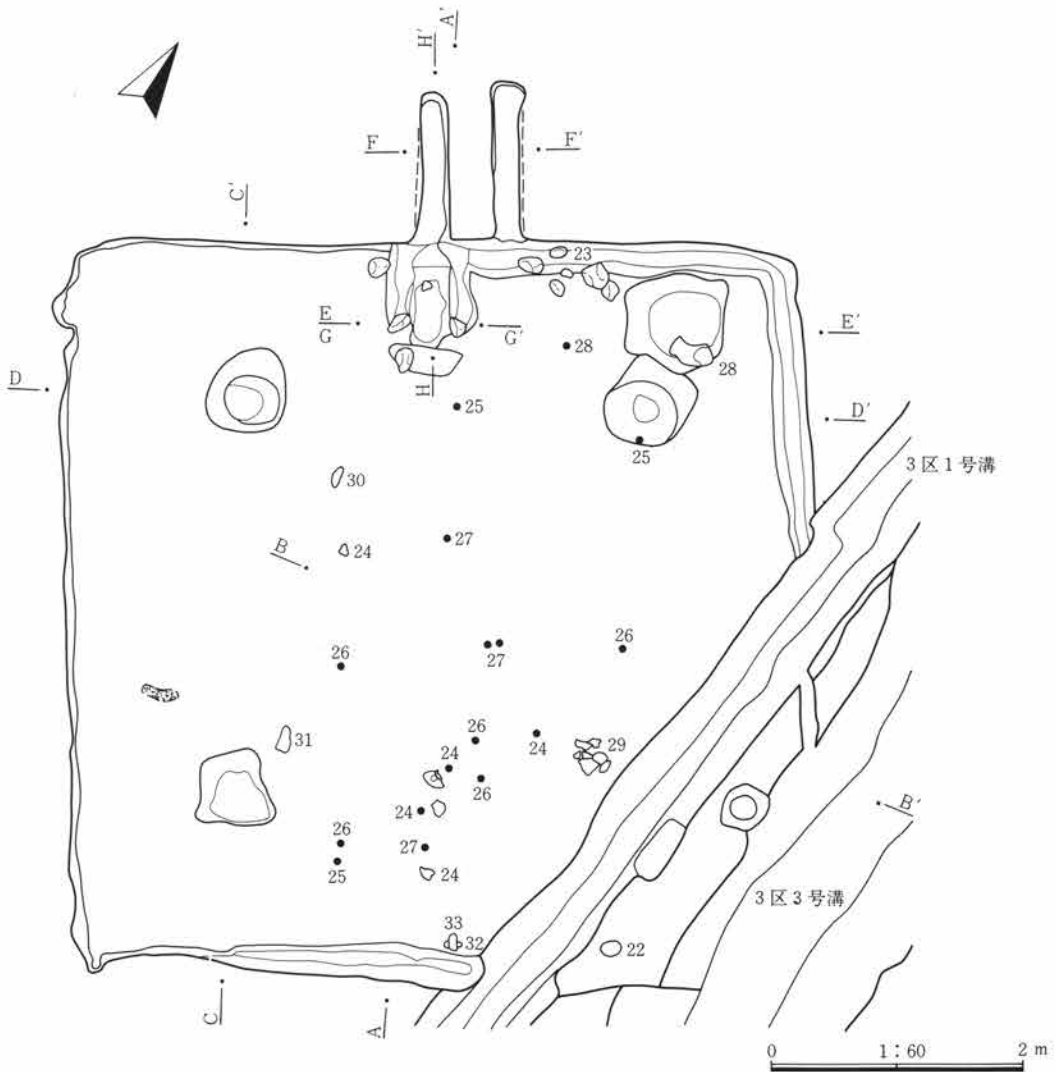
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
017	碗 土師質土器	器高:[42mm] 口径: (156mm) 口縁部~体 部1/3残。	細砂~径2mmの礫含む。 軟質。明赤褐。	体部は外方に開く。口縁部は外反する。	南壁中央。器表剥 離。
018	碗 土師質土器	器高:[45mm] 底径:80 mm 底部完・体部1/5 残。	細砂~径1mmの粗砂含 む。軟質。外面橙・内面 黒。	体部は外方に開く。高台は外方に開く。 高台貼り付け時に切り放し痕などで消 す。内面篋磨き。	南壁中央。器表剥 離。
019	土 釜	器高:[145mm] 口径: (220mm) 口縁部~体 部小片。	細砂~径3mmの礫多く 含む。やや硬質。赤褐。	口縁部は外反する。口縁部は横なで。体 部内面はなで。体部外面は篋削り後な で。	南壁中央。
020	土 釜	器高:[150mm] 口径: (214mm) 口縁部~体 部1/6残。	細砂~径4mmの礫多く 含む。硬質。鈍い褐。	口縁部は小さく外反する。口縁部は雑 な横なで。体部内面は回転横なで。体部 外面なで。	中央。

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(2区5A・5B号住・3区1号住)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
021	皿 土師質土器	器高:20mm 口径:90mm 底径:48mm 口縁部1/ 2・底部3/4残。	細砂～径1mmの粗砂含む。硬質。黄灰。	内外面轆轤目残る。底部外面右回転糸切り無調整。	北壁。

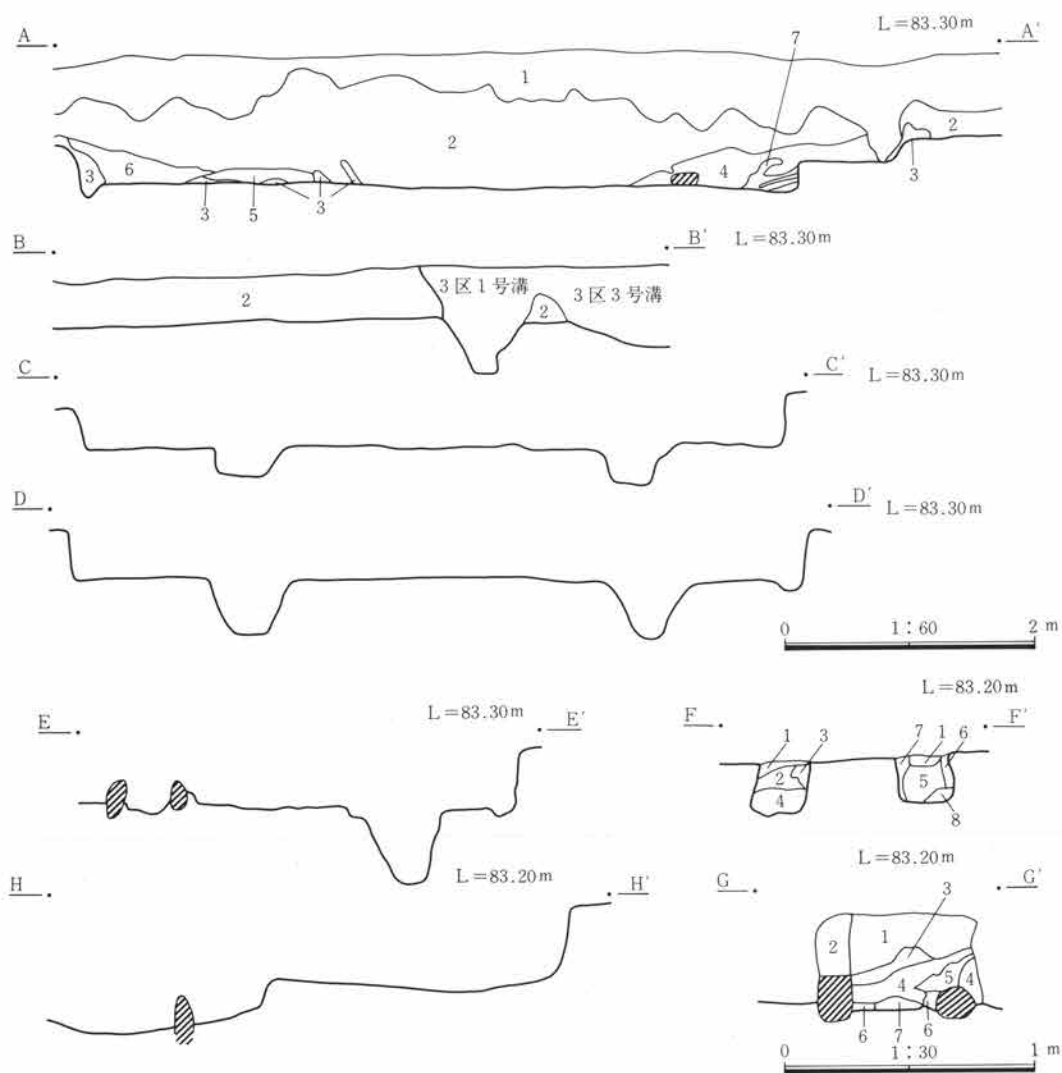
3区1号住居跡

当住居跡は、3区2号住居跡・3区1号溝・3区3号溝と重複する。3区2号住居跡との新旧関係は、当住居跡が同住居跡の北西部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が新しい。3区1



第20図 3区1号住居跡

第IV章 発見された遺構と遺物



3区1号住居跡土層説明 A-A'

- 1 耕作土。
- 2 褐色土：ローム粒子を含む。
- 3 ロームブロック。
- 4 褐色土：多量の焼土粒子・焼土ブロックを含む。
- 5 暗褐色土：多量の炭化物及びロームブロックを含む。
- 6 暗褐色土：少量のローム粒子を含む。
- 7 焼土・灰。

- 5 褐色土：焼土・ローム小ブロック・軽石を含む。
- 6 ロームブロック。
- 7 褐色土：やや多量の軽石・焼土・ローム小ブロックを含む。
- 8 黄褐色土：焼土・軽石・ローム小ブロックを含み、粘性が強い。

3区1号住居跡竈土層説明 F-F'

- 1 褐色土：ローム小ブロック・軽石を含む。
- 2 黄褐色土：多量の焼土及びローム小ブロック・軽石を含む。
- 3 褐色土：焼土・ローム小ブロックを含む。
- 4 黄褐色土：焼土・ローム小ブロックを含み、粘性が強い。

3区1号住居跡竈土層説明 G-G'

- 1 黄褐色土：軽石・ローム小ブロックを含む。
- 2 黄褐色土：焼土・軽石・ローム小ブロックを含む。
- 3 黄褐色土：やや多量の焼土・ローム小ブロックを含む。
- 4 灰褐色土：焼土・ローム小ブロックを含む。
- 5 褐色土：焼土・ローム小ブロックを含む。
- 6 黄褐色土：焼土を含む。
- 7 焼土・灰。

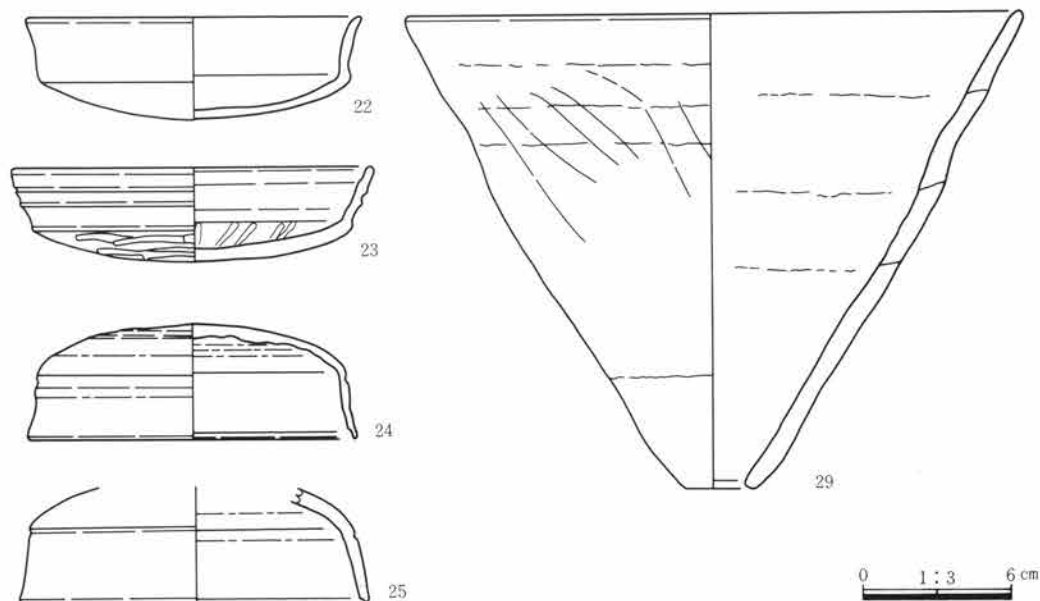
第21図 3区1号住居跡断面図・エレベーション図、竈断面図・エレベーション図

号溝との新旧関係は、同溝が当住居跡の南東部分の壁・床を破壊していることから当住居跡の方が古い。3区3号溝との新旧関係は、同溝が当住居跡の南東隅の壁・床を破壊していることから当住居跡の方が古い。

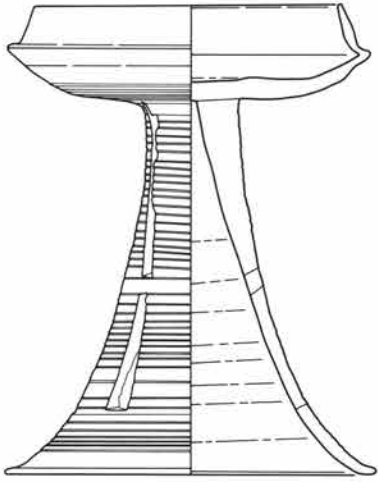
当住居跡の規模は、東西約6.0m・南北約5.7mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-35°-Wである。確認面までの壁の立ち上がりは約30~40cmを測り、残存状態は良好である。床面は、竈周辺を中心にして硬くしまっており、ほぼ平坦である。壁溝は、竈の右側から東壁に沿い、南壁の中央まで検出できたが、西側からは確認出来なかった。

竈は北壁の中央部に築かれている。袖の先端部は河原石を用いて固め、袖の手前には天井に用いられた粘土材が落ちた状態で検出できた。煙道部の壁外への張り出しは約1.2mを測る。燃焼部の中央からは、支脚に使用された河原石が埋め込まれた状態で検出でき、焼土・灰の体積が確認できた。この竈の煙道部の東に隣接して、壁外への張り出しが約1.2mの煙道が検出でき、竈の作り替えが確認できた。支柱穴は4基である。規模は、径が約30~60cm・床面からの深さ約25~50cmであり、平面形は不整形な楕円形ないしは不整形な方形を呈する。住居内の北東部隅からは、ピットが1基検出できた。規模は、長辺約80cm・短辺約70cm・床面からの深さ約60cmであり、平面形は不整形な長方形を呈する。上面からは、土師器の甕が発見できた。貯蔵穴と考えられる。

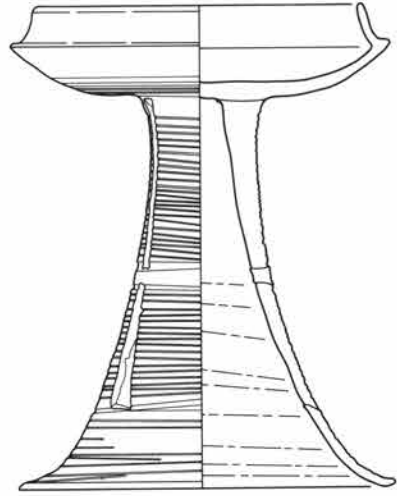
遺物は、竈・貯蔵穴周辺を中心に多量に出土している。種類は、土師器の甕・甌・杯、須恵器の高杯・蓋の他、砥石・薦石なども出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は6世紀後半である。



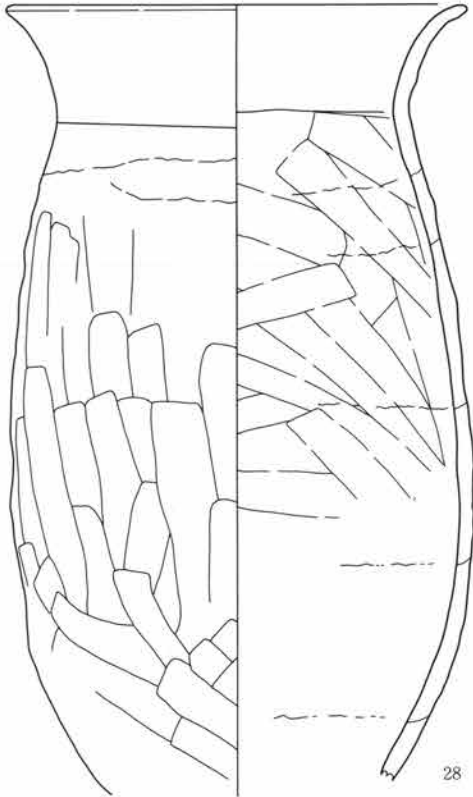
第22図 3区1号住居跡出土遺物①



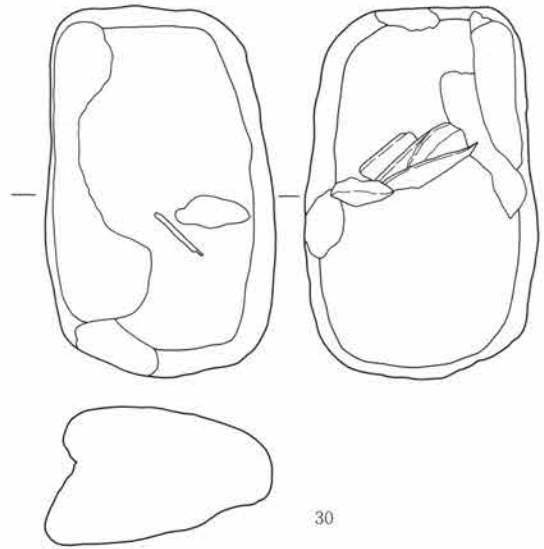
26



27



28

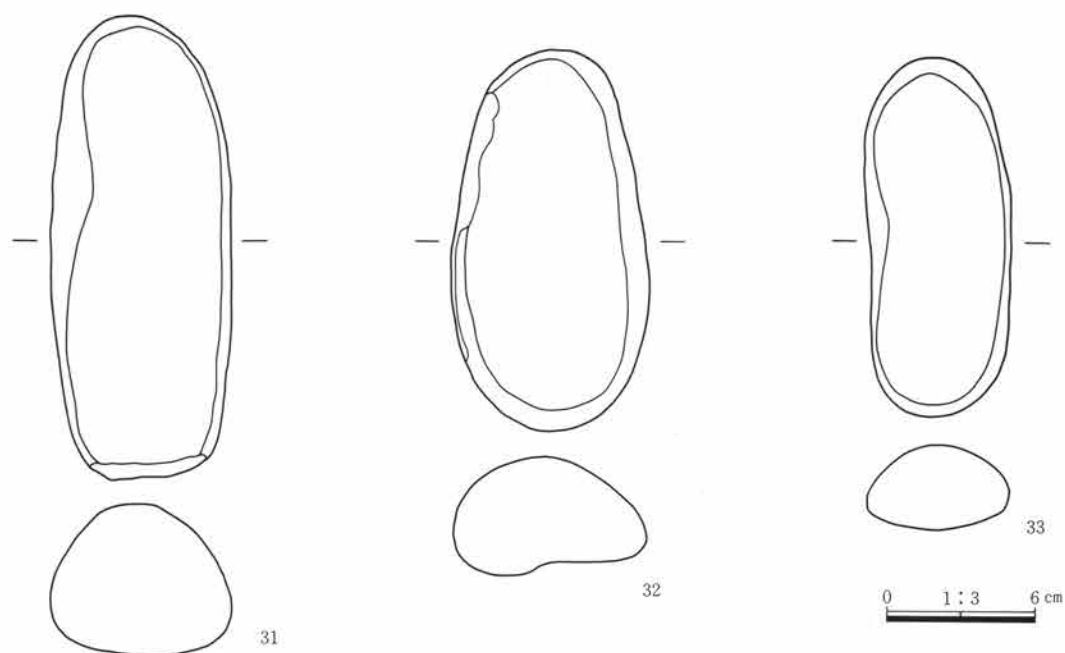


30

0 1:3 6 cm

第23図 3区1号住居跡出土遺物②

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3区1号住)



第24図 3区1号住居跡出土遺物③

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
022	杯 土師器	器高:41mm 口径:136mm 底径:— ほぼ完形。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	外面口縁部下端に不明瞭な稜を持つ。丸底。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篔削り。	住居内南東部床直。
023	杯 土師器	器高:38mm 口径:146mm 底径:— 完形。	径1~2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。鈍い橙。	外面口縁部下端に稜、口縁部中央に段を2段持つ。丸底。内面:口縁部~体部上端は横なで、体部~底部はなで後篔磨き。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篔削り。	竈右袖脇床上20cm。内外面に油煙付着。
024	蓋 須恵器	器高:47mm 口径:133mm ほぼ完形。	径2~3mmの砂粒を含む。やや軟質。還元(器壁の芯は還元されていない)。灰。	内面口縁端部・外面天井部下端に各々沈線一条。内面:天井部上半~口縁部は回転なで。外面:天井部上半は回転篔削り。天井部下半~口縁部は回転なで。	住居内中央部床直他。外面天井部に篔記号有り。
025	蓋 須恵器	器高:[46mm] 口径:141mm 天井部下半~口縁部2/3残。	径1~2mmの砂粒を含む。硬質。還元。オリブ灰。	内面口縁端部・外面天井部下端に各々沈線一条。内面:天井部~口縁部は回転なで。外面:天井部上半は回転篔削り、天井部下半~口縁部は回転なで。	住居内北東部床直他。外面天井部に自然釉。
026	高杯 須恵器	器高:188mm 口径:125mm 脚径:151mm ほぼ	径2~3mmの砂粒を含む。硬質。還元。灰黄。	口縁部は内湾。受部はほぼ水平。脚部は長脚2段透かし、透かしは各段3カ所、計	住居内中央部床直他。

第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
027	高杯 須恵器	完形。 器高:193mm 口径:132mm 口縁部～脚部3/4残。	径2～3mmの砂粒を含む。硬質。還元。灰。	6カ所。最大径は脚部下端。内外面共に口縁部～脚部は回転なで。外面体部下～脚部には工具痕が顕著に残る。	住居内南東部床上10cm他。
028	甗 土師器	器高:[308mm] 口径:186mm 底径:— 口縁部～体部下半1/2残。	径4～5mmの小石及び砂粒を含む。軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は内湾。受け部はほぼ水平。脚部は長脚2段透かし、透かしは各段3カ所、計6カ所。最大径は受部と脚部下端。内外面共に口縁部～脚部は回転なで。外面体部下～脚部には工具痕が顕著に残る。	貯蔵穴内。内外面に油煙付着。
029	甗 土師器	器高:193mm 口径:(250mm) 底径:34mm 口縁部～底部2/5残。	径4～5mmの小石及び砂粒を含む。軟質。酸化。橙。	体部～口縁部は直線的に広がる。内面:口縁部～体部はなで。外面:口縁部はなで、体部は篋なで。	住居内南東部床直。外面に油煙付着。
030	砥石	長:150mm 幅:93mm 厚:55mm 重:420g	軽石(二ツ岳)。	使用面は2面。	住居内中央部床上10cm。
031	薦石	長:185mm 幅:72mm 厚:65mm 重:1400g	粗粒安山岩。		住居内南西部床直。
032	薦石	長:152mm 幅:80mm 厚:47mm 重:800g	ひん岩。		南壁中央脇床直。
033	薦石	長:144mm 幅:60mm 厚:34mm 重:410g	粗粒安山岩。		南壁中央脇床直。

3区2号住居跡

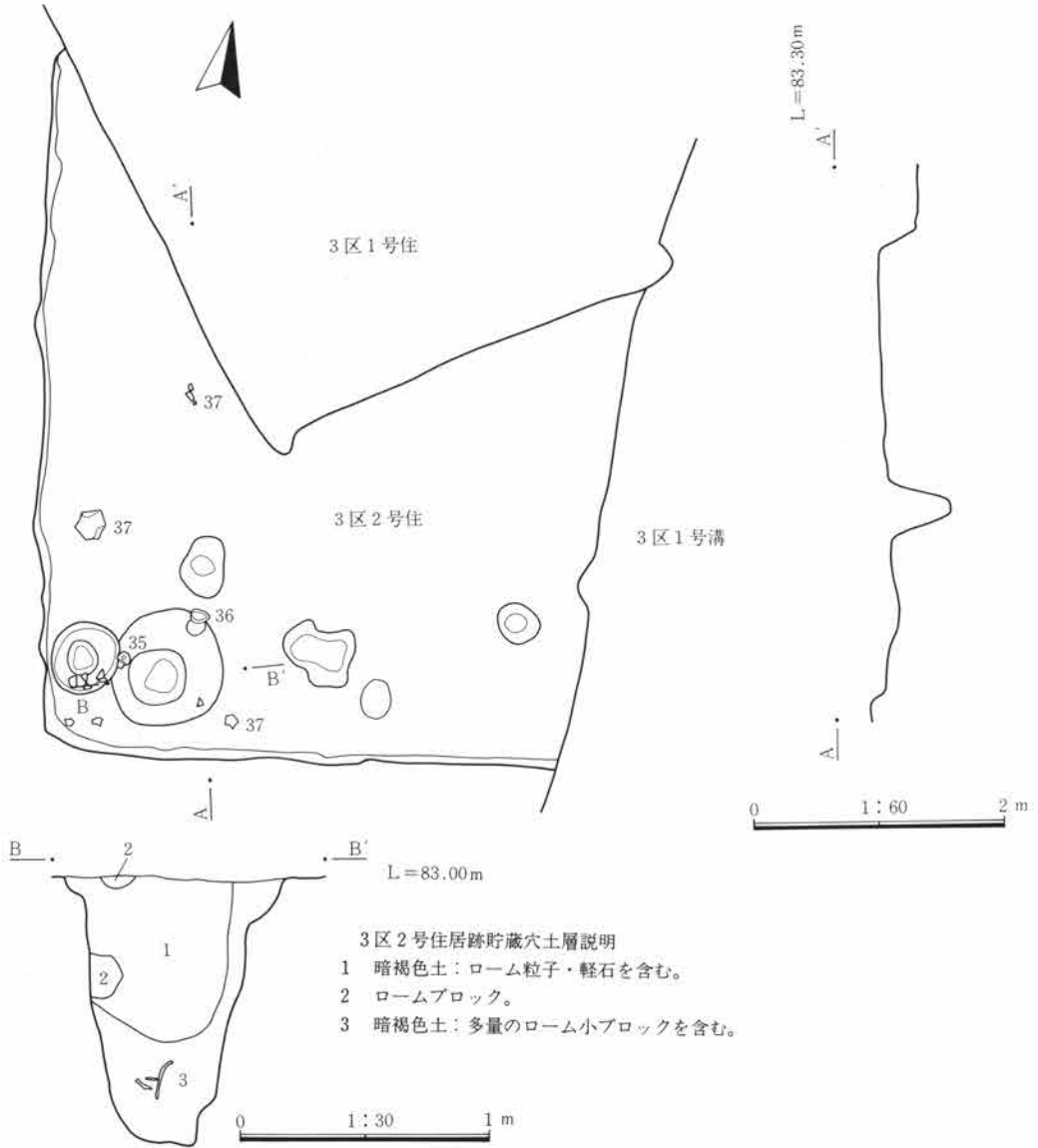
当住居跡は、3区1号住居跡・3区1号溝と重複する。3区1号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の北部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。3区1号溝との新旧関係は、同溝が当住居跡の東部分を破壊していることから当住居跡の方が古い。壁溝は検出できなかった。

当住居跡の規模は、北側と東側が破壊されているために不明であるが、平面形は、隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。支柱穴は4基と考えられるが、検出できたのは2本である。規模は長軸約35～50cm・短軸約30～40cm・床面からの深さ約20～40cmであり、平面形は、不整形な楕円形を呈する。住居内の南西隅付近からは、貯蔵穴と考えられるピットが検出できた。規模は、径約90cm・床面からの深さは約100cmを測り、平面形は不整形な円形を呈する。ピットの底面からは土師器の罎・壺が検出できた。また、貯蔵穴の西、南西隅からは、幅約30cm・厚さ約

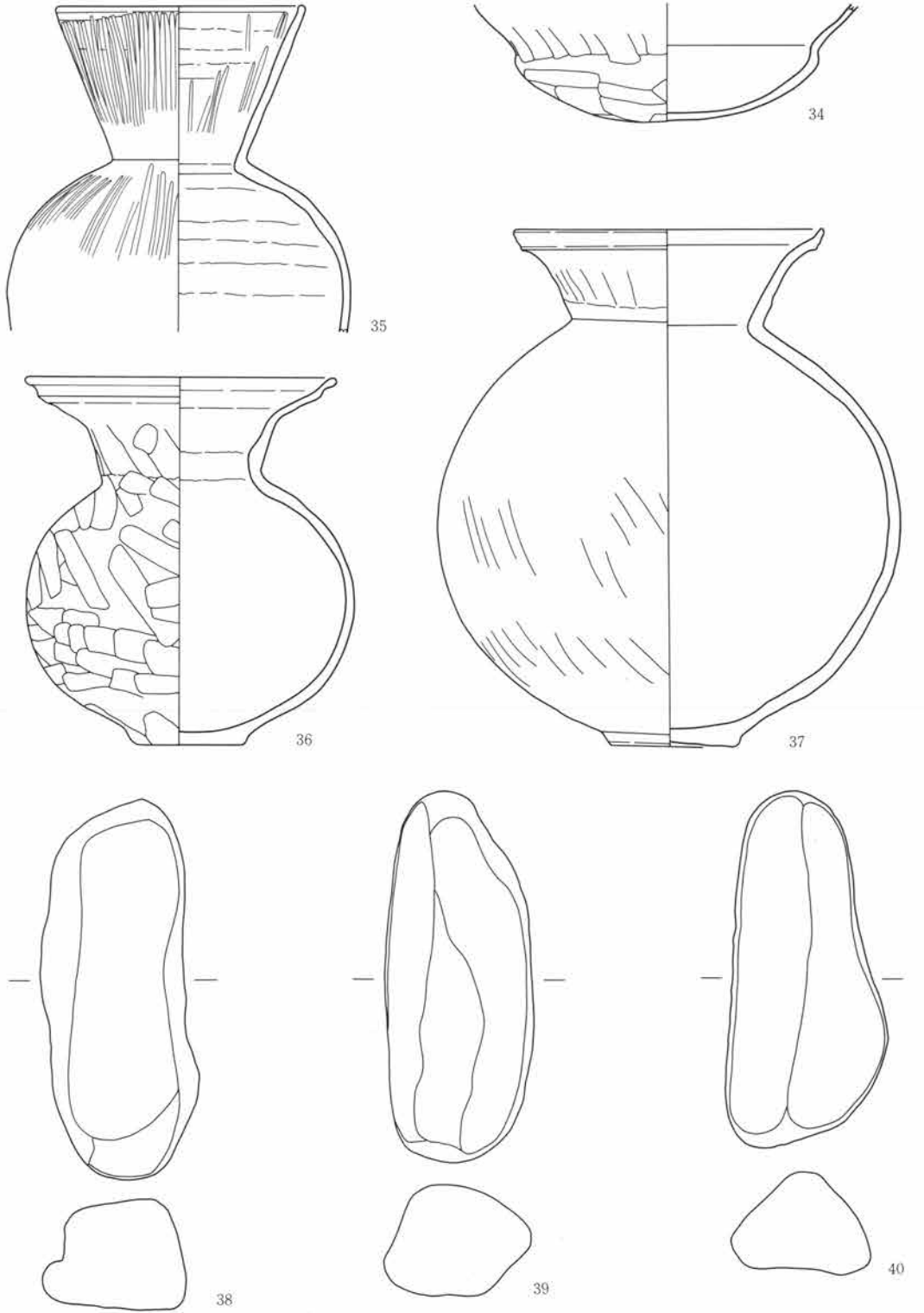


10cmの粘土の帯が径約80cmの円形におかれていた。その粘土帯の周囲からは土師器の壺が1個体検出できた。粘土帯の用途は不明である。炉は、確認範囲からは検出できなかった。

遺物は貯蔵穴から検出できた土師器の壺・甕の他、薦石が検出できた。遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀後半である。



第25図 3区2号住居跡



第26図 3区2号住居跡出土遺物

0 1:3 6 cm

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3区2・3号住)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
034	杯 土師器	器高:[53mm] 口径:— 底径:— 口縁部～底 部3/4残。	径1～2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。明 黄褐。	口縁部は外湾。丸底。内面:口縁部はな で、体部～底部は筧なで。外面:口縁部 は縦筧削り、体部～底部は筧削り。	貯蔵穴内。
035	埴 土師器	器高:[150mm] 口径: 117mm 底径:— 最大 径:162mm 口縁部～体 部上半残。	径1～2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。明 黄褐。	口縁部は「く」字状に外湾し、長い。球体 形。内面:口縁部は横なで後縦筧磨き、 体部はなで。外面:口縁部はなで後縦筧 磨き、体部はなで後縦筧磨き。	貯蔵穴内。内外面 に油煙付着。
036	壺 土師器	器高:171mm 口径:146 mm 底径:52mm 最大 径:154mm ほぼ完形。	径1～2mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。浅 黄橙。	口縁部は「コ」字状に外湾し、口縁端部 は段を持つ。最大径は体部中央。球体 形。内面:口縁部は横なで、体部～底部 はなで。外面:口縁部上半は横なで、口 縁部下半～体部は筧削り。	貯蔵穴内。内面に 多量の油煙付着。
037	壺 土師器	器高:240mm 口径:145 mm 底径:58mm 最大 径:216mm ほぼ完形。	径1～2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。鈍 い褐。	口縁部は「く」字状に外湾し、口縁端部 は内湾。最大径は体部中央。球体形。内 面:口縁部は横なで、体部～底部はな で。外面:口縁部は筧削り後横なで、体 部は筧削り後なで。	貯蔵穴周辺。内面 に多量の油煙付 着。
038	薦 石	長:176mm 幅:73mm 厚:53mm 重:1095g	粗粒安山岩。		住居内覆土。
039	薦 石	長:172mm 幅:69mm 厚:58mm 重:920g	砂岩。		住居内覆土。
040	薦 石	長:165mm 幅:75mm 厚:53mm 重:780g	ひん岩。		住居内覆土。

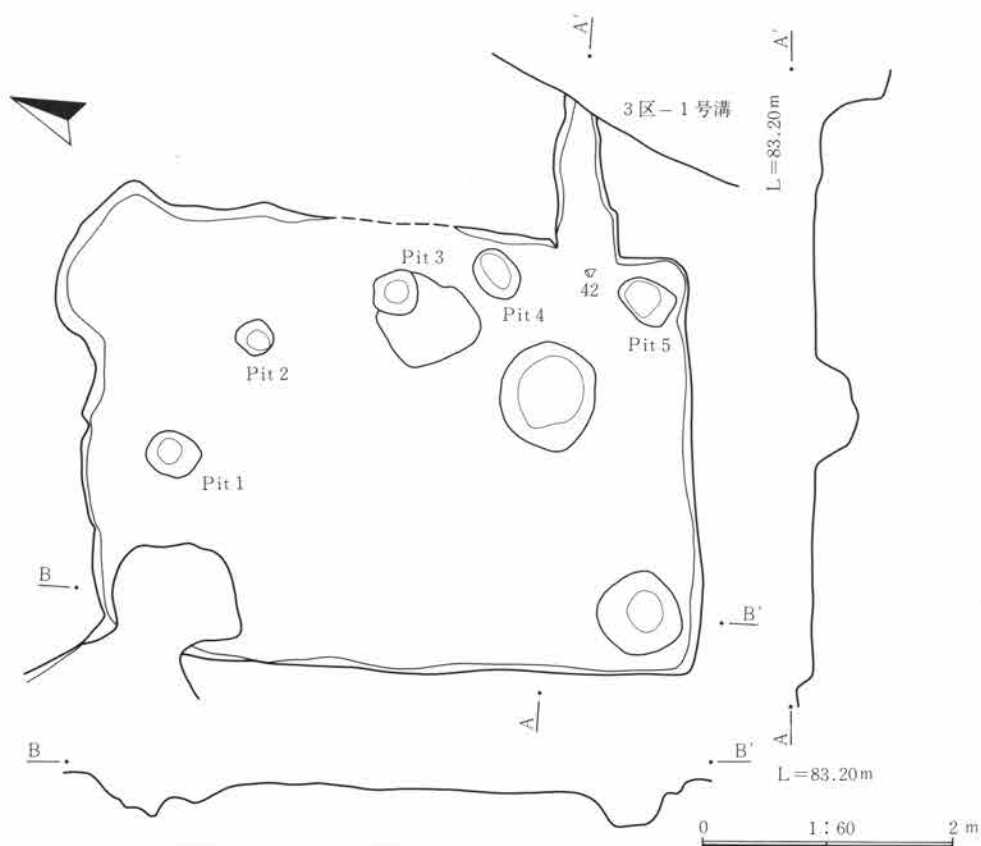
### 3区3号住居跡

当住居跡は、3区1号溝・土坑と重複し、3区2号住居跡に1.3m・3区10号住居跡に0.7mと近接している。新旧関係は当住居跡が古い。

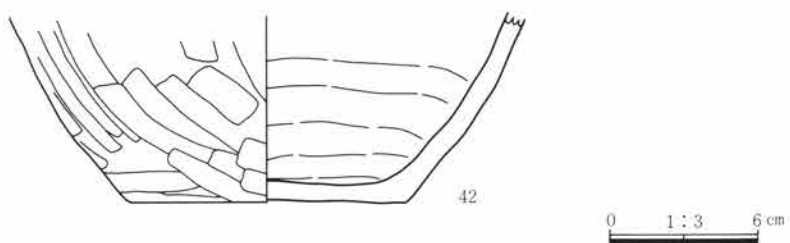
規模は東西約3.5m・南北約4.9mである。土坑との重複のため北隅が張り出しているが、住居跡の平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-74°-Eである。残存壁高は8～12cmを測る。柱穴・周溝は確認されない。床面には5基のピットが確認され、深さは1が18cm・2が39cm・3が40cm・4が7cm・5が50cmを測る。竈前に位置する長軸82cm・短軸76cm・深さ30cmの土坑は、床下土坑と考えられる。

竈は東壁南隅に構築され、燃烧部は壁外に設けている。煙道は壁外に120cm以上張り出している。貯蔵穴は南西隅に位置する径66cm前後・深さ25cmの土坑と考えられる。

出土遺物は少なく、実測可能な個体は土釜の底部片(42)のみである。



第27図 3区3号住居跡



第28図 3区3号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
042	土 釜	器高: [74mm] 底径: [110mm] 胴部下半~ 底部1/2残。	細砂~礫多く含む。硬 質。赤色。	胴部内面回転横などで。胴部外面篋削り。 底部外面砂付着。	竈。

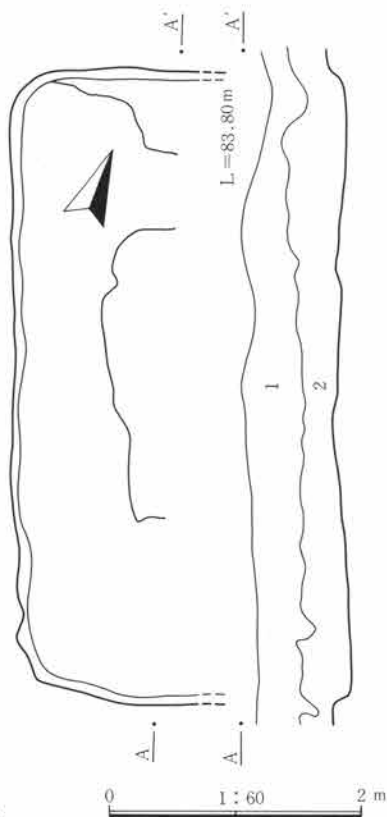
## 3区4号住居跡

当住居跡は、西側の約1/4が検出できただけであり、重複はない。当住居跡の規模は、東側部分が検出できなかったために不明であるが、南北は約5.0mであり、平面形は、隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。確認面までの壁の立ち上がりは約15～20cmである。床面は、比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

検出部分が僅かのために、竈・炉・柱穴・貯蔵穴は不明である。遺物の出土もなく時期の限定は困難であるが、周辺の遺構との関係・住居跡の形態から推定すると、古墳時代の住居跡である。

## 3区4号住居跡土層説明

- 1 耕作土：多量の浅間A軽石を含む。
- 2 暗褐色土：ローム粒子を含む。



第29図 3区4号住居跡

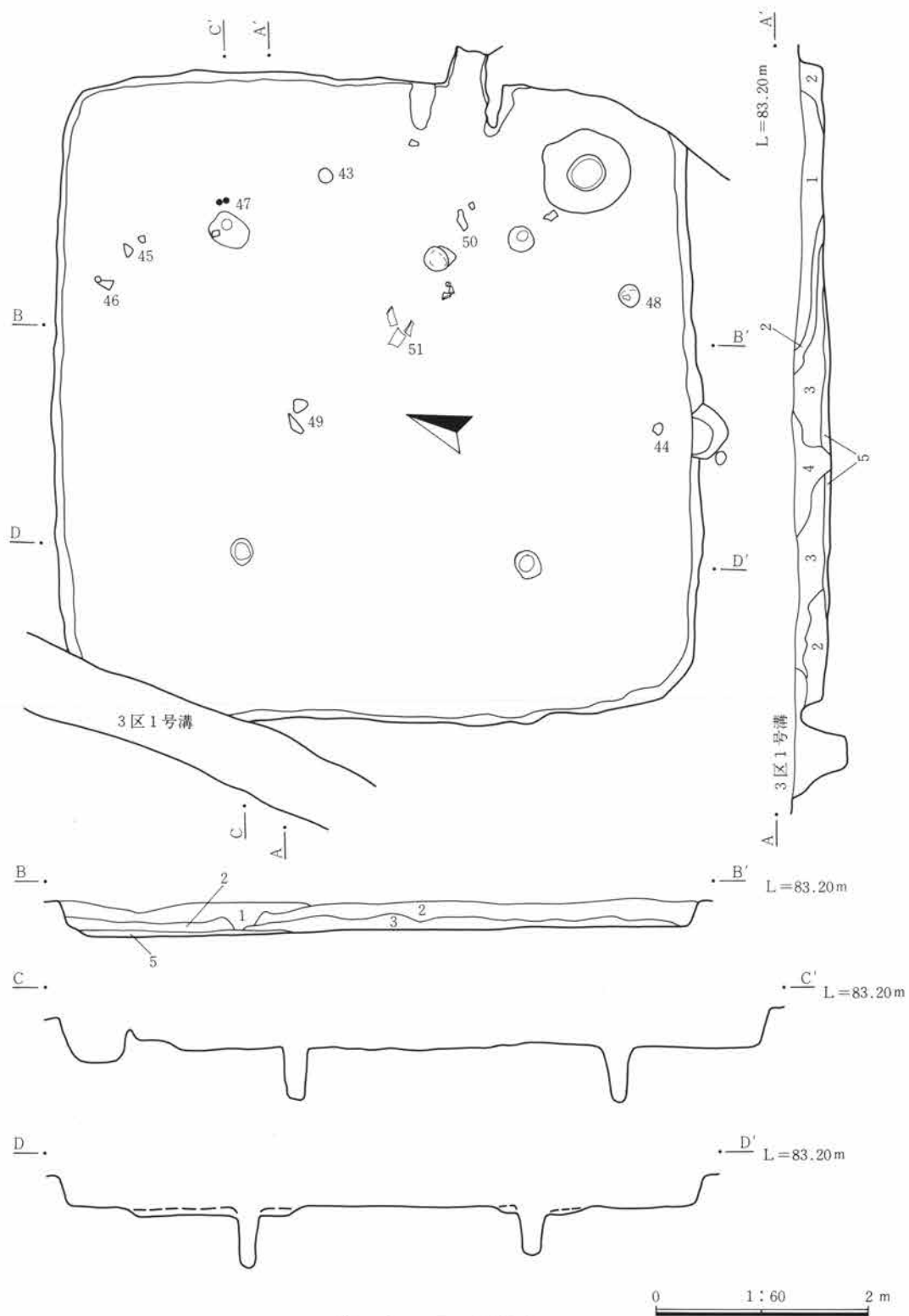
## 3区5号住居跡

当住居跡は、3区6号住居跡・3区1号溝と重複する。3区6号住居跡との新旧関係は、同住居跡の北東部の壁・床を当住居跡が破壊していることから、当住居跡の方が新しい。3区1号溝との新旧関係は、同溝が当住居跡の北東隅の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、東西約6.0m・南北約6.1mであり、平面形は、隅丸方形を呈する。主軸はN-76°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約25～30cmであり、残存状態は比較的良好である。床面は比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

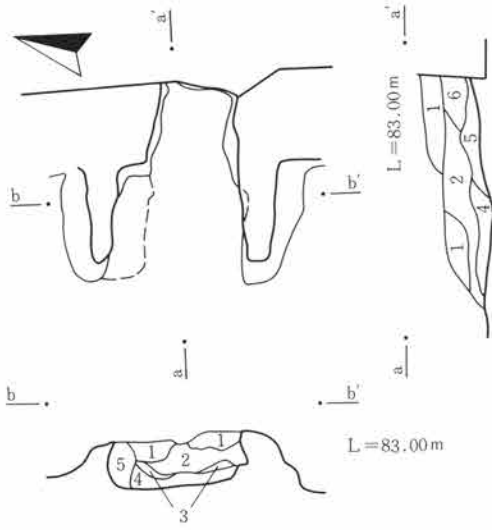
竈は東壁のやや南よりに築かれている。ロームを利用した袖が残っており、燃烧部からは灰・焼土の堆積が確認できた。主柱穴は4基である。規模は、径25～40cm・床面からの深さ約40～50cmであり、平面形は、不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。住居内の南東隅、竈の右脇からは貯蔵穴と考えられるピットが検出できた。規模は、長軸約85cm・短軸約75cmであり、平面形は、不整形な楕円形を呈する。

遺物は、土師器の甕・甑・杯の他、薦石が出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は6世紀後半である。



第30図 3区5号住居跡

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3区5号住)



3区5号住居跡土層説明

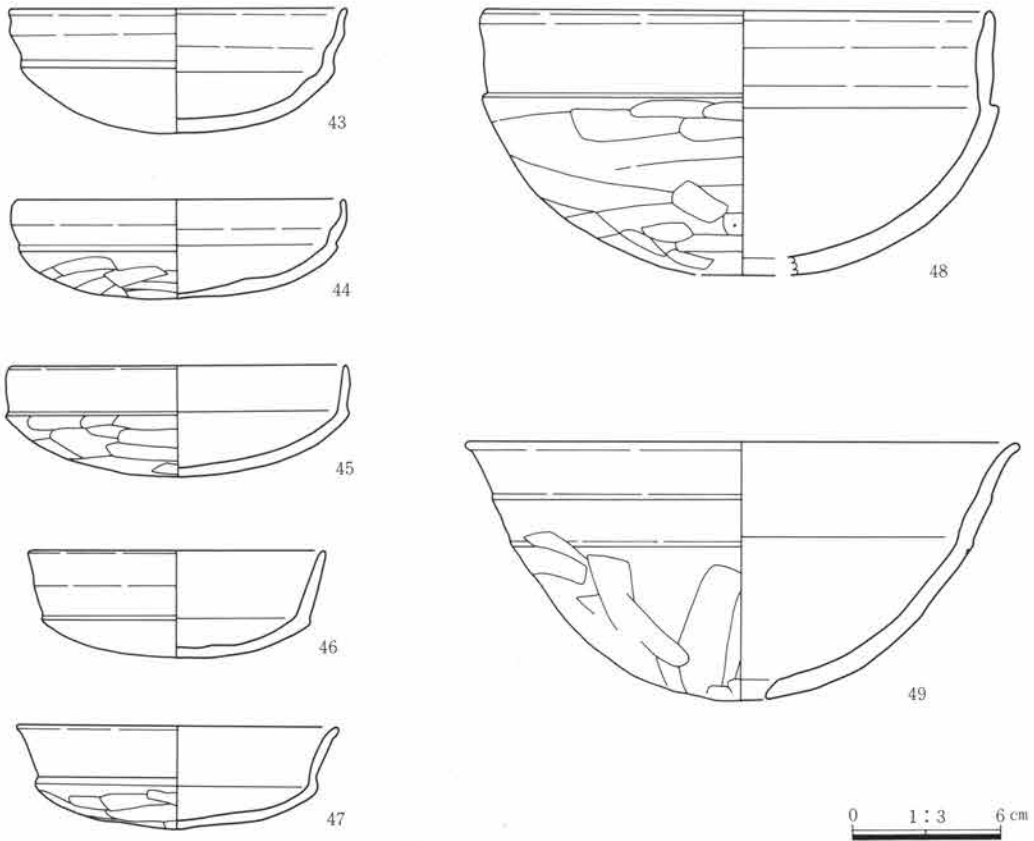
- 1 暗褐色土：ローム粒子・軽石を含み、粘性がある。
- 2 褐色土：ローム粒子・ロームブロックを含む。
- 3 暗褐色土：少量のローム粒子・ロームブロックを含む。
- 4 暗褐色土：ロームブロックを含む。
- 5 褐色土：ロームブロックを含む。

3区5号住居跡竈土層説明

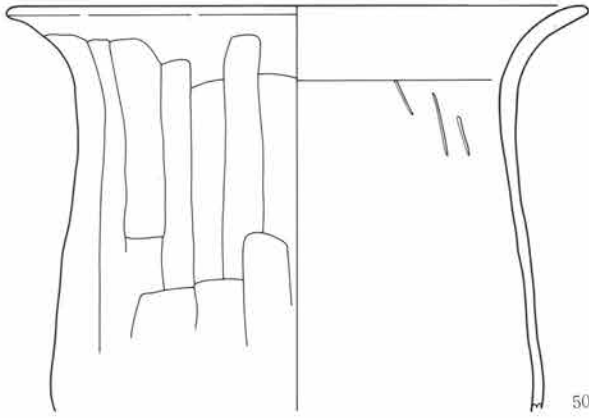
- 1 褐色土：焼土・軽石を含む。
- 2 褐色土：焼土・ローム粒子を含む。
- 3 暗褐色土：焼土・灰・炭化物及び軽石を含む。
- 4 褐色土：軽石を含む。
- 5 砂質ローム。
- 6 褐色土：焼土を含む。

0 1:30 1 m

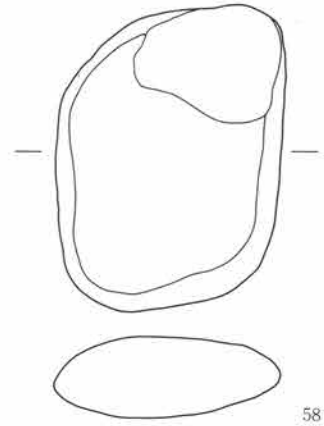
第31図 3区5号住居跡竈平面図・断面図



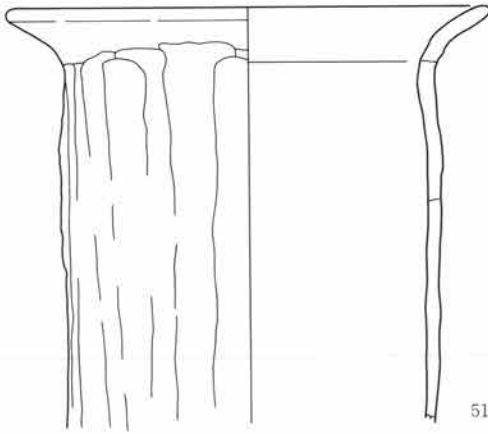
第32図 3区5号住居跡出土遺物①



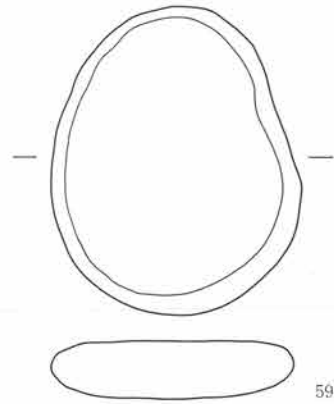
50



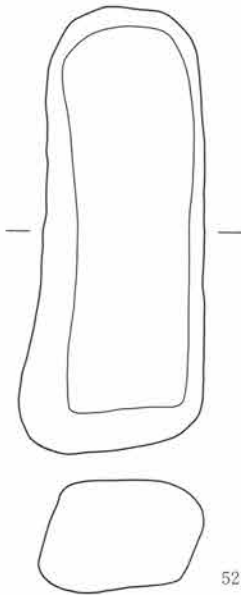
58



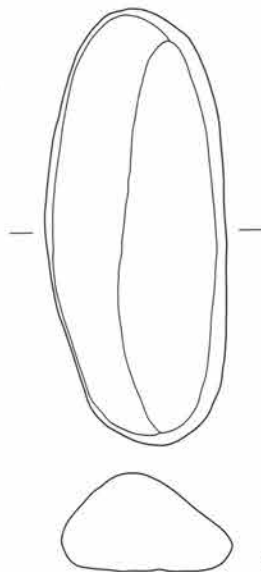
51



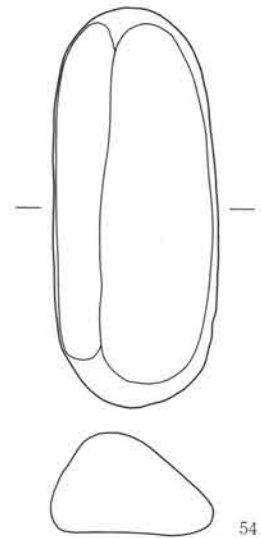
59



52



53



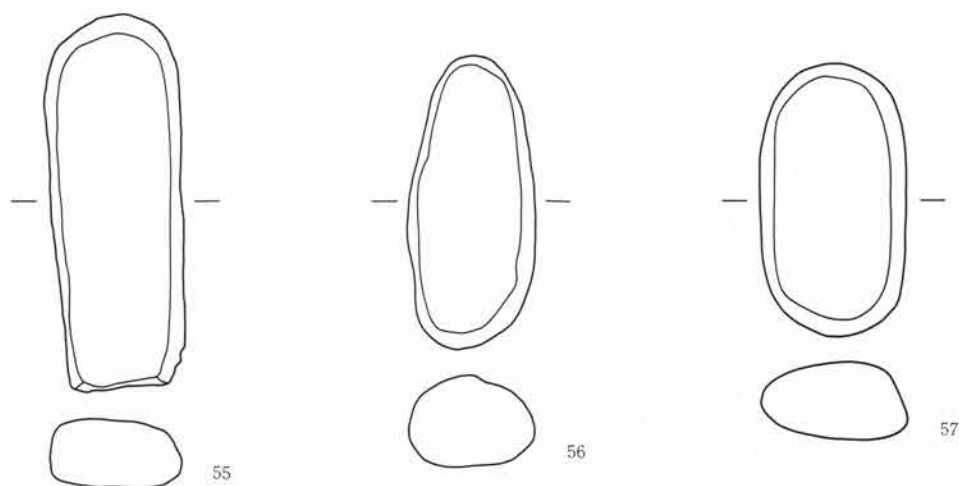
54

第33図 3区5号住居跡出土遺物②

0 1:3 6 cm



第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3区5号住)



第34図 3区5号住居跡出土遺物③

0 1:3 6 cm

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
043	杯 土師器	器高:50mm 口径:137mm 底径:— ほぼ完形。	径1~2mmの砂粒を含む。硬質。酸化。鈍い橙。	外面口縁部下端に稜を持ち、中央部が僅かに膨らむ。丸底。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	住居内北東部。
044	杯 土師器	器高:40mm 口径:133mm 底径:— 口縁部~底部4/5残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。橙。	外面口縁部下端に稜を持ち、口縁部は僅かに内湾。丸底。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	南壁中央脇。
045	杯 土師器	器高:44mm 口径:136mm 底径:— 口縁部~底部1/2残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	外面口縁部下端に稜。丸底。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	住居内北東部柱穴他。
046	杯 土師器	器高:43mm 口径:(120mm) 底径:— 口縁部~底部2/5残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。橙。	外面口縁部下端に稜。丸底。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	住居内北東部。
047	杯 土師器	器高:41mm 口径:(130mm) 底径:— 口縁部~底部2/5残。	径1~2mmの砂粒を含む。軟質。酸化。鈍い橙。	外面口縁部下端に稜。丸底。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	住居内北東部他。
048	杯 土師器	器高:[103mm] 口径:206mm 底径:— 底部一部欠。	径2~3mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。明黄褐色。	外面口縁部下端に稜。丸底。内面:口縁部~体部上半は横なで、体部下半~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	住居内南東部。
049	甔 土師器	器高:111mm 口径:(224mm) 孔径:(37mm) 口縁部~体部2/5残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	外面口縁部下端に稜、口縁部は僅かに外湾。内面:口縁部は横なで、体部はなで。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り。	住居内中央部。

第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
050	甕 土師器	器高:[162mm] 口径: 236mm 底径:— 口縁 部~体部上半残。	径5~7mmの小石、及び 砂粒を含む。軟質。酸 化。橙。	口縁部は外湾。内面:口縁部は横なで、 体部上半は篋なで。外面:口縁部は横な で、体部上半は篋削り。	竈前。外面に油煙 付着。
051	甕 土師器	器高:[167mm] 口径: 196mm 底径:— 口縁 部~体部上半残。	径5~7mmの小石、及び 砂粒を含む。軟質。酸 化。鈍い橙。	口縁部は外湾。内面:口縁部は横なで、 体部上半は篋なで。外面:口縁部は横な で、体部上半は篋削り。	住居内中央部。内 外面に油煙付着。
052	薦石	長:180mm 幅:76mm 厚:48mm 重:1060 g	砂岩。		住居内覆土。
053	薦石	長:175mm 幅:73mm 厚:43mm 重:840 g	粗粒安山岩。		住居内覆土。
054	薦石	長:160mm 幅:67mm 厚:44mm 重:720 g	粗粒安山岩。		住居内覆土。
055	薦石	長:149mm 幅:54mm 厚:28mm 重:300 g	砂岩。		住居内覆土。
056	薦石	長:117mm 幅:52mm 厚:38mm 重:360 g	粗粒安山岩。		住居内覆土。
057	薦石	長:109mm 幅:59mm 厚:33mm 重:340 g	粗粒安山岩。		住居内覆土。
058	薦石	長:123mm 幅:93mm 厚:33mm 重:510 g	粗粒安山岩。		住居内覆土。
059	薦石	長:124mm 幅:102mm 厚:26mm 重:510 g	粗粒安山岩。		住居内覆土。

### 3区6号住居跡

当住居跡は、3区5号住居跡・3区10号住居跡・3区1号溝・3区2号溝と重複する。3区5号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の北東部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。3区10号住居跡との新旧関係は、当住居跡の北西部分の床上から同住居跡の南東部分の壁・床が検出されたことから、当住居跡の方が古い。3区1号溝との新旧関係は、同溝が当住居跡の北東隅から南にかけての壁・床を破壊していることから当住居跡の方が古い。3区2号溝との新旧関係は、同溝が当住居跡の西部分の壁・床を破壊していることから当住居跡の方が古い。

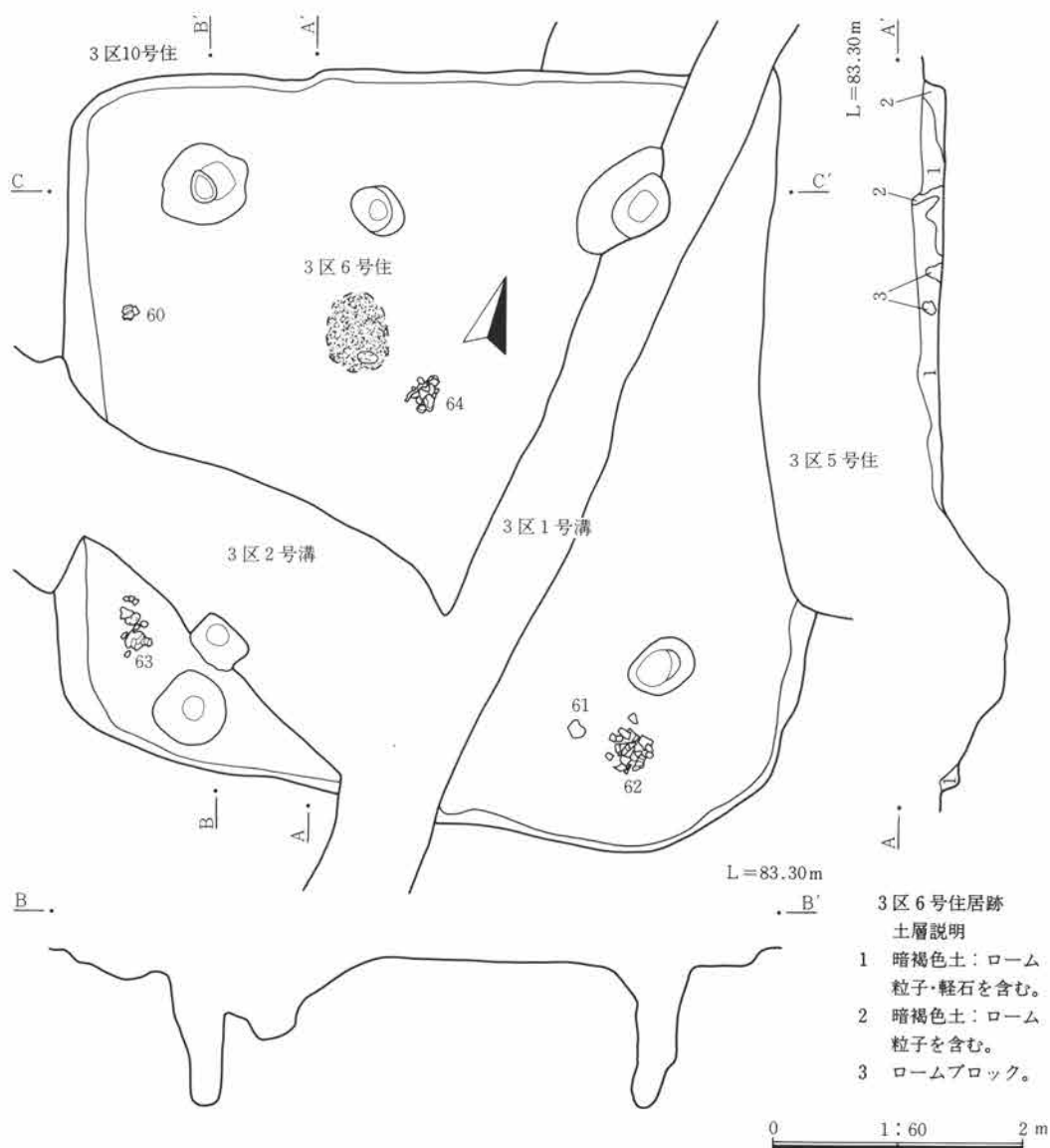
当住居跡の規模は、東西約6.0m・南北約5.5~6.2mであり、平面形は台形を呈する。主軸はN-79°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約10~15cmである。床面は硬く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

炉は、住居内中央部のやや北西よりに築かれており、囲みに使用した河原石と焼土を検出する

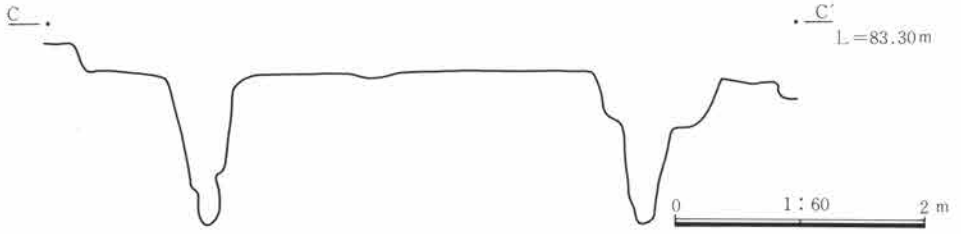
第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3区5・6号住)

ことができた。主柱穴は4基である。規模は、径50~100cm・床面からの深さ約100~120cmを測り、平面形は、不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。北側柱穴の中間から1基、南西隅から1基、計2基のピットが検出できたが、床面からの深さが約5cmと浅く、形態も皿状であり、柱穴・貯蔵穴とは考えられない。

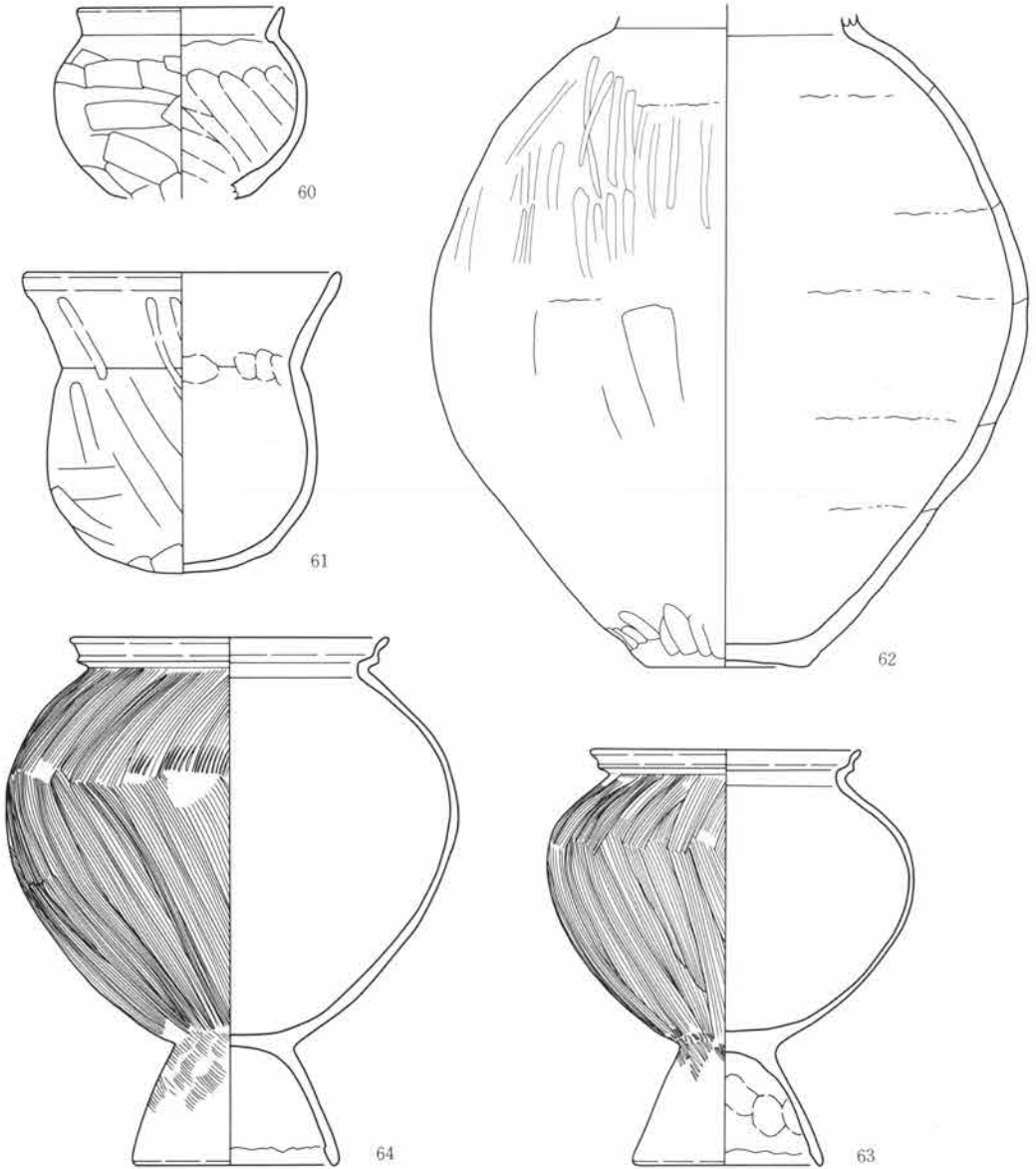
遺物は土師器の甕・台付甕・埴などが出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀後半である。



第35図 3区6号住居跡



第36図 3区6号住居跡エレベーション図



第37図 3区6号住居跡出土遺物

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3区6・7号住)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
060	甕 土師器	器高:[77mm] 口径: (84mm) 底径:— 最大 径:(104mm) 口縁部 ~体部2/5残。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。鈍 い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体 部上半。内面:口縁部は横なで、体部は 指なで。外面:体部上端は横なで、体部 は篋削り。	住居内北西部床上 10cm。
061	埴 土師器	器高:121mm 口径: (130mm) 底径:— 口 縁部~底部1/2残。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。丸底。内面: 口縁部は横なで、頸部に指頭痕、体部~ 底部はなで。外面:口縁端部は横なで、 口縁部は横なで後縦篋なで、体部~底 部は篋なで。	住居内南東部床上 10cm。
062	甕 土師器	器高:[261mm] 口径: — 底径:69mm 最大 径:243mm 口縁部下 端~底部4/5残。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。鈍 い橙。	口縁部は外湾。最大径は体部中央。内 面:体部~底部はなで。外面:体部はな で後篋磨き、底部は篋なで。	住居内南東部隅床 直。内外面に油煙 付着。
063	台付甕 土師器	器高:168mm 口径:110 mm 脚径:77mm 最大 径:149mm 口縁部~脚 部4/5残。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。浅 黄橙。	口縁部は「S」字状。脚部下端は折返し。 最大径は体部上半。内面:口縁部は横な で、体部~底部はなで、脚部は指なで。 外面:口縁部は横なで、体部~脚部上 端は縦刷毛目、脚部はなで。	住居内南西部隅床 上10cm。内外面に 油煙付着。
064	台付甕 土師器	器高:213mm 口径:130 mm 脚径:84mm 最大 径:183mm 口縁部~脚 部4/5残。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。浅 黄橙。	口縁部は「S」字状。脚部下端は折返し。 最大径は体部上半。内面:口縁部は横な で、体部~脚部はなで。外面:口縁部は 横なで、体部は縦刷毛目、脚部は刷毛 目後なで。	住居内中央部床直 (炉東)。内外面に 油煙付着。

### 3区7号住居跡

当住居跡は、3区8号住居跡・3区13号住居跡・3区14号住居跡と重複する。3区8号住居跡との新旧関係は、当住居跡が同住居跡の北西部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が新しい。3区13号住居跡との新旧関係は、直接的に確認することはできなかったが、出土遺物から当住居跡の方が古い。3区14号住居跡との新旧関係は、当住居跡が同住居跡の北東部分の壁・床を破壊していることから当住居跡の方が新しい。

当住居跡の規模は、東西約4.8m・南北約4.4mであり、平面形は、隅丸長方形を呈する。主軸はN-42°-Wである。確認面までの壁の立ち上がりは、約30cmであり、残存状態は比較的良好である。床面は、竈周辺を中心にして硬く、平坦である。壁溝は、竈部と南東部を除き検出できた。規模は、幅約10~20cm・床面からの深さは約5~10cmである。

竈は、北壁の中央部やや西よりに築かれている。袖の先端部は河原石を地山に埋め込み固めている。煙道部の壁外への張り出しは約90cmである。燃焼部・煙道部からは焼土が確認できた。竈

の右隣からは、壁外への張り出し約80cmの煙道と床面からの深さ約15cmの燃焼部の掘り込みが検出できた。竈の作り替えと考えられる。住居内からは5基のピットが検出できたが、柱穴の形態を持つものは北東部のピットだけであり、住居内に柱穴はないものと考えられる。貯蔵穴と考えられるピットは、北西隅から検出できた。規模は、長軸約80cm・短軸約60cm・床面からの深さ約60cmであり、平面形は、不定形である。

遺物は、土師器の竈周辺から甕・甑・杯などが出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は6世紀後半である。

### 3区8号住居跡

当住居跡は、3区7号住居跡・3区10号住居跡・3区13号住居跡・3区14号住居跡と重複する。3区7号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の北西部の壁・床を破壊していることから当住居跡の方が古い。3区10号住居跡との新旧関係は、不明である。3区13号住居跡との新旧関係は、当住居跡の南西部の床上に同住居跡の床が築かれていることから、当住居跡の方が古い。3区14号住居跡との新旧関係は不明である。

当住居跡の規模は、北西部を3区7号住居跡により破壊されているが、東西約4.3m・南北約5.3mであり、平面形は、隅丸長方形を呈する。主軸はN-25°-Wである。確認面までの壁の立ち上がりは、約10~15cmであり、残存状態は悪い。床面は、比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

炉・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。遺物は、住居内の南東隅から土師器の埴が出土しているだけである。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀後半である。

### 3区13号住居跡

当住居跡は、3区7号住居跡・3区8号住居跡・3区10号住居跡・3区14号住居跡と重複し、新旧関係はすべて当住居跡が新しい。また、3区9号住居跡に40cm、3区12号住居跡に1.8mと近接する。

規模・平面形は不明である。残存壁高は5~8cmであり、残存状態は悪い。主軸方位はN-145°-Eである。柱穴はなく、周溝は不明である。

竈は南壁西隅に構築され、壁外に約40cm張り出している。竈付近からは須恵器椀(70)・土釜(71)・羽釜(72)が出土している。

貯蔵穴は竈の西、住居の南西隅に構築されている。平面形は短軸約50cm・長軸約80cmの不整楕円形を呈する。深さは15cmである。貯蔵穴に近接して須恵器椀(93)が出土している。

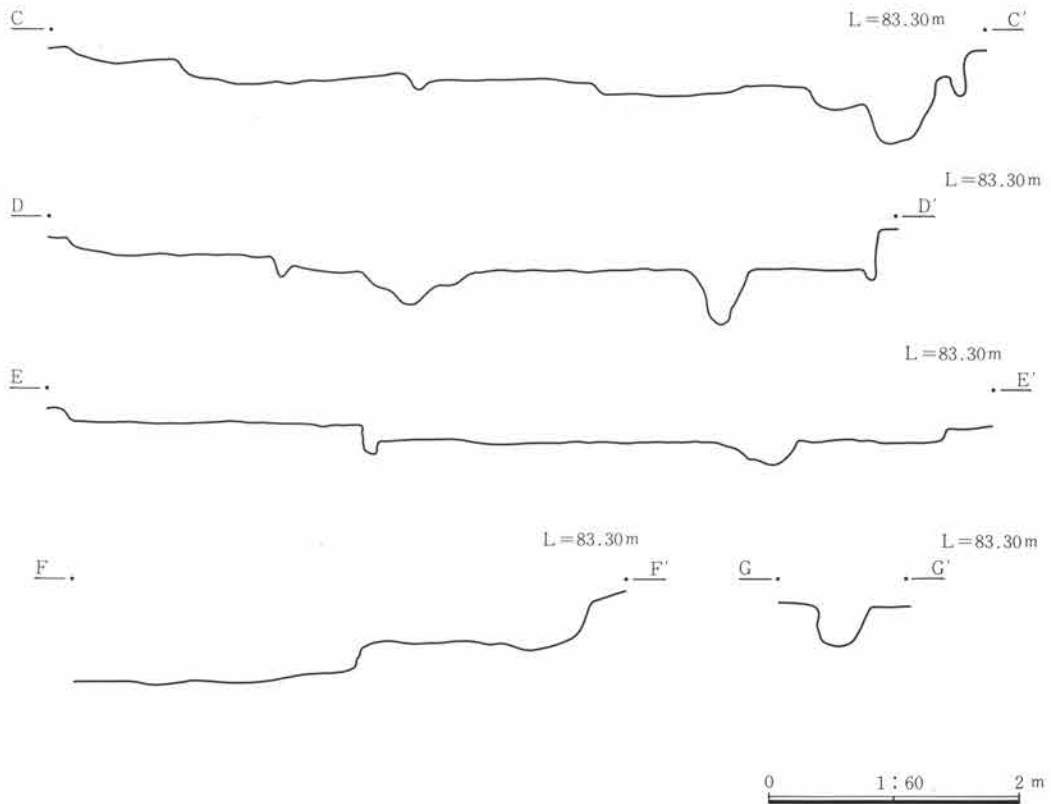
### 3区14号住居跡

当住居跡は、3区7号住居跡・3区8号住居跡・3区13号住居跡と重複する。3区7号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の北東部の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。3区8号住居跡との新旧関係は不明である。3区13号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の南東部の壁を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

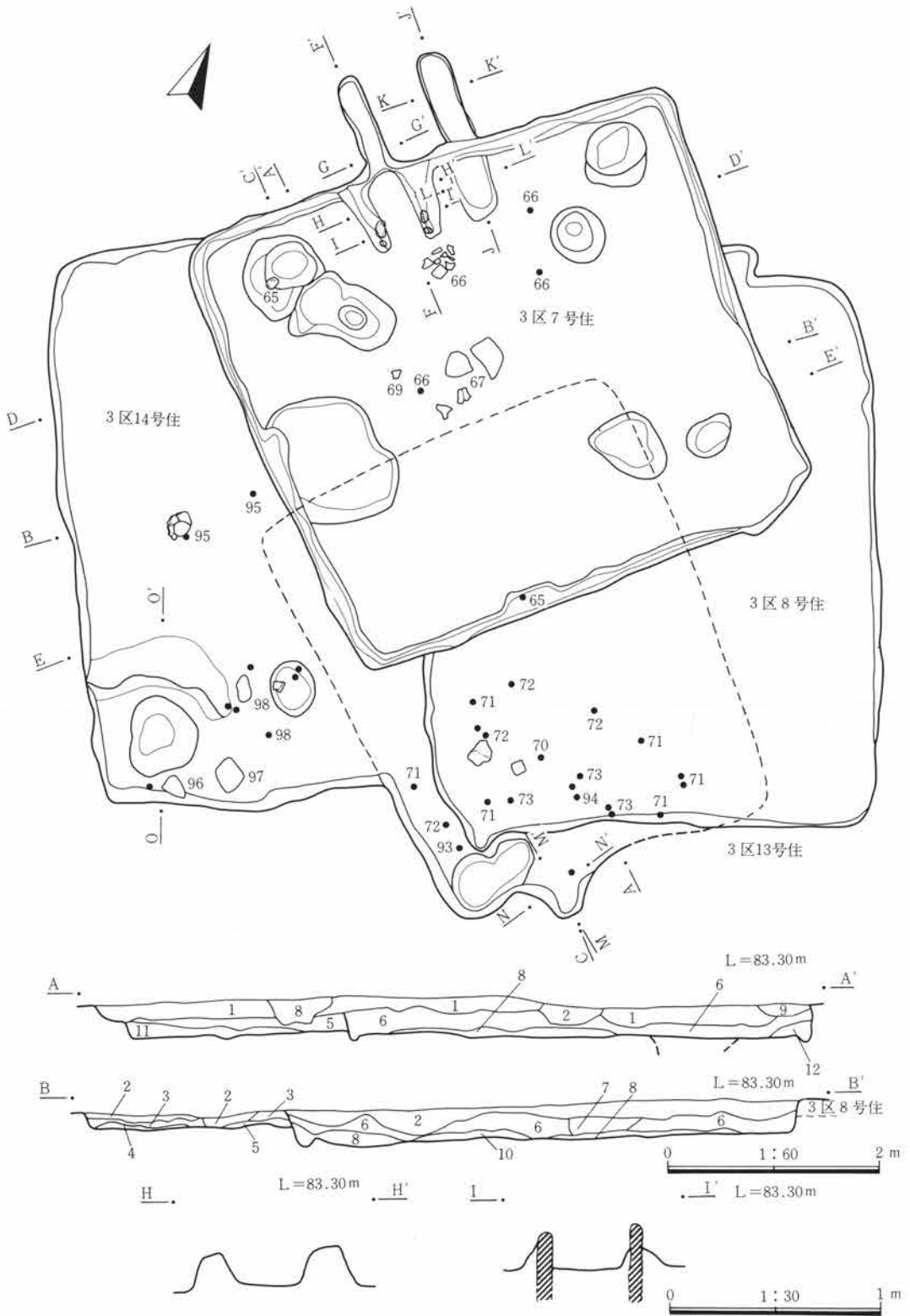
当住居跡の規模は、3区7号住居跡・3区13号住居跡に破壊されており確定できないが、南北約5.3mであり、平面形は、隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈すると推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約5～10cmであり、残存状態は悪い。床面は比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

炉・柱穴は検出できなかった。住居跡内からは、2基のピットが検出できた。南西隅から検出できたピットは、貯蔵穴と考えられる。規模は、長軸約75cm・短軸約60cm・床面からの深さ約50cmであり、平面形は、不整形な楕円形を呈する。

遺物は、土師器の甕・壺・脚付甕・高杯が出土している。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は5世紀前半である。



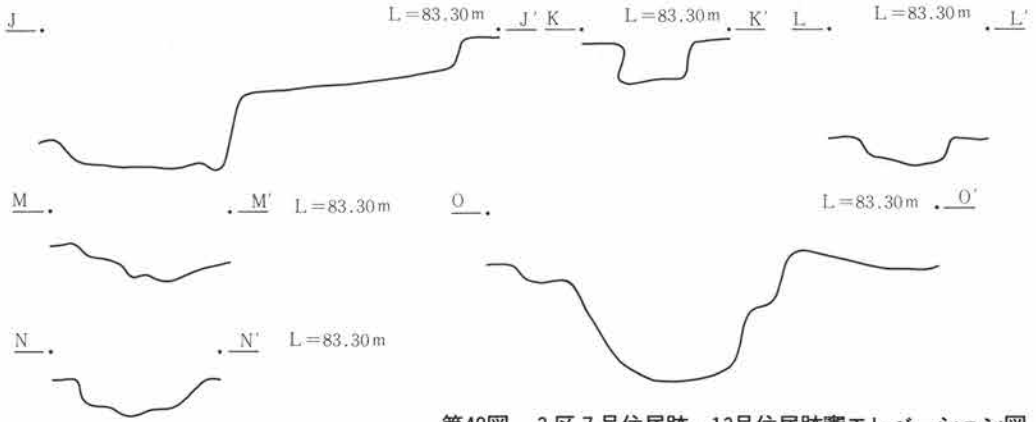
第38図 3区7号住居跡・8号住居跡・13号住居跡・14号住居跡エレベーション図



第39図 3区7号住居跡・8号住居跡・13号住居跡・14号住居跡



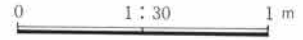
第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3区7・8・13・14号住)



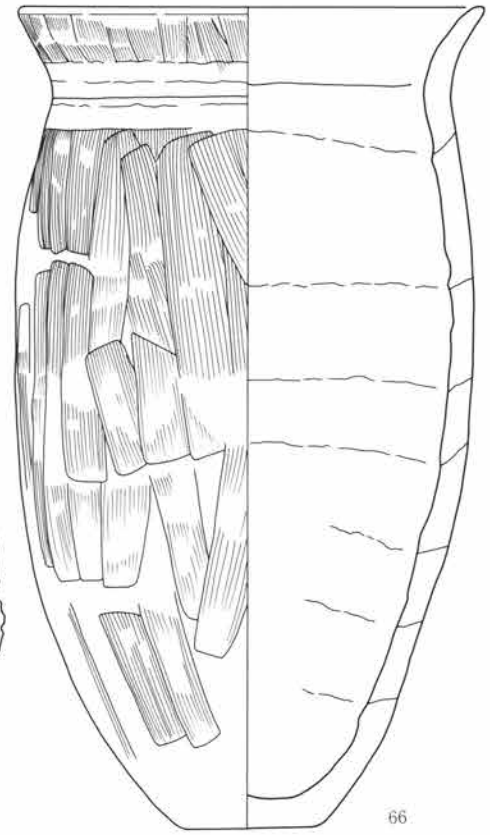
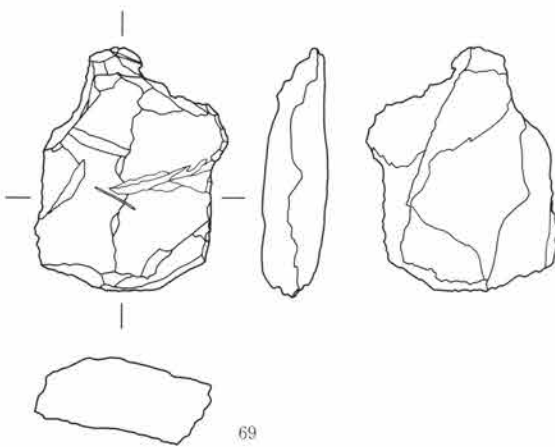
第40図 3区7号住居跡・13号住居跡竈エレベーション図、  
14号住居跡貯蔵穴エレベーション図

3区7号・3区8号・3区13号・

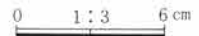
3区14号住居跡土層説明

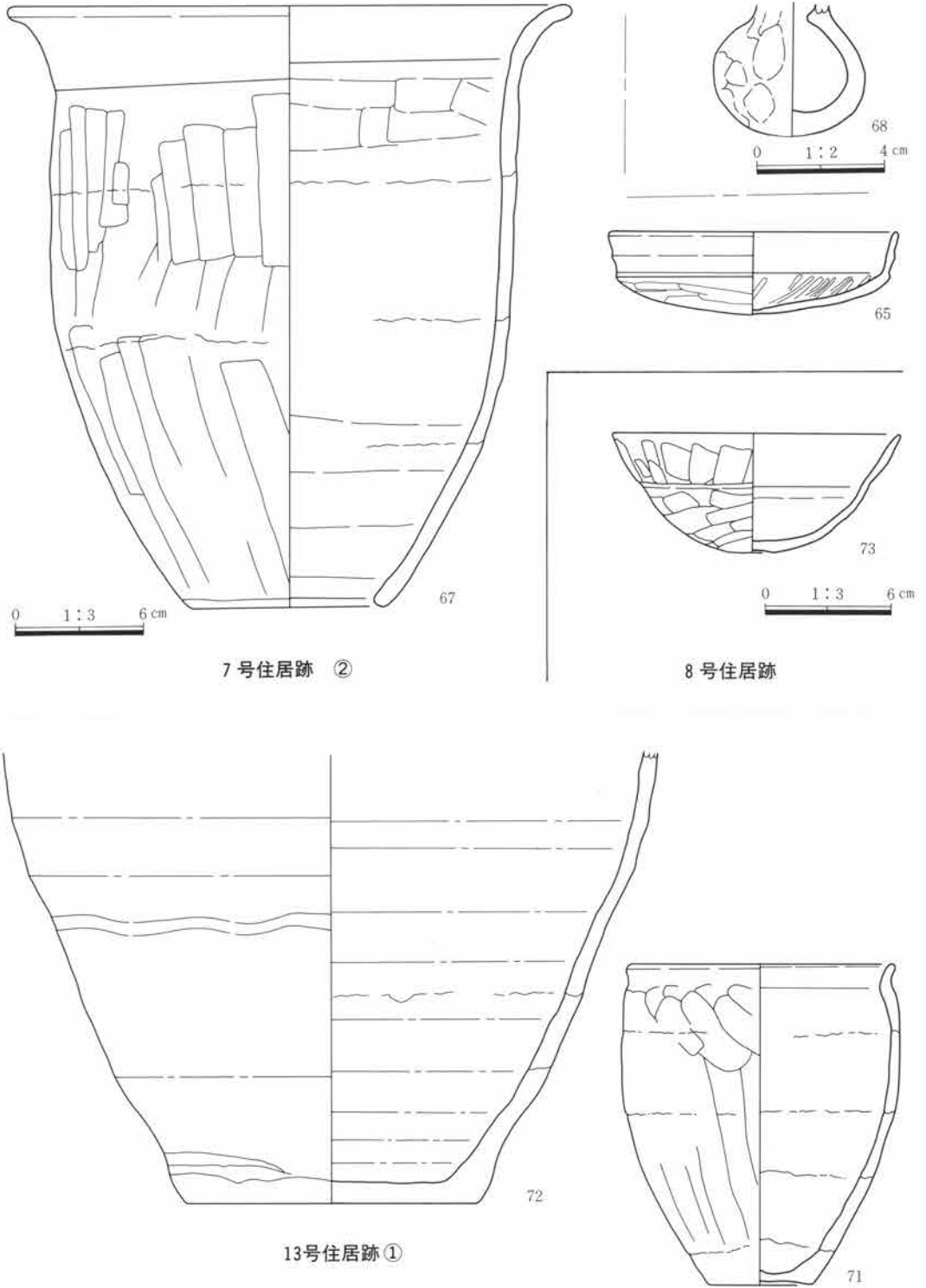


- 1 暗褐色土：軽石を含み、粒子は粗い。
- 2 褐色土：少量の軽石を含み、粒子は粗い。
- 3 褐色土：ローム粒子・焼土粒子・炭化物を含む。
- 4 褐色土：ロームブロックを含む。
- 5 暗褐色土：やや粘性が強い。
- 6 暗褐色土：ローム粒子・焼土粒子・炭化物を含む。
- 7 暗褐色土：軽石を含み、やや粘性が強い。
- 8 黒色土：やや粘性が強い。
- 9 褐色土：浅間A軽石を含む。
- 10 褐色土：ローム粒子を含む。
- 11 暗褐色土：ローム粒子・ロームブロックを含む。
- 12 灰・ロームブロック。



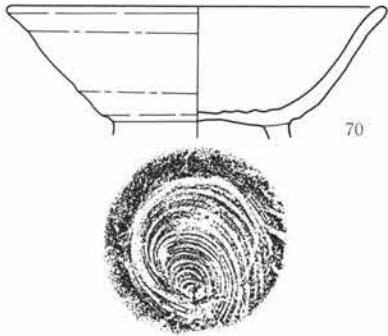
第41図 3区7号住居跡出土遺物①



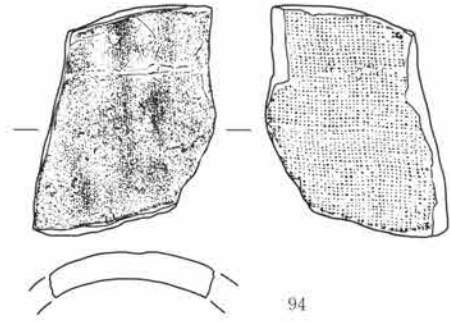


第42図 3区7号住居跡出土遺物②、8号住居跡出土遺物、13号住居跡出土遺物①

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3区7・8・13・14号住)

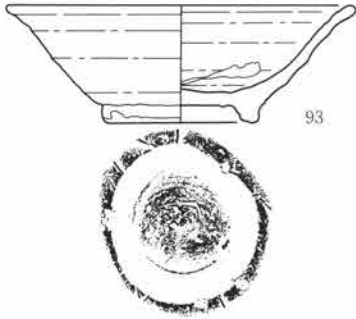


70

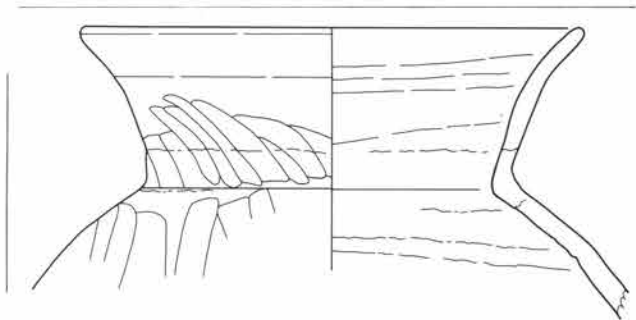


94

0 1:3 6 cm

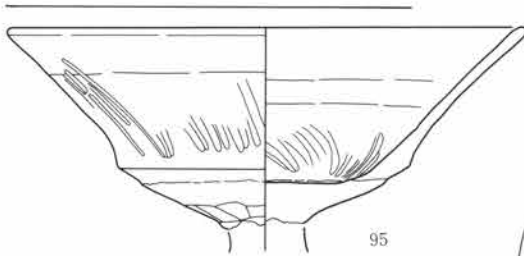


93

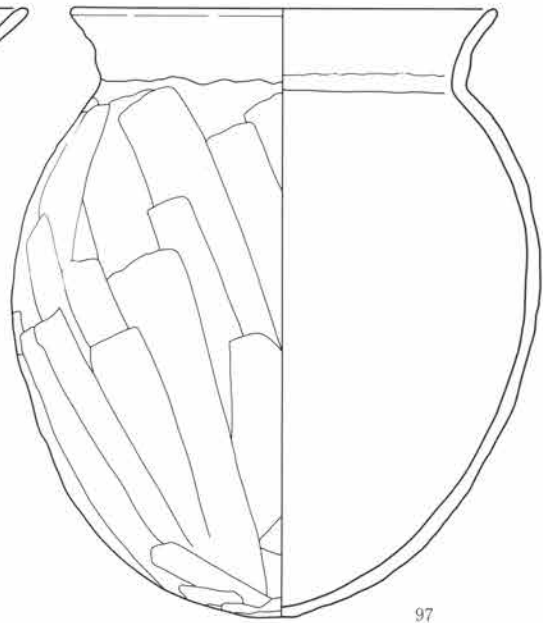


98

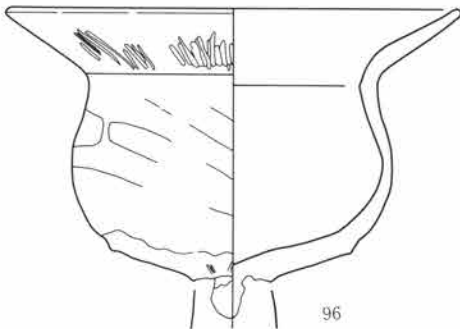
13号住居跡出土遺物②



95



97



96

14号住居跡出土遺物

第43図 3区13号住居跡出土遺物②、14号住居跡出土遺物

0 1:3 6 cm

第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
065	杯 土師器	器高:38mm 口径:135mm 底径:— 口縁部～底部2/3残。	径2～3mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。鈍い橙。(油煙付着のため赤黒)	外面口縁部下端に稜。丸底。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで後篋磨き。外面:口縁部は横なで、体部～底部は篋削り。	北西部貯蔵穴内他。内外面に油煙付着。
066	甕 土師器	器高:329mm 口径:188mm 底径:57mm ほぼ完形。	径4～5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	口縁部は外湾。最大径は口縁部。内面:口縁部は横なで、体部～底部は篋なで。外面:口縁部は横なで後刷毛目、体部は篋削り後刷毛目。	竈前床直。外面に多量の油煙付着。
067	甔 土師器	器高:280mm 口径:(264mm) 孔径:78mm 口縁部～体部4/5残。	径4～5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は外湾。最大径は口縁部。内面:口縁部は横なで、体部は篋なで。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り後なで。	住居内中央部床直。
068	壺 土師器	器高:[41mm] 口径:— 底径:— 体部～底部残。	砂粒を含む。やや硬質。酸化。灰。	球形。丸底。内面:体部～底部はなで。外面:体部～底部は指なで、指頭痕が残る。	住居内覆土。外面に油煙付着。
069	原石	98mm×71mm×34mm 重:220g	滑石。	玉製作用の石か?	住居内中央部床上5cm。

番号	器種 土師器	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
073	埴 土師器	器高:55mm 口径:134mm 底径:20mm 口縁部～底部4/5残。	径1～2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。灰褐。	口縁部は僅かに外湾し、内面口縁部下端に不明瞭な稜を持つ。丸底に近い平底。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで。外面:口縁部は横なで後篋なで。体部～底部は篋削り。	住居内南西部床直。内外面に油煙付着。

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
070	椀 須恵器	器高:48mm 口径:154mm 底径:78mm 高台・口縁の一部欠。	細砂多く含む。粗砂・径3mmの礫少量含む。軟質。鈍い褐。	口縁部ゆるく外反する。貼り付け高台。底部外面右回転糸切り無調整。	南西隅。
071	土 釜	器高:149mm 口径(127mm) 底径:(47mm) 1/3残。	細砂～径3mmの礫含む。やや硬質。黒褐。	口縁部小さく外反する。口縁部は横なで。体部内面回転横なで。体部外面は篋削り。	南西隅。
072	羽 釜	器高:[211mm] 底径:145mm 胴部～底部1/2残。	細砂多く含む。粗砂含む。やや軟質。灰白。	内外面回転横なで。体部下端は篋削り後なで。内面に紐造り痕残る。	
093	椀 須恵器	器高:47mm 口径:142mm 底径:67mm 口縁部2/3欠。	細砂～径5mmの礫含む。普通。鈍い橙。	口縁部は外反する。高台は雑に貼り付けている。底部外面右回転糸切り無調整。	貯蔵穴。

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3区7・8・9・13・14号住)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
094	丸瓦	厚さ:8~12mm	細砂多く含む。粗砂少量含む。軟質。鈍い橙。	表面に布目有り。裏面は篋なで。	竈。乗付製か?。8C。

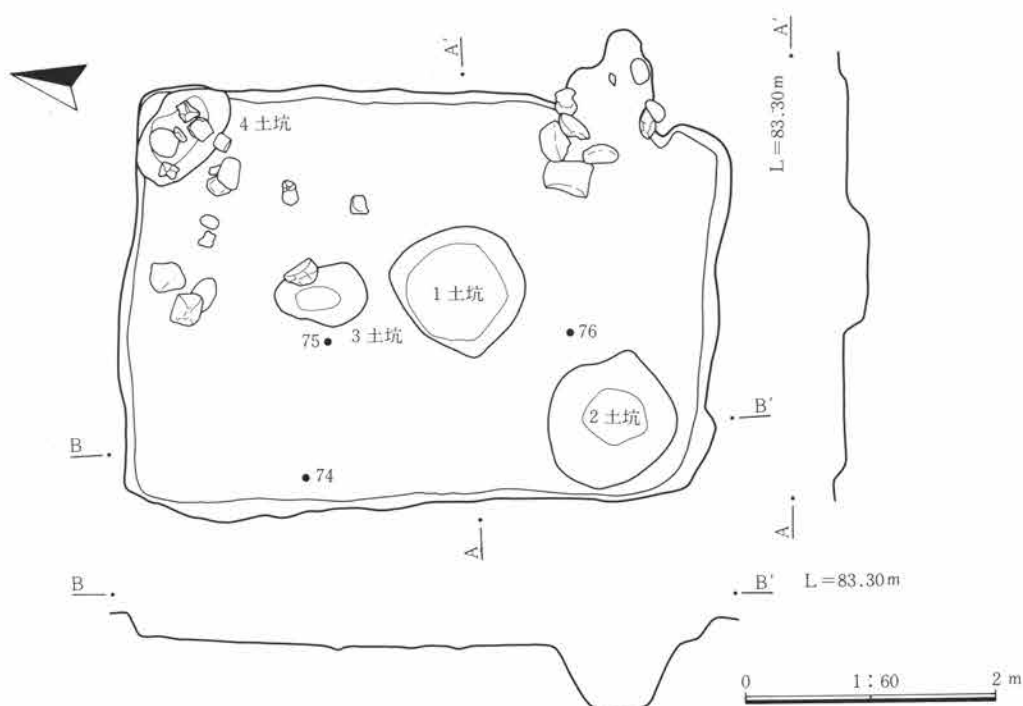
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
095	高杯 土師器	器高:[81mm] 口径:210mm 脚径:— 口縁部~底部2/3残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い黄橙。	体部~口縁部は直線的に広がり、外面体部下端に稜を持つ。内面:口縁部は横なで、体部~底部は篋磨き。外面:口縁部は横なで、体部は篋磨き、底部上半はなで、底部下半は篋削り。	中央部床直。内外面に油煙付着。
096	脚付甕 土師器	器高:[124mm] 口径:184mm 脚径:— 口縁部~底部2/3残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。赤褐。	口縁部は「く」字状に大きく外湾。球体形。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで後篋磨き、体部~底部は篋なで。	住居内南西部隅床上5cm。内外面に油煙付着。
097	甕 土師器	器高:245mm 口径:172mm 底径:— 最大径:214mm ほぼ完形。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。暗赤褐。	口縁部は「コ」字状に外湾。丸底。内面:口縁部は篋削り後なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	住居内南西部床直。内外面に多量の油煙付着。
098	壺 土師器	器高:[116mm] 口径:204mm 底径:— 口縁部~体部上半残。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで。外面:口縁部上半は横なで、口縁部下半は横なで後篋なで。体部上半は篋なで。	住居内南西部床直。

### 3区9号住居跡

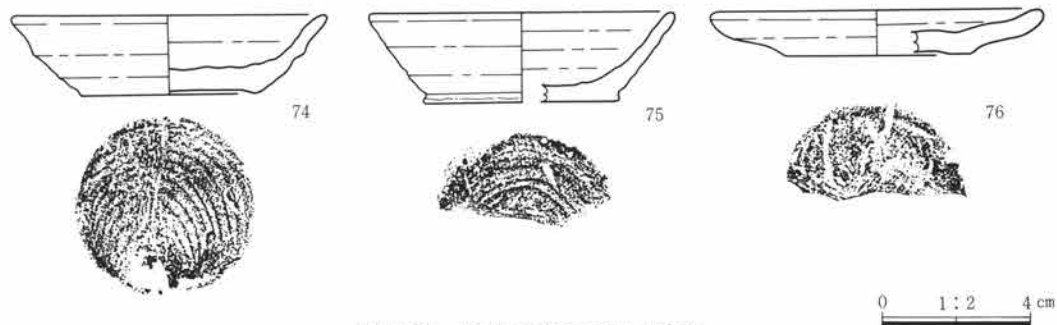
当住居跡は、3区10号住居跡・3区12号住居跡と重複し、3区6号住居跡に20cm・3区13号住居跡に40cmと近接する。重複関係は当住居跡が3区10・12号住居跡よりも新しい。

規模は東西約3.2m・南北約4.8mであり、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-81°-Eである。残存壁高は6~8cmであり、残存状態は悪い。柱穴は認められない。住居内には土坑が4基存在するが、3土坑は住居に伴わない可能性が高く、1土坑は床下土坑と思われる。深さは1土坑が20cm、2土坑が50cm、3土坑が44cm、4土坑が18cmを測る。周溝は認められない。

竈は東壁南隅に構築されている。燃焼部は壁外にあり、煙道は壁外に58cm張り出している。袖端部には一對の石を用いている。竈前から北東隅にかけて竈に使用されたと考えられる石材が散乱している。



第44図 3区9号住居跡

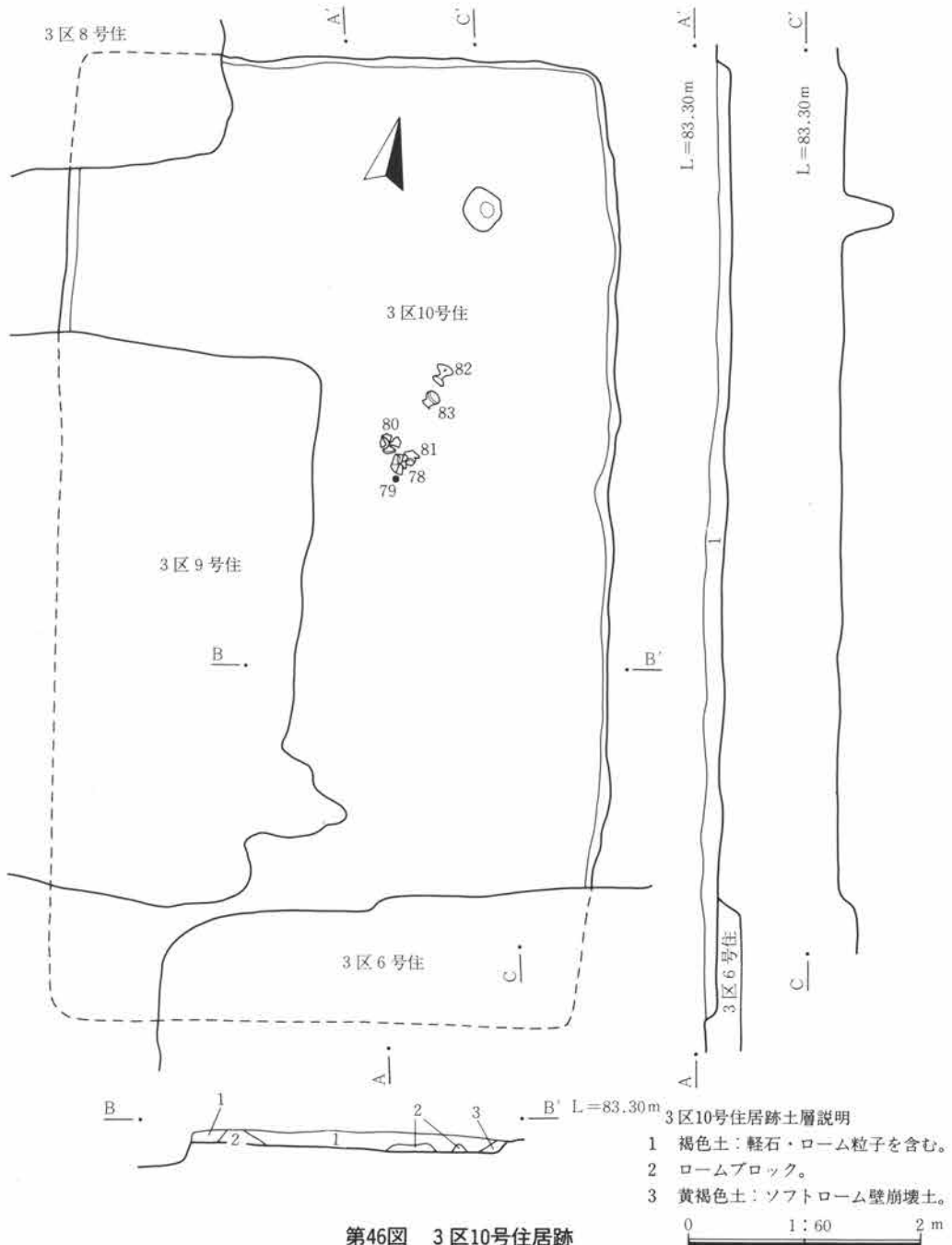


第45図 3区9号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
074	皿 土師質土器	器高:21mm 口径:(85mm) 底径:48mm 口縁部1/2欠。	細砂・礫含む。普。鈍い黄橙。	口縁部ゆるく外反する。体部外面轆轤目残る。底部外面右回転糸切り無調整。	北西隅。
075	皿 土師質土器	器高:24mm 口径:(83mm) 底径:(53mm) 1/3残。	粗砂・礫多く含む。やや軟質。浅黄橙。	口縁部直線的に延びる。底部外面右回転糸切り無調整。	中央。
076	皿 土師質土器	器高:12mm 口径:(90mm) 底径:(50mm) 1/3残。	細砂・礫含む。やや軟質。浅黄橙。	非常に浅い皿形を呈する。体部外湾する。口縁部内湾する。底部外面右回転糸切り無調整。	南西隅。

3区10号住居跡

当住居跡は、3区6号住居跡・3区8号住居跡・3区9号住居跡と重複する。3区6号住居跡との新旧関係は、同住居跡の北西部の床上に当住居跡の壁・床が築かれていることから、当住居跡の方が新しい。3区8号住居跡との新旧関係は不明である。3区9号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当



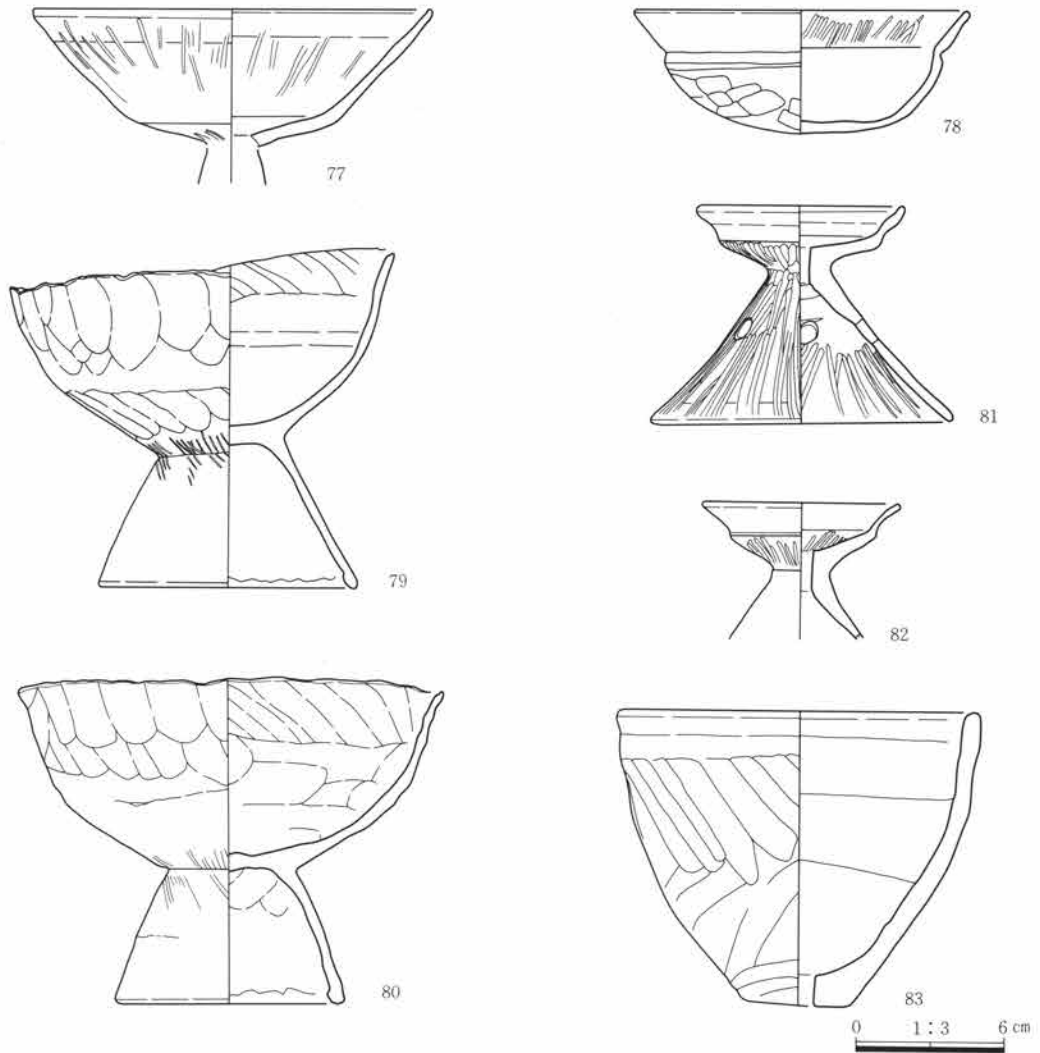
第46図 3区10号住居跡

住居跡の南西部の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、東西約4.7m・南北約8.3mであり、平面形は、細長い隅丸長方形を呈する。主軸はN-12°-Wである。確認面までの壁の立ち上がりは、約5~10cmであり、残存状態は悪い。床面は、比較的硬く、平坦である。壁溝は検出できなかった。

住居内の北東部からはピットが1基検出できた。規模は、長軸約35cm・短軸約30cm・床面からの深さ約45cmであり、平面形は、不整形な楕円形を呈する。ピットの形態は柱穴であるが、1基しか検出できず、柱穴と確定することはできない。炉・貯蔵穴は検出できなかった。

遺物は、土師器の甑・高杯・杯・器台などが出土している。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀後半である。



第47図 3区10号住居跡出土遺物



第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3区10・11号住)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
077	高杯 土師器	器高:[55mm] 口径: 162mm 脚径:一 口縁 部~底部残。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。橙。	体部~口縁部は直線的に広がる。内面: 口縁部は横なで、体部は横なで後縦 磨き、底部はなで。外面:口縁部~体部 は横なで後縦磨き、底部はなで。	住居内南東部。内 外面に油煙付着。
078	杯 土師器	器高:49mm 口径:135 mm 底径:一 口縁部 ~底部4/5残。	径1~2mmの砂粒を含 む。軟質。酸化。鈍い黄 橙。	内面口縁部下端に稜を持つ。丸底。内 面:口縁部は横なで後磨き、体部~底 部はなで。外面:口縁部は横なで、体部 ~底部は磨削り。	住居内中央部床 直。内外面に油煙 付着。
079	高杯 土師器	器高:136mm 口径:155 mm 脚径:105mm 口縁 部~脚部4/5残。	径1~2mmの砂粒を含 む。軟質。酸化。鈍い黄 橙。	脚部下端は折り返し。内面:口縁部~底 部は横なで、一部磨なで、脚部はなで。 外面:口縁部~体部は指なで、底部~脚 部上端は縦刷毛目、脚部はなで。全体的 な形は「S」字状口縁台付甕の下半分。	住居内中央部床 直。内外面に油煙 付着。二次焼成を 受けている。
080	高杯 土師器	器高:131mm 口径:172 mm 脚径:93mm 口縁 部~脚部4/5残。	径1~2mmの砂粒を含 む。軟質。酸化。鈍い黄 橙。	脚部下端は折り返し。内面:口縁部は縦 指なで、体部は横指なで、底部~脚部 は、指なで。外面:口縁部は縦指なで、体 部はなで、底部~脚部上端は刷毛目、脚 部はなで。全体的な形は「S」字状口縁 台付甕の下半分。	住居内中央部床 直。内外面に油煙 付着。二次焼成を 受けている。
081	器台 土師器	器高:87mm 口径:84mm 脚径:122mm ほぼ完 形。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。浅 黄橙。	外面口縁部下端に稜。口縁部は外湾し 口縁端部は僅かに内湾。底部は穿孔。脚 部に円形穿孔3カ所。内面:口縁部~体 部は横なで、底部はなで、脚部は横なで 後縦磨き。外面:口縁部は横なで、体 部~底部は縦磨き。	住居内中央部床 直。
082	器台 土師器	器高:[53mm] 口径: (80mm) 脚径:一 口 縁部~脚部上半2/3残。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。浅 黄橙。	外面口縁部下端に稜。口縁部は外湾。底 部は穿孔。内面:口縁部は横なで、体部 ~底部は横なで後磨き、脚部はなで。 外面:口縁部は横なで、体部~脚部上半 は縦磨き。	住居内中央部床 上 5cm。
083	瓶 土師器	器高:119mm 口径:146 mm 底径:45mm 孔径: 11mm 完形。	径5~10mmの小石及び 砂粒を含む。やや軟質。 酸化。灰黄。	口縁部はほぼ垂直。最大径は口縁部。内 面:口縁部~体部上半は横なで、体部下 半~底部はなで。外面:口縁部は横な で、体部~底部は磨なで。	住居内中央部床 上。内外面に油煙 付着。

3区11号住居跡

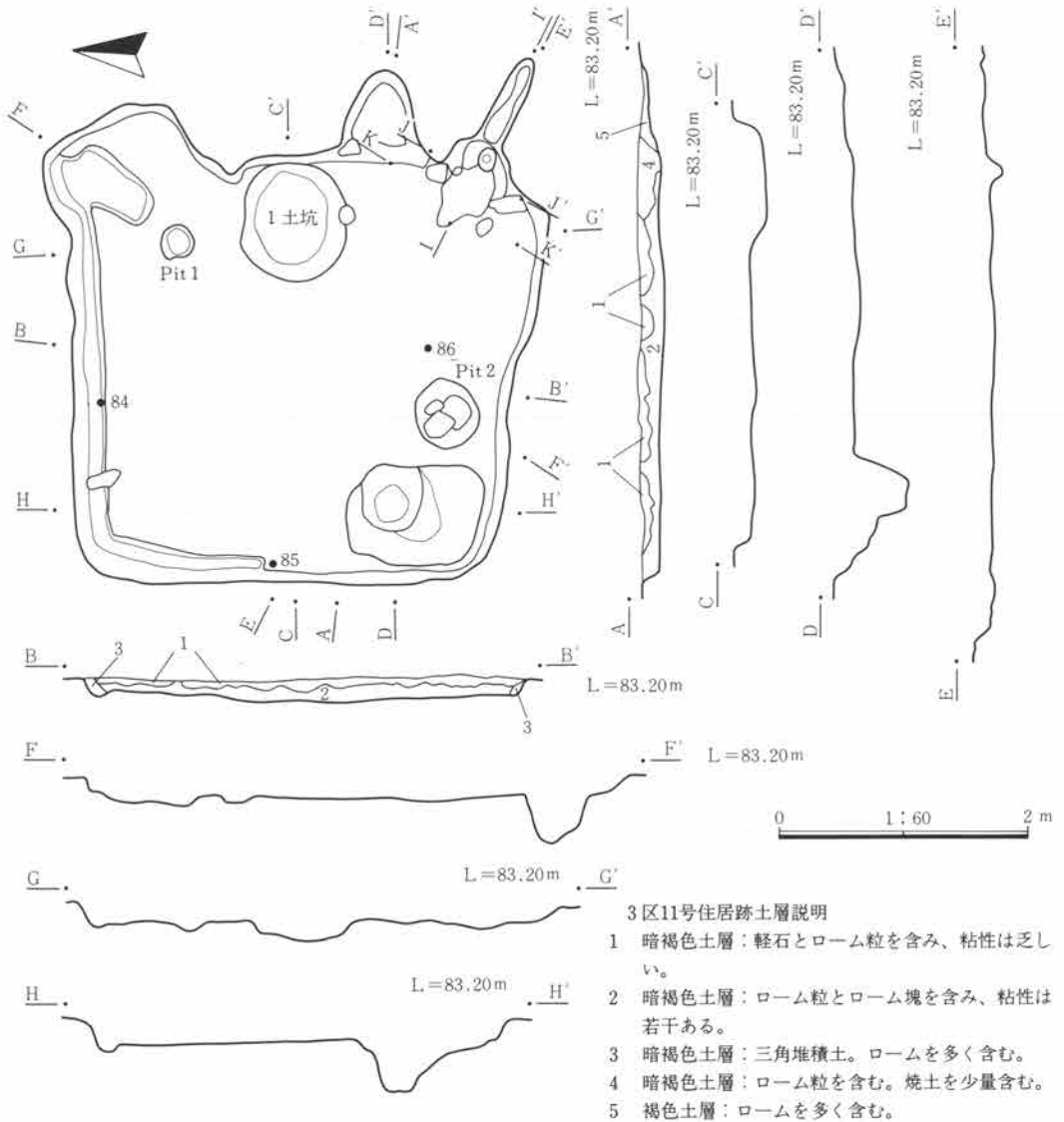
当住居跡は、2区5B号住居跡と竈煙道部先端が重複し、北東隅は土坑と重複する。新旧関係は2区5B号住居跡よりも当住居跡が新しいが、土坑との新旧関係は不明である。3区6号住居跡には1mと近接する。

規模は東西約3.4m・南北約3.5mであり、平面形は方形を呈する。主軸方位はN-88°-Eであ

る。残存壁高は12~20cmである。住居内には2基のピットと1基の土坑が確認されている。深さはピット1が38cm、ピット2が5cm、土坑1が8cmを測る。土坑は本住居には伴わないと思われる。周溝は北壁から西壁北半にかけて巡っている。

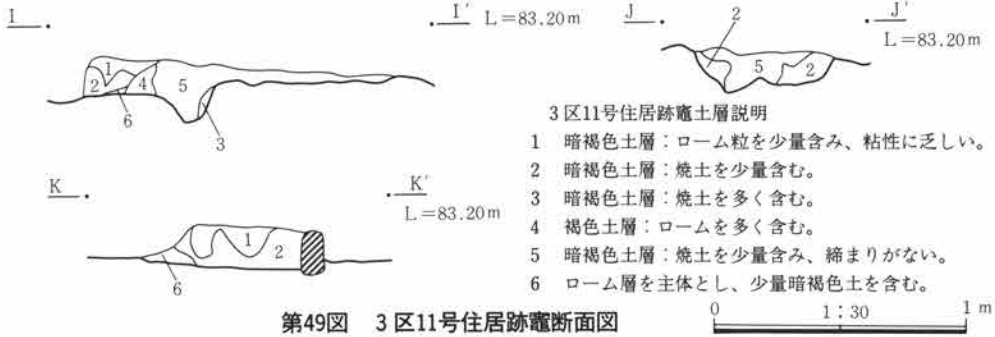
竈は南東隅に構築されている。燃燒部は壁外にあり、煙道端部は100cm壁外に張り出す。袖端部には一對の川原石を立てて焚口としている。焚口部分には黒色灰が認められた。出土遺物は少なく、須恵器椀と皿(84・85・86)の小片が認められた程度である。

貯蔵穴は南西隅にあり、短辺80cm、長辺108cmの長方形を呈し、深さは52cmを測る。底部形状は平坦ではなく、北が深くなっている。ピットと重複している可能性が高い。



第48図 3区11号住居跡

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3区11・12号住)



番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
084	碗 須恵器	器高:[27mm] 口径: (148mm) 口縁部1/6 残。	粗砂含む。やや軟質。酸化。灰白。	口縁部小さく外反する。内外面轆轤目 残る。口縁端部回転横なで。	北東隅。
085	碗 須恵器	器高:[45mm] 底部～ 胴部1/5残。	細砂・粗砂含む。軟質。 還元。黄灰。内面黒色。	胴部下位ゆるく内湾する。内面磨き・ 黒色処理。貼り付け高台。	西壁中央。
086	皿 土師質土 器	器高:[10mm] 底径:52 mm 底部1/2残。	細砂・粗砂含む。明黄褐 色粘土粒含む。酸化。灰 白色。	底部外面右回転糸切り無調整。	南壁中央。

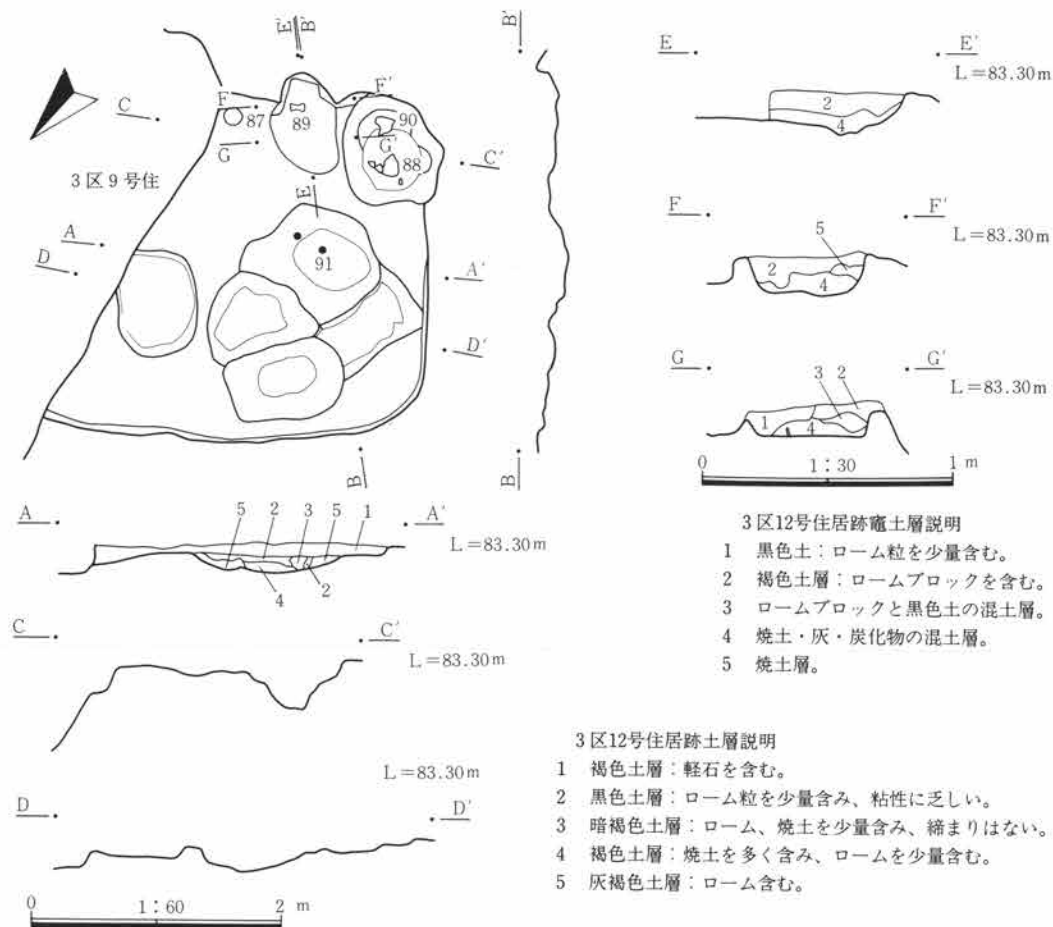
3区12号住居跡

当住居跡は、3区9号住居跡と重複し、新旧関係は当住居跡が古い。また、3区13号住居跡に1.8m、3区2号溝に30cmと近接する。

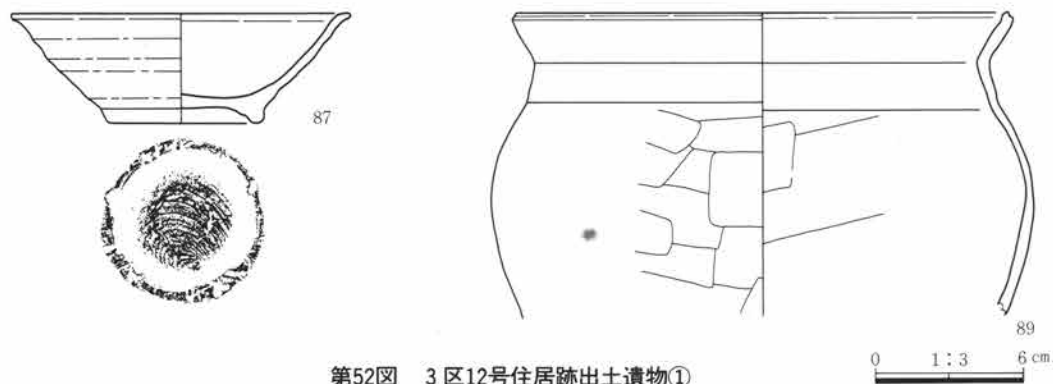
規模は短軸約2.7m・長軸3.0m以上を測り、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-143°-Eである。残存壁高は3~5cmと低く、残存状態は悪い。床の遺存は悪く、検出は困難であった。住居内で確認された土坑はいずれも床下土坑と考えられる。周溝は検出されない。

竈は南壁の西寄りに構築されている。燃烧部は壁の延長線上にあり、先端は壁外に22cm張り出している。袖・袖石は遺存していない。竈付近からは須恵器碗(87)が出土している。

貯蔵穴は竈の西に接して構築されている。長軸が約90cm・短軸が約70cmを測る楕円形を呈する。深さは約30cmであり、底部は平坦ではない。貯蔵穴内からは88の須恵器碗をはじめ須恵器碗底部破片や土師器甕が出土している。

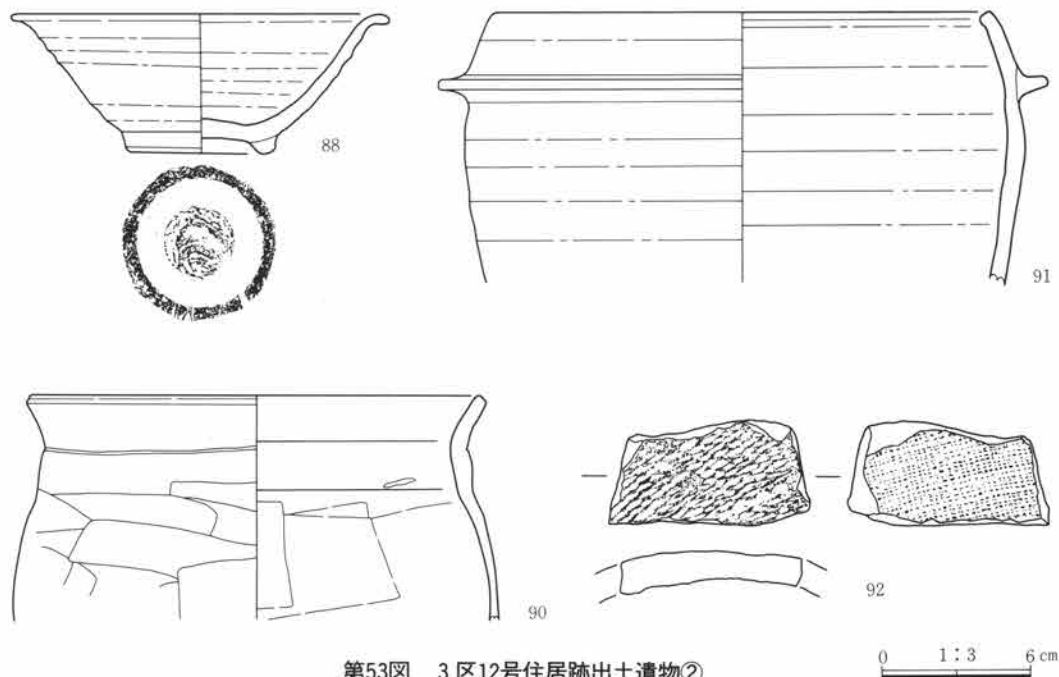


第51図 3区12号住居跡



第52図 3区12号住居跡出土遺物①

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3区12号住)



第53図 3区12号住居跡出土遺物②

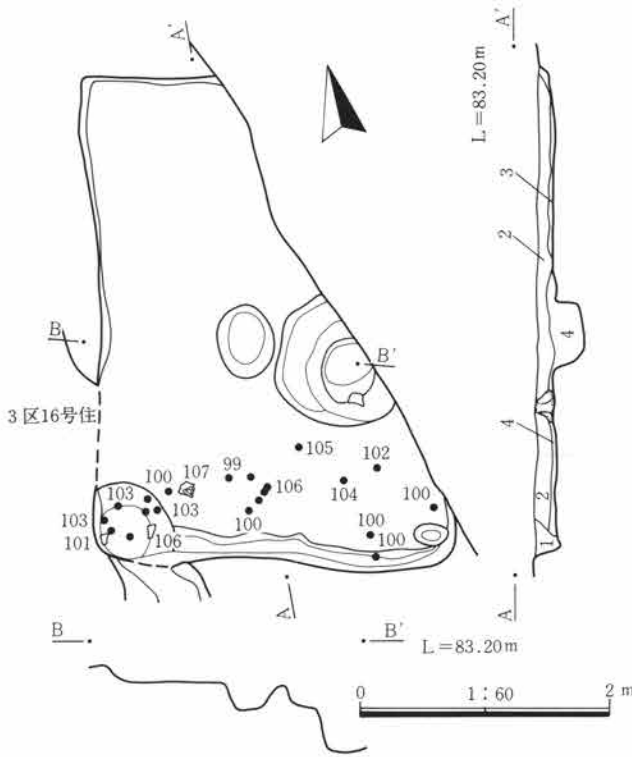
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
087	碗 須恵器	器高:44mm 口径:138mm 底径:64mm 完形。	細砂・礫含む。普。灰～鈍い黄橙。	口縁端部水平に外反する。胴部ゆるく内湾する。高台雑に張り付ける。底部外面右回転糸切り無調整。	竈北。
088	碗 須恵器	器高:57mm 口径:153mm 底径:60mm ほぼ完形。	細砂～径5mmの礫含む。やや軟質。灰白～鈍い黄橙。	口縁端部ほぼ水平に折り曲げる。貼り付け高台。高台内に沿って爪の圧痕有り。底部外面右回転糸切り無調整。轆轤右回転。	貯蔵穴。
089	甕 土師器	器高:[122mm] 口径:(200mm) 口縁部～体部1/6残。	細砂～粗砂含む。黒色鉱物・赤色粘土粒含む。普。鈍い赤褐。	口縁部は「コ」の字状を呈する。口縁部横なで。胴部外面横篋削り。胴部内面はなで。	竈。
090	甕 土師器	器高:[90mm] 口径:(186mm) 口縁部～肩部1/7残。	細砂～粗砂含む。黒色鉱物・赤色粘土粒含む。硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「コ」の字状を呈する。口縁部は横なで。胴部内面は篋削り後なで。胴部外面は横篋削り。頸部外面は接合痕残る。	貯蔵穴。
091	羽釜	器高:[109mm] 口径(202mm) 口縁部～体部1/8残。	粗砂・礫多く含む。軟質。橙。	口縁部は内傾する。内外面に轆轤目残る。鐔は貼り付ける。	掘形。
092	平瓦	厚:11～14mm	細砂多く含む。粗砂含む。白色粘土縞状に入る。普。灰。	表面に縄たたき目有り。裏面に榎骨痕・布目有り。	竈付近覆土。乗付製。8C前半。

3区15号住居跡

当住居跡は、3区16号住居跡と重複する。3区16号住居跡との新旧関係は当住居跡が新しい。当住居跡の北東約1/3は調査区外である。

規模は東西約2.9m・南北約3.8mであり、平面形は長方形を呈する。主軸方位は不明であり、壁は10～17cm残存する。周溝は南壁にのみ認められる。柱穴はないが、住居中央に1基、西寄りに1基、2基の土坑が確認された。中央の土坑は短軸約46cm・長軸約56cmの楕円形を呈し、深さは20～22cmを測る。西寄りの土坑は径80cm程の円形と考えられ、深さは約32cmである。当土坑は床下土坑と考えられる。

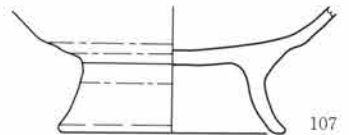
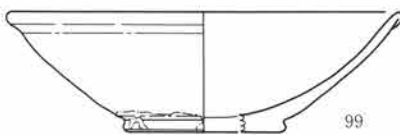
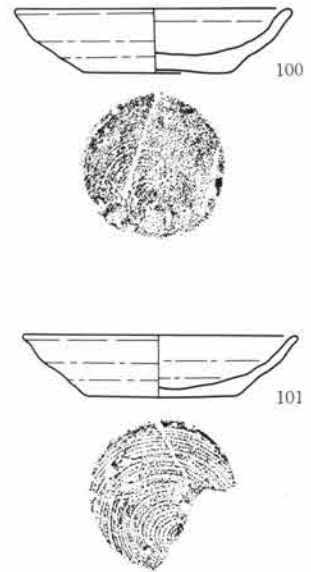
竈は調査区外の東壁南寄りに存在すると考えられる。南西隅には径60cm程の貯蔵穴があり、深さは約20cmである。遺物は南壁付近に集中しており、掲載した遺物はすべてこの部分から出土したものである。



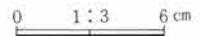
3区15号住居跡土層説明

- 1 黒褐色土層。
- 2 黒褐色土層：ロームブロックと軽石を多く含む。
- 3 ロームブロック。
- 4 灰褐色土層：やや粘性を有する。

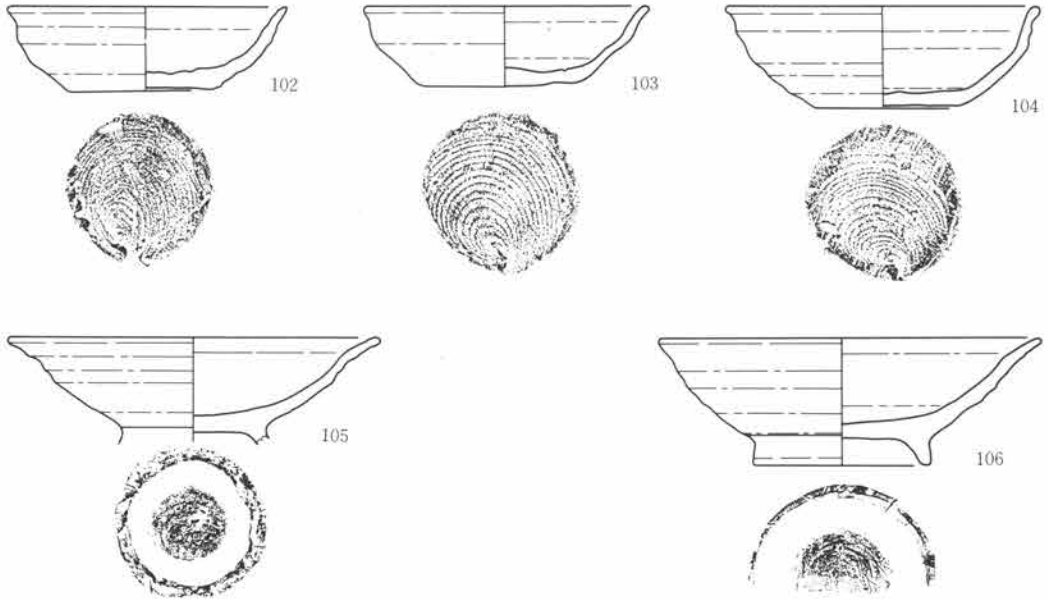
第54図 3区15号住居跡



55図 3区15号住居跡出土遺物①



第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3区15号住)



第56図 3区15号住居跡出土遺物②

0 1:3 6 cm

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
099	碗 白磁	器高:48mm 口径:(160mm) 底径:(65mm) 1/5残。	純白で緻密。硬質。釉色は乳白色。	口縁端部は小さく折り返す。高台は蛇の目状を呈すると思われる。高台脇以下無釉。口縁端部・高台端部は摩滅している。	南西隅。
100	杯 須恵器	器高:26mm 口径:112mm 底径:59mm 口縁部1/2欠。	細砂～粗砂含む。黑色鉍物粒含む。やや軟質。還元。灰黄。	口縁部は小さく外反する。体部は内湾する。底部外面右回転糸切り無調整。	南西隅。南隅。
101	杯 須恵器	器高:25mm 口径:112mm 底径:59mm 口縁部1/2欠。	細砂～粗砂含む。やや軟質。灰白～淡黄。	口縁部は小さく外反する。体部は内湾する。底部外面右回転糸切り無調整。	南西隅。
102	杯 須恵器	器高:34mm 口径:112mm 底径:61mm 口縁部1/2欠。	細砂～粗砂含む。軟質。淡黄。	口縁部は小さく外反する。体部は内湾する。底部外面は右回転糸切り無調整。轆轤右回転。	南壁中央。
103	杯 須恵器	器高:32mm 口径:116mm 底径:64mm 口縁部1/2欠。	細砂～粗砂含む。軟質。酸化。灰白。	口縁部は小さく外反する。体部は内湾する。底部外面は右回転糸切り無調整。	南西隅。

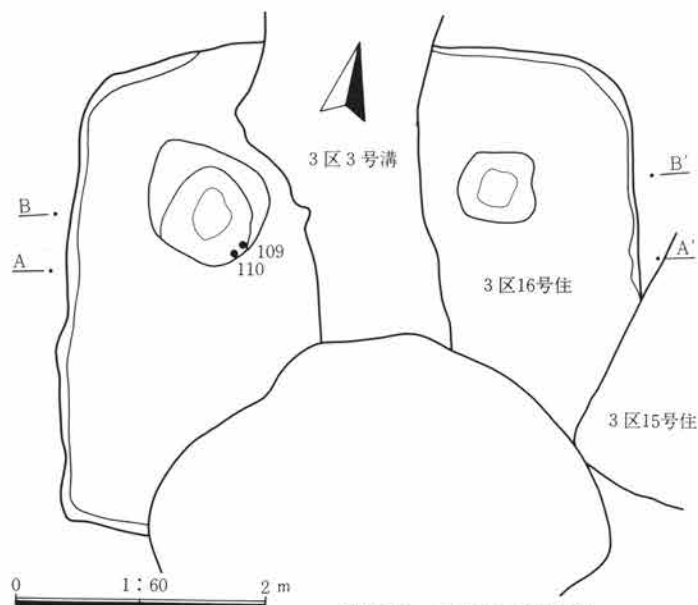
第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
104	杯 須恵器	器高:42mm 口径:127mm 底径:59mm 口縁部1/3欠。	細砂～径3mmの礫含む。やや軟質。淡黄。	口縁部は小さく外反する。体部は内湾する。底部外面は右回転糸切り無調整。轆轤目残る。轆轤右回転。	南壁中央。
105	碗 須恵器	器高:[38mm] 口径:(151mm) 体部・口縁部の一部残。高台端部欠。	細砂～径3mmの礫含む。軟質。淡黄。	口縁部は外反する。体部は開く。口縁部外面は轆轤目残る。底部底面は右回転糸切り無調整。高台貼り付け。轆轤右回転。	中央。
106	碗 須恵器	器高:40mm 口径:(155mm) 底径:(71mm) 2/3残 高台一部残。	細砂～粗砂含む。径4mmまでの礫少量含む。やや軟質。淡黄。	口縁部は外反する。体部は開く。口縁部外面は轆轤目残る。高台は貼り付け時に糸切り痕まで消す。轆轤右回転。	南西隅。
107	碗 須恵器	器高:[51mm] 底径:92mm 底部・高台残。	細砂～粗砂少量含む。普。灰黄。	高台は高く、外反する。高台貼り付け。糸切り痕は高台貼り付け時に消す。	南西隅。

3区16号住居跡

当住居跡は、3区15号住居跡・3区3号溝と重複し、3区1号溝には20cm、3区4号住居跡には1mと近接する。新旧関係はいずれも当住居跡が古い。

規模は南北約3.8m・東西約4.6mであり、平面形は長方形を呈する。主軸方位は不明である。壁は4～18cm残存し、残存状態は悪い。北壁寄りに主柱穴が2基確認され、形状は異なるが深さは西が66cm、東が70cmとほぼ同じであり、底部形状も同じである。周溝は確認されない。



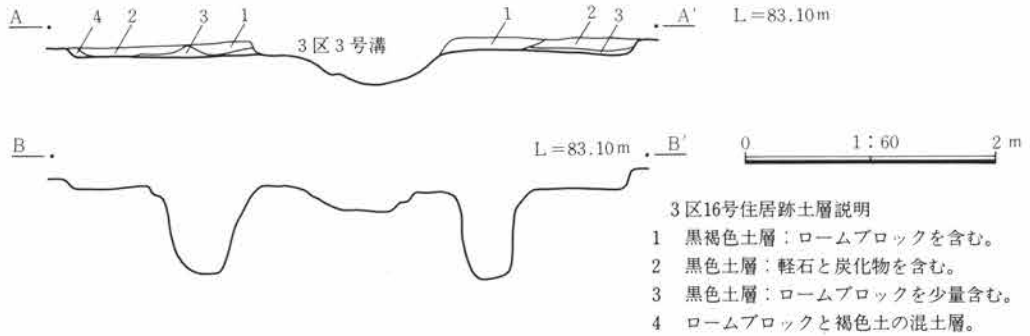
第57図 3区16号住居跡

竈は3号溝によって破壊されていると考えられる。貯蔵穴は認められない。

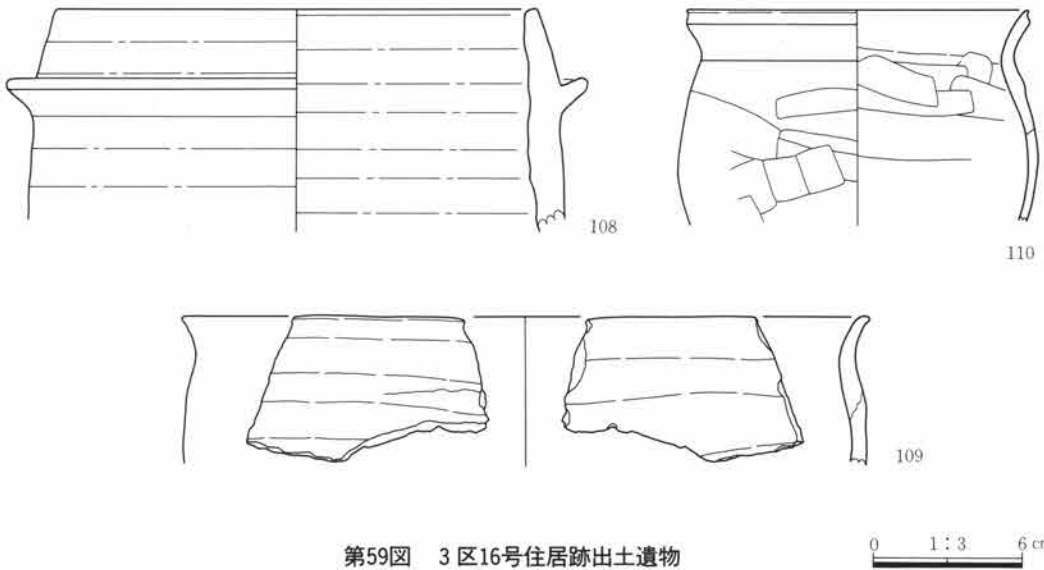
遺物は西側柱穴に接して土釜と土師器甕(109・110)が出土しているが、住居の形態や主柱穴の存在から本住居跡には伴わないと考えられる。本住居跡は遺存が悪いため、これらの遺物は覆土上部に混入したものと考えられる。



第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3区15・16号住)



第58図 3区16号住居跡断面図・エレベーション図



第59図 3区16号住居跡出土遺物

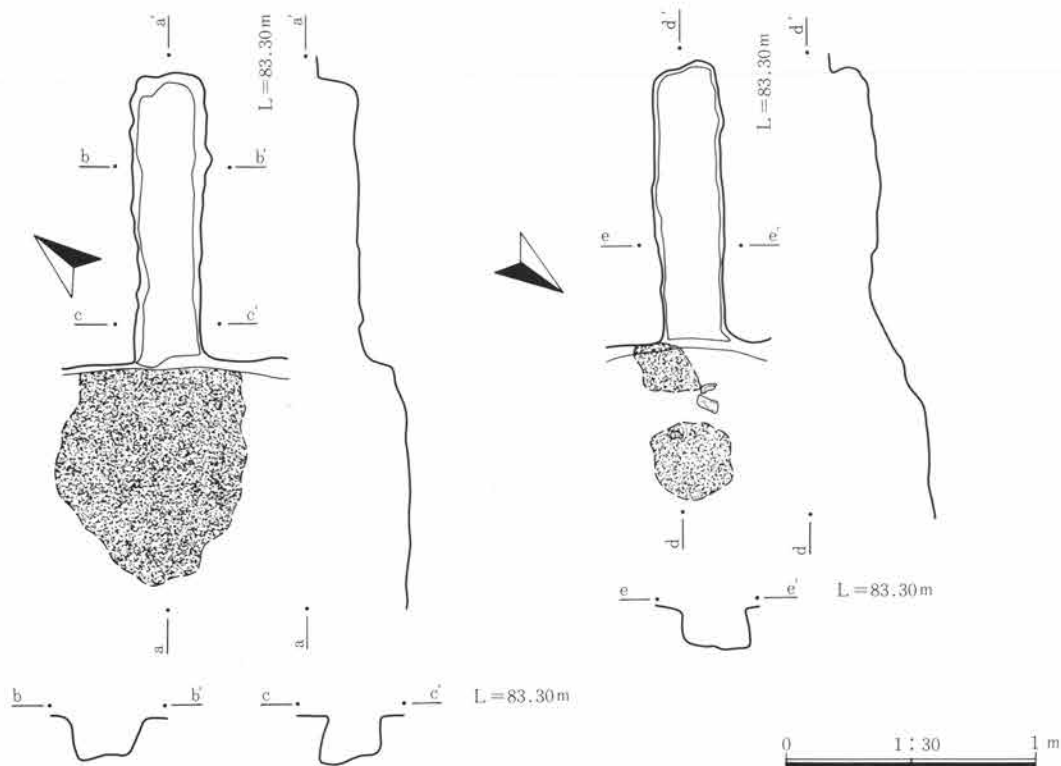
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
108	羽釜	器高：[85mm] 口径： (196mm) 口縁部小片。	細砂～径6mmの礫多く 含む。普。鈍い赤褐。	口縁部は内傾する。銕貼り付ける。内面に回転横なで痕あり。	覆土。
109	土釜	器高：[60mm] 口径： (280mm) 口縁部小片。	細砂～径3mmの礫多く 含む。硬質。暗褐～鈍い 褐。	口縁部は外反する。口縁部は回転横なで痕あり。	中央。
110	甕 土師器	器高：[84mm] 口径： (138mm) 口縁部～胴 部1/5残。	細砂～粗砂少量含む。 やや硬質。鈍い赤褐。	口縁端部は外面を面取りし、端部を小さく折り返す。頸部外面に指頭圧痕残る。体部内面は刷毛状工具によるなで。体部外面は篋削り。	中央。

4区1号住居跡

当住居跡は、4区3号住居跡・4区9号住居跡・4区1号溝と重複する。4区3号住居跡との新旧関係は、同住居跡の南東部の床面が当住居跡の北西部の床上覆土中から検出できたことから、当住居跡の方が古い。4区9号住居跡との新旧関係は、床面の高さもほぼ同じであり、直接的に把握することができなかったが、出土遺物から当住居跡の方が新しい。4区1号溝との新旧関係は、同溝が当住居跡の北西部から南東部にかけて貫通し、当住居跡の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、東西約4.3m・南北約4.2mであり、平面形は隅丸方形を呈するが、南側の中央部には、約0.9mの張り出し部を持つ。主軸はN-53°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約40cmであり、残存状態は比較的良好である。床面は、比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

竈は、東側壁の中央部やや南よりと西側壁中央部のやや南よりに築かれている。住居廃絶時に使用されていたと考えられるのは、西側の竈である。袖は検出できなかったが、燃烧部に堆積した焼土と、支脚に使用されたと考えられる河原石を検出することができた。煙道部の壁外への張り出しは約100cmである。東側の竈は、燃烧部と推定される部分もほぼ平坦にされていたが、床面

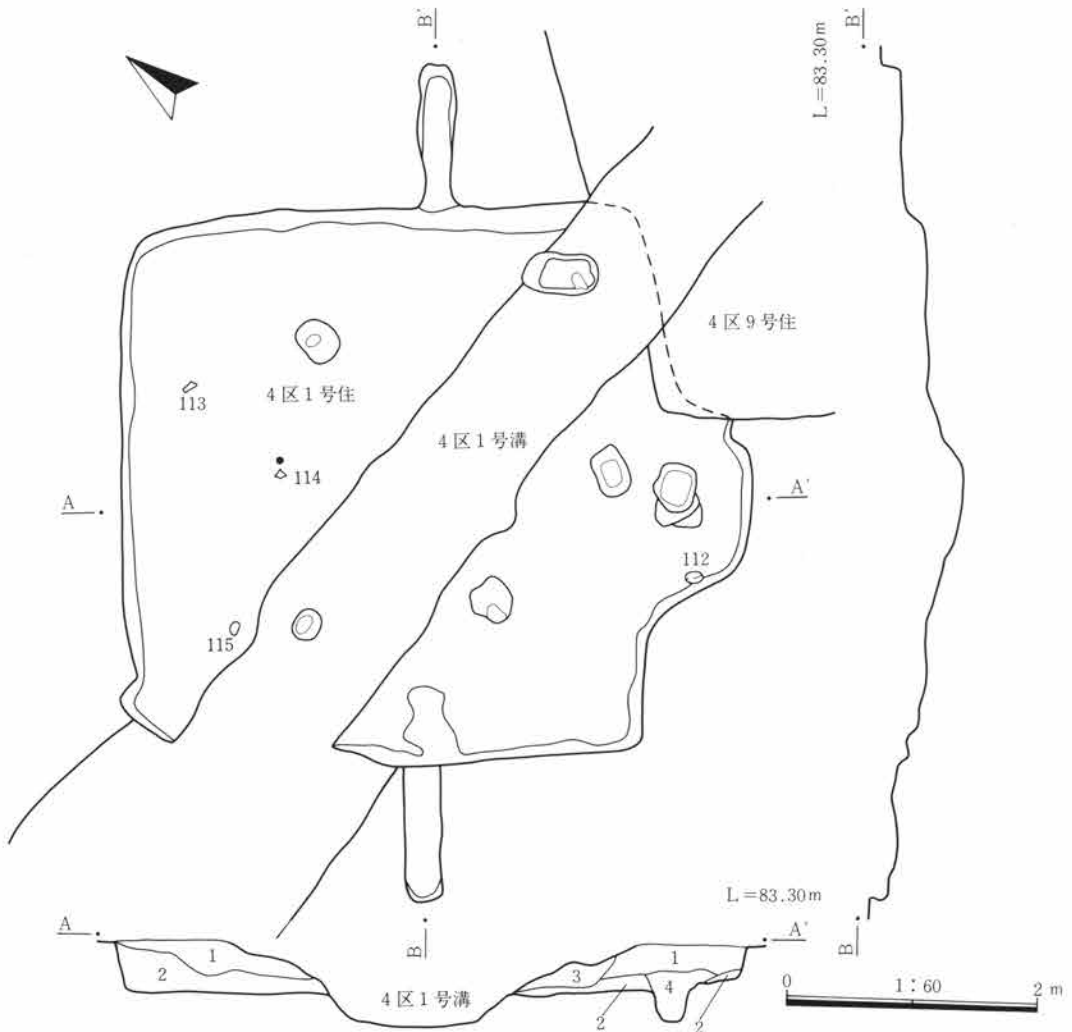


第60図 4区1号住居跡竈平面図・エレベーション図

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(4区1号住)

に散布している焼土と、壁外へ約110cm張り出した煙道部を確認することができた。主柱穴と考えられるピットは3基検出できたが、南東部から検出できなかったのが疑問が残る。規模は、径約20~35cm・床面からの深さ約20~50cmであり、平面形は不定形ないしは不整形な楕円形を呈する。住居内の南東部隅と推定される部分からは、貯蔵穴と推定されるピットが検出できた。規模は長辺約60cm・短辺約30cm・床面からの深さ約70cmであり、平面形は不整形な長方形を呈する。

遺物は、土師器の甕・杯のほか滑石の原石が出土しているが、出土量は少ない。遺物から推定される当住居跡の時期は6世紀後半である。

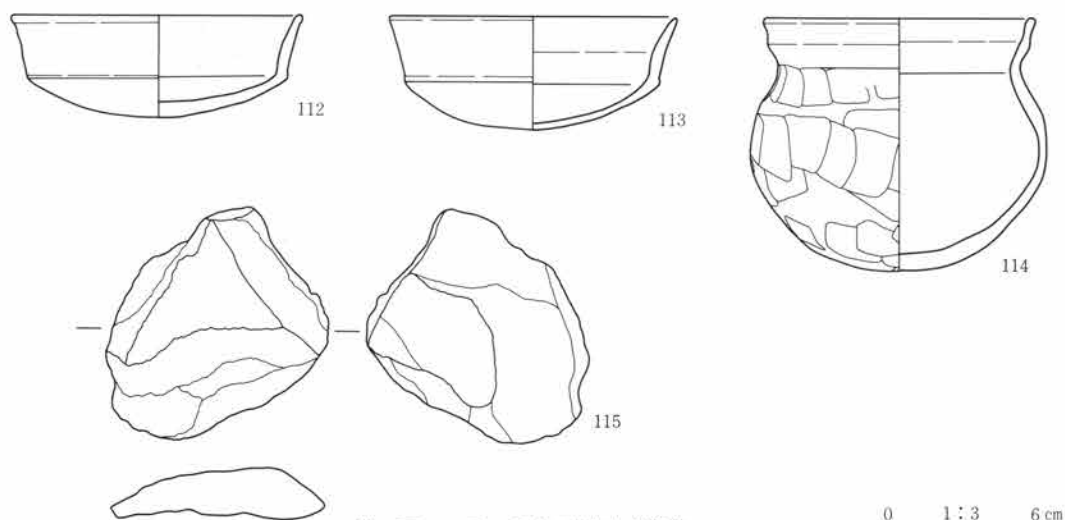


4区1号住居跡土層説明

- |  |  |
|--|--|
| <p>1 暗褐色土：ローム小ブロック・少量の軽石を含む。</p> <p>2 暗褐色土：やや多量のローム小ブロック・微量の軽石を含む。</p> | <p>3 暗褐色土：少量のローム小ブロックを含む。</p> <p>4 暗褐色土：やや多量のローム小ブロックを含み、軟らかい。</p> |
|--|--|

第61図 4区1号住居跡

第IV章 発見された遺構と遺物



第62図 4区1号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
112	杯 土師器	器高:41mm 口径:118mm 底径:— 完形。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。硬質。酸化。橙。	外面口縁部下端に不明瞭な稜。丸底。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	南側壁張り出し部。
113	杯 土師器	器高:45mm 口径:116mm 底径:— 口縁部~底部4/5残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	外面の口縁端部に稜を持つ。丸底。内面:口縁部~体部上半は横なで、体部下半~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	住居内北東部。
114	甕 土師器	器高:102mm 口径:(110mm) 底径:— 口縁部~底部1/3残。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾し、口縁部上半はやや内湾。口縁部中央に不明瞭な稜。丸底。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	住居内中央部。
115	原石	93mm×91mm×21mm 重:180g	滑石。	玉製作用の石か?	住居内北西部。

4区2号住居跡

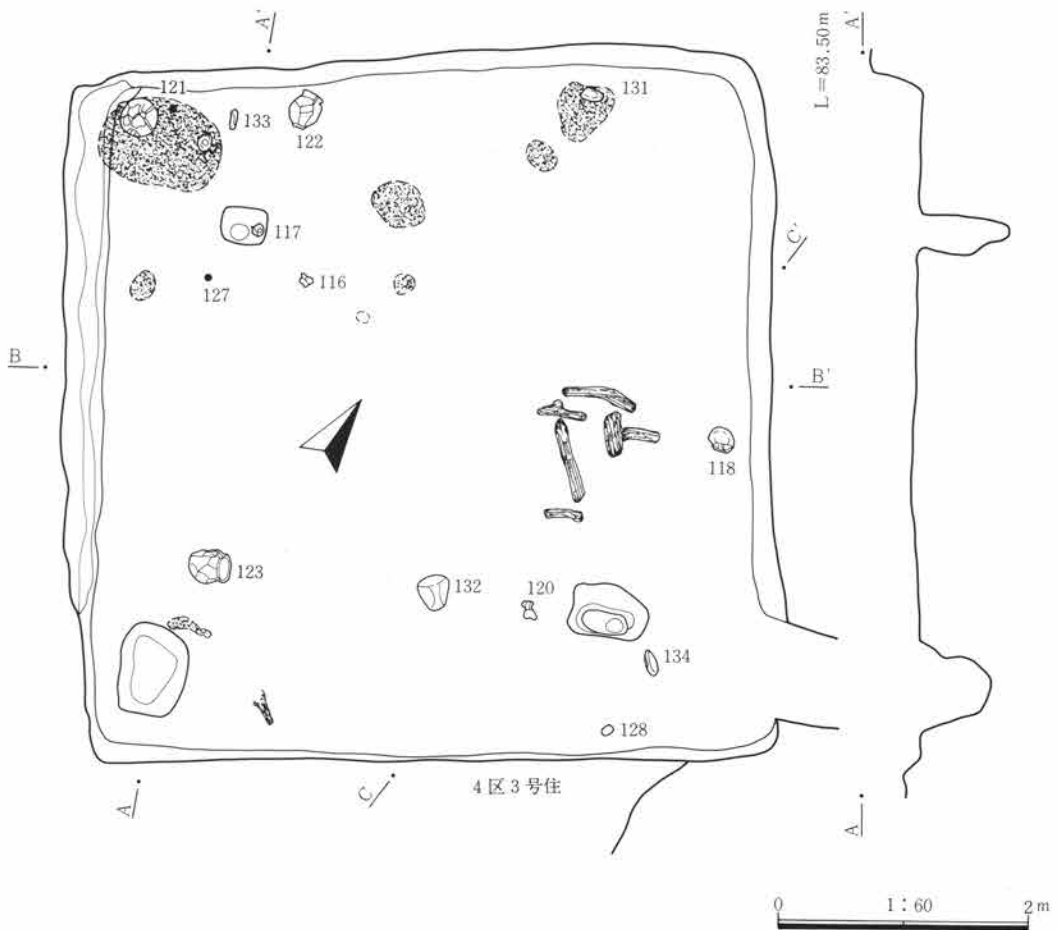
当住居跡は、4区3号住居跡と重複する。新旧関係は、同住居跡の床が当住居跡の南部分の床上覆土中に築かれていることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、東西約5.6m・南北約5.5mであり、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-58°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、北西部で約50cm・南東部で15cmであり、北西

部分の残りが良い。床面は、硬くしまっており、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

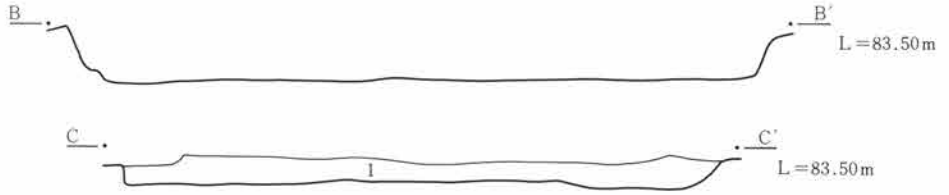
当住居跡内からは、全体的に焼土の分布が見られ、中央部東よりからは炭化物が出土していることから、火災を受けていると考えられる。炉は、火災の焼土もあり明確に把握することはできなかったが、中央部北よりの焼土が炉と考えられる。当住居跡内からは、3基ピットが検出できた。柱穴と考えられるピットは、北西隅と南東隅のピットである。規模は、長軸約40~60cm・短軸約30~40cm・床面からの深さ約60~70cmを測り、平面形は不整形な楕円形ないしは不整形な長方形を呈する。しかし、ピット位置から考えると疑問も残る。貯蔵穴と考えられるピットは、南西隅のピットである。規模は、長軸約70cm・短軸約50cm・床面からの深さ約60cmであり、平面形は不整形な長方形を呈する。

遺物は、土師器の甕・脚付甕・高杯・碗の他、勾玉・石製紡錘車・滑石原石・用途不明石製品などが出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は5世紀前半である。



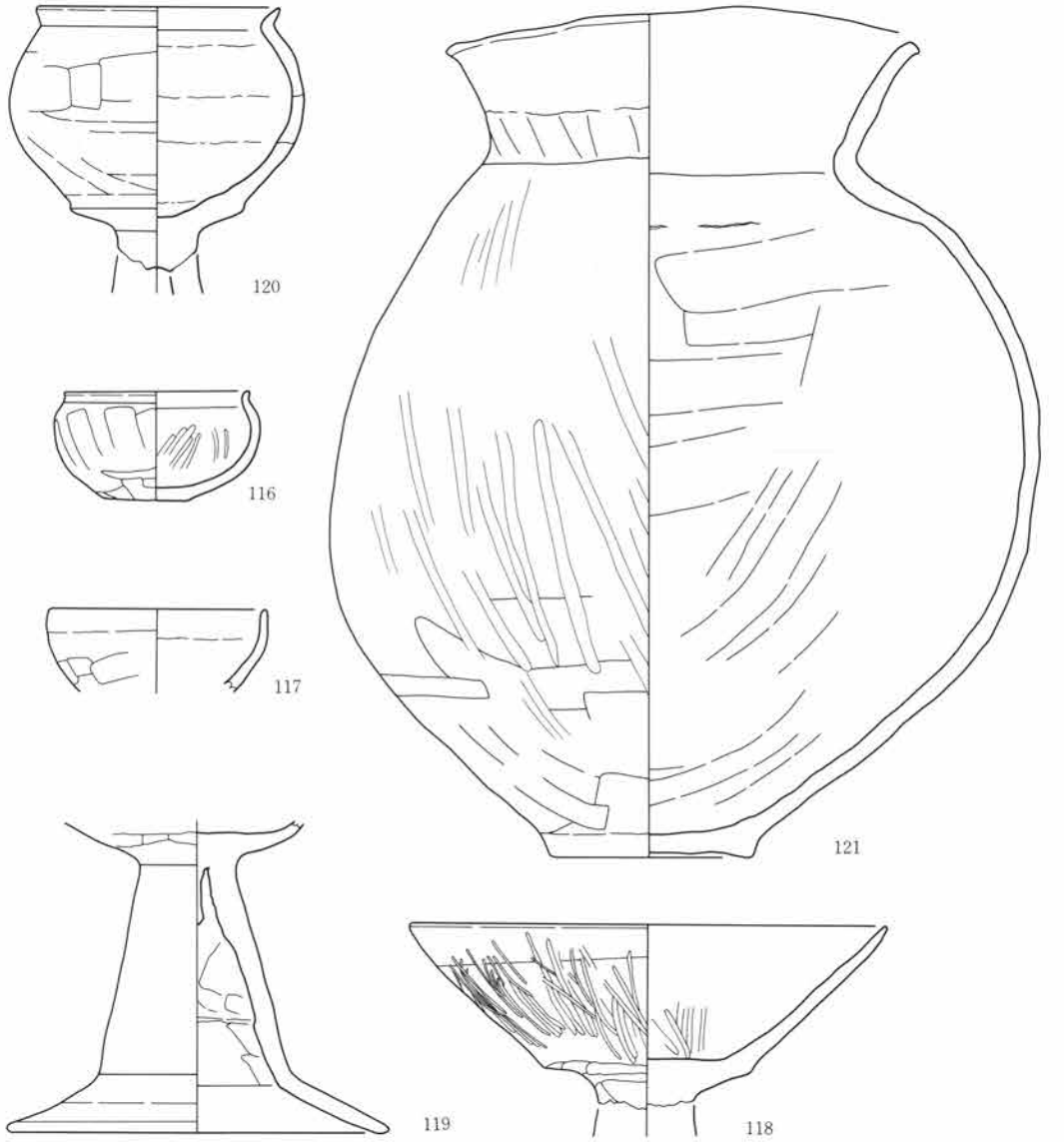
第63図 4区2号住居跡

第IV章 発見された遺構と遺物



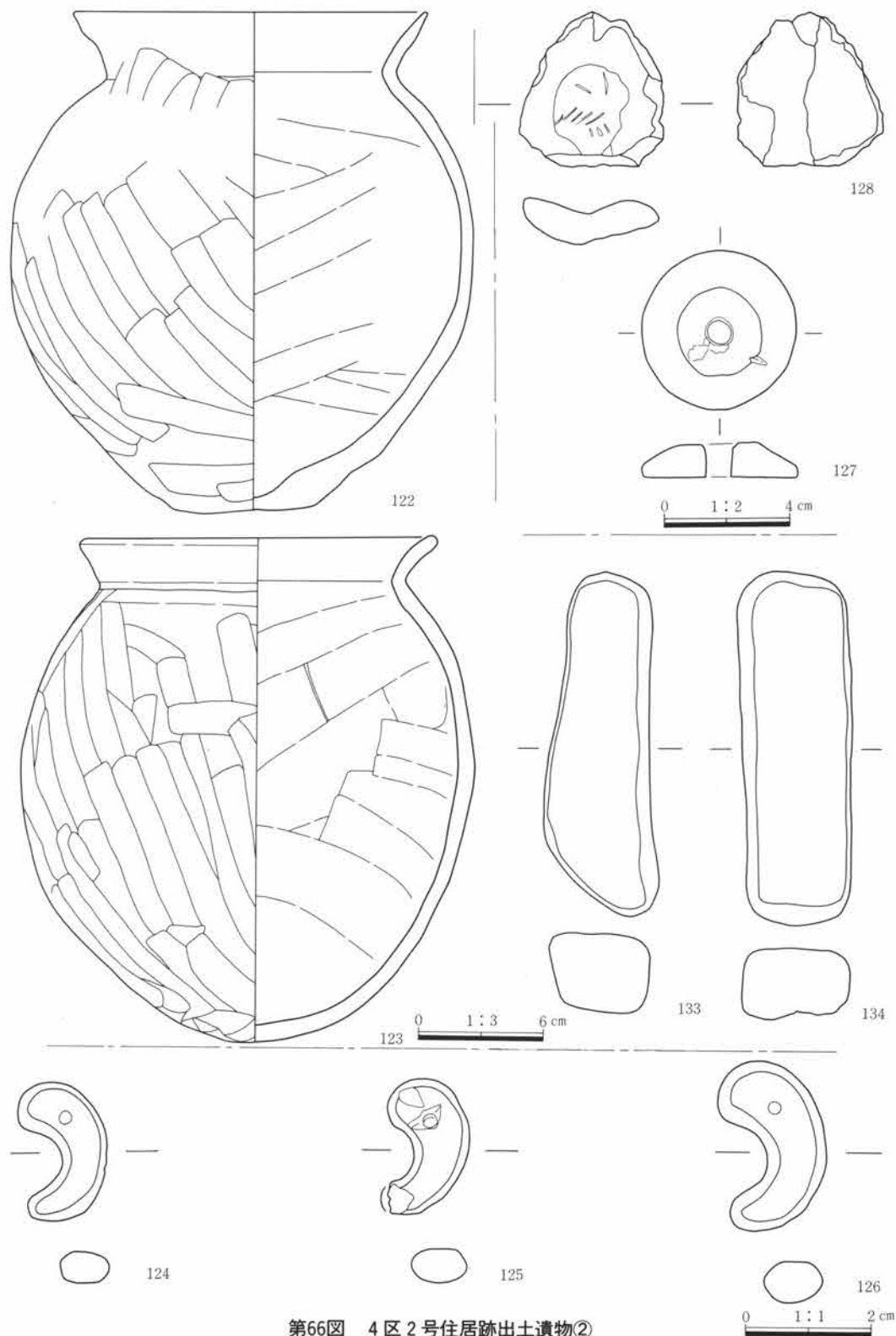
4区2号住居跡土層説明  
 1 暗褐色土：軽石・ローム小ブロックおよび焼土を含む。

第64図 4区2号住居跡断面図・エレベーション図

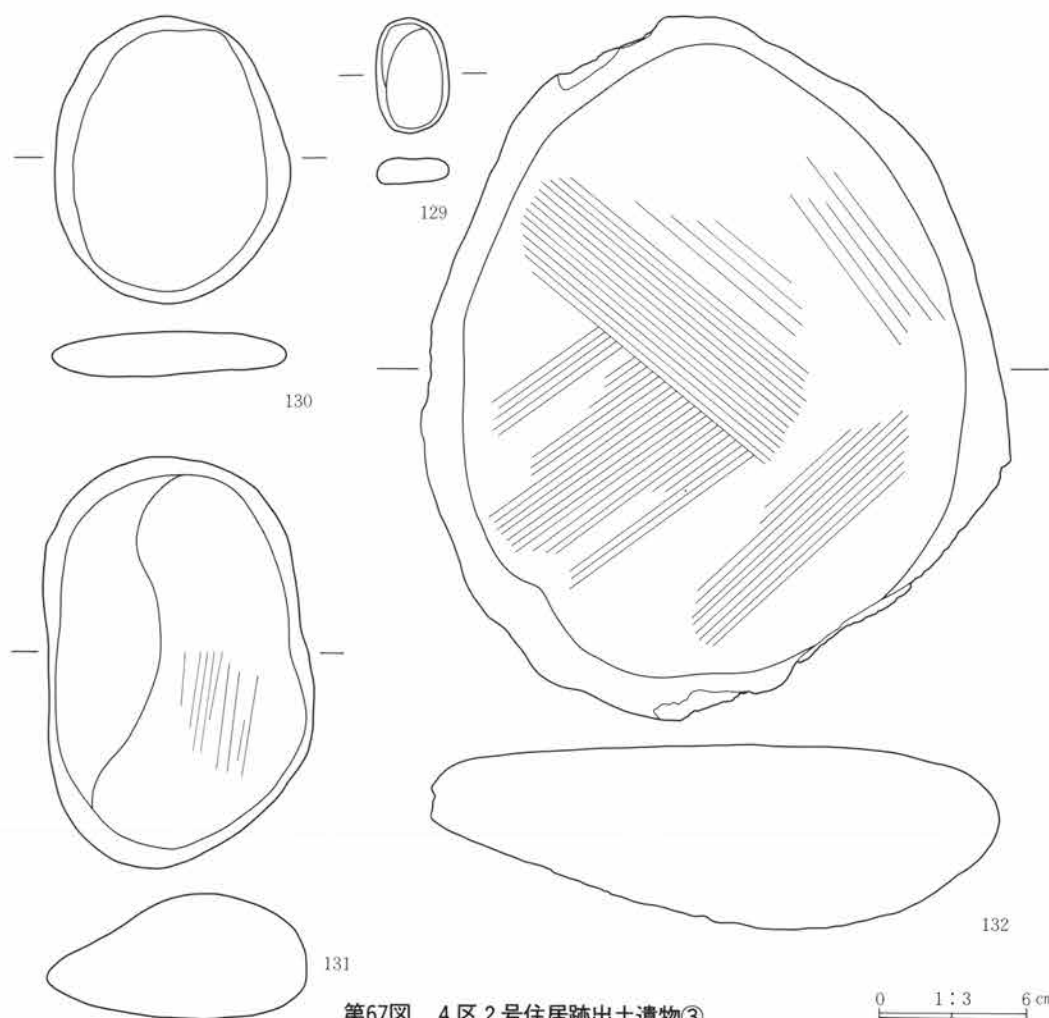


第65図 4区2号住居跡出土遺物①

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(4区2号住)



第66図 4区2号住居跡出土遺物②



第67図 4区2号住居跡出土遺物③

0 1:3 6 cm

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
116	碗 土師器	器高:43mm 口径:75mm 底径:36mm 口縁部～ 底部4/5残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い黄橙。	口縁部は内湾し、口縁端部は僅かに外湾。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで後篋磨き。外面:口縁部は横なで、体部はへら削り後なで、体部下端～底部は篋削り。	住居内北西部床直。外面に油煙付着。
117	碗 土師器	器高:[33mm] 口径:88mm 底径:— 口縁部～ 体部残。	径1~2mmの砂粒を含む。軟質。酸化。黒褐。	口縁部は僅かに内湾。内面:口縁部～体部上半は横なで、体部下半はなで。外面:口縁部～体部上半は横なで、体部下半は篋削り。	住居内北西部床直。内外面全面に多量の油煙付着。燻しか?



第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(4区2号住)

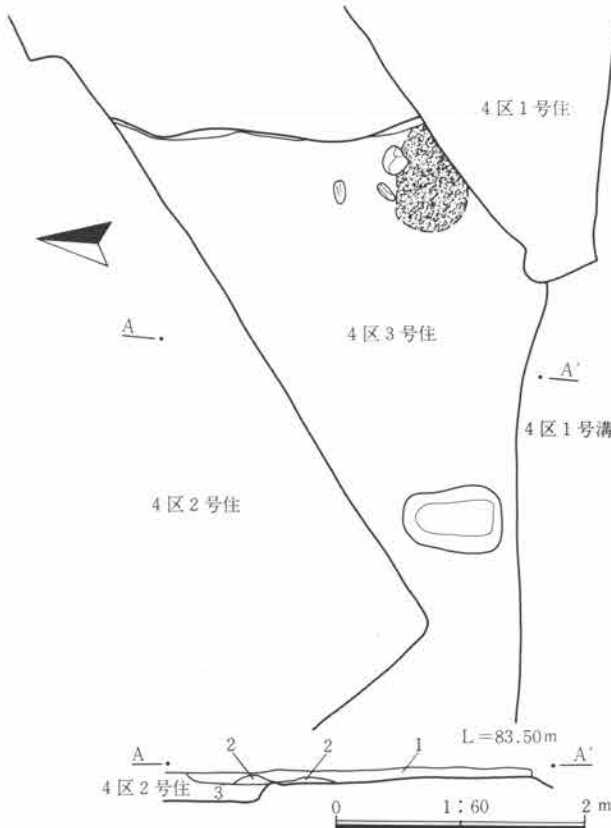
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
118	高杯 土師器	器高:[73mm] 口径: 193mm 脚径:— 口縁 部~脚部上端残。	径4~5mmの小石及び砂 粒を含む。やや軟質。酸 化。明赤褐。	体部~口縁部は直線的に広がる。内面: 口縁部は横なで、体部~底部はなで後 筥磨き。外面:口縁部は横なで、体部は なで後筥磨き、底部~脚部上端は筥削 り。	住居内東壁中央脇 床直。
119	高杯 土師器	器高:[125mm] 口径: — 脚径:154mm 底部 ~脚部残。	径4~5mmの小石及び砂 粒を含む。硬質。酸化。 明赤褐。	脚部は漏斗状に開く。内面:脚部上半は 筥なで、脚部下半はなで。外面:底部は 筥削り、脚部はなで。	住居内北西部。
120	脚付甕 土師器	器高:[106mm] 口径: (98mm) 脚径:— 口 縁部~脚部上端1/2残。	径2~3mmの砂粒を含 む。軟質。酸化。明赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部 は横なで、体部~底部はなで。外面:口 縁部~底部は筥削り。	住居内南東部。
121	甕 土師器	器高:340mm 口径:192 mm 底径:73mm 最大 径:287mm 口縁部~底 部3/5残。	径4~5mmの小石及び砂 粒を含む。軟質。酸化。 鈍い赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体 部上半。内面:口縁部は横なで、体部~ 底部は筥なで。外面:口縁部上半は横な で口縁部下半は筥なで、体部~底部は 筥削り後筥磨き。	住居内北西部隅床 直。外面に油煙付 着。
122	甕 土師器	器高:237mm 口径:169 mm 底径:70mm 最大 径:221mm 口縁部~底 部4/5残。	径4~5mmの小石及び砂 粒を含む。軟質。酸化。 鈍い赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体 部中央。内面:口縁部は横なで、体部~ 底部は筥なで。外面:口縁部は横なで、 体部~底部は筥削り。	住居内北西部床 直。内外面に油煙 付着。
123	甕 土師器	器高:240mm 口径:171 mm 底径:— 最大径: 218mm 口縁部~底部 2/3残。	径3~4mmの小石及び砂 粒を含む。軟質。酸化。 鈍い赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾。丸底。最大径 は体部中央。内面:口縁部は横なで、体 部~底部は筥なで。外面:口縁部は横な で、体部~底部は筥削り。	住居内南西部。内 外面に油煙付着。
124	勾玉	長:22mm 幅:9mm 厚: 6mm 孔径:2mm	滑石。	ほぼ完形品。重さは2.28g。	住居内覆土。
125	勾玉	長:21mm 幅:9mm 厚: 6mm 孔径:2mm	滑石。	先端部欠。重さは2.08g。	住居内覆土。
126	勾玉	長:27mm 幅:11mm 厚:7mm 孔径:2mm	滑石。	完形品。重さは3.86g。	住居内覆土。
127	紡錘車	直径:50mm 厚:10mm 孔径:8mm 重:35.97g	滑石。	平面形はほぼ円形。断面形は台形。完形 品。	住居内北西部。
128	原石	49mm×46mm×11mm	滑石。	片面に金属工具痕有り。重さは40.05g	住居内南東部。
129	用途不明 石製品	長:46mm 幅:30mm 厚:10mm 重:22.05g	砂岩。	片面磨られている。	住居内北西部。
130	用途不明 石製品	長:115mm 幅:95mm 厚:18mm 重:265g	粗粒安山岩。	両面磨られている。	住居内覆土。
131	用途不明 石製品	長:165mm 幅:108mm 厚:53mm 重:1400g	粗粒安山岩。	両面磨られており、片面に金属工具痕 有り。	住居内北東部床上 10cm。

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
132	用途不明 石製品	長:282mm 幅:239mm 厚:74mm 重:6920g	粗粒安山岩。	磨られている面は片面であり、その面に金属工具痕有り。	住居内中央部。
133	薦石	長:162mm 幅:55mm 厚:40mm 重:560g	粗粒安山岩。		住居内北西部床上5cm。
134	薦石	長:168mm 幅:53mm 厚:50mm 重:720g	砂岩。		住居内南東部。

#### 4区3号住居跡

当住居跡は、4区1号住居跡・4区2号住居跡・4区1号溝と重複する。新旧関係は、4区1号住居跡・4区2号住居跡よりも当住居跡の方が新しく、4区1号溝より当住居跡の方が古い。

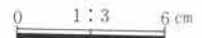
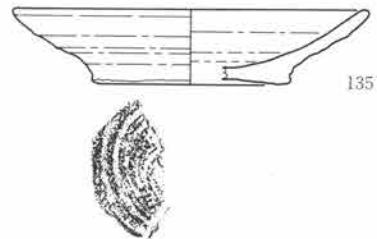
東壁中央のみ確認のため、規模・平面形・主軸方位は不明である。床面は非常に硬く固められていたが、西側は確認できない。土坑が1基あるが、本住居跡よりも新しい。東壁南寄りの床面には焼土と焼け石の分布が認められ、この部分に竈が存在していたと考えられる。



第68図 4区3号住居跡

#### 4区3号住居跡土層説明

- 1 黒褐色土層：ロームブロックと軽石を多く含む。
- 2 黒褐色土層：ローム粒を含み、締まりがある。
- 3 黒褐色土層：1層に比して黒みが強く、軽石を含む。4区2号住居跡覆土。



第69図 4区3号住居跡出土遺物

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(4区2・3・4・11号住)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
135	皿 土師質土器	器高:30mm 口径:(144mm) 底径:(81mm) 1/3残。	細砂～径2mmの礫含む。やや軟質。灰～灰白。	底部は高台状をなす。体部・口縁部は直線的に開く。底部外面左?回転糸切り無調整。	竈付近。

#### 4区4号住居跡

当住居跡は、4区11号住居跡と重複する。新旧関係は、当住居跡が新しい。また、4区10住居跡・12号住居跡と近接する。

4区11号住居跡内に入るかたちで重複しており、規模・平面形・主軸方位は不明である。床面は中央部のみ硬く、全面には確認出来なかった。

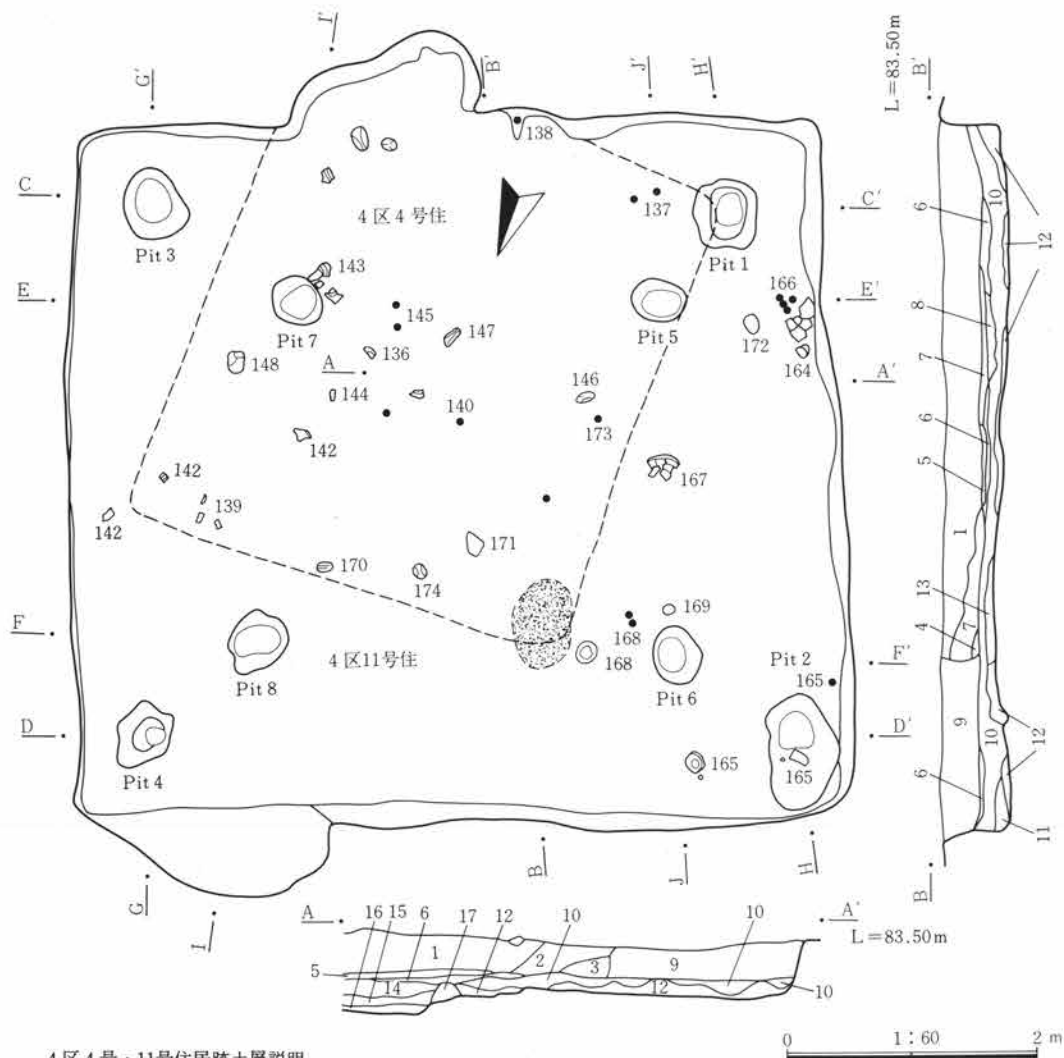
竈は東壁に構築されていたが、詳細は不明である。出土遺物は東壁寄りに多く、竈前からは羽釜(143)、竈周辺からは羽釜(142・144)・灰釉陶器椀・皿(140・139)等が出土している。

#### 4区11号住居跡

当住居跡は、4区4号住居跡と重複する。新旧関係は、当住居跡内の床上に4区4号住居跡の壁・床が築かれていることから、当住居跡の方が古い。当住居跡の規模は、東西約6.2m・南北約5.6mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-70°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約25～40cmであり、残存状態は比較的良好である。床は硬く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

床面上の焼土が、北側ピットの中間やや西よりから検出できた。この焼土は、炉と考えられる。支柱穴は4基であり、ピット5～ピット8である。規模は、長軸約40～50cm・短軸約30～40cm・床面からの深さ約65～85cmであるが、ピット5の床面からの深さは約10cmと浅い。平面形は不整形な楕円形を呈する。支柱穴の外側からは、4基のピットが検出できた、ピット1を除いて床面からの深さも浅く、柱穴と考えるには疑問が残る。ピット8の規模は、長辺約55cm・短辺約50cmであり、床面からの深さは110cmを測る。平面形は、不整形な長方形を呈する。このピットは、貯蔵穴と推定できる。

遺物は、土師器の甕・埴・高杯の他、用途不明石製品などが出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は5世紀前半である。

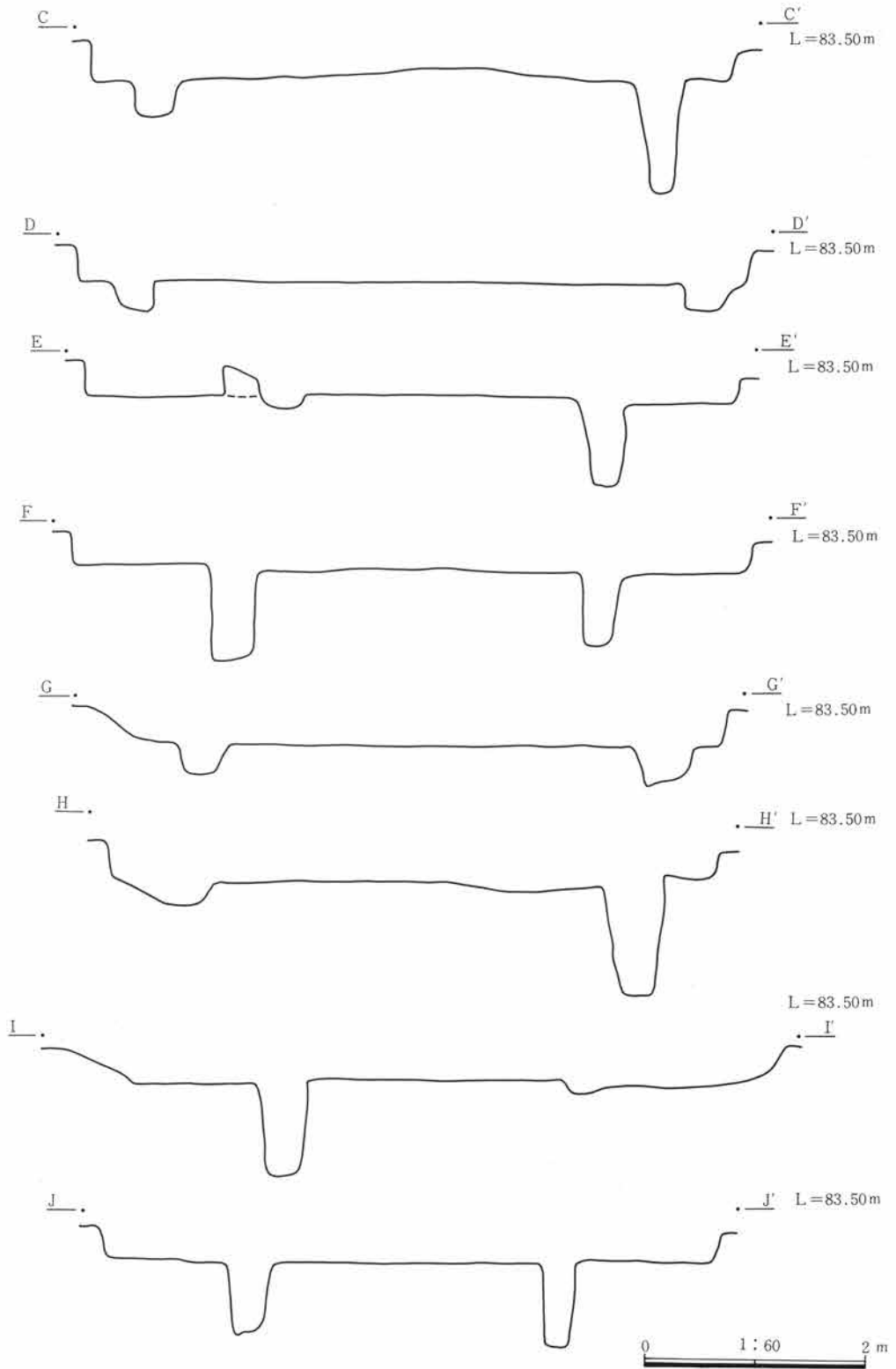


4区4号・11号住居跡土層説明

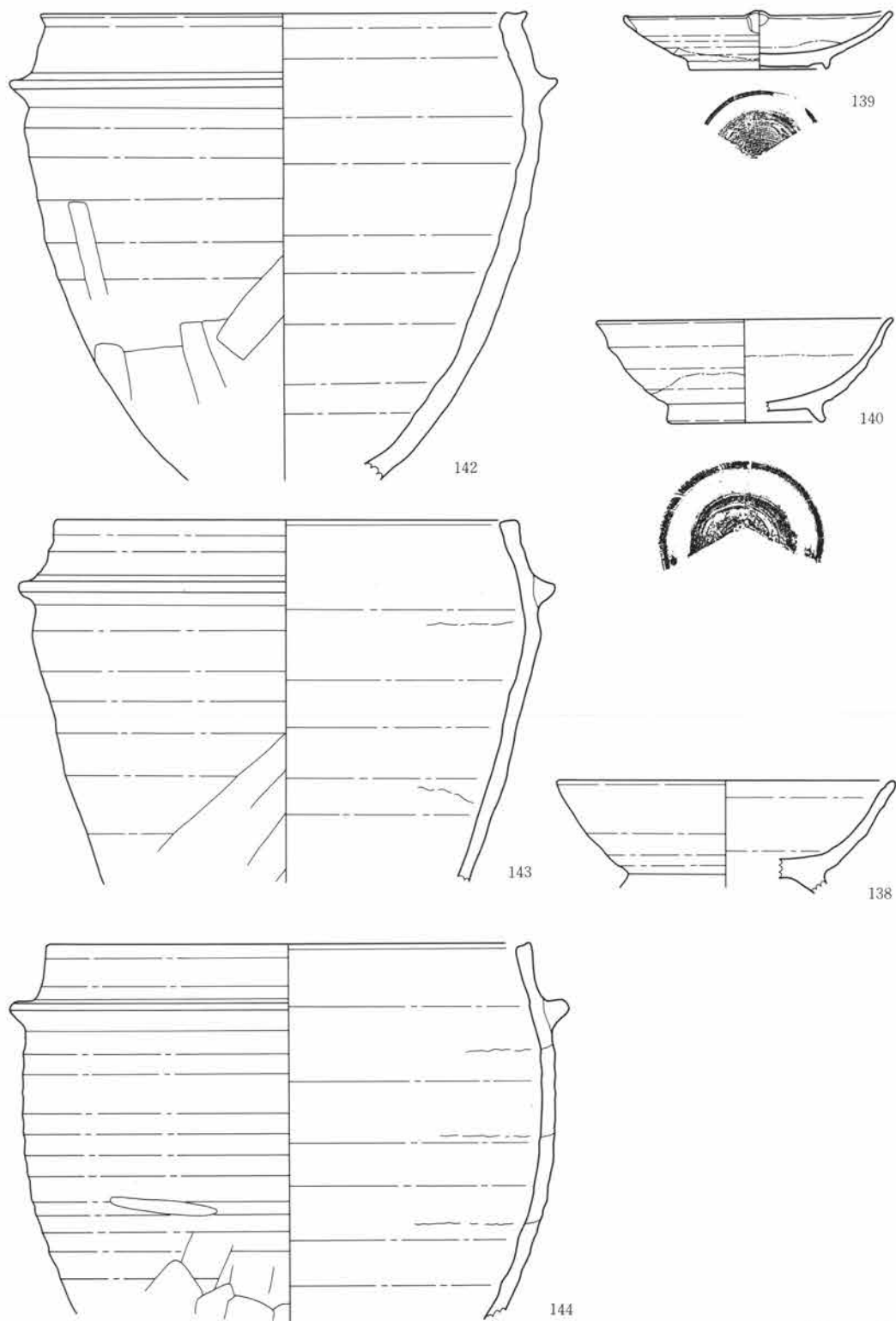
- 1 褐色土：浅間B軽石・ローム小ブロックを含む。
- 2 褐色土：浅間B軽石・やや多量のローム小ブロックを含む。
- 3 黄褐色土：浅間B軽石及びやや多量のローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 4 暗褐色土：ロームブロックを含み、粘性が強い。
- 5 褐色土とローム小ブロックの混合。焼土粒子を含む。4区4号住居の張床。
- 6 暗褐色土とローム小ブロックの混合。4区4号住居の張床。
- 7 焼土・炭化物・褐色土の混合。
- 8 焼土・褐色土の混合。硬くしまっている。
- 9 褐色土：少量のローム粒子を含み、緻密。
- 10 褐色土：やや多量のローム粒子を含む。
- 11 暗褐色土：ローム小ブロックを含み、粒子は粗い。
- 12 黄褐色土：多量のローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 13 褐色土：少量の焼土粒子を含む。
- 14 褐色土：少量のロームブロック・焼土粒子・炭化物を含む。
- 15 褐色土：やや多量のロームブロックを含む。
- 16 褐色土：少量のロームブロック・焼土粒子を含む。
- 17 褐色土：少量のローム粒子を含む。

第70図 4区4号住居跡・11号住居跡

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(4区4・11号住)

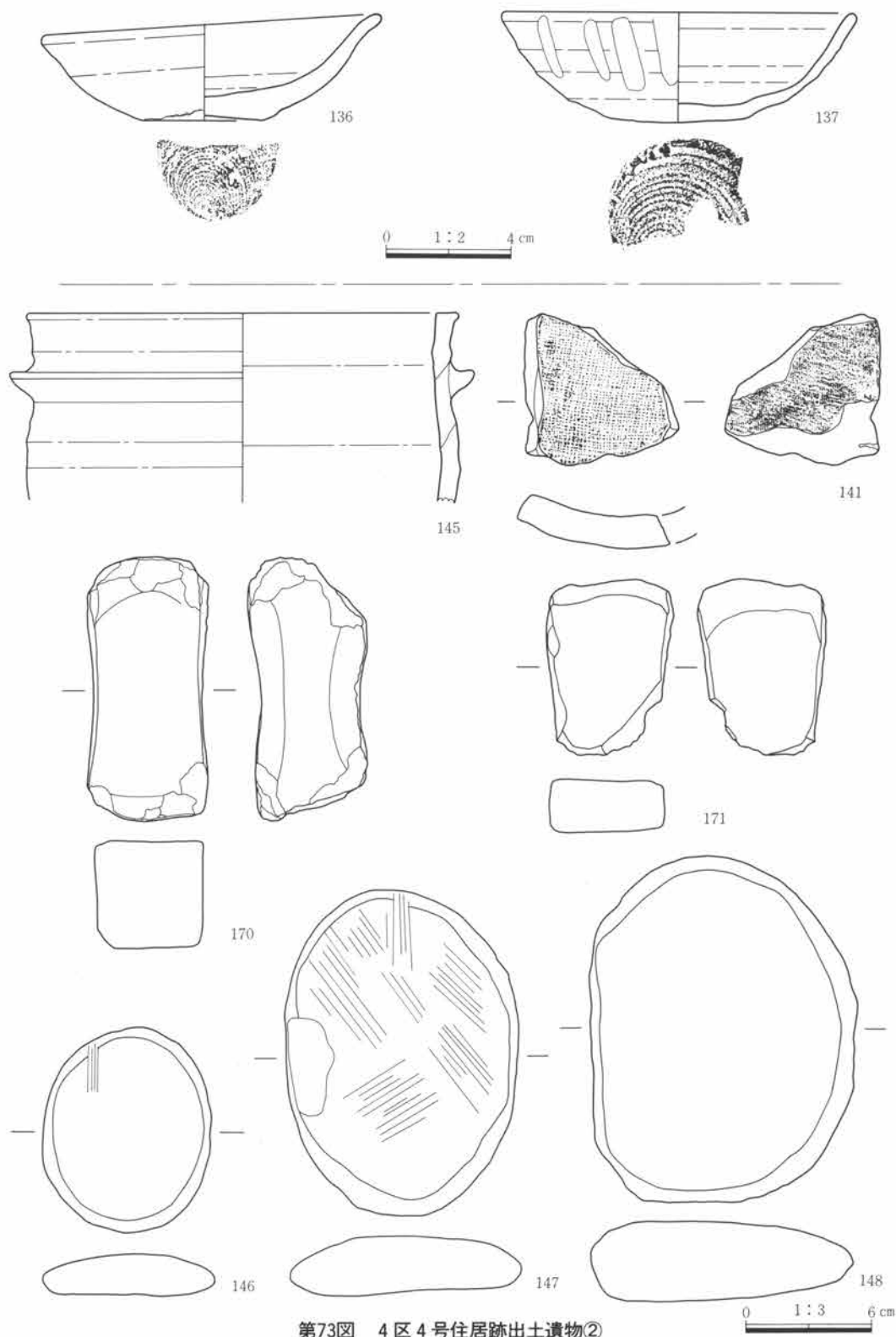


第71図 4区4号住居跡・11号住居跡エレベーション図

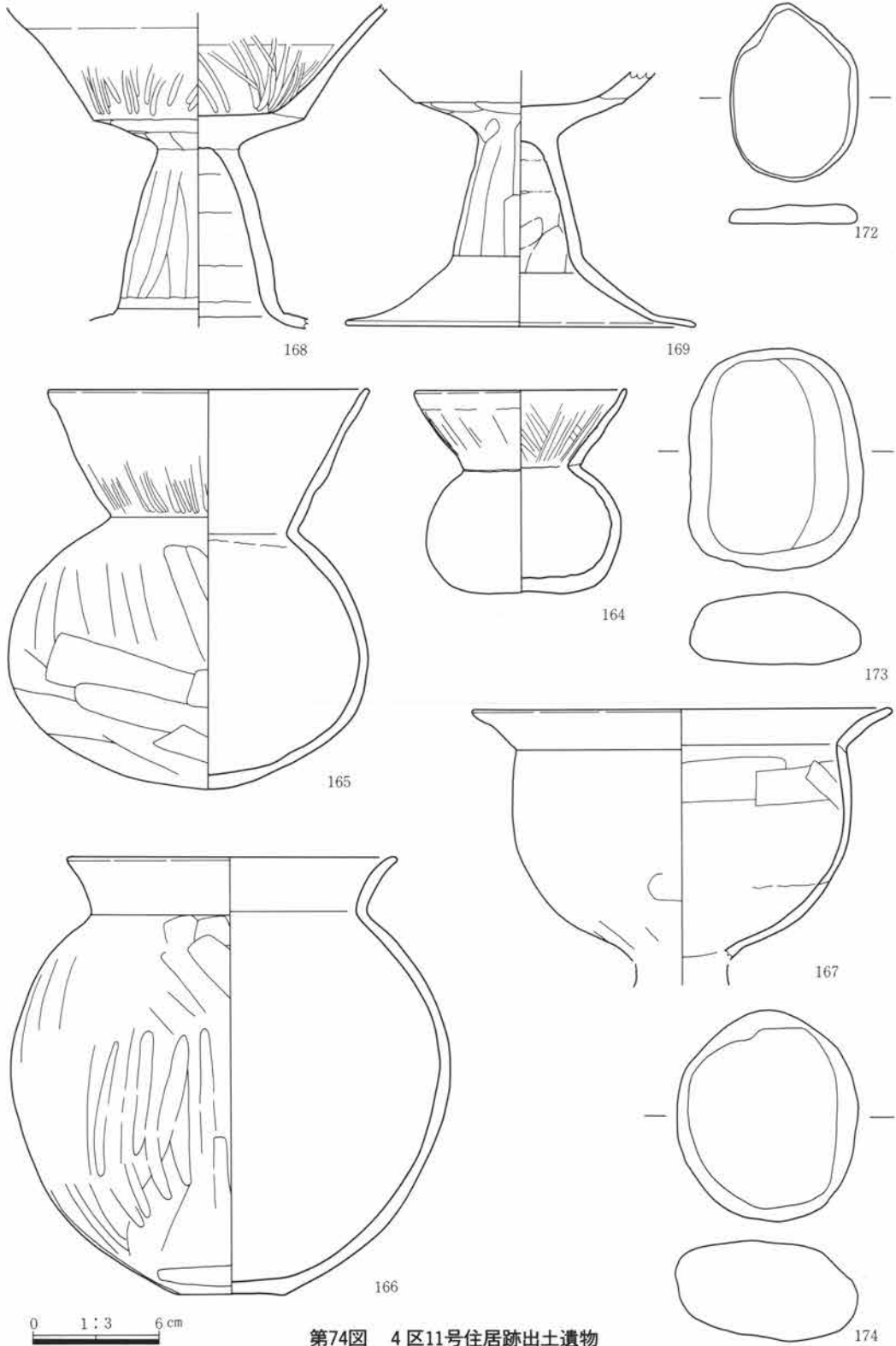


第72図 4区4号住居跡出土遺物①

0 1:3 6 cm



第73図 4区4号住居跡出土遺物②



第74図 4区11号住居跡出土遺物



第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(4区4・11号住)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
136	杯 須恵器	器高:27~33mm 口径: (110mm) 底径:38mm	細砂~径2mmの礫含む。 やや軟質。浅黄橙。	口縁部は小さく外反する。体部は内湾する。底部外面は右回転糸切り無調整。	中央。内面摩滅する。
137	杯 土師質土器?	器高:35mm 口径:(113mm) 底径:(41mm) 1/5残。	細砂~径2mmの礫含む。 やや硬質。鈍い橙。	体部下位は内湾する。口縁部は直線的に開く。口縁部外面は縦位なで。底部外面は左回転糸切り無調整。	掘形。成形時轆轤左回転?。
138	碗 須恵器	器高:[52mm] 口径: (160mm)	細砂~粗砂多く含む。 黒色鉱物粒多く含む。 やや軟質。黒褐。	体部はゆるく内湾する。貼り付け高台。	南壁中央。器表摩滅する。
139	皿 灰釉陶器	器高:26mm 口径:126mm 底径:(64mm) 1/2残。	径2mmと5mmの礫を各一個含む。黒色鉱物粒含む。硬質。灰白。	体部・口縁部はゆるく内湾する。輪花を四方に配する。底部は回転糸切り無調整。高台は雑に貼り付ける。体部は内外面まで施釉する。	北東隅。焼け歪み有り。
140	碗 灰釉陶器	器高:48mm 口径:(140mm) 底径:75mm 体部~底部2/3・口縁部一部残。	緻密。硬質。灰白。	口縁部は小さく外反する。体部は内湾する。高台は貼り付け時に糸切り痕なで消す。無釉。	中央。焼け歪み有り。
141	平瓦	厚さ:14~16mm 小片。	細砂~粗砂少量含む。 黒色粒子少量含む。緻密。焼き締まる。灰。	表面に布目有り。裏面は叩き目をなで消す。側面は篋削り後なで。	覆土。秋間製?。
142	羽釜	器高:[224mm] 口径: 193~220mm 口縁部2/3・体部1/3残。	細砂~径3mmの礫多く含む。やや軟質。橙。	口縁部は内傾する。鐔はやや上向きに貼り付ける。内外面は回転横なで後体部下半は篋削り。	竈・覆土。歪み有り。
143	羽釜	器高:[170mm] 口径: (220mm) 1/2残。	細砂~径3mmの礫多く含む。径6mmの礫一個有り。やや軟質。鈍い橙。	口縁部は内傾する。鐔は貼り付ける。内外面は回転横なで後体部下半は篋削り。	竈・覆土。
144	羽釜	器高:[172mm] 口径: (222mm) 口縁~体部上位1/8残。	細砂~径3mmの礫含む。やや軟質。口縁部黒・体部橙。	口縁部は内傾する。鐔は貼り付ける。内外面は回転横なで後体部下半は篋削り。	竈・中央。
145	羽釜	器高:[90mm] 口径: (206mm) 口縁部~体部上位1/3残。	細砂~径3mmの礫含む。やや軟質。黒・褐。接合部で色が異なる。	口縁部は外傾する。鐔は貼り付ける。内外面は回転横なで。口縁端部は平坦。	掘形。破片の転用?。
146	用途不明 石製品	長:98mm 幅:81mm 厚:19mm 重:260g	粗粒安山岩。	川原石の一部を使用する。	西壁中央。
147	用途不明 石製品	長:154mm 幅:112mm 厚:26mm 重:710g	粗粒安山岩。	川原石の片面を使用する。欠損部は摩滅しており、使用前のものと考えられる。	中央。
148	用途不明 石製品	長:164mm 幅:129mm 厚:37mm 重:1440g	粗粒安山岩。	川原石の片面を使用する。	竈付近。

第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
170	砥石	長:125mm 幅:58mm 厚:50mm 重:640g	砥沢石。	4面共に使用している。右側面の中央は溝状に浅くくぼんでいる。	中央。
171	砥石	長:84mm 幅:61mm 厚:26mm 重:180g	砥沢石。	2面のみの使用である。裏面は多用されていないが、中央が溝状にくぼむ。	中央。

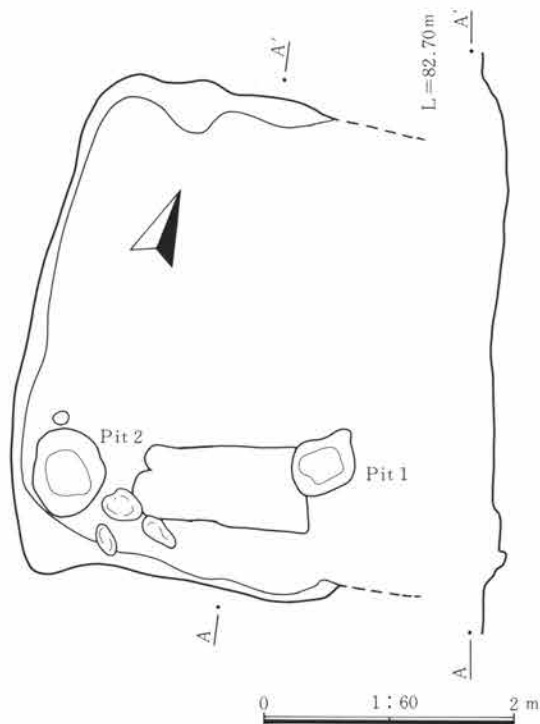
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
164	埴土師器	器高:96mm 口径:100mm 底径:45mm 完形。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。硬質。酸化。橙。	口縁部は「く」字状に外湾し、広がる。丸底に近い平底。内面:口縁部は横なで後匱磨き、体部~底部はなで。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	住居内南西部床直。
165	埴土師器	器高:188mm 口径:152mm 底径:43mm 最大径:170mm 口縁部~底部3/4残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	口縁部は大きく、「く」字状に外湾する。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで後匱磨き、体部~底部は匱削り。	住居内北西部隅床直。内外面に油煙付着。
166	甕土師器	器高:205mm 口径:(156mm) 底径:(54mm) 最大径:(208mm) 口縁部~底部1/3残。	径1~2mmの砂粒を含む。軟質。酸化。灰黄褐。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部~底部は匱なで。外面:口縁部は横なで、体部は匱削り後匱磨き、底部は匱削り。	住居内南西部床上5cm。外面に油煙付着。
167	脚付甕土師器	器高:[118mm] 口径:(200mm) 脚径:一 口縁部~体部2/5残。	径1~2mmの砂粒を含む。軟質。酸化。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部は横なで、体部上端は匱なで、体部はなで。外面:口縁部は横なで、体部はなで、体部下端は匱削り。	住居内中央部床上20cm。内外面に油煙付着。
168	高杯土師器	器高:[151mm] 口径:一脚径:一 口縁部~脚部2/3残。	径2~3mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。明赤褐。	体部~口縁部は直線的に広がり、脚部は漏斗状にひろく。内面:口縁部~体部は横なで後匱磨き、底部はなで、脚部は匱削り。内面:口縁部は横なで、体部はなで後匱磨き、底部脚部上半は匱削り、脚部下端は横なで。	住居内中央部床上10cm。炉周辺。
169	高杯土師器	器高:[120mm] 口径:一脚径:165mm 体部下端~脚部4/5残。	径1~2mmの砂粒を含む。硬質。酸化。明赤褐。	脚部は漏斗状にひろく。内面:体部下端~底部は匱磨き、脚部上半は匱削り、脚部下半はなで。外面:体部下半はなで、底部は匱削り、脚部上半は匱削り、脚部下半はなで。	住居内中央部床上10cm。炉周辺。
172	用途不明石製品	長:83mm 幅:60mm 厚:10mm 重:80g	粗粒安山岩。	1面擦られている。	住居内南西部床直。
173	用途不明石製品	長:104mm 幅:83mm 厚:34mm 重:450g	粗粒安山岩。	2面擦られている。	住居内中央部床上20cm。
174	用途不明石製品	長:99mm 幅:86mm 厚:46mm 重:390g	粗粒安山岩。	2面擦られている。	住居内中央部床上20cm。

## 4区5号住居跡

当住居跡は、3区1号住居跡・4区6号住居跡が近接するが、重複は無い。当住居跡の規模は、東側が検出できなかったために確定できないが、南北は3.9mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅

丸長方形を呈すると推定される。残存状態は悪く、掘形での検出であり、確認面までの壁の立ち上がりは約5~15cmである。床面は住居内北西部から僅かに検出できただけである。壁溝は検出できなかった。

住居内からは2基のピットが検出できた。しかし、支柱穴と考えられるピットは無かった。貯蔵穴と考えられるピットは、南西隅から検出できた。規模は、長軸約70cm・短軸約55cm・床面からの深さ約30cmであり、平面形は楕円形を呈する。竈・炉は検出できなかった。当住居跡は重複関係も、遺物の出土も無く、時期は不明である。



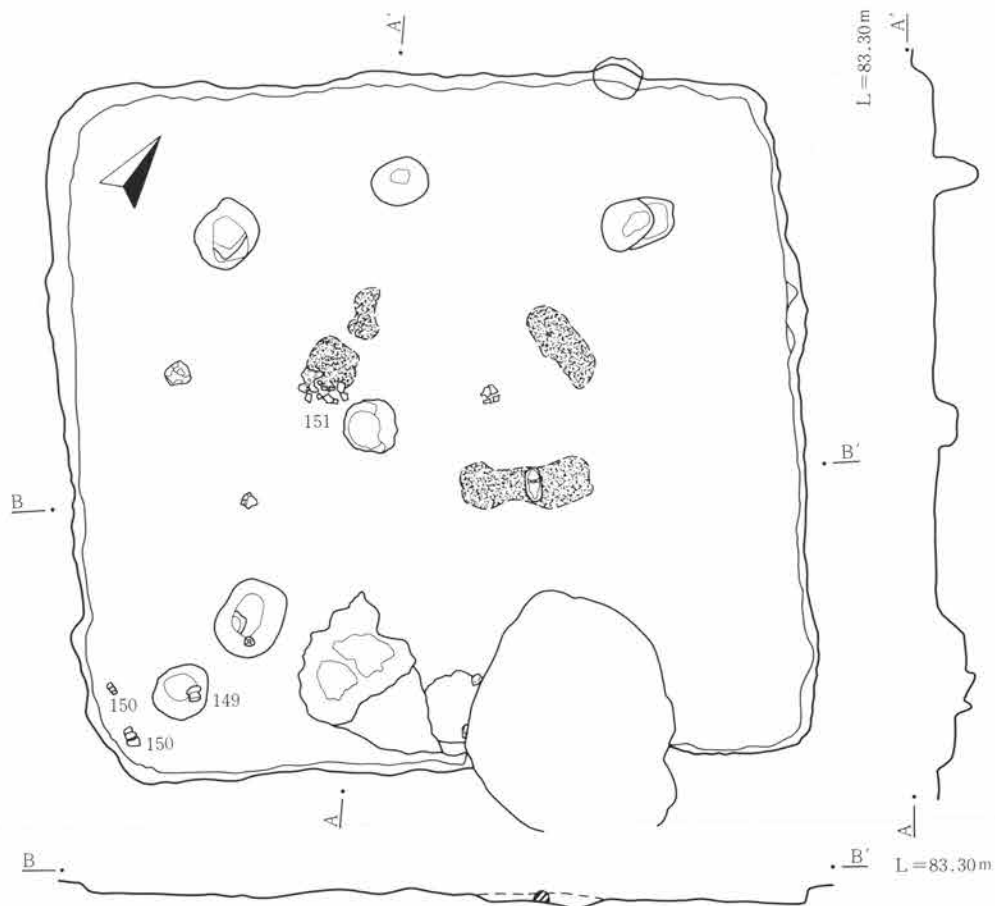
第75図 4区5号住居跡

## 4区6号住居跡

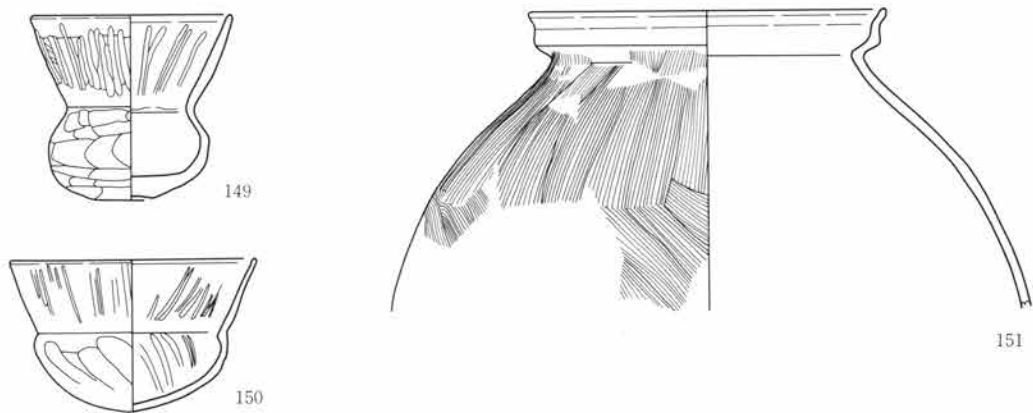
当住居跡は、4区4号住居跡・4区5号住居跡・4区11号住居跡が近接するが、重複は無い。当住居跡の規模は、東西約5.9m・南北約5.5mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-46°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約10~20cmである。床面は、比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝は、検出できなかった。

炉は、住居内中央部のやや南東寄りで確認できた。炉からは、焼土の分布と囲みに用いられたと考えられる河原石が検出できた。住居内中央部のやや北東よりとやや北西よりからも焼土の分布が確認できた。北西よりの焼土の上からは土師器の台付甕が出土しており、この焼土も炉の可能性はある。支柱穴は、4基と考えられるが、南東部の柱穴は、検出できなかった。柱穴の規模は、長軸約50~60cm・短軸約35~50cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴と考えられるピットは、南西隅から検出できた。規模は、長軸約50cm・短軸約40cm・床面からの深さ約40cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴の上面からは土師器の埴が出土している。

遺物は、前述の土師器の台付甕・埴が出土している。台付甕は「S」字状口縁である。遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀後半である。



第76図 4区6号住居跡

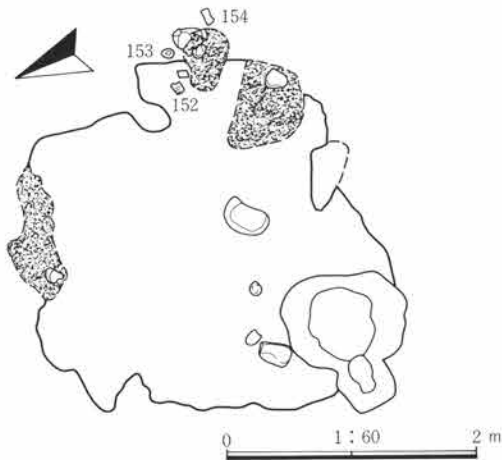


第77図 4区6号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
149	埴 土師器	器高:74mm 口径:82mm 底径:24mm 完形。	径1~2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。浅黄橙。	口縁部は直線的に広がる。平底。内面:口縁部は横なで後笕磨き、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで後笕磨き、体部~底部は笕削り。	南西部隅。
150	埴 土師器	器高:61mm 口径:100mm 底径:— 口縁部~底部2/3残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は直線的に広がる。丸底。内面:口縁部は横なで後笕磨き、体部~底部はなで後笕磨き。外面:口縁部は横なで後笕磨き、体部~底部は笕削り。	南西部隅床直。外面に油煙付着。
151	台付甗 土師器	器高:[120mm] 口径:(145mm) 脚径:— 口縁部~体部上半1/3残。	砂粒を含む。軟質。酸化。鈍い赤褐。	口縁部は「S」字状。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦刷毛目。	住居内中央部床直焼土直上。内外面に油煙付着。

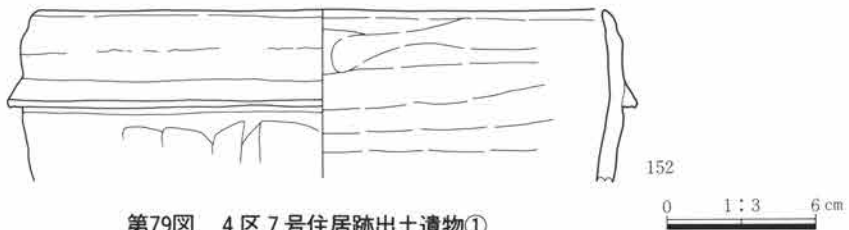
#### 4区7号住居跡

当住居跡より確認された床面から70cmと近接して、4区6号住居跡が存在する。また、北東2.8mには4区5号住居跡がある。

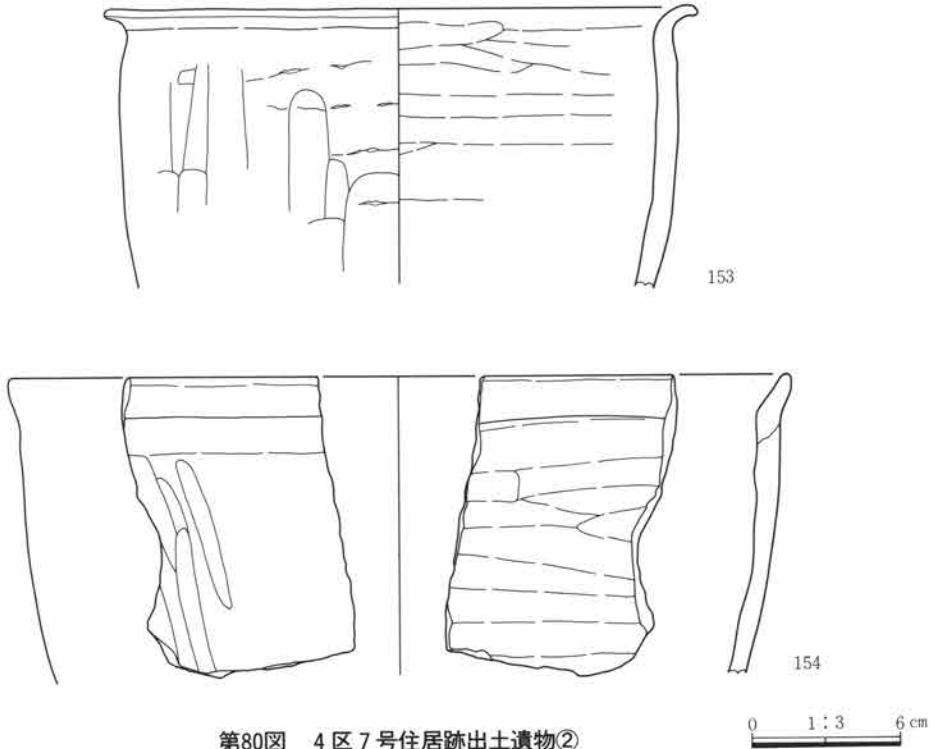


第78図 4区7号住居跡

床面のみ確認であるため、規模・平面形は不明である。主軸方位は不明である。床面は一部で良好なものの耕作等で全面には確認できなかった。確認された土坑・ピットと本住居跡との重複は不明である。竈は東壁に構築されている。竈の南と北には焼土の分布が認められた。羽釜(152)・土釜(153・154)などの出土遺物はすべて竈から出土している。



第79図 4区7号住居跡出土遺物①



第80図 4区7号住居跡出土遺物②

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
152	羽釜	器高: [67mm] 口径: (230mm) 口縁部小片。	細砂～粗砂含む。やや軟質。橙。	口縁部はゆるく内傾する。口縁部の調整は非常に雑である。罫は雑に貼り付ける。体部外面篋削り。	竈。
153	土釜	器高: [110mm] 口径: (240mm) 口縁部～体部1/9残。	細砂～径4mmの礫多く含む。普。鈍い橙。	口縁部は強く外反する。口縁部は横なで。体部は内面なで。体部外面はなで後篋削り。体部外面紐造り痕残る。	竈。
154	土釜	器高: [120mm] 口径: (316mm) 口縁部小片。	細砂～粗砂多く含む。やや硬質。鈍い橙。	口縁部は外反する。口縁部は横なで。体部内面は強いなで。体部外面は篋削り後なで。	竈。

#### 4区8号住居跡

当住居跡は、4区9号住居跡・4区1号溝と重複する。4区9号住居跡との新旧関係は、直接的に把握することはできなかったが、出土遺物から当住居跡の方が新しいと考えられる。4区1号溝との新旧関係は、同溝が当住居跡の北西部から中央部の壁・床を破壊していることから、当住居跡の

方が古い。

当住居跡の規模は、南西部のみの検出であり、不明であるが、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。壁溝は検出できなかった。炉・柱穴は検出できなかった。貯蔵穴と考えられるピットは、北西隅から検出できた。規模は、径約50cmであり、平面形は不整形な円形を呈する。

遺物の出土は非常に少なく、土師器の甕が出土しただけである。遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀末～5世紀初頭である。

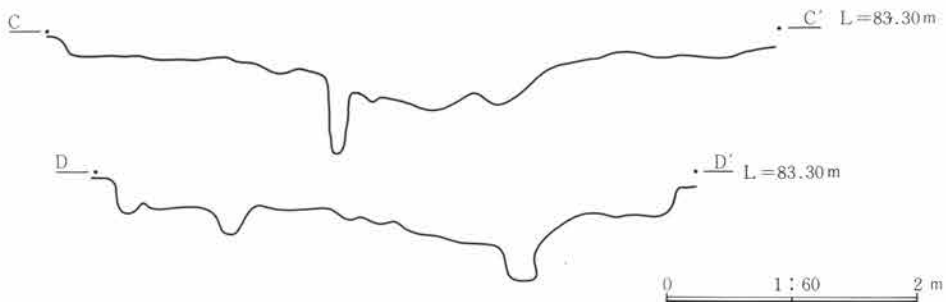
#### 4区9号住居跡

当住居跡は、4区1号住居跡・4区8号住居跡・4区1号溝と重複する。4区1号住居跡との新旧関係は、直接的に把握することができなかったが、出土遺物から当住居跡の方が古い。4区8号住居跡との新旧関係も、直接的に把握することができなかったが、出土遺物から当住居跡の方が古い。4区1号溝との新旧関係は、同溝が当住居跡の南西部から北東部の壁・床を破壊していることから当住居跡の方が古い。

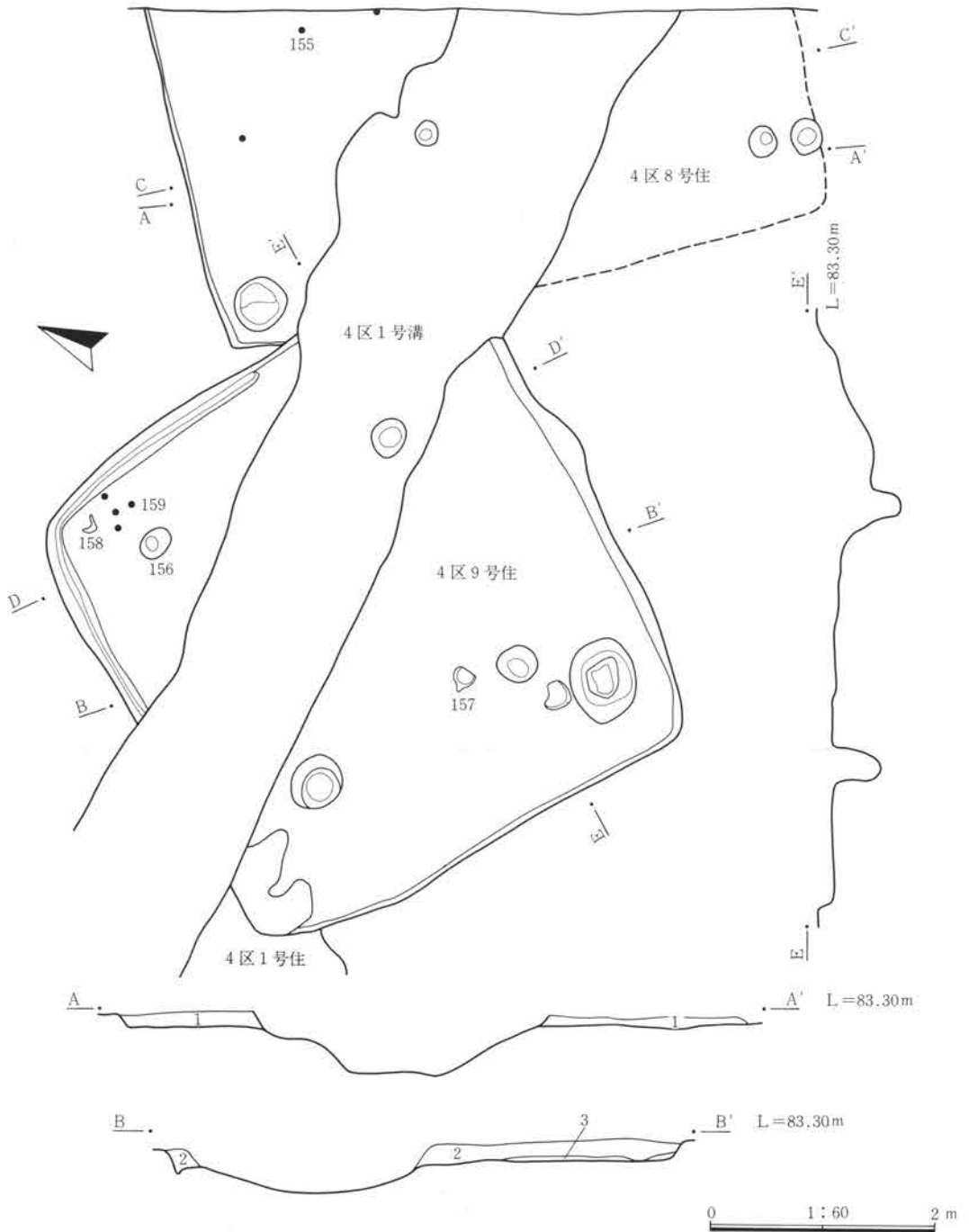
当住居跡の規模は、東西約4.5m・南北約4.6mであり、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-42°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約15～20cmである。床面は、比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝は、北西隅を中心とした部分からのみ検出できた。規模は、幅約10～20cm・床面からの深さ約5cmである。

炉は、検出できなかった。支柱穴は4基である。規模は、長軸約30～40cm・短軸約20～40cm・床面からの深さ約20～40cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴は、南東隅から検出できた。規模は、長軸約70cm・短軸約60cm・床面からの深さ約40cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。

遺物は、「S」字状口縁を持つ土師器の台付甕の他、土師器の甕・壺・高杯などが出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀後半である。



第81図 4区8号住居跡・9号住居跡エレベーション図



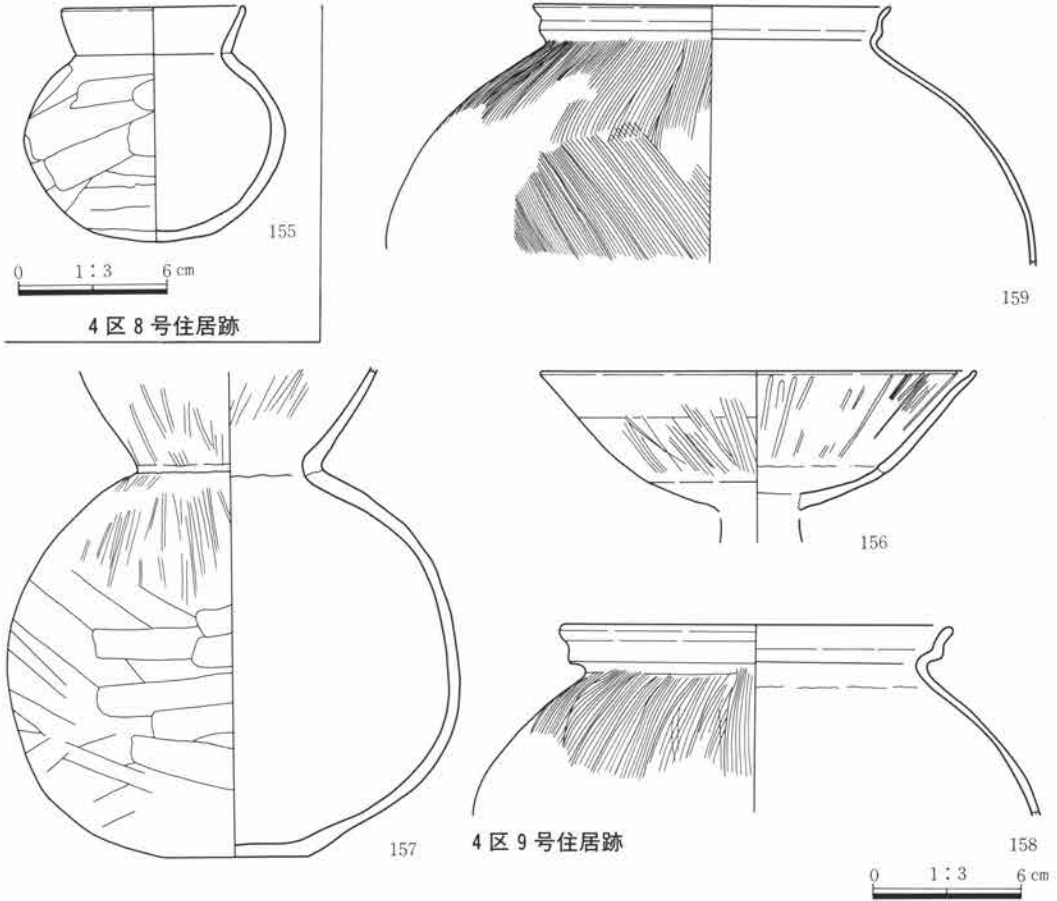
4区8・9号住居跡土層説明

- 1 褐色土：ローム小ブロック・軽石を含む。
- 2 褐色土：ローム小ブロック及び少量の軽石を含む。
- 3 褐色土：ローム小ブロックを含む。

第82図 4区8号住居跡・9号住居跡



第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(4区8・9号住)



第83図 4区8号住居跡・9号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
155	甕 土師器	器高:94mm 口径:(74mm) 底径:— 最大径:105mm 口縁部~底部3/4残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。明赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	住居内北西部床上5cm。内外面に油煙付着。

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
156	高杯 土師器	器高:[56mm] 口径:(176mm) 脚径:— 杯部2/3残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。赤褐~橙。	口縁部は直線的に広がる。内面:口縁部~体部は横なで後篋磨き、底部はなで。外面:口縁部~体部は横なで後篋磨き、底部はなで。	住居内北東部床直。外面に油煙付着。二次焼成を受けている。

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
157	壺 土師器	器高:[195mm] 口径: — 底径:60mm 最大 径:182mm 口縁部~底 部4/5残。	径2~3mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。浅 黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体 部下半。内面:口縁部は横なで後篔磨 き。体部~底部は篔なで。外面:口縁部 は横なで後篔磨き、体部上半はなで後 篔磨き、体部下半~底部は篔削り。	住居内中央部床 直。
158	台付甕 土師器	器高:[76mm] 口径: 160mm 脚径:— 口縁 部~体部上端2/3残。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。淡 黄。	口縁部は「S」字状。内面:口縁部は横な で、体部上端はなで、指頭痕が残る。外 面:口縁部は横なで、体部上端は縦刷毛 目。	住居内北東部隅。 内外面に油煙付 着。
159	台付甕 土師器	器高:[103mm] 口径: 145mm 脚径:— 口縁 部~体部上半1/2残。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。浅 黄橙。	口縁部は「S」字状。内面:口縁部は横な で、体部上半はなで、体部上端に指頭痕 が残る。外面:口縁部は横なで、体部上 半は縦刷毛目。	住居内北東部隅。 内外面に油煙付 着。

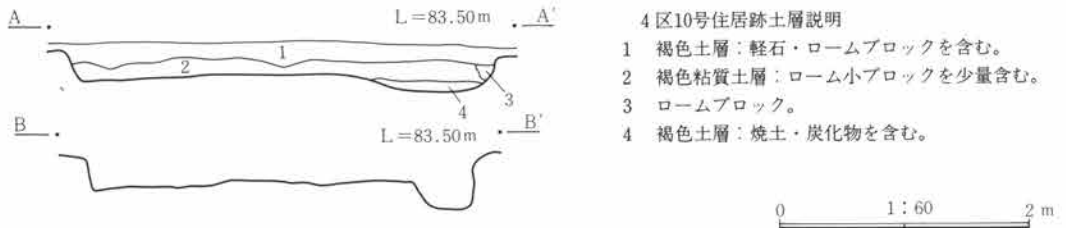
#### 4区10号住居跡

当住居跡は、他遺構との重複はないが、北約90cmに4区12号住居跡、東約40cmに4区11号住居跡が近接する。また、4区4号住居跡とも近接している。

規模は東西約3.8m・南北約3.2mで、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-86°-Eである。残存壁高は20~26cmと残存状態は当遺跡では良好である。東と南壁沿いには5基の土坑が確認されている。規模は1が長軸60cm・短軸42cm、2が長軸34cm・短軸30cm、3が長軸122cm・短軸70cm、4が長軸66cm・短軸60cm、5が長軸105cm・短軸78cm、深さは1が23cm、2が15cm、3が8cm、4が33cm、5が23cmである。いずれも床下土坑と考えられる。周溝は確認されない。

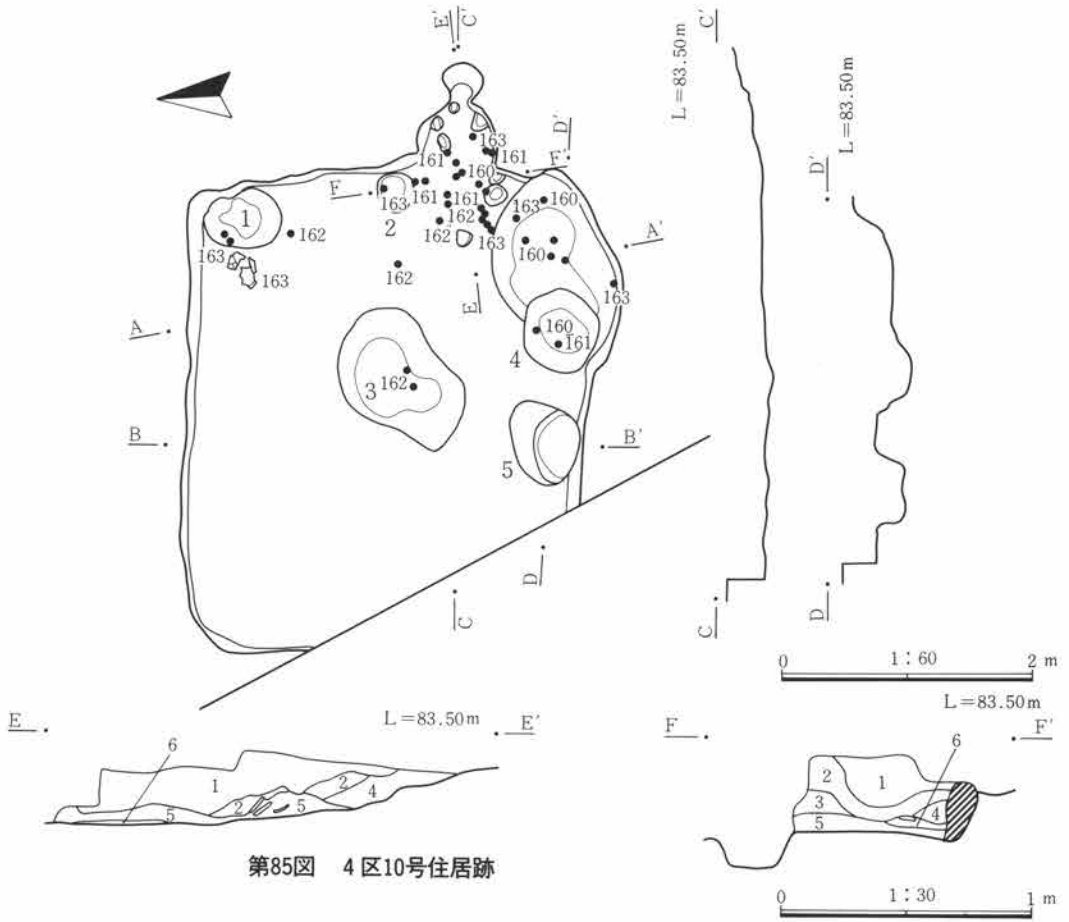
竈は東壁南隅に構築され、燃烧部は壁外に位置する。煙道は壁外に約80cm張り出している。遺物は竈を中心に羽釜(160・161・162)・土釜(163)が出土しており、いずれも遺構内の接合率は高い。

竈の南にある土坑は、住居跡の壁から張り出している点は貯蔵穴とは考えにくい、160の羽釜が竈内出土破片と接合関係があるため貯蔵穴の可能性はある。深さは34cmを測る。

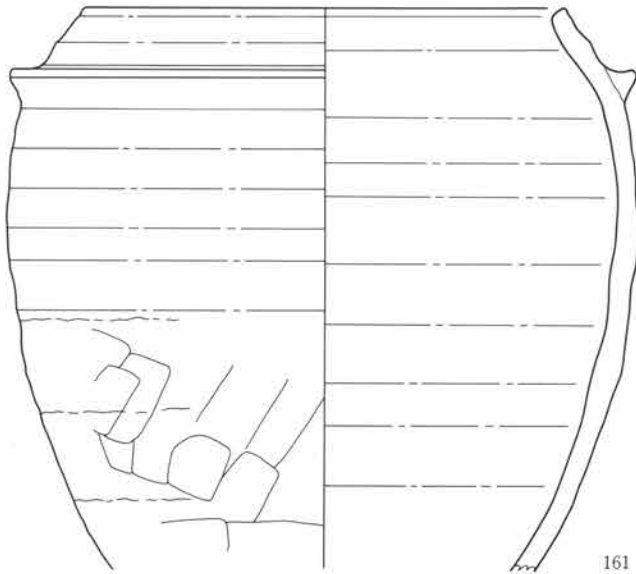


第84図 4区10号住居跡断面図・エレベーション図

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(4区9・10号住)



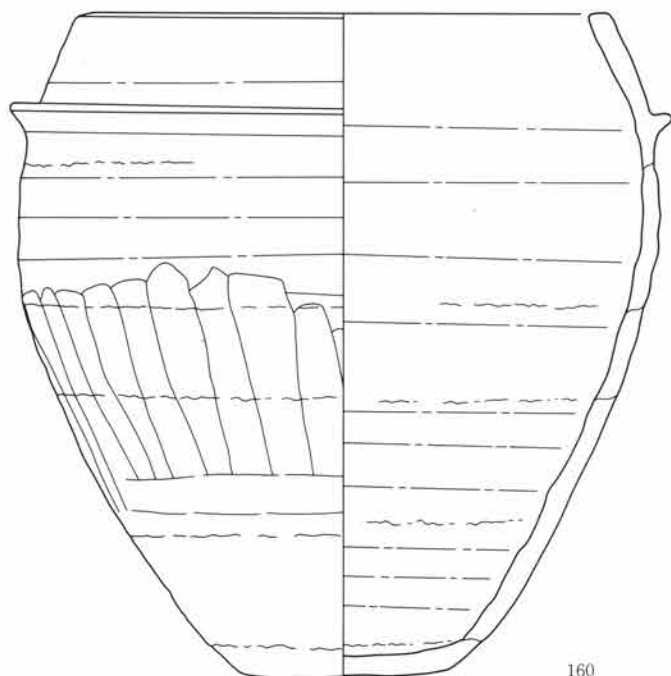
第85図 4区10号住居跡



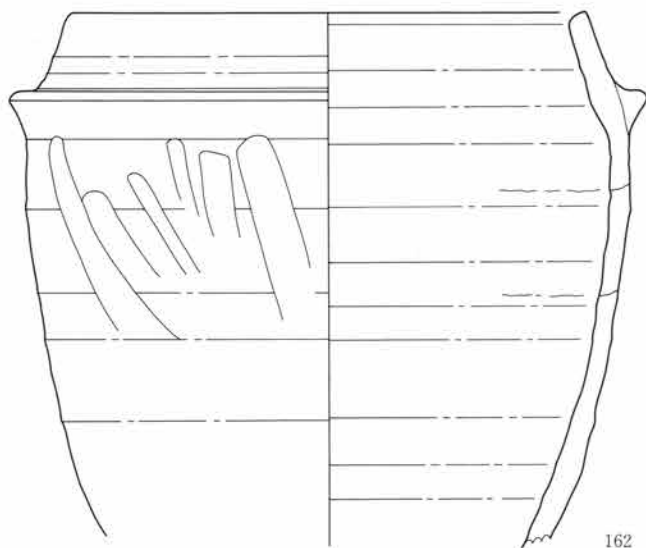
第86図 4区10号住居跡出土遺物①

4区10号住居跡竈土層説明

- 1 褐色土層：軽石・ロームブロック・焼土・炭化物を含む。
- 2 暗褐色土層：ローム粒・焼土粒・灰を含む。
- 3 褐色土層：ロームブロックを含む。
- 4 赤褐色土層：焼土・灰・炭化物を含む。
- 5 褐色土層：ロームブロック・焼土・炭化物を多く含む。
- 6 褐色土層：ローム粒・焼土粒・炭化物粒を含む。



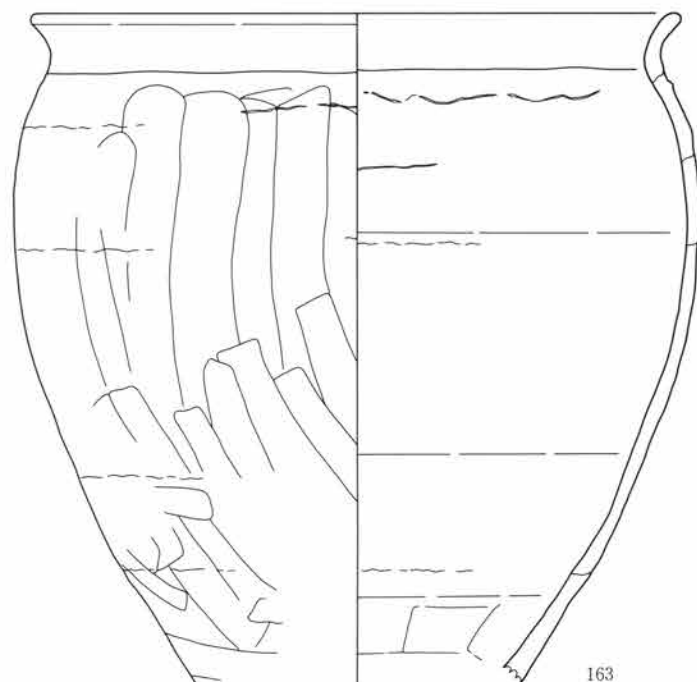
160



162

第87図 4区10号住居跡出土遺物②

0 1:3 6 cm



第88図 4区10号住居跡出土遺物③

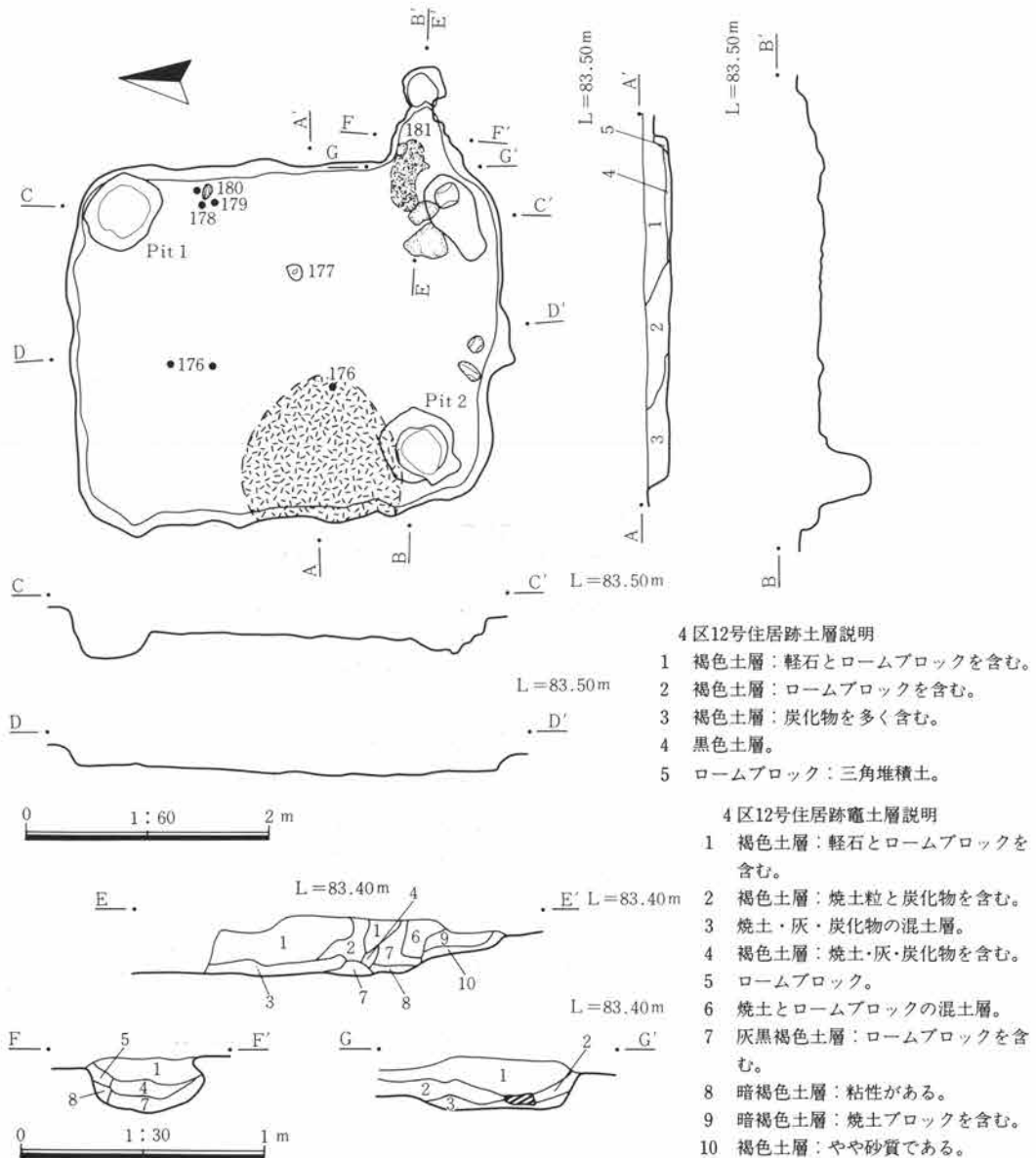
0 1:3 6 cm

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
160	羽 釜	器高:265mm 口径:215 ~220mm 底径:83mm 完形。	細砂~径4mmの礫多く 含む。軟質。鈍い橙。	口縁部は強く内傾する。罫は貼り付け。 口縁部は横なで。体部内面は回転横な で。体部外面回転横なで後下位篋削り。	覆土。体部下位摩 減する。
161	羽 釜	器高:[225mm] 口径: (194mm) 口縁部~体 部下位1/3残。	細砂~粗砂多く含む。 やや軟質。鈍い橙。	口縁部は強く内傾する。罫は貼り付け。 口縁部は横なで。体部内面は回転横な で。体部外面回転横なで後下位篋削り。	竈・北東隅。
162	羽 釜	器高:[211mm] 口径: (208mm) 口縁部~体 部下位2/3残。	細砂~径1mmの粗砂多 く含む。径4mmの礫少量 含む。やや硬質。鈍い 橙。	口縁部は強く内傾する。罫は貼り付け。 口縁部は横なで。体部内面は回転横な で。体部内外面は回転横なで、後外面の み一部篋なで。	竈・北東隅。
163	土 釜	器高:[270mm] 口径: (263mm) 口縁部~体 部下位1/6残。	細砂~径2mmの礫多く 含む。硬質。鈍い橙。体 部外面下位のみ黒灰。	口縁部は横なで。体部外面は篋削り。体 部内面はなで。	覆土。

4区12号住居跡

当住居跡は、他遺構との重複はないが、南約90cmに4区10号住居跡が、東約20cmに4区11号住居跡が近接する。また、4区4号住居跡も近接している。

規模は東西約2.9m・南北約3.4mを測り、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-86°-Eである。残存壁高は10~15cmである。西壁中央の床面には炭化物の分布が認められた。柱穴は認められないが、北東隅と南西隅には2基のピットが確認されている。深さはピット1が15cm、ピット2が50cmを測る。周溝は確認されない。

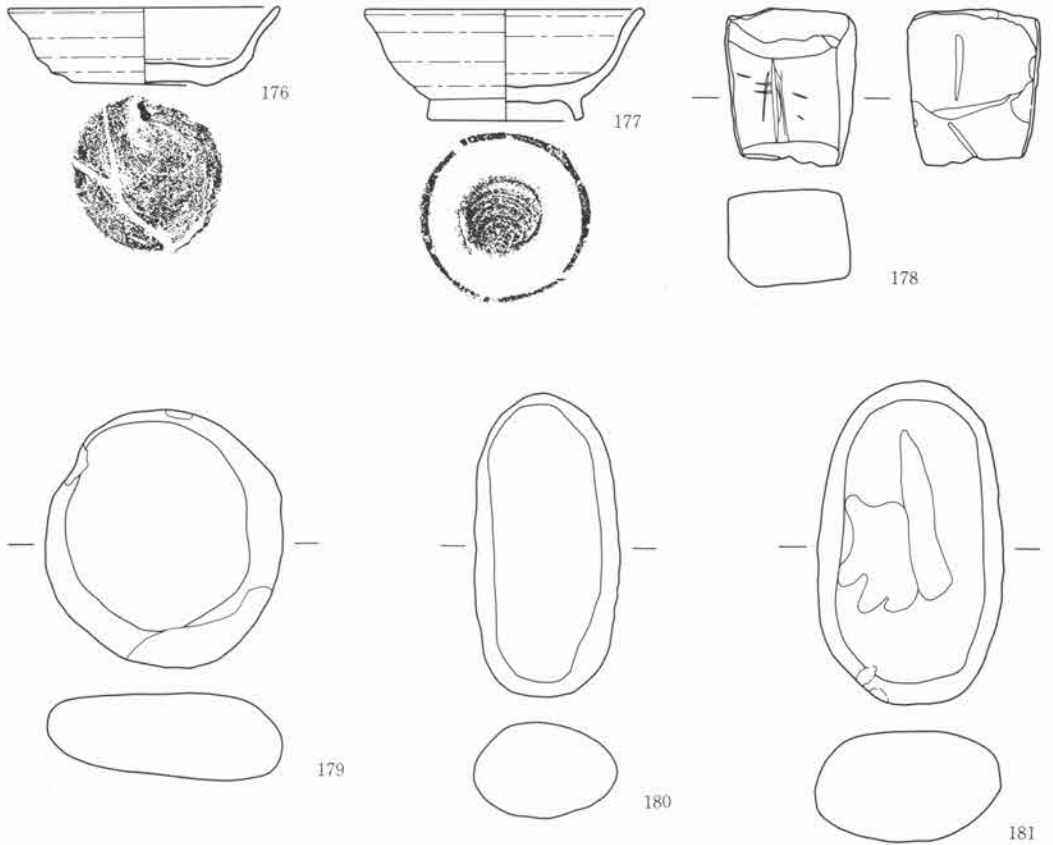


第89図 4区12号住居跡

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(4区12号住)

竈は東壁南隅に構築されて、燃烧部は壁外に位置する。煙道は壁外に約80cm張り出している。袖や袖石は遺存していない。

遺物は中央部から須恵器の杯(176)と碗(177)が出土している。



第90図 4区12号住居跡出土遺物

0 1 : 3 6 cm

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
176	杯 須恵器	器高:31mm 口径:(110mm) 底径:58mm 口縁部2/3残。	細砂～径1mmの粗砂含む。白色・赤色粘土粒含む。やや軟質。橙。	口縁部は外反する。底部外面は右回転糸切り無調整。	中央。器表摩滅する。
177	碗 須恵器	器高:44mm 口径:113mm 底径:63mm 口縁部一部欠。	細砂～粗砂多く含む。やや軟質。黒灰。	口縁部外反する。体部ゆるく内湾する。高台貼り付け時に、回転糸切り痕ほとんどで消す。	中央。口縁部内面摩滅。

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
178	砥石	長: [63mm] 幅: 51mm 厚: 38mm 重: 160g 小口欠。	砥沢石。	小口は欠損する。裏面を除き3面を使用するが、表面の使用頻度が高い。表面には刃ならしによる刃物傷あり。	東壁中央。
179	用途不明 石製品	長: 102mm 幅: 96mm 厚: 32mm 重: 560g	粗粒安山岩。	側縁を除き、僅かに使用する。側縁に煤付着する。	東壁中央。
180	薦石	長: 121mm 幅: 58mm 厚: 39mm 重: 460g	粗粒安山岩。	小口周辺に使用痕は認められない。	東壁中央。
181	薦石	長: 121mm 幅: 74mm 厚: 44mm 重: 660g	粗粒安山岩。	両面には擦痕が認められる。	竈内。

#### 4区13号住居跡

当住居跡は、3区1号溝と重複する。新旧関係は、3区1号溝が当住居跡の南東部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。当住居跡の規模は、東側が調査区域外のために不明

であるが、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈すると推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約10~15cmである。壁溝は検出できなかった。

住居跡内からは4基のピットが検出できたが、炉・竈・柱穴は、検出できなかった。貯蔵穴と考えられるピットは、南西隅のピットである。規模は、径約60cm・床面からの深さ約20cmであり、平面形は不整形な円形を呈する。当住居跡からは、遺物の出土も無く、時期は不明である。



第91図 4区13号住居跡



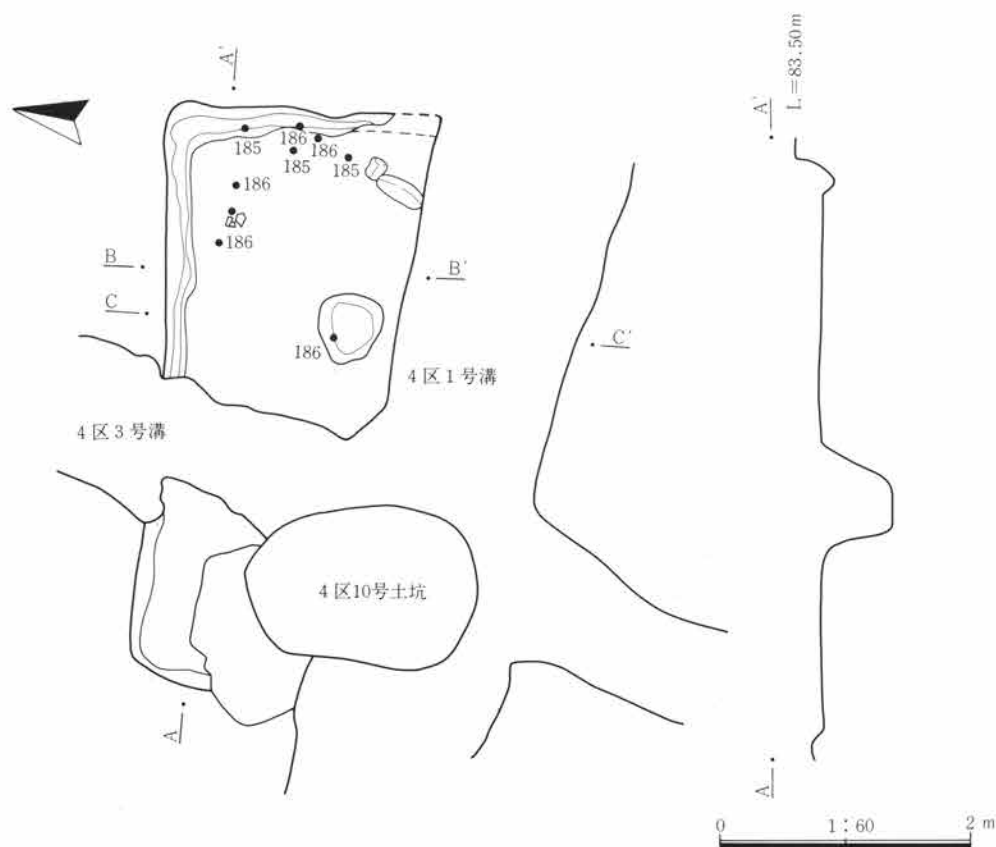
#### 4区14号住居跡

当住居跡は、4区1号溝・4区3号溝と重複する。4区1号溝との新旧関係は、同溝が当住居跡の南側の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。4区3号溝との新旧関係は、同溝が当住居跡北壁の中央部分から当住居跡の壁・床を破壊していることから当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、4区1号溝の破壊により不明であるが、東西は約4.7mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈すると推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約15~20cmである。床面は比較的硬く、ほぼ平坦である。北東隅を中心に壁溝を検出することができた。規模は、幅約15~20cmであり、床面からの深さは約5~10cmである。

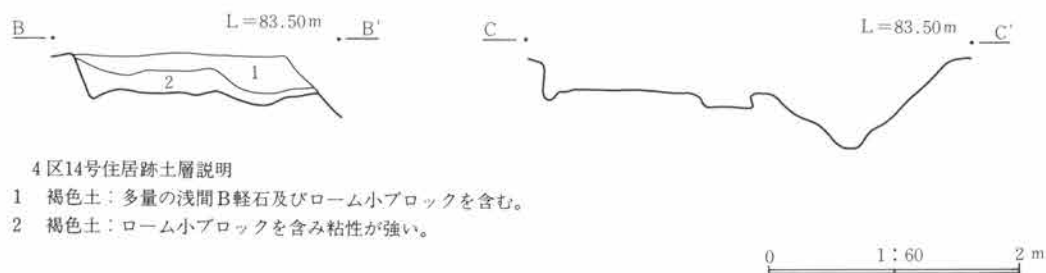
住居跡内の北東部からピットを1基検出することができた。規模は、長軸約60cm・短軸約50cm・床面からの深さ約10cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。ピットの規模・形態・位置から柱穴・貯蔵穴と考えることはできない。炉・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。

当住居跡からの遺物は、土師器の埴・高杯の他、用途不明の石製品が出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は5世紀前半である。



第92図 4区14号住居跡

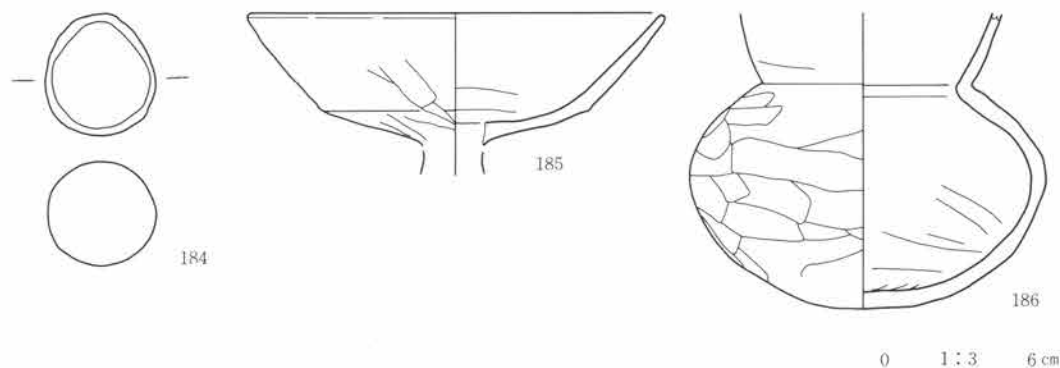
#### 第IV章 発見された遺構と遺物



##### 4区14号住居跡土層説明

- 1 褐色土：多量の浅間B軽石及びブローム小ブロックを含む。
- 2 褐色土：ブローム小ブロックを含み粘性が強い。

第93図 4区14号住居跡断面図・エレベーション図



第94図 4区14号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
184	用途不明 石製品	49mm×44mm×42mm 重:120g	粗粒安山岩。	周囲が擦られている。	北側壁中央脇床直。
185	高杯 土師器	器高:[53mm] 口径: (168mm) 脚径:— 杯 部1/2残。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。橙。	体部~口縁部は直線的に広がる。内面: 口縁部~体部はなで後縦篋磨き、体部 はなで。外面:口縁部は横なで、体部~ 底部は篋削り。	住居内北東部床 直。内面に油煙付 着。二次炎を受け ている。
186	罎 土師器	器高:[118mm] 口径: — 底径:— 最大径: 143mm 口縁部一部欠。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。赤 橙。	口縁部は「く」字状に外湾。丸底。最大径 は体部上半。内面:口縁部は横なで、体 部~底部は篋なで。外面:口縁部は横な で、体部~底部は篋削り。	住居内北東部床直 他。

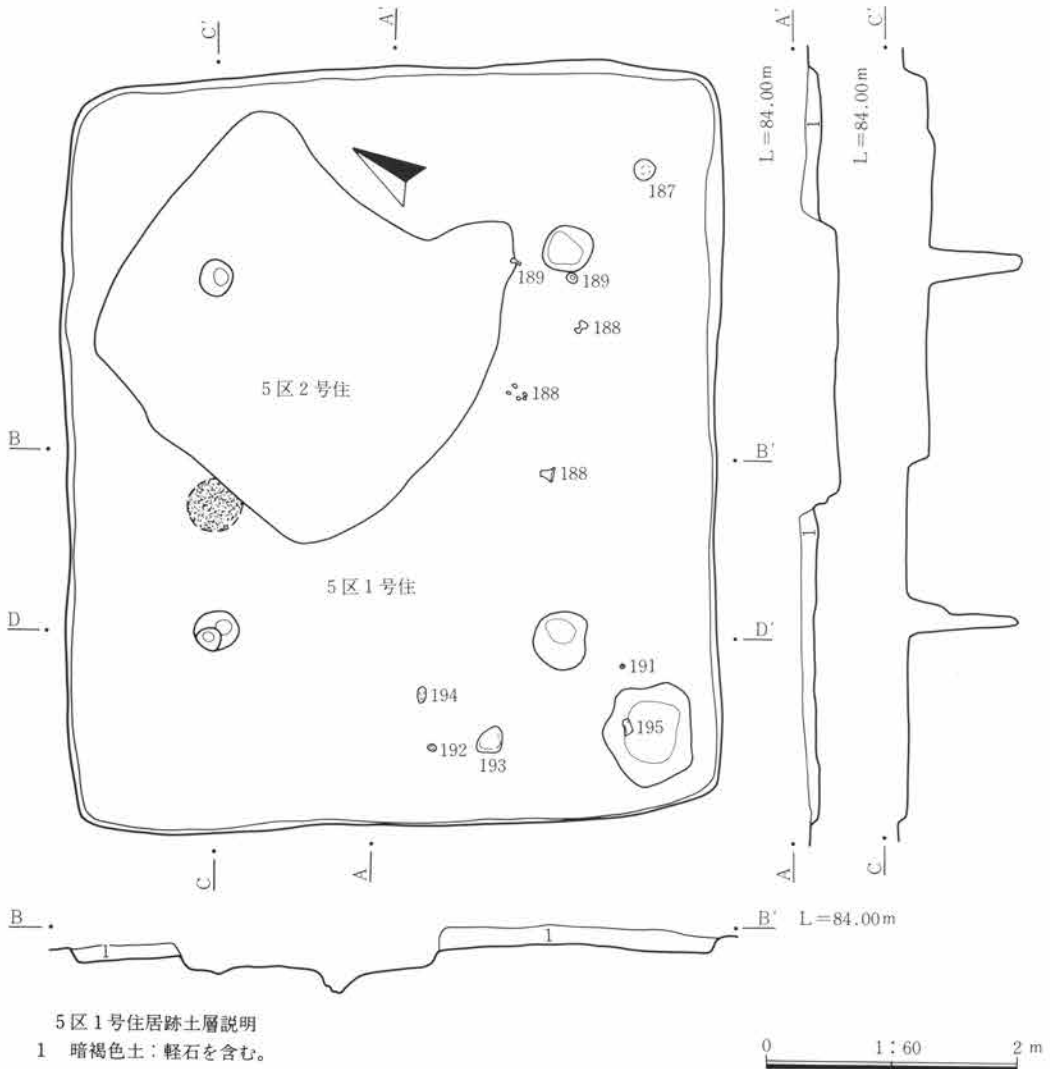
#### 5区1号住居跡

当住居跡は、5区2号住居跡と重複する。新旧関係は、5区2号住居跡の壁・竈が当住居跡の覆土中に築かれていることから、当住居跡の方が古い。当住居跡の規模は、東西約6.0m・南北約5.2mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。軸はN-59°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約5~10cmである。床面は、北東部が5区2号住居跡により破壊されているが、比較的硬く、

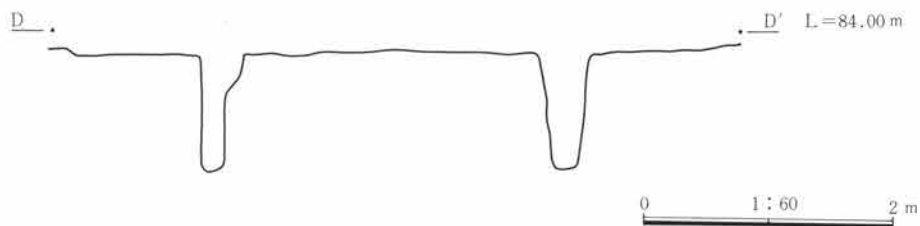
ほぼ平坦である。

炉は北側柱穴の中間やや西よりから検出できた。炉からは、囲みに使用したと考えられる河原石と焼土の堆積が確認できた。主柱穴は4基である。規模は、長軸約30~45cm・短軸約25~40cmであり、床面からの深さは約80~90cmを測る。平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴は、南西隅から検出できた。規模は、長辺約80cm・短辺約70cm・床面からの深さ約30cmであり、平面形は、不整形な長方形を呈する。

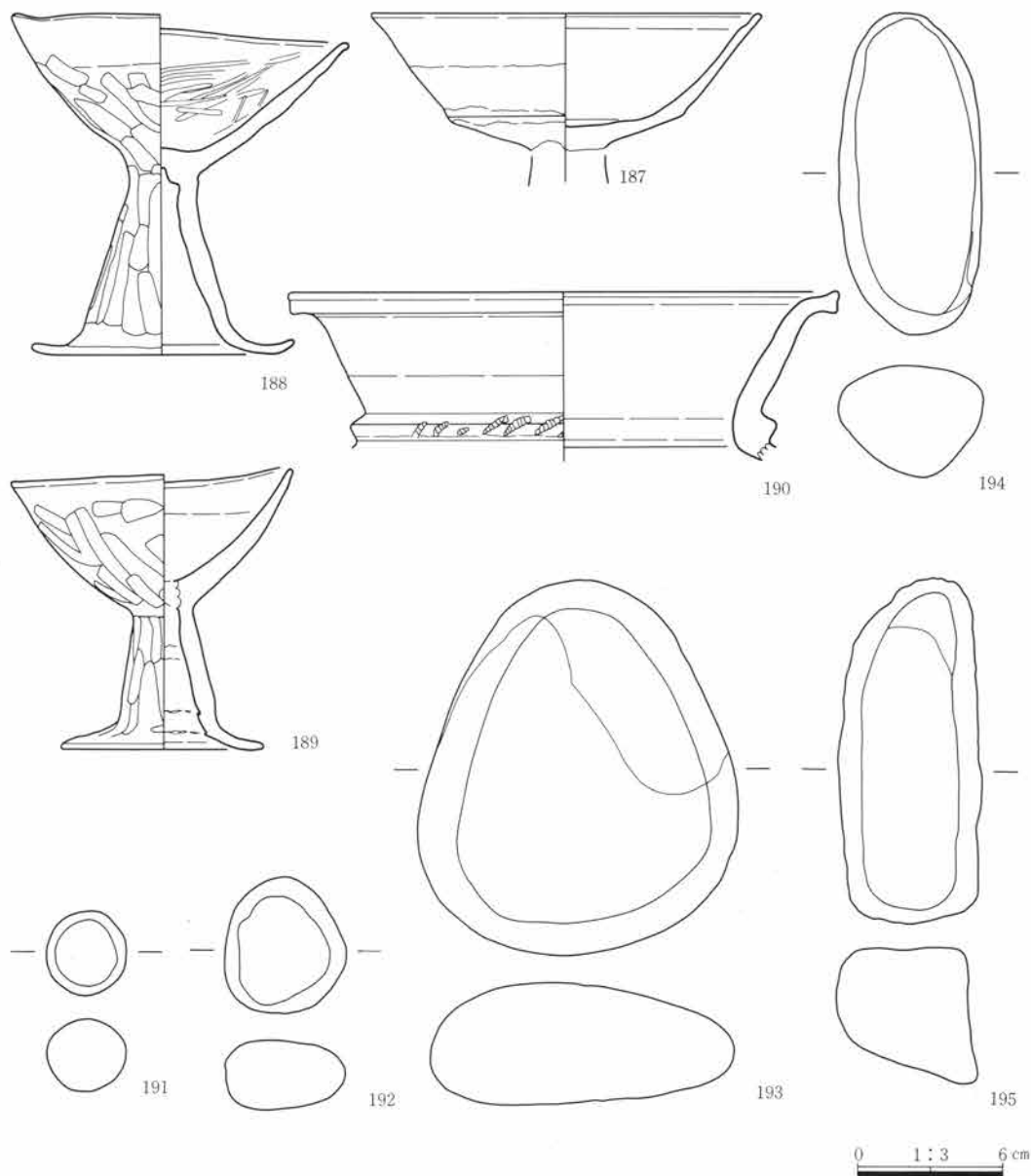
遺物は、土師器の甕・高杯のほか、薦石が出土しているが、出土量は少ない。遺物から推定される当住居跡の時期は5世紀前半である。



第95図 5区1号住居跡



第96図 5区1号住居跡エレベーション図



第97図 5区1号住居跡出土遺物

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(5区1・2号住)

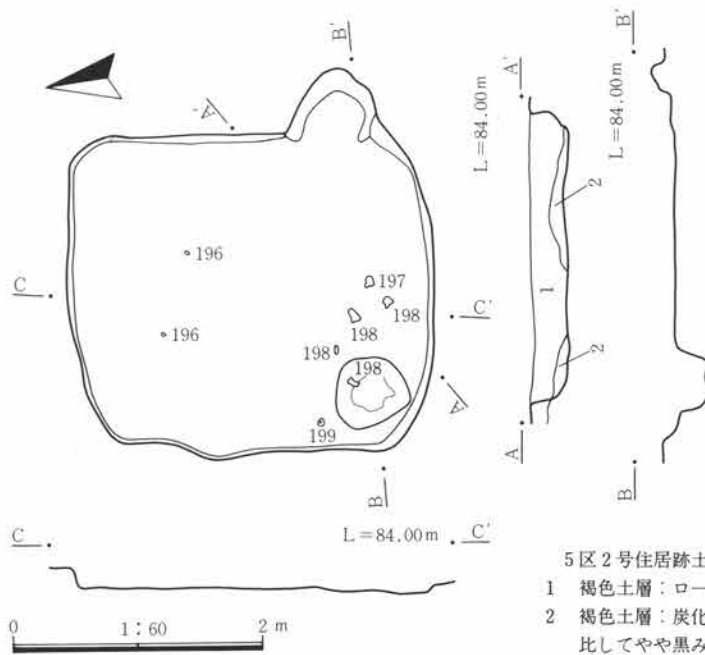
番号	器 種 土 器 種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺 存 状 態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出 土 状 態 備 考
187	高 杯 土 師 器	器高:[57mm] 口径: 162mm 脚径:— 杯部 残。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。浅 黄橙。	体部下端に不明瞭な稜。体部~口縁部 は直線的にひらく。内外面:口縁部は横 なで、体部~底部はなで。	住居内南東部隅床 直。内外面に油煙 付着。
188	高 杯 土 師 器	器高:140mm 口径:141 mm 脚径:(109mm) 口 縁部~脚部3/4残。	径3~4mmの小石及び砂 粒を含む。やや硬質。酸 化。鈍い赤褐。	底部~口縁部は僅かに内湾しながら広 がる。内面:口縁部は横なで、体部~底 部はなで後篋磨き、脚部はなで。外面: 口縁部は横なで、体部~脚部上半は篋 削り、脚部下半はなで。	住居内中央部床上 5cm。
189	高 杯 土 師 器	器高:113mm 口径:116 mm 脚径:84mm ほぼ 完形。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。明 赤褐。	底部~口縁部は僅かに内湾しながら広 がる。脚部は漏斗状にひらく。内面:口 縁部は横なで、脚部はなで。外面:口 縁部は横なで、体部~脚部は篋削り。	住居内中央部床上 5cm他。
190	壺 土 師 器	器高:[69mm] 口径: (230mm) 底径:— 口 縁部小片。	径2~3mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。黄 灰。	口縁部は「コ」字状に外湾。外面頸部に 凸帯を一条回し、篋状工具の押付け有 り。内面:口縁部はなで。外面:口縁部は 横なで。	住居内覆土。
191	用途不明 石製品	34mm×33mm×30mm 重:30g	粗粒安山岩。	球形に近い。擦られている。	住居内南西部床 直。
192	用途不明 石製品	長:56mm 幅:51mm 厚:29mm 重:120g	粗粒安山岩。	2面擦られている。	住居内南西部床 直。
193	用途不明 石製品	長:154mm 幅:133mm 厚:51mm 重:1510g	粗粒安山岩。	2面擦られている。	住居内南西部床 直。2面に油煙付 着。
194	薦 石	長:132mm 幅:59mm 厚:46mm 重:530g	粗粒安山岩。		住居内南西部床 直。
195	薦 石	長:141mm 幅:58mm 厚:56mm 重:800g	粗粒安山岩。		貯蔵穴内。

5区2号住居跡

当住居跡は、5区1号住居跡と重複する。新旧関係は、当住居跡が新しい。重複状態は5区1号住居跡内に位置し、一部の重複ではない。

規模は東西約2.6mと推定され、南北は約2.9mを測る。平面形は南北がやや長い長方形を呈する。主軸方位はN-99°-Eである。残存壁高は25~30cmであり、当遺跡においては遺存状態は良好である。柱穴・周溝は認められない。

竈は東壁南隅に構築されており、燃烧部は壁外に位置する。煙道は壁外に約43cm張り出す。粘質土で作られた袖は、両側に一部のみ遺存している。貯蔵穴は南西隅に位置し、規模は短軸50cm・長軸60cm・深さ約20cmである。

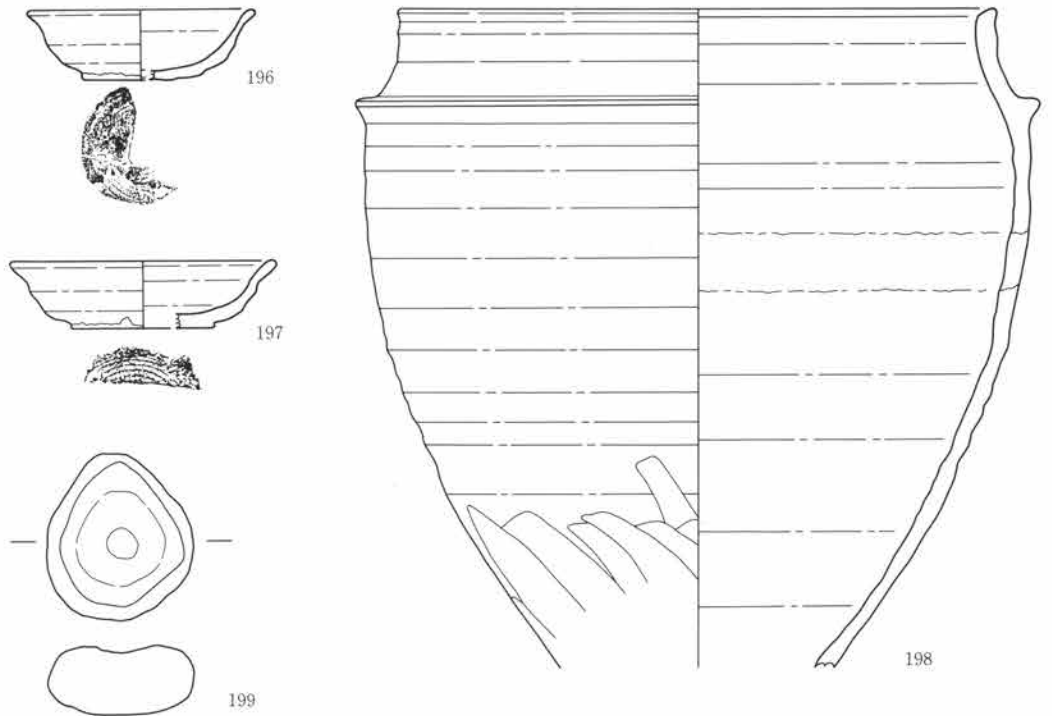


第98図 5区2号住居跡

遺物は貯蔵穴周辺から須恵器杯・羽釜(197・198)が、中央北寄りから須恵器杯(196)が出土している。

5区2号住居跡土層説明

- 1 褐色土層：ローム小ブロックを含む。
- 2 褐色土層：炭化物を少量含む。1層に比してやや黒みが強い。



第99図 5区2号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
196	杯 須恵器	器高:28mm 口径:93mm 底径:(49mm) 1/2残。	細砂～粗砂含む。やや硬質。淡い黄。	口縁部は外反する。体部は内湾する。底部外面回転糸切り無調整。轆轤回転方向不明。	中央北壁寄り。
197	杯 須恵器	器高:27mm 口径:(108mm) 底径:(58mm) 1/3残。	細砂～粗砂・黒色鉱物粒含む。硬質。鈍い黄色。	口縁部は外反する。体部は内湾する。底部外面回転糸切り無調整。轆轤回転方向不明。	南壁中央。
198	羽釜	器高:[265mm] 口径:(242mm) 1/5残。	細砂～径2mmの礫多く含む。硬質。浅黄。	口縁部下半は内傾し、上半は直立気味に立ち上がる。	覆土。
199	用途不明 石製品	長:77mm 幅:60mm 厚:28mm 重:160g	粗粒安山岩。	小さい川原石を利用する。片面のみ使用する。中央は多用する。	南西隅。

### 5区3号住居跡

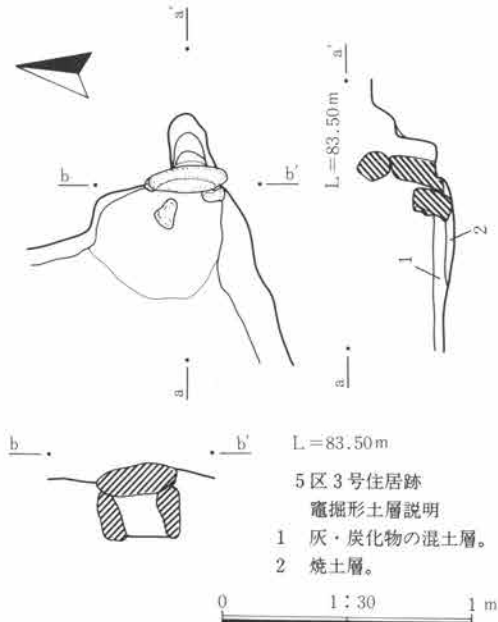
当住居跡は、土坑と重複し、新旧関係は当住居跡が古い。近接する遺構としては、西約50cmに5区1号住居跡が、西約1mに5区2号住居跡がある。

規模は東西約2.8m・南北約3.1mであり、平面形は方形に近い長方形を呈する。主軸方位はN-90°-Eである。残存壁高は21～23cmである。柱穴・周溝は認められない。

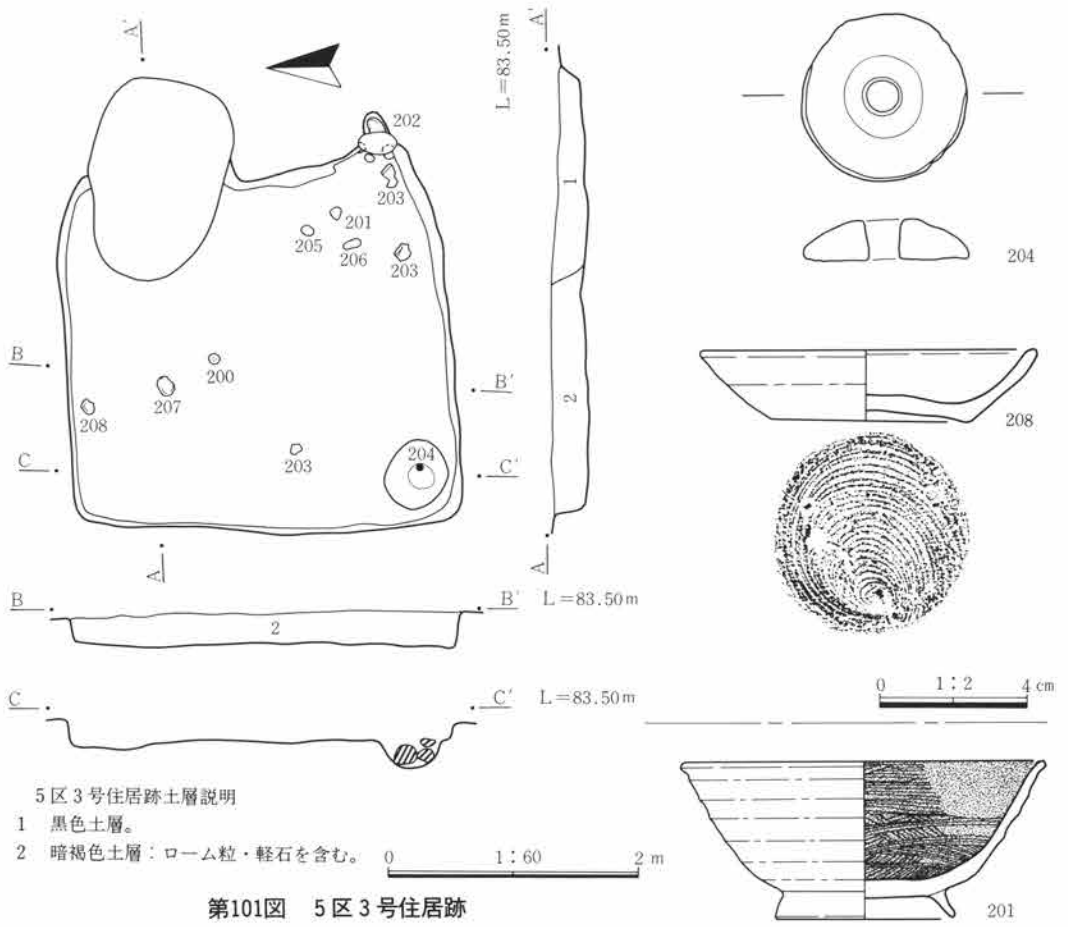
竈は東壁南隅に構築されている。煙道の壁外への張り出しは約27cmであり、壁の延長線上には袖石と天井石が遺存している。天井石前には焼土の分布が認められ、燃焼部は壁内に存在したと考えられる。

貯蔵穴は南西隅に構築されている。規模・平面形は短軸50cm・長軸60cmの楕円形であり、深さは約24cmを測る。

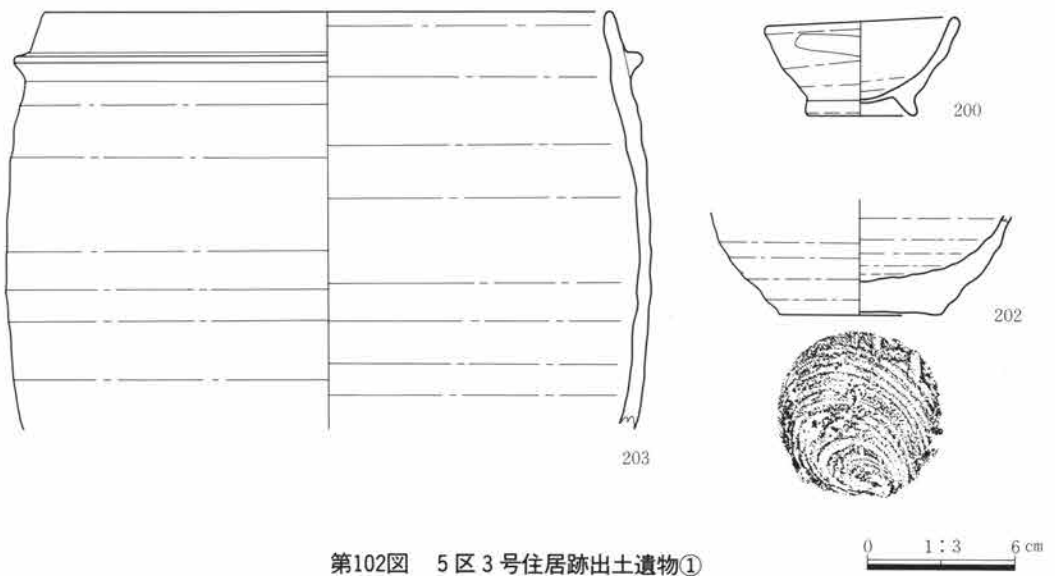
出土遺物は竈付近に多く、須恵器碗(201)・羽釜(203)・用途不明石製品(205・206)等が出土している。また、貯蔵穴からは紡錘車(204)が出土している。



第100図 5区3号住居跡竈平面図・断面図



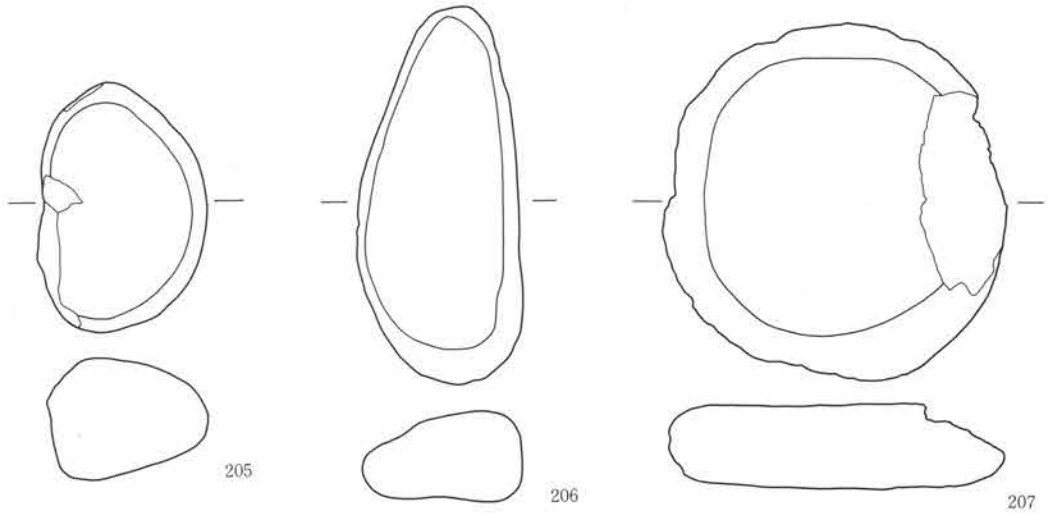
第101図 5区3号住居跡



第102図 5区3号住居跡出土遺物①



第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(5区3号住)



第103図 5区3号住居跡出土遺物②

0 1:3 6 cm

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
200	碗 須恵器	器高:37mm 口径:75mm 底径:43mm 口縁部一部欠。	細砂～径2mmの礫含む。やや軟質。鈍い橙。内面黒。	内面は篋磨き。底部内面は摩滅し、小さい穴があいている。高台は貼り付け時に糸切り痕まで消す。	中央。
201	碗 須恵器	器高:(63mm) 口径:(148mm) 底径:(73mm) 1/4残。	細砂～粗砂含む。やや硬質。断面は灰褐。外面は黒褐・内面は黒。	口縁部は小さく外反する。高台はややたかく、外方に開く。内面は丁寧な篋磨き。糸切り痕は高台貼り付け時に消す。	竈前床面。
202	碗 須恵器	器高:[40mm] 底径:65mm 口縁部欠。	細砂～径1mmの粗砂含む。軟質。淡橙。	底部の器壁は厚い。轆轤目残る。底部外面は右回転糸切り無調整。轆轤右回転。	竈。
203	羽釜	器高:[168mm] 口径:(230mm) 口縁部～体部1/4残。	細砂～径4mmの礫多く含む。片岩質の礫が目立つ。やや軟質。橙。	口縁部はゆるく内傾する。鐙は低い。内外面回転横なで。轆轤右回転。	竈・西壁中央。
204	紡錘車	直径:44mm 厚:11mm 孔径:12mm 重さ:27.16g 一部欠。	蛇紋岩。	上面の一部剥がれる。下面周縁に調整時の細い条痕有り。	貯蔵穴。
205	用途不明 石製品	長:100mm 幅:69mm 厚:49mm 重:500g	粗粒安山岩。	両面使用する。裏面を多用する。	竈前床面。
206	薦石	長:152mm 幅:66mm 厚:35mm 重:580g 裏面一部欠。	粗粒安山岩。	表面のみ使用。	竈前床面。

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
207	用途不明 石製品	直径:144mm 前後 厚: 35mm 重:1180g	粗粒安山岩。	表面のみ使用する。	中央。
208	杯 須恵器	器高:19mm 口径:90mm 底径:53mm 口縁部1/3 欠。	細砂～径4mmの礫含む。 やや硬質。灰黄。	体部は僅かに外反する。体部外面右回 転糸切り無調整。轆轤右回転。	北壁中央床面。

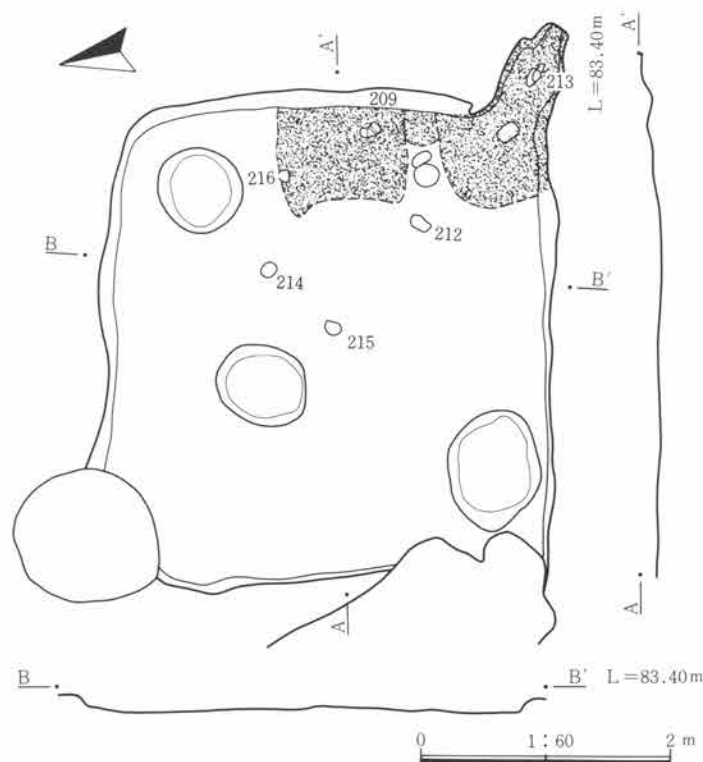
### 5区4号住居跡

当住居跡は、2基の土坑と重複し、新旧関係はいずれも当住居跡が古い。他の住居跡との近接もなく、5区2号住居跡とは約2.5m離れている。

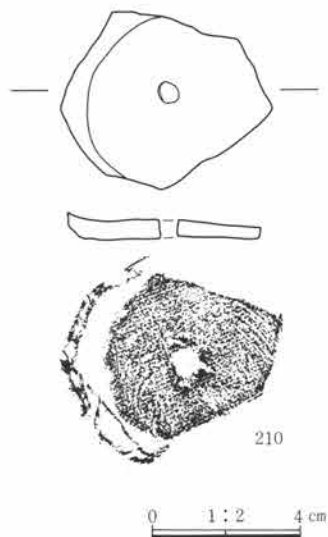
規模は、東西約3.9m・南北約3.6mであり、平面形は方形に近い長方形である。主軸方位はN-99°-Eである。残存壁高は5~12cmを測り、残存状態はあまり良くない。住居跡内には北東隅、中央・南西隅にそれぞれ1基の土坑が確認され、規模は径69cm、短軸62cm・長軸72cm、短軸73cm・長軸94cm、深さは45cm・9cm・20cmである。南西隅の土坑は位置から貯蔵穴と考えられる。

竈は南東隅に構築され、煙道は壁外に約80cm張り出している。燃烧部は壁外に設けられている。

出土遺物は竈前から土釜(212)、東壁中央から須恵器杯(209)等が出土している。

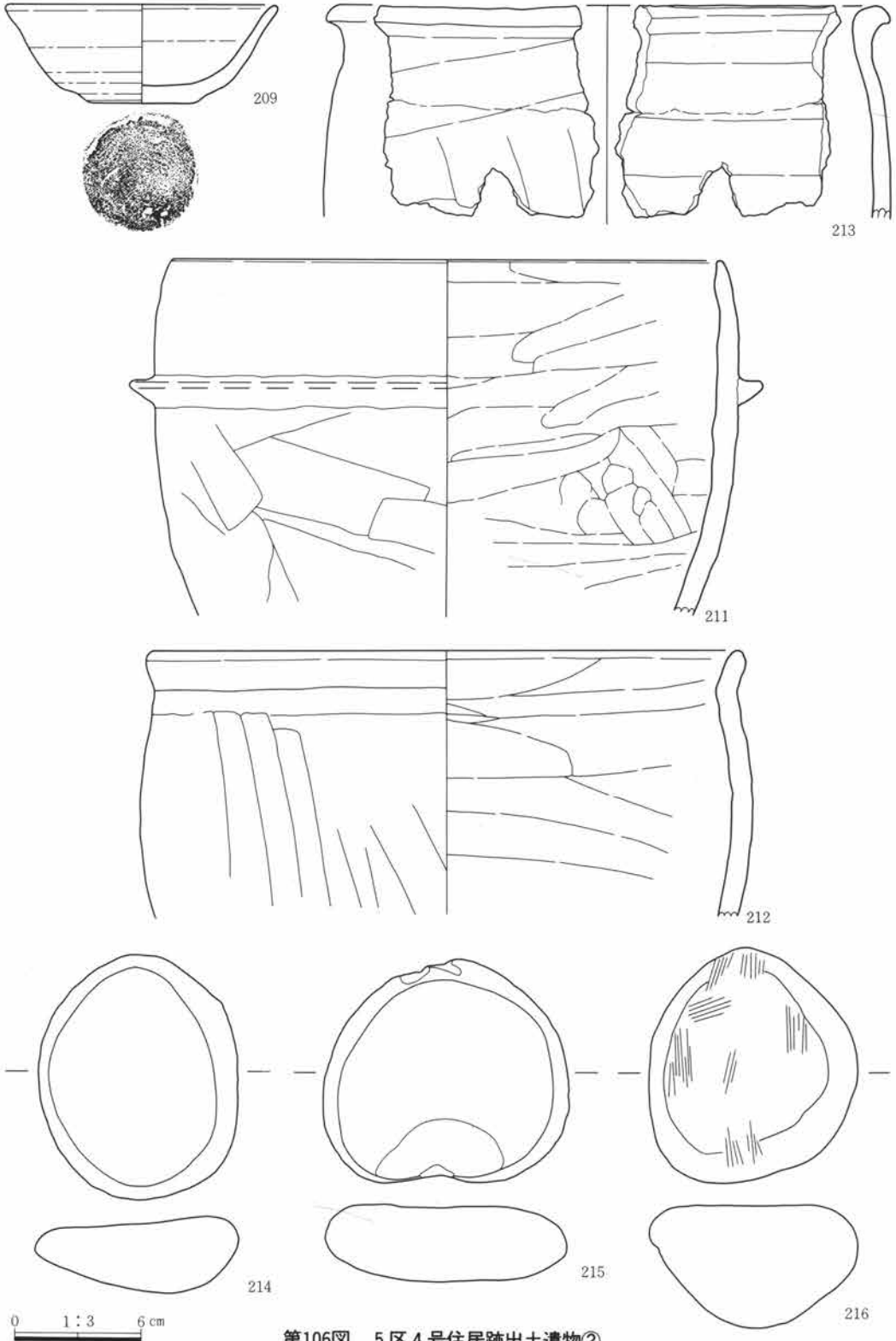


第104図 5区4号住居跡



第105図 5区4号住居跡出土遺物①

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(5区3・4号住)



第106図 5区4号住居跡出土遺物②

第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
209	杯 須恵器	器高:46mm 口径:(128mm) 底径:50mm 口縁部2/3欠。	細砂～径1mmの粗砂含む。軟質。明褐。	口縁部は僅かに外反する。底部外面は右回転糸切り無調整。	東壁中央。
210	用途不明 土製品 (須恵器)		細砂～粗砂含む。軟質。橙。	皿の底部を利用したと思われる。中央に焼成後の穿孔がある。器面が摩滅しているため、再調整は不明。穿孔は重心を外れている。	覆土。
211	羽 釜	器高:[167mm] 口径:(161mm) 口縁部～体部上位1/9残。	細砂～径1mmの粗砂多く含む。やや軟質。外面は黒褐。内面は鈍い褐。	口縁部は僅かに内傾する。口縁部・内面はなで。体部外面は篋削り後なで。	竈。
212	土 釜	器高:[124mm] 口径:(283mm) 口縁部～体部1/5残。	細砂～径4mmの礫多く含む。やや硬質。鈍い赤褐。	口縁部は外反する。口縁部は横なで。体部内面はなで。体部外面は篋削り後なで。	竈前床面。
213	土 釜	器高:[99mm] 口径:(283mm) 口縁部破片。	細砂～径3mmの礫多く含む。硬質。鈍い赤褐。	口縁部は強く外反する。口縁部は横なで。体部内面はなで。体部外面は篋削り後なで。	竈。
214	用途不明 石製品	長:115mm 幅:94mm 厚:36mm 重:550g	粗粒安山岩。	川原石を使用する。表面のみ使用する。	中央床面。
215	用途不明 石製品	116×105mm 厚:36mm 重:700g 一部欠。	粗粒安山岩。	川原石を使用する。下部の欠損は摩滅しており、使用前のものと思われる。	中央床面。
216	用途不明 石製品	長:110mm 幅:98mm 厚:58mm 重:900g	粗粒安山岩。	川原石を使用する。表面のみ使用する。使用面には浅い線条痕が残る。	東壁中央床面。

5区5号住居跡

当住居跡は、5区7A号住居跡・4区3号溝と重複する。5区7A号住居跡との新旧関係は、不明である。4区3号溝との新旧関係は、同溝が当住居跡の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

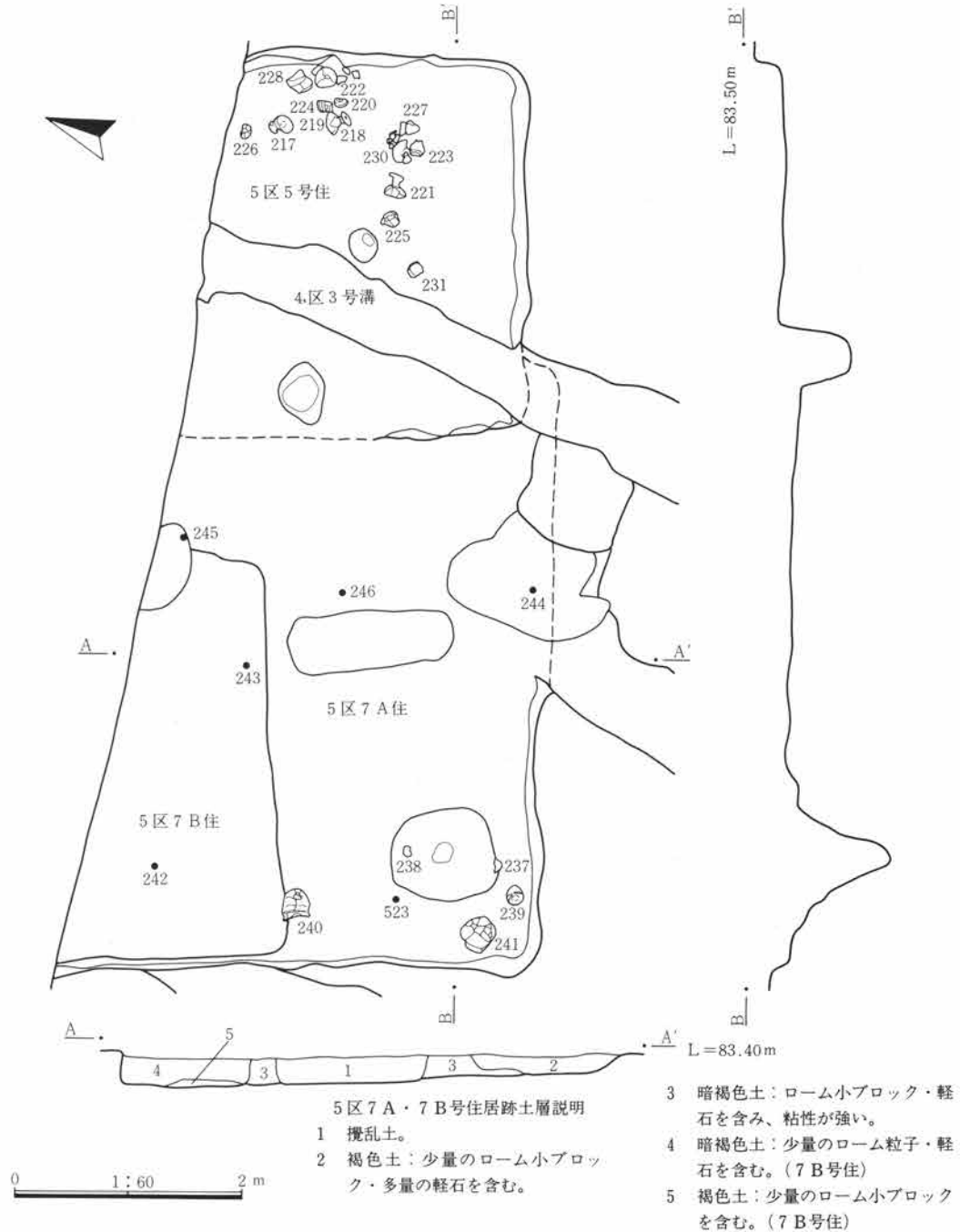
当住居跡の規模は、東西約3.3mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。確認面までの壁の立ち上がりは約20cmであるが、5区7A号住居跡との重複部分では、確認することができなかった。検出できた部分の床面は、比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

住居内からはピットが2基検出できた。規模は、中央部のピットが径約25cm・床面からの深さ約80cmを測り、平面形は不整形な円形を呈する。西側部分のピットの規模は、長軸約50cm・短軸約40cm・床面からの深さ約30cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。中央部のピットは形態

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(5区4・5・7A・7B号住)

的には柱穴であるが、位置等から疑問は残る。炉・柱穴・貯蔵穴は検出することはできなかった。

遺物は土師器の甕・壺・高杯のほか用途不明石製品が出土している。特に、高杯が7個体出土していることが特徴的である。遺物から推定される当住居跡の時期は5世紀前半である。



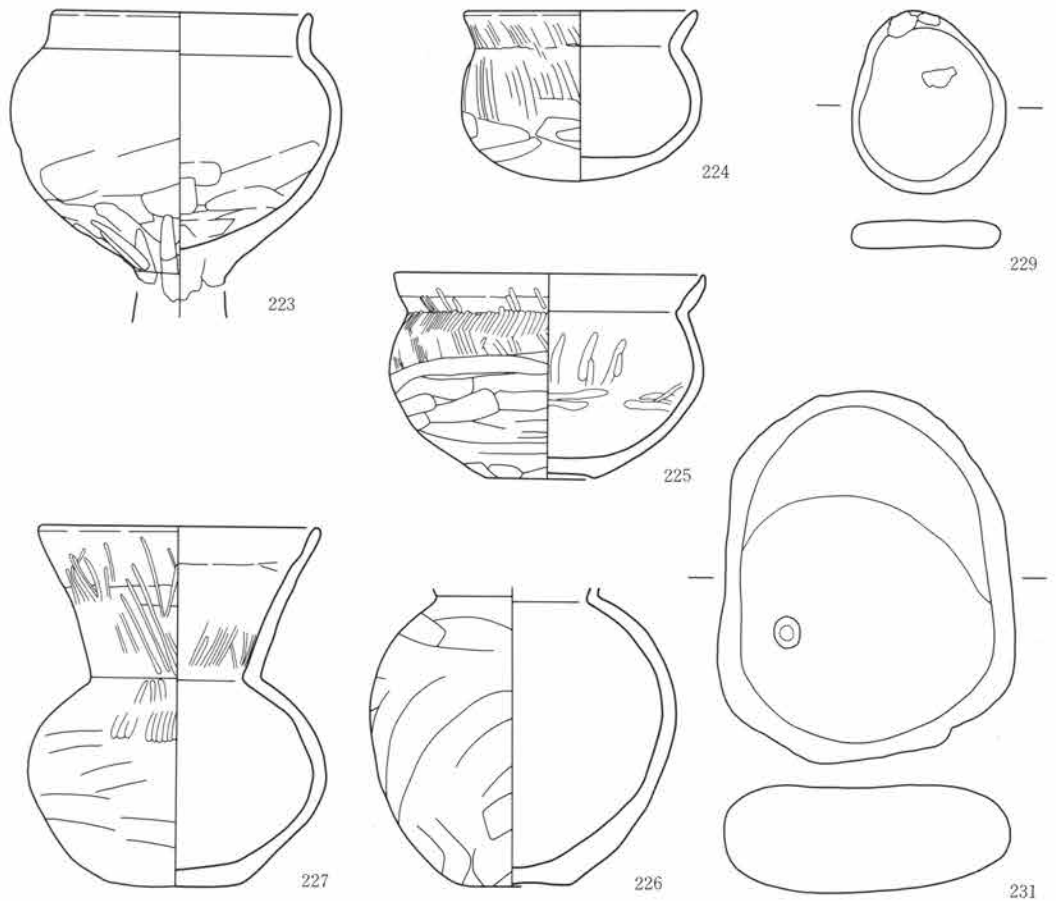
第107図 5区5号住居跡・7A号住居跡

5区7A号住居跡

当住居跡は、5区5号住居跡・5区7B号住居跡と重複する。5区5号住居跡との新旧関係は、不明である。5区7B号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の北西部の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は不明であるが、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定している。確認面までの壁の立ち上がりは、約15cmであり、壁が確認できたのは南西部だけである。確認できた部分の床面は、比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝は、検出できなかった。

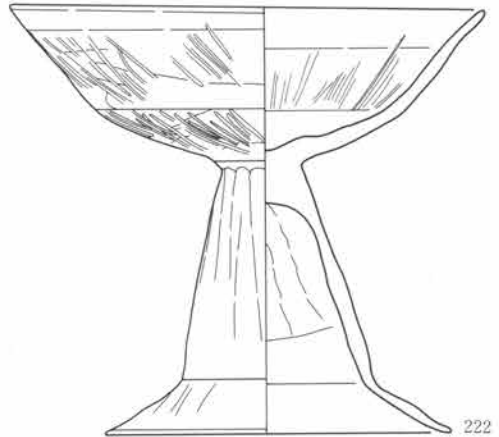
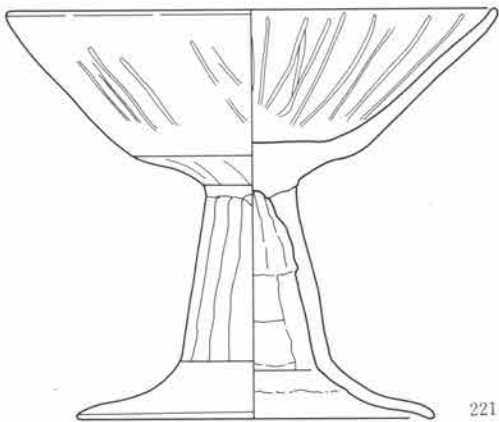
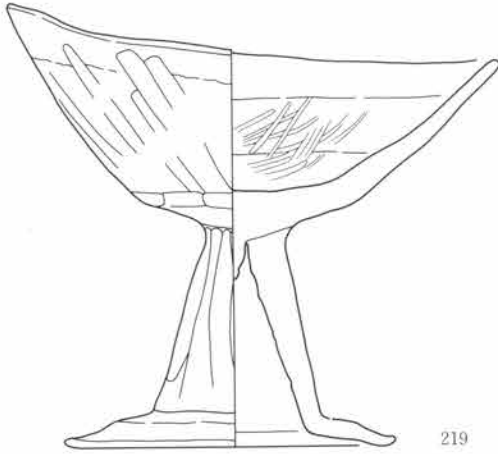
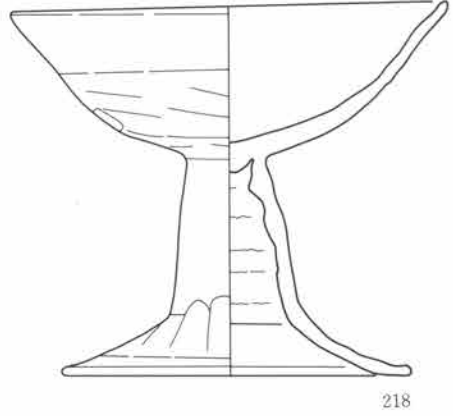
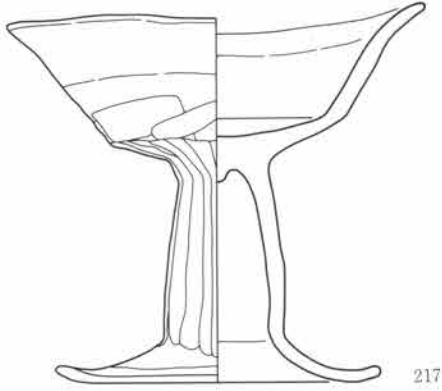
炉・柱穴は確認できなかったが、南西隅から貯蔵穴と考えられるピットが検出できた。規模は、長軸約95cm・短軸約80cm・床面からの深さ約90cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。ピット内からは、土師器の埴が出土している。遺物は、土師器の埴の他に、土師器の甕・杯が出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は5世紀前半である。



第108図 5区5号住居跡出土遺物①

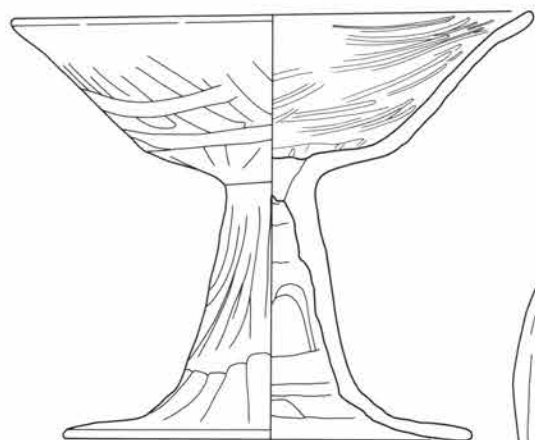
0 1 : 3 6 cm

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(5区5・7A号住)

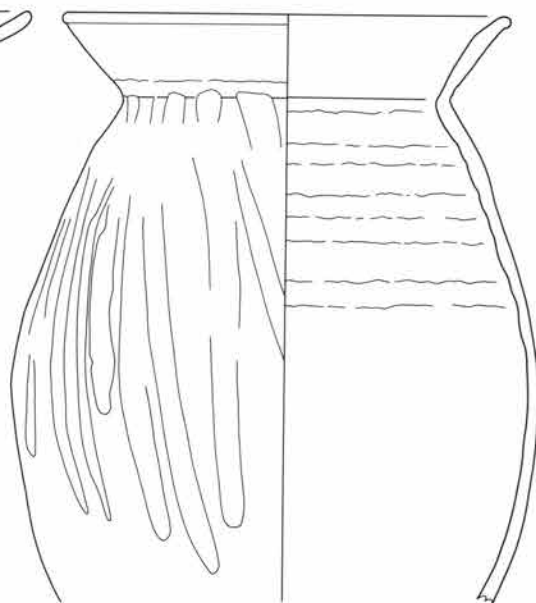


第109図 5区5号住居跡出土遺物②

0 1:3 6 cm



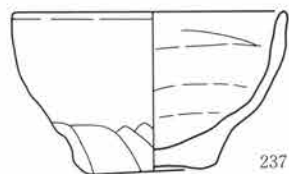
230



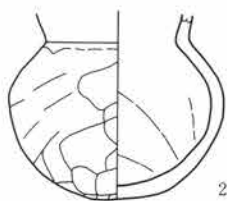
228

5区5号住居跡

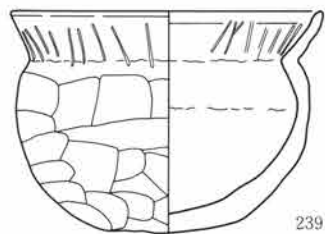
0 1:3 6 cm



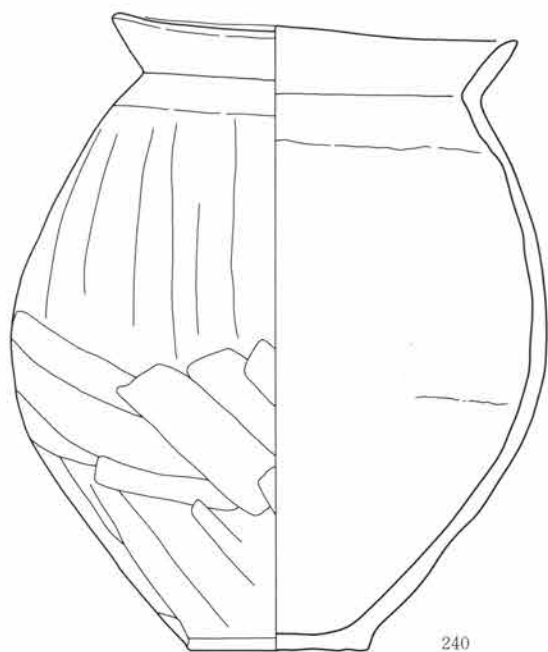
237



238



239



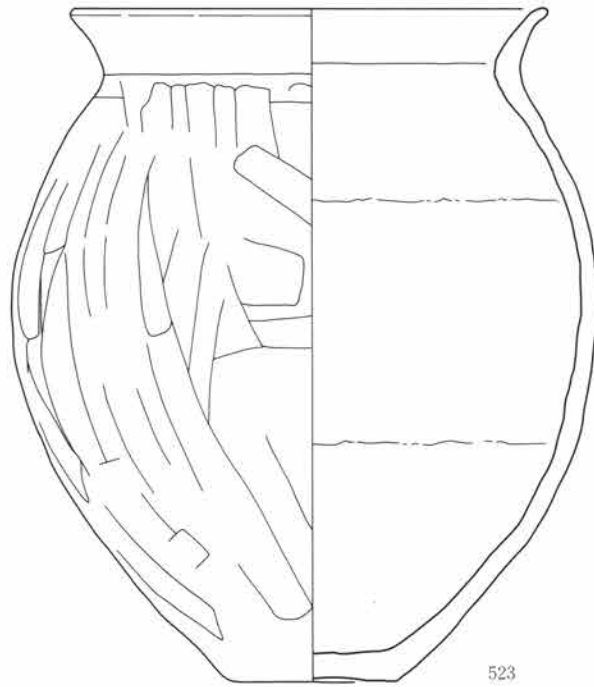
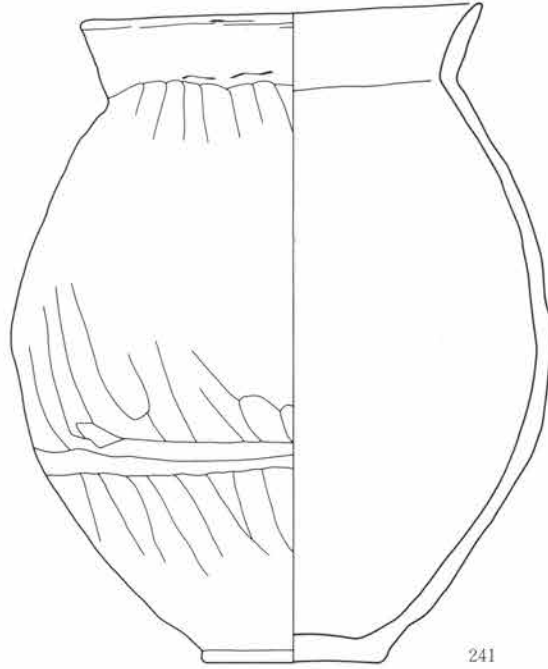
240

5区7A号住居跡

第110図 5区5号住居跡出土遺物③・7A号住居跡出土遺物①

0 1:3 6 cm





第111図 5区7A号住居跡出土遺物②

0 1:3 6 cm

第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
217	高杯 土師器	器高:153mm 口径:170mm 脚径:132mm ほぼ 完形。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや硬質。酸化。浅黄橙。	体部~口縁部は直線的に広がり、口縁部は僅かに外湾。脚部は漏斗状に開く。内面:口縁部~体部は横なで、底部はなで、脚部下半は横なで。外面:口縁部は横なで、体部~脚部上半は篋削り、脚部下半は横なで。	住居内東側壁脇床上5cm。
218	高杯 土師器	器高:150mm 口径:177mm 脚径:141mm ほぼ 完形。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	底部~口縁部は僅かに内湾しながら広がる。脚部は漏斗状に開く。内面:口縁部は横なで、体部~脚部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~脚部上半は篋削り、脚部下半は横なで。	住居内東側壁脇床上5cm。
219	高杯 土師器	器高:186mm 口径:202mm 脚径:134mm ほぼ 完形。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	底部~口縁部は僅かに内湾しつつ広がる。脚部は漏斗状に開く。内面:口縁部~体部は横なで、底部はなで、脚部は横なで。外面:口縁部は横なで、体部~脚部上半は篋削り、脚部下半は横なで。	住居内東側壁脇床上10cm。
220	高杯 土師器	器高:176mm 口径:163mm 脚径:134mm ほぼ 完形。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	体部~口縁部は僅かに内湾しながら広がる。脚部は漏斗状に開く。内面:口縁部は横なで、体部はなで後篋磨き、脚部上半はなで、脚部下半は横なで。外面:口縁部は横なで、体部はなで後篋磨き、底部~脚部上半は篋削り、脚部下半は横なで。	住居内東側壁脇床上10cm他。
221	高杯 土師器	器高:164mm 口径:199mm 脚径:145mm 口縁部~体部1/3欠。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	体部~口縁部は直線的に広がる。脚部は漏斗状に開く。内面:口縁部~体部は横なで後篋磨き、底部はなで、脚部上半は篋なで、脚部下半は横なで。外面:口縁部は横なで、体部はなで後篋磨き、底部~脚部上半は篋削り、脚部下半は横なで。	住居内南東部床直。
222	高杯 土師器	器高:171mm 口径:192mm 脚径:140mm ほぼ 完形。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	底部~口縁部は僅かに内湾しながら広がる。脚部は漏斗状に開く。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで後篋磨き、脚部上半は篋なで、脚部下半は横なで。外面:口縁部は横なで、体部~底部はなで後篋磨き、脚部上半は篋削り、脚部下半は横なで。	住居内東側壁脇床上10cm。
223	脚付甕 土師器	器高:[115mm] 口径:106mm 脚径:一 脚部欠。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや硬質。酸化。橙。	口縁部は外湾する。内面:口縁部は横なで、体部~底部は篋なで。外面:口縁部は横なで、体部上半はなで、体部下半~底部は篋削り。	住居内南東部床上5cm。内外面に油煙付着。
224	埴 土師器	器高:68mm 口径:95mm 底径:一 最大径:97mm 完形。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。硬質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。丸底。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで、指頭痕有り。外面:口縁部~体部上半は横なで後篋磨き、体部下半~底部は篋削り。	住居内東壁脇。

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(5区5号住)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
225	埴 土師器	器高:83mm 口径:125mm 底径:45mm 最大径:127mm 口縁部～体部上半1/4欠。	径2～3mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。内面は鈍い橙、外面は鈍い褐。	口縁部は「く」字状に外湾し、口縁端部は僅かに内湾。最大径は体部上半。内面:口縁部は横なで、体部はなで後筥磨き、底部はなで。外面:口縁部は横なで、口縁部下端～体部上半は筥磨き、体部下半は筥削り、底部はなで。	住居内中央部床直。内外面に油煙付着。
226	壺 土師器	器高:[118mm] 口径:— 底径:43mm 体部～底部残。	径1～2mmの砂粒を含む。軟質。酸化。鈍い橙。	体部の最大径は上半。内面:体部～底部はなで。外面:体部は筥削り後なで、底部は筥削り。内面頸部・外面頸部～体部に赤色顔料塗布。	住居内東側壁脇床直。外面に油煙付着。
227	埴 土師器	器高:144mm 口径:114mm 底径:54mm 最大径:121mm 口縁部～底部4/5残。	径3～4mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾し、大きい。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで後、筥磨き、体部～底部はなで。外面:口縁部～体部上半は横なで後筥磨き、体部下半～底部は筥削り。	住居内南東部隅床上5cm他。
228	甕 土師器	器高:[236mm] 口径:182mm 底径:— 最大径:214mm 口縁部～体部4/5残。	径4～5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部下半。内面:口縁部は横なで、体部はなで、輪積痕有り。外面:口縁部は横なで体部は筥削り。	住居内東側壁脇床直。外面に多量の油煙付着。
229	用途不明 石製品	長:74mm 幅:62mm 厚:14mm 重:70g	凝灰岩。	2面擦られている。	住居内覆土。
230	高杯 土師器	器高:170mm 口径:210mm 脚径:165mm 口縁部～脚部4/5残。	径3～4mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	体部～口縁部は直線的に広がり、口縁部は僅かに外湾。脚部は漏斗状に開く。内面:口縁部～底部はなで後筥磨き、脚部上半は筥なで、体部下半は横なで。外面:口縁部は横なで、体部～底部は筥削り、脚部上半は筥なで、脚部下半は筥削り、脚部下端は横なで。	住居内南東部隅床直。
231	用途不明 石製品	長:150mm 幅:121mm 厚:48mm 重:1200g	粗粒安山岩。	1面擦られている。	住居内中央部床直。

#### 第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
237	杯 土師器	器高:64mm 口径:(112mm) 底径:47mm 口縁部～底部2/3残。	径4～5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	体部～口縁部はやや内湾する。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで。外面:口縁部～体部上半はなで、体部下半は指頭痕が残り、底部はなで。	住居内南西部隅床直。
238	壺 土師器	器高:[74mm] 口径:一 底径:一 口縁部下半～底部残。	径3～4mmの小石及び砂粒を含む。硬質。酸化。鈍い橙。	口縁部は外湾。丸底。内面:口縁部下半は横なで、体部～底部はなで。外面:口縁部下半は横なで、体部上端はなで。体部～底部は篋削り。	住居内南西部床上5cm。
239	埴 土師器	器高:89mm 口径:122mm 底径:38mm ほぼ完形。	径1～2mmの砂粒を含む。硬質。酸化。橙。	口縁部は「く」字状に外湾し、口縁端部は僅かに内湾。底部は丸底に近い平底。内面:口縁部は横なで後縦篋磨き、体部～底部はなで。外面:口縁部～体部上端は横なで、体部～底部は篋削り。	住居内南西部隅床直。内外面に油煙付着。
240	甕 土師器	器高:255mm 口径:164mm 底径:74mm 最大径:217mm 体部一部欠。	径3～4mmの小石及び砂粒を含む。軟質。酸化。赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで。外面:口縁部～体部上端は横なで、体部上半は篋なで、体部下半～底部は篋削り。	住居内西側壁隅床直。内外面に油煙付着。
241	甕 土師器	器高:265mm 口径:(164mm) 底径:75mm 最大径:220mm 口縁部2/3欠。	径4～5mmの小石及び砂粒を含む。軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部～底部は篋削り。	住居内南西部隅床直。
523	甕 土師器	器高:270mm 口径:193mm 底径:70mm 最大径:237mm ほぼ完形。	径4～5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙～浅黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで、体部に輪積痕が残る。外面:口縁部は横なで、体部～底部は篋削り。	住居内南西部隅床直。外面に多量の油煙付着。

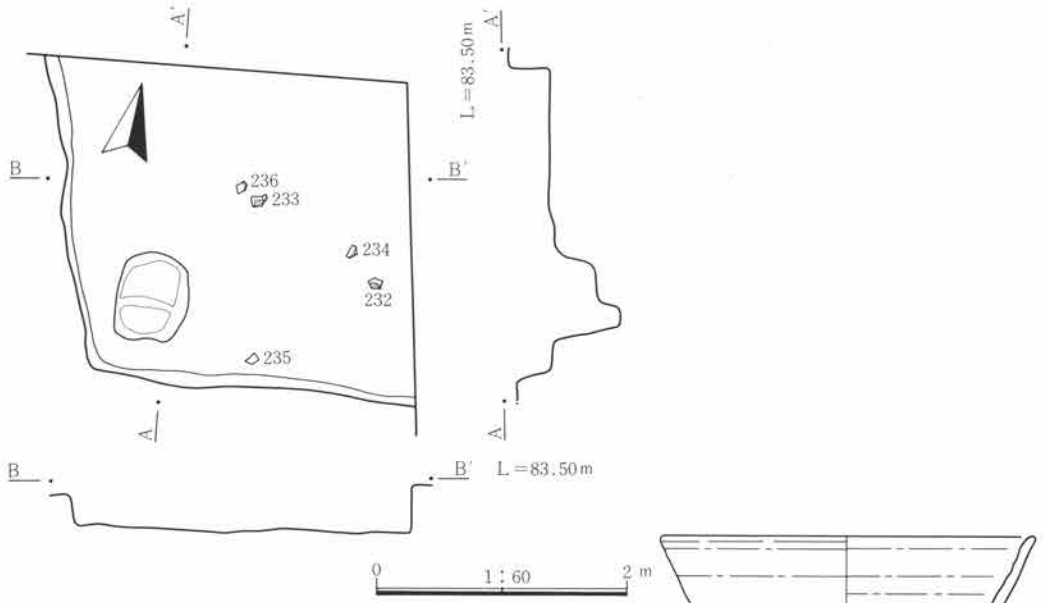
#### 5区6号住居跡

当住居跡は、他遺構との重複はないが、検出部分において5区5号住居跡に70cm、4区2号住居跡に1mと近接する。

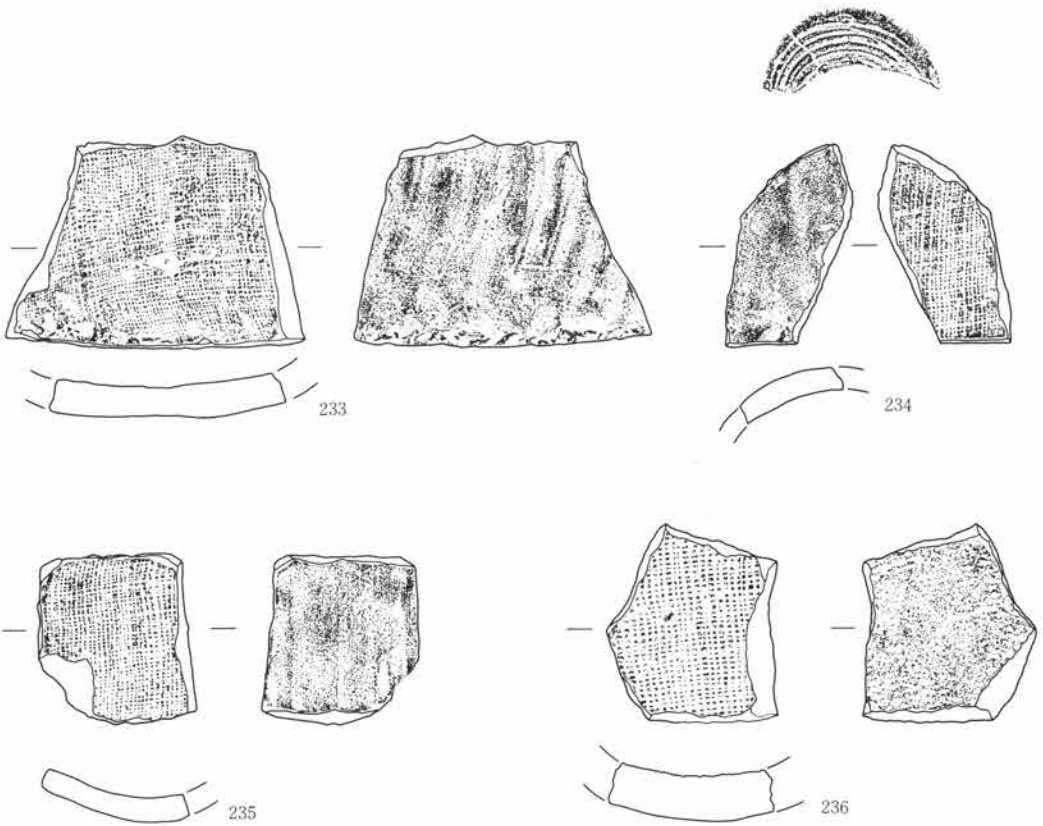
北と東壁が遺存していないため、規模・平面形・主軸方位は不明である。残存壁高は21～31cmである。柱穴や周溝は確認されない。東壁が遺存していないため、竈は認められない。

貯蔵穴は南西隅に構築されており、規模・平面形は長軸70cm・短軸55cmの長方形である。深さは30～50cmを測る。

遺物は須恵器椀(232)や瓦(233～236)が出土している。



第112図 5区6号住居跡



第113図 5区6号住居跡出土遺物

第IV章 発見された遺構と遺物

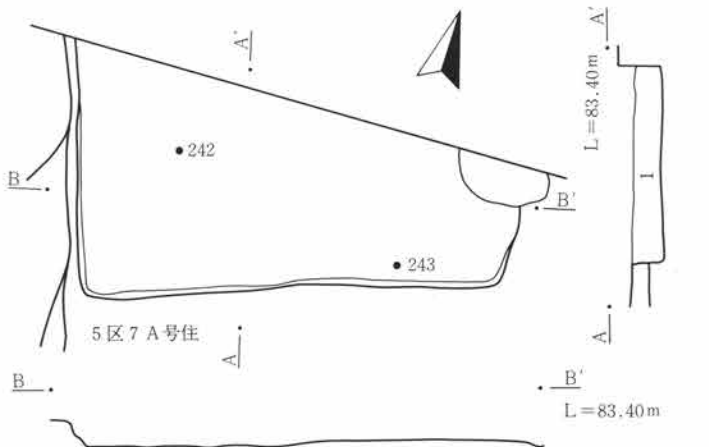
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
232	椀 須恵器	器高:51mm 口径:(151mm) 底径:(82mm) 1/2残。	細砂含む。軟質。鈍い黄橙。外面黒灰。	口縁端部僅かに外反する。底部外面右回転糸切り無調整。	南壁中央床面。
233	平瓦	厚さ:11~13mm 小片。	細砂多く含む。赤色・白色粘土粒含む。軟質。黄灰~鈍い橙。	小口はなで。表面は布目・模骨痕残る。裏面は強いなで。	中央床面。乗付製。
234	丸瓦	厚さ:10mm 小片。	細砂多く含む。赤色・白色粘土粒含む。軟質。鈍い橙。	小口はなで? 表面は篋なで。裏面は布目残る。	南壁中央床面。乗付製。8C。器表摩滅する。
235	平瓦	厚さ:8~10mm 小片。	細砂多く含む。赤色・白色粘土粒含む。軟質。鈍い橙。	表面は布目残る。裏面は篋なで?	南西隅。乗付製。8C。器表摩滅する。
236	平瓦	厚さ:16~17mm 小片。	細砂~径2mmの礫含む。赤色粘土粒含む。白色粘土縞状に含む。軟質。鈍い橙。	表面は布目残る。裏面は縄目叩き後なで。	中央床面。乗付製。

5区7B号住居跡

当住居跡は、5区7A号住居跡・土坑と重複する。新旧関係は、土坑より当住居跡の方が古く、5区7A号住居跡より当住居跡の方が新しい。

住居跡北半が確認できないため、規模は東西約3.4mを測るが南北は不明。平面形・主軸方位は

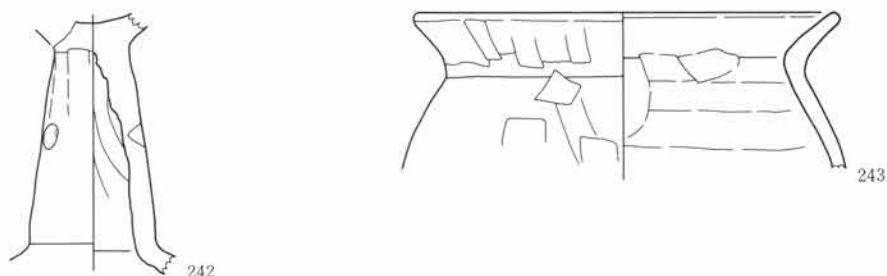
不明である。柱穴・周溝は確認されない。残存壁高は2~10cmである。竈は検出部分では確認されない。土師器高杯(242)は、重複関係から本住居跡には伴わない。



5区7B号住居跡土層説明

- 1 褐色土層: ロームブロック・軽石を含む。

第114図 5区7B号住居跡



第115図 5区7B号住居跡出土遺物

0 1:3 6cm

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
242	高杯 土師器	器高: [103mm] 口径: — 脚径:— 底部— 脚部上半残。	径1~2mmの砂粒を含む。硬質。酸化。橙。	脚部上半に貫通していない円形穿孔2箇所。内面:底部~脚部はなで。外面:脚部は篋削り。	住居内南西部床上20cm。外面に多量の油煙付着。
243	甕 土師器	器高: [67mm] 口径: (172mm) 底径:— 口 縁部~体部上端1/5残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。鈍い黄褐。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部は横なで、体部上端は篋削り。外面:口縁部は横なで後部分的に縦篋削り、体部上端は篋削り。	住居内南東部床上15cm。外面に油煙付着。

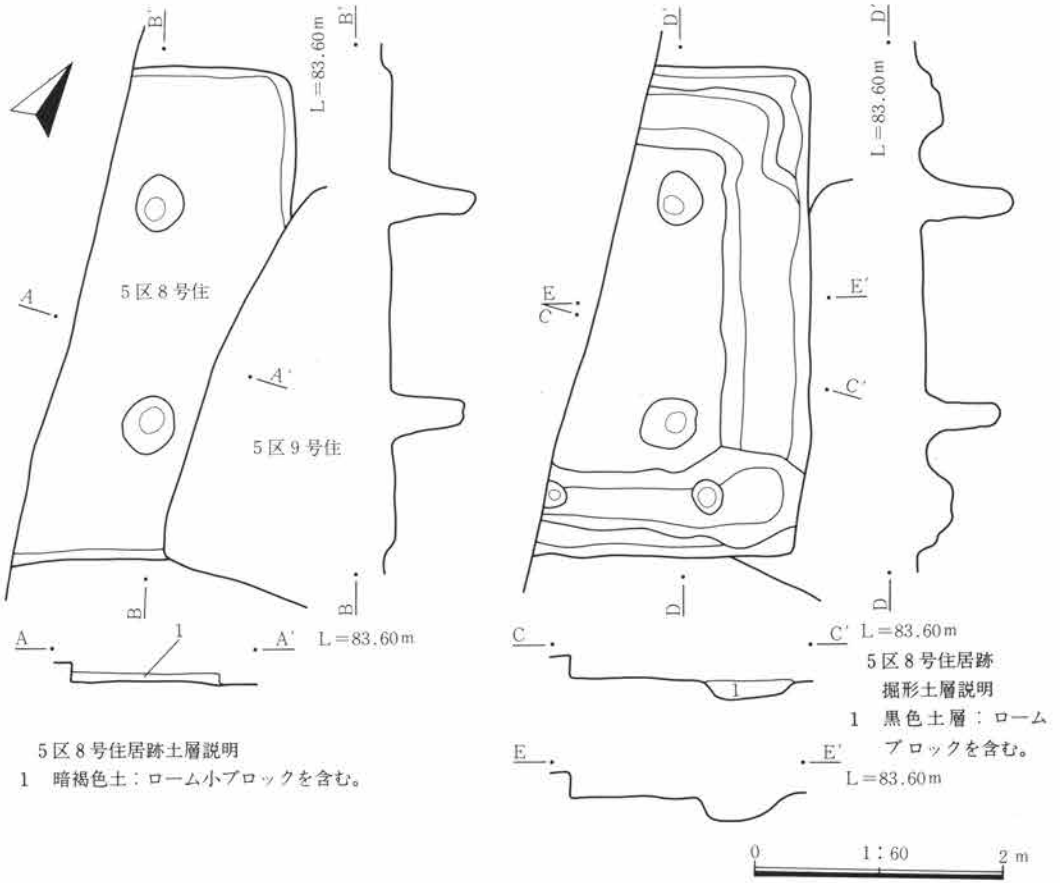
### 5区8号住居跡

当住居跡は、5区9号住居跡と重複する。新旧関係は、5区9号住居跡が当住居跡の南東部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

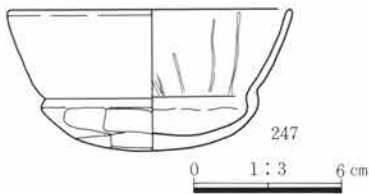
当住居跡の規模は、西側が調査区域外のために不明であるが、南北約3.9mであり、平面形は、隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈すると推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約5cmであり、残存状態は悪い。床面は比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝は検出することができなかった。

調査区域内からは、炉・貯蔵穴を検出することはできなかった。主柱穴は4基と推定しているが、検出できたのは2基である。規模は、長軸約40~45cm・短軸約35~40cm・床面からの深さ約55~70cmであり、平面形は楕円形を呈する。掘形は、中央部分がほぼ床面と同じであるが、壁に沿い「コ」の字ないしは「ロ」の字に巡る溝状になると推定される。規模は、幅約60~70cm・床面からの深さ約20cmであり、ほぼ一定になっている。

遺物の出土は、土師器の埴が出土しているだけである。遺物の出土量は非常に少なく、時期の限定は困難であるが、周辺の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀後半である。



第116図 5区8号住居跡・同掘形



第117図 5区8号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
247	埴土師器	器高:56mm 口径:115mm 底径:— 口縁部~底部1/2残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。灰黄。	外面体部上端に稜。口縁部は僅かに内湾しつつ広がり、大きい。内面:口縁部は横なで後縦範磨き、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は筥削り。	住居内覆土。外面に油煙付着。



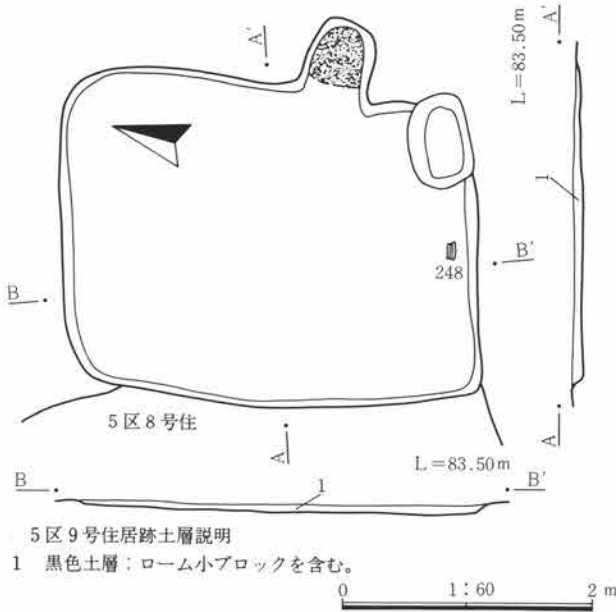
5区9号住居跡

当住居跡は、5区8号住居跡と重複し、新旧関係は、当住居跡が新しい。

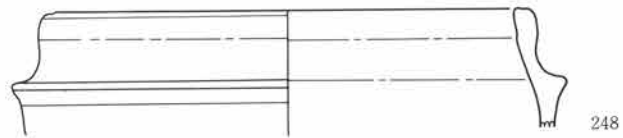
規模・平面形は東西約2.6m、南北約3.3mの長方形である。主軸方位はN-84°-Eである。残存壁高は3~7cmと残存状態は悪い。柱穴・周溝は確認されない。床面中央部は硬く締まっており、薄く貼り床を施している。

竈は東壁南寄りに構築されており、煙道は約60cm壁外に張り出している。

貯蔵穴は南東隅に構築されており、短軸約50cm・長軸約70cmの長方形を呈する。深さは約22cmを測る。



第118図 5区9号住居跡



第119図 5区9号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
248	羽釜	器高: [49mm] 口径: (199mm) 小片。	細砂~粗砂含む。黒色 鉿物粒含む。やや硬質。 鈍い橙。	鉿は低く、口縁部との境は段をなす。口 縁部は横なで。	南壁中央床。

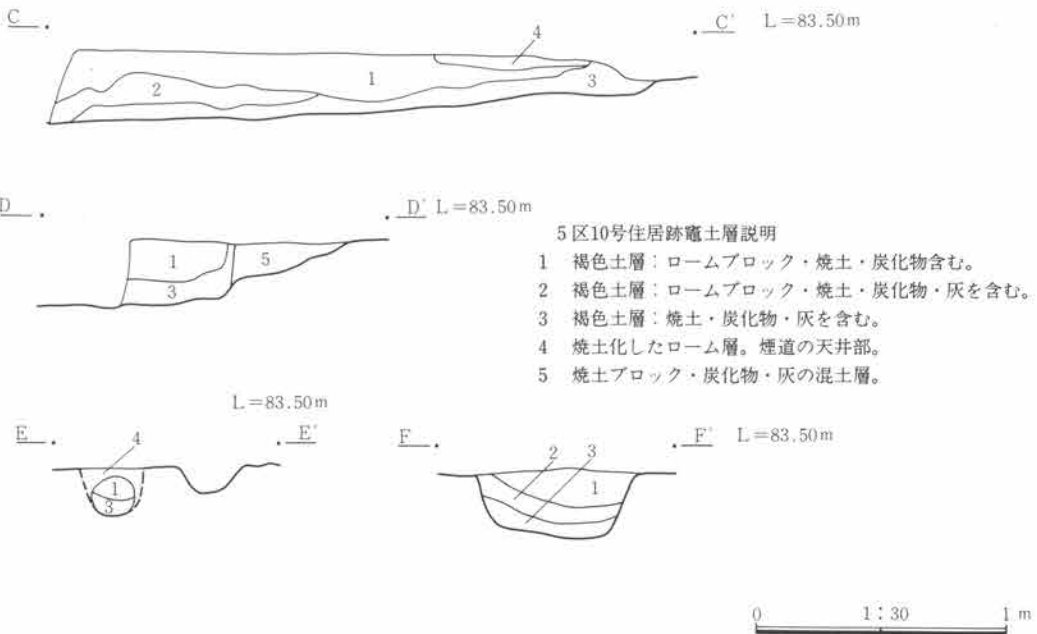
5区10号住居跡

当住居跡は、竈煙道先端部が5区12号住居跡と重複し、南壁が5区6号土坑と重複する。新旧関係は当住居跡が5区12号住居跡より新しく、5区6号土坑より古い。

規模・平面形は東西約3.4m・南北約3.7mのほぼ正方形を呈する。主軸方位はN-91°-Eである。残存壁高は21~32cmであり、本遺跡では良好な残存状態を示す。床面には炭化した建築部材が多く認められ、焼土の分布もあり焼失家屋と考えられる。また、西壁中央直下には、壁によりかかるように炭化した草本性の茎が多く認められた。柱穴は認められないが、北西隅には長軸40cm・短軸25cm・深さ3cmの楕円形を呈する落ち込みと、南西の隅には長軸94cm・短軸32cm・深さ6cmの不整形の落ち込みが確認されている。周溝は竈部分と南壁中央を除いて巡っている。竈は東壁南隅に構築され、燃烧部は壁外に設けている。煙道先端は壁外に150cm張り出す。竈燃烧部の南東には別の煙道が重複しており、竈の作り替えが行われている。新旧関係は南東の煙道が古い。竈前面には黒色灰が分布している。

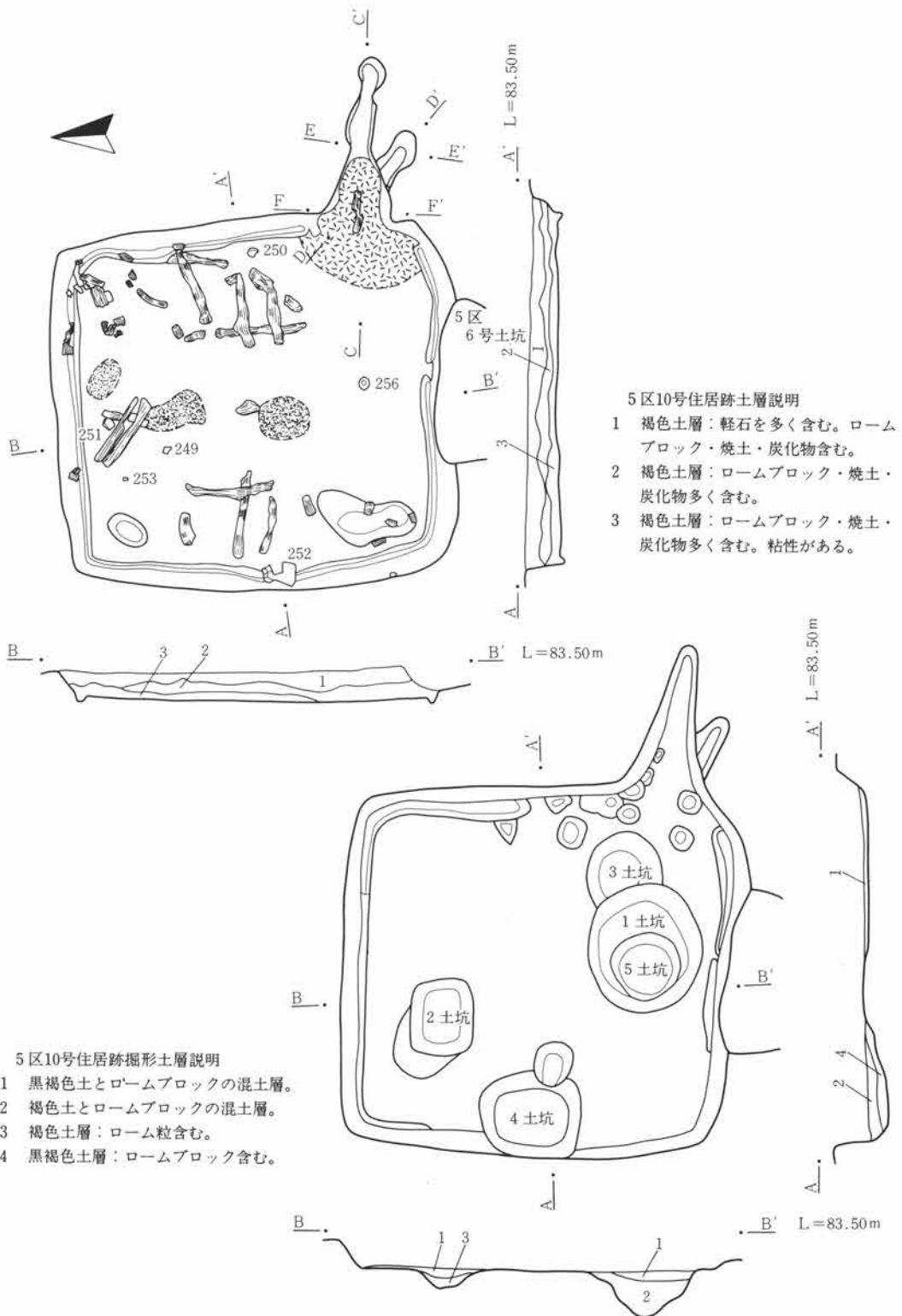
竈内からは土釜(252)、北壁付近からは壺(251)、土錘(253)が出土している。また東壁中央からは小型の椀(250)が出土している。

床は北と東に4cmほど貼り床が認められた以外は地床である。床下土坑は5基認められ深さは1土坑が32cm、2土坑が10cm、3土坑が24cm、4土坑が17cm、5土坑が54cmである。なお、1土坑と3土坑、1土坑と5土坑は重複している。新旧関係は不明。



第120図 5区10号住居跡竈断面図

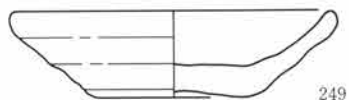
第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(5区10号住)



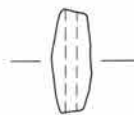
第121図 5区10号住居跡・同掘形

0 1:60 2 m

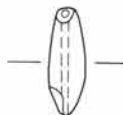
第IV章 発見された遺構と遺物



249



253

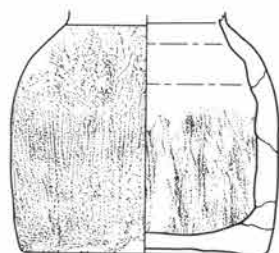


254

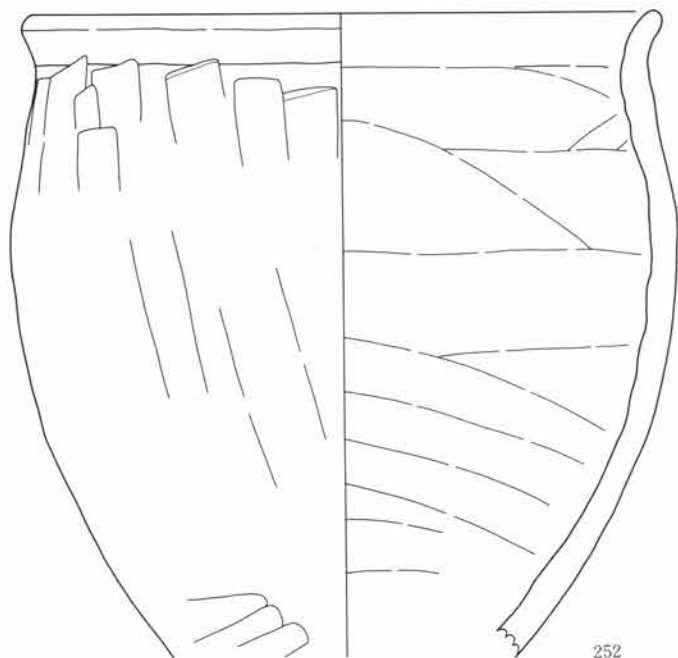
0 1 : 2 4 cm



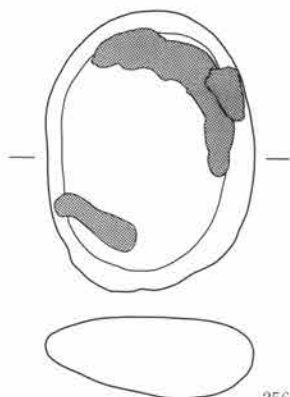
250



251



252



256

0 1 : 3 6 cm

第122図 5区10号住居跡出土遺物

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(5区10・11号住)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
249	皿 土師質土器	器高:23mm 口径:(88mm) 底径:45mm 口縁部5/6欠。	細砂～径2mmの礫含む。黒色鉾物粒・赤色粘土粒含む。やや軟質。浅黄橙。	口縁端部肥厚する。底部外面右回転糸切り無調整。	中央。
250	椀 土師質土器	器高:36mm 口径:(90mm) 底径:55mm 口縁部2/3欠。	細砂～粗砂含む。黒色鉾物粒・赤色粘土粒含む。軟質。橙。	口縁部は外反する。高台は高く、外反する。高台貼り付け時に底部切り離し跡などで消す。	東壁中央。
251	壺 須恵器?	器高:[97mm] 底径:(100mm) 体部下位以下1/2・体部上位1/4残。	細砂多く含む。軟質。外面鈍い黄橙。内面黄灰。	体部はほとんど張らない。肩部はなで肩である。体部内面は刷毛状工具によるなで。体部外面は篋磨き。	北壁中央。体部外面の器表剥離。
252	土釜	器高:[262mm] 口径:[258mm] 最大径:[270mm] 1/4残。	細砂～径3mmの礫多く含む。やや軟質。橙～黒灰。	口縁部は外反する。最大径は体部上半。口縁部は横なで。体部内面は回転横なで。体部外面は篋削り後なで。	体部下位の器表剥離。
253	土錘	長さ:28mm 最大径:10mm 孔径:3mm 完形。	細砂含む。黒色鉾物粒多く含む。やや軟質。褐灰。	最大径は中央にある。両端は篋切り。表面はなで。	北東隅。
254	土錘	長さ:29mm 最大径:10mm 孔径:3mm 一部欠。	細砂含む。やや硬質。鈍い黄橙。	両端は丸みを帯びる。器表はなで。	覆土。
256	用途不明 石製品	長:114mm 幅:84mm 厚:32mm 重:500g	粗粒安山岩。一部表面剥離。	川原石を使用。片面のみ使用。周縁煤付着。	貯蔵穴。

5区11号住居跡

当住居跡は、5区14号住居跡・5区15号住居跡と重複する。5区14号住居跡との新旧関係は、直接的に把握することはできなかったが、出土遺物から、当住居跡の方が古い。5区15号住居跡との新旧関係は、断面観察による同住居跡の覆土中に、当住居跡の床が確認できたことから、当住居跡の方が新しい。

当住居跡の規模は、東西約6.0m・南北約5.8mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。確認面までの壁の立ち上がりは、約10cmであり、残存状態は悪い。床面は、やや軟弱な部分もあるが、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

炉は検出できなかった。支柱穴は4基である。規模は、径約25～35cm・床面からの深さ約40～60cmであり、平面形は不整形な円形を呈する。貯蔵穴と考えられるピットは、南西隅から検出できた。規模は、長軸約80cm・短軸約65cm・床面からの深さ約45cmであり、平面形は、不整形な楕円

形を呈する。

遺物は、土師器の甕・壺・埴・高杯の他、石製模造品が出土している。周囲の遺構との関係、出土遺物から推定される当住居跡の時期は5世紀前半である。

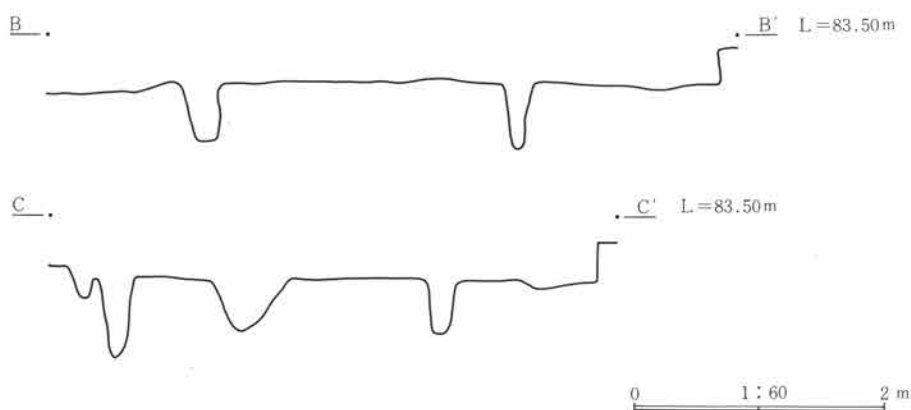
### 5区15号住居跡

当住居跡は、5区11号住居跡・5区14号住居跡と重複する。5区11号住居跡との新旧関係は、同住居跡の壁・床が当住居跡の覆土中に築かれていることから、当住居跡の方が古い。5区14号住居跡との新旧関係は、同住居跡の壁・床が当住居跡の覆土中に築かれていることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、南側及び東側が検出できなかったために不明である。確認面までの壁の立ち上がりは、約10～20cmである。壁溝は、住居跡が確認できた部分からは検出できた。規模は、幅約10～20cmであり、床面からの深さは約10～15cmである。

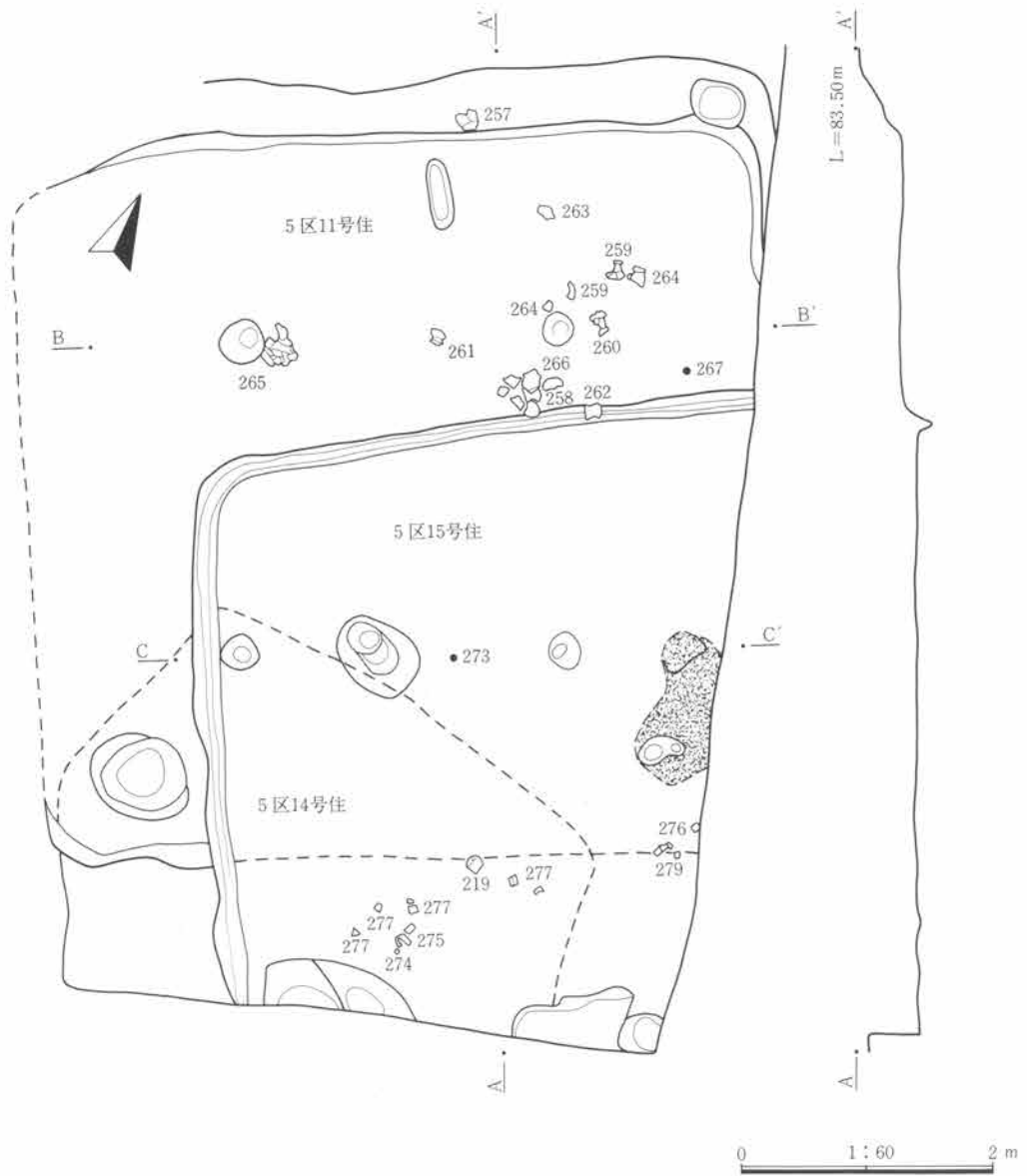
北側柱穴の中間と考えられる位置から、浅い皿状の落ち込みと焼土が検出できた。炉と考えられる。支柱穴は4基と考えられるが、検出できたのは1基である。規模は、長軸約70cm・短軸約55cm・床面からの深さ約40cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴は検出できなかった。

遺物は、土師器の甕・壺・杯・鉢の他、管玉が出土している。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀後半である。

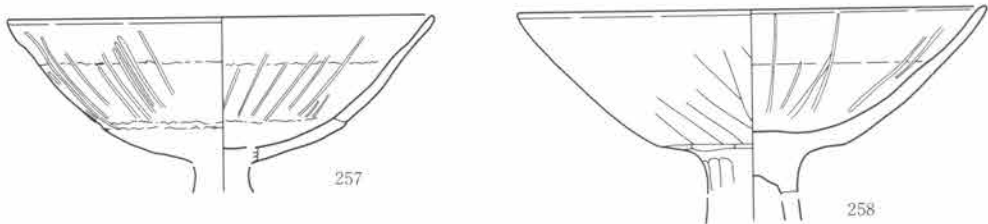


第123図 5区11号住居跡・15号住居跡エレベーション図

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(5区11・15号住)

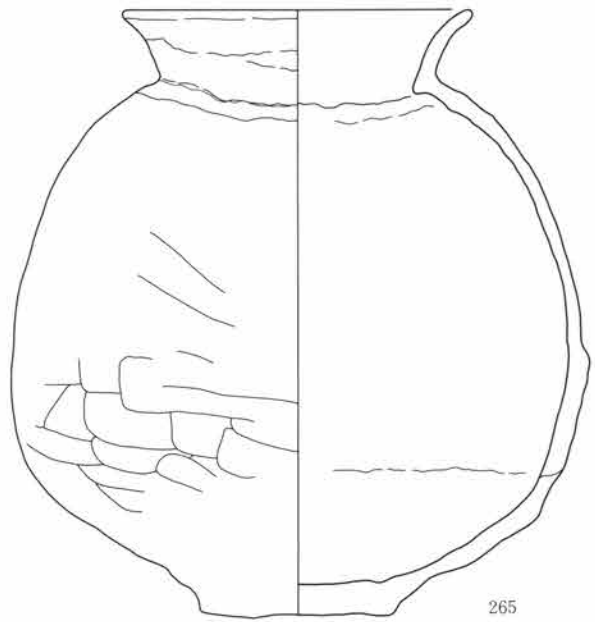
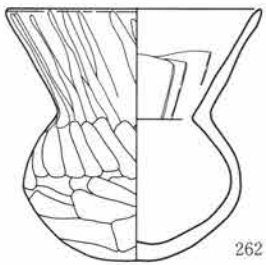
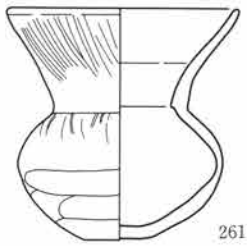
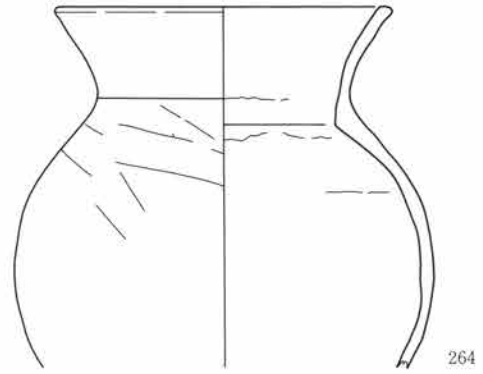
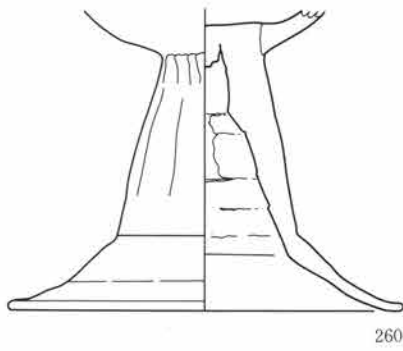
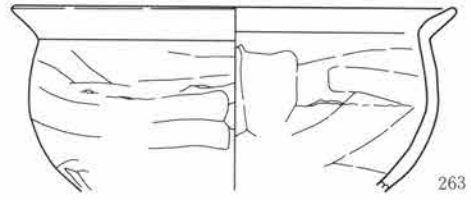
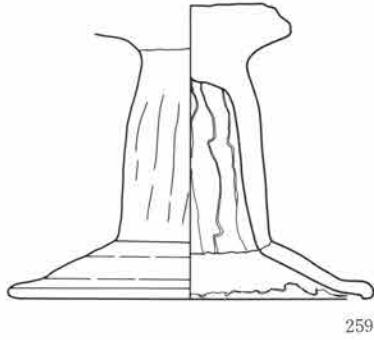


第124図 5区11号住居跡・15号住居跡



第125図 5区11号住居跡出土遺物①

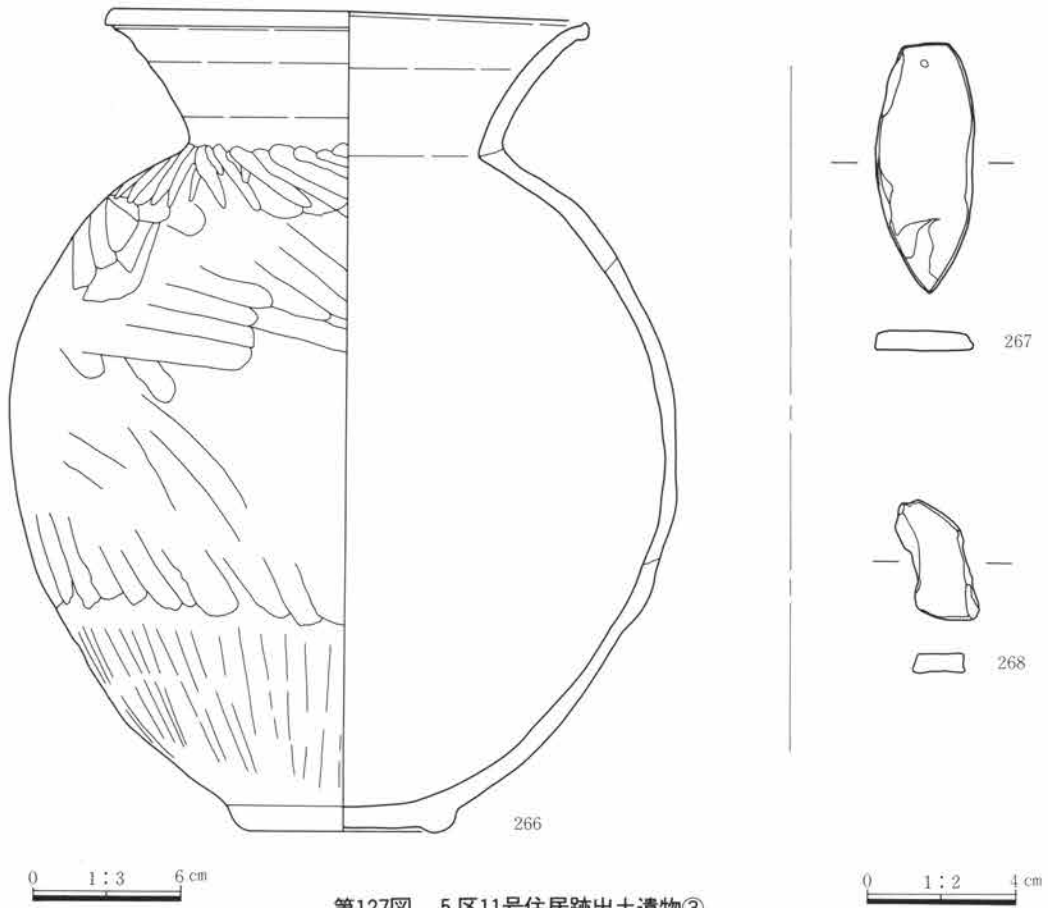




第126図 5区11号住居跡出土遺物②

0 1:3 6 cm



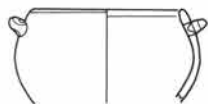


第127図 5区11号住居跡出土遺物③

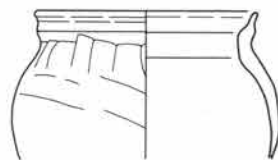
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
257	高杯 土師器	器高: [58mm] 口径: 173mm 脚径:— 杯部 4/5残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	底部~口縁部はやや内湾しつつ広がる。内面:口縁部~体部は横なで後甃磨き。底部はなで。外面:口縁部~体部は横なで後甃磨き、底部はなで後甃磨き。	住居内北壁脇。
258	高杯 土師器	器高: [73mm] 口径: (190mm) 脚径:— 口 縁部~脚部上端2/5残。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	体部~口縁部は僅かに内湾しつつ広がる。内面:口縁部は横なで後甃磨き、体部はなで後甃磨き、底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~脚部は甃なで。	住居内北東部。内外面に油煙付着。
259	高杯 土師器	器高: [119mm] 口径: — 脚径:148mm 底部 ~脚部残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	脚部は漏斗状に開く。内面:脚部下半は横なで。外面:脚部上半はなで、脚部下半は横なで。内面の作りは雑であり、脚部上半は凹凸が多く下端はバリが残る。	住居内北東部。内外面に油煙付着。二次炎を受けている。

第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
260	高杯 土師器	器高:[120mm] 口径: 一 脚径:(160mm) 底部 ~脚部2/3残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。赤褐色。	脚部は漏斗状に開く。内面:底部はなで、脚部は横なで。外面:底部はなで、脚部上半は篋削り後なで、脚部下半は横なで。	住居内北東部。
261	埴 土師器	器高:93mm 口径:94mm 底径:26mm ほぼ完形。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。やや硬質。酸化。橙。	口縁部は外湾し、口縁端部は僅かに内湾。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで後篋磨き、体部上半はなで後篋磨き。体部下半~底部は篋削り。	住居内中央部床直。外面に油煙付着。
262	埴 土師器	器高:101mm 口径:103 mm 底径:一 口縁部 1/3欠。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや硬質。酸化。鈍い黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾し、直線的に広がる。丸底。内面:口縁部上半は横なで、口縁部下半は篋なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで後縦篋なで、体部上半は縦篋なで、体部下半~底部は篋削り。	住居内中央部床直。内外面に油煙付着。
263	脚付甕 土師器	器高:[74mm] 口径: (180mm) 底径:一 口 縁部~体部1/4残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部~体部上端は横なで、体部は篋なで。外面:口縁部は横なで、体部上半は篋なで、体部下半は篋削り。	住居内北東部。
264	甕 土師器	器高:[145mm] 口径: (136mm) 底径:一 最大 径:(170mm) 口縁部 ~体部1/3残。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部なで。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り後なで。	住居内北東部床直。外面に多量の油煙付着。
265	甕 土師器	器高:242mm 口径:142 mm 底径:80mm 最大 径:233mm 口縁部~底 部4/5残。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部下半。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部上半はなで、体部下半~底部は篋削り。	住居内中央部床直。外面に多量の油煙付着。
266	壺 土師器	器高:330mm 口径:196 mm 底径:92mm 最大 径:270mm ほぼ完形。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部~底部は篋なで。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り後なで、底部はなで。	住居内中央部床直。外面に油煙付着。
267	石製模造 品	長:67mm 幅:27mm 厚:6mm 孔径:2mm 重:16.44g	滑石。	剣形石製品。上面に穿孔有り。	住居内北東部。
268	石製模造 品	長:(32mm) 幅:(16mm) 厚:5mm 重:4.38g	滑石。	勾玉の未製品か?	住居内覆土。



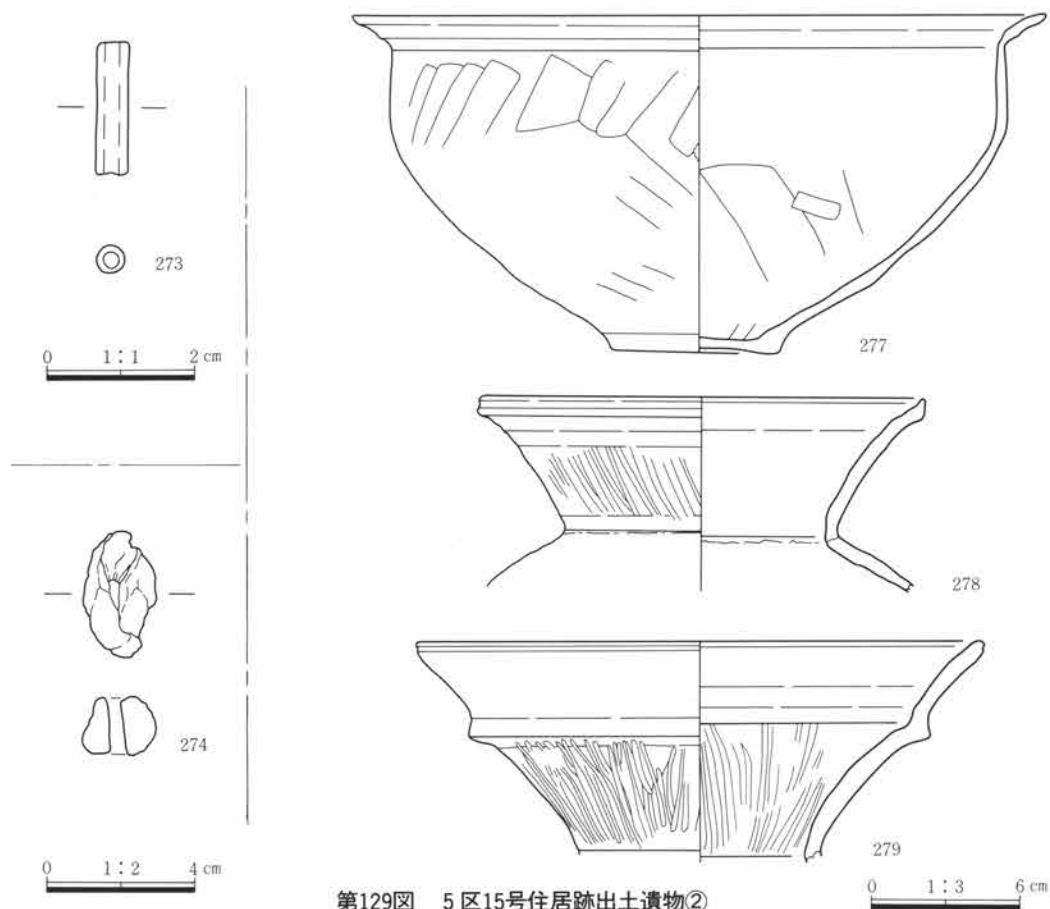
275



276

0 1:3 6cm

第128図 5区15号住居跡出土遺物①



第129図 5区15号住居跡出土遺物②

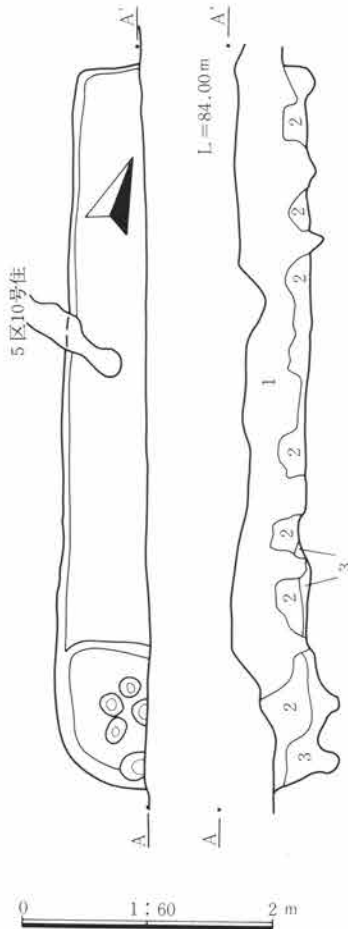
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
273	管玉	長:18mm 径:4mm 孔径:2mm 重:0.51g	蛇紋岩。		住居内北西部床直。
274	土製品	長:34mm 幅:20mm 口径:8mm		粘土紐を捩って輪にした形。	住居内南西部床直。
275	壺 土師器	器高:[37mm] 口径:62mm 底径:— 口縁部~体部1/3残。	砂粒を含む。軟質。酸化。鈍い橙。	体部~口縁部は緩やかに内湾する。取っ手は2カ所と推定され、粘土紐の貼り付け。内外面共に口縁部~体部は丁寧なで後赤色顔料塗布。	住居内南西部床直。
276	甕 土師器	器高:[59mm] 口径:(90mm) 底径:— 最大径:108mm 口縁部~体部上半1/2残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。明赤褐。	口縁部は「S」字状。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで。外面:口縁部は横なで、体部上半は篋削り。	住居内中央部。
277	鉢	器高:135mm 口径:	径1~2mmの砂粒を含	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部	住居内南西部床

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
278	土師器 壺	(280mm) 底径:70mm 口縁部~底部1/3残。	む。やや軟質。酸化。浅黄橙。	は横なで、体部上半はなで、体部下半~底部は篋なで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り後篋なで。	直。外面に油煙付着。
	土師器 壺	器高:[72mm] 口径: (180mm) 底径:一 口 縁部~体部上端1/3残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。灰白。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。外面:口縁部上半は横なで、口縁部下半は横なで後縦篋磨き、体部上端はなで。	住居内覆土。
279	土師器 壺	器高:[88mm] 口径: 230mm 底径:一 口縁 部2/3残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は外湾し、中央部に段を持つ。内外面共に口縁部上半は横なで、口縁部下半は横なで後縦篋磨き。	住居内中央部床直。内外面に油煙付着。

### 5区12号住居跡

当住居跡は、5区10号住居跡と重複する。新旧関係は、5区10号住居跡の竈煙道部により当住居跡の西壁中央部が破壊されていることから、当住居跡の方が古い。当住居跡の規模は、大部分が調査区域外のために不明であるが、南北約5.7mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約5~15cmである。床面は比較的硬く、ほぼ平坦である。調査範囲から壁溝は検出できなかった。

竈・炉・柱穴・貯蔵穴も調査範囲が狭く、検出することはできなかった。当住居跡からは、遺物の出土も無く、時期の限定は困難であるが、周囲の遺構との関係、住居跡の形態から推定する時期は、古墳時代である。



#### 5区12号住居跡土層説明

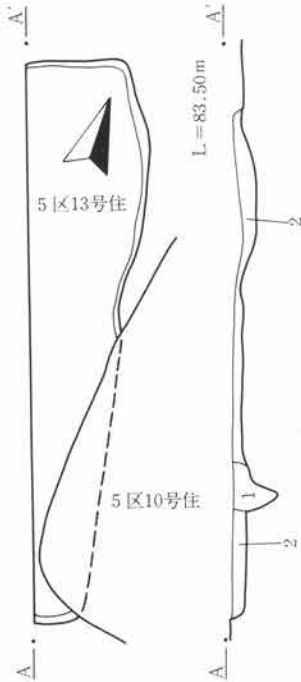
- 1 暗褐色土：浅間A軽石を含む。
- 2 暗褐色土：やや多量の軽石、少量のローム小ブロックを含む。
- 3 暗褐色土：ローム小ブロックを含む。

第130図 5区12号住居跡

### 5区13号住居跡

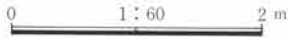
当住居跡は、5区10号住居跡・6区14号住居跡と重複する。5区10号住居跡との新旧関係は不明である。6区14号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の北側の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、大部分が検出できなかったために不明であるが、南北約4.4mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約5~10cmであり、残存状態は悪い。床面は、比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝・竈・炉・柱穴・貯蔵穴は検出することはできなかった。当住居跡からは遺物の出土も無く、時期は不明である。



5区13号住居跡土層説明

- 1 灰褐色土：やや多量の軽石及び少量の焼土粒子・炭化物を含む。
- 2 暗褐色土：ローム小ブロック及び少量の焼土粒子・炭化物を含み、やや粘性が強い。



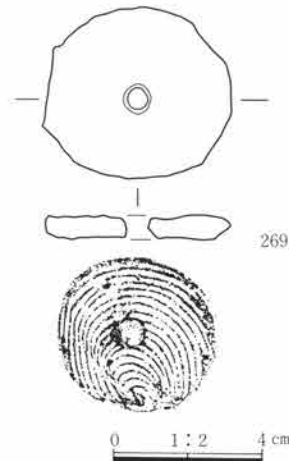
第131図 5区13号住居跡

### 5区14号住居跡

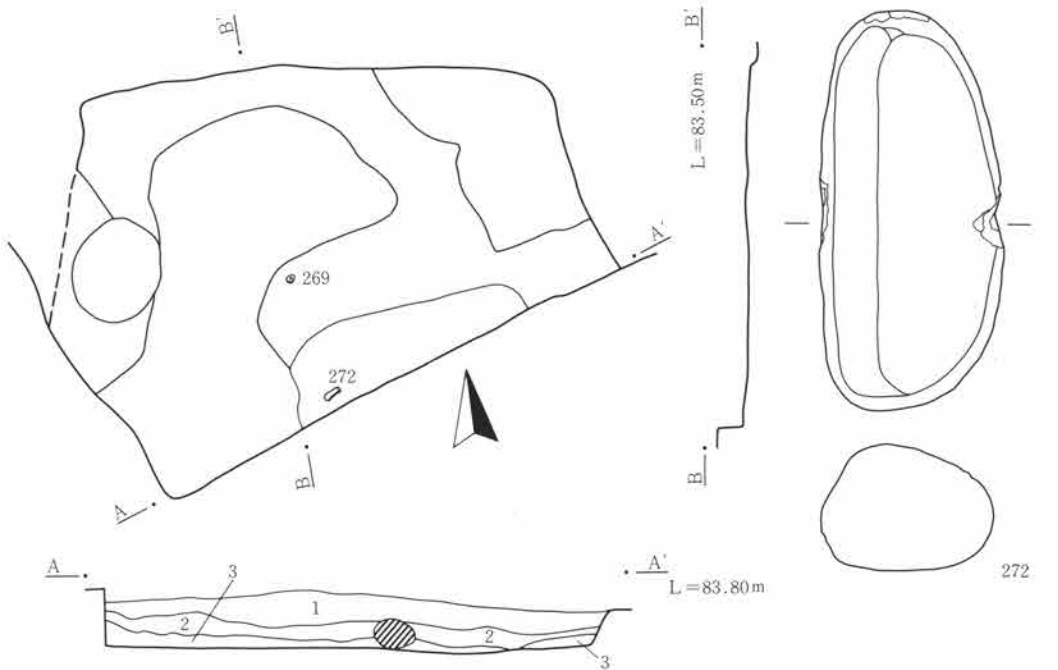
当住居跡は、5区11号住居跡・5区15号住居跡と重複する。新旧関係は、いずれも当住居跡の方が新しい。

規模・平面形・主軸方位は不明。残存壁高はセクションでは25cm程である。床面西側は褐色土とロームの混土を用いて硬く突き固めている。床面南側には灰と焼土が分布している。柱穴・周溝は確認されない。竈は調査範囲外に構築されていると考えられる。

出土土器は少なく、図示し得たのは須恵器杯の底部を利用した紡錘車(269)のみである。



第132図 5区14号住居跡出土遺物①



5区14号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土層：軽石を多く含む。炭化物を含む。
- 2 暗褐色土層：炭化物・焼土粒を含む。炭化物は1層に比して多く含む。
- 3 褐色土層：焼土・炭化物・ローム粒を多く含む。

第134図 5区14号住居跡出土遺物②

第133図 5区14号住居跡

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
269	紡錘車 須恵器	径:45mm 完形。	細砂～粗砂含む。やや軟質。黄灰。	須恵器杯の底部中央に穿孔し、紡錘車とする。底部は右回転糸切無調整。	中央。
272	薦石	長:160mm 幅:75mm 厚:51mm 重:900g	粗粒安山岩。	河原石の両側縁中央を打ち欠き、縄掛け部を作る。	中央床面。

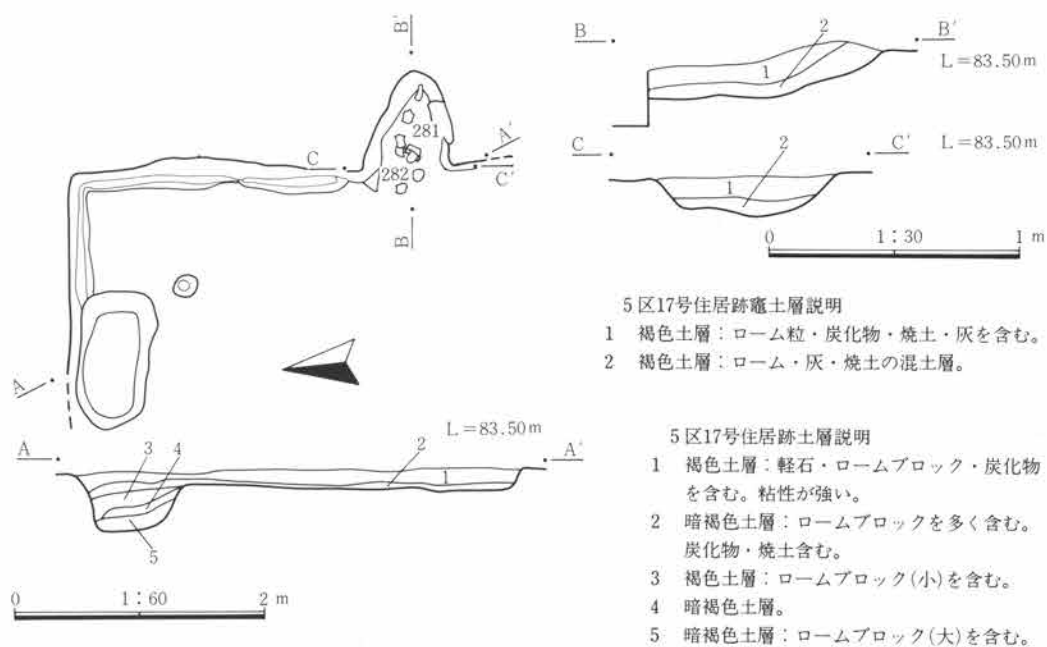
### 5区17号住居跡

当住居跡は、5区10号住居跡・5区11号住居跡に1mと近接する。5区11号住居跡とは確認部分では重複していないが、位置関係から、本来は重複していたと考えられる。

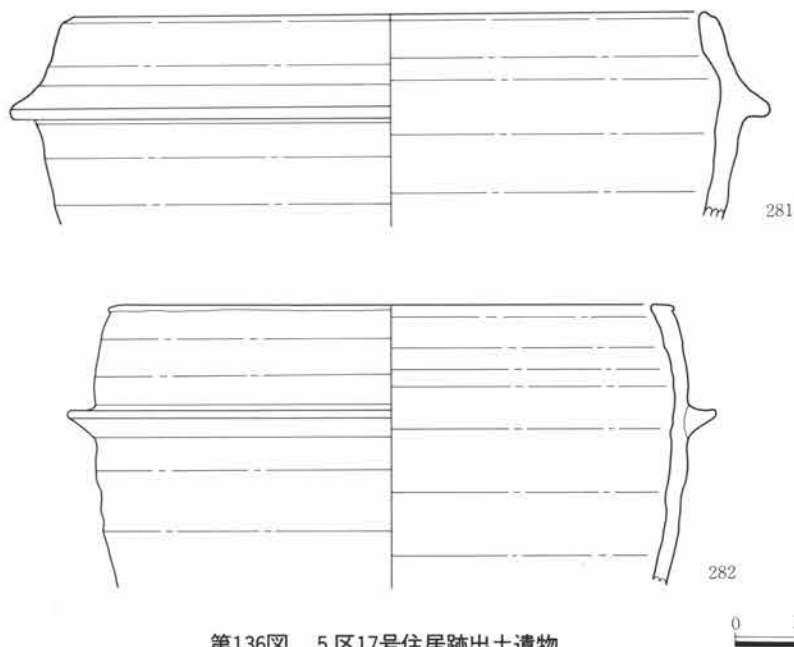
北壁の東部分と東壁の北側のみの確認のため、規模・平面形は不明である。主軸方位はN-96°-Eである。残存壁高は約18cmである。柱穴は認められない。北壁中央の土坑は土層から、住居跡に伴うと考えられるが、床下土坑か否かは不明である。深さは35cmを測る。周溝は竈と土坑部分を除いて確認されている。

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(5区14・17号住)

竈は東壁南寄りに構築されていると考えられ、 combustion部は壁外に設けられている。煙道は壁外に約70cm張り出している。図示した羽釜(281・282)は、いずれも竈内出土である。



第135図 5区17号住居跡

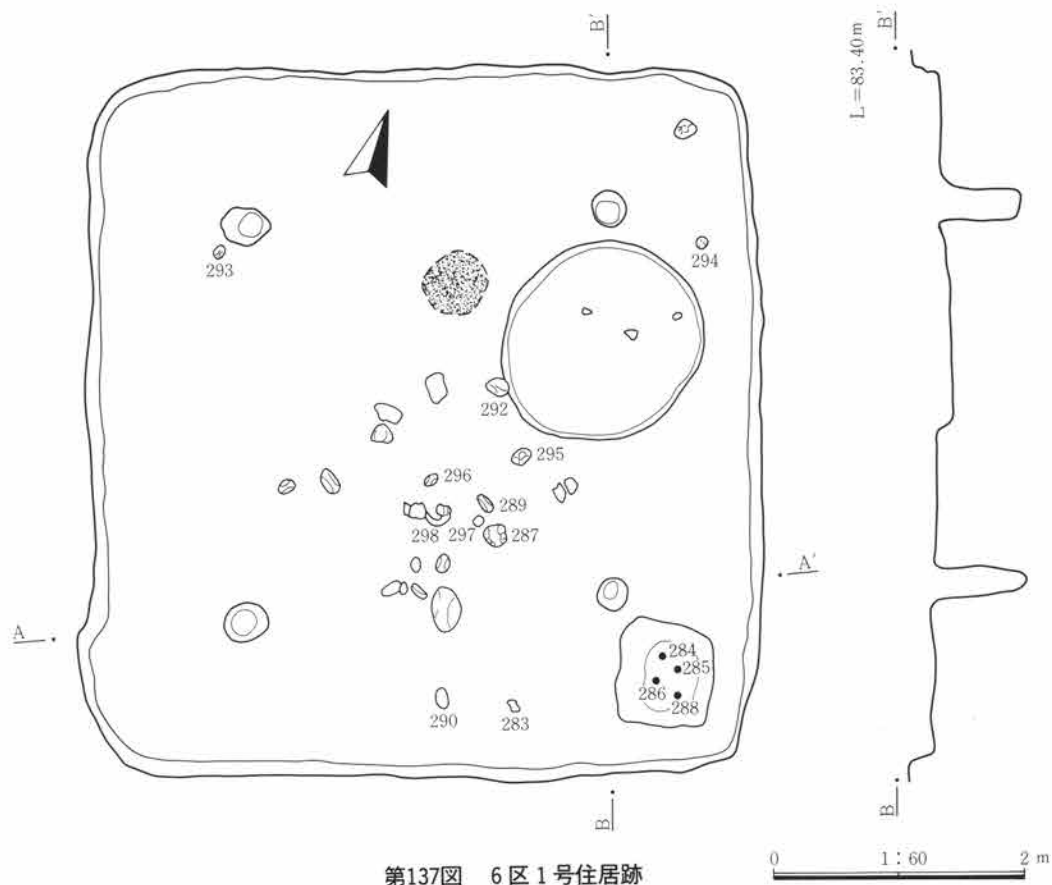


第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
281	羽釜	器高: [82mm] 口径: (252mm) 口縁部小片。	細砂～径5mmの礫含む。 やや硬質。橙。	口縁部は内傾する。内外面轆轤目残る。 罫は貼り付ける。	竈。
282	羽釜	器高: [113mm] 口径: (215mm) 口縁部小片。	細砂～径2mmの礫含む。 硬質。鈍い黄橙。	口縁部は内湾する。口縁端部は平坦に する。内外面轆轤目残る。罫は貼り付け る。	竈。

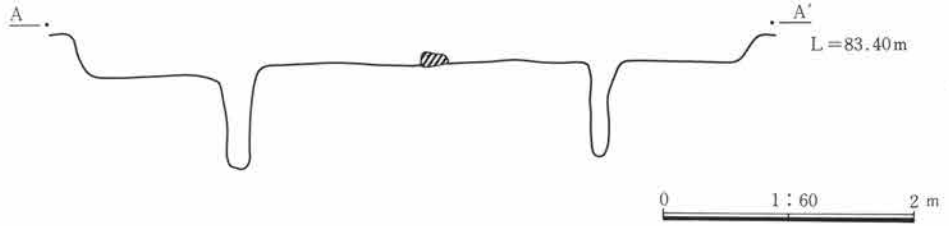
6区1号住居跡

当住居跡は、5区4号住居跡・6区2号住居跡・6区3号住居跡が近接するが重複は無い。当住居跡の規模は、東西約5.4m・南北約5.5mであり、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-20°-Wである。確認面までの壁の立ち上がりは、約20cmであり、床面は硬く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。





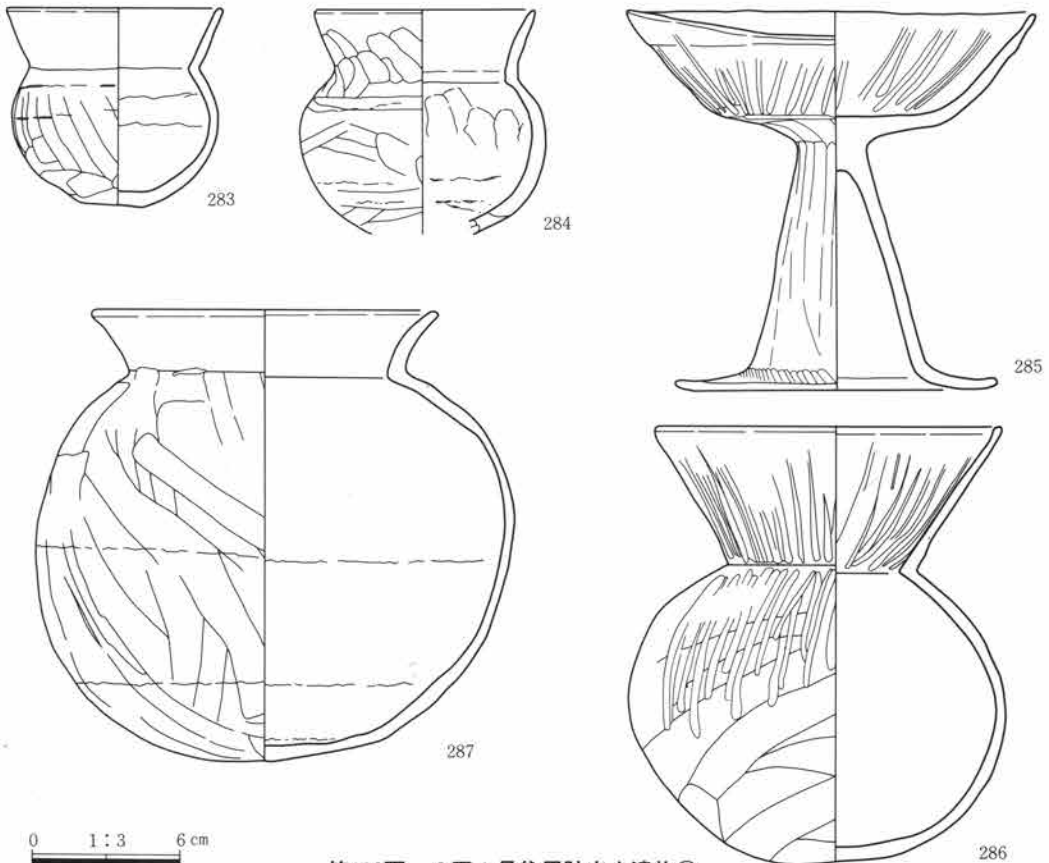
第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(5区17号住・6区1号住)



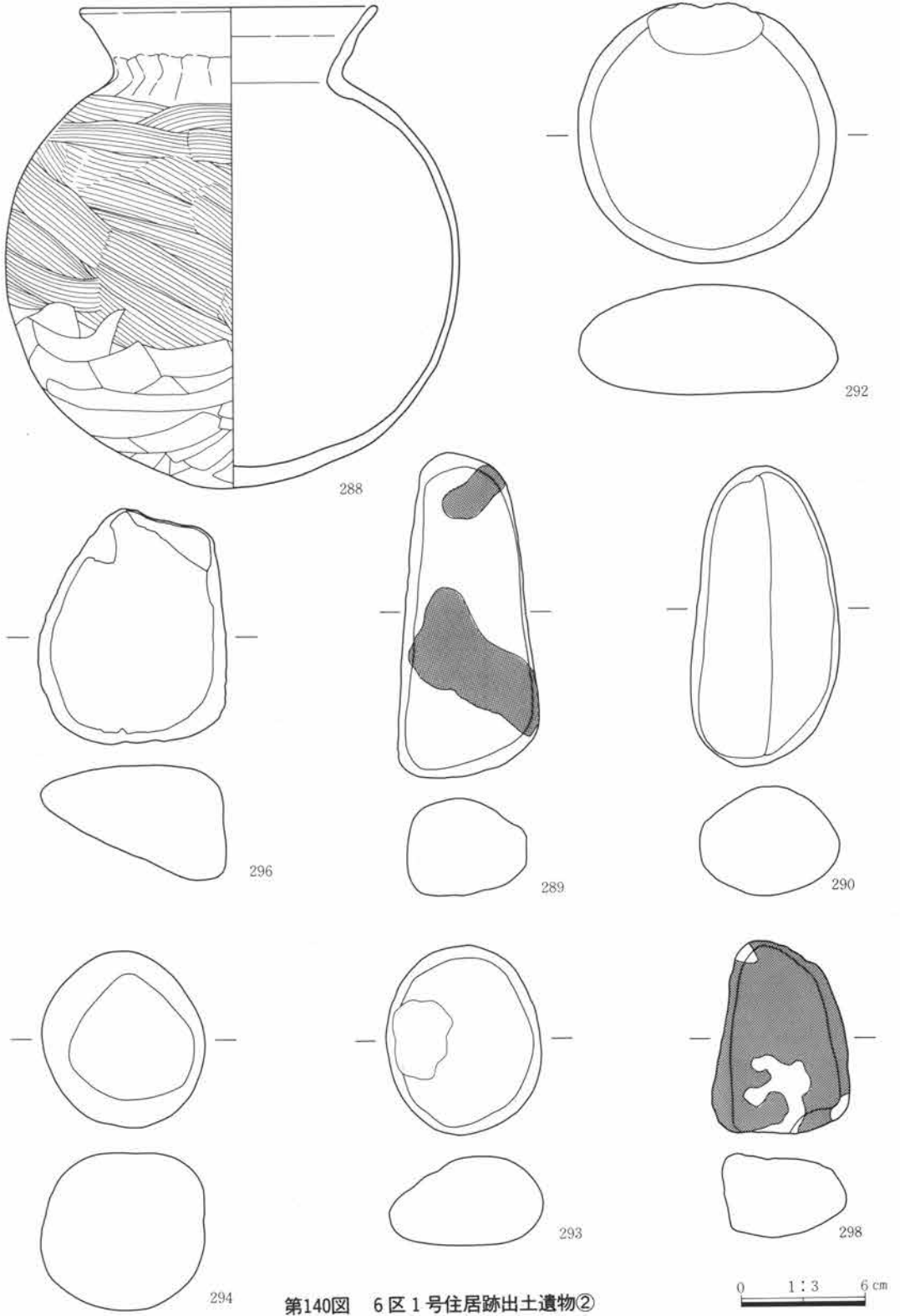
第138図 6区1号住居跡エレベーション図

炉は、北側柱穴の中間やや中央よりに築かれており、焼土の堆積を確認することができた。主柱穴は4基である。規模は、径約20~35cm・床面からの深さ約65~80cmを測り、平面形は円形ないしは不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴は、南東隅に築かれている。規模は、一辺約80cmであり、平面形は方形を呈する。貯蔵穴内からは、土師器の甕・埴・高杯が出土している。

遺物は、貯蔵穴以外からは、土師器の甕・埴の他、薦石などが出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は5世紀前半である。

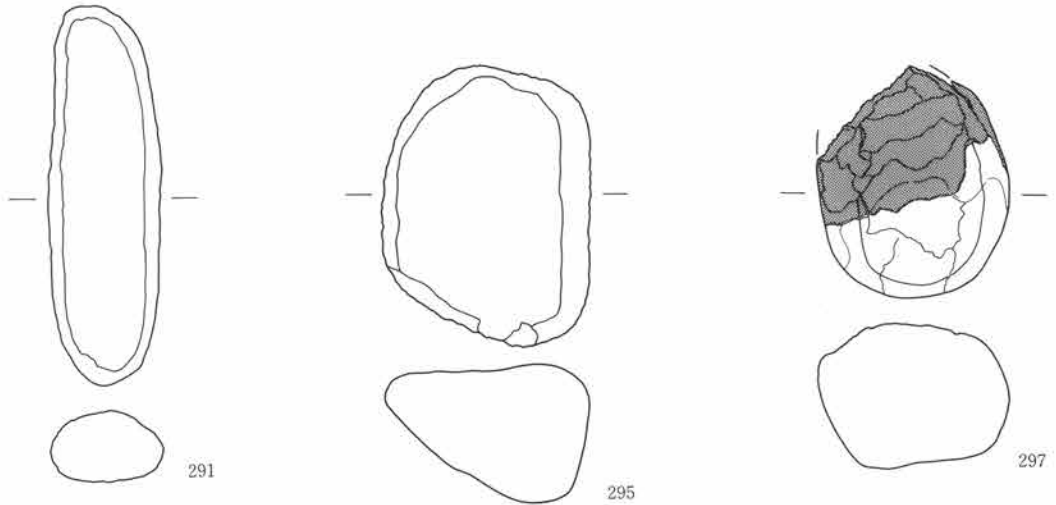


第139図 6区1号住居跡出土遺物①



第140図 6区1号住居跡出土遺物②

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(6区1号住)



第141図 6区1号住居跡出土遺物③

0 1:3 6 cm

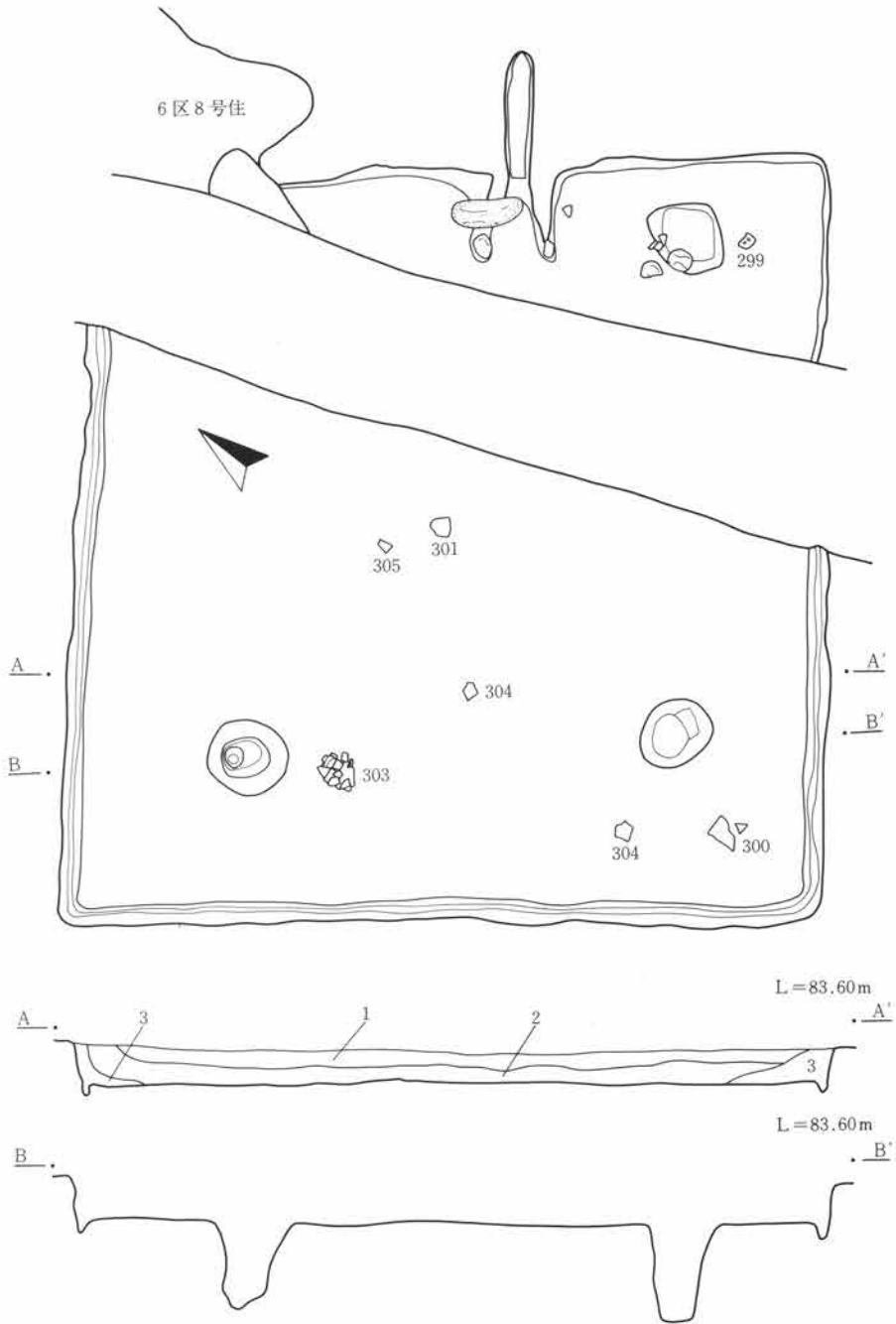
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
283	埴 土師器	器高:80mm 口径:(87mm) 底径:24mm 口縁部一部欠。	径1~2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部上半はなで、体部下半~底部は篔削り。	住居内南東部床直。内外面に油煙付着。二次炎を受けている。
284	埴 土師器	器高:[90mm] 口径:89mm 底径:— 最大径:100mm 底部欠。	径2~3mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部上半。内面:口縁部~体部はなで、体部には指頭痕が残る。外面:口縁部上半はなで、口縁部下半~体部上端は篔なで、体部は篔削り。	貯蔵穴内。内外面に油煙付着。
285	高杯 土師器	器高:152mm 口径:165mm 脚径:131mm 口縁端部・脚部下端の一部欠。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い黄褐。	体部~口縁部は僅かに内湾しつつ広がる。脚部は漏斗状に開く。内面:口縁部~体部は横なで後縦篔磨き、底部はなで、脚部は横なで。外面:口縁部~体部は横なで後縦篔磨き、底部~脚部上半は篔削り、脚部下半は篔なで。	貯蔵穴内。内外面に油煙付着。二次炎を受けている。
286	埴 土師器	器高:176mm 口径:141mm 底径:50mm 最大径:152mm 完形。	径1~2mmの砂粒を含む。硬質。酸化。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。丸底に近い平底。内面:口縁部は横なで後縦篔磨き、体部~底部は篔なで。外面:口縁部は横なで後縦篔磨き、体部上半は篔削り後縦篔磨き、体部下半~底部は篔削り。	貯蔵穴内。内外面に油煙付着。二次炎を受けている。
287	甕 土師器	器高:181mm 口径:140mm 底径:— 最大径:194mm 口縁部~底部4/5残。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。明赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾。丸底。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部~底部は篔なで。外面:口縁部は横なで、体部は篔削り、底部はなで。	住居内中央部床直。内外面に油煙付着。二次炎を受けている。

第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
288	甕 土師器	器高:231mm 口径:144mm 底径:— 最大径:221mm 完形。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。丸底。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部~底部は篋なで。外面:口縁部~体部上端は横なで、体部上半は刷毛目、体部下半~底部は篋削り。	貯蔵穴内。内外面に多量の油煙付着。二次炎を受けている。
289	薦石	長:156mm 幅:69mm 厚:46mm 重:720g	粗粒安山岩。		住居内中央部床直。油煙付着。
290	薦石	長:143mm 幅:72mm 厚:52mm 重:700g	粗粒安山岩。		南側壁中央脇。
291	薦石	長:152mm 幅:45mm 厚:28mm 重:295g	黒色片岩。		住居内覆土。
292	用途不明 石製品	径:125mm 厚:53mm 重:1180g	粗粒安山岩。	2面擦られている。	住居内中央部。
293	用途不明 石製品	長:91mm 幅:75mm 厚:42mm 重:420g	粗粒安山岩。	2面擦られている。	住居内北西部床直。
294	用途不明 石製品	85mm×79mm×76mm 重:720g	粗粒安山岩。	周囲が擦られており、形は不整形な球。	住居内北東部床直。
295	用途不明 石製品	長:113mm 幅:84mm 厚:53mm 重:710g	粗粒安山岩。	2面擦られている。	住居内中央部。
296	用途不明 石製品	長:113mm 幅:91mm 厚:55mm 重:680g	ひん岩。	3面擦られている。	住居内中央部床直。周囲に油煙付着。
297	用途不明 石製品	長:93mm 幅:78mm 厚:58mm 重:310g	粗粒安山岩。	炎を受けて、ひびが入っている。炉に使用された石か?	住居内中央部床直。
298	用途不明 石製品	長:93mm 幅:66mm 厚:41mm 重:310g	粗粒安山岩。	炎を受けている。炉に使用された石か?	住居内中央部床直。周囲に油煙付着。

6区2号住居跡

当住居跡は、6区8号住居跡と重複する。新旧関係は、同住居跡が当住居跡の北東部の壁を破壊していることから、当住居跡の方が古い。当住居跡の規模は、一辺約6.0mであり、平面形は隅丸方形を呈する。主軸は、N-50°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約25~35cmであり、残存状態は比較的良好である。壁溝は、北壁から西壁に沿い南壁中央付近までは検出できたが、竈・貯蔵穴周辺からは、検出することができなかった。

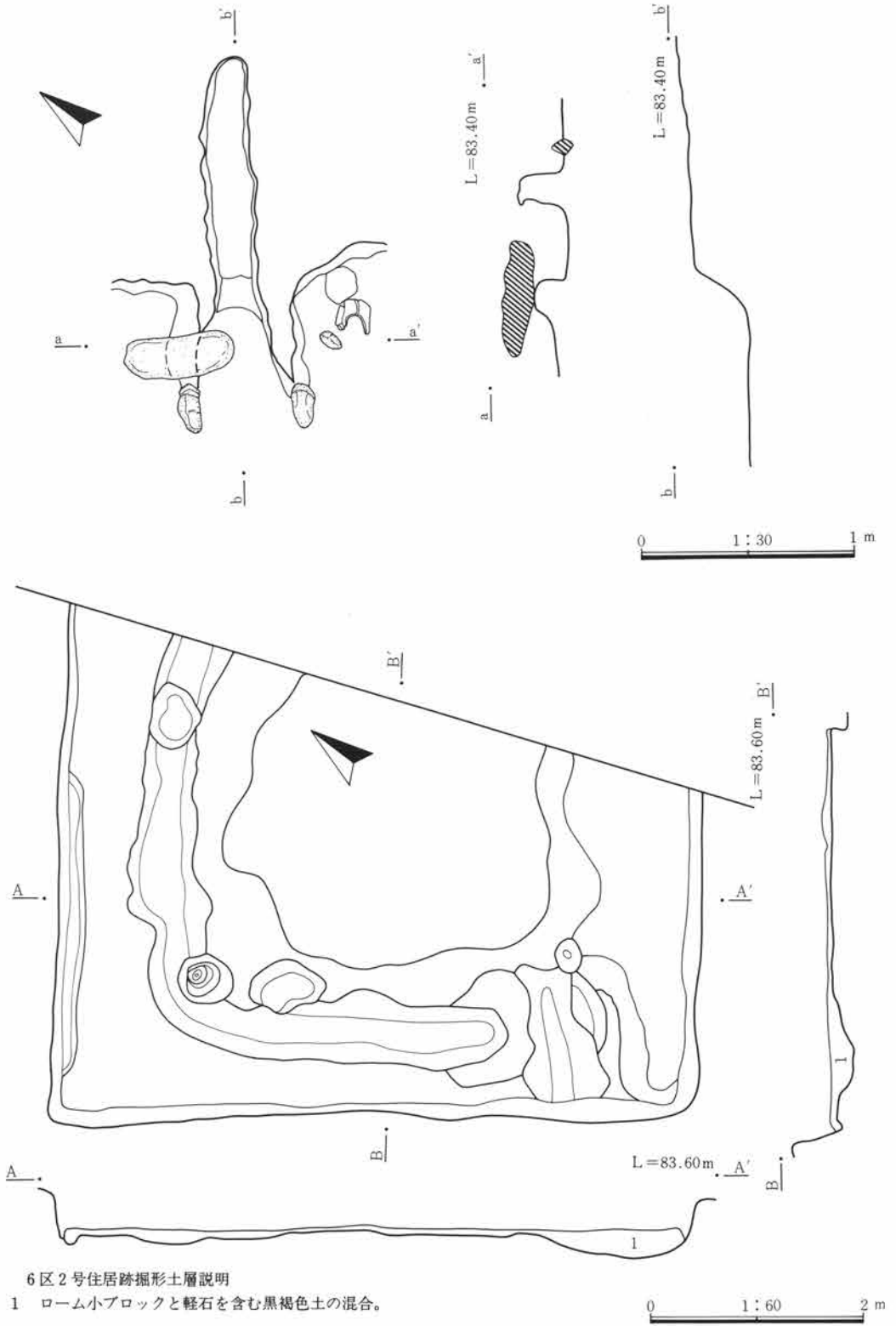


6区2号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土：やや多量の榛名山降下軽石・ローム小ブロックを含む。
- 2 暗褐色土：多量の榛名山降下軽石及びやや多量のローム小ブロックを含む。
- 3 黒褐色土：少量の榛名山降下軽石及びやや多量のローム小ブロックを含む。

0 1:60 2 m

第142図 6区2号住居跡



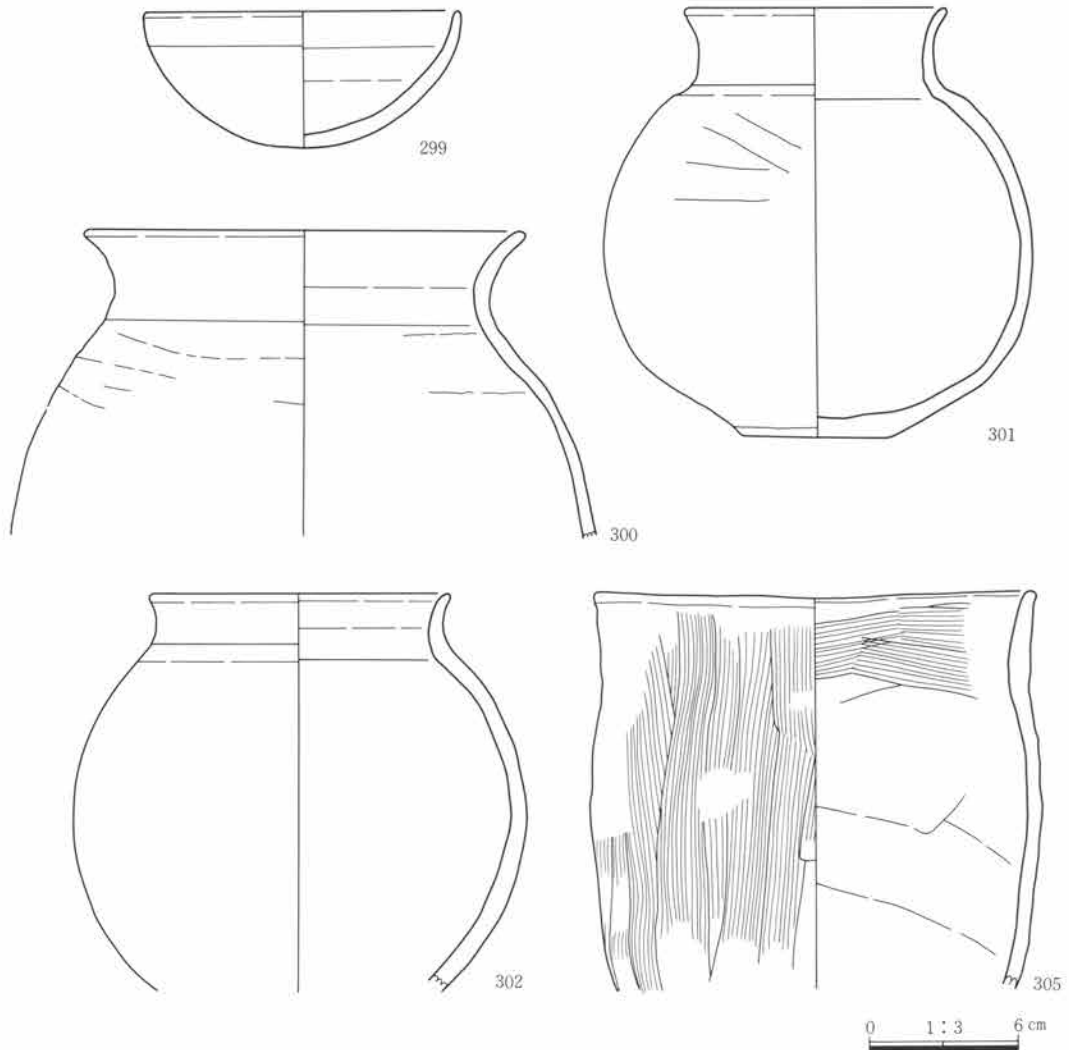
6区2号住居跡掘形土層説明

1 ローム小ブロックと軽石を含む黒褐色土の混合。

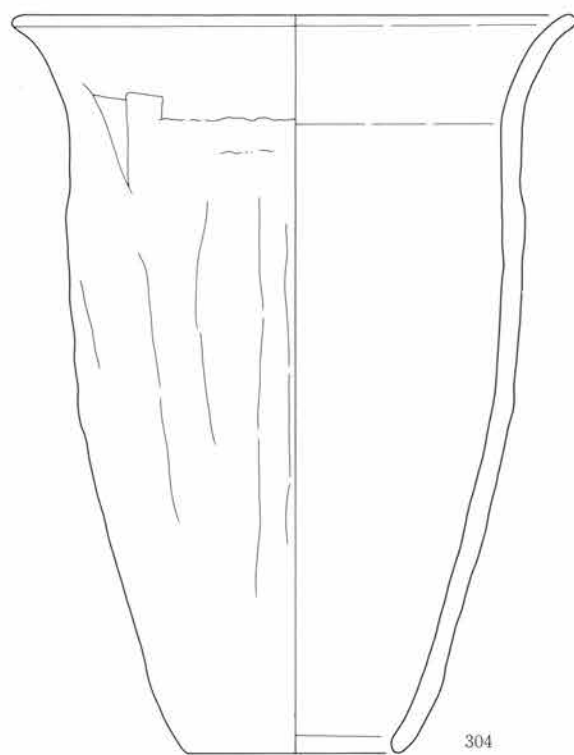
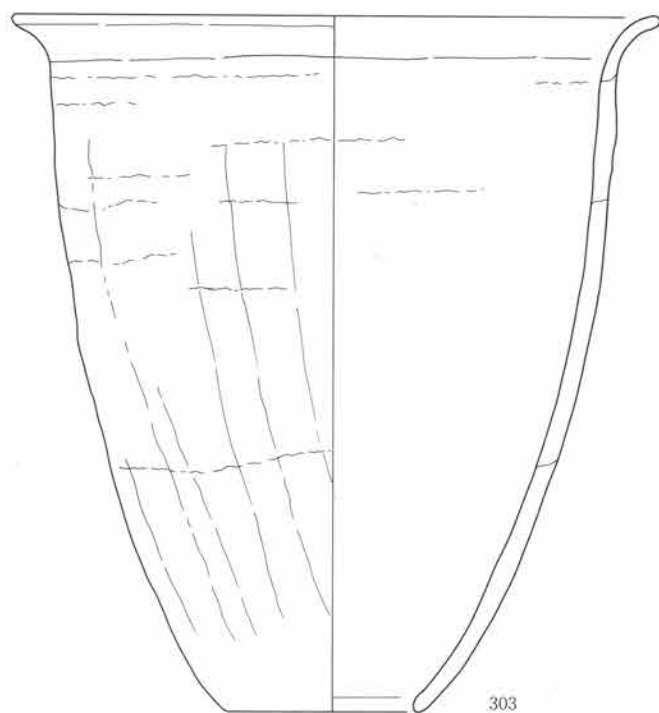
第143図 6区2号住居跡竈平面図・エレベーション図、掘形平面図・断面図

竈は、東壁中央やや南よりに築かれている。袖の先端は、河原石を地山に埋め込み、固めていた。左袖の上面には、焚き口の天井に使用されたと考えられる河原石がおかれていた。燃烧部からは灰・焼土の堆積が確認できた。煙道部の壁外への張り出しは約100cmである。支柱穴は4基と考えられるが、検出できたのは2基である。規模は、長軸約60～65cm・短軸約50～60cm・床面からの深さ約70～80cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴と考えられるピットは、南東隅、竈の右脇から検出できた。規模は、一辺約55cmであり、平面形は不整形な方形を呈する。掘形は、中央部が床面とほぼ同じであるが、壁に沿った周囲が約10～15cm掘り下げられていた。

遺物は、土師器の甕・甑・杯などが出土している。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は6世紀後半である。



第144図 6区2号住居跡出土遺物①



第145図 6区2号住居跡出土遺物②

0 1:3 6 cm



第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(6区2・3号住)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
299	杯 土師器	器高:54mm 口径:(128mm) 底径:— 口縁部~底部1/3残。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。硬質。酸化。鈍い橙。	半球形。丸底。内面:口縁部~体部上半は横なで、体部下半~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	住居内南東部床上10cm。内外面に油煙付着。
300	甕 土師器	器高:[123mm] 口径:179mm 底径:— 口縁部~体部上半2/3残。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部は横なで、体部上半は篋なで。外面:口縁部は横なで、体部上半は篋削り。	住居内南西部隅床直他。
301	甕 土師器	器高:173mm 口径:(106mm) 底径:60mm 最大径:173mm 口縁部~底部2/3残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部はやや外湾。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り、底部はなで。	住居内中央部。
302	甕 土師器	器高:[160mm] 口径:(122mm) 底径:— 最大径:(184mm) 口縁部~体部1/3残。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。明褐。	口縁部はやや外湾。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部はなで。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り。	住居内覆土。内外面に油煙付着。
303	甕 土師器	器高:280mm 口径:263mm 孔径:72mm ほぼ完形。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は外湾。内面:口縁部は横なで、体部はなで。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り。	住居内北西部床直。内外面に油煙付着。
304	甕 土師器	器高:296mm 口径:(228mm) 口径:(76mm) 口縁部~底部1/3残。	径5~6mmの小石及び砂粒を含む。軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は外湾。内面:口縁部は横なで、体部はなで。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り。	住居内南西部床直他。内外面に油煙付着。
305	甕 土師器	器高:[160mm] 口径:(178mm) 底径:— 口縁部~体部上半1/3残。	径2~3mmの砂粒を含む。軟質。酸化。浅黄橙。	口縁部は僅かに外湾。内面:口縁部は横刷毛目、体部上半はなで。外面:口縁部~体部上半は縦刷毛目。	住居内中央部。外面に油煙付着。二次炎を受けている。

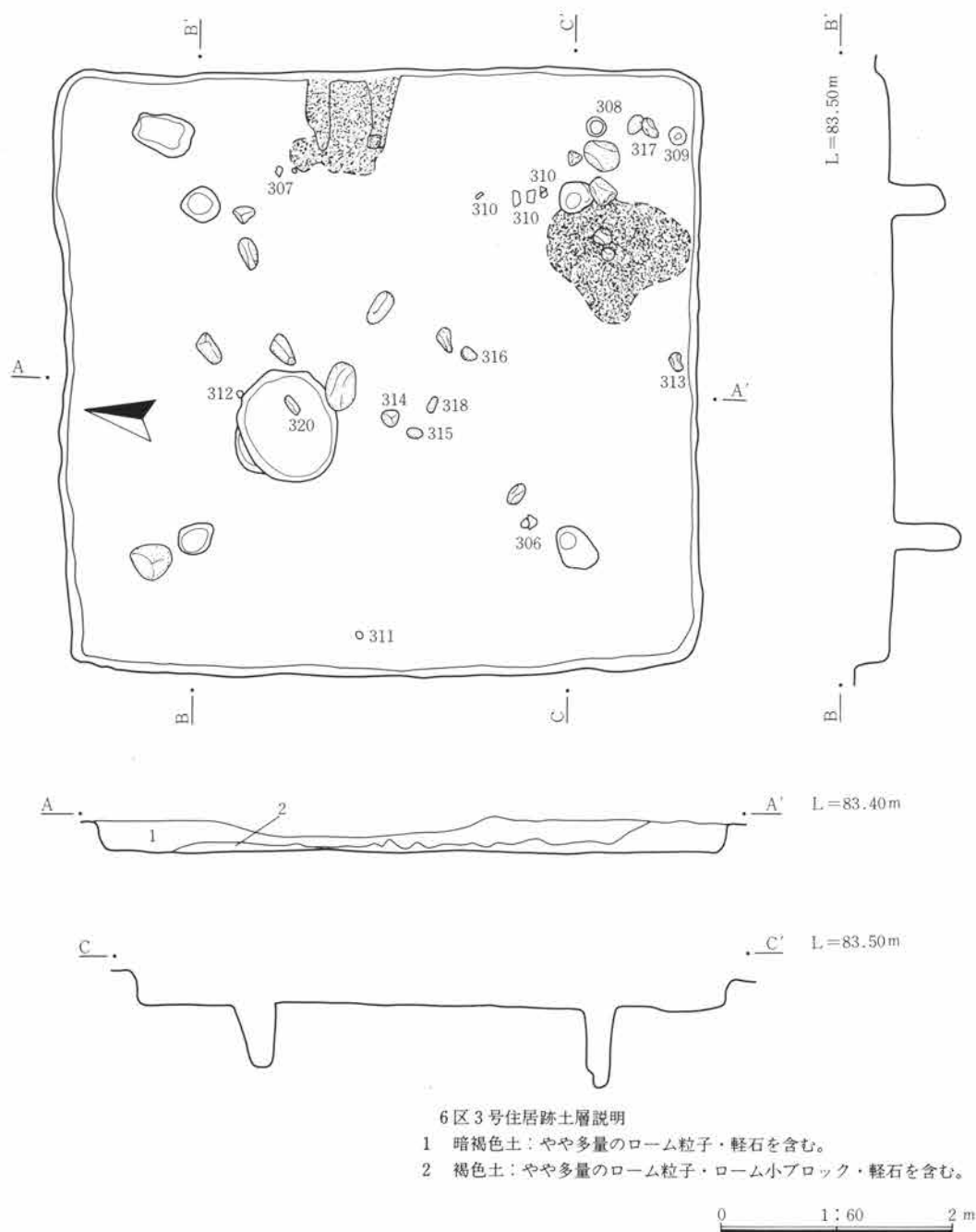
### 6区3号住居跡

当住居跡は、6区3号溝と重複する。新旧関係は、6区3号溝が当住居跡の北東隅の壁を破壊していることから、当住居跡の方が古い。当住居跡の規模は、東西約5.2m・南北約5.5mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-9°-Wである。確認面までの壁の立ち上がりは、約25~30cmであるが、6区3号溝との重複部分では上面が削られているために、約10cmである。床面は竈の周辺を中心に硬くしまっており、ほぼ平坦である。壁溝は検出することができなかった。

竈は、東壁の中央やや北よりに築かれている。大部分は破壊されていたが、右袖と袖の先端部を固める石が検出でき、灰・焼土の堆積が確認できた。支柱穴は4基である。規模は、長軸約30~40cm・短軸約25~30cm・床面からの深さ約45~70cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴と考えられるピットは、竈の左側、北東隅付近に築かれている。規模は、長辺約50cm・短辺約30cm・床面からの深さ約40cmであり、平面形は不整形な長方形を呈する。

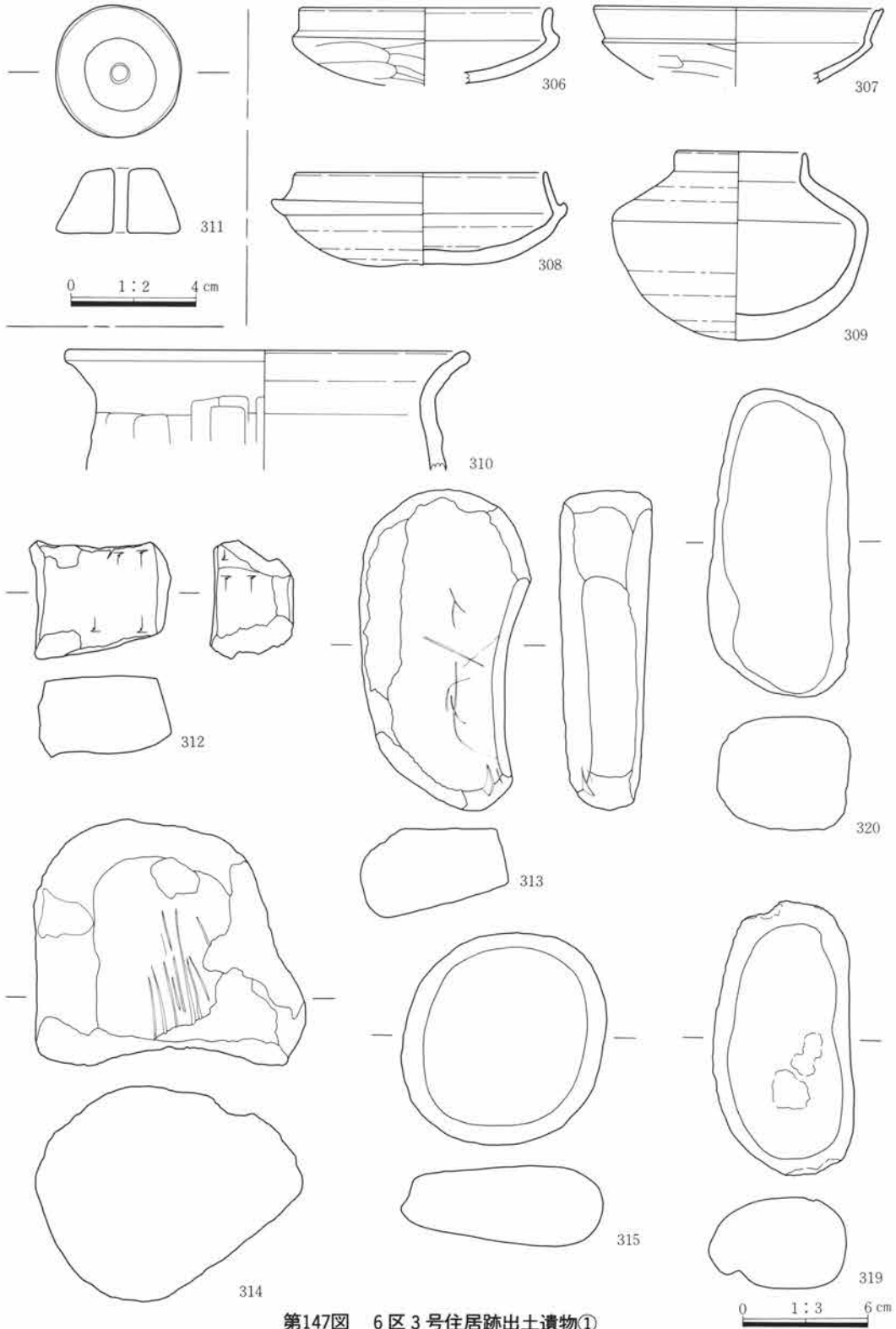
第IV章 発見された遺構と遺物

遺物は、土師器の甕・杯、須恵器の杯・短頸壺の他、石製紡錘車・薦石などが出土している。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は6世紀後半である。

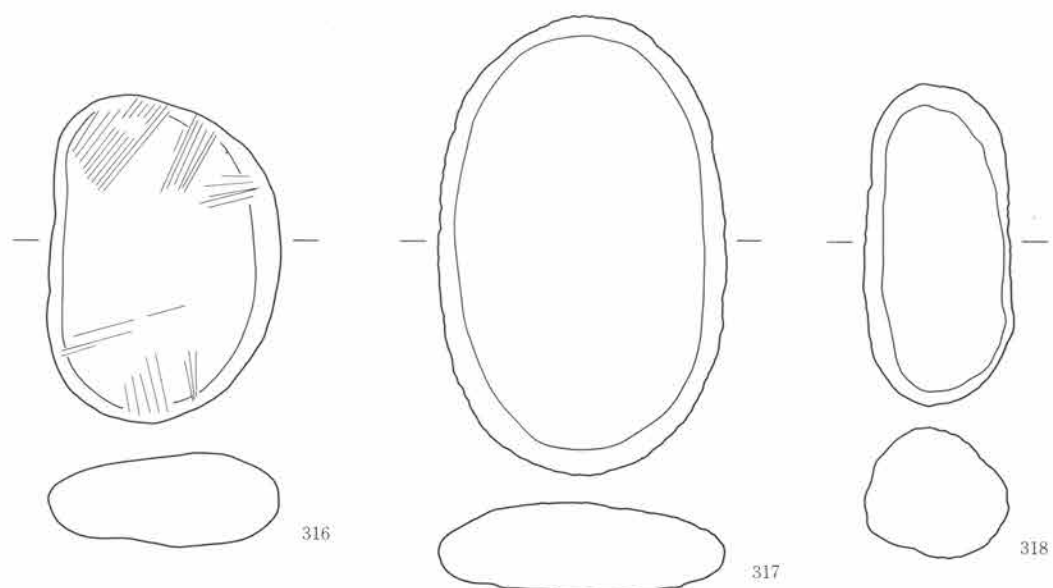


第146図 6区3号住居跡

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(6区3号住)



第147図 6区3号住居跡出土遺物①



第148図 6区3号住居跡出土遺物②

0 1:3 6 cm

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
306	杯 土師器	器高:[36mm] 口径: (122mm) 底径:— 口 縁部~体部1/8残。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。明 赤褐色。	外面口縁部下端に顕著な稜。丸底。内 面:口縁部~体部上半は横なで、体部下 半はなで。外面:口縁部は横なで、体部 は篋削り。	住居内南西部床上 5cm。内外面に油煙 附着。
307	杯 土師器	器高:[35mm] 口径: (138mm) 底径:— 口 縁部~体部1/8残。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。表 面黒褐色、断面橙。	外面口縁部下端に顕著な稜。丸底。口縁 端部に沈線一条。内面:口縁部~体部は 横なで。外面:口縁部は横なで、体部は 篋削り。	竈前床直。燻し。
308	杯 須恵器	器高:44mm 口径:122 mm 底径:— 最大径: 142mm ほぼ完形。	径3~4mmの小石及び砂 粒を含む。やや硬質。還元、内部は未還元。灰。	口縁部はやや内湾。受部は小さい。最大 径は受部。丸底。内面:口縁部~底部は 回転なで。外面:口縁部~体部上半は回 転なで、体部下半~底部は回転篋削り。	住居内南東部隅床 上5cm。
309	短頸壺 須恵器	器高:90mm 口径:62mm 底径:— 最大径:123 mm ほぼ完形。	径3~4mmの小石及び砂 粒を含む。硬質。還元。 灰白。	口縁部はほぼ直立。最大径は体部上半。 丸底。内面:口縁部~底部は回転なで。 外面:口縁部~体部上半は回転なで、体 部下半~底部は回転篋削り。	住居内南東部隅床 直。
310	甕 土師器	器高:[57mm] 口径: 195mm 底径:— 口縁 部~体部上端2/3残。	径4~5mmの小石及び砂 粒を含む。やや軟質。酸 化。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部 は横なで、体部上端は篋削り。内面:口 縁部は横なで、体部上端は篋削り。	住居内南東部床上 5cm。

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(6区3・4号住)

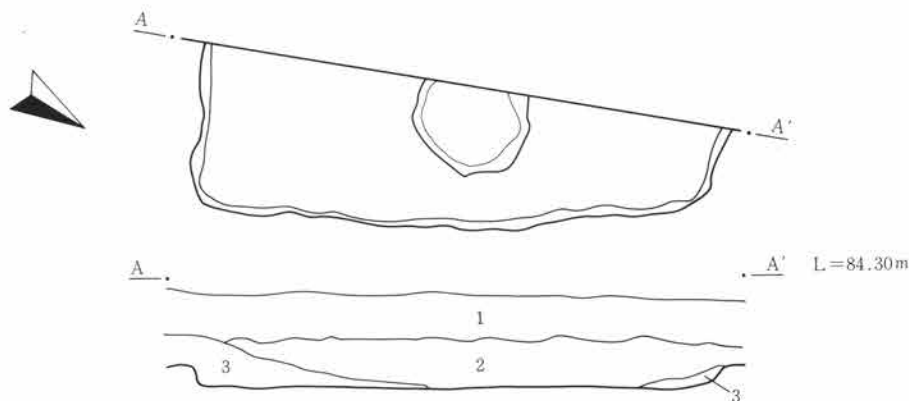
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
311	紡錘車	上径:22mm 下径:41mm 孔径:6mm 厚:21mm 重:47.22g	蛇紋岩。	縦断面形は台形。	住居内西壁中央脇床直。
312	砥石	長:[56mm] 幅:[63mm] 厚:39mm 重:200g	砥沢石。	使用面は3面。	住居内中央部床上10cm。
313	砥石	長:153mm 幅:81mm 厚:45mm 重:720g	砥沢石。	使用面は3面。	住居内南壁中央脇床直。
314	砥石	長:[117mm] 幅:129mm 厚:102mm 重:1040g	軽石(二ツ岳)。	使用面は1面。	住居内中央部床直。
315	用途不明 石製品	長:101mm 幅:98mm 厚:37mm 重:590g	粗粒安山岩。	2面擦られている。	住居内中央部床直。
316	用途不明 石製品	長:131mm 幅:94mm 厚:36mm 重:730g	粗粒安山岩。	2面擦られている。	住居内中央部床上5cm。
317	用途不明 石製品	長:184mm 幅:116mm 厚:36mm 重:1050g	粗粒安山岩。		住居内南東部隅床上5cm。
318	薦石	長:128mm 幅:61mm 厚:51mm 重:530g	粗粒安山岩。	一部欠けている。	住居内中央部床直。
319	薦石	長:131mm 幅:67mm 厚:44mm 重:595g	粗粒安山岩。	一部欠けている。	住居内覆土。
320	薦石	長:147mm 幅:68mm 厚:53mm 重:940g	砂岩。		住居内中央部床直。

6区4号住居跡

当住居跡は、6区13号住居跡と重複する。新旧関係は、直接的に把握することはできなかったが、出土遺物から当住居跡の方が古い。当住居跡の規模は、西側が検出できなかったために不明であるが、南北約4.1mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約10~15cmであり、床面はやや軟弱な部分もあるが、ほぼ平坦である。壁溝は検出することができなかった。

炉・柱穴・貯蔵穴は検出することができなかった。当住居跡からは遺物の出土も非常に少なく、覆土中から土師器の壺の小破片が一片出土しただけであり、時期の限定は困難であるが、周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。

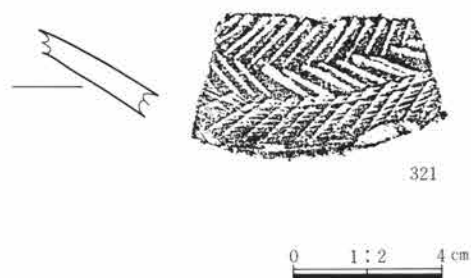
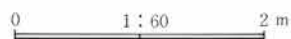
第IV章 発見された遺構と遺物



6区4号住居跡土層説明

- 1 褐色土：浅間A軽石を含む耕作土。
- 2 暗褐色土：軽石を含み、やや粘性が強い。
- 3 暗褐色土：ローム小ブロックを含む。

第149図 6区4号住居跡



第150図 6区4号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
321	壺 土師器	器高:— 口径:— 底径:— 体部上半小片。	径1~2mmの砂粒を含む。硬質。酸化。鈍い橙。	内面はなで。外面は篋状工具による「<」型刺突文と押し引き文。	住居内覆土。

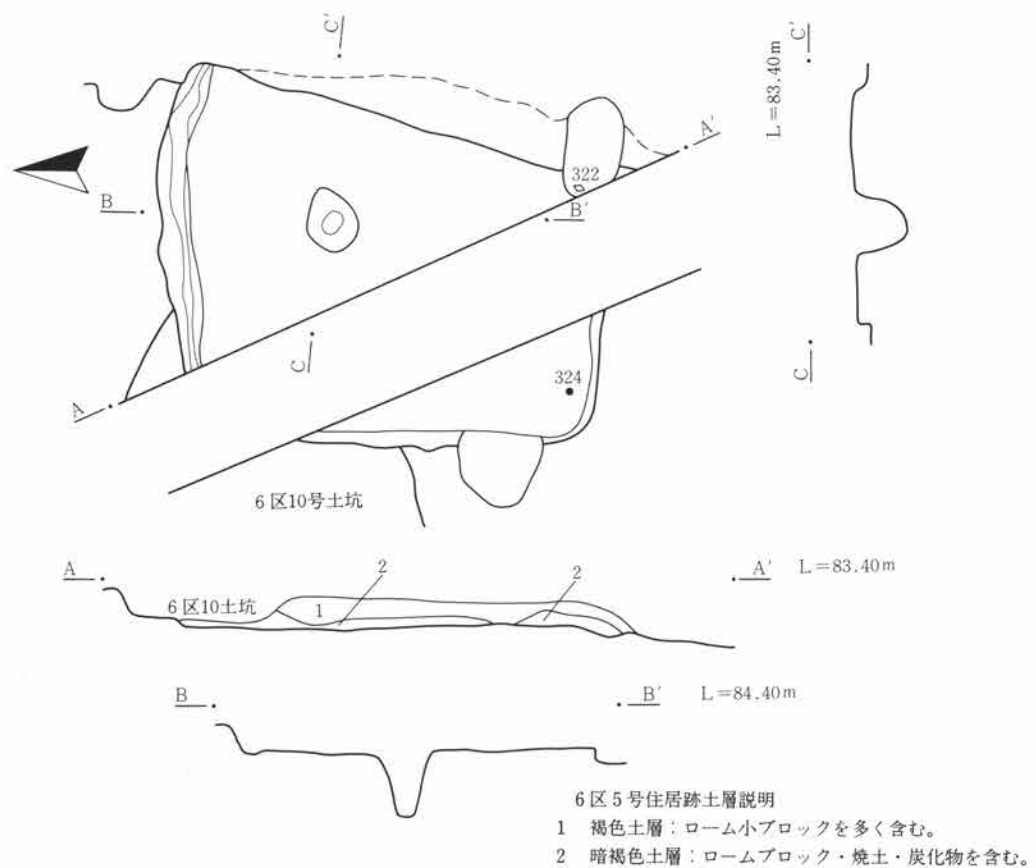
6区5号住居跡

当住居跡は、東壁が6区4号溝、北西隅が6区10号土坑と重複し、6区3号住居跡と1.5mと近接する。新旧関係はいずれも当住居跡が古い。西壁南側は攪乱により一部壊されている。

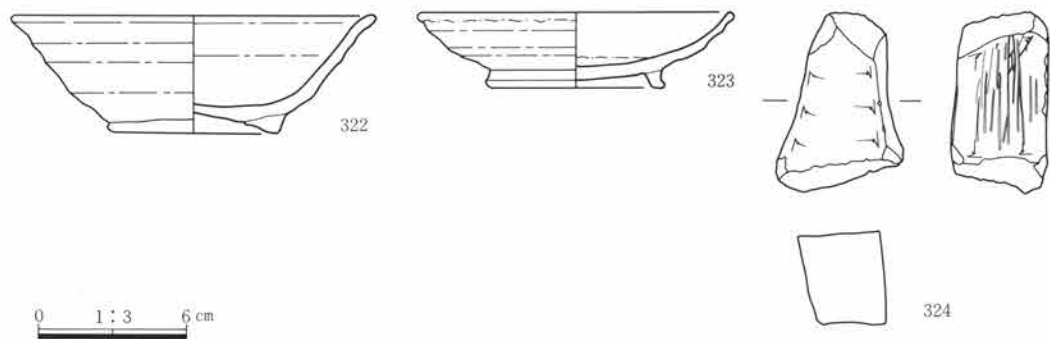
規模は東西が不明、南北が約3.5mであり、平面形は長方形を呈すると考えられる。東壁が残っていないうえ西壁も一部しか残っていないため、主軸方位は不明である。残存壁高は12~20cmである。柱穴は認められない。床面中央付近に深さ48cmのピットが確認されているが、本住居跡に

伴うとは考えにくい。周溝は北壁のみ確認された。

竈は東壁南隅に構築されているが、溝との重複のため痕跡程度の確認である。竈前からは須恵器椀(322)が出土している。



第151図 6区5号住居跡



第152図 6区5号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
322	椀 須恵器	器高:47mm 口径:(147mm) 底径:66mm 口縁部7/8欠。	細砂～径3mmの礫含む。軟質。灰黄。	口縁部は外反する。高台貼り付け時に糸切り跡をなで消す。	床面。器面は摩滅する。
323	皿 灰釉陶器	器高:30mm 口径:(128mm) 底径:72mm 口縁部9/10欠。	細砂含む。黒色鉱物粒少量噴き出す。硬質。灰白。	体部は内湾する。底部内面に重ね焼き跡残る。無釉であるが、口縁部内面のみ自然釉が掛かる。底部外面から高台脇まで篋削り後高台貼り付け。	覆土。
324	砥石	長さ:[70mm] 幅:35mm 重:140mm 両端欠。	砥沢石。	4面使用しているが、左右両側面を多用する。下面と右側面に刃物傷がある。	掘形。

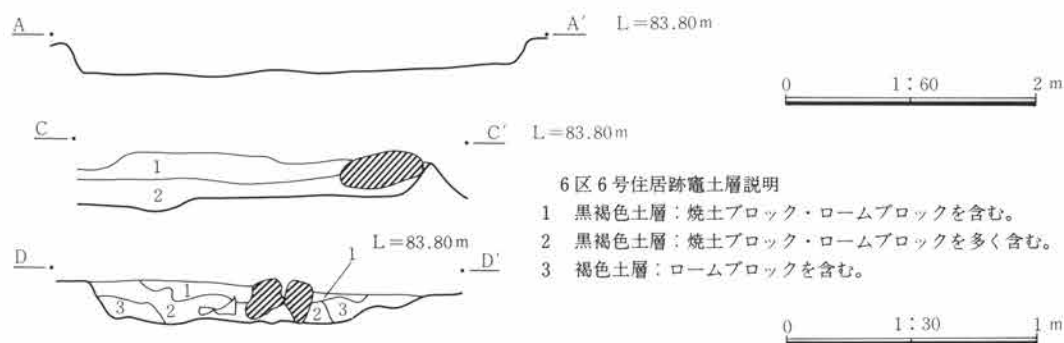
### 6区6号住居跡

当住居跡は、6区7号住居跡と重複し、6区12号住居跡に20cmと近接する。なお、6区7号住居跡は6区12号住居跡と重複しており、新旧関係は6区12号住居跡より6区7号住居跡が新しく、6区7号住居跡より当住居跡が古い。東西の両壁に重複する小土坑は、いずれも当住居跡より新しい。

規模は東西約3.0m・南北約3.7mで、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-110°-Eである。残存壁高は10～20cmである。柱穴・周溝は認められない。南東隅には3基のピットが確認されており、東から規模は短軸6cm・長軸36cm、短軸32cm・長軸34cm、短軸24cm・長軸40cm、深さは3cm、16cm、8cmである。

竈は東壁南隅に構築されており、煙道は壁外に約40cm張り出す。燃烧部は壁外に設けている。

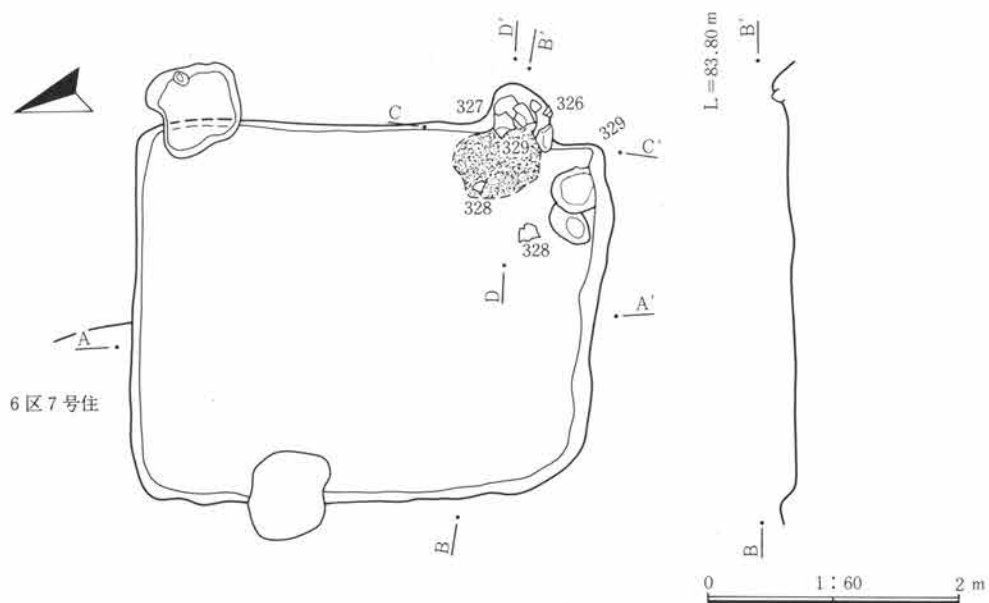
遺物は竈内とその前からの出土が多く、図示した中では(325)以外はすべて竈とその周辺の出土である。



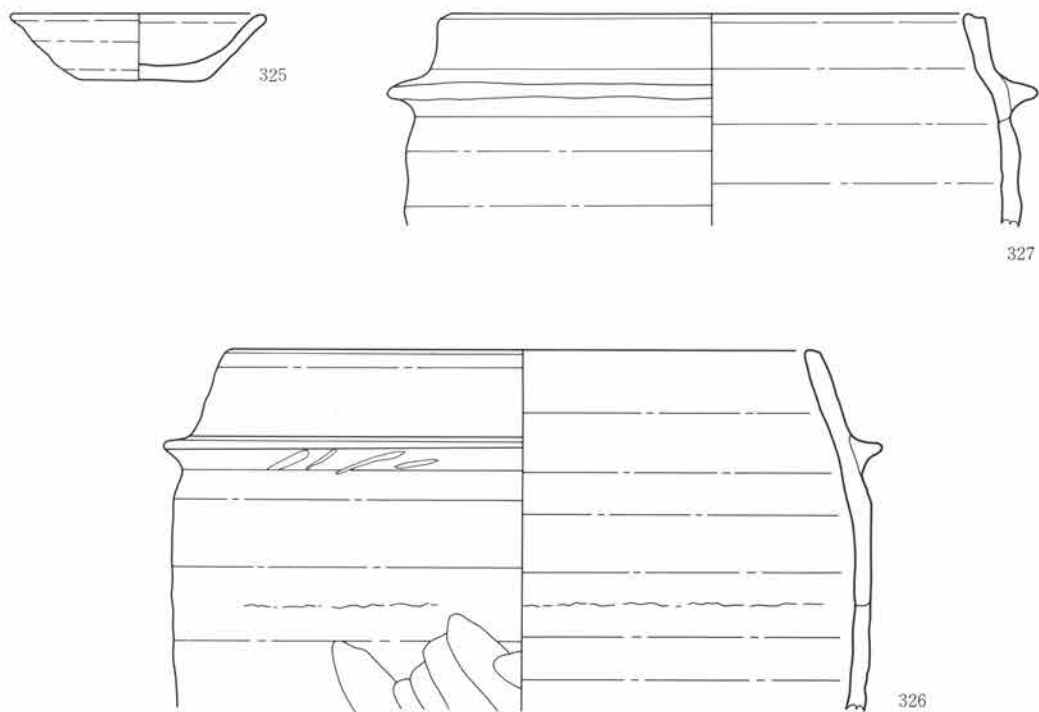
第153図 6区6号住居跡エレベーション図・竈断面図



第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(6区5・6号住)

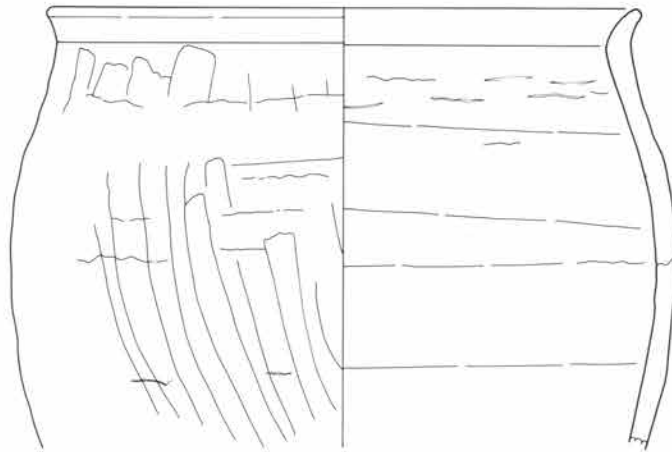
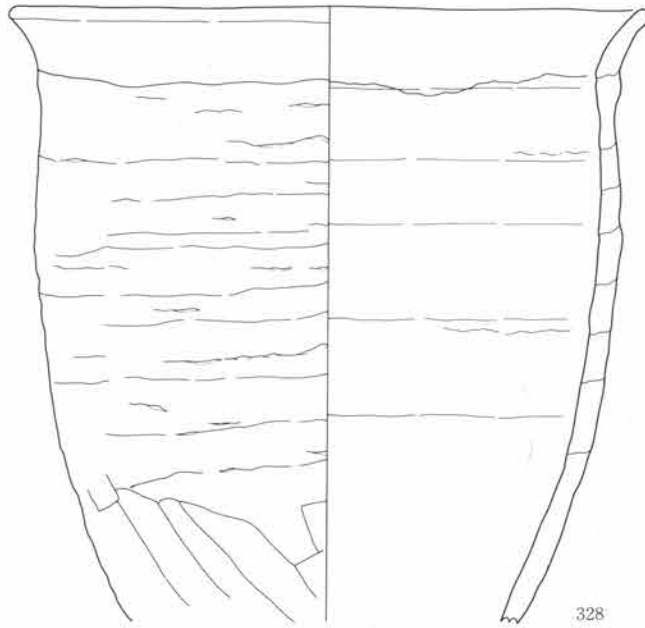


第154図 6区6号住居跡



第155図 6区6号住居跡出土遺物①





第156図 6区6号住居跡出土遺物②

0 1:3 6 cm

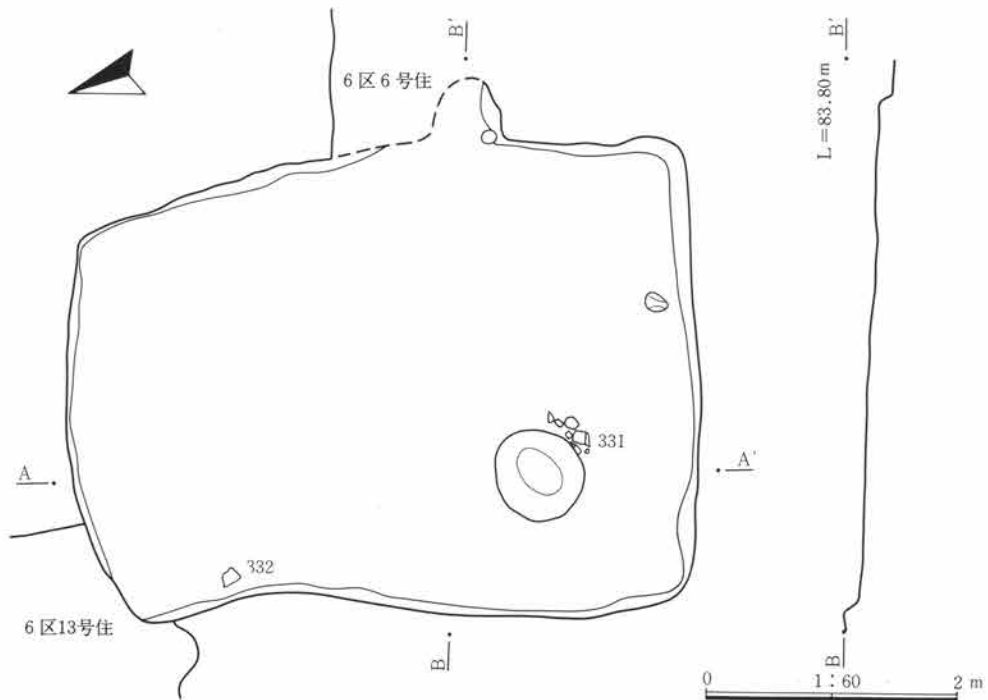
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
325	杯 須恵器	器高:26mm 口径:103mm 底径:49mm 口縁部1/2欠。	細砂～径1mmの粗砂含む。黒色鉱物粒含む。やや軟質。鈍い褐色。	口縁部は外反する。底部外面紐造り痕残る。底部切り放し痕不明。	覆土。器面は摩滅する。
326	羽 釜	器高:[145mm] 口径:	細砂～径2mmの礫多く	口縁部は内傾する。鈎は貼り付ける。体	竈前床面・竈覆土。

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
327	羽 釜	(239mm) 口径部～体部1/8残。 器高:[85mm] 口径:(220mm) 口径部～体部上位1/6残。	含む。やや硬質。橙。 細砂～粗砂含む。やや軟質。鈍い橙。	部内外面回転なで。口径部は横なで。 口径部は内傾する。鈔は貼り付ける。体部内外面回転なで。口径部は横なで。	竈覆土。
328	土 釜	器高:[246mm] 口径:260mm 口径部3/4・体部1/2残。	細砂～径3mmの礫含む。硬質。鈍い赤褐。	口径部は外反する。体部は張らず、長胴形を呈する。口径部は横なで。体部内外面は回転なで。紐造り痕多く残る。	竈前床面。
329	土 釜	器高:[177mm] 口径:(240mm) 口径部1/5・体部1/9残。	細砂～径3mmの礫含む。硬質。明赤褐。	口径部はだれた「コ」の字状を呈する。口径部は横なで。体部内外面はなで。外面のみ後に竈なで。	竈覆土。

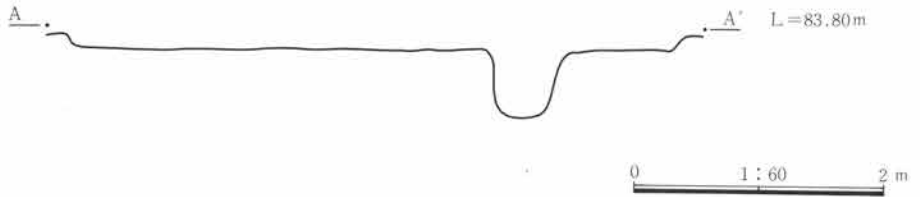
### 6区7号住居跡

当住居跡は、6区6号住居跡・6区12号住居跡・6区13号住居跡と重複する。新旧関係はいずれも当住居跡が新しい。

規模は東西約3.8m・南北約5.1mとやや大きく、平面形は不整形な長方形である。特に西壁北



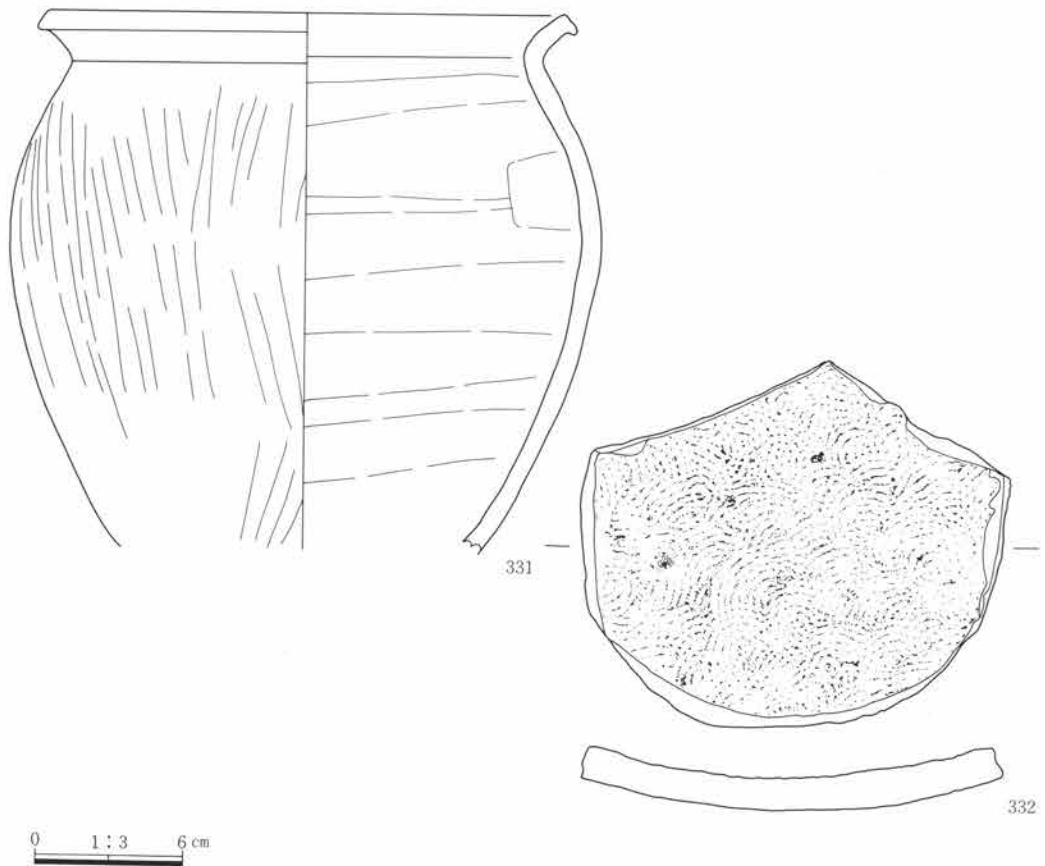
第157図 6区7号住居跡



第158図 6区7号住居跡エレベーション図

側は変形しており、重複を思わせる。しかし、調査時の所見では重複が認められず、北壁屈曲部の床面には人頭大の石群が認められ、この部分での重複は考えにくい。残存壁高は7~25cmである。主軸方位はN-99°-Eである。床は(332)の須恵器甕が出土した地点より南に良好な貼り床が確認できた。柱穴・周溝は認められない。南西に長軸74cm、短軸70cm、深さ52cmの土坑が確認されたが、住居跡には伴わない可能性が高い。

竈は東壁南寄りに構築されているが、調査区の境であるため南側のみの確認である。燃焼部は壁外に設けられていたと考えられる。



第159図 6区7号住居跡出土遺物

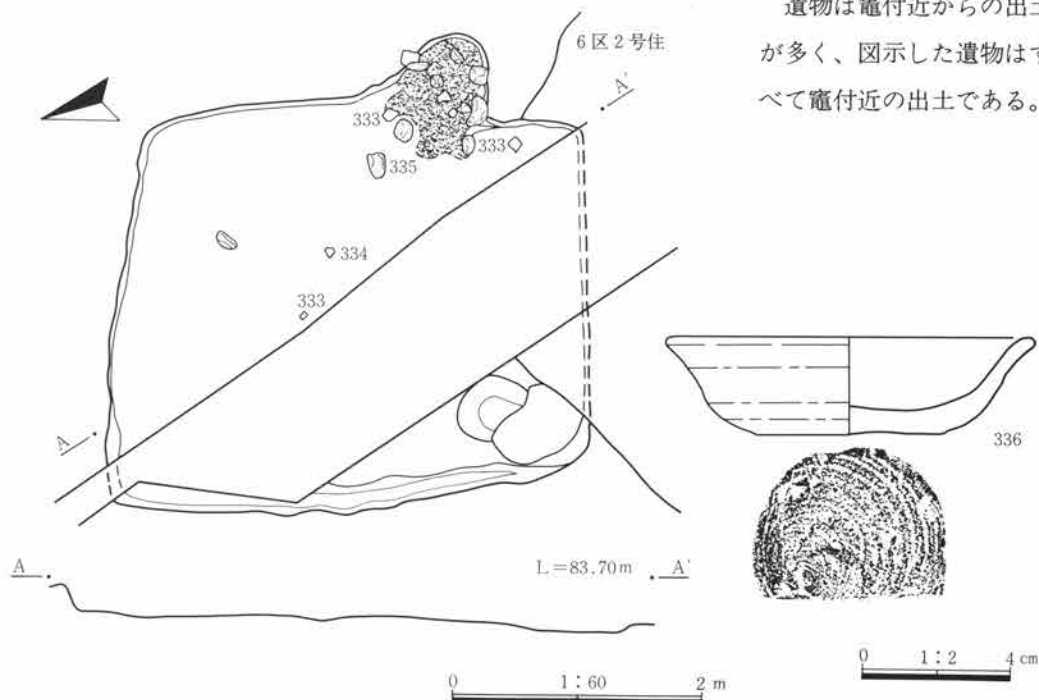
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
331	甕 土師器	器高:[215mm] 口径: (210mm) 1/3残。	細砂～径2mmの礫多く 含む。硬質。黒灰。体部 外面下位のみ褐。	口縁部は外反し、端部を下方に折り返す。口縁部は横なで。体部はなで。	南西隅床面。
332	甕 須恵器	器高:— 口径:— 底 径:— 体部破片。	砂粒を含む。硬質。還元。灰。	内外面共に叩き目。内面は平行叩き目、外面は同心円状叩き目。	住居内北西部。

### 6区8号住居跡

当住居跡は、6区2号住居跡と重複し、6区9号住居跡の竈に2mと近接する。新旧関係は当住居跡の方が新しい。

規模は東西約3.3m・南北約3.8m?であり、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-107°-Eである。床は中央部が非常に硬いが、貼り床は認められない。周溝・柱穴は確認されない。南西隅に存在する土坑は、床下土坑である。長軸54cm、短軸35cm、深さ20cmを測る。

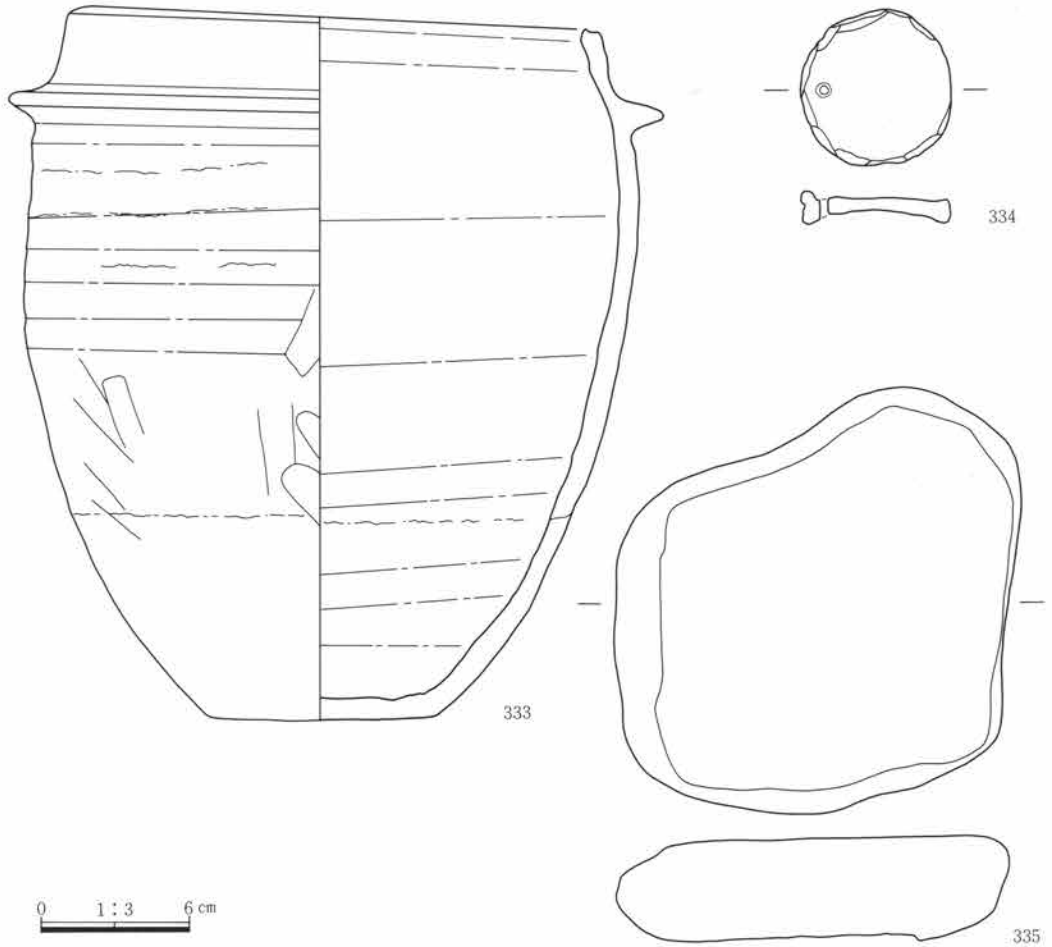
竈は東壁南側に構築され、燃烧部は壁外に設けている。煙道は壁外に約64cm張り出している。竈内には焼石が多く認められた。



遺物は竈付近からの出土が多く、図示した遺物はすべて竈付近の出土である。

第160図 6区8号住居跡

第161図 6区8号住居跡出土遺物①

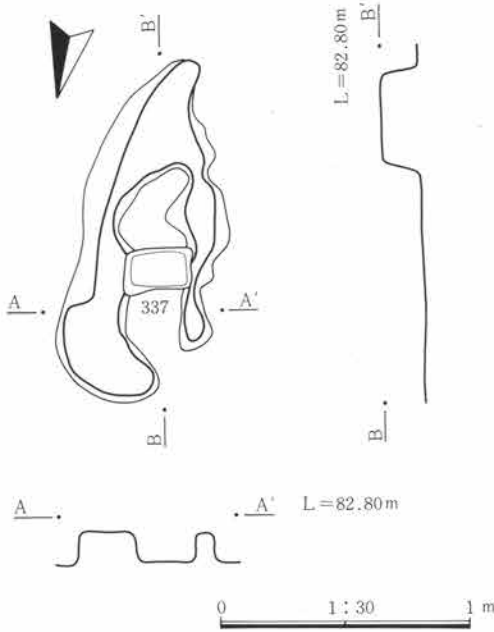


第162図 6区8号住居跡出土遺物②

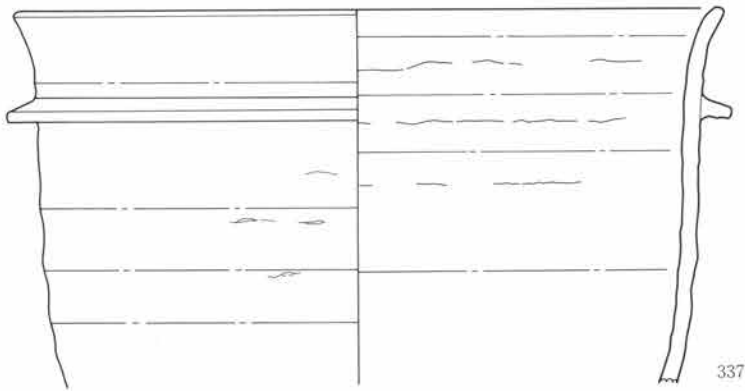
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
333	羽釜	器高:287mm 口径:216mm 底径:93mm 1/4欠。	細砂～粗砂多く含む。硬質。鈍い橙。	口縁部は内傾する。罫は貼り付ける。体部内外面は回転なで。外面下位のみ後に篋削り。口縁部回転横なで。	竈。
334	土錘? (椀) 須恵器	径:61～63mm 厚さ:5～13mm 完形。	細砂含む。やや硬質。鈍い褐。	椀の底部周縁を打ち欠いて円形にする。高台も一部を残して打ち欠く。径3mmの孔をあける。	竈。
335	用途不明 石製品	長:170mm 幅:160mm 厚:41mm 重:2030g	粗粒安山岩。	川原石を使用する。表面のみ使用する。	竈前。
336	杯 須恵器	器高:26mm 口径:(96mm) 底径:51mm 底部3/4・口縁部一部残。	細砂～粗砂多く含む。やや硬質。外面は鈍い褐。内面は褐灰。	口縁部は外反する。底部外面右回転糸切り無調整。	貯蔵穴。

6区9号住居跡

当住居跡は、竈のみの確認であり、6区8号住居跡に約2mと近接する。住居跡の規模・平面形等は不明である。竈は焼土による確認であるため、形態等は不明である。焼土上からは羽釜が出土している。



第163図 6区9号住居跡



0 1:3 6 cm

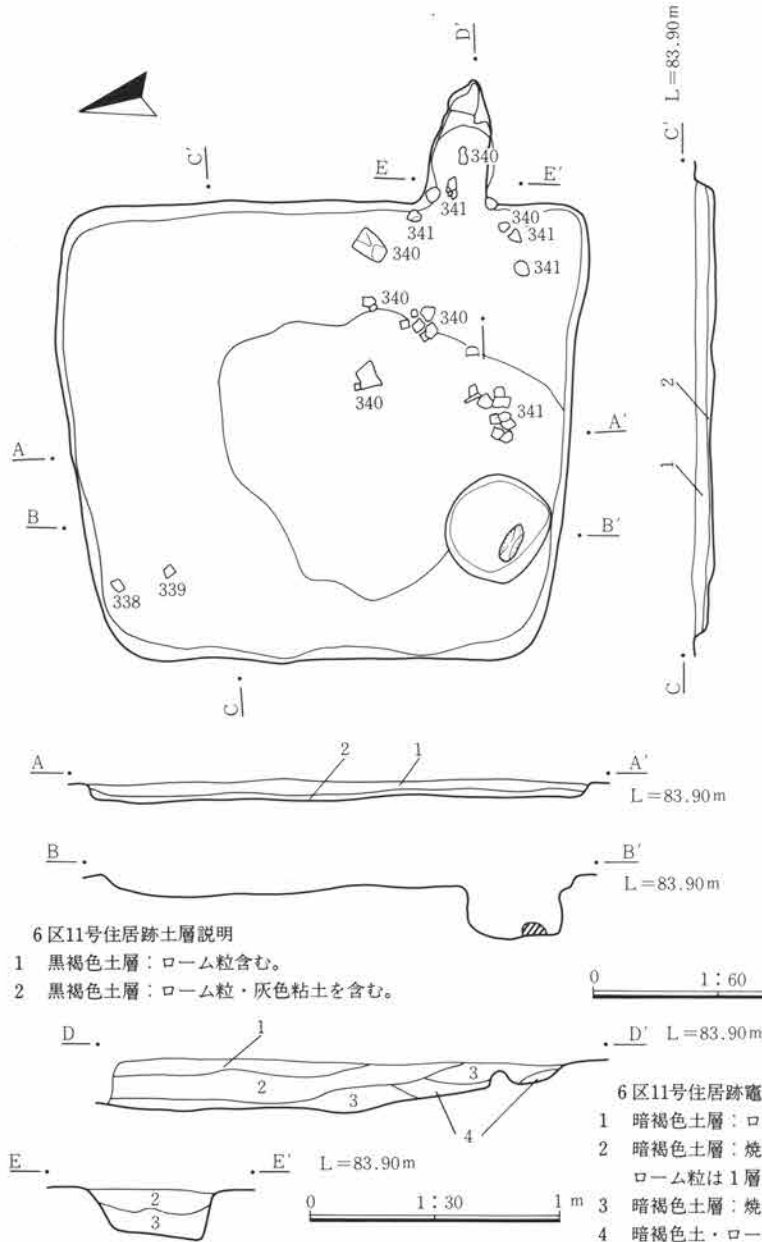
第164図 6区9号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
337	羽釜	器高:[150mm] 口径: (287mm) 1/5残。	細砂～径3mmの礫多く 含む。やや軟質。橙。	口縁部は外反する。台形の鋳を貼り付ける。口縁部は雑な横なで。体部は回転なで?	竈。

6区11号住居跡

当住居跡は、7区12号住居跡・6区13号住居跡・6区1号土坑と重複し、6区7号住居跡に接する。新旧関係はすべて当住居跡が新しい。

規模は東西約3.6m・南北約4.0mであり、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-103°-Eである。残存壁高は6~21cmである。柱穴・周溝は認められない。南壁西寄りに径84cm、深さ40cmの円形土坑が確認されている。床は中央から南壁にかけて硬く締まっている。



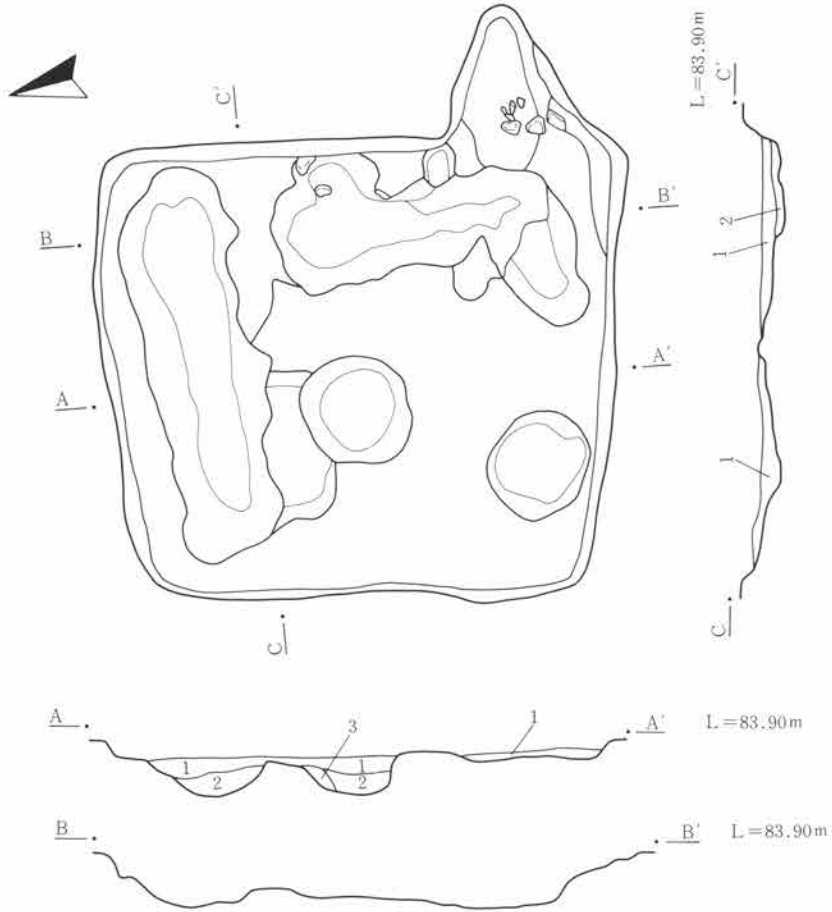
竈は東壁南隅に構築されており、燃烧部は壁外に設けられている。煙道は壁外に約100cm張り出している。燃烧部の床は良く焼けており、手前には一对の袖石が立てられている。

遺物は竈付近と南壁に多く、土釜(340・341)は接合率も高い。北西隅からは土師質土器皿(338・339)が2個体出土している。

北壁と東壁付近には深さ20~30cmの溝状の掘形が確認された。また、中央には深さ27cmの円形床下土坑がある。

第165図 6区11号住居跡





6区11号住居跡掘方土層説明

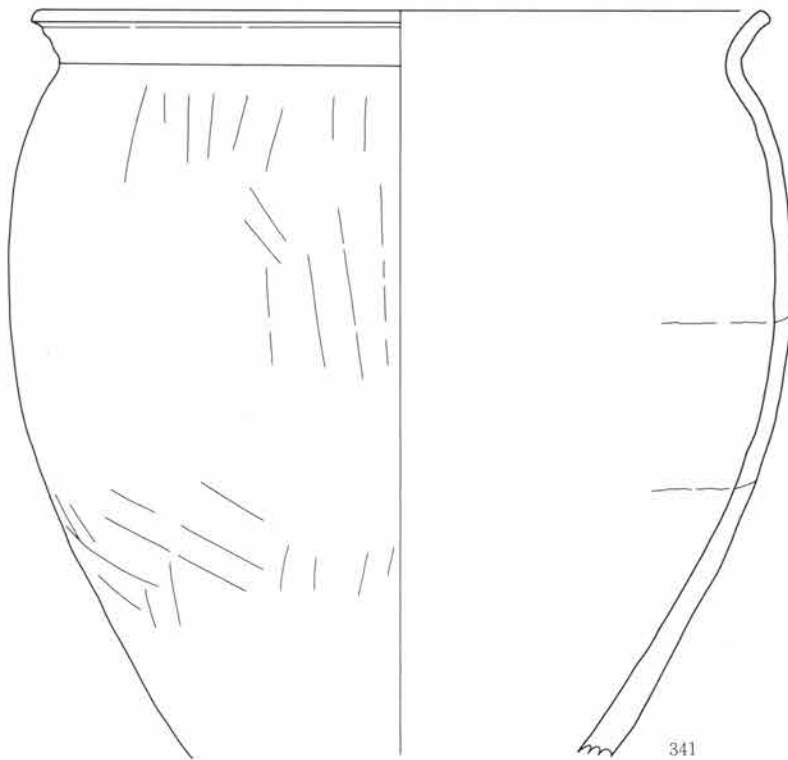
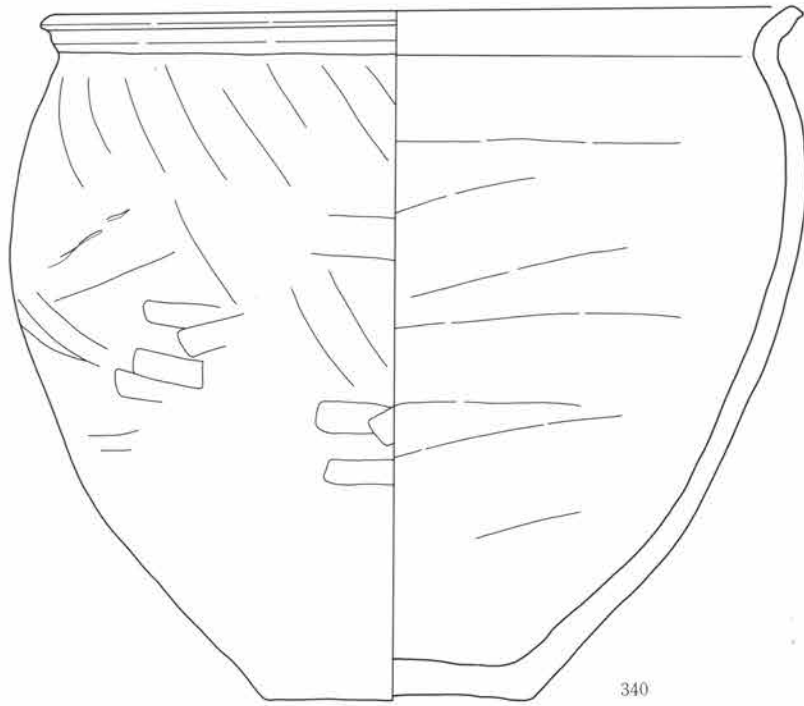
- 1 黒褐色土層：ロームブロック・焼土・炭化物を含む。
- 2 黒褐色土層：ロームブロックと灰色土を含む。
- 3 褐色土層：ロームブロックを含む。

第166図 6区11号住居跡掘形



第167図 6区11号住居跡出土遺物①

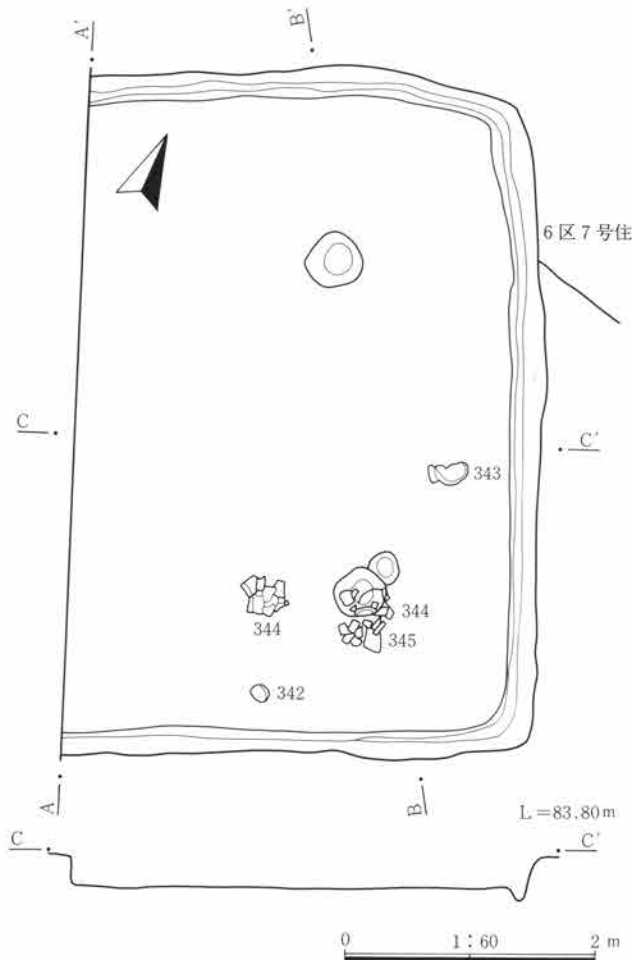
0 1:2 4cm



0 1:3 6 cm

第168図 6区11号住居跡出土遺物②

番号	器種 土器種	量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
338	皿 土師質土器	器高:17mm 口径:(87mm) 底径:51mm 口縁部1/2欠。	細砂含む。硬質。鈍い黄橙。	口縁部直線的に開く。底部外面左回転糸切り無調整。	北西隅床面。
339	皿 土師質土器	器高:20mm 口径:87mm 底径:55mm 口縁部1/3欠。	細砂含む。やや軟質。鈍い黄橙。	口縁部外湾する。底部外面左回転糸切り無調整。	北西隅床面。
340	土 釜	器高:280mm 口径:309mm 底径:108mm 2/3残。	細砂～径2mmの礫多く含む。硬質。橙～灰褐。	口縁部は外反する。口縁部は横なで。体部はなで。外面のみ一部に強いなでを行う。底部外面砂付着。	竈前床面・竈。
341	土 釜	器高:[300mm] 口径:(291mm) 1/3残。	細砂～径3mmの礫多く含む。やや硬質。外面は鈍赤褐。内面は鈍い橙。	口縁部は外反する。口縁部は横なで。体部はなで。外面のみ一部に強いなでを行う。	竈前床面・竈。

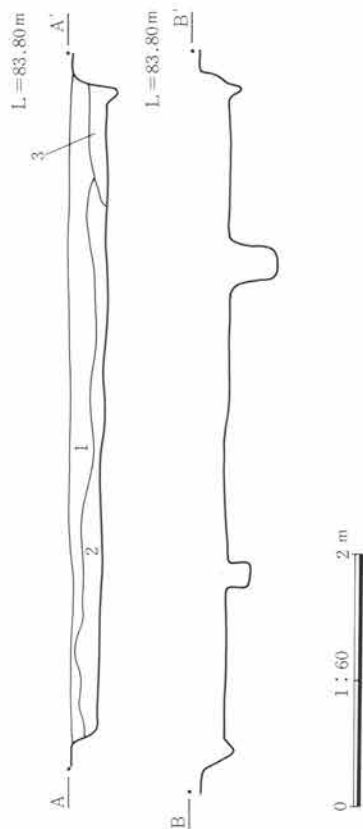


第169図 6区12号住居跡

### 6区12号住居跡

当住居跡は、6区7号住居跡と重複する。新旧関係は、6区7号住居跡の壁・床が当住居跡の北東部の覆土中に築かれていることから、当住居跡の方が古い。当住居跡の規模は、西側部分が調査区域外のために確定できないが、南北約5.4mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈する。確認面までの壁の立ち上がりは、約20～25cmである。床面は硬く、ほぼ平坦である。壁溝は、調査範囲からは全面的に検出できた。規模は、幅約5～15cmであり、床面からの深さは約5cmである。

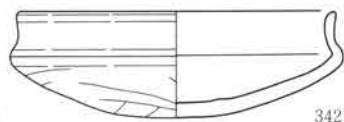
調査範囲から竈・貯蔵穴を検出することはできなかった。主柱穴は4基と考えられるが、検出できたのは2基である。規模は、径35～40



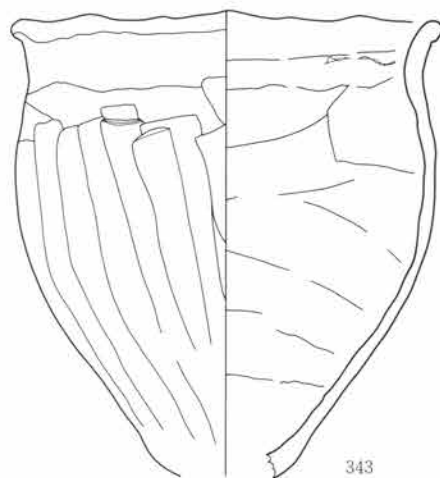
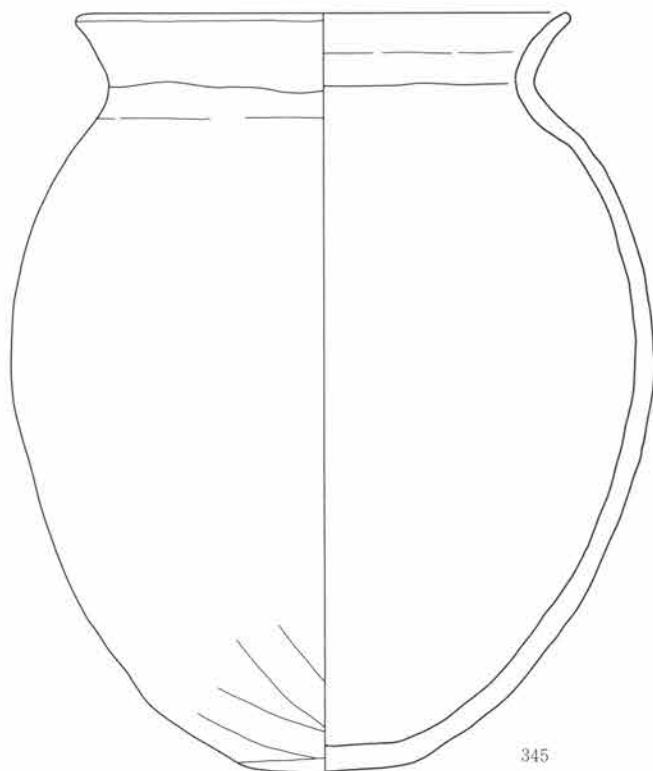
6区12号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土：やや多量の軽石及びローム粒子を含む。
- 2 暗褐色土：ローム小ブロックを含む。
- 3 暗褐色土：軽石・ローム粒子・ローム小ブロックを含む。

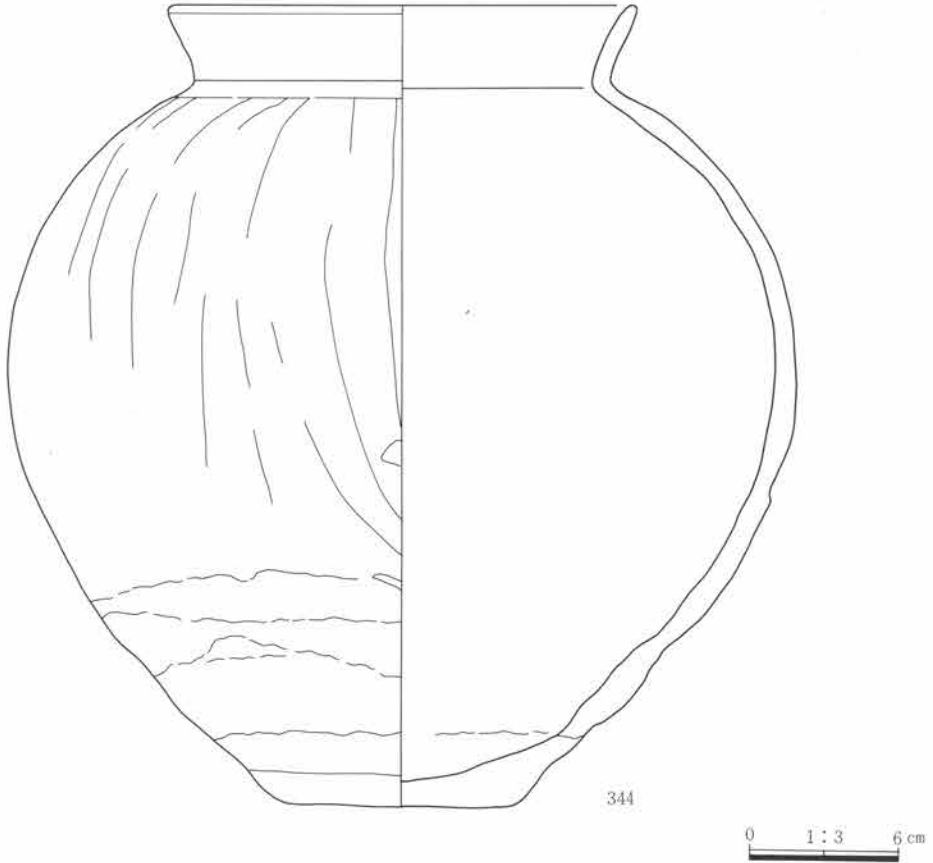
第170図 6区12号住居跡断面図  
・エレベーション図



cm・床面からの深さ約20~40cmであり、平面形は円形ないしは不整形な円形を呈する。遺物は、土師器の甕・杯が出土している。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は6世紀後半である。



第171図 6区12号住居跡出土遺物①



第172図 6区12号住居跡出土遺物②

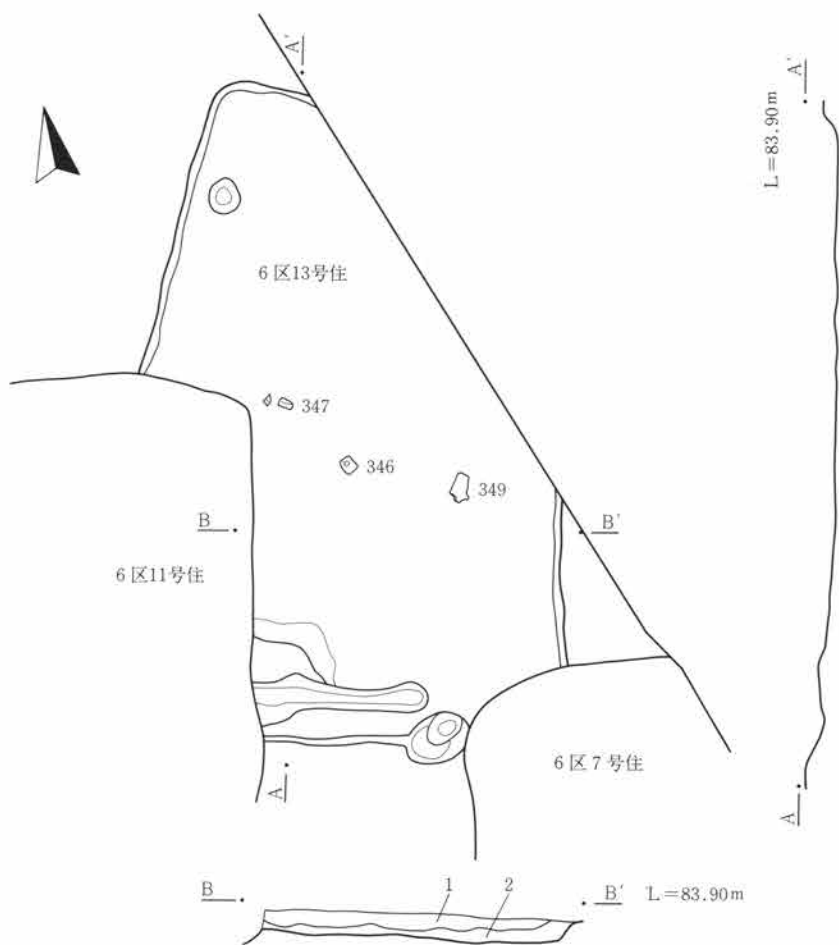
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
342	杯 土師器	器高:42mm 口径:(130mm) 底径:— 口縁部~底部2/3残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。赤褐色。	外面口縁部下端に顕著な稜。丸底。内面:口縁部~体部は横なで、底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	住居内南壁脇床直。内外面に多量の油煙付着。
343	甕 土師器	器高:[188mm] 口径:(174mm) 底径:— 口縁部~体部1/3残。	径2~3mmの砂粒を含む。軟質。酸化。橙。	口縁部はやや外湾。内面:口縁部は横なで、体部は篋なで。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り。	住居内南東部床直。内外面に油煙付着。
344	甕 土師器	器高:321mm 口径:(190mm) 底径:110mm 最大径:320mm 口縁部~体部上端1/3欠。	径5~6mmの小石及び砂粒を含む。軟質。酸化。浅黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで、輪積痕が残る。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り。	住居内南東部床直。内外面に油煙付着。
345	甕 土師器	器高:304mm 口径:200mm 底径:78mm 最大径:260mm ほぼ完形。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	住居内南東部床直。外面に油煙付着。

6区13号住居跡

当住居跡は、6区4号住居跡・6区7号住居跡・6区11号住居跡と重複する。新旧関係は、当住居跡の方が6区4号住居跡より新しく、6区7号住居跡・6区11号住居跡より古い。

規模は東西不明・南北約5.1mであり、平面形は長方形である。主軸方位は不明。残存壁高は4～17cmを測る。床は全面に薄く貼床を施し、中央部は硬く締まっている。柱穴は確認されない。周溝は北壁の西半のみ確認された。ピットはいずれも本住居跡よりも新しい。

遺物は住居跡中央付近からの出土が多い。図示した中では須恵器椀（346）・土師器甕（347）・羽釜（349）がこの部分からの出土である。



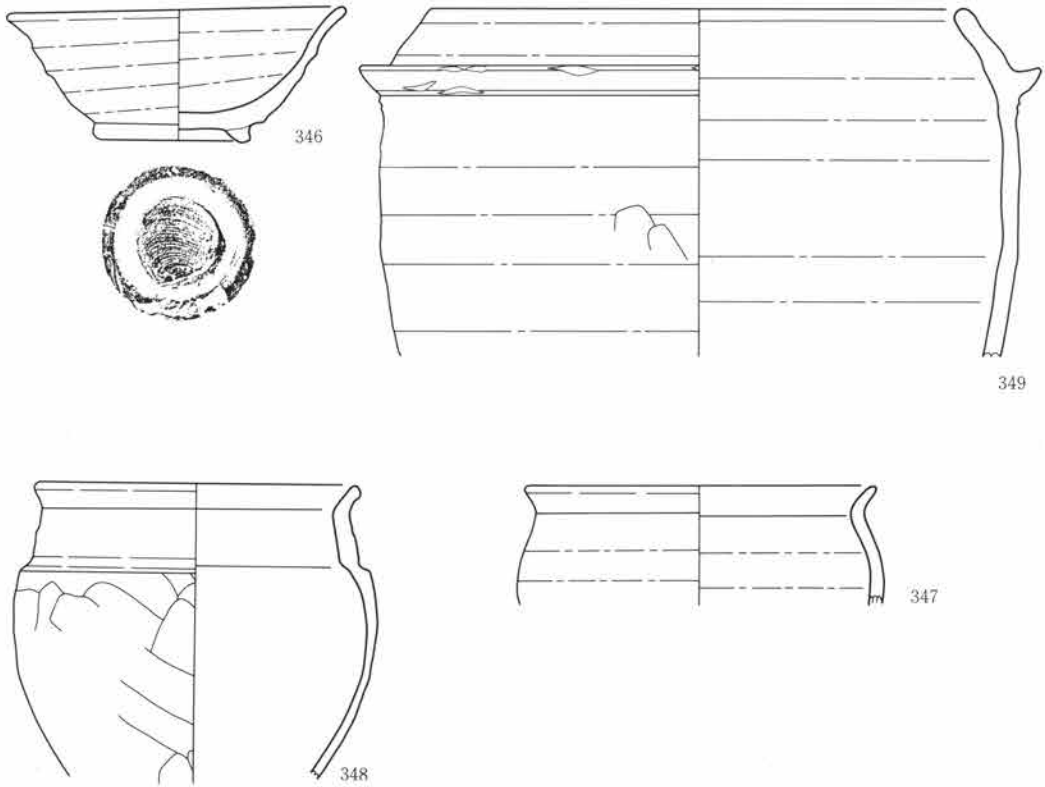
6区13号住居跡土層説明

- 1 黒褐色土層：軽石を多く含み、ロームブロックを極少量含む。
- 2 黒褐色土層：軽石を多く含み、ロームブロックを含む。



第173図 6区13号住居跡

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(6区13号住)



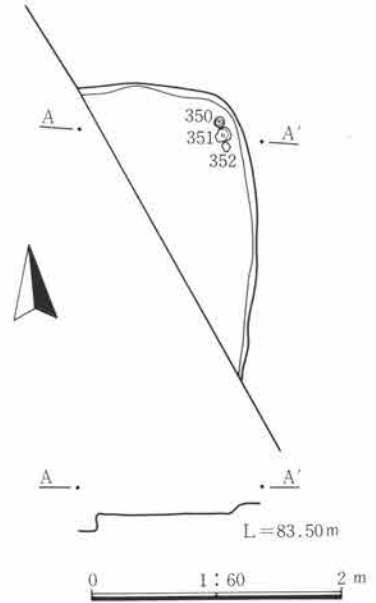
第174図 6区13号住居跡出土遺物

0 1:3 6 cm

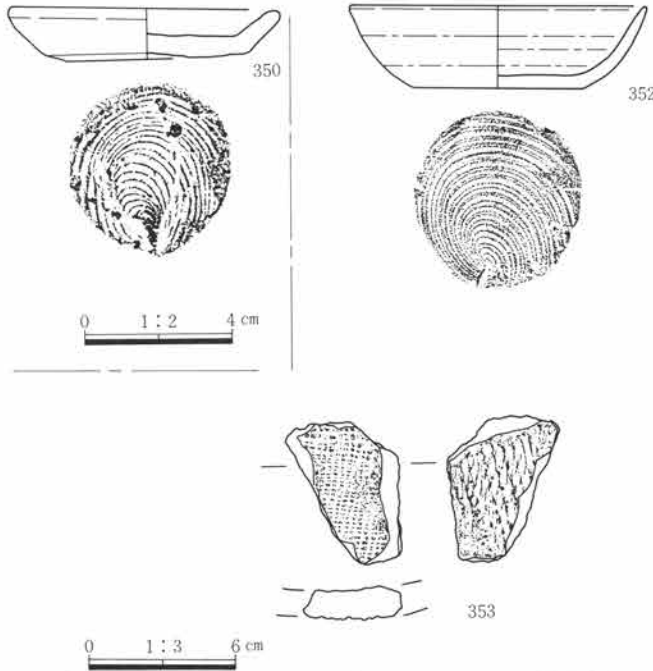
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
346	椀 須恵器	器高:52mm 口径:137mm 底径:57mm 口縁部1/3欠。	細砂～粗砂含む。やや硬質。灰白。	口縁部は外反する。内外面に轆轤目残る。底部外面は右回転糸切り無調整。高台は貼り付ける。	中央。
347	甕 土師器	器高:[48mm] 口径:(138mm) 1/6残。	細砂～粗砂含む。硬質。鈍い赤褐。	口縁部は外反する。口縁部～頸部横なで。	中央床面。
348	台付甕 土師器	器高:[118mm] 口径:(132mm) 1/4残。	細砂多く含む。硬質。橙。	口縁部は「コ」の字状を呈する。頸部の器壁は厚い。肩部と頸部の境は篋削りの後、強く横なでをし、段をつける。体部外面篋削り。	覆土。
349	羽釜	器高:[140mm] 口径:(218mm) 1/3残。	細砂～径2mmの礫含む。硬質。灰白。	口縁部は内傾する。鐙は貼り付け。口縁部は回転横なで。体部は回転なで。	中央床面。鐙の一部に布目有り。

6区14号住居跡

当住居跡は、5区13号住居跡と重複し、6区4号土坑に50cm・5区10号住居跡に1.5mと近接する。新旧関係は、当住居跡が5区13号住居跡の壁の一部を破壊していることから、当住居跡の方が新しい。北東隅のみの確認であるため、規模・平面形・主軸方位は不明である。残存壁高は5~9cmである。柱穴・周溝は確認されない。竈は確認部には認められず、東壁南隅に構築されていると想定される。北東隅からは須恵器杯(352)に蓋(351)が被さった状態で出土し、中には獣骨が入っていた。



第175図 6区14号住居跡



第176図 6区14号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
350	皿 土師質土器	器高:14mm 口径:73mm 底径:45mm 完形。	細砂~粗砂含む。軟質。 暗褐色。	底部外面は右回転糸切り無調整。	北東隅床面。
351	蓋 須恵器	つまみ径:38mm 口縁部欠。	細砂含み、やや粗い。硬質で焼き締まる。青灰。	つまみ貼り付け。天井部に糸切り跡残る。天井部周縁手持ち篋削り。	北東隅掘形。

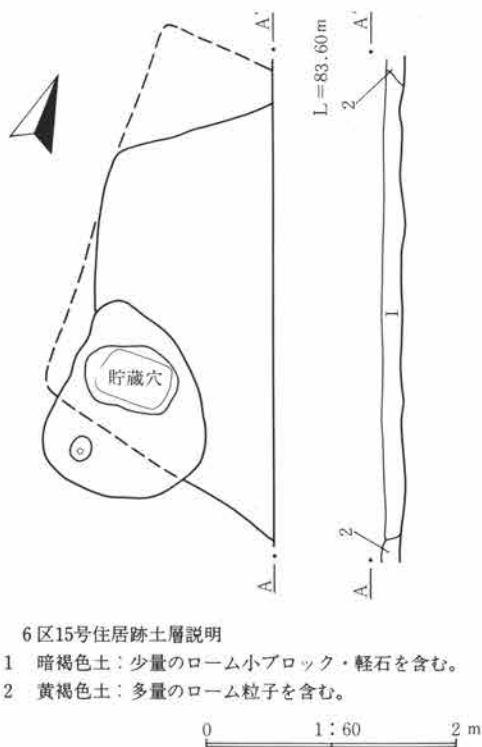


番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
352	杯 須恵器	器高:33mm 口径:(120mm) 底径:68mm 口縁部2/3欠。	細砂少量含み、やや粗い。やや軟質。灰白。	体部はゆるく内湾する。底部外面は右回転糸切り無調整。	北東隅掘形。
353	瓦	厚さ:12mm 小片。	細砂～粗砂含み、やや粗い。やや硬質。焼き締まる。灰。	側面は篋なで。布目・縄目叩き痕が残る。	覆土。

### 6区15号住居跡

当住居跡は、5区10号住居跡・6区14号住居跡・6区16号住居跡が近接するが、重複関係は無い。当住居跡は、掘形での確認であり、規模は不明であるが、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈すると推定される。確認面までの壁の立ち上がりも、5cm以下であり、残存状態は非常に悪い。床・壁溝も確認できなかった。

炉・竈・柱穴も検出できなかった。住居内の南西隅からは、貯蔵穴と推定されるピットが検出できた。規模は、長軸約75cm・短軸約50cm・掘形底面からの深さ約35cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。当住居跡からは遺物の出土も無く、住居跡の形態も不明瞭であり、時期は不明である。

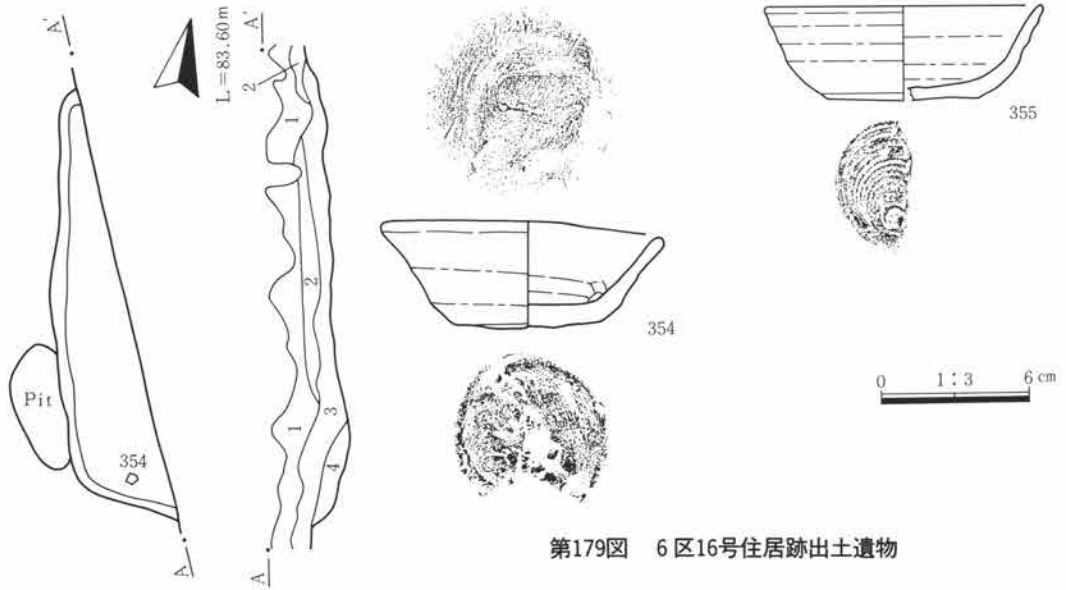


第177図 6区15号住居跡

### 6区16号住居跡

当住居跡は、ピットと重複する以外は、他遺構との重複はない。新旧関係は当住居跡が古い。当住居跡の規模は西壁で約3.2mを測るが、西壁のみの確認であるため、規模・平面形・主軸方位は不明である。残存壁高は7～35cmである。柱穴・周溝は確認されない。竈は東壁南隅に構築されていると想定される。

遺物は少なく、南西隅から須恵器杯(354)の他は(355)の須恵器杯が出土している程度である。



第179図 6区16号住居跡出土遺物

6区16号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土層：浅間A軽石を含む。
- 2 暗褐色土層：浅間A軽石・ロームブロックを含む。
- 3 黒褐色土層：ロームブロック(小)を少量含む。焼土・炭化物を含む。
- 4 黒褐色土層：3層に比してロームブロック・炭化物・焼土を多く含む。

0 1:60 2 m

第178図 6区16号住居跡

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
354	杯 須恵器	器高:36~42mm 口径: (115mm) 底径:60mm 口縁部3/4欠。	細砂含む。やや軟質。灰 白。	器形はいびつ。底部外面回転糸切りの 後、指などで。外面調整の後、内面強い指 などで。このためのため、底部は凹凸が激 しい。	覆土。
355	杯 須恵器	器高:38mm 口径:(113 mm) 底径:(60mm) 1/ 5残。	細砂~径2mmの礫含む。 黒色・赤色粘土粒含む。 やや硬質。鈍い橙。	口縁部外面は轆轤目明瞭に残る。底部 外面は右回転糸切り無調整。	覆土。

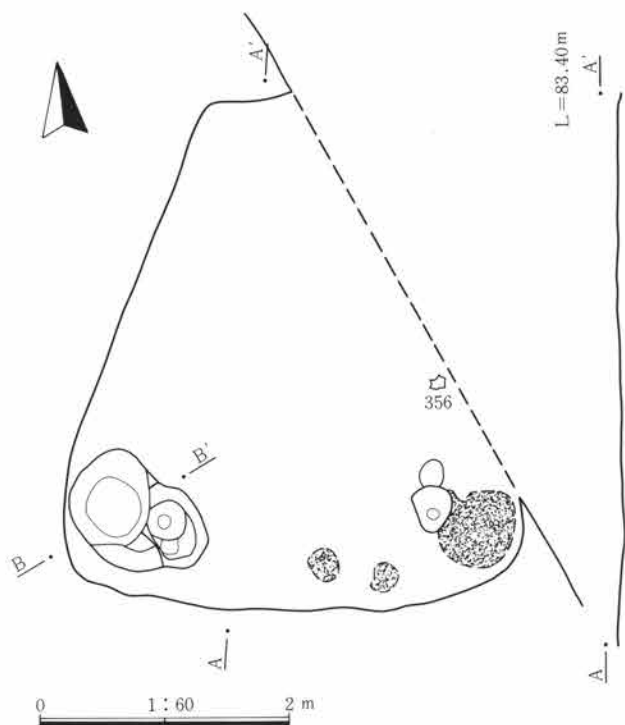
6区17号住居跡

当住居跡は、7区8号土坑と重複する。新旧関係は、当住居跡の方が古い。

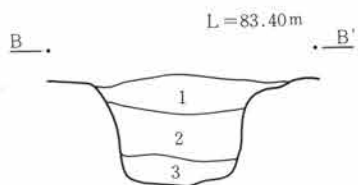
床面のみの確認のため、規模・主軸方位は不明。平面形は長方形と考えられる。柱穴・周溝は確認されない。床面は中央部を硬く突き固めている。南東隅の深さ8cmを測る浅い土坑内には、焼土が入っている。このことから、竈は東壁南側に構築されていたと推定される。貯蔵穴は南西隅に位置し、深さは37cmを測る。

図示可能な遺物は足高高台の椀(356)のみである。

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(6区16・17号住・7区1号住)

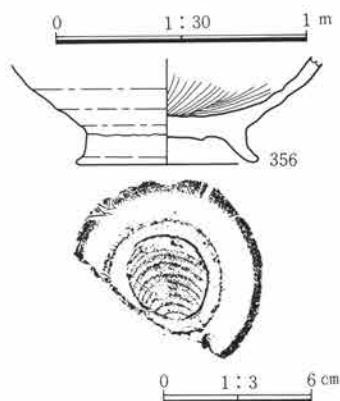


第180図 6区17号住居跡



6区17号住居跡貯蔵穴土層説明

- 1 褐色土層：ロームブロック・焼土・炭化物を含む。
- 2 褐色土層：ローム粒・炭化物粒を含む。
- 3 褐色土層：ロームブロック(小)・ローム粒を含む。



第181図 6区17号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
356	碗 土師質土器	器高:[38mm] 底径:75mm 1/3欠。	細砂含む。赤色粘土粒含む。軟質。鈍い橙。	体部は内湾する。高台は高く、外反する。内面は篋磨き。底部外面は右回転糸切り無調整の後、高台貼り付け。	掘形。

7区1号住居跡

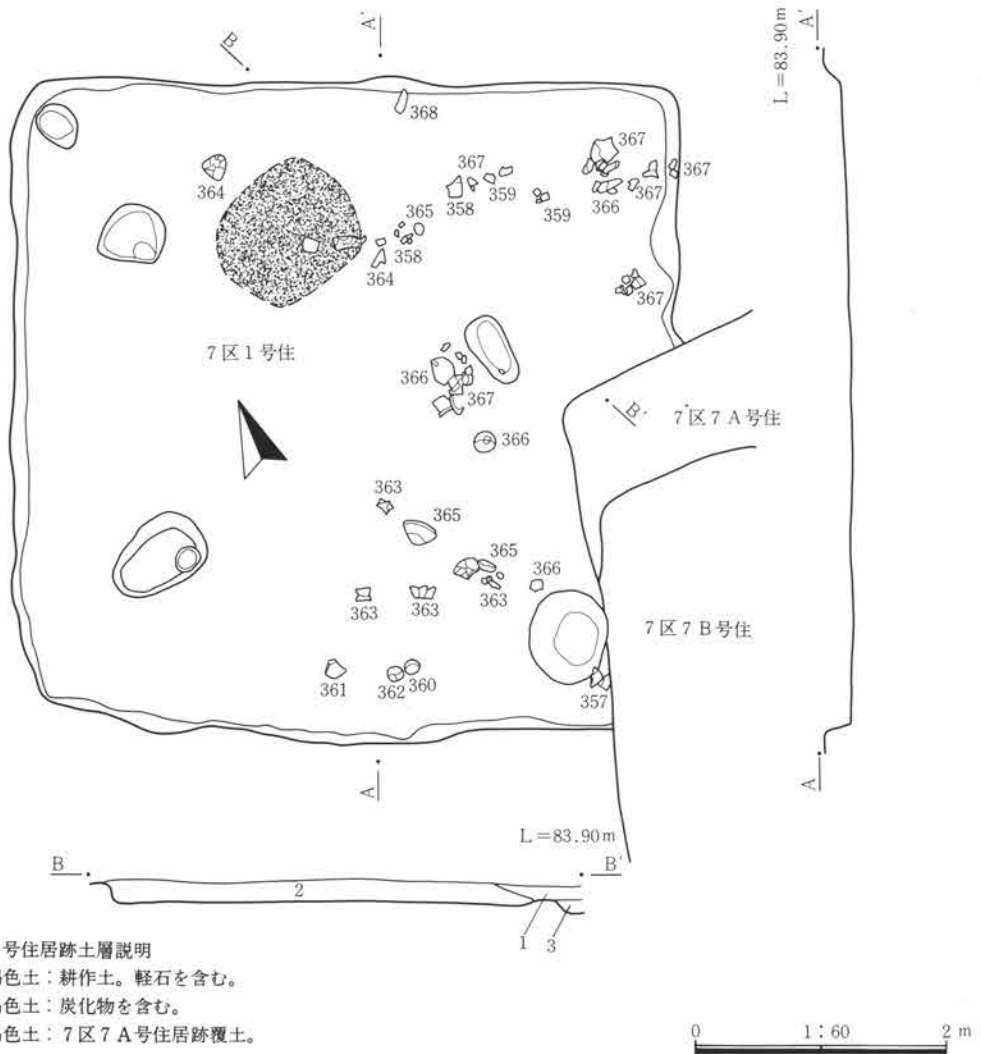
当住居跡は、7区7A号住居跡・7区7B号住居跡と重複する。7区7A号住居跡との新旧関係は、同居跡が当住居跡の南東部の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。7区7B号住居跡との新旧関係は、同居跡が当住居跡の南東部の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、東西約5.3m・南北約5.2mであり、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-116°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、15~20cmである。床面は比較的硬く、ほぼ平

坦である。壁溝は検出できなかった。

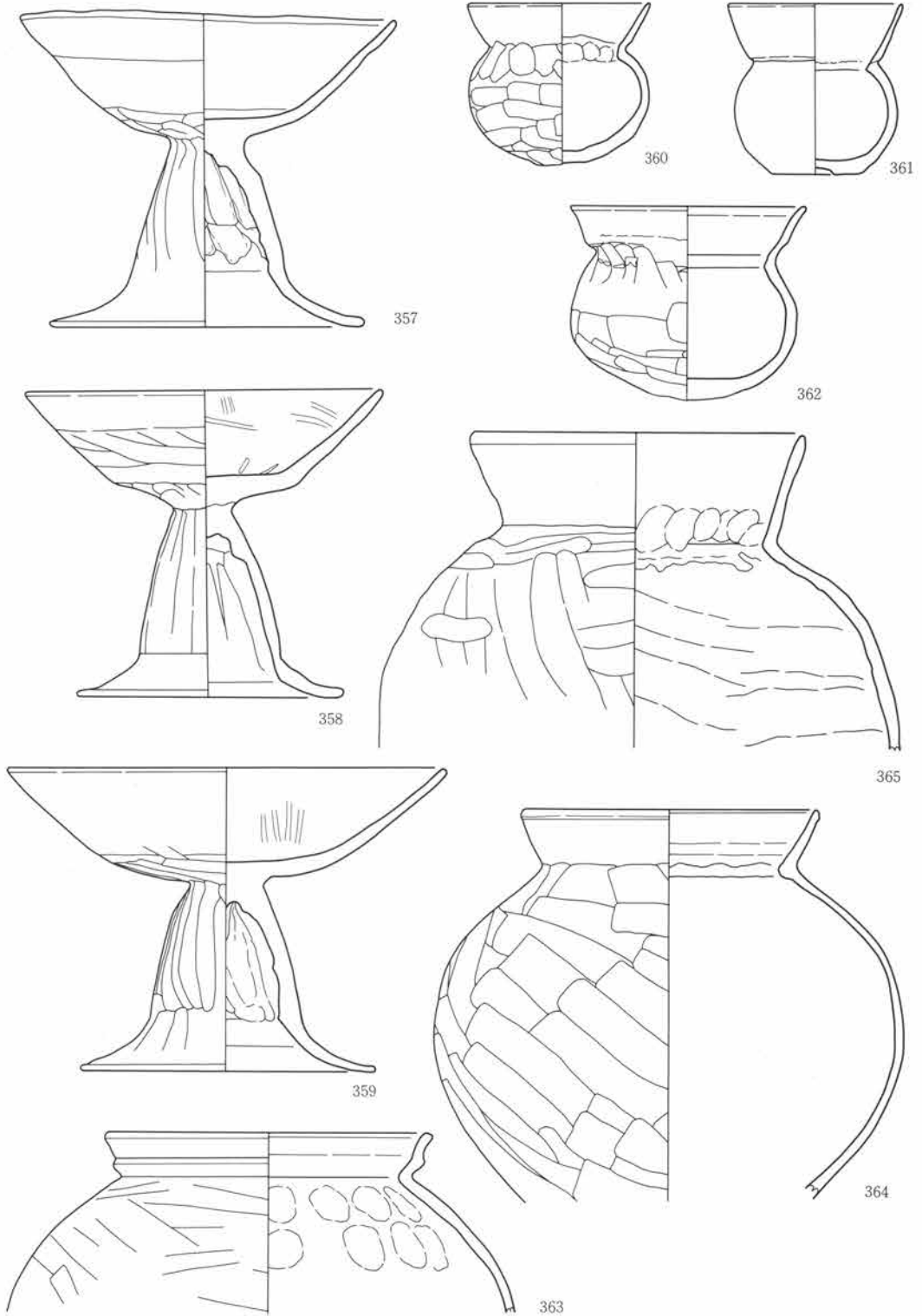
炉は、住居内の北西よりに築かれており、焼土・灰の堆積を確認することができた。また、炉の周囲からは、囲み石に使用したと考えられる河原石を検出することができた。支柱穴は4基と考えられるが、検出できたのは西側の2基である。規模は、長軸約30~40cm・短軸約20~35cm・床面からの深さ約25~50cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴と考えられるピットは住居内の南東隅から検出できた。規模は、長軸約70cm・短軸約60cm・床面からの深さ約60cmであり、平面形は楕円形を呈する。

遺物は、土師器の甕・壺・台付甕・埴・高杯などが出土している。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀末~5世紀初頭である。



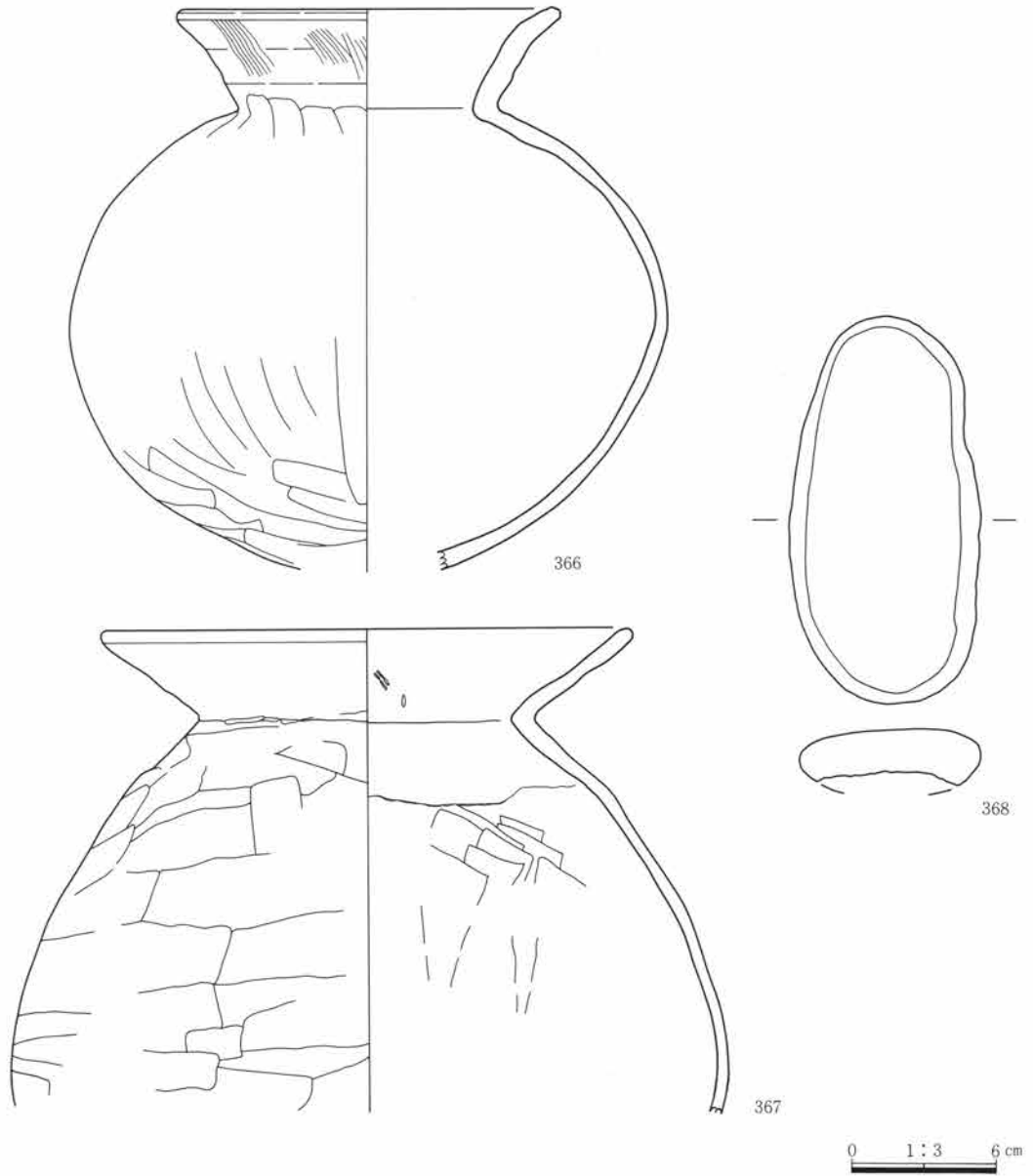
第182図 7区1号住居跡

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区1号住)



第183図 7区1号住居跡出土遺物①

0 1:3 6cm



第184図 7区1号住居跡出土遺物②

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
357	高杯 土師器	器高:146mm 口径:176mm 脚径:(148mm) 脚部下端欠。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	体部~口縁部は直線的に広がる。脚部は漏斗状に開く。内面:口縁部~体部は横なで、底部はなで、脚部上半は指なで、脚部下半は横なで。外面:口縁部~体部は横なで、底部~脚部上半は篋削り、脚部下半は横なで。	住居内南東部。内外面に油煙付着。

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区1号住)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
358	高杯 土師器	器高:142mm 口径:168mm 脚径:(126mm) 脚部下半2/3欠。	径1~2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。明赤褐。	体部~口縁部は直線的に広がる。脚部は漏斗状に開く。内面:口縁部~体部は横なで後一部筥磨き、底部はなで、脚部上半は筥削り、脚部下半は横なで。外面:口縁部は横なで、体部は寛なで、底部~脚部上半は筥削り、脚部下半は横なで。	住居内中央部炉付近。内外面に油煙付着。
359	高杯 土師器	器高:140mm 口径:(204mm) 底径:(136mm) 口縁部~脚部2/3残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	体部~口縁部は直線的に広がる。脚部は漏斗状に開く。内面:口縁部は横なで、体部はなで後筥磨き、底部はなで、脚部上半は指なで、脚部下半はなで。外面:口縁部~体部は横なで、底部~脚部は筥削り、脚部下半は筥なで。	住居内北東部。内外面に油煙付着。
360	埴 土師器	器高:75mm 口径:85mm 底径:24mm 完形。	径1~2mmの砂粒を含む。硬質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。丸底に近い平底。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は筥削り。	住居内南壁中央脇。内外面に油煙付着。
361	埴 土師器	器高:79mm 口径:81mm 底径:40mm ほぼ完形。	径1~2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部は横なで、体部~底部は指なで。外面:口縁部は横なで、体部~底部なで。	住居内南壁中央脇。内外面に油煙付着。二次炎を受ける。
362	埴 土師器	器高:89mm 口径:110mm 底径:— 口縁部1/3欠。	径2~3mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は筥削り。	住居内南壁中央脇。内外面に油煙付着。二次炎を受ける。
363	台付甕 土師器	器高:[83mm] 口径:153mm 底径:— 口縁部~体部上半残。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「S」字状。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで、指頭痕が残る。外面:口縁部は横なで、体部上半は筥削り。	住居内中央部。内外面に油煙付着。
364	台付甕 土師器	器高:[181mm] 口径:140mm 底径:— 最大径:(220mm) 口縁部~体部1/2残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。褐。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部はなで。外面:口縁部は横なで、体部は筥削り。	住居内北西部。炉付近。内外面に油煙付着。二次炎を受けている。
365	甕 土師器	器高:[147mm] 口径:156mm 底径:— 口縁部~体部上半残。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。褐。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部は横なで、口縁部下端に指頭痕、体部上半は筥なで。外面:口縁部は横なで、体部上半は筥削り。	住居内中央部。内外面に油煙付着。二次炎を受けている。
366	壺 土師器	器高:[230mm] 口径:(160mm) 底径:— 最大径:248mm 口縁部~体部3/4残。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部はなで。外面:口縁部は横なで、一部刷毛目、体部は筥削り、一部刷毛目。	住居内南東部。内外面に油煙付着。二次炎を受けている。
367	甕 土師器	器高:[187mm] 口径:(220mm) 底径:— 口縁部~体部上半1/3残。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部は横なで、体部上半は筥なで。外面:口縁部は横なで、体部上半は筥削り。	住居内北東部。
368	薦石	長:159mm 幅:79mm 厚:27mm 重:480g	粗粒安山岩。	1面擦られている。	住居内北壁中央脇。

7区2号住居跡

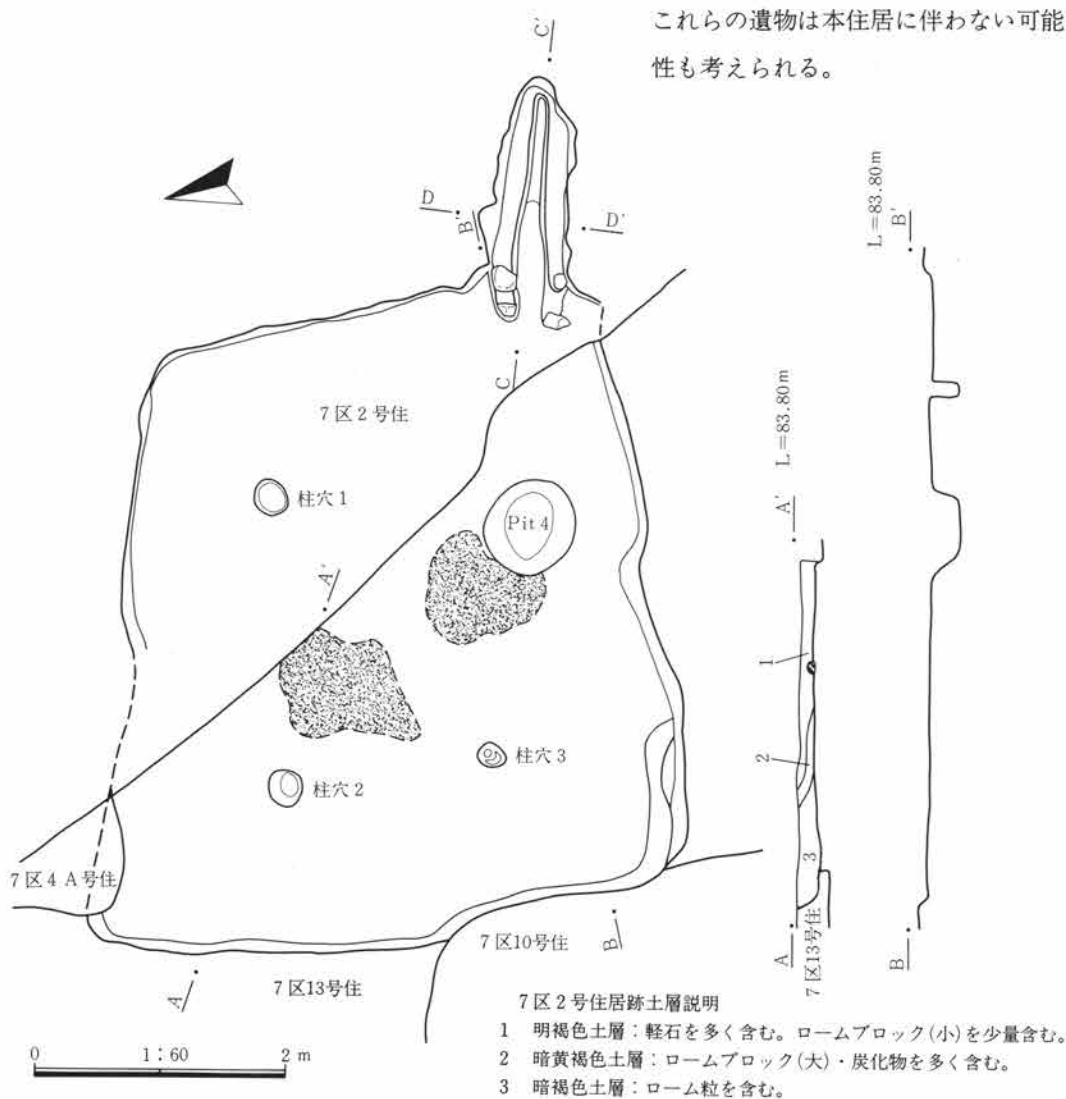
当住居跡は、7区4A号住居跡・7区10号住居跡・7区13号住居跡と重複し、7区9号住居跡に70cmと近接する。新旧関係は7区13号住居跡より新しく、7区4A号住居跡・7区10号住居跡より古い。

規模は東西約5.1m・南北約4.2mであり、平面形は東西に長い長方形を呈する。主軸方位はN-90°-Eである。残存壁高は2~14cmを測る。主柱穴は3箇所確認され、深さは1が48cm・2が39cm・3が12cmを測る。径70~77cm・深さ23cmのピット4は位置的にややずれるが、柱の抜き取り穴の可能性はある。柱穴に囲まれた中には焼土と灰の分布が認められた。周溝は確認されない。

竈は東壁南隅に構築され、燃烧部は壁内に設けている。煙道は壁外に170cm張り出している。両側には石を芯にした袖が40cm程遺存している。

実測可能な遺物は須恵器碗と羽釜（369・370）のみであるが、規模・平面形・竈の形態等から

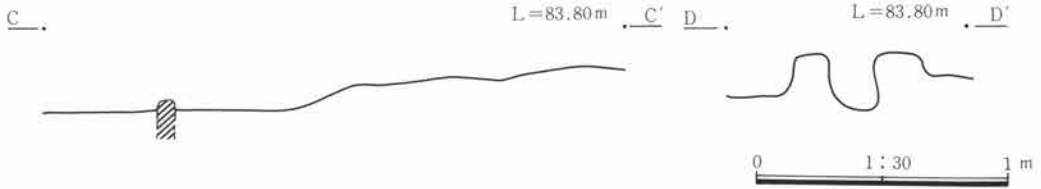
これらの遺物は本住居に伴わない可能性も考えられる。



第185図 7区2号住居跡



第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区2・3号住)



第186図 7区2号住居跡電エレベーション図



第187図 7区2号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
369	碗 須恵器	器高:48mm 口径:(144mm) 底径:75mm 口縁部~体部2/3欠。	細砂含む。やや硬質。灰黄褐。	口縁部はゆるく外反する。底部外面は右回転糸切り無調整の後、高台を貼り付ける。	西壁中央。
370	羽釜	器高:[70mm] 口径:(198mm) 小片。	細砂~径2mmの礫含む。やや硬質。黄灰。	口縁部は短く、内傾する。鐙は貼り付ける。	西壁中央。

7区3号住居跡

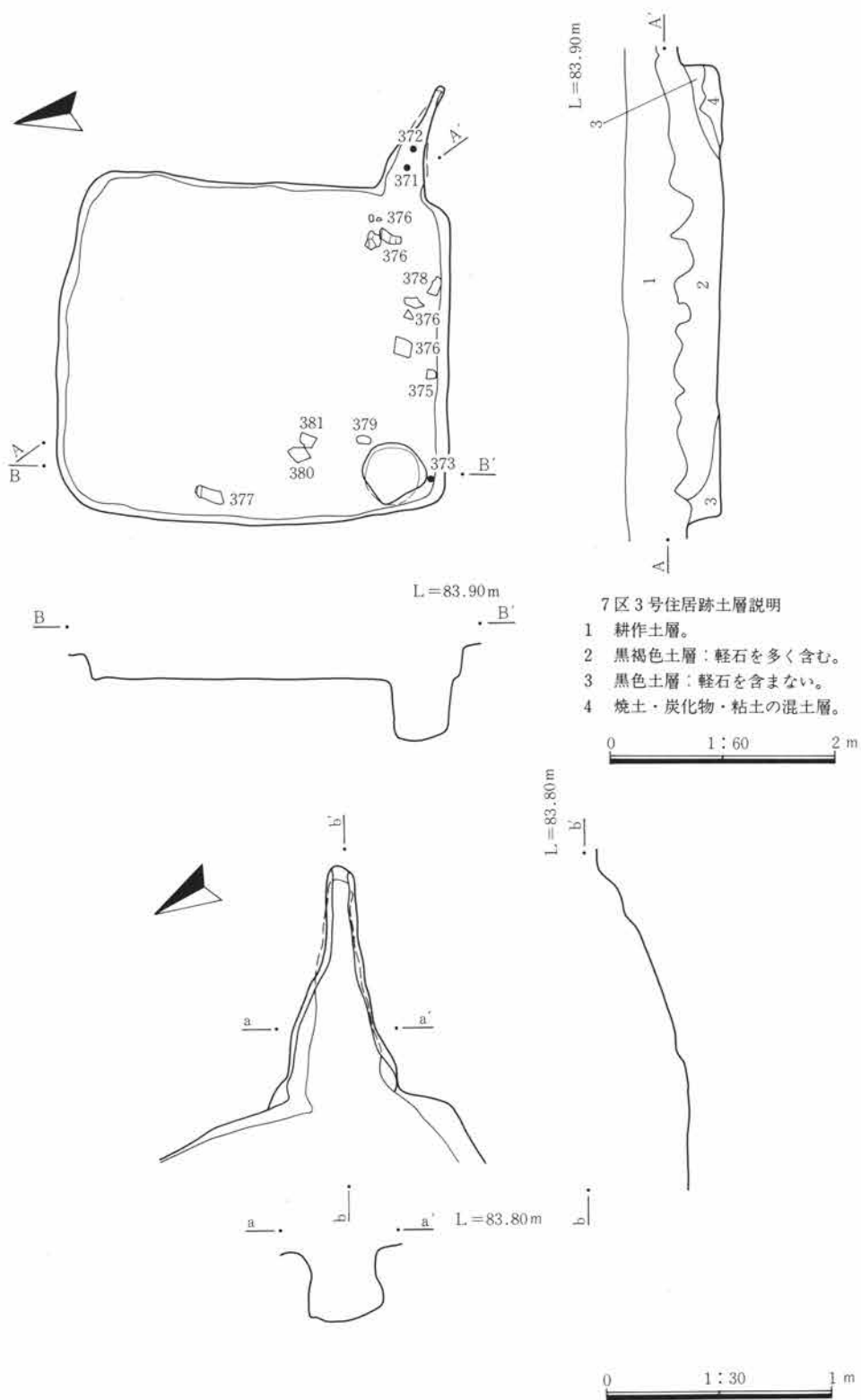
当住居跡は、7区6号住居跡と重複する。新旧関係は、当住居跡が古い。

規模は東西約3.0m・南北約3.5mであり、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-105°-Eである。残存壁高は22~38cmを測り、残存状態は良い。柱穴・周溝は確認されない。

竈は東壁南隅に構築され、燃烧部は壁外に設ける。煙道は壁外に102cm張り出す。竈の壁は良く焼けている。

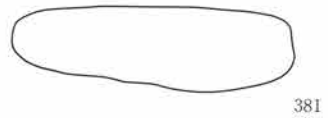
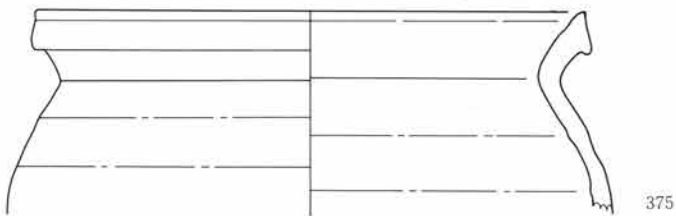
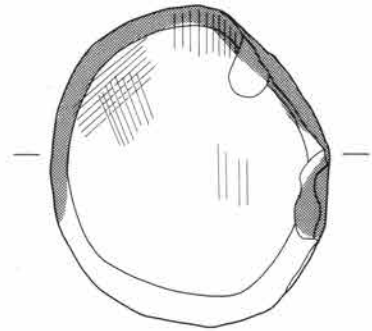
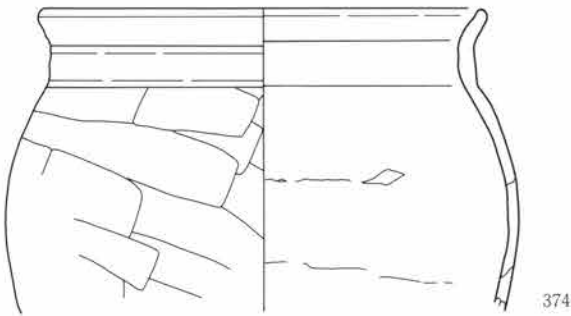
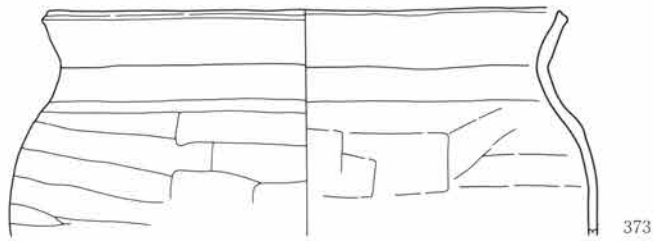
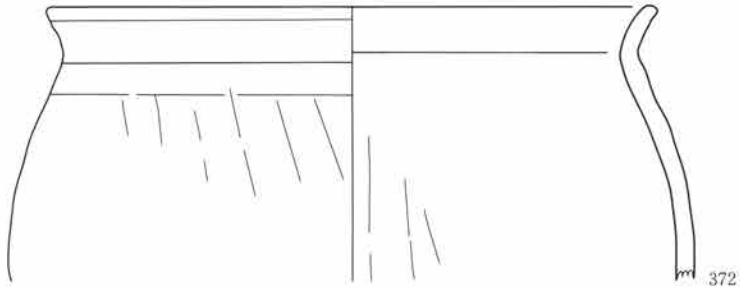
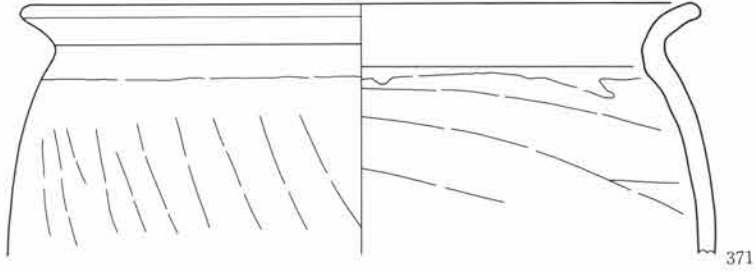
貯蔵穴は南西隅にあり、径56cmの円形を呈し、深さは51cmを測る。

竈内からは土釜(371・372)、南壁沿いからは須恵器甕(375)や形象埴輪(376)が出土している。(376)の形象埴輪は竈前出土破片と接合関係もあり、竈の構築材に使用されていた可能性も考えられる。



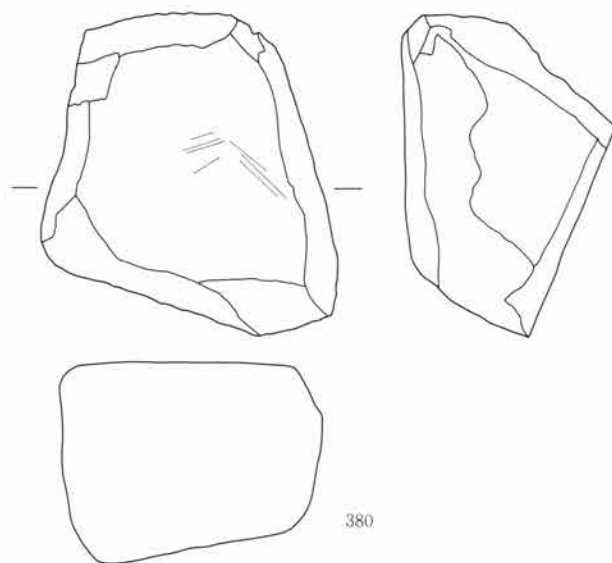
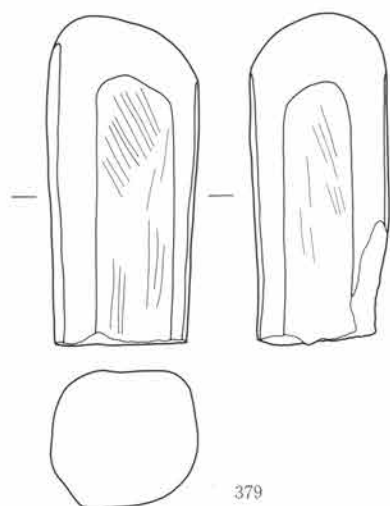
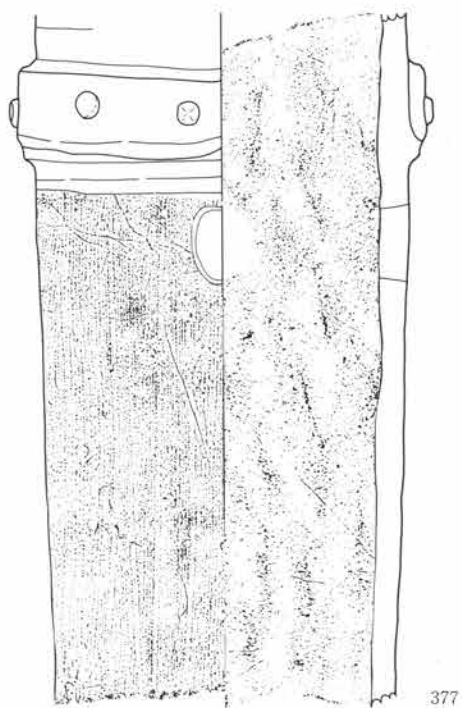
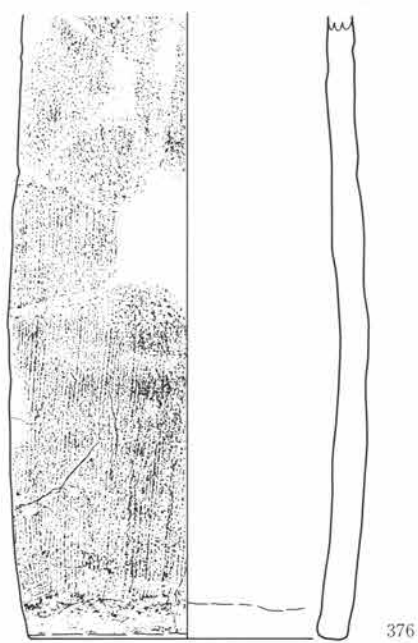
第188図 7区3号住居跡

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区3号住)



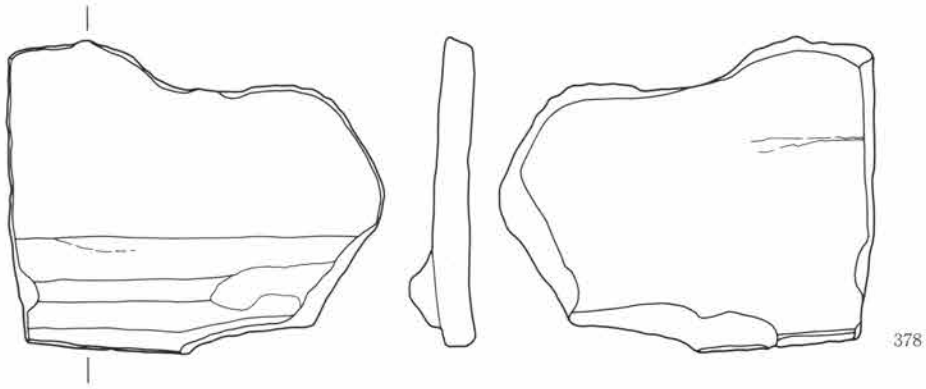
第189図 7区3号住居跡出土遺物①

0 1:3 6cm



第190図 7区3号住居跡出土遺物②

0 1:3 6cm



第191図 7区3号住居跡出土遺物③

0 1:3 6 cm

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
371	土 釜	器高:[100mm] 口径: (270mm) 1/7残。	細砂～径1mmの粗砂含む。普。明褐。	口縁部は強く外反する。口縁部は横なで。体部はなで。	竈。
372	土 釜	器高:[110mm] 口径: (248mm) 小片。	細砂～径1mmの粗砂含む。普。赤。	口縁部は外反する。口縁部は横なで。体部はなで。	竈。
373	甕 土師器	器高:[90mm] 口径: (213mm) 1/2残。	細砂含む。普。黒灰～鈍い橙。	口縁部は「コ」の字状を呈する。口縁部は横なで。体部内面は刷毛状工具によるなで。外面は篋削り。	南西隅ビット。
374	甕 土師器	器高:[122mm] 口径: (182mm) 1/3残。	細砂～径2mmの礫含む。やや硬質。鈍い橙。	口縁部は「コ」の字状を呈する。口縁部は横なで。体部内面はなで。外面は篋削り。頸部の器壁は厚い。	覆土。
375	甕 須恵器	器高:[82mm] 口径: (223mm) 1/6残。	細砂含む。やや軟質。鈍い黄橙～灰。	口縁部は外反し、端部は面取りする。頸部と体部上位内面に紐造り痕残る。	南壁中央。
376	埴 形 象		粗砂非常に多く含む。やや軟質。鈍い褐。	内面はなで。外面は縦位刷毛目。	竈前床面。
377	埴 形 象		粗砂～径2mmの礫非常に多く含む。普。橙。	外面に幅広い突帯を張り付け、その中央に円形浮文を張り付ける。円形の透かしを入れる。	西壁中央床面。
378	埴 形 象	小片。	粗砂非常に多く含む。普。鈍い赤褐。	内面はなで。外面は縦位刷毛目。突帯を張り付ける。	
379	砥 石	長:[132mm] 幅:62mm 厚:55mm 重:800g	粗粒安山岩。小口と右側面欠。	川原石を使用する。4面を使用する。各面には浅い条痕がある。	南西隅床面。
380	用途不明 石製品	長:[130mm] 幅:[80～118mm] 厚:65～81mm 重:1620g	粗粒安山岩。小口と右側面の一部欠。	川原石を使用する。表と裏の2面を少し使用する。特に表面は中央部のみ擦れている。	南西隅。

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
381	用途不明 石製品	長:129mm 幅:113mm 厚:33mm 重:720g	粗粒安山岩。右側面一部欠。	表面のみ使用する。周縁に煤付着する。	南西隅床面。

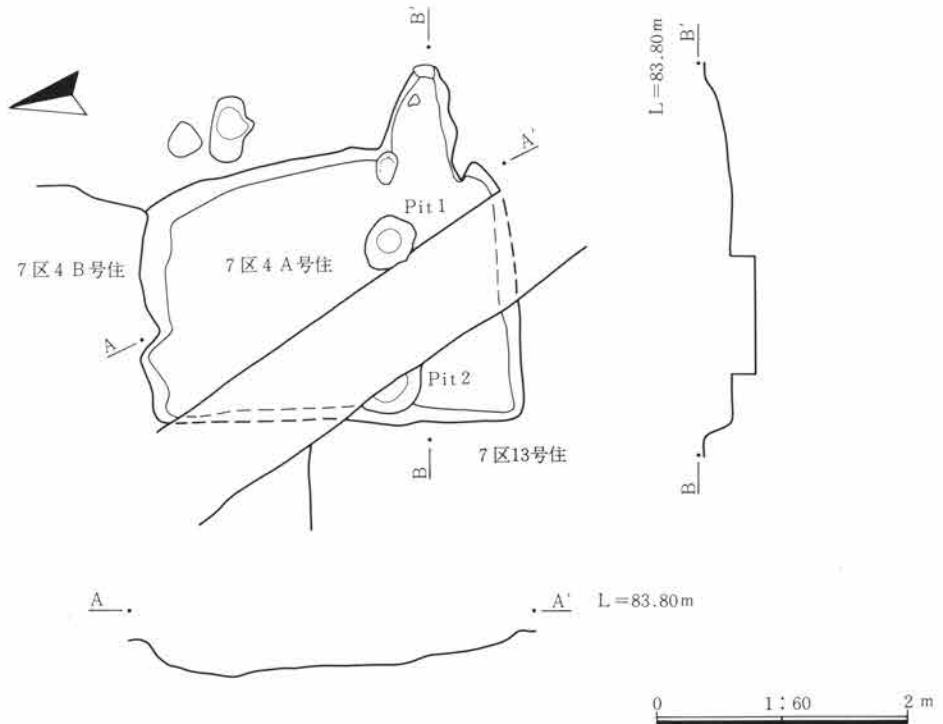
### 7区4A号住居跡

当住居跡は、7区4B号住居跡・7区2号住居跡・7区13号住居跡と重複する。新旧関係は、いずれも当住居跡が新しい。

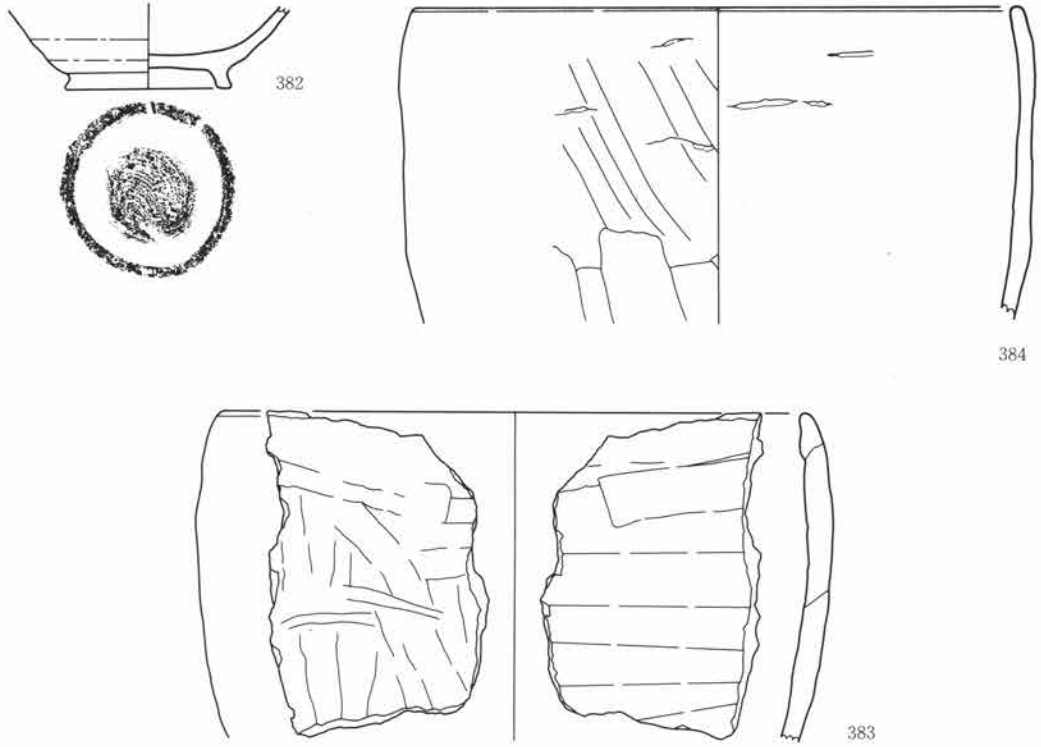
規模は東西約2.1m・南北約3.0mであり、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-90°-Eである。残存壁高は17~25cmを測る。柱穴・周溝は確認されない。床面には2基のピットが確認されているが、いずれも掘形と考えられる。深さはピット1が35cm・ピット2が20cmである。

竈は東壁南隅に構築されており、燃烧部は壁外に設けている。煙道は壁外に70cm張り出している。袖は僅かに遺存しており、北側には袖石が残っている。

遺物は竈内から土釜(383)が、住居跡覆土から土釜と須恵器椀(384・382)が出土している。



第192図 7区4A号住居跡



第193図 7区4A号住居跡出土遺物

0 1:3 6 cm

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
382	碗 須恵器	器高:[32mm] 底径:67mm 口径部欠。	細砂～粗砂含む。やや軟質。鈍い黄橙。	底部外面は右回転糸切りの後、高台を貼り付ける。	西壁中央。
383	土釜	器高:[122mm] 口径:(240mm) 小片。	細砂～粗砂多く含む。やや軟質。鈍い赤褐。	口縁端部は僅かに内傾する。外面は篋状工具によるなで。内面は回転なで?	竈。
384	土釜	器高:[125mm] 口径:(247mm) 小片。	細砂～径4mmの礫含む。普。鈍い橙。	口縁端部は僅かに内傾する。口縁部は横なで。体部内面はなで。体部外面はなでの後下部のみ篋削り。	竈。

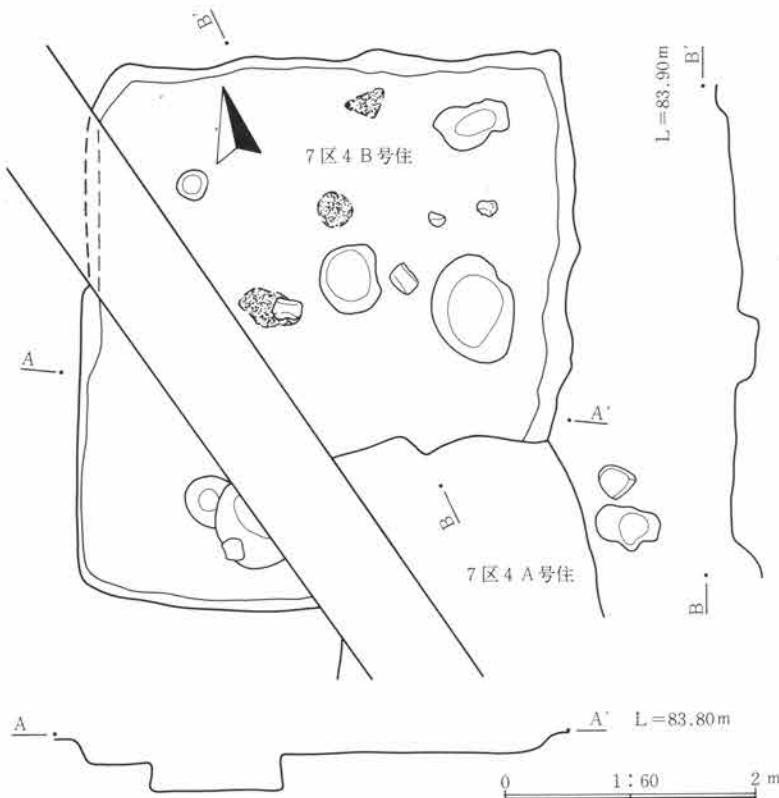
### 7区4B号住居跡

当住居跡は、7区4A号住居跡・7区13号住居跡と重複する。7区4A号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の南東部の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。7区13号住居跡との新旧関係は、同住居跡の北部の壁を当住居跡が破壊していることから、当住居跡の方が新

しい。

当住居跡の規模は、東西約3.9m・南北約4.3mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-16°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約5~20cmである。床面は、やや軟弱な部分もあるが、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

住居跡内の中央部やや北西より・中央部北より・北壁中央脇から、焼土と石を検出することが



できた。しかし、焼土は床よりやや上にあり炉とは考えにくい。柱穴と考えられるピットは、住居跡内西側から検出できた2基である。規模は径約20~40cmであるが、床面からの深さは約10~20cmと浅い。柱穴と断定することはできない。貯蔵穴は検出することができなかった。当住居跡からは、遺物の出土も無く、時期は不明である。

第194図 7区4B号住居跡

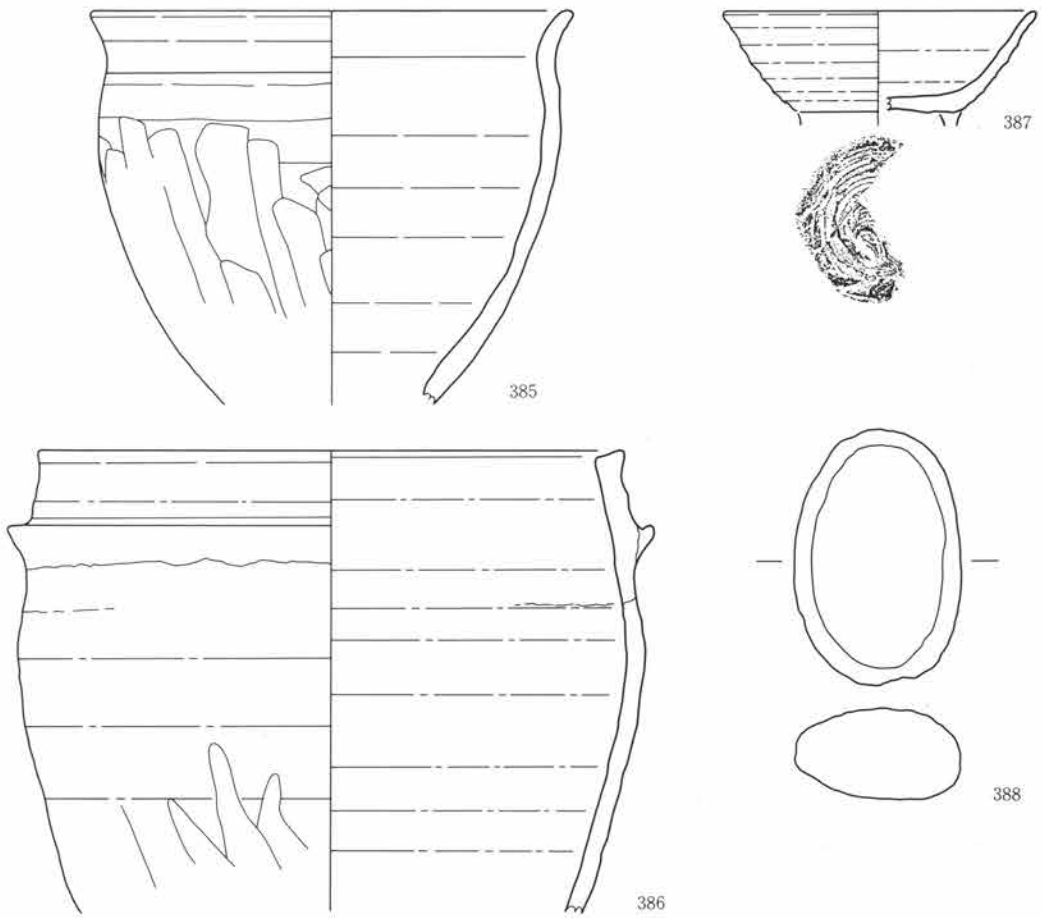
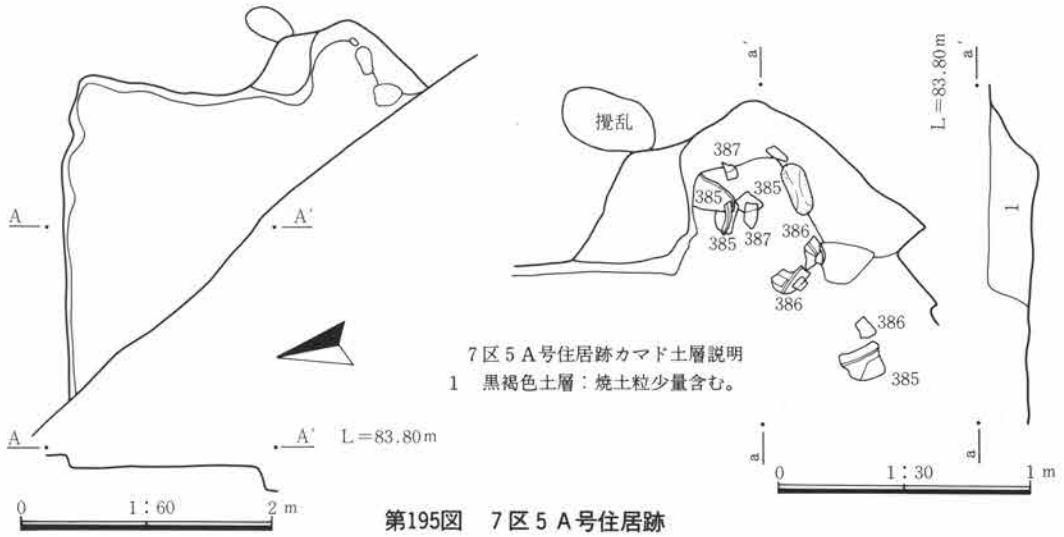
#### 7区5A号住居跡

当住居跡は、7区5B号住居跡と重複し、8区2号住居跡に70cm、7区1号溝に20cmと近接する。新旧関係は当住居跡が新しい。

規模・平面形は不明である。主軸方位はN-107°-Eである。残存壁高は5~9cmを測る。柱穴・周溝は確認されない。

竈は東壁南寄りに構築されて、燃焼部は壁外に設けている。煙道は壁外に56cm張り出している。遺物は竈内の出土が多く、須恵器椀(387)・土師器甗?(385)・羽釜(386)などがある。





番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
385	甑? 土師器	器高:[157mm] 口径: (195mm) 2/3残。	細砂～径1mmの粗砂含 む。硬質。暗赤褐。	口縁部は外反する。肩部まで横なで。体 部内面は回転なで。体部外面は篋削り。 底部付近の器壁は薄くなる。	竈。
386	羽釜	器高:[185mm] 口径: (238mm) 1/3残。	細砂含む。普。鈍い褐。	口縁端部は僅かにくぼむ。鈔は貼り付 ける。口縁部は回転横なで。体部は回転 なで後、外面のみ篋削り。	竈。
387	椀 須恵器	器高:[41mm] 口径: (125mm) 底径:[64mm] 口縁部～底部2/3・高台 部欠。	細砂～粗砂・黒色粒含 む。やや硬質。灰。	口縁部は僅かに外反する。底部外面は 右回転糸切りの後、高台を貼り付ける。	竈。
388	用途不明 石製品	長:103mm 幅:67mm 厚:36mm 重:350g	粗粒安山岩。	川原石を使用する。表面のみ僅かに使 用する?	覆土。

### 7区5B号住居跡

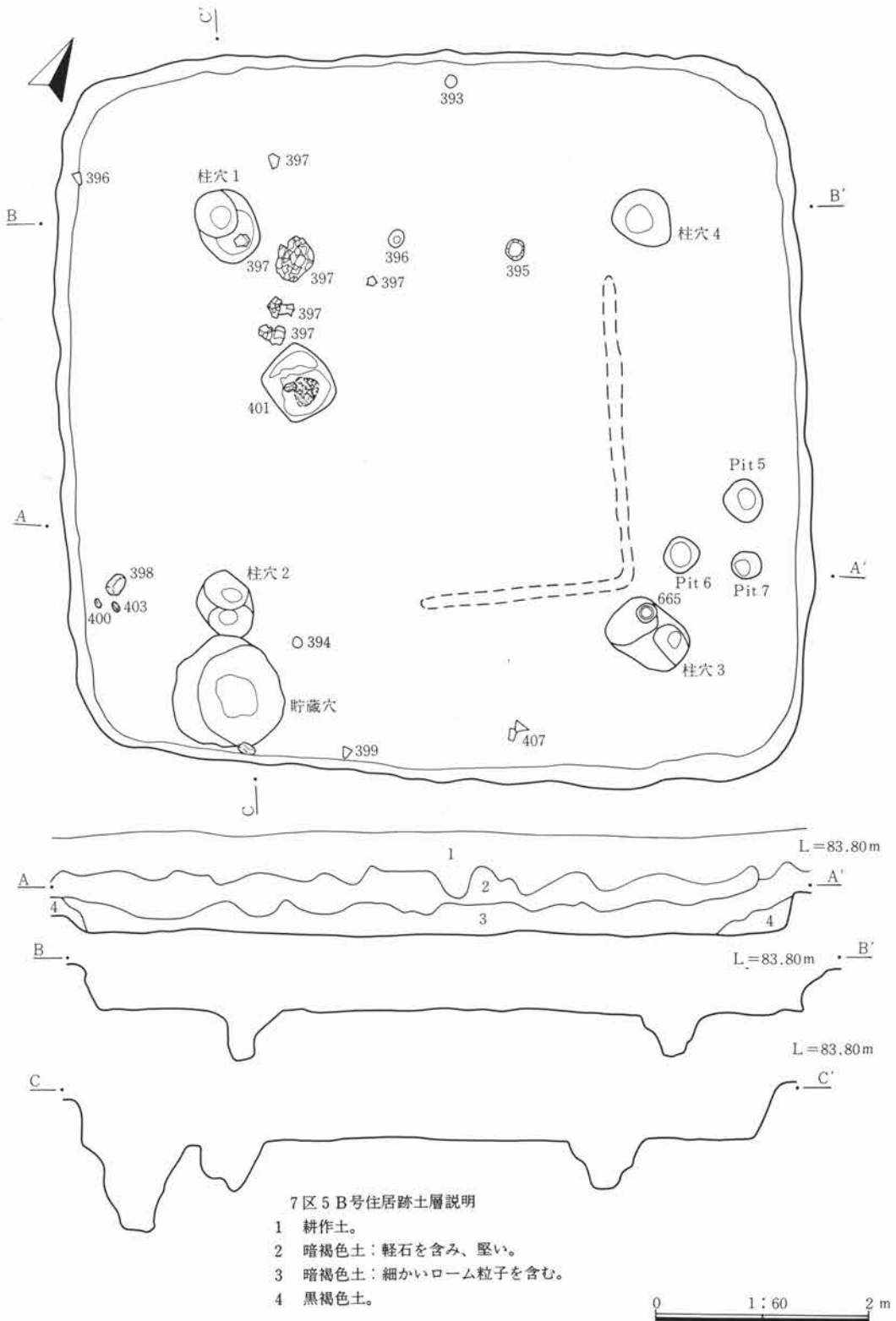
当住居跡は、5区5A号住居跡と重複する。新旧関係は、5区5A号住居跡の床・壁を当住居跡の覆土中から検出することはできなかったが、出土遺物から当住居跡の方が古い。当住居跡の規模は、東西約7.0m・南北約6.8mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-114'-Wである。確認面までの壁の立ち上がりは、約40～50cmであり、残存状態は比較的良好である。床面は硬く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

炉は、西側壁の中間やや中央よりから検出できた。炉内からは、焼土および灰の堆積を確認することができた。支柱穴は4基である。規模は、長軸約60～80cm・短軸約50～60cm・床面からの深さ約45～50cmであり、平面形は不整形な楕円形ないしは不定形を呈する。支柱穴は、柱穴4を除き、底面は二重のピットになっている。また、柱穴3の中央よりからは、土師器の台付甕が出土している。柱穴4を基準にした住居の立て替えが考えられる。貯蔵穴は、南西隅近くに築かれている。規模は、径約100cm・床面からの深さ約80cmであり、平面形は不整形な円形を呈する。しかし、掘形での貯蔵穴の規模は一辺約70cmであり、平面形は方形を呈する。

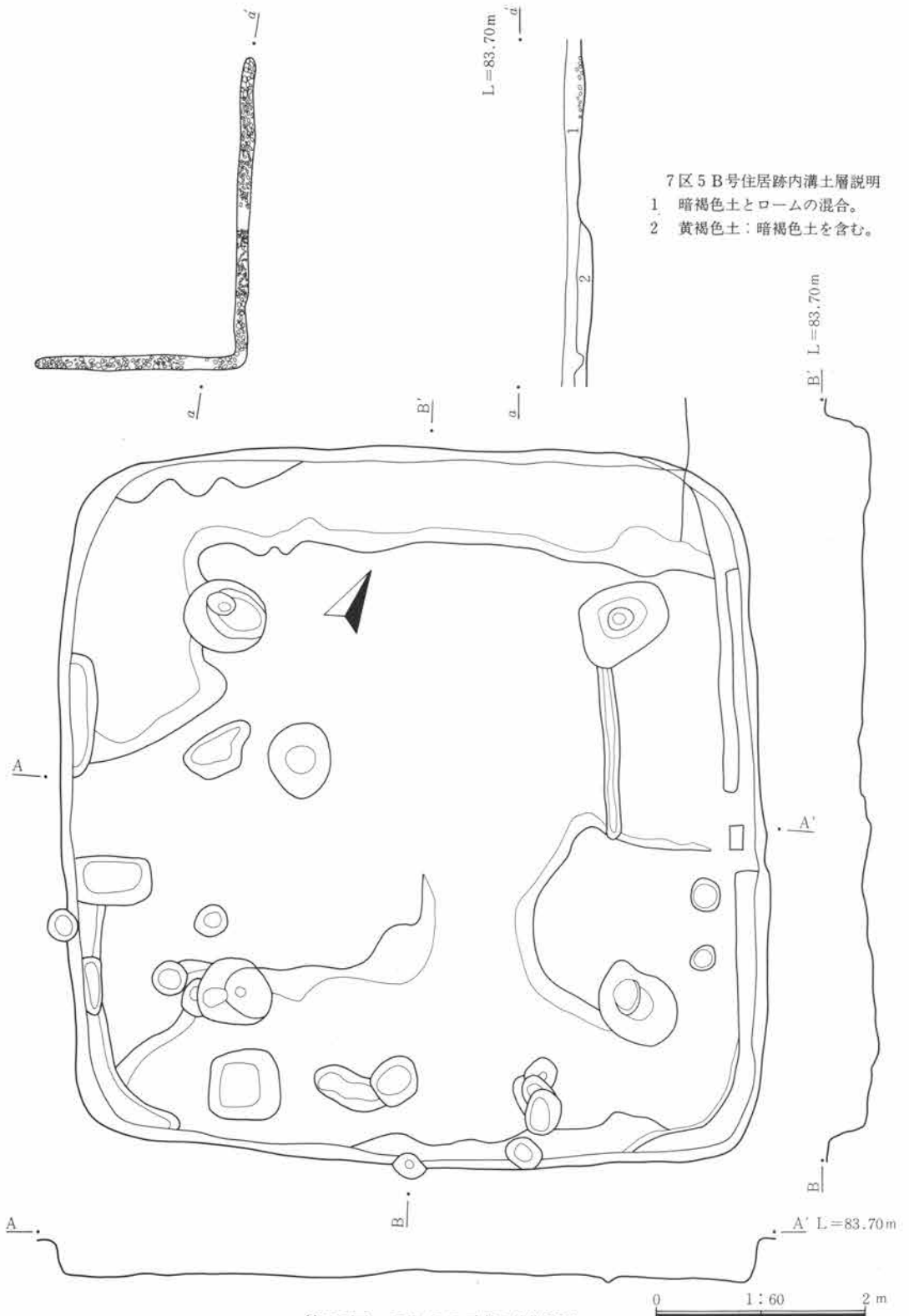
当住居跡の特徴は、床面に「L」字の溝が掘られていることである。柱穴4のやや中央よりから始まり、柱穴3のやや中央よりで直角に曲がり、柱穴2の中間で終わっている。溝の規模は、幅約10～15cm・床面からの深さ約5～10cmであり、内部には細かい石が詰まっていた。用途は不明である。掘形は、中央部が高く、壁に沿って深く掘り込む形であるが、西壁側の中央は掘り込みが浅くなっていた。

遺物は、土師器の壺・台付甕・埴の他、薦石などが出土している。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀後半である。

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区5B号住)

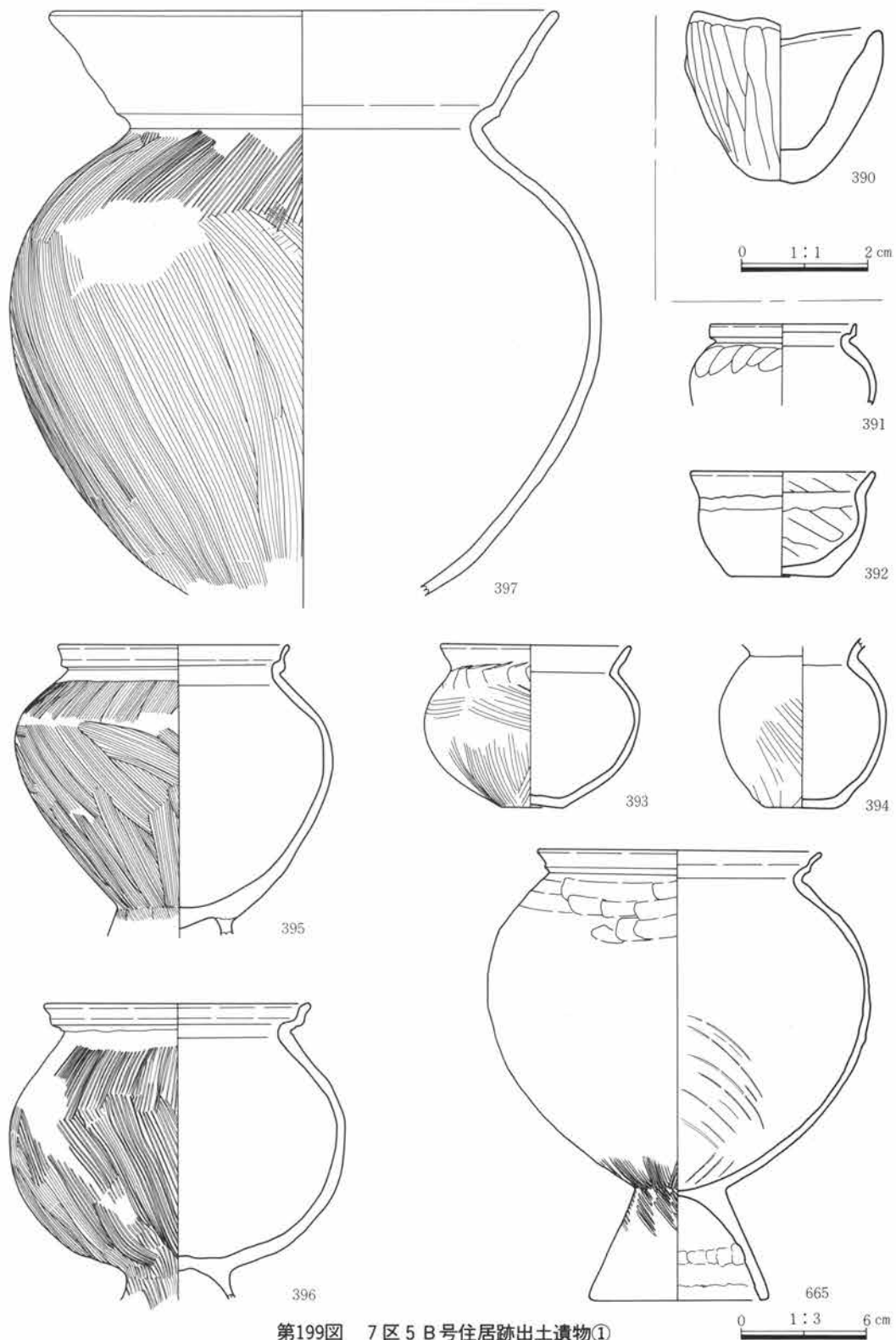


第197図 7区5B号住居跡



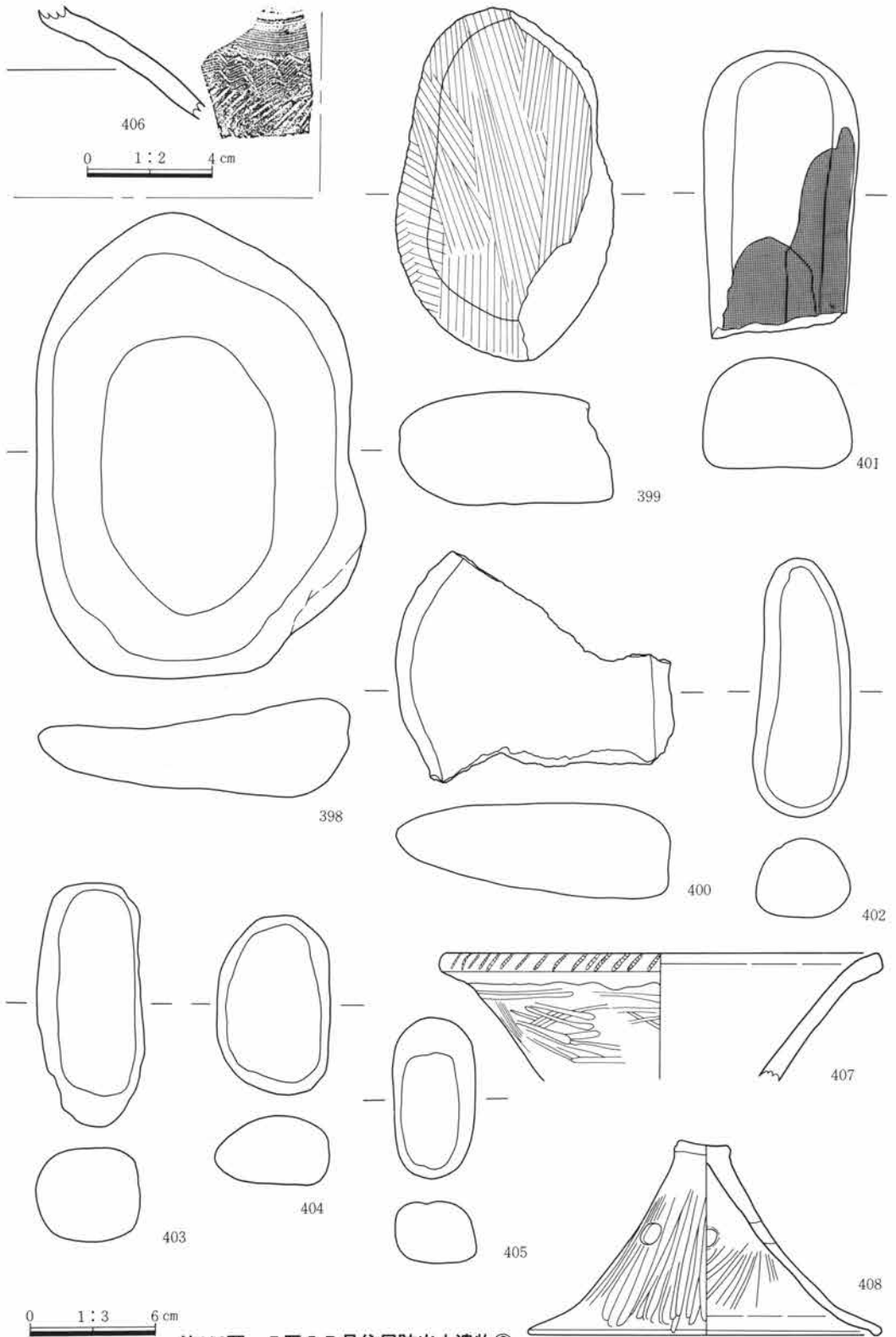
第198図 7区5B号住居跡掘形

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区5B号住)



第199図 7区5B号住居跡出土遺物①

第IV章 発見された遺構と遺物



第200図 7区5B号住居跡出土遺物②

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区5B号住)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
390	手づくね 土器	器高:27mm 口径:31mm 底径:— 完形。	砂粒を含む。やや硬質。 酸化。浅黄。	丸底。内面:口縁部～底部はなで。外面: 口縁部～体部は成形後磨き、底部は なで。	住居内覆土。
391	甕 土師器	器高:[38mm] 口径: (70mm) 底径:— 口 縁部～体部1/4残。	砂粒を含む。やや軟質。 酸化。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。内面:口縁部は横な で、体部はなで。外面:口縁部は横なで、 体部上半は篋削り、体部下半はなで。	住居内覆土。
392	罎 土師器	器高:48mm 口径:(82 mm) 底径:42mm 口縁 部～底部1/3残。	砂粒を含む。やや硬質。 酸化。鈍い黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部 はなで、体部～底部は指なで。外面:口 縁部～体部上端は横なで、体部はなで。	住居内覆土。外面 に油煙付着。
393	罎 土師器	器高:77mm 口径:(92 mm) 底径:29mm 最大 径:103mm 口縁部～底 部2/3残。	径1～2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。鈍 い黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体 部上半。内面:口縁部は横なで、体部～ 底部はなで。外面:口縁部は横なで、体 部上端は篋削り、体部は刷毛目。	北壁中央脇床直。 内外面に油煙付 着。
394	壺 土師器	器高:[80mm] 口径:— 底径:34mm 口縁部下 半～底部1/2残。	径1～2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。灰 白。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部 は横なで、体部～底部はなで。外面:口 縁部は横なで、体部はなで後一部磨 き、体部下端～底部は篋削り。	住居内南西部他。
395	台付甕 土師器	器高:[137mm] 口径: 110mm 脚径:— 最大 径:132mm 口縁部～脚 部上端残。	径1～2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。褐 灰。	口縁部は「S」字状。最大径は体部上半。 内面:口縁部は横なで、体部～脚部上端 はなで。外面:口縁部は横なで、体部～ 脚部上端は縦刷毛目。	住居内中央部床 直。内外面に油煙 付着。
396	台付甕 土師器	器高:[140mm] 口径: (128mm) 脚径:— 最 大径:(160mm) 口縁部 ～脚部上端1/2残。	径1～2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。褐 灰。	口縁部は「S」字状。最大径は体部中央。 内面:口縁部は横なで、体部～脚部上半 はなで。外面:口縁部は横なで、体部～ 脚部上半は縦刷毛目。	住居内中央部床 直。外面に多量の 油煙付着。
397	台付甕 土師器	器高:[277mm] 口径: 243mm 脚径:— 最大 径:282mm 脚部欠。	径1～2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。鈍 い褐。	口縁部は「S」字状を呈するが、上半は、 大きく、直線的に広がる。内面:口縁部 は横なで、体部はなで。外面:口縁部は 横なで、体部は縦刷毛目。	住居内北西部床直 炉北。外面に多量 の油煙付着。
398	用途不明 石製品	長:220mm 幅:158mm 厚:46mm 重:2380g	粗粒安山岩。	2面擦られている。	住居内南西部。
399	用途不明 石製品	長:168mm 幅:[104mm] 厚:59mm 重:1340g	粗粒安山岩。	周囲が擦られている。一部欠。	住居内南壁脇。
400	用途不明 石製品	長:[110mm] 幅:131mm 厚:44mm 重:970g	粗粒安山岩。	2面擦られている。	住居内南西。
401	用途不明 石製品	長:[136mm] 幅:74mm 厚:56mm 重:900g	粗粒安山岩。	3面擦られている。	炉上面。
402	薦石	長:123mm 幅:42mm 厚:39mm 重:295g	粗粒安山岩。		住居内覆土。

第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
403	薦石	長:116mm 幅:53mm 厚:44mm 重:400g	粗粒安山岩。		住居内南西部。
404	薦石	長:85mm 幅:55mm 厚:35mm 重:240g	粗粒安山岩。		住居内覆土。
405	薦石	長:76mm 幅:40mm 厚:29mm 重:150g	粗粒安山岩。		住居内覆土。
406	壺 土師器	器高:— 口径:— 底 径:— 体部上端小片。	砂粒を含む。やや硬質。 酸化。浅黄橙。	内面:なで。外面:上から櫛状工具による横刷毛目、波状文、刺突文。	住居内覆土。
407	壺 土師器	器高:— 口径:(212 mm) 底径:— 口縁部 1/3残。	砂粒を含む。やや硬質。 酸化。明赤褐。	口縁部は直線的に広がり、口縁端部はやや外湾。内面:横なで。外面:横なで後篋磨き、口縁端部に櫛状工具による刺突文。	南側壁中央脇。
408	高杯 土師器	器高:[92mm] 口径:— 脚径:169mm 底部~脚 部2/3残。	径1~2mmの砂粒を含む。 やや軟質。酸化。鈍 い橙。	脚部は「ハ」字状に開く。脚部に円形穿孔有り、3個と推定。内面:脚部上半はなで後篋磨き、脚部下半は横なで。外面:なで後篋磨き。	住居内覆土。
665	台付甕 土師器	器高:213mm 口径:136 mm 脚径:86mm 最大 径:183mm ほぼ完形。	砂粒を含む。やや硬質。 酸化。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。脚部は「ハ」字状に開き、下端は折り返し。最大径は体部上半。内面:口縁部は横なで、体部~脚部はなで。外面:口縁部~体部上端は横なで、体部はなで、体部下端~脚部上半は刷毛目、脚部下半はなで。	住居内南東部床直。内外面に多量の油煙付着。二次炎を受けている。

7区6号住居跡

当住居跡は、7区3号住居跡・土坑と重複し、7区7B号住居跡に40cm、7区15号住居跡に70cmと近接する。7区3号住居跡との新旧関係は、当住居跡の方が新しく、土坑との新旧関係は、当住居跡の方が古い。

規模は東西約5.0m・南北約4.4mであり、平面形はやや歪んだ長方形を呈する。主軸方位はN-108°-Eである。残存壁高は13~18cmを測る。床面中央には焼土、北西隅には炭化材が認められた。柱穴は確認されない。周溝は竈の北から北東隅まで巡っている。北東隅(ピット1)には長軸48cm・短軸23cm、竈の横(ピット2)には長軸76cm・短軸44cmの楕円形のピットが確認されている。深さはそれぞれ16cmと9cmを測る。貯蔵穴の北のピットは攪乱である。

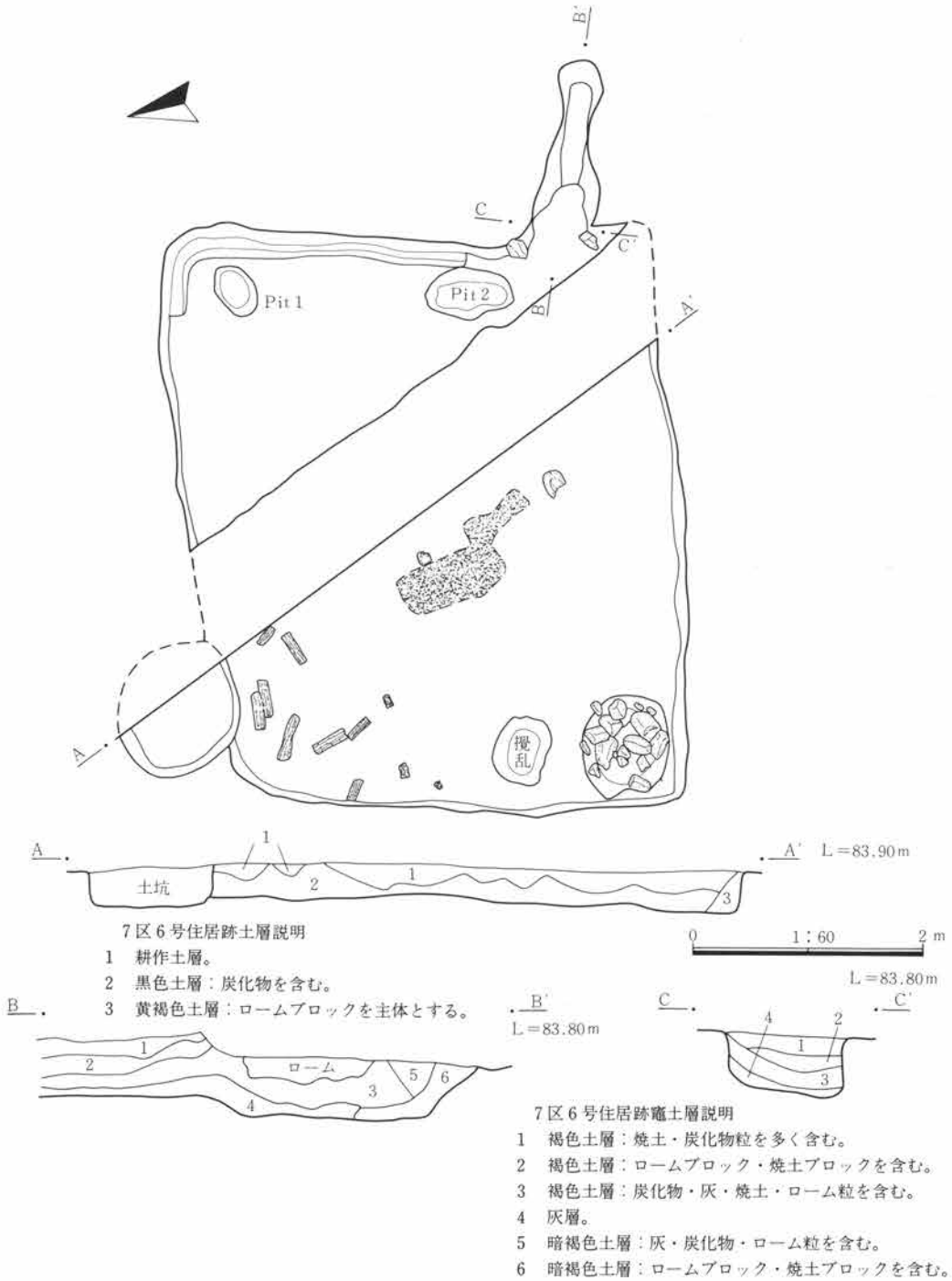
竈は東壁南隅に構築され、燃烧部は壁外に設ける。煙道は壁外に152cm張り出している。住居の壁と竈の境には一對の袖石が遺存している。

南西隅には長軸90cm・短軸74cmを測る楕円形の貯蔵穴が確認されている。貯蔵穴内には礫が多く認められた。

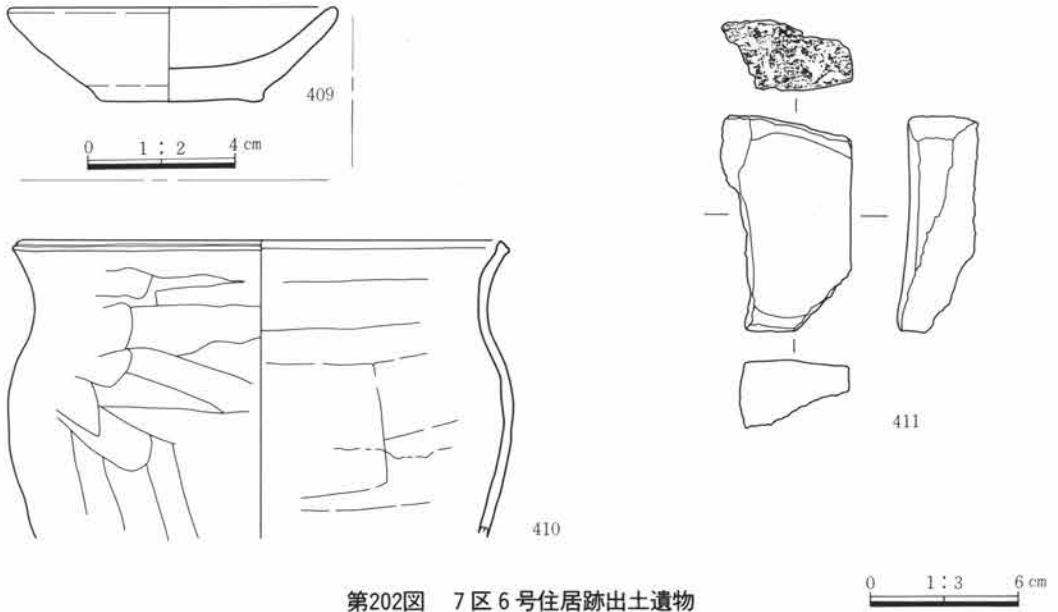
遺物は少なく、実測可能な土器は土師質土器皿(409)と土師器甕(410)の2点のみである。し



かし、両者には時期差があり、住居形態から(409)は当住居跡には伴わないと考えられる。なお、貯蔵穴からは刀子の石製模造品(414)が出土しているが、別項に掲載した。



第201図 7区6号住居跡



第202図 7区6号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
409	皿 土師質土器	器高:25mm 口径:(89mm) 底径:44mm 底部完形・口縁部一部残。	細砂含む。普。黄橙。	底部は器壁が厚い。底部外面が摩滅しているため、糸切り痕は不明。	覆土。
410	甕 土師器	器高:[119mm] 口径:(200mm) 一部残。	細砂含む。普。暗赤褐。	口縁部は「コ」の字状の崩れたもの。口縁部は横なで。体部内面はなで。体部外面は篦削り。	覆土。
411	砥石	長:87mm 幅:44mm 厚:[20mm] 重:140g 表面のみ残。	砥沢石。	表面を多用する。左側面と上小口は欠損後も使用している。	竈。

### 7区7A号住居跡

当住居跡は、7区7B号住居跡と重複する。新旧関係は、当住居跡が古い。

規模は東西約3.5mを測るが、南北は不明である。主軸方位は不明である。平面形は長方形を呈すると考えられる。残存壁高は17~22cmを測る。周溝・柱穴は確認されない。

竈は東壁南寄りに構築され、燃烧部は壁外に設けている。煙道は壁外に48cm張り出している。

出土遺物は少なく、図示し得るものはない。

7区7B号住居跡

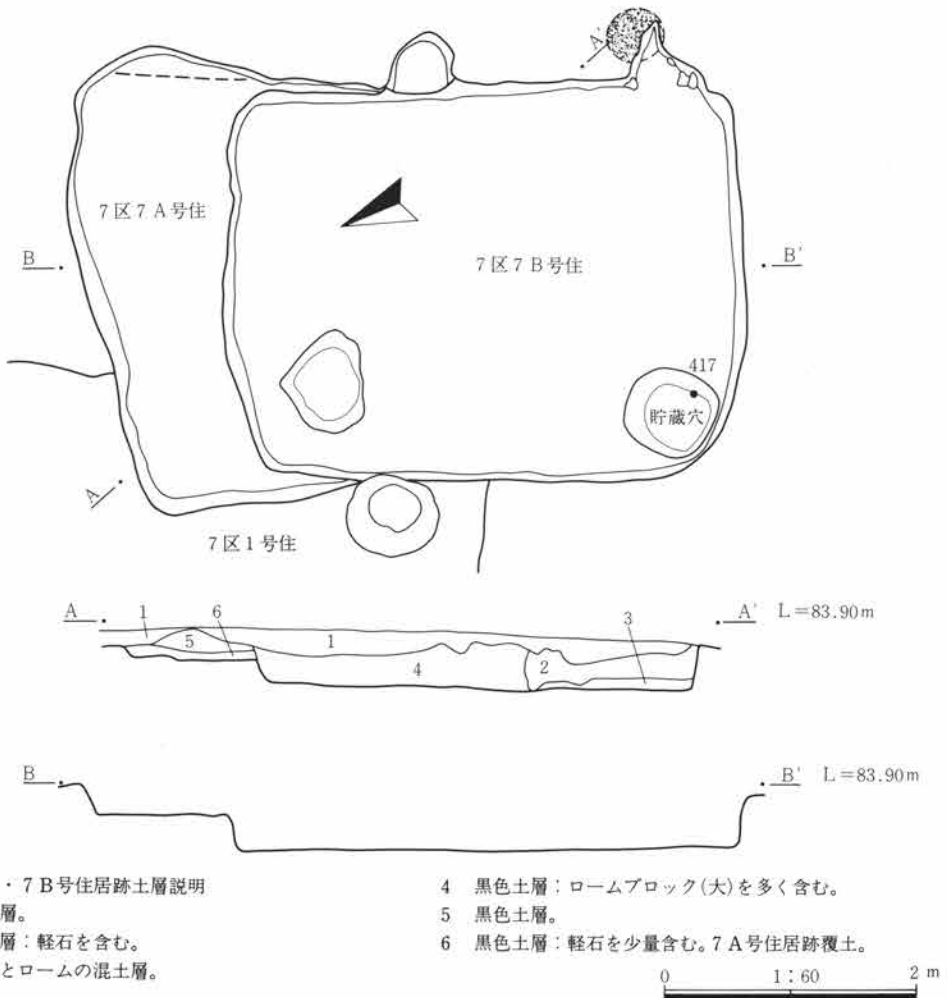
当住居跡は、7区1号住居跡・7区7A号住居跡と重複し、7区4B号住居跡に70cm・7区6号住居跡に40cmと近接する。新旧関係は、いずれも当住居跡の方が新しい。

規模は東西3.1m・南北4.2mであり、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-108°-Eである。残存壁高は20~41cmを測る。柱穴・周溝は確認されない。

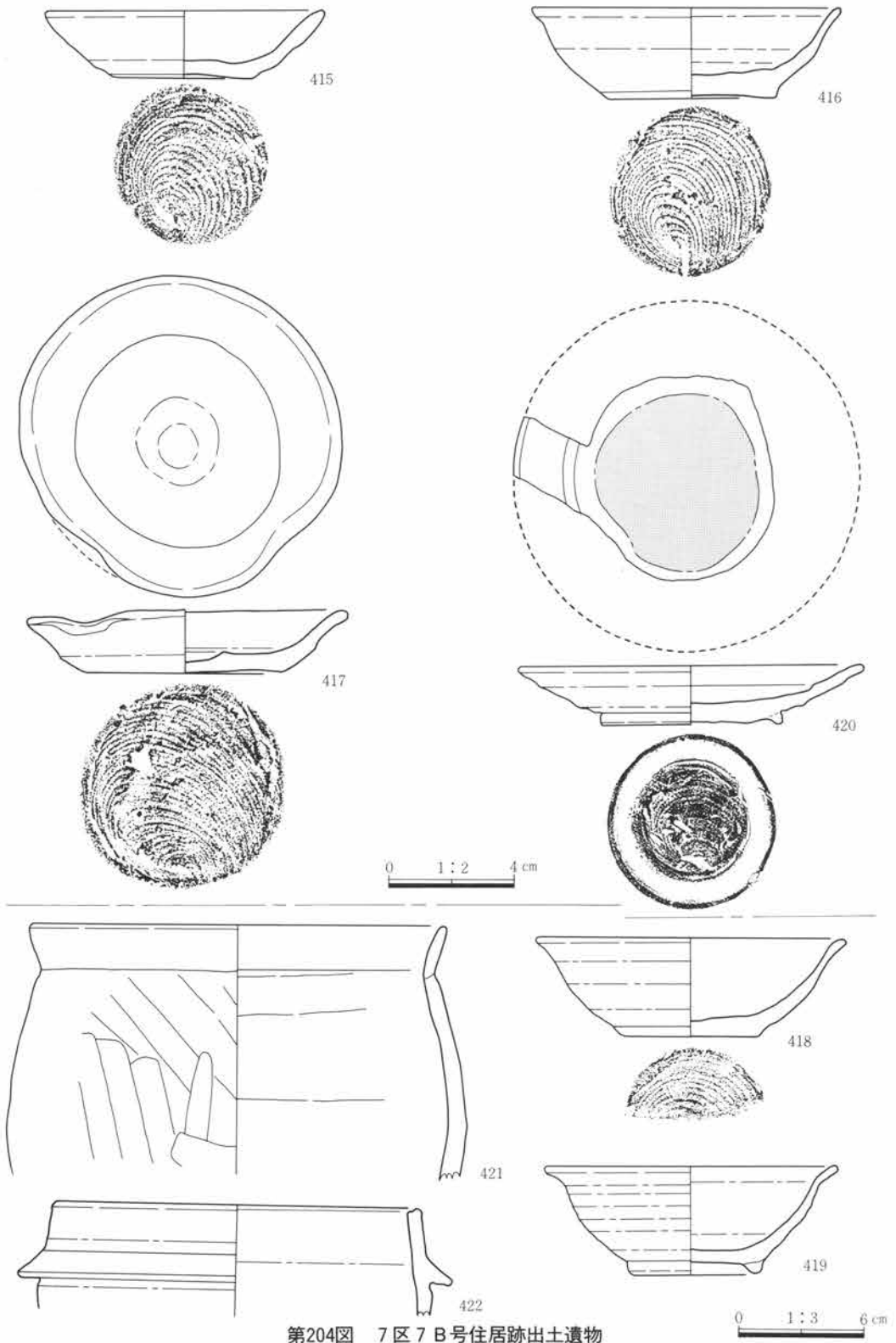
竈は東壁南隅に構築され、燃烧部は壁外に設ける。煙道は壁外に50cm張り出している。竈内には、袖石が遺存している。

貯蔵穴は南西隅に構築され、平面形は径74cmの円形を呈する。深さは48cmを測る。北西隅の長軸80cm・短軸66cm・深さ32cmの土坑は当住居跡には伴わないと考えられる。

遺物は須恵器杯(415・416)・椀(419)・灰釉陶器皿(420)・羽釜(422)などが出土している。



第203図 7区7A号住居跡・7B号住居跡



第204図 7区7B号住居跡出土遺物

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区7B・9号住)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
415	杯 須恵器	器高:21mm 口径:(89mm) 底径:44mm 口縁部1/2欠。	細砂～粗砂含む。普。鈍い黄橙。	口縁部の器壁は厚くなる。底部外面は右回転糸切り無調整。	ピット。
416	杯 須恵器	器高:29mm 口径:(97mm) 底径:53mm 口縁部1/2欠。	細砂～粗砂含む。普。鈍い黄橙。	口縁部は外反する。体部は内湾する。底部外面は右回転糸切り無調整。	覆土。
417	杯 土師質土器	器高:20mm 口径:102mm 底径:63mm 完形。	細砂～径2mmの礫含む。やや軟質。橙。	口縁部は外反する。底部内面はくぼむ。口縁部の一部を指により変形させる。底部外面は右回転糸切り無調整。	ピット。
418	碗 須恵器	器高:47mm 口径:(147mm) 底径:(64mm) 1/2残。	細砂～径2mmの礫含む。普。浅黄橙。	口縁部は外反する。体部は内湾する。底部外面は右回転糸切り無調整。	覆土。
419	碗 須恵器	器高:51mm 口径:140mm 底径:57mm 1/3欠。	細砂～径2mmの礫含む。やや軟質。灰。	口縁部は外反する。体部は内湾する。底部外面糸切りの後、高台を貼り付ける。	竈。
420	段皿 灰釉陶器	器高:18mm 口径:(110mm) 底径:57mm 口縁部一部残・底部完形。	細砂含む。軟質。淡黄。焼成は酸化気味。	口縁部内面は段を為す。底部は右回転糸切りの後、高台を張り付ける。底部内面は磨られており、非常に平滑である。	床面。
421	土釜	器高:[119mm] 口径:(197mm) 小片。	細砂～径1mmの粗砂含む。普。鈍い橙。	口縁部は外反する。口縁部は横なで。体部内面はなで。体部外面は篋状工具によるなで。	竈。
422	羽釜	器高:[54mm] 口径:(174mm) 小片。	細砂～粗砂含む。やや軟質。灰～灰白。	口縁部は内傾する。罫は貼り付ける。口縁部は横なで。	覆土。

7区9号住居跡

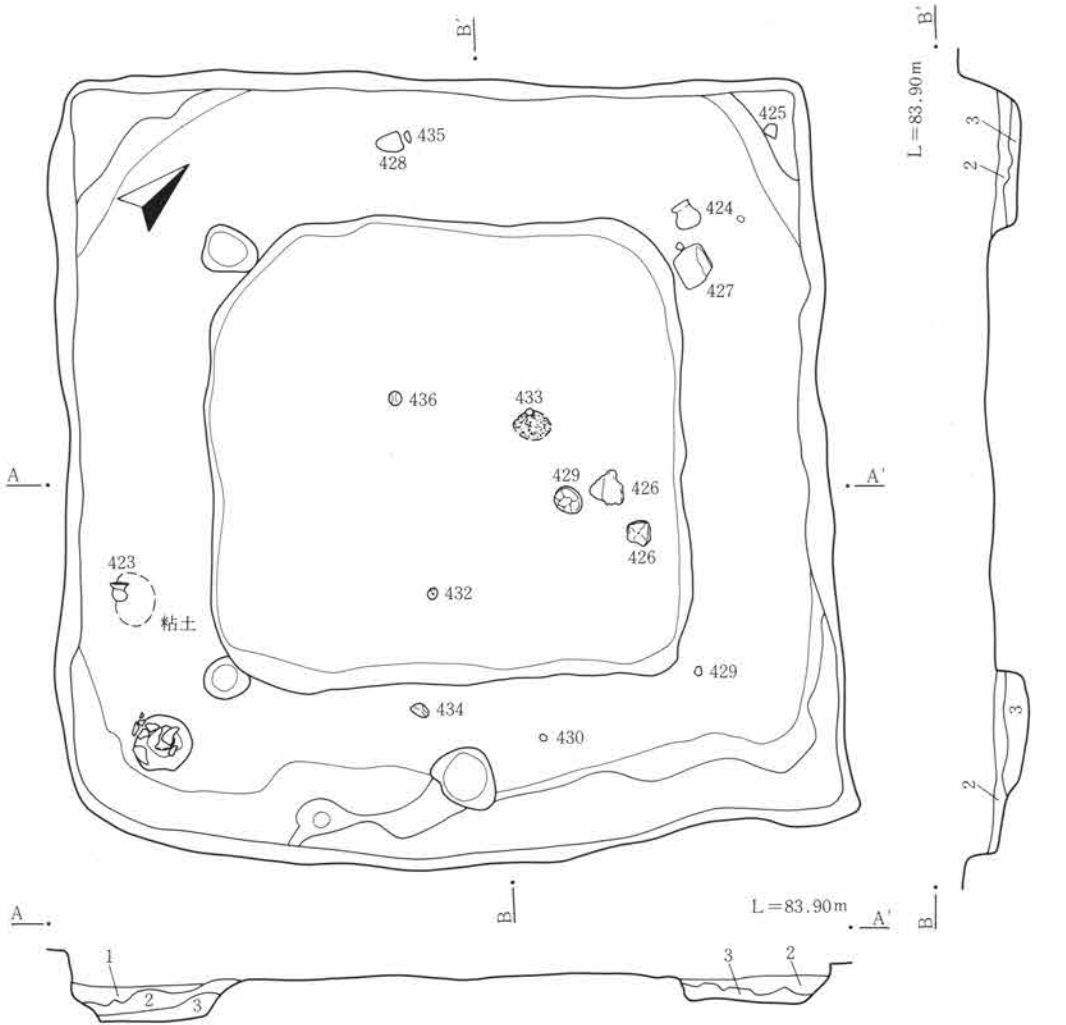
当住居跡は、7区2号住居跡・7区3号住居跡・6区1号溝が近接するが、重複は無い。当住居跡の規模は、東西約6.1m・南北約6.2mであり、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-49°-Wである。確認面までの壁の立ち上がりは、約10～30cmであり、南東部の残りが悪い。床面は比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

炉は、住居内中央部のやや東よりに築かれている。囲みの石は検出できなかったが、焼けている床面を検出することができた。主柱穴は4基と考えられるが、検出できたのは西側2基だけである。規模は、長軸約35～45cm・短軸約30～40cm・床面からの深さ約40～45cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。南壁の中央付近に、柱穴と考えられるピットが1基あるが、位置等から主柱穴と断定することはできない。ピットの規模は、長軸約60cm・短軸約50cm・床面からの深さ約55cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴と考えられるピットは南西隅から検出できた。規模は、長軸約50cm・短軸約45cm・床面からの深さ約40cmであり、平面形は楕円形を呈す

る。ピットの中からは、土師器の壺の破片が出土している。

当住居跡の掘形は特徴的である。中央部分東西約3.8m・南北約3.7mの床面は、ほぼ掘形と同じ高さである。掘形の形態は、周囲を溝状に掘り込み、中央部を島状に残す形である。掘り込みの規模は、幅約120~150cm・床面からの深さ約20~30cmである。

遺物は、土師器の甕・壺・埴・高杯の他、薦石などが出土している。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は5世紀前半である。



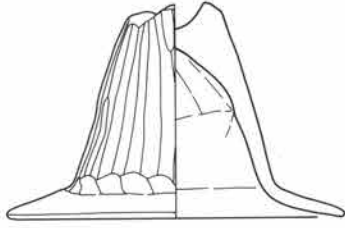
7区9号住居跡土層説明

- 1 黒褐色土：少量のローム粒子を含み、やや軟らかい。
- 2 黄褐色土：多量のローム小ブロックを含み、堅くしまっている。貼床。
- 3 黒褐色土：やや多量のローム粒子・ローム小ブロックを含む。

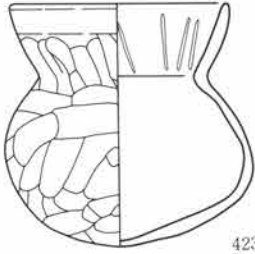
0 1:60 2 m

第205図 7区9号住居跡掘形

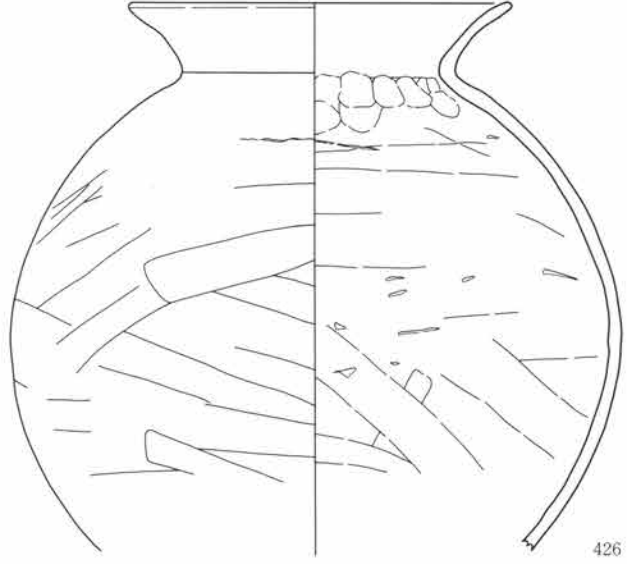
第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区9号住)



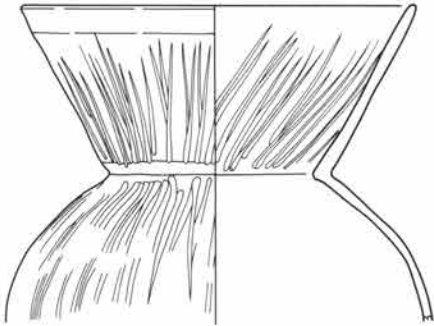
425



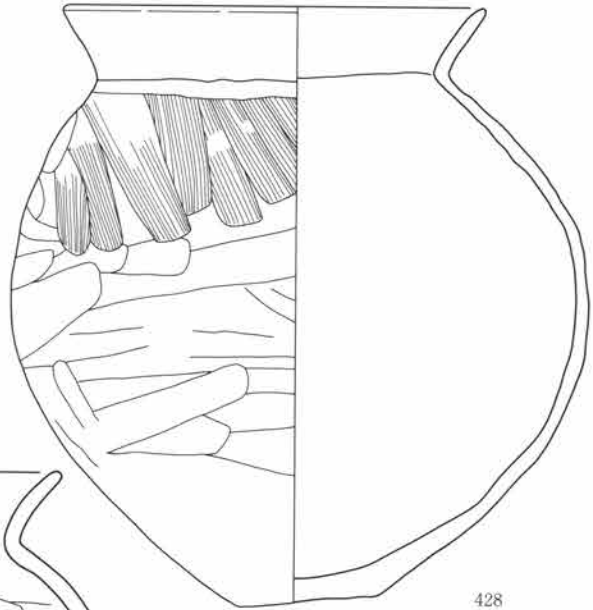
423



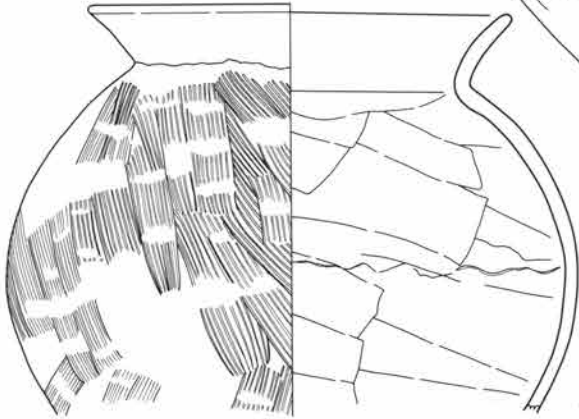
426



424



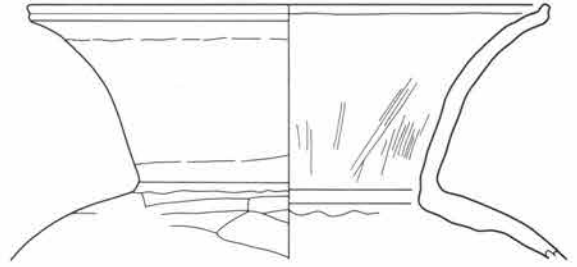
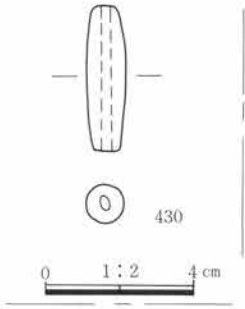
428



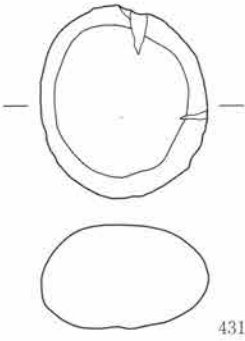
427

第206図 7区9号住居跡出土遺物①

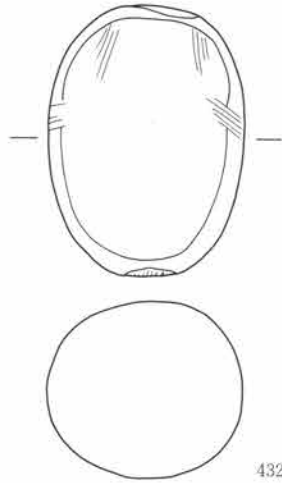
0 1:3 6 cm



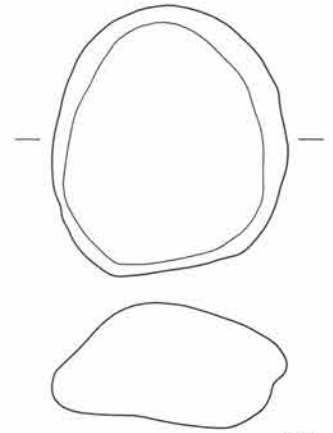
429



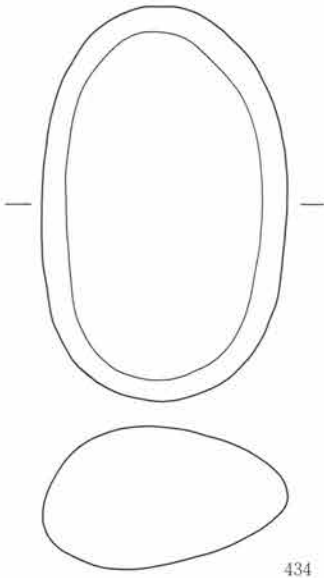
431



432



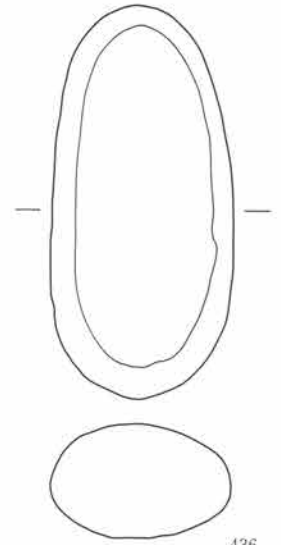
433



434



435



436

第207図 7区9号住居跡出土遺物②





第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区9号住)

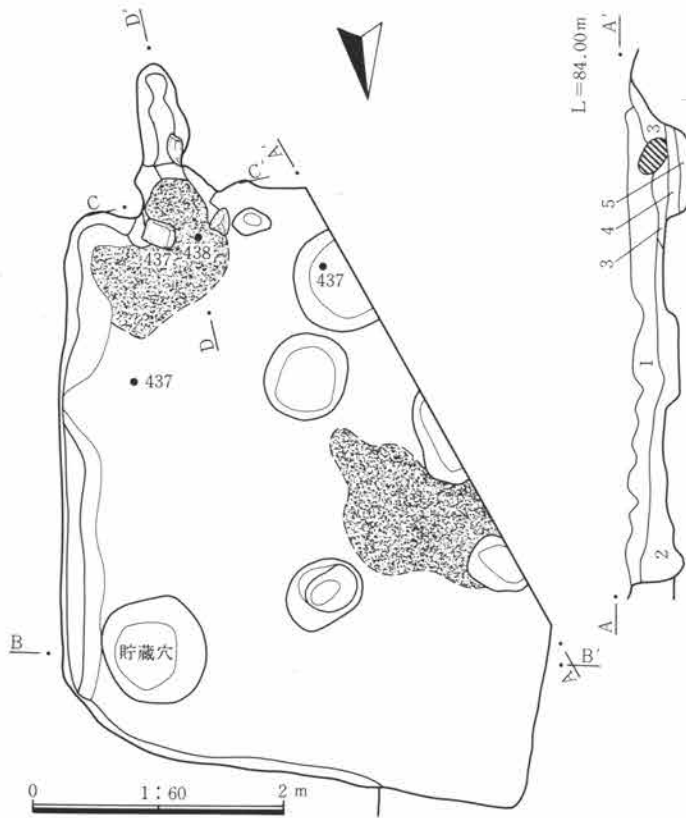
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
423	埴 土師器	器高:97mm 口径:89mm 底径:— 最大径:100mm 完形。	径1~2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。丸底。最大径は体部下半。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部上半は横なで、口縁部下半~底部は篋削り。	住居内南西部床上5cm。
424	埴 土師器	器高:[127mm] 口径:(160mm) 底径:— 口縁部~体部上半2/3残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。橙。	口縁部は大きく「く」字状に外湾し、広がる。内面:口縁部は横なで後縦篋磨き、体部上半はなで。外面:口縁部は横なで後縦篋磨き、体部上半はなで後縦篋磨き。	住居内北東部床直。外面に油煙付着。
425	高杯 土師器	器高:[87mm] 口径:— 脚径:137mm 脚部3/4残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。浅黄橙。	脚部は漏斗状に開く。内面:脚部上半は指なで後篋削り、脚部下半は横なで。外面:脚部上半は縦篋削り、脚部下半は横なで。	住居内北東部隅床上10cm。内外面に油煙付着。
426	甕 土師器	器高:[220mm] 口径:(156mm) 底径:— 最大径:247mm 口縁部~体部3/5残。	径1~2mmの砂粒を含む。軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。球形。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部上端に指頭痕、体部は篋なで。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り。	住居内中央部床直。外面に多量の油煙付着。二次炎を受けている。
427	甕 土師器	器高:[165mm] 口径:(172mm) 底径:— 最大径:232mm 口縁部~体部残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。明灰褐。	口縁部は「く」字状に外湾。球形。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部は篋なで。外面:口縁部は横なで、体部は刷毛目。	住居内北東部床直。外面に油煙付着。二次炎を受けている。
428	甕 土師器	器高:241mm 口径:171mm 底径:(56mm) 最大径:234mm 口縁部~底部3/4残。	径2~3mmの砂粒を含む。軟質。酸化。鈍い褐。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部上半は刷毛目、体部下半~底部は篋削り。	住居内北西部床直。内外面に多量の油煙付着。二次炎を受けている。
429	壺 土師器	器高:[102mm] 口径:212mm 底径:— 口縁部~体部上端残。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は大きく外湾し、端部は直立。内面:口縁部は横なで、一部刷毛目が残り、体部上端はなで。外面:口縁部は横なで、体部上端は篋削り。	住居内中央部床直。
430	土 錘	長:39mm 径:11mm 孔径:3mm		中央部が太く、両端が細くなる。	住居内南東部床上15cm。
431	用途不明 石製品	長:77mm 幅:68mm 厚:45mm 重:280g	粗粒安山岩。	周囲が擦られている。	住居内覆土。
432	用途不明 石製品	長:109mm 幅:79mm 厚:70mm 重:910g	粗粒安山岩。	周囲が擦られている。	住居内中央部床直。
433	用途不明 石製品	長:109mm 幅:96mm 厚:50mm 重:670g	粗粒安山岩。	周囲が擦られている。	住居内中央部床直 炉脇。
434	用途不明 石製品	長:159mm 幅:100mm 厚:58mm 重:1240g	粗粒安山岩。	周囲が擦られている。	住居内中央部床直。

第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
435	薦石	長:154mm 幅:68mm 厚:61mm 重:1040g	粗粒安山岩。		住居内北西部床直。
436	薦石	長:158mm 幅:74mm 厚:45mm 重:690g	粗粒安山岩。		住居内中央部床直。

7区10号住居跡

当住居跡は、7区2号住居跡・7区11号住居跡・7区13号住居跡と重複し、7区12号住居跡に60cmと近接する。新旧関係は、いずれも当住居跡の方が新しい。



7区10号住居跡土層説明

- 1 黒褐色土層：ロームブロック・焼土ブロックを含む。焼土・灰を含む。
- 2 暗褐色土層：ロームブロック・焼土ブロックを多く含む。焼土・炭化物を含む。
- 3 暗褐色土層：ロームブロック・焼土ブロックを含む。
- 4 明褐色土層：ロームブロック・焼土ブロックをやや多く含む。
- 5 暗褐色土層：ロームブロック(大)を多く含む。

第208図 7区10号住居跡

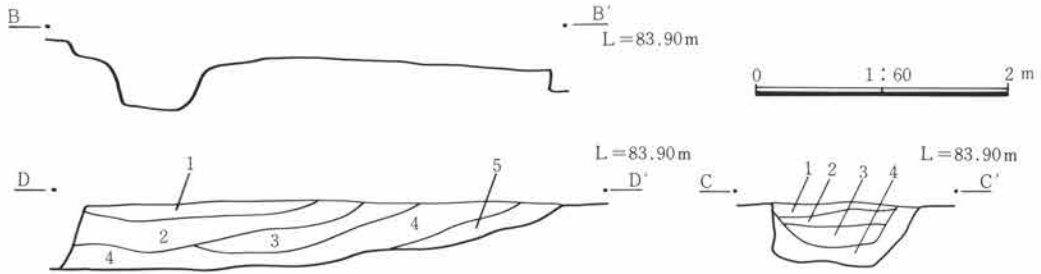
規模は東西が不明・南北約4.6mであり、平面形は長方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-180°-Eである。残存壁高は10~23cmである。柱穴・周溝は確認されない。床面中央には焼土の分布が認められた。また、床面には5基の土坑が確認されているが、いずれも床下土坑である。

竈は南壁東隅に構築され、燃焼部は壁外に設ける。煙道は壁外に111cm張り出す。竈内は良く焼けており、前にも焼土と灰が分布していた。袖は遺存していないが、一對の袖石が認められた。

北東隅に確認された径80~90cm・深さ42cmの土坑は、貯蔵穴と考えられる。

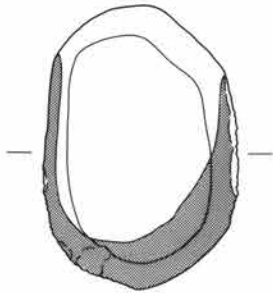
遺物は少なく、実測可能な土器は土釜(437)一点のみである。

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区9・10号住)

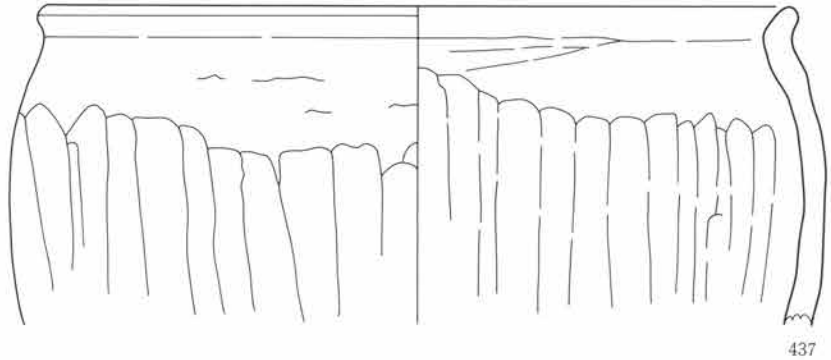


7区10号住居跡竈土層説明

- 1 褐色土層：ロームブロック(小)・軽石を多く含む。
- 2 褐色土層：焼土粒・ローム粒を多く含む。
- 3 褐色土層：炭化物・灰・焼土ブロックを含む。
- 4 ロームブロックを主体とし、焼土・灰を含む。
- 5 ローム粒・焼土粒・灰の混土層。



第209図 7区10号住居跡エレベーション図・竈断面図



第210図 7区10号住居跡出土遺物

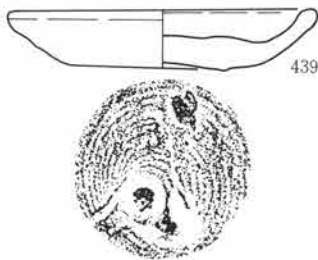
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
437	土釜	器高:[127mm] 口径: (307mm) 1/3残。	細砂～径3mmの礫多く 含む。やや軟質。明赤 褐。	口縁部は短い。口縁部は外反する。口縁 部は横なで。体部内面は強いなで。外面 は篋削り。	竈前。
438	用途不明 石製品	長:114mm 幅:79mm 厚:29mm 重:460g 周縁一部欠。	粗粒安山岩。	両面使用するが、裏面を多用している。	竈前。

7区11号住居跡

当住居跡は、7区10号住居跡・7区13号住居跡と重複する。新旧関係は、7区13号住居跡より当住居跡の方が新しく、7区10号住居跡より当住居跡の方が古い。

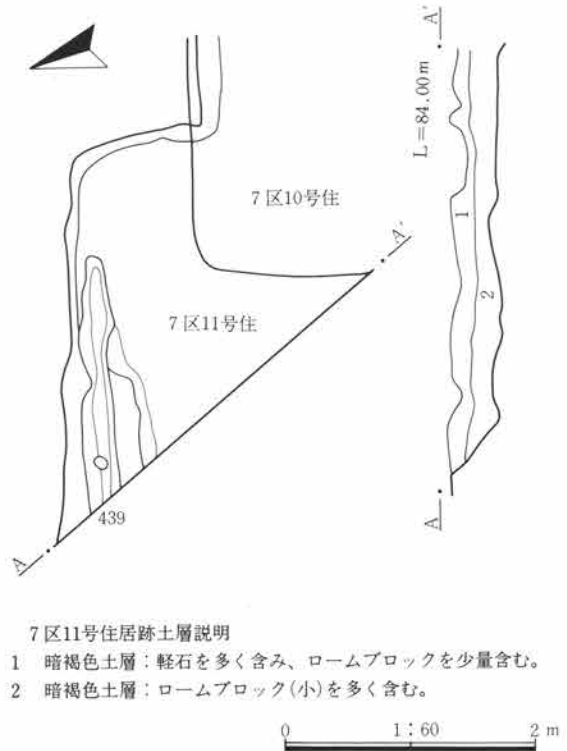
北壁東半と北東隅の確認であるため、規模・平面形・主軸方位は不明である。残存壁高は9~16cmである。周溝は北壁に確認された。

出土遺物は、土師質土器皿(439)のみである。



0 1:2 4 cm

第212図 7区11号住居跡出土遺物



7区11号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土層：軽石を多く含み、ロームブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土層：ロームブロック(小)を多く含む。

第211図 7区11号住居跡

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
439	皿 土師質土器	器高:16mm 口径:84mm 底径:50mm 口縁部一部欠。	細砂~径1mmの粗砂を含む。やや軟質。鈍い黄褐色。	口縁端部を丸くする。底部の器壁は厚い。底部外面右回転糸切り無調整。	北壁中央。

7区12号住居跡

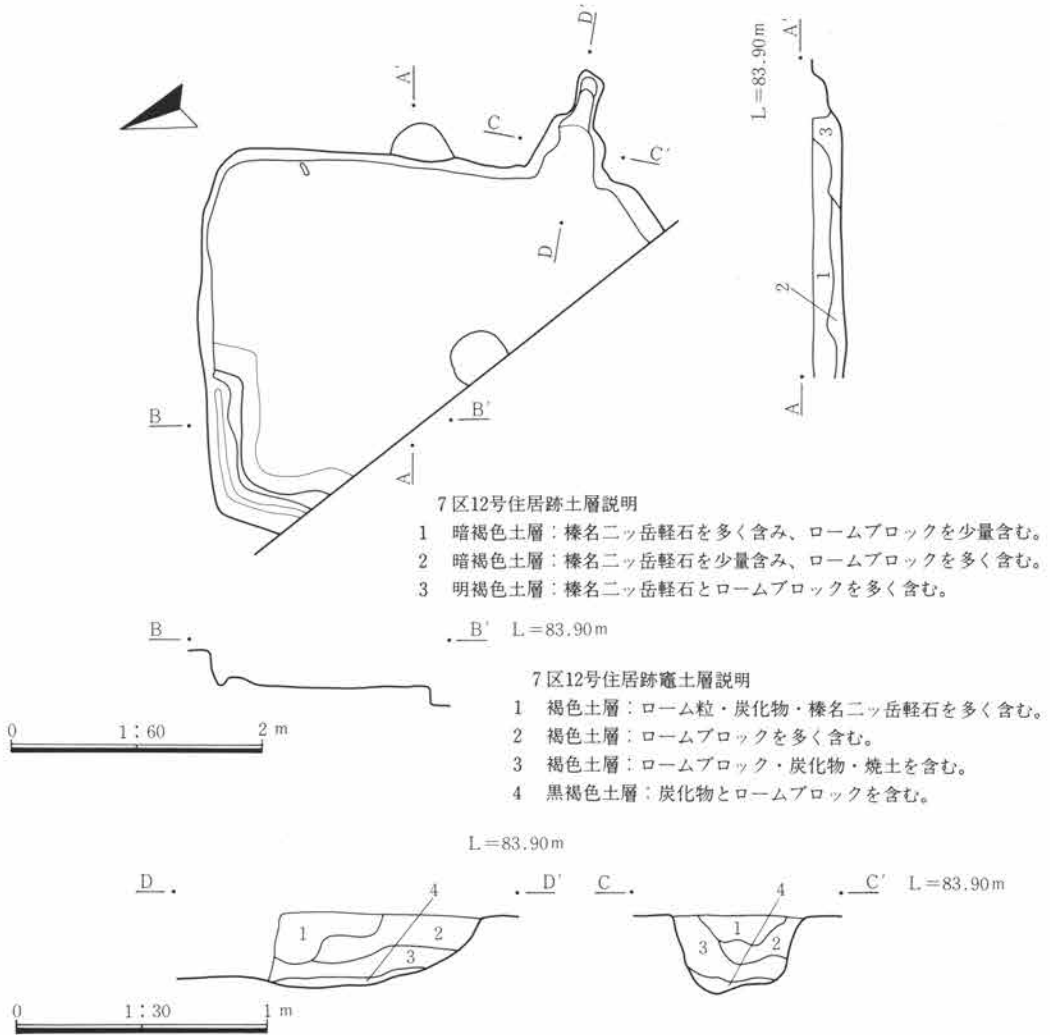
当住居跡は、6区11号住居跡・ピットと重複し、7区10号住居跡に60cmと近接する。新旧関係は、いずれも当住居跡の方が新しい。

規模は東西3.0m・南北3.7mを測り、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-112°-Eである。残存壁高は17~26cmである。柱穴は確認されない。周溝は北西隅で確認されている。

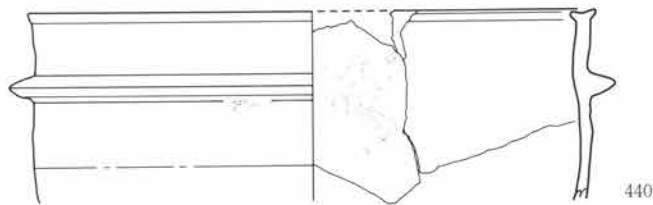
第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区11・12号住)

竈は東壁南隅に構築され、燃焼部は壁外に設ける。煙道は壁外に85cm張り出す。竈内は良く焼けており、前の床面は硬く締まっている。

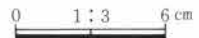
実測可能な遺物は、羽釜(440)一点のみである。



第213図 7区12号住居跡



第214図 7区12号住居跡出土遺物



#### 第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
440	羽釜	器高: [76mm] 口径: (229mm) 小片。	細砂～粗砂多く含む。 やや軟質。鈍い橙。	全体に薄造りである。口縁端部は内外面に張り出す。鏝は貼り付ける。器表に鉄分が付着するが、割れ口の状態から欠損後の付着である。	北東隅。

#### 7区13号住居跡

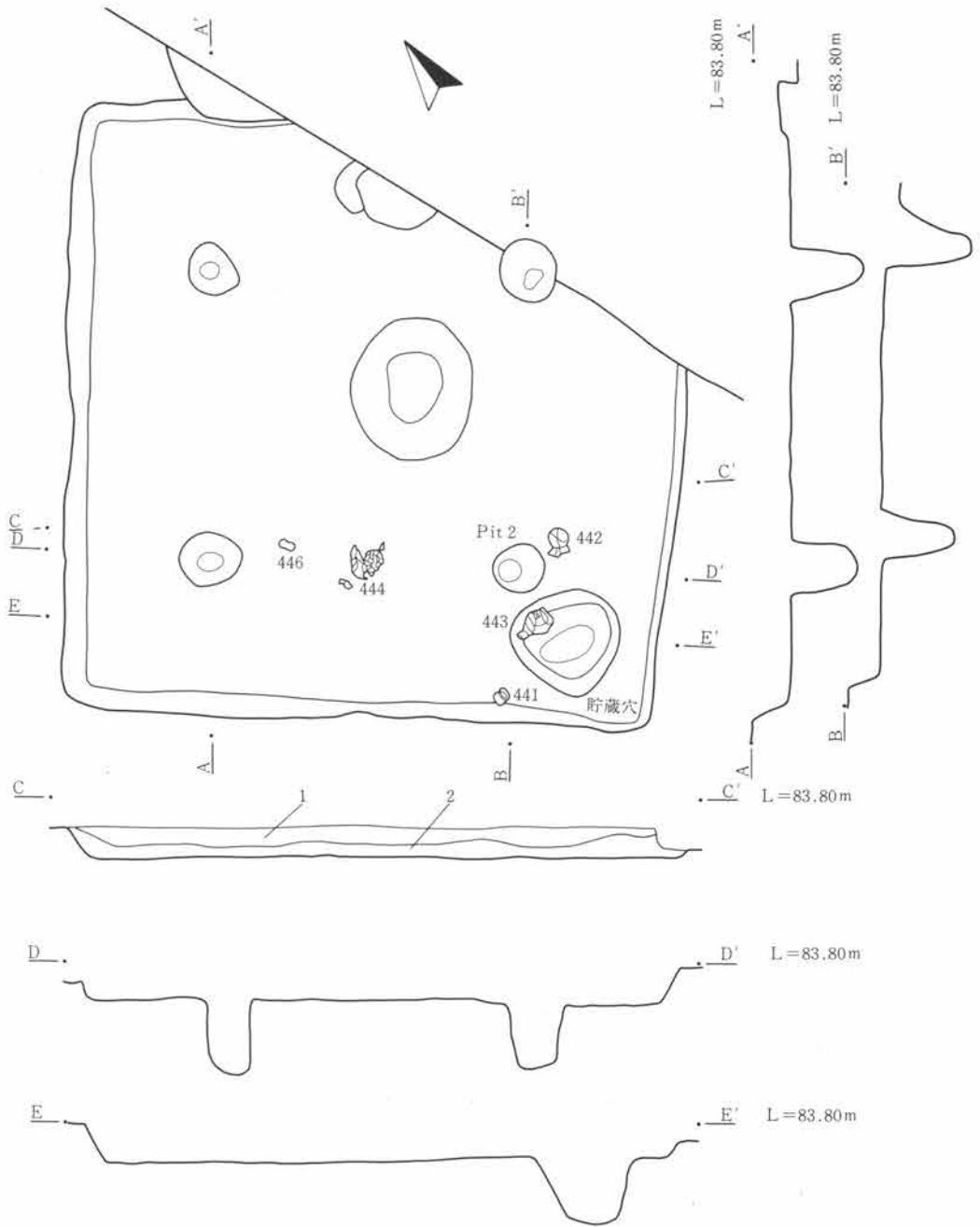
当住居跡は、7区2号住居跡・7区4A号住居跡・7区4B号住居跡・7区10号住居跡・7区11号住居跡と重複する。7区2号住居跡との新旧関係は、同住居跡の北西部の壁・床が当住居跡の南東部の床上の覆土中に築かれていることから、当住居跡の方が古い。7区4A号住居跡との新旧関係は、同住居跡の南西部の壁・床が当住居跡の北東部の床上の覆土中に築かれていることから、当住居跡の方が古い。7区4B号住居跡との新旧関係は、同住居跡の南西部の壁・床が当住居跡の北東部の床上の覆土中に築かれていることから、当住居跡の方が古い。7区10号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の南西隅の壁を破壊していることから、当住居跡の方が古い。7区11号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の西側壁の中央部分を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、東西約5.3m・南北約5.2mであり、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-130°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約15～30cmである。床面は比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

住居内中央部より検出できたピットの覆土上層中には、焼土・炭化物が含まれており、炉と推定することが可能である。主柱穴は4基である。規模は、長軸約40～50cm・短軸約35～50cm・床面からの深さ約55～75cmであり、平面形は不整形な楕円形ないしは不整形な円形を呈する。貯蔵穴と考えられるピットは、南東隅から検出できた。規模は、径約90cm・床面からの深さ約55cmであり、平面形は不整形な円形を呈する。貯蔵穴の上面からは、土師器の台付甕が出土している。掘形は、中央部の高さは床面とほぼ同じである。掘形の形態は、中央部が島状に残る形であり、周囲が幅130～180cm・床面からの深さ約15～20cmの溝状である。

遺物は、土師器の甕・台付甕・埴などが出土している。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀末～5世紀初頭である。

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区12・13号住)

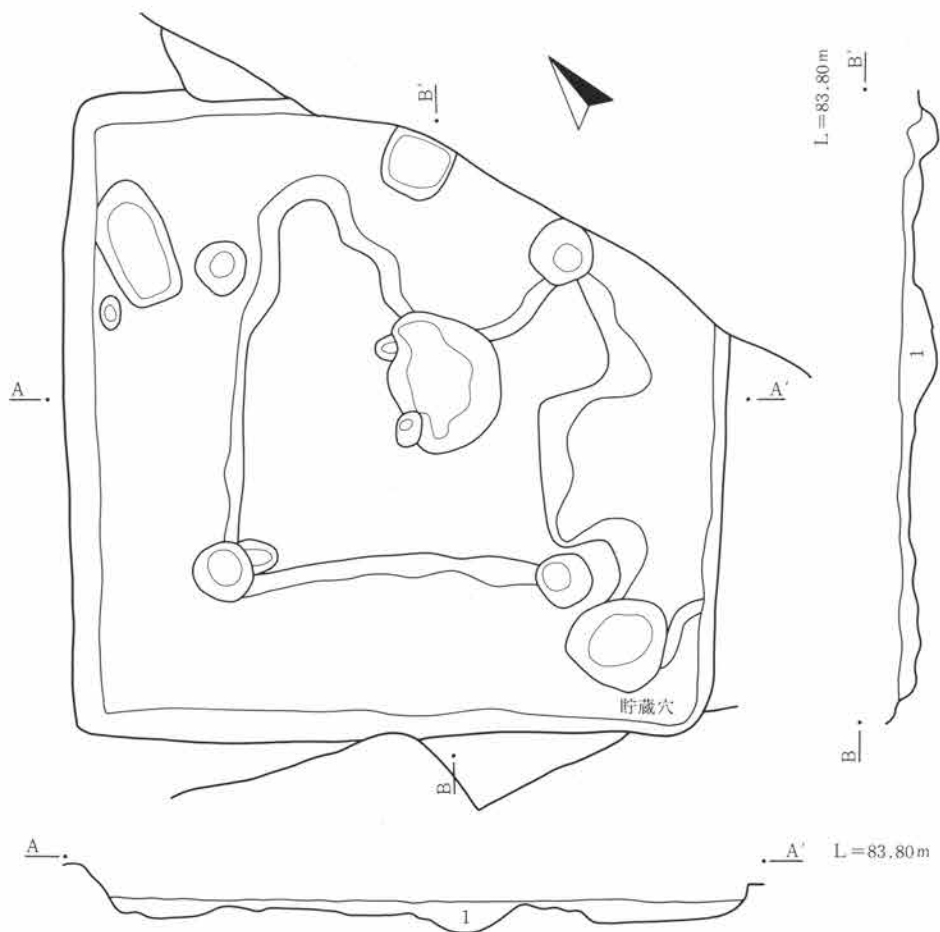


7区13号住居跡土層説明

- 1 明褐色土：やや多量の軽石・少量のローム小ブロックを含む。
- 2 暗褐色土：やや多量のローム小ブロック及び少量の軽石・炭化物を含む。

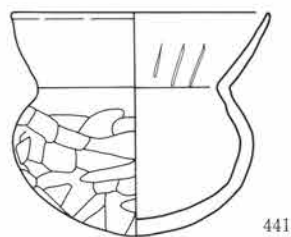
第215図 7区13号住居跡

0 1:60 2 m

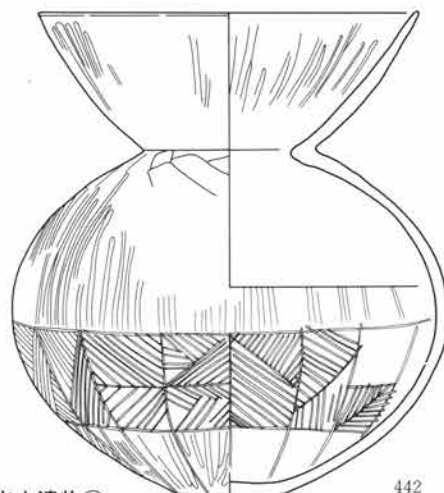


7区13号住居跡掘形土層説明  
 1 黒褐色土とローム小ブロックの混合。堅くしまっている。

第216図 7区13号住居跡掘形



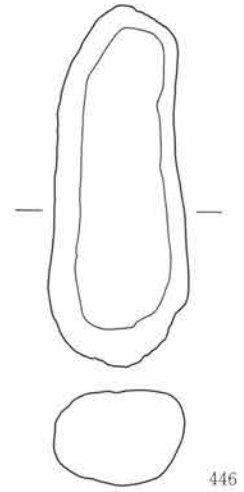
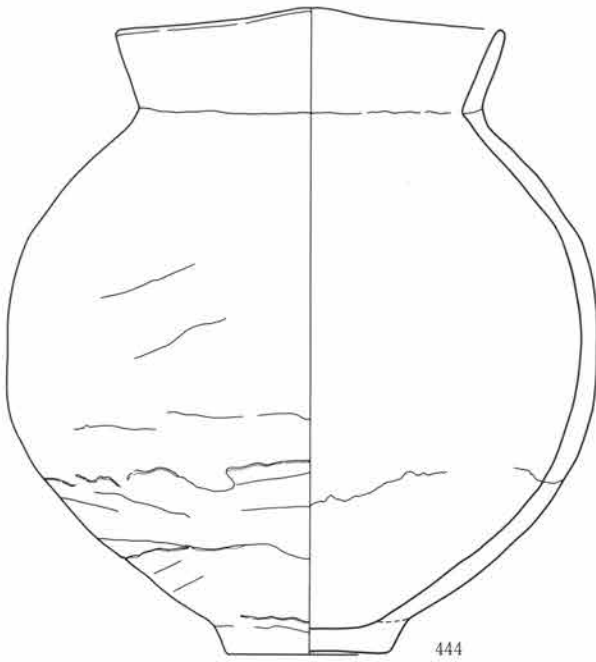
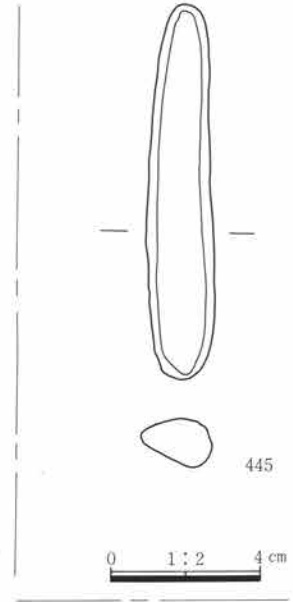
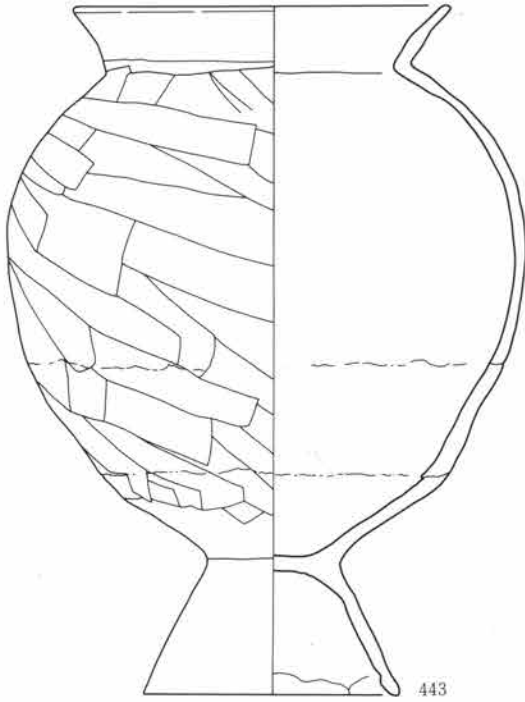
441



442

第217図 7区13号住居跡出土遺物①





第218図 7区13号住居跡出土遺物②



第IV章 発見された遺構と遺物

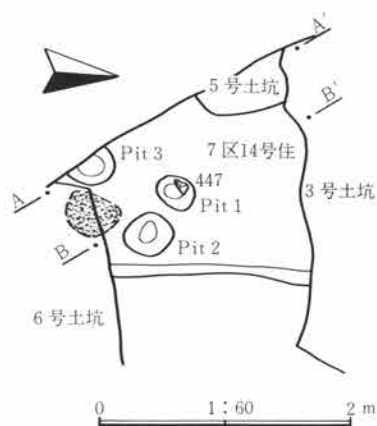
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
441	埴土師器	器高:90mm 口径:104mm 底径:— 体部下半~底部一部欠。	径1~2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。褐色。	口縁部は「く」字状に外湾。丸底。内面:口縁部は横なで後一部篋磨き、体部~底部はなで。外面:口縁部~体部上端は横なで、体部~底部は篋削り。	住居内南東部床上10cm。内外面に油煙付着。
442	埴土師器	器高:193mm 口径:153mm 底径:42mm 最大径:175mm ほぼ完形。	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。球形。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで後縦篋磨き、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで後縦篋磨き、体部上端は篋削り、体部上半は縦篋磨き、体部下半は篋磨きが単位を持ち文様状になっている、体部下端は縦篋磨き。	住居内南東部床直。
443	台付甕土師器	器高:277mm 口径:153mm 脚径:104mm 最大径:209mm ほぼ完形。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。明黄褐色。	口縁部は「く」字状に外湾。脚部は「ハ」字状に開き、脚部下端は折り返し。最大径は体部上半。内面:口縁部は横なで、体部~脚部はなで。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り、脚部はなで。	貯蔵穴内。内外面に多量の油煙付着。
444	甕土師器	器高:259mm 口径:(156mm) 底径:68mm 最大径:238mm 口縁部~底部3/4残。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い赤褐色。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部上半は篋削り後なで、体部下半は篋削り、底部はなで。	住居内中央部床直。内外面に油煙付着。
445	用途不明石製品	長:101mm 幅:18mm 厚:12mm 重:40g	緑色片岩。		住居掘形。
446	薦石	長:145mm 幅:57mm 厚:39mm 重:510g	粗粒安山岩。		住居内中央部床直。

7区14号住居跡

当住居跡は、7区3号土坑・7区6号土坑と重複する。新旧関係は、いずれも当住居跡が古い。

東壁中央のみ遺存しているため、規模・平面形・主軸方位は不明である。残存壁高は6cmと低い。柱穴・周溝は認められない。床面には3基の小ピットがあるが住居に伴うか否かは不明である。規模はピット1が長軸30cm・短軸25cm、ピット2が径36cm、深さはピット1が19cm・ピット2が12cm・ピット3が12cmを測る。

実測可能な遺物は土釜(447)一点のみである。



第219図 7区14号住居跡

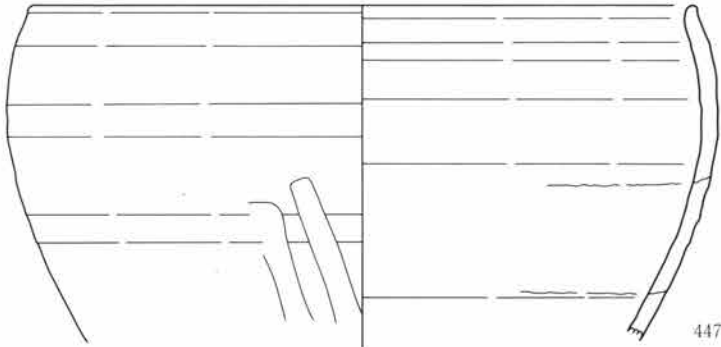
第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区14・15号住)



7区14号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土層：ロームブロック・焼土・灰を含む。

第220図 7区14号住居跡断面図・エレベーション図



第221図 7区14号住居跡出土遺物



番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
447	土釜	器高: [134mm] 口径: (267mm) 1/7残。	細砂～径3mmの礫含む。 普。鈍い橙。	体部上位は内湾する。口縁端部は僅かに直立する。口縁部は横なで。体部内外面は回転なで? 外面下位は篋状工具によるなで。	東壁中央。

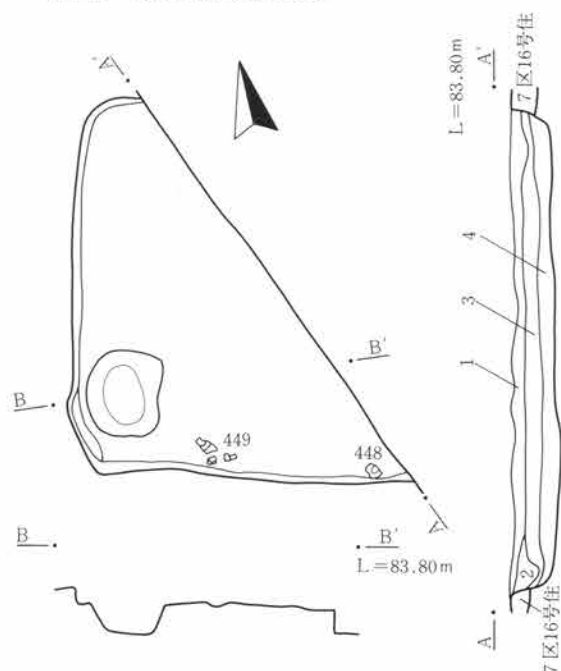
7区15号住居跡

当住居跡は、7区16号住居跡と重複し、7区6号住居跡の東約2.2m、7区19号住居跡の南約1.5mに位置する。新旧関係は、当住居跡の方が新しい。

規模は南北約3.0mを測るが、住居跡の東半分は調査区外のため東西は不明である。平面形・主軸方位は不明。柱穴・周溝は確認されない。北西隅には竈の構築材と推定される焼けた切石が認められた。南西隅の長軸72cm・短軸56cm・深さ26cmの土坑は貯蔵穴の可能性はある。中からは焼けた砂岩の切石片が出土している。

南壁直下から須恵器杯(448)と土師質土器椀(449)が出土している。

第IV章 発見された遺構と遺物

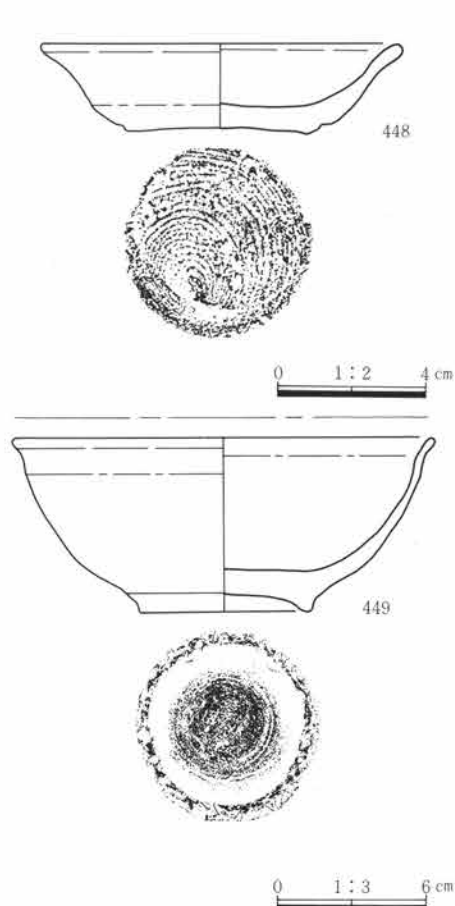


7区15号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土層：軽石を含む。
- 2 黒褐色土層：ローム粒を多く含む。
- 3 灰褐色土層：ローム粒を含む。
- 4 暗褐色土層：ロームブロックを含む。

0 1:60 2 m

第222図 7区15号住居跡



0 1:3 6 cm

第223図 7区15号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
448	杯 須恵器	器高:24mm 口径:98mm 底径:50mm 口縁部一部欠。	細砂～粗砂多く含む。 普。鈍い橙。	口縁部は外反する。底部内面の中央は小さく突き出る。底部外面は右回転糸切り無調整。	南壁中央。
449	椀 土師質土器	器高:70mm 口径:(171mm) 底径:68mm 口縁部～体部2/3欠。	粗砂多く含む。軟質。浅黄。	口縁部は外反する。体部は内湾する。高台貼り付け時に切り放し痕などで消す。	南西隅。

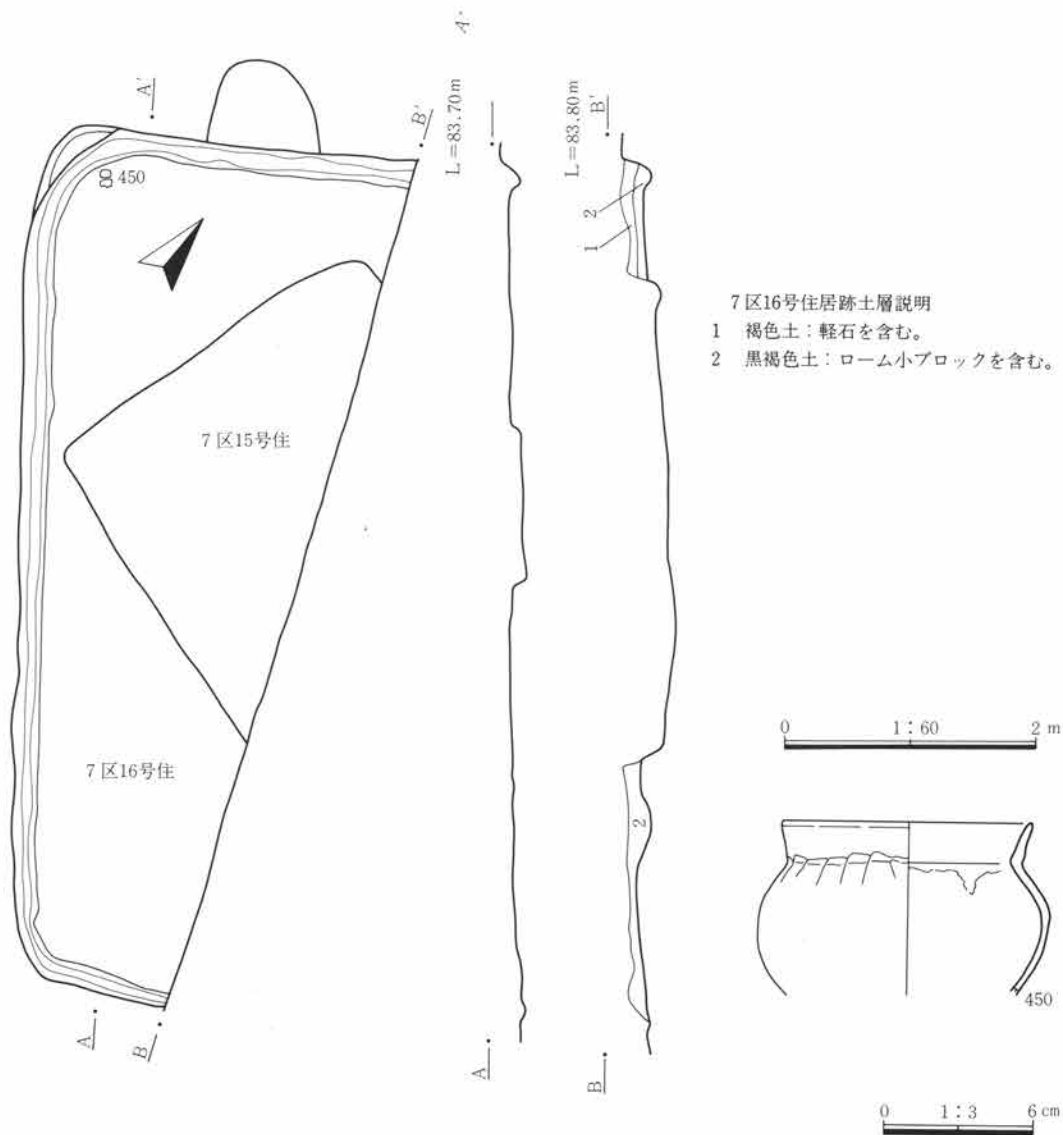
7区16号住居跡

当住居跡は、7区15号住居跡と重複する。新旧関係は、同住居跡の壁・床が当住居跡の中央部の床を破壊して築かれていることから、当住居跡の方が古い。

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区15・16号住)

当住居跡の規模は、東側が調査区域外のために確定できないが、南北約6.8mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。確認面までの壁の立ち上がりは約5～15cmであり、南側の残りが悪い。確認できた部分の床面は硬く、平坦であり、良好な床である。住居検出部分からは、全面的に壁溝が確認できた。規模は、幅約10～15cm・床面からの深さ約5～10cmである。

住居検出範囲からは、炉・支柱穴・貯蔵穴を確認することはできなかった。遺物の出土も非常に少なく、北西隅から土師器の埴が出土しただけである。当住居跡の時期の限定は困難であるが、周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀後半である。



第224図 7区16号住居跡

第225図 7区16号住居跡出土遺物

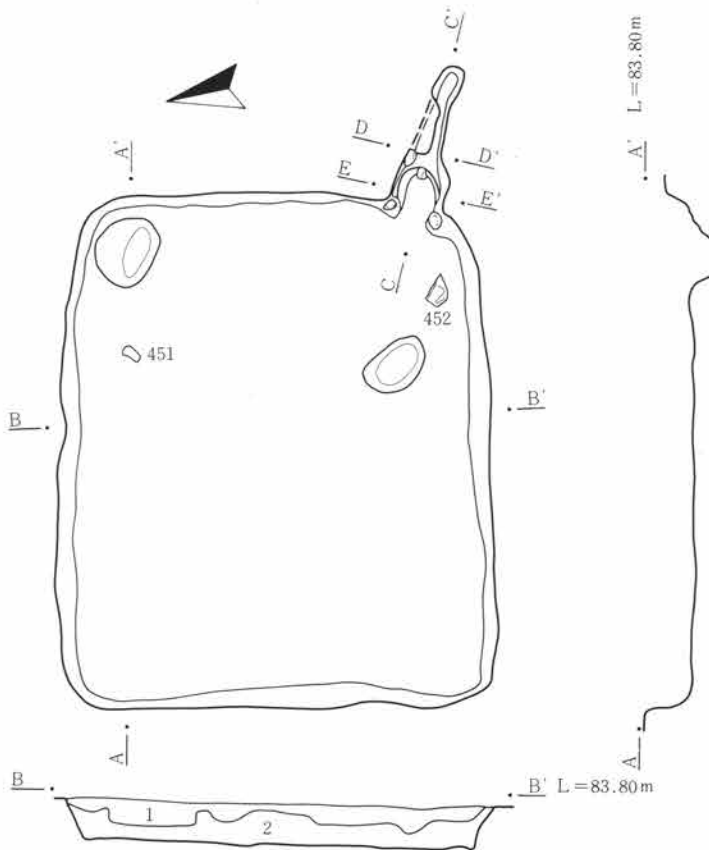
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
450	罎 土師器	器高:[69mm] 口径: 101mm 底径:— 最大 径:118mm 口縁部~体 部3/4残。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。鈍 い黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体 部上半。内面:口縁部は横なで、体部は なで。外面:口縁部は横なで、体部は篋 削り後なで、体部上端は篋削りが残る。	住居内北西部隅床 直。内外面に油煙 付着。

### 7区17号住居跡

当住居跡は、7区12号土坑と重複する。新旧関係は、当住居跡の方が新しい。当住居跡の北約2mに7区18号住居跡・北西約1.5mに7区11号土坑がある。

規模は東西約4.1m・南北約3.4mであり、平面形は東西に長い長方形を呈する。主軸方位はN-103°-Eである。残存壁高は21~40cmを測る。周溝・柱穴は確認されない。北東隅にある長軸58cm・短軸48cm・深さ19cmの土坑は貯蔵穴か。竈前の長軸54cm・短軸35cm・深さ10cmのピットは掘形の可能性がある。

竈は南東隅に構築され、燃焼部は壁外に設けている。煙道は壁外に115cm張り出している。袖は遺存していないが、壁に接して一対の袖石が残っている。  
北東隅からは罎に穿孔を有する甑?(451)が出土している。



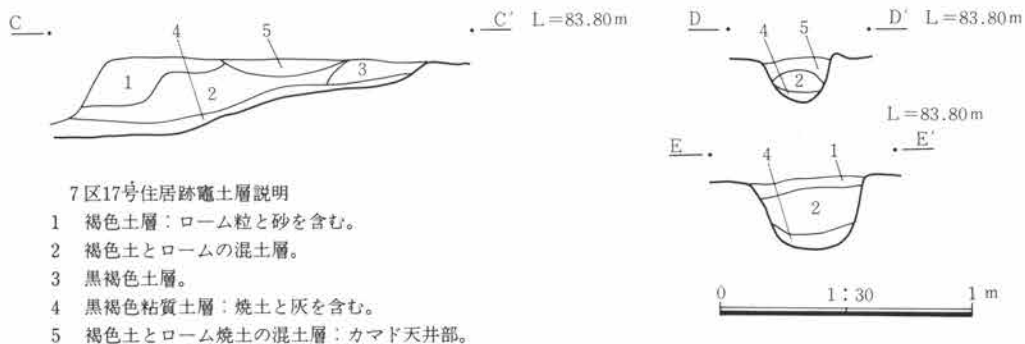
7区17号住居跡土層説明

- 1 褐色土層:ローム粒と砂を含む。
- 2 褐色土層:ローム粒(大)を含む。

0 1:60 2 m

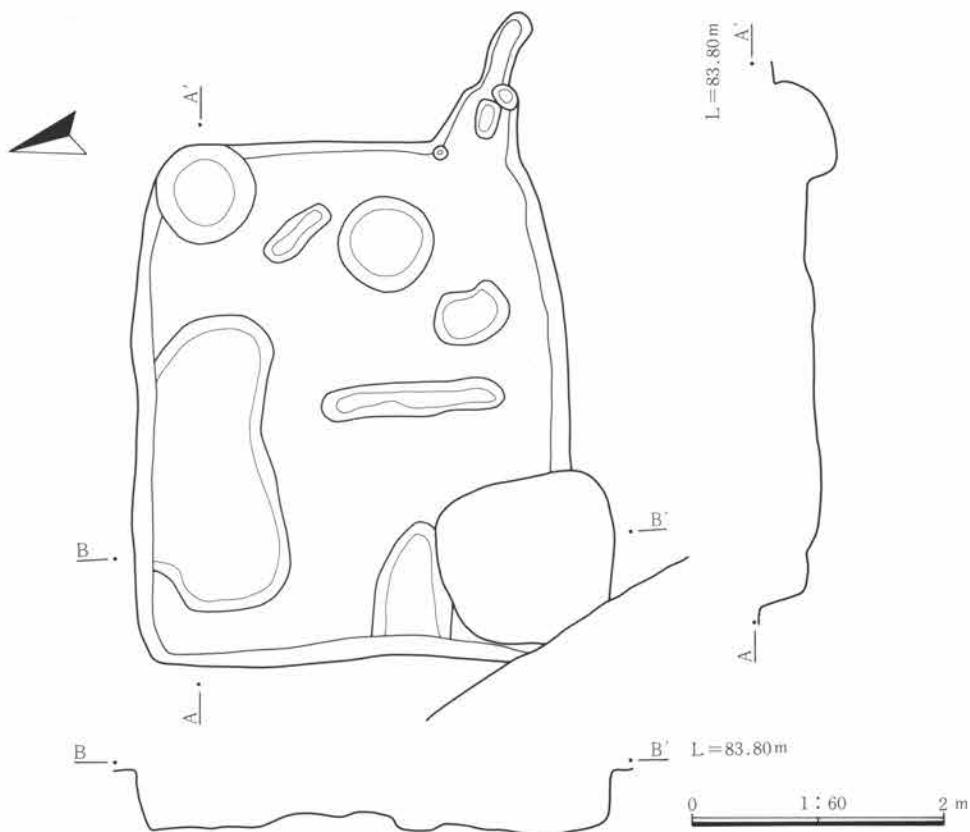
第226図 7区17号住居跡

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区17号住)

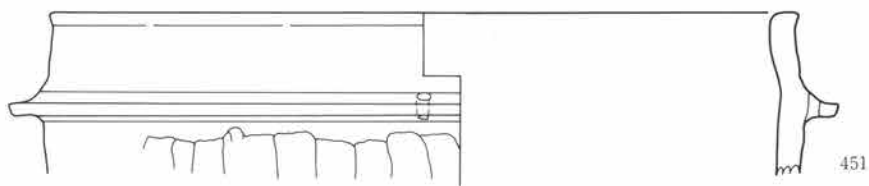


7区17号住居跡竈土層説明

- 1 褐色土層：ローム粒と砂を含む。
- 2 褐色土とロームの混土層。
- 3 黒褐色土層。
- 4 黒褐色粘質土層：焼土と灰を含む。
- 5 褐色土とローム焼土の混土層：カマド天井部。

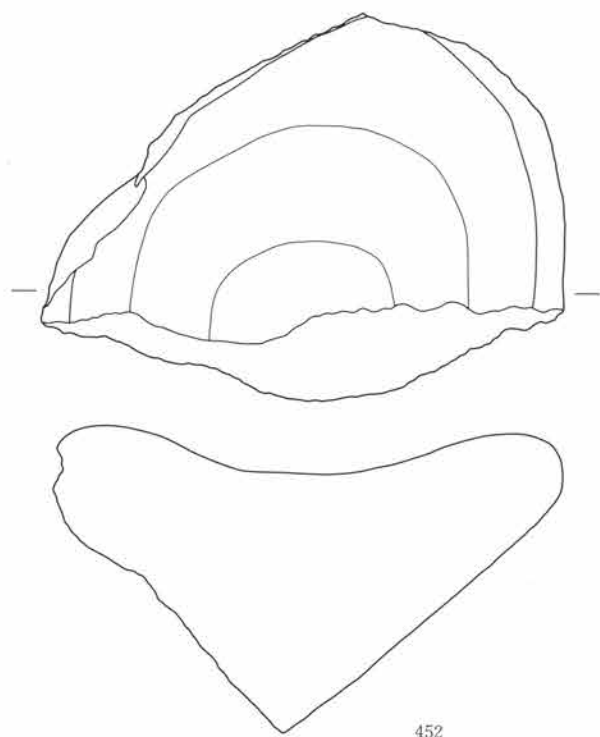


第227図 7区17号住居跡竈断面図、掘形



第228図 7区17号住居跡出土遺物①





第229図 7区17号住居跡出土遺物②

0 1:3 6 cm

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
451	甌?	器高: [65mm] 口径: (302mm) 口縁部小片。	細砂～径2mmの礫含む。 やや軟質。橙。	口縁部は内傾する。鈔は貼り付ける。鈔 には一か所焼成前の穿孔がある。体部 外面は篋削り。	北東隅。
452	用途不明 石製品	重:4220g 下半・左側 面欠。	粗粒安山岩。	表面は皿状を呈する。中央を多用する。	竈前。

### 7区18号住居跡

当住居跡は、他遺構との重複はなく、最も近い8区11号住居跡に1.8m離れている。

東半分が調査区外のため、規模・平面形・主軸方位は不明である。残存壁高は11～18cmを測る。柱穴・周溝は確認されない。南東隅には灰の分布が認められ、東壁南隅に竈が構築されていたと考えられる。

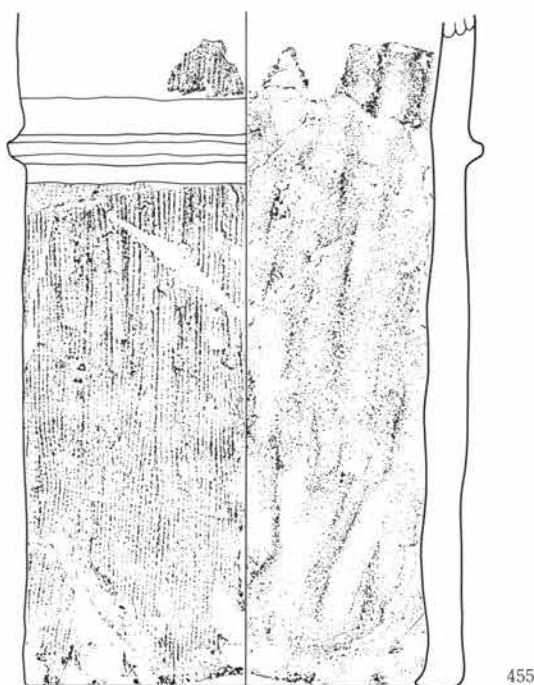
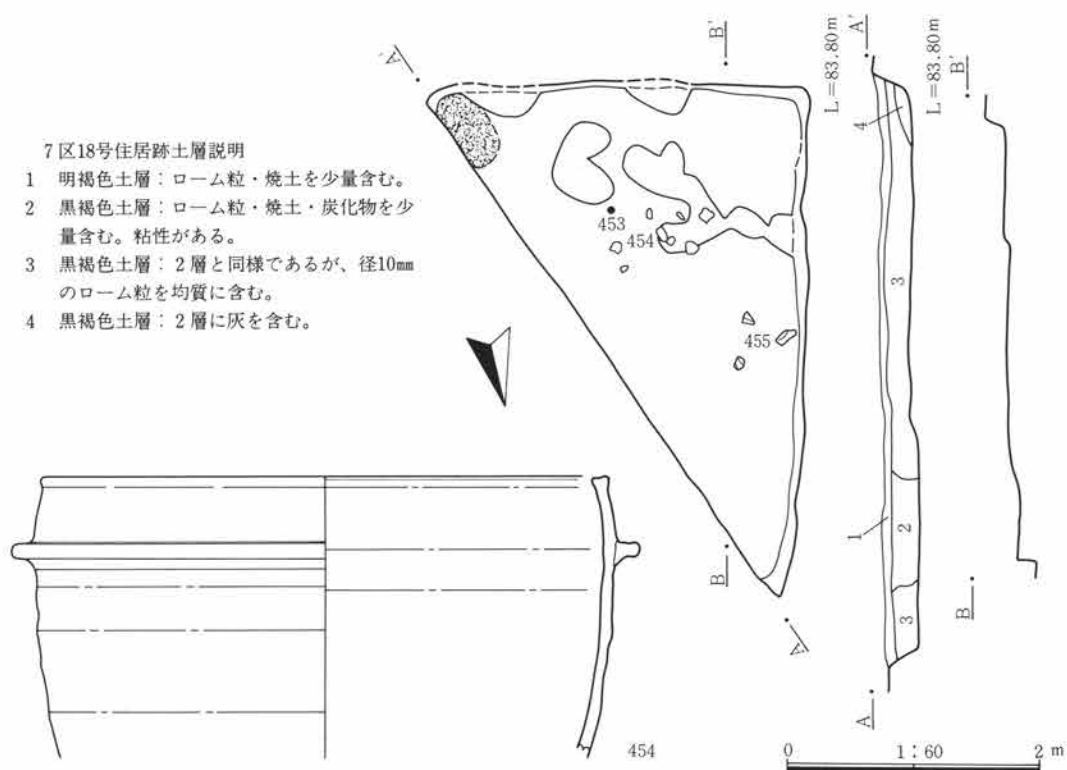
西壁中央からは円筒埴輪(455)、中央南寄りからは須恵器椀(453)と羽釜(454)が出土している。



第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区17・18号住)

7区18号住居跡土層説明

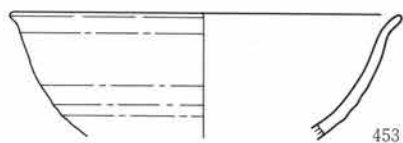
- 1 明褐色土層：ローム粒・焼土を少量含む。
- 2 黒褐色土層：ローム粒・焼土・炭化物を少量含む。粘性がある。
- 3 黒褐色土層：2層と同様であるが、径10mmのローム粒を均質に含む。
- 4 黒褐色土層：2層に灰を含む。



第231図 7区18号住居跡出土遺物

0 1:3 6 cm

第230図 7区18号住居跡



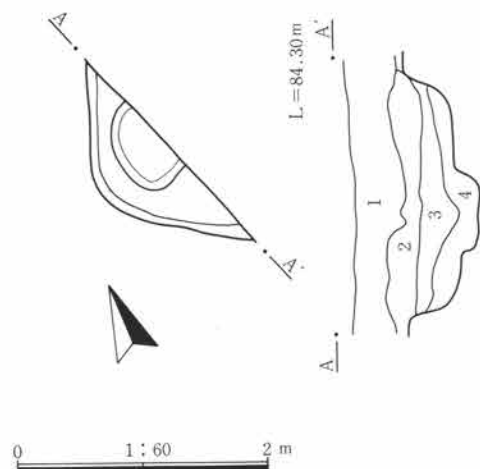
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
453	椀 須恵器	器高:[50mm] 口径: (158mm) 口縁部1/3 残。	細砂～粗砂含む。やや 軟質。黄灰。	口縁部は外反する。体部は内湾する。	掘形。
454	羽釜	器高:[113mm] 口径: (230mm) 小片。	細砂～粗砂多く含む。 普通。鈍い褐色。	全体に薄造りで、調整も丁寧である。	掘形。
455	埴輪 円筒	器高:[270mm] 底径: (175mm) 1/5残。	細砂～粗砂含む。やや 軟質。明赤褐。	内面は縦位なで。基部内面は強く下方 になでつける。外面は縦位刷毛目。	西壁中央。

### 7区19号住居跡

当住居跡は、7区15号住居跡・7区16号住居跡・7区17号住居跡が近接するが、重複は無い。当住居跡は、南西隅部分の検出であり、大部分が調査区域外のために、規模・竈・炉・柱穴・貯蔵穴は不明である。また、検出範囲から壁溝を検出することはできなかった。確認面までの壁の立ち

上がりは約25～30cmである。住居内の南西隅からは、ピットが1基検出できた。径約70cm・床面からの深さ約20cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈すると推定される。このピットを貯蔵穴と考えることも可能である。

当住居跡からは遺物の出土も無く、時期は不明である。



7区19号住居跡土層説明

- 1 耕作土。
- 2 暗褐色土：軽石を含む。
- 3 暗褐色土：ローム粒子を含み、粘性が強い。
- 4 暗褐色土：ロームブロックを含む。

第232図 7区19号住居跡

### 8区1号住居跡

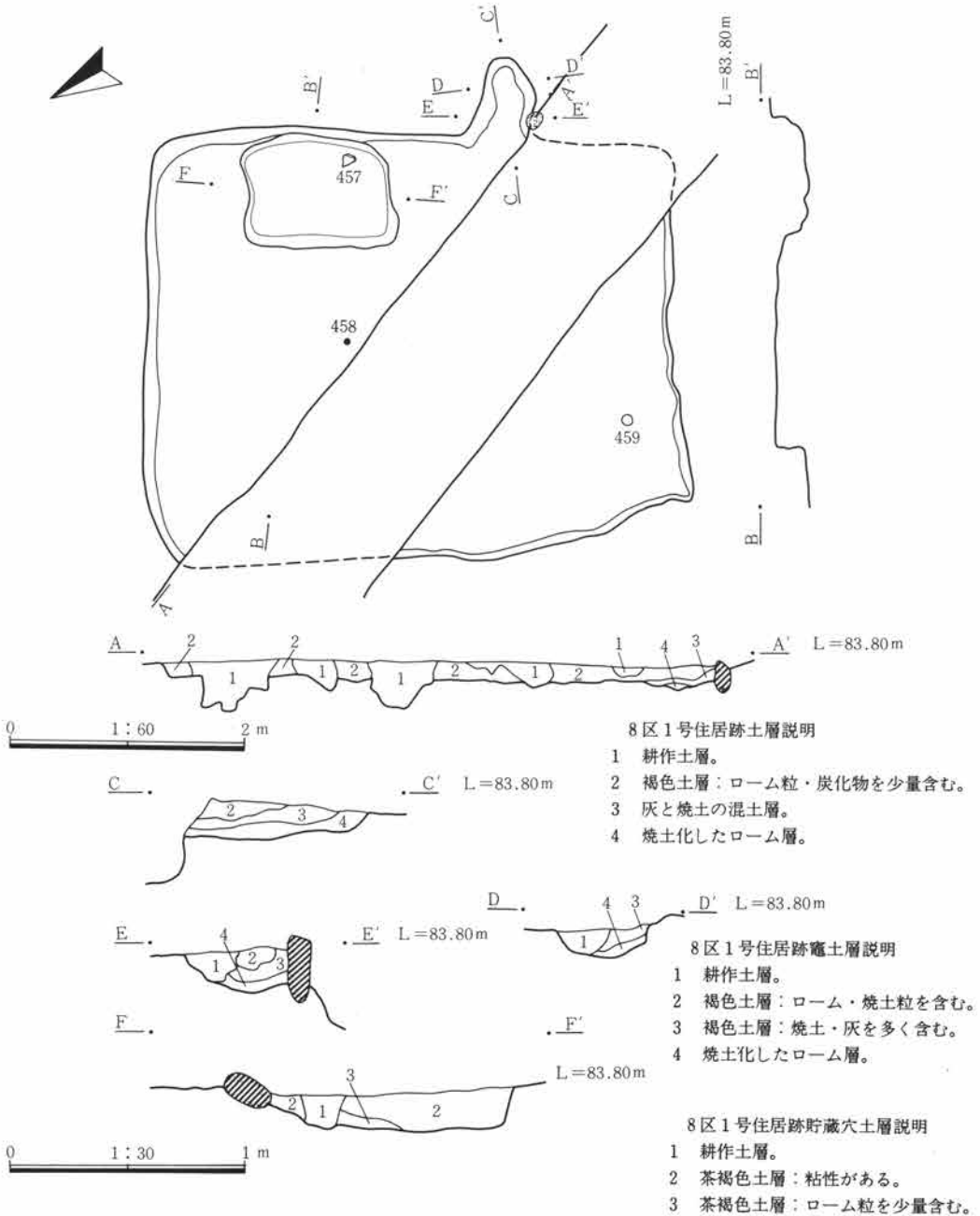
当住居跡は、他遺構との重複はないが、7区1号溝に0.8m、8区11号住居跡に1.2mと近接する。規模は東西約3.6m・南北約4.5mであり、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-121°-Eである。住居跡中央は調査年度が異なるため調査できなかった。残存壁高は13～16cmを測る。柱穴・周溝は確認されない。

竈は東壁南寄りに構築され、燃烧部は壁外に設けている。煙道は壁外に69cm張り出している。竈南壁には袖石と考えられる河原石が遺存している。

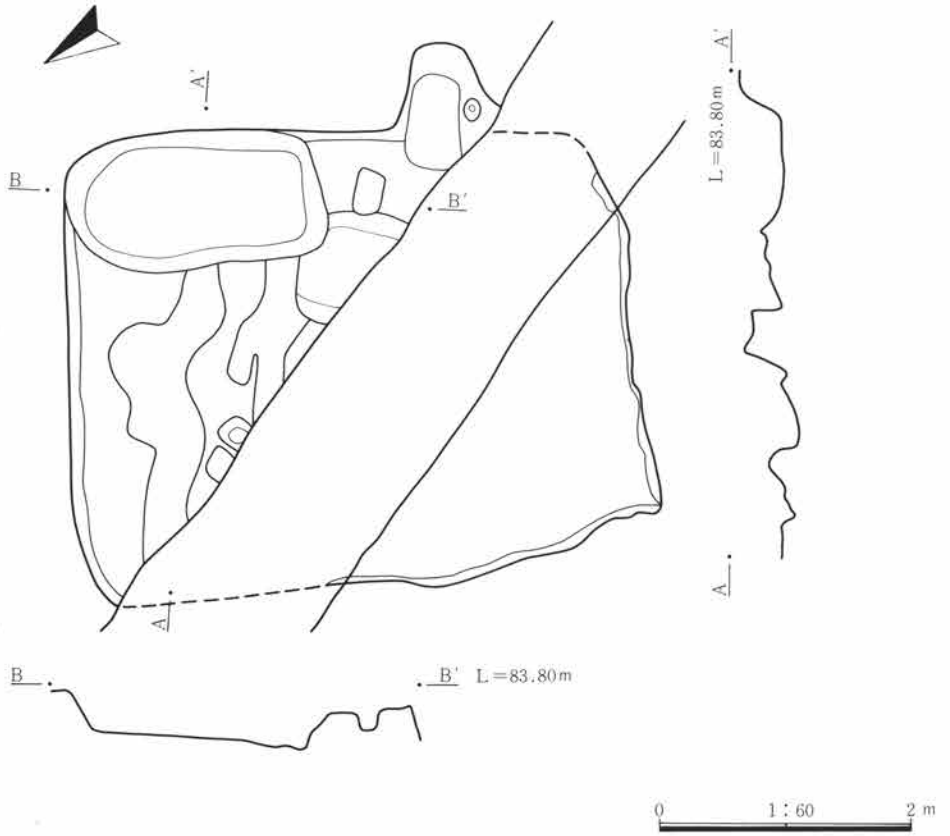
第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区18・19号住・8区1号住)

北東隅には長辺122cm・短辺94cm・深さ14cmを測る長方形土坑がある。貯蔵穴とするには位置的にやや問題があるが、住居と軸を同じくするため、本住居に伴うと考えられる。

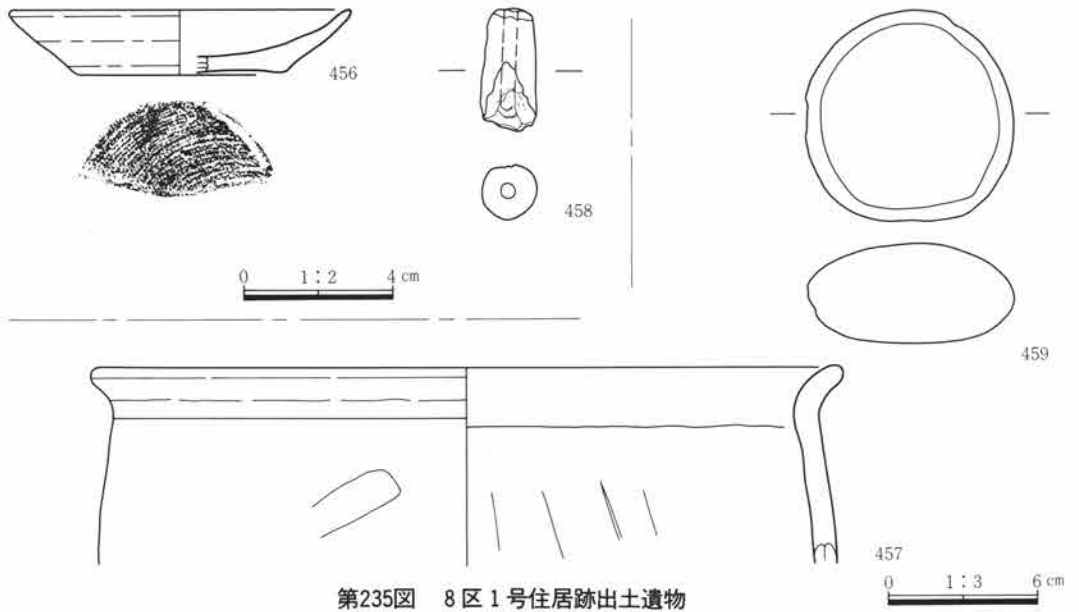
遺物は貯蔵穴様の土坑から土釜(457)、覆土から土師質土器皿(456)が出土している。掘形は北壁付近を溝状に掘り込んでいる。また、北東隅・竈前には床下土坑がある。



第233図 8区1号住居跡



第234図 8区1号住居跡掘形



第235図 8区1号住居跡出土遺物

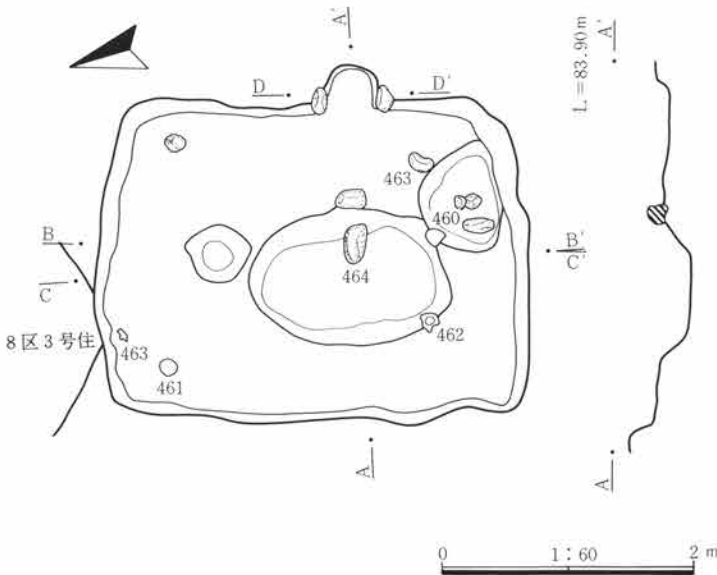
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
456	皿 土師質土器	器高:17mm 口径:(92mm) 底径:(56mm) 1/3残。	細砂～粗砂少量含む。やや軟質。鈍い橙。	口縁部は直線的に開く。底部右回転糸切り無調整。	中央。器壁は摩滅する。
457	土 釜	器高:[79mm] 口径:(304mm) 小片。	細砂～径2mmの礫含む。普。黒褐～明赤褐。	口縁部は外反する。口縁部は横なで。体内内外面はなで。	北東隅。
458	土 錘	長さ:[33mm] 最大径:14mm 孔径:3mm 1/3欠。	細砂含む。やや軟質。鈍い橙。	小口は篋切りの後なで。外面はなで。	中央。
459	用途不明 石製品	長:85mm 幅:84mm 厚:39mm 重:420g 完形。	粗粒安山岩。	川原石を使用する。表面僅かに使用か?	西南隅。

### 8区2号住居跡

当住居跡は、8区3号住居跡と重複し、8区5A号住居跡に20cm、8区5B号住居跡に60cmと近接する。新旧関係は、当住居跡の方が新しい。

規模は東西約2.5m・南北約3.4mであり、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-105°-Eである。残存壁高は14~20cmを測る。柱穴・周溝は確認されない。住居内の土坑・ピットはすべて床下土坑である。

竈は東壁南寄りに構築され、燃烧部は壁外に設けている。煙道は壁外に30cm張り出している。

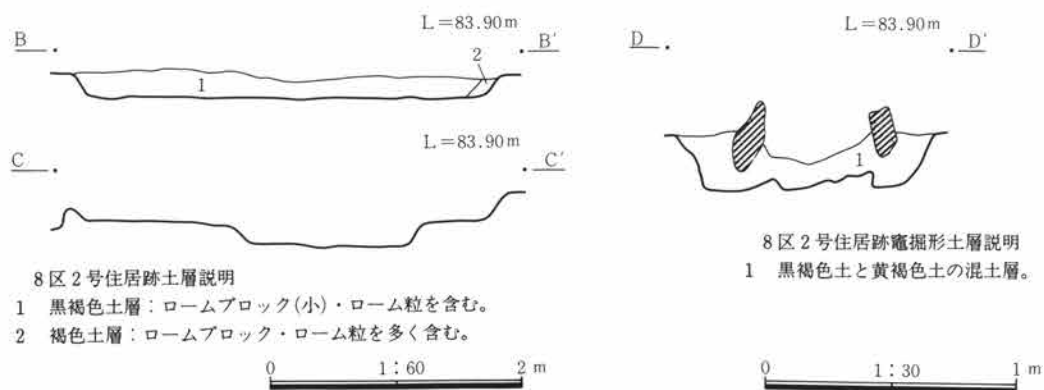


住居の壁と竈の境には、一對の袖石が遺存している。

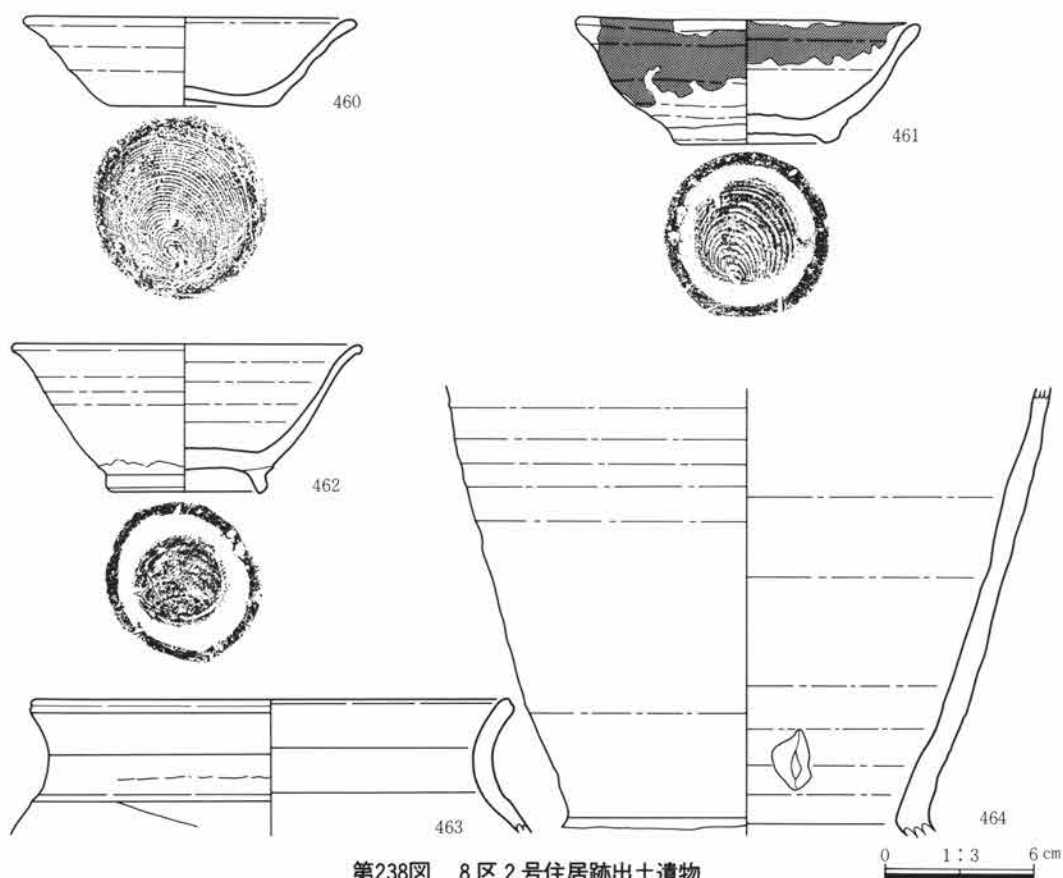
遺物は住居内全体から出土しており、集中する部分はない。当住居からは、須恵器杯(460)・椀(461・462)、甑(464)等が出土している。

第236図 8区2号住居跡

第四章 発見された遺構と遺物



第237図 8区2号住居跡断面図・エレベーション図、竈断面図



第238図 8区2号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
460	杯 須恵器	器高:45mm 口径:134mm 底径:64mm 完形。	細砂～径3mmの礫少量含む。普。灰白～淡橙。	口縁部は外湾する。底部は右回転糸切り無調整。	南東隅。

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
461	椀 須恵器	器高:51mm 口径:140mm 底径:58mm 完形。	細砂～径3mmの礫多く含む。普。還元。灰黄。	体部は内湾する。口縁部は外反する。底部は右回転糸切りの後、高台を貼り付ける。	北西隅。煤付着。
462	椀 須恵器	器高:59mm 口径:(141mm) 底径:54mm 口縁部2/3欠。	細砂～径2mmの礫含む。普。灰白。	口縁部は外反する。体部は緩く内湾する。底部は右回転糸切りの後、高台を貼り付ける。	南西隅。
463	甕 土師器	器高:[54mm] 口径:(196mm) 1/4残。	細砂～粗砂含む。赤色粘土粒子含む。普。鈍い橙。	口縁部は「コ」の字状を呈する。口縁部の器壁は厚い。口縁部は横なで。体部内面は篋状工具によるなで、外面は篋削り。	北西隅～南東隅。
464	甕	器高:[180mm] 1/3残。	細砂～径3mmの礫含む。普。灰白～鈍い橙。	体部は直線的に延びる。内外面は回転なで。体部下位のくぼみ一か所残存する。	北東隅～中央。

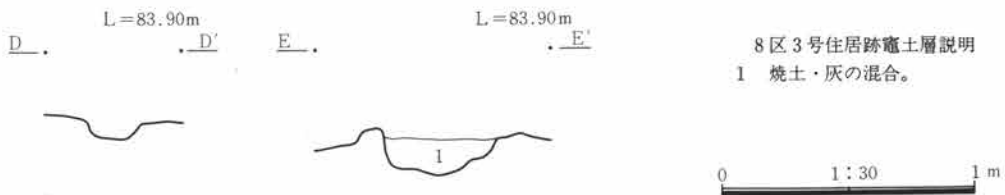
### 8区3号住居跡

当住居跡は、8区2号住居跡と重複する。新旧関係は、直接的に把握することはできなかったが、出土遺物から当住居跡の方が古い。

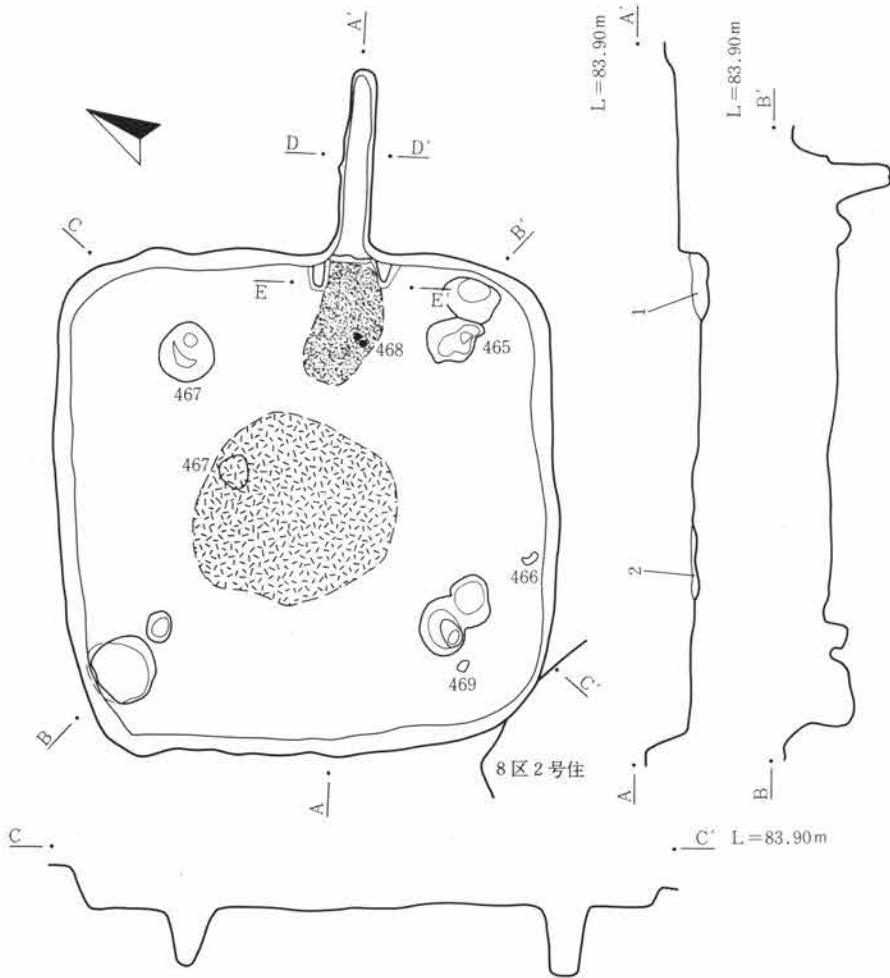
当住居跡の規模は、一辺約4.0mであり、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-62°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約20～35cmであり、残存状態は比較的良好である。床面は、竈周辺を中心に硬く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

竈は、東側壁中央やや南よりに築かれている。袖は、大部分が破壊されており、基部のみの検出である。煙道部の壁外への張り出しは約145cmを測り、長い煙道である。燃烧部からは、厚さ約15cmの焼土・灰の堆積を確認することができた。支柱穴は4基である。規模は、長軸約20～50cm・短軸約15～40cm・床面からの深さ約20～60cmであり、平面形は不整形な楕円形ないしは不定形を呈する。南側の柱穴は、ピットが2基重なっており、住居の立て替えが推定される。貯蔵穴と考えられるピットは北西隅から検出できた。規模は、直径約50cm・床面からの深さ約20cmであり、平面形は不整形な円形を呈する。

遺物は、土師器の甕、須恵器の杯・蓋などが出土している。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は6世紀後半である。



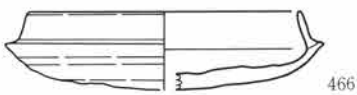
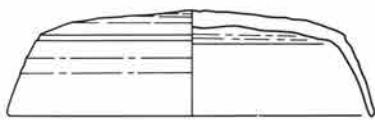
第239図 8区3号住居跡竈断面図・エレベーション図



8区3号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土：ローム小ブロック・焼土ブロックを含む。
- 2 炭化物。

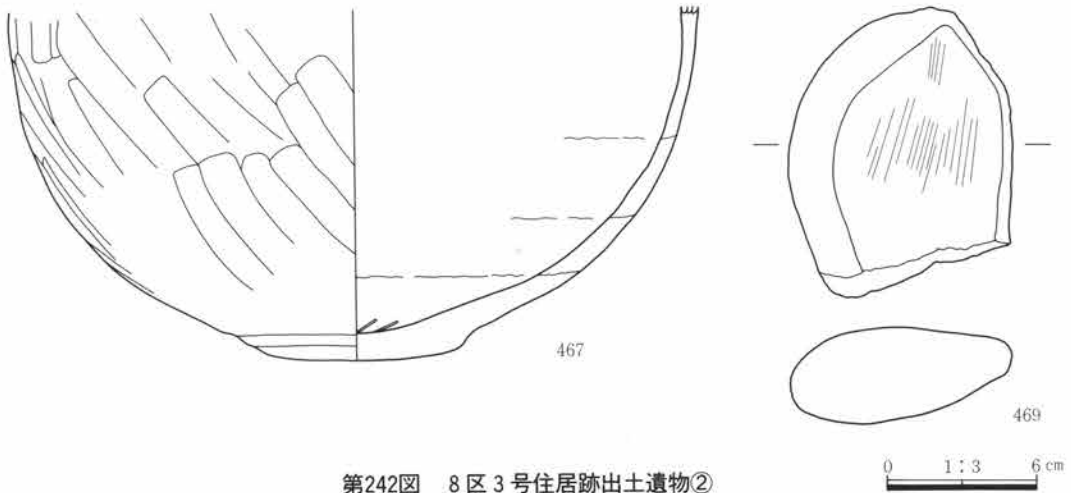
第240図 8区3号住居跡



第241図 8区3号住居跡出土遺物①







第242図 8区3号住居跡出土遺物②

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
465	蓋 須恵器	器高:42mm 口径:148mm 天井部径:123mm 天井部~口縁部3/4残。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。還元。灰。	天井部下端に沈線一条。体部~口縁部は僅かに内湾しつつ広がる。内面:天井部は指なで、天井部下端~口縁部は回転なで。外面:天井部は回転斲削り、体部~口縁部は回転なで。	南東部柱穴内。
466	杯 須恵器	器高:[31mm] 口径:(110mm) 底径:— 最大径:(128mm) 口縁部~底部1/3残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや硬質。還元。灰。	口縁部はやや内傾する。受部はほぼ水平。平底に近い丸底。内面:口縁部~体部は回転なで、底部はなで。外面:口縁部~受部は回転なで、体部~底部は回転斲削り。	南壁やや西寄り脇床直。
467	甕 土師器	器高:[141mm] 口径:— 底径:92mm 体部下半~底部2/3残。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い黄橙。	底部は円盤状。内面:体部下半~底部はなで。外面:体部下半は斲削り。	住居内中央部床直他。内外面に油煙付着。
468	甕 土師器	器高:[42mm] 口径:— 底径:(67mm) 体部下端~底部2/5残。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。やや硬質。酸化。鈍い橙。	底部に木葉痕。内面:体部下端~底部はなで。外面:体部下端は斲削り。	竈前床直。内外面に油煙付着。
469	用途不明 石製品	長:[116mm] 幅:90mm 厚:41mm 重:580g	粗粒安山岩。	2面擦られている。	住居内南西部隅床直。

8区4号住居跡

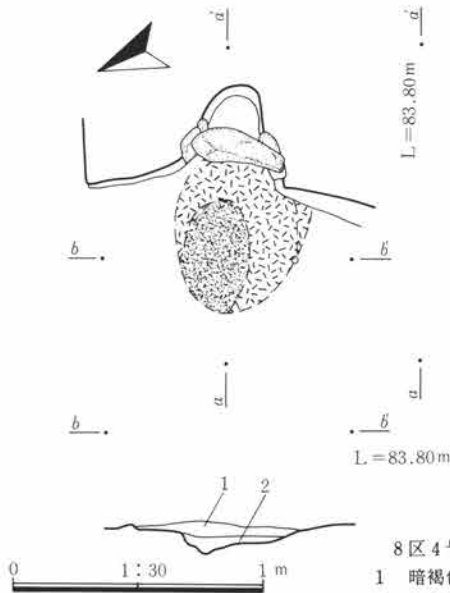
当住居跡は、他遺構との重複はないが、確認部分で8区5号住居跡の東2.0mに位置しており、8区5号住居跡と近接もしくは重複していたと考えられる。

規模は東西約2.4m・南北約3.5mであり、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-109°-Eである。残存壁高は14~25cmを測る。柱穴・周溝は確認されない。北壁中央に長軸84cm・短軸61cm・深さ36cmの土坑が確認されているが、床下土坑の可能性が高い。

竈は東壁中央とその南の2基が構築されている。両者の新旧関係は不明である。中央の竈は燃焼

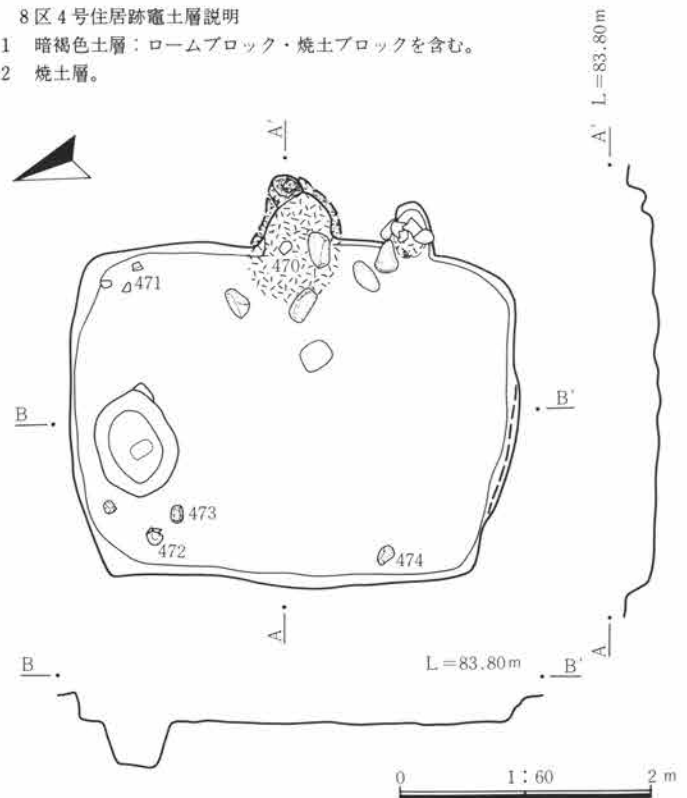
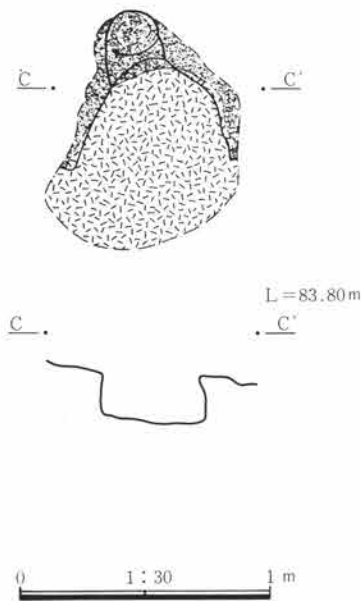
部を壁外に設け、煙道は壁外に55cm張り出している。煙道はやや北に偏しており、天井部が一部遺存している。南側の竈は燃焼部を壁外に設け、煙道は壁外に39cm張り出している。竈前は焼土化が著しく、本竈が新しい可能性がある。燃焼部には天井石が遺存している。

竈内からは土師質土器皿(470)、北東隅・北西隅からは須恵器杯(472)、土師質土器皿(471)が出土している。住居跡中央出土の遺物は少ない。



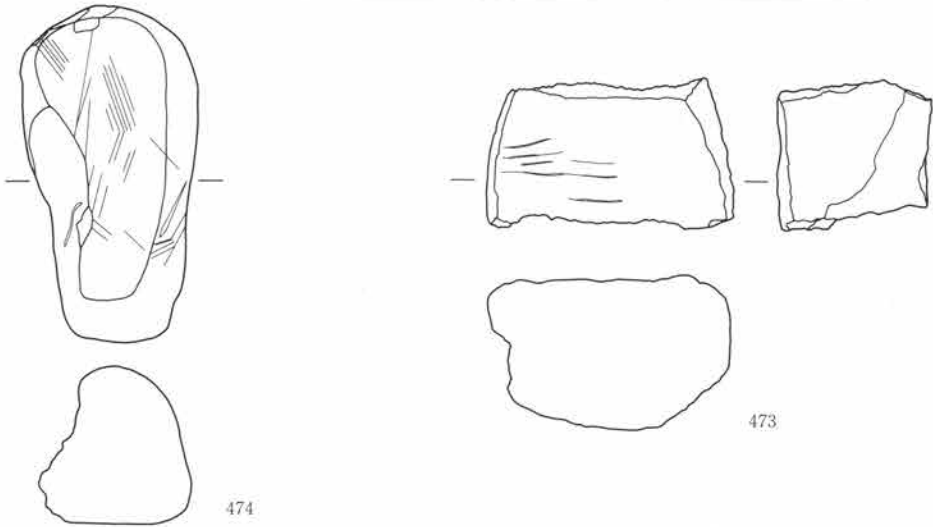
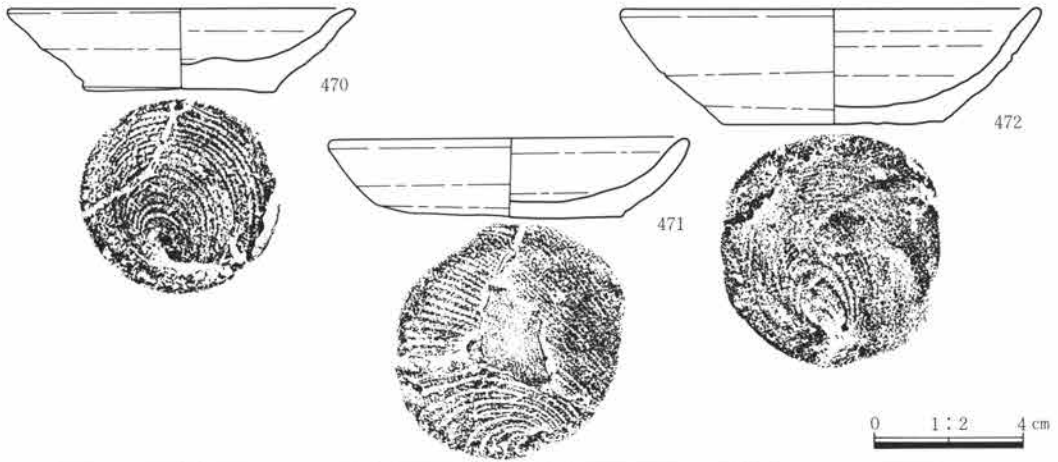
8区4号住居跡竈土層説明

- 1 暗褐色土層：ロームブロック・焼土ブロックを含む。
- 2 焼土層。



第243図 8区4号住居跡

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(8区4号住)



第244図 8区4号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
470	皿 土師質土器	器高:22mm 口径:(94mm) 底径:51mm 口縁部1/2欠。	細砂～径1mmの粗砂含む。やや軟質。淡黄。	口縁部は直線的に開く。底部外面は右回転糸切り無調整。	竈。
471	皿 土師質土器	器高:21mm 口径:98mm 底径:65mm 一部欠。	細砂～粗砂含む。径4mmの礫一つ含む。浅黄橙。	体部は内湾する。底部外面は左回転糸切り無調整。	北東隅。
472	杯 須恵器	器高:31mm 口径:109～116mm 底径:60mm 完形。	細砂～粗砂含む。弱く発泡した黒色粒含む。灰白。	体部緩く内湾する。底部外面右回転糸切り無調整。	北西隅。焼け歪み有り。

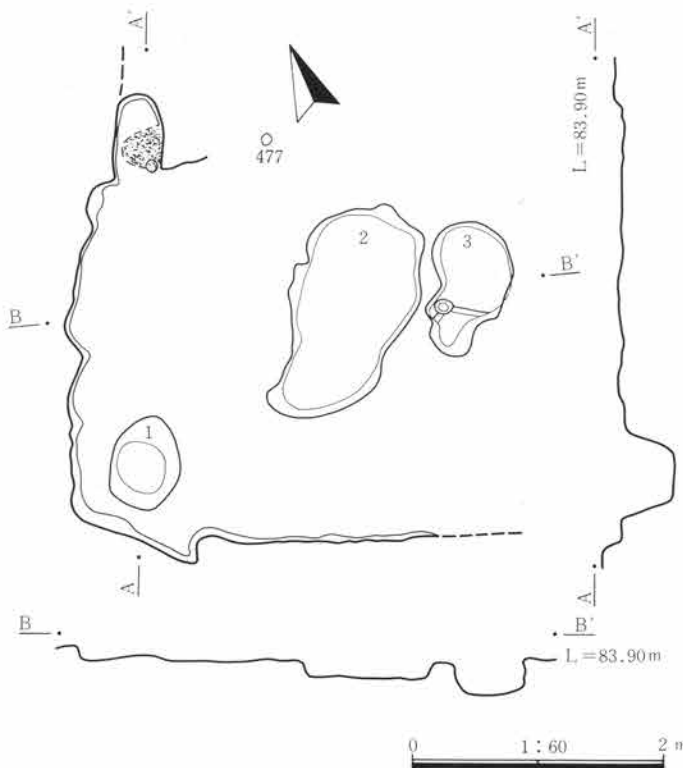
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
473	用途不明 石製品	長:[55mm] 幅:100mm 厚:60mm 重:600g	粗粒安山岩。	川原石を使用。表面のみ僅かに使用する。	北西隅。
474	用途不明 石製品	長:135mm 幅:72mm 厚:63mm 重:800g	粗粒安山岩。	川原石を使用。表・裏面を使用する。浅い条線が残る。	南西隅。

8区5号住居跡

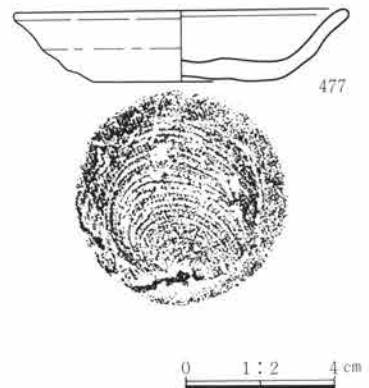
当住居跡は、他遺構との重複はないが、確認部分で8区4号住居跡の西2.0mに位置するため、本来は重複もしくは近接していたと考えられる。

住居跡は南と西壁のみの確認であるため、規模・平面形・主軸方位は不明である。残存壁高は4～15cmを測る。柱穴・周溝は確認されない。床面では3基の土坑が確認されているが、本住居に伴うか否かは不明である。規模は1が長軸74cm・短軸56cm・深さ43cm、2が長軸183cm・短軸74cm・深さ15cm、3が長軸108cm・短軸42cm・深さ29cmである。

竈は遺存していない。住居の残存状態が悪いため、遺物はほとんど残っていない。図示した須恵器杯(477)も位置的に当住居跡に伴うとは言い切れない。



第245図 8区5号住居跡



第246図 8区5号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
477	杯 須恵器	器高:18mm 口径:90mm 底径:55mm 完形。	細砂を含む。やや軟質。 純い橙。	口縁部は外反する。	覆土。

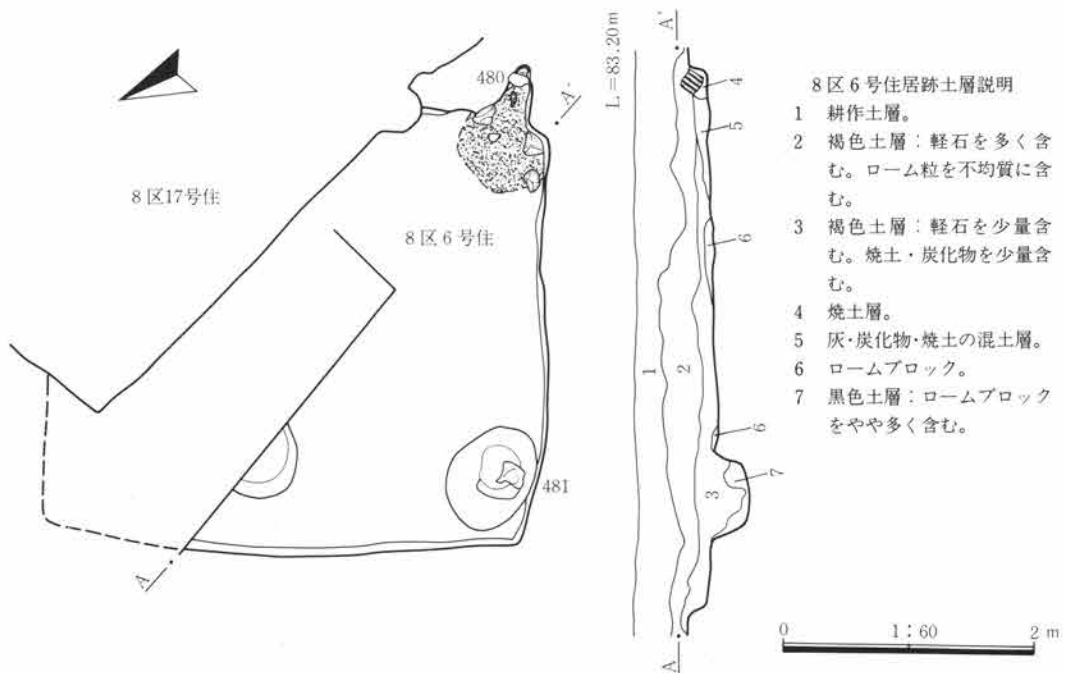
### 8区6号住居跡

当住居跡は、8区17号住居跡と重複し、8区7号住居跡に20cm・確認部分で9区3号住居跡に1.5mと近接する。新旧関係は、当住居跡の方が新しい。

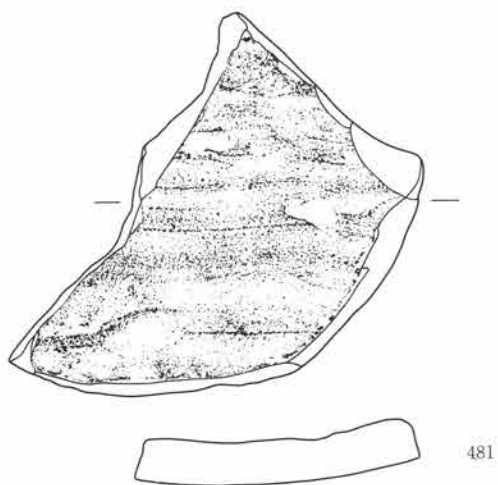
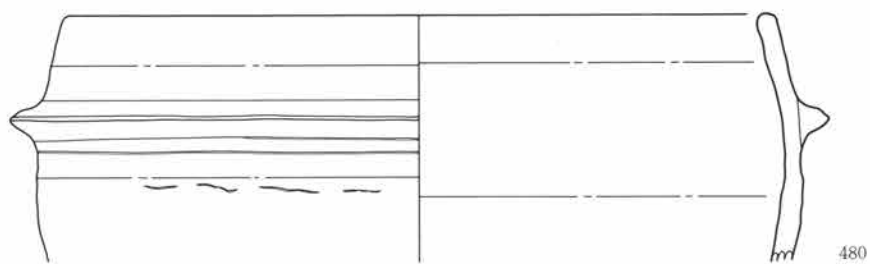
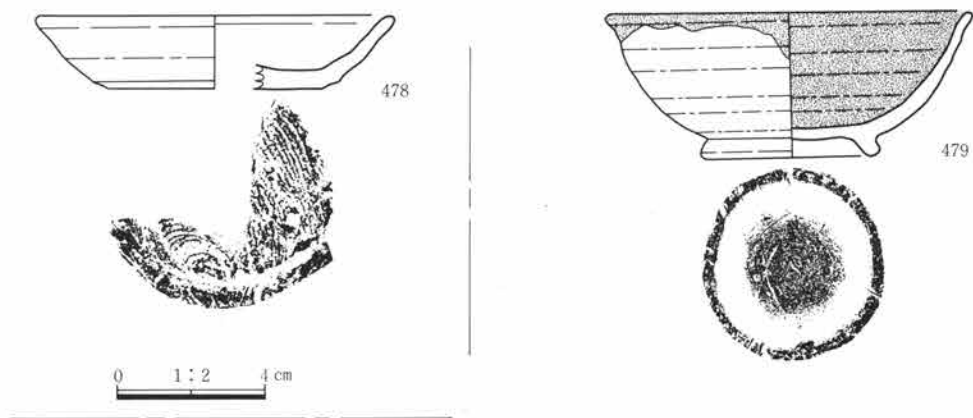
調査区の境に位置しているため、北西隅から中央部は確認できなかった。規模は東西約3.5mを測るが、南北は不明である。平面形は南北に長い長方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-121°-Eである。残存壁高は16~25cmを測る。柱穴・周溝は確認されない。

竈は東壁南隅に構築され、燃烧部は住居の壁付近に設ける。煙道は壁外に43cm張り出す。燃烧部には、河原石を使用した支脚が遺存している。竈内からは、羽釜(480)が出土している。

貯蔵穴は南西隅に位置し、長軸90cm・短軸70cm・深さ30cmを測る。



第247図 8区6号住居跡



第248図 8区6号住居跡出土遺物

0 1:3 6 cm

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
478	杯 須恵器	器高:20mm 口径:(96mm) 底径:59mm 1/2残。	細砂～径2mmの礫含む。やや硬質。明褐色。	口縁端部は僅かに外反する。底部外面は右回転糸切り無調整。	竈。
479	椀 土師質土器	器高:58mm 口径:149mm 底径:67mm 口縁部1/4欠。	細砂～粗砂含む。径3mmの礫少量含む。鈍い黄橙。内面は黒。	口縁端部は外反する。体部は内湾する。内面は篋磨き。高台は貼り付け時に切り放し痕まで消す。	覆土。
480	羽釜	器高:[99mm] 口径:(286mm) 小片。	細砂を含む。粗砂を少量含む。普。灰褐色。	口縁部は内傾する。鈎は貼り付ける。口縁部は回転横なで。体部は回転なで。	竈。
481	甕 須恵器	小片。	細砂～粗砂を少量含む。やや硬質。黄灰。	内面はなで。紐造り痕残る。外面は丁寧ななで。	貯蔵穴。

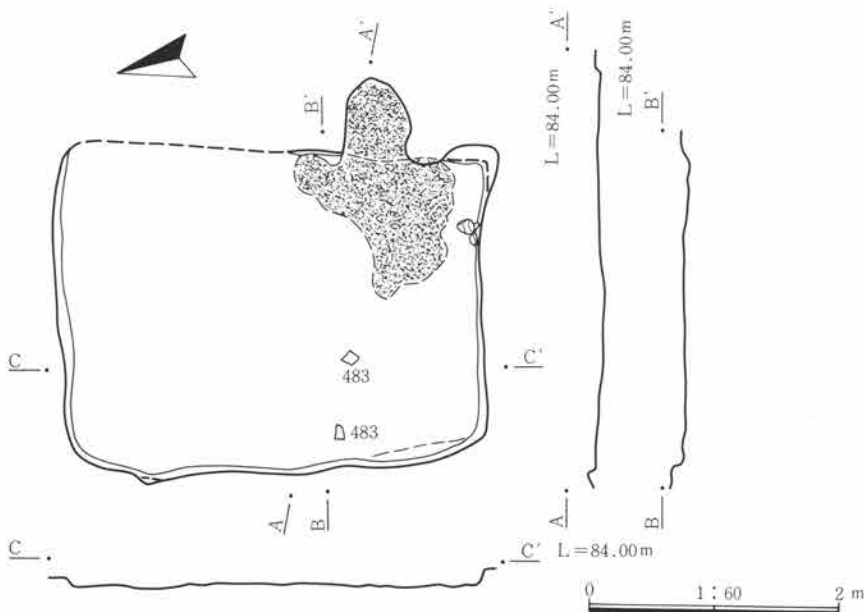
### 8区7号住居跡

当住居跡は、他遺構との重複はないが、8区6号住居跡に20cmと近接する。

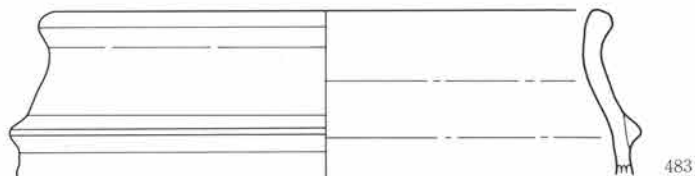
東壁北半は壁が遺存していない。規模は東西約2.6m・南北約3.3mであり、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-110°-Eである。残存壁高は3～31cmを測る。柱穴・周溝は確認されない。

竈は東壁南隅に構築されており、燃烧部は壁外に設けている。煙道は壁外に61cm張り出している。竈前には焼土と炭化物が広く分布している。

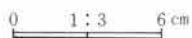
遺物は少なく、図示できたものは羽釜(483)のみである。



第249図 8区7号住居跡



第250図 8区7号住居跡出土遺物



番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
483	羽釜	器高: [66mm] 口径: (232mm) 小片。	細砂～径1mmの粗砂含む。普。橙～鈍い橙。	口縁部は内傾し、端部は外反する。口縁部は回転横などで。鏝は貼り付け。	南西隅。

### 8区11号住居跡

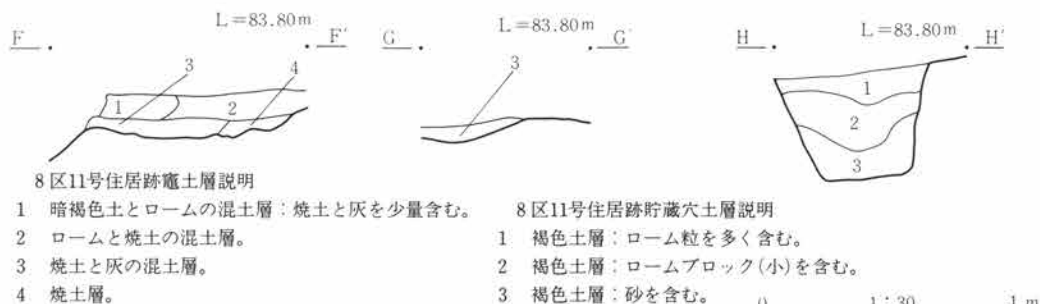
当住居跡は、他遺構との重複はないが、8区1号住居跡に1.2m、8区6号住居跡に50cm、8区12号住居跡に80cmと近接する。

住居跡東半は調査区外のため、東西の規模は不明である。南北は3.6mを測る。平面形は長方形である。主軸方位はN-116°-Eである。残存壁高は8～25cmである。柱穴は確認されない。周溝は竈部分を除いて全周する。貼り床はなく、ローム層をつき固めて床としている。中央部は特に硬く締まっている。竈北西に位置する深さ17cmの土坑は、床下土坑と考えられる。竈は東壁南隅に構築され、燃焼部は壁外に設ける。確認部分において、煙道は26cm壁外に張り出している。竈の前面には、灰と焼土が分布している。

貯蔵穴は南西隅に位置し、径約60cm・深さ33cmの円形を呈する。貯蔵穴からは遺物は出土していない。

遺物の出土量は少ない。竈内からは土釜（485）が出土している。

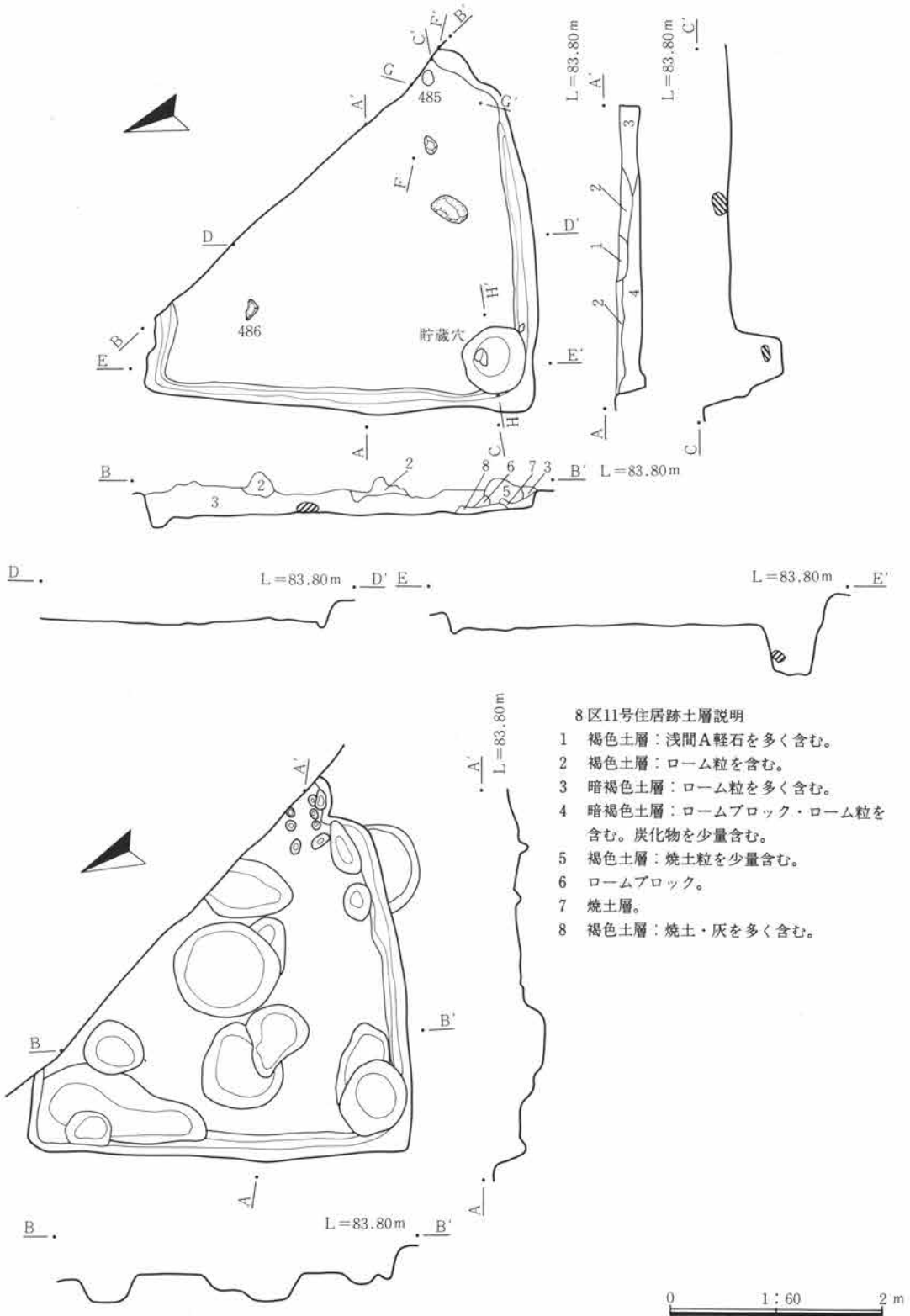
掘形は定形的なものではなく、床下土坑を不規則に配置する。



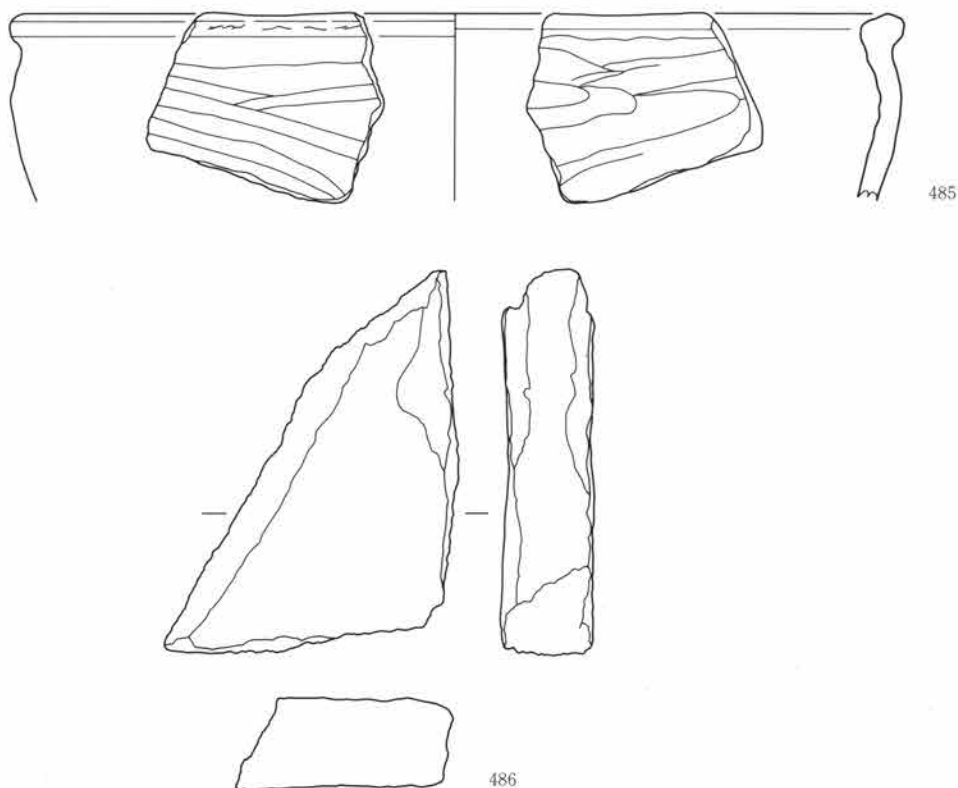
第251図 8区11号住居跡竈断面図、貯蔵穴断面図







第252図 8区11号住居跡・同掘形



第253図 8区11号住居跡出土遺物

0 1:3 6 cm

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
485	土釜	器高: [74mm] 口径: (350mm) 小片。	細砂～径3mmの礫多く 含む。やや軟質。鈍い 橙。	口縁部は外反する。端部は平坦に造る。	南東隅。
486	砥石	厚:36mm 重:760g	緑色片岩。	表面を使用。	北西隅。

### 8区12号住居跡

当住居跡は、7区1号溝・8区13号住居跡と重複し、8区11号住居跡に70cmと近接する。新旧関係は、7区1号溝より古いが、8区13号住居跡との関係は不明である。

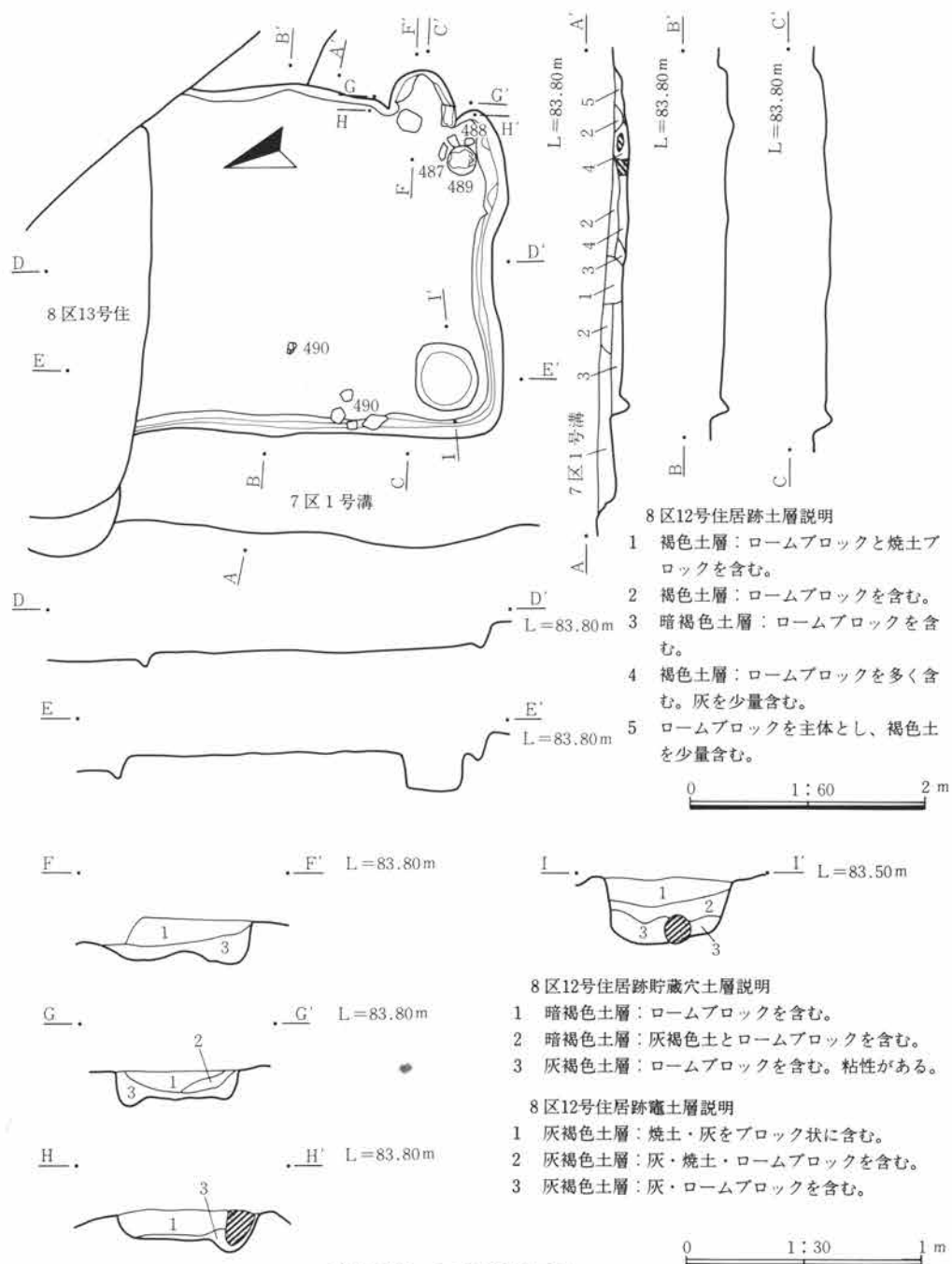
規模は東西2.9mを測るが、南北は不明である。主軸方位はN-113°-Eである。残存壁高は5～18cmを測る。柱穴は確認されない。周溝は南壁と西壁に巡る。床面には深さ7cmの小ピットが検出されている。

竈は東壁南隅に構築され、燃烧部は壁外に設ける。南側のみ自然石を利用した袖石が遺存している。北側の小ピットは袖石の抜き取り穴ではなく、攪乱である。煙道は壁外に38cm張り出している。貯蔵穴は南西隅に築かれている。規模は、長軸約60cm・短軸約52cmであり、床面からの深

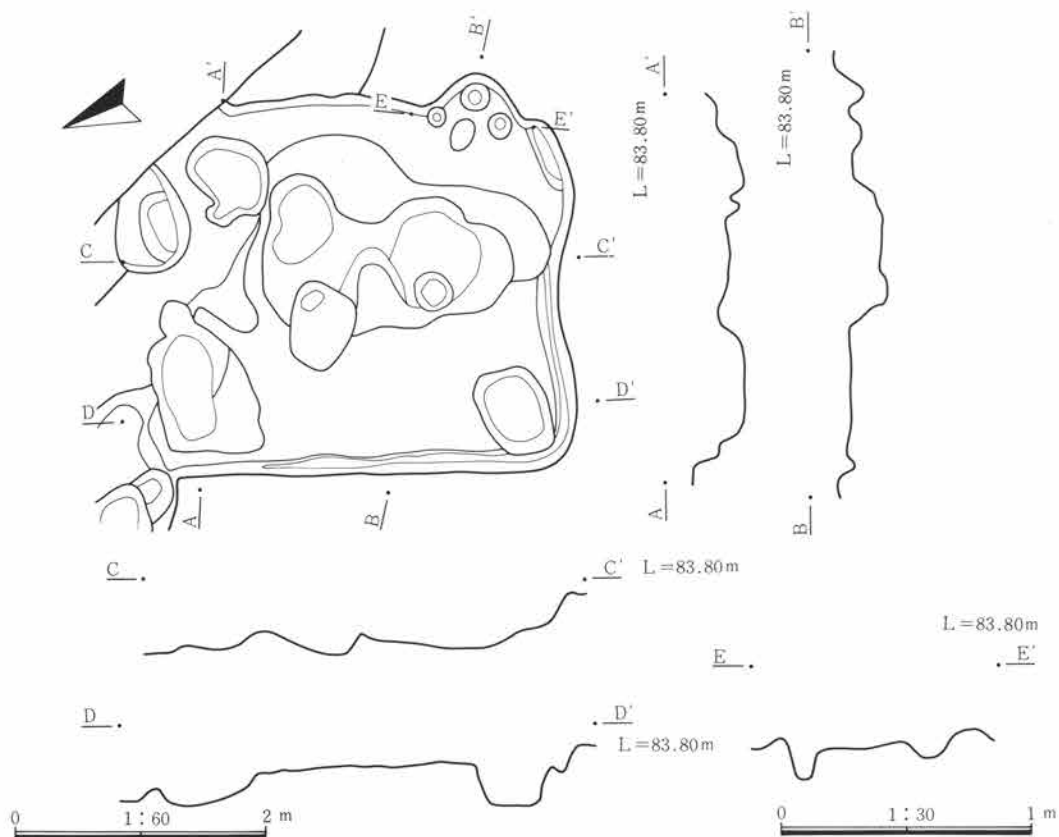
さは約33cmである。

遺物は竈前から須恵器杯(487)・土師質土器碗(488)・羽釜(489)が出土し、南西隅からは羽釜(490)が出土している。

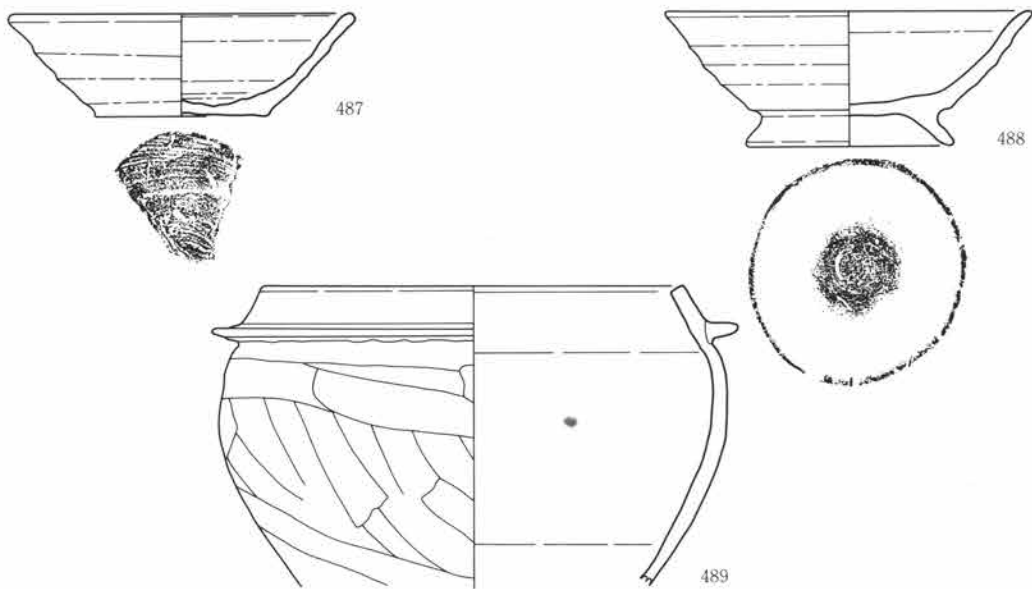
住居跡中央部を中心に床下土坑が認められる。床下土坑部分のみ厚く貼り床を施す。



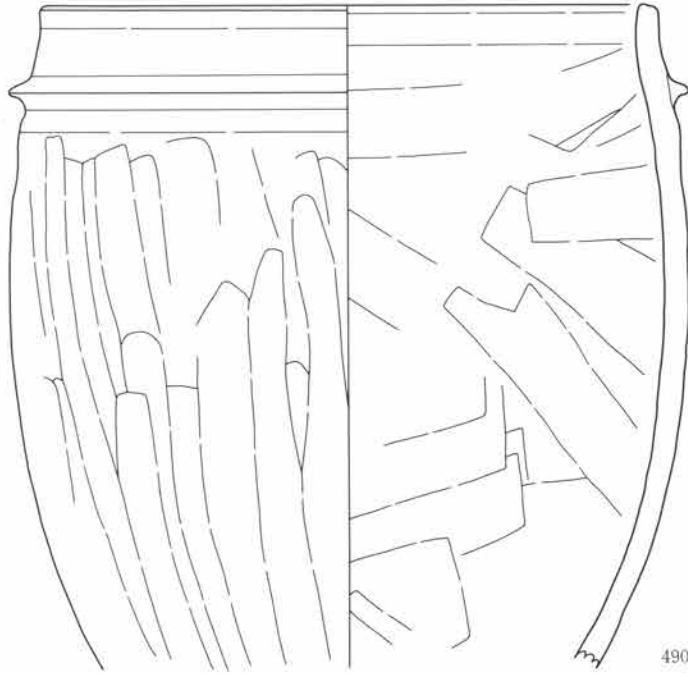
第254図 8区12号住居跡



第255図 8区12号住居跡掘形



第256図 8区12号住居跡出土遺物①



第257図 8区12号住居跡出土遺物②

0 1 3 6 cm

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
487	杯 須恵器	器高:41mm 口径:(140mm) 底径:(70mm) 1/4残。	細砂～径2mmの礫を含む。やや軟質。鈍い橙。	口縁部は僅かに外反する。底部内面は指などで。底部外面は右回転糸切り無調整。	甕前。
488	椀 土師質土器	器高:54mm 口径:148mm 底径:84mm 口縁部1/4欠。	細砂～径1mmの粗砂含む。軟質。黄橙。	口縁部は僅かに外反する。高台は貼り付け時に切り放し痕などで消す。高台は外方に開く。	甕前。器表摩滅する。
489	羽釜	器高:[120mm] 口径:170mm 口縁部完・体部1/3残。	細砂～粗砂多く含む。やや軟質。黒褐～赤褐。内面黒灰。	口縁部は内傾する。体部は内湾する。器高は低い。鐙は貼り付ける。口縁部は横などで。体部外面は篋削り。内面は回転などで?	甕前。鐙の下に煤付着する。
490	羽釜	器高:[266mm] 口径:(250mm) 1/5残。	細砂～径4mmの礫含む。普。鈍い黄橙。	口縁部はほぼ直立する。体は張らず、長胴となる。口縁部は回転横などで。体部外面は篋削り。体部内面は篋状工具によるなどで。	西壁中央。

8区13号住居跡

当住居跡は、7区1号溝・8区12号住居跡と重複する。新旧関係は、7区1号溝より当住居跡の方が古い、8区12号住居跡との関係は不明である。近接する遺構はない。

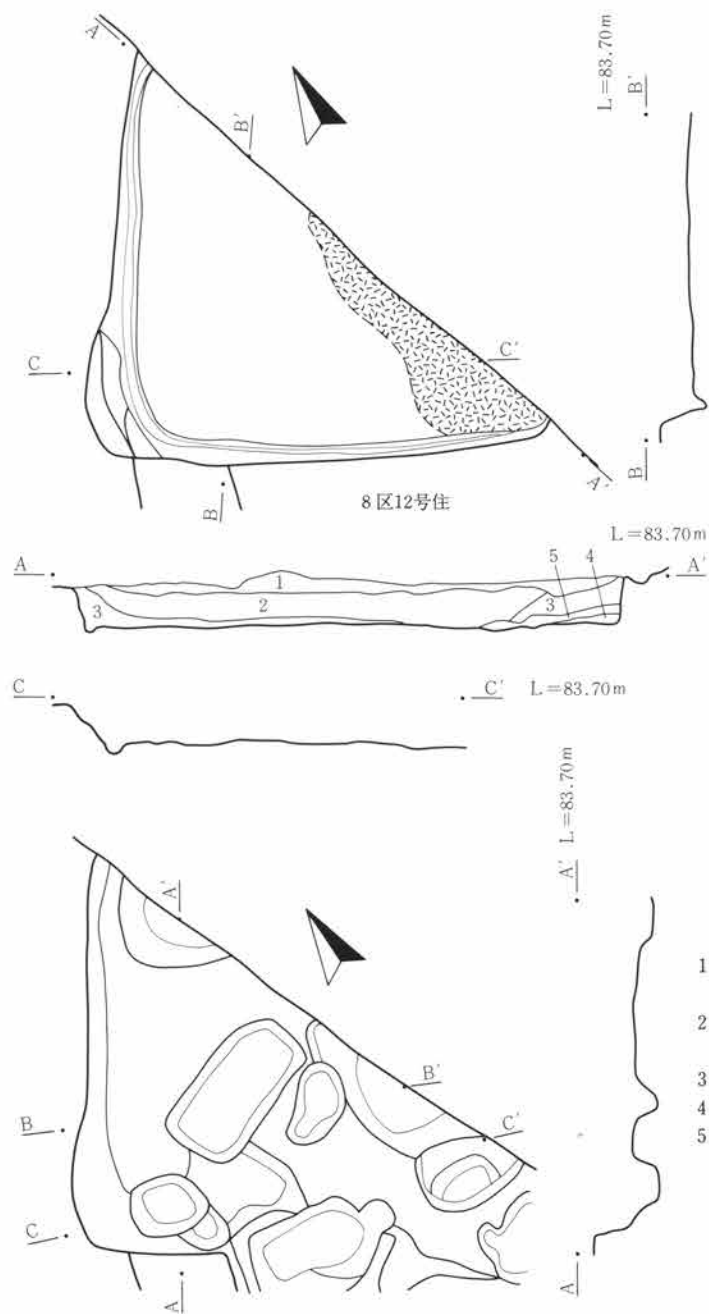
住居跡東半は調査区外のため、規模・平面形・主軸方位は不明である。残存壁高は25～30cmを

測る。柱穴は確認されない。周溝は検出部分すべてに巡っている。床は全体に厚く貼り床が施されており、西壁付近では4枚の硬化面を確認している。

竈は検出されないが、南東隅に灰の分布が認められたため、東壁南隅に構築されていたと考えられる。

遺物は土師質土器皿(491)・灰釉陶器碗(492)が出土している。

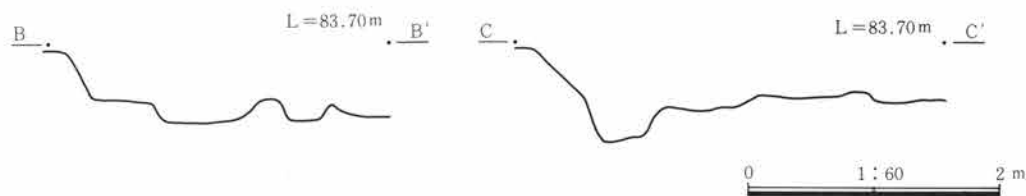
掘形は定形的なものではなく、不規則に床下土坑を掘り込んでいる。



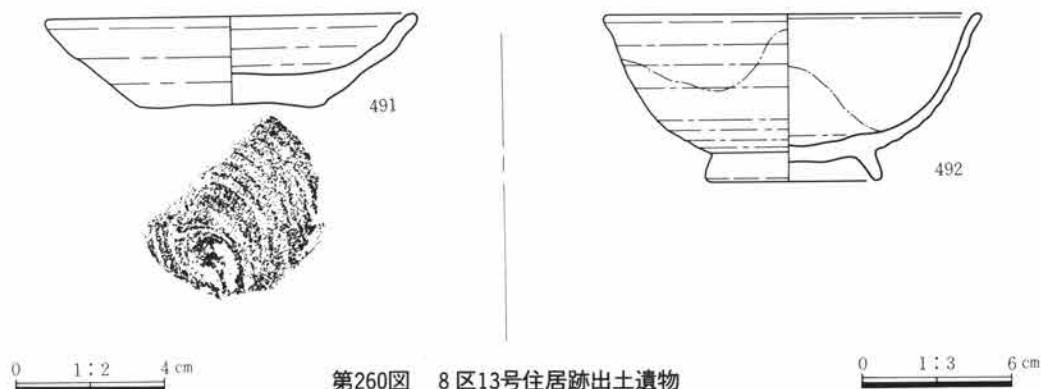
8区13号住居跡土層説明

- 1 褐色土層：ロームブロック(小)と炭化物を含む。
- 2 褐色土層：ロームブロックを多く含む。焼土・炭化物粒を含む。
- 3 褐色土層：ロームブロックを含む。
- 4 焼土・灰の混土層。
- 5 灰褐色土層：灰・ロームブロック・焼土を含む。

第258図 8区13号住居跡・同掘形



第259図 8区13号住居跡掘形エレベーション図



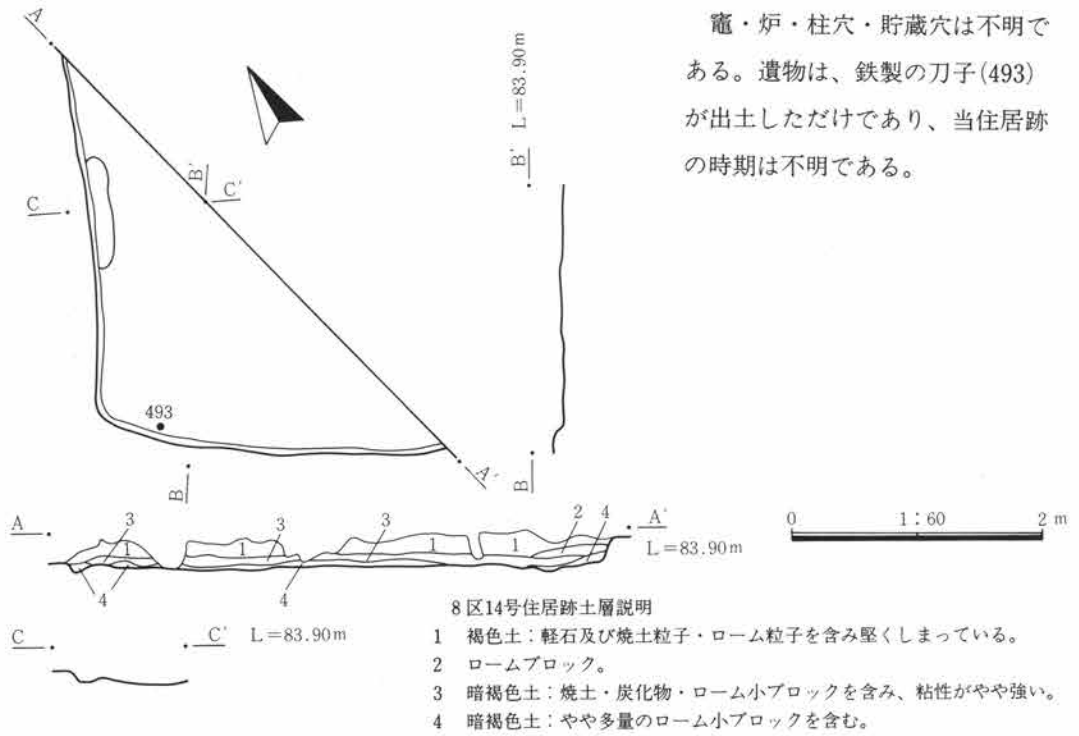
第260図 8区13号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
491	皿 土師質土器	器高:22mm 口径:(100mm) 底径:50mm 1/2残。	細砂～径1mmの礫多く含む。軟質。鈍い黄橙。	口縁端部内面は平坦に造り、中央を浅くくぼませる。底部外面は右回転糸切り無調整。	覆土。
492	椀 灰釉陶器	器高:67mm 口径:(153mm) 底径:72mm 口縁部1/5・底部2/3残。	細砂少量含む。黒色粒子含む。硬質。灰白。	体部は内湾し口縁端部は小さく外反する。体部外面は下位まで範削り。高台貼り付け時に切り放し痕などで消す。口縁部のみ施釉。	覆土。

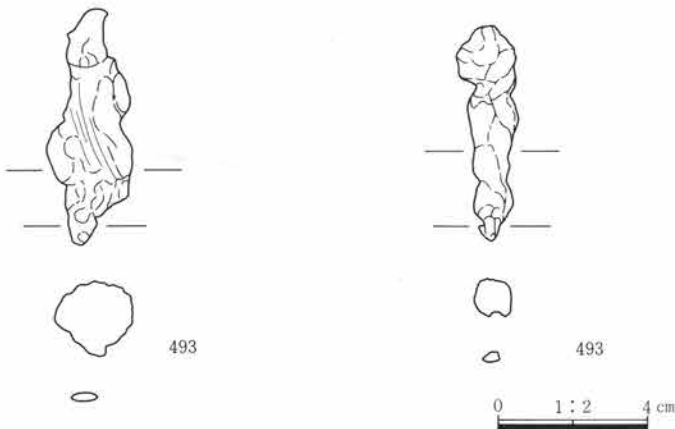
### 8区14号住居跡

当住居跡は、8区15号住居跡と重複する。新旧関係は、8区15号住居跡の北東部の床上の覆土中に当住居跡の南西部の壁・床が築かれていることから、当住居跡の方が新しい。

当住居跡の規模は、東側の大部分が調査区域外のために不明であるが、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約10～15cmである。検出できた部分の床面は、比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝は、西側の一部で確認できた。規模は、幅約10cm・床面からの深さ約3～5cmであり、非常に浅い。



第261図 8区14号住居跡



第262図 8区14号住居跡出土遺物



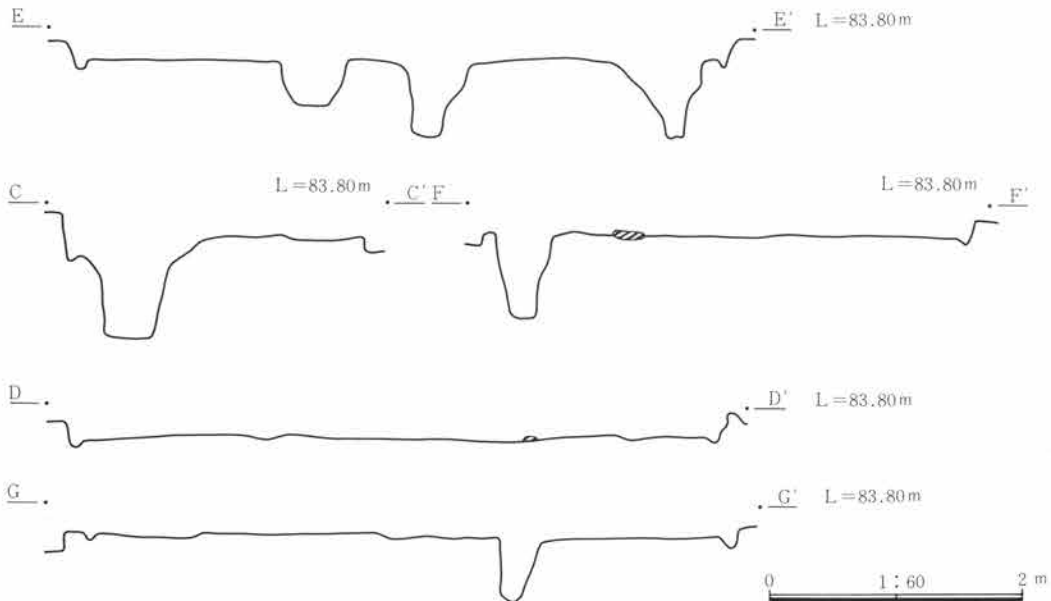
## 8区15号住居跡

当住居跡は、8区14号住居跡と重複する。新旧関係は、8区14号住居跡の北西部分の壁・床が当住居跡の南東部床上覆土中に築かれていることから、当住居跡の方が古い。

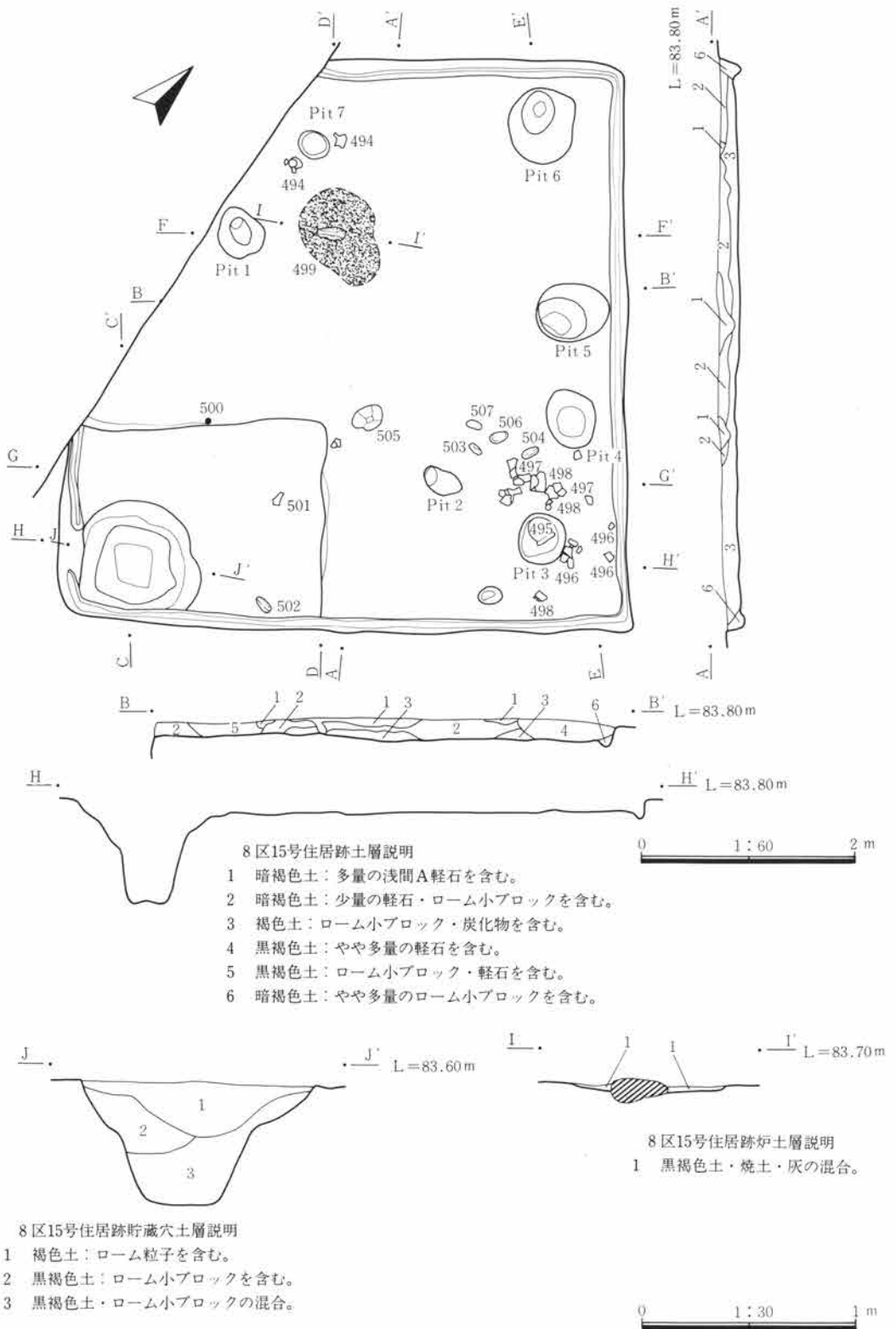
当住居跡の規模は、東西約5.3m・南北約5.2mであり、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-47°-Wである。確認面までの壁の立ち上がりは、約15~20cmである。床面は硬く、ほぼ平坦である。壁溝は、住居確認範囲からは全面的に検出できた。規模は、幅約10cm・床面からの深さ約5~10cmである。

炉は、住居内中央部の北よりに築かれている。焼土と灰の堆積を確認でき、焼土の中央部からは囲み石に使用したと考えられる河原石が検出できた。主柱穴は4基と考えられるが、検出できたのは北西柱穴と南東柱穴の2基である。規模は、長軸約40~45cm・短軸約20~40cm・床面からの深さ約30~65cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴は、南西隅に築かれている。規模は、長軸約110cm・短軸約100cm・床面からの深さ約80cmであり、平面形は不整形な長方形を呈する。しかし、掘形での規模は、長辺約75cm・短辺約70cmであり、平面形は整った長方形を呈する。貯蔵穴の周囲の床面は、南東隅を基準に東西約2.5m・南北約1.8mの範囲で、周囲より約5cm高くなっている。住居内の東壁に沿ってピットが4基並んでいる。規模は、長軸約45~70cm・短軸約40~60cm・床面からの深さ約35~65cmであり、平面形は不整形な楕円形ないしは不整形な長方形を呈する。ピットの用途は不明である。

掘形は、中央部が高く、壁に沿った周囲が低く掘り込まれている形態である。遺物は、土師器の甕・器台のほか薦石などが出土している。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀末~5世紀初頭である。

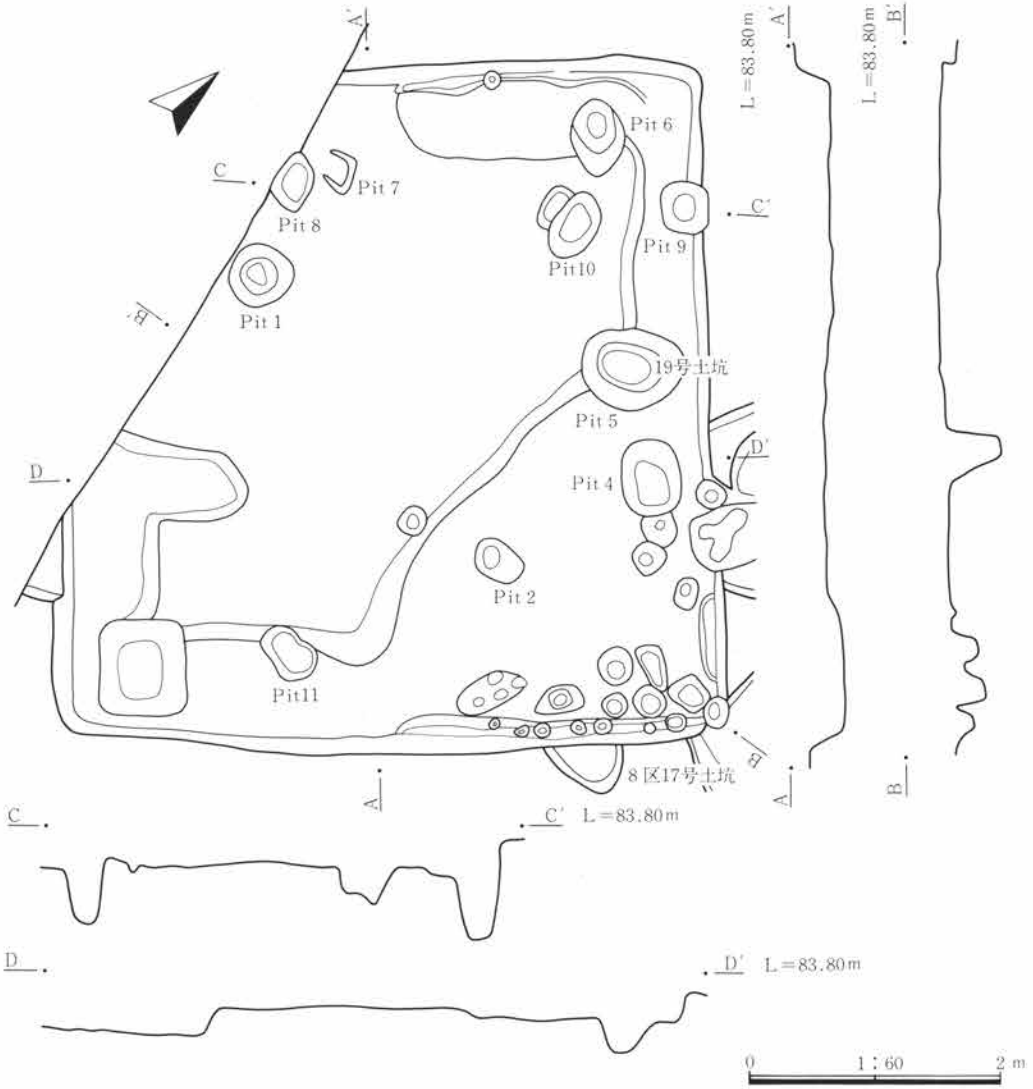


第263図 8区15号住居跡エレベーション図

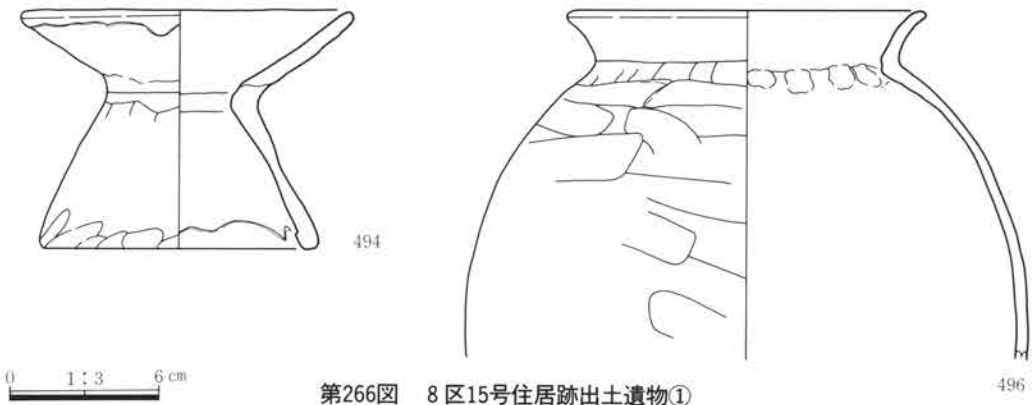


第264図 8区15号住居跡

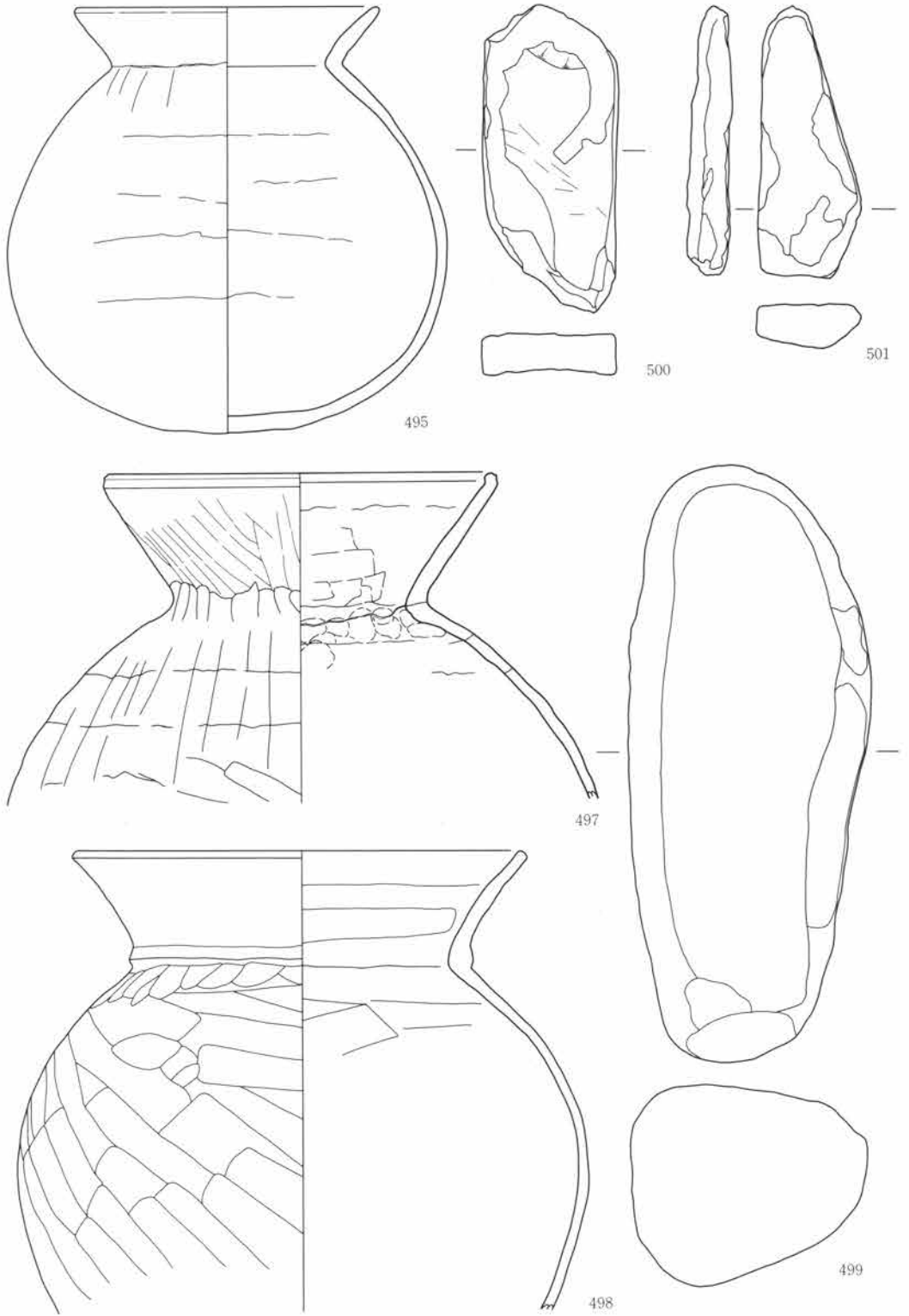
第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(8区15号住)



第265図 8区15号住居跡掘形

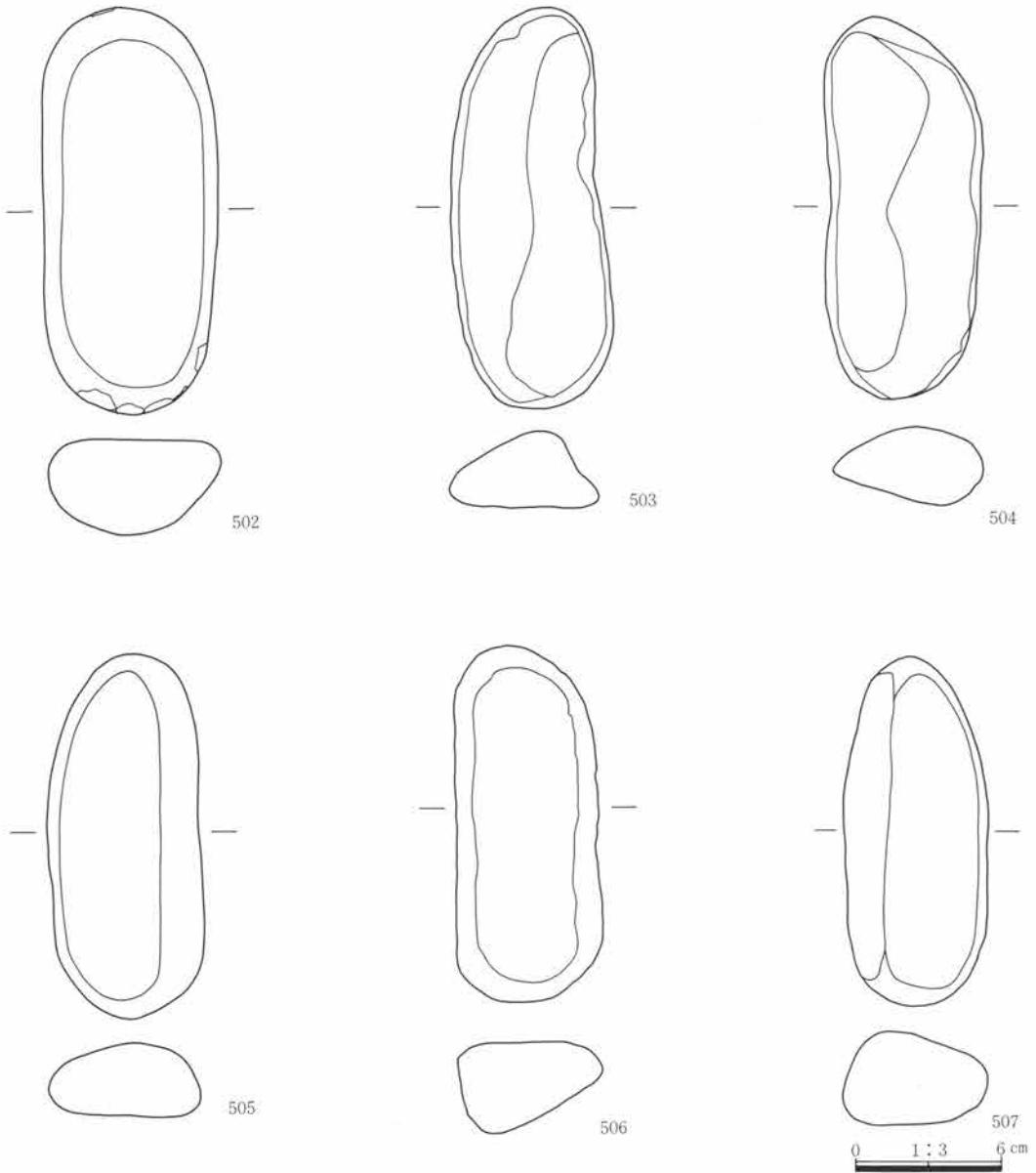


第266図 8区15号住居跡出土遺物①



第267図 8区15号住居跡出土遺物②

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(8区15号住)



第268図 8区15号住居跡出土遺物③

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
494	器台 土師器	器高:96mm 口径:134mm 脚径:112mm 孔径:40mm ほぼ完形。	径1~2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。鈍い橙。	体部~口縁部は僅かに内湾しつつ広がり、脚部は「ハ」字状に開く。脚部下端は折り返し。内外面共に口縁部~体部はなで、脚部は指なで、指頭痕が残る。	住居内北西部床直。内外面に油煙付着。
495	甕 土師器	器高:199mm 口径:143mm 底径(60mm) 最大	径1~2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。鈍	口縁部は「く」字状に外湾。丸底に近い平底。最大径は体部下半。内面:口縁部	住居内南東部床直。内外面に油煙

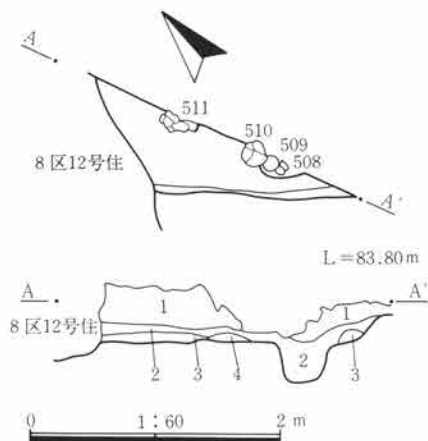
第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
496	甕 土師器	径:(207mm) 口縁部～ 底部1/3残。 器高:[138mm] 口径: 145mm 底径:一 最大 径:(226mm) 口縁部～ 体部上半1/2残。	い赤褐。 径3～4mmの小石及び砂 粒を含む。やや軟質。酸化。 鈍い橙。	は横なで、体部～底部はなで。外面:口 縁部は横なで、体部～底部は篋削り後 なで。 口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体 部中央。内面:口縁部は横なで、体部上 半は篋なで。外面:口縁部は横なで、体 部上半は篋削り、頸部に指頭痕が残る。	付着。二次炎を受け けている。 住居内南東部床直 他。内外面に油煙 付着。二次炎を受け けている。
497	甕 土師器	器高:[153mm] 口径: (186mm) 底径:一 口 縁部～体部上半1/3残。	径2～3mmの砂粒を含 む。軟質。酸化。鈍い黄 橙。	口縁部は「く」字状に外湾し、大きく開 く。口縁端部は沈線状。内面:口縁部は 横なで後篋なで、体部上半はなで、頸部 に指頭痕が残る。外面:口縁部は横なで 後縦篋なで、体部上半は篋削り。	住居内南東部床直 他。外面に油煙付 着。
498	甕 土師器	器高:[215mm] 口径: 214mm 最大径:(270mm) 口縁部～体部1/2残。	径3～4mmの小石及び砂 粒を含む。軟質。酸化。 鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体 部上半。内面:口縁部上半は横なで、口 縁部下半は横篋なで、体部は篋なで。外 面:口縁部は横なで、体部は篋削り。	住居内中央部床直 他。内外面に油煙 付着。二次炎を受け けている。
499	用途不明 石製品	長:278mm 幅:114mm 厚:94mm 重:4800g	粗粒安山岩。	2面擦られている。	炉直上。炎を受け けている。
500	用途不明 石製品	長:144mm 幅:64mm 厚:23mm 重:200g	凝灰岩。	使用面は3面。	住居内床直。
501	用途不明 石製品	長:127mm 幅:49mm 厚:20mm 重:100g	凝灰岩。	使用面は3面。	住居内南西部床 直。
502	薦石	長:167mm 幅:72mm 厚:43mm 重:840g	粗粒安山岩。		住居内南壁中央脇 床上5cm。
503	薦石	長:165mm 幅:65mm 厚:35mm 重:520g	粗粒安山岩。		住居内南東部床 直。
504	薦石	長:156mm 幅:65mm 厚:39mm 重:600g	粗粒安山岩。		住居内南東部床 直。
505	薦石	長:150mm 幅:63mm 厚:36mm 重:520g	粗粒安山岩。		住居内中央部床 直。
506	薦石	長:147mm 幅:61mm 厚:40mm 重:610g	粗粒安山岩。		住居内南東部床 直。
507	薦石	長:144mm 幅:60mm 厚:40mm 重:580g	粗粒安山岩。		住居内南東部床 直。

8区16号住居跡

当住居跡は、8区12号住居跡と重複する。新旧関係は、8区12号住居跡の北東部分の壁・床が当住居跡の北西部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。当住居跡の規模・主軸は、東側の大部分が調査区域外のために不明である。確認面までの壁の立ち上がりは、約5～10cmであり、残存状態は悪い。住居跡検出範囲から壁溝は確認できなかった。

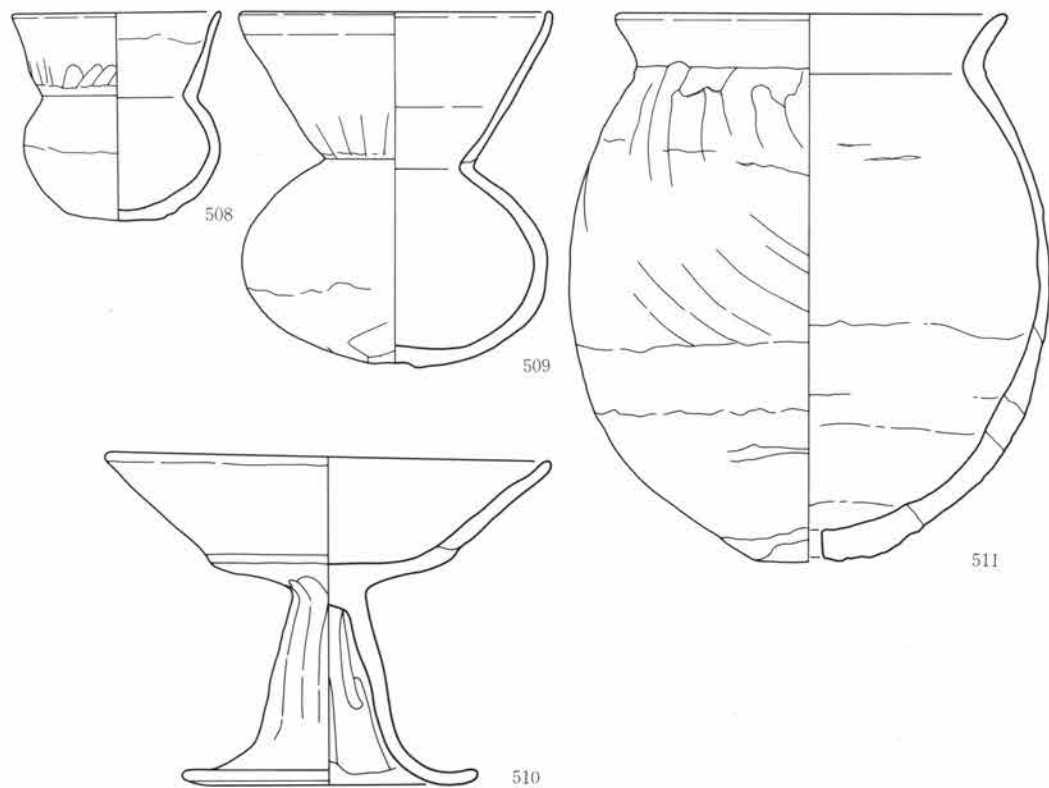
炉・柱穴・貯蔵穴は不明である。遺物は、土師器の甑・埴・高杯などが出土している。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は5世紀前半である。



8区16号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土：軽石・焼土粒子・ローム粒子を含み堅くしまった土。
- 2 褐色土：ローム小ブロックおよび焼土粒子・炭化物を含む。
- 3 暗褐色土：ローム小ブロック・炭化物・灰を含む。
- 4 ロームブロック。

第269図 8区16号住居跡



第270図 8区16号住居跡出土遺物

第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
508	埴 土師器	器高:83mm 口径:84mm 底径:40mm ほぼ完形。	径2~3mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。鈍い褐。	口縁部は「く」字状に外湾。底部は丸底に近い平底。内面:口縁部は横なで、体部~底部は篋なで。外面:口縁部は横なで、口縁部下半は一部篋なで、体部は篋削り後なで、底部は篋削り。	住居内南部貯蔵穴脇床直。内外面に油煙付着。二次炎を受けている。
509	埴 土師器	器高:142mm 口径:126mm 底径:一 口縁部1/4欠。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。やや硬質。酸化。橙。	口縁部は大きく、「く」字状に外湾、口縁端部は僅かに内湾。丸底。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、口縁部下端は縦篋なで。体部は篋削り後なで。底部は篋削り。	住居内南部貯蔵穴脇床直。内外面に油煙付着。二次炎を受けている。
510	高杯 土師器	器高:133mm 口径:181mm 脚径:119mm 脚部一部欠。	径4~5mmの小石及び砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	体部~口縁部は直線的に広がる。脚部は漏斗状に開く。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで、脚部上半は篋削り、脚部下半は横なで。外面:口縁部~体部は横なで、底部はなで、底部下端~脚部上半は縦篋なで、脚部下半は横なで。	住居内南部貯蔵穴脇床直。内外面に油煙付着。二次炎を受けている。
511	甑 土師器	器高:219mm 口径:(158mm) 底径:60mm 孔径:11mm 最大径:194mm 口縁部~底部1/2残。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。軟質。酸化。明赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。甑の底部に焼成前の穿孔。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	住居内南部床直。内外面に油煙付着。

8区17号住居跡

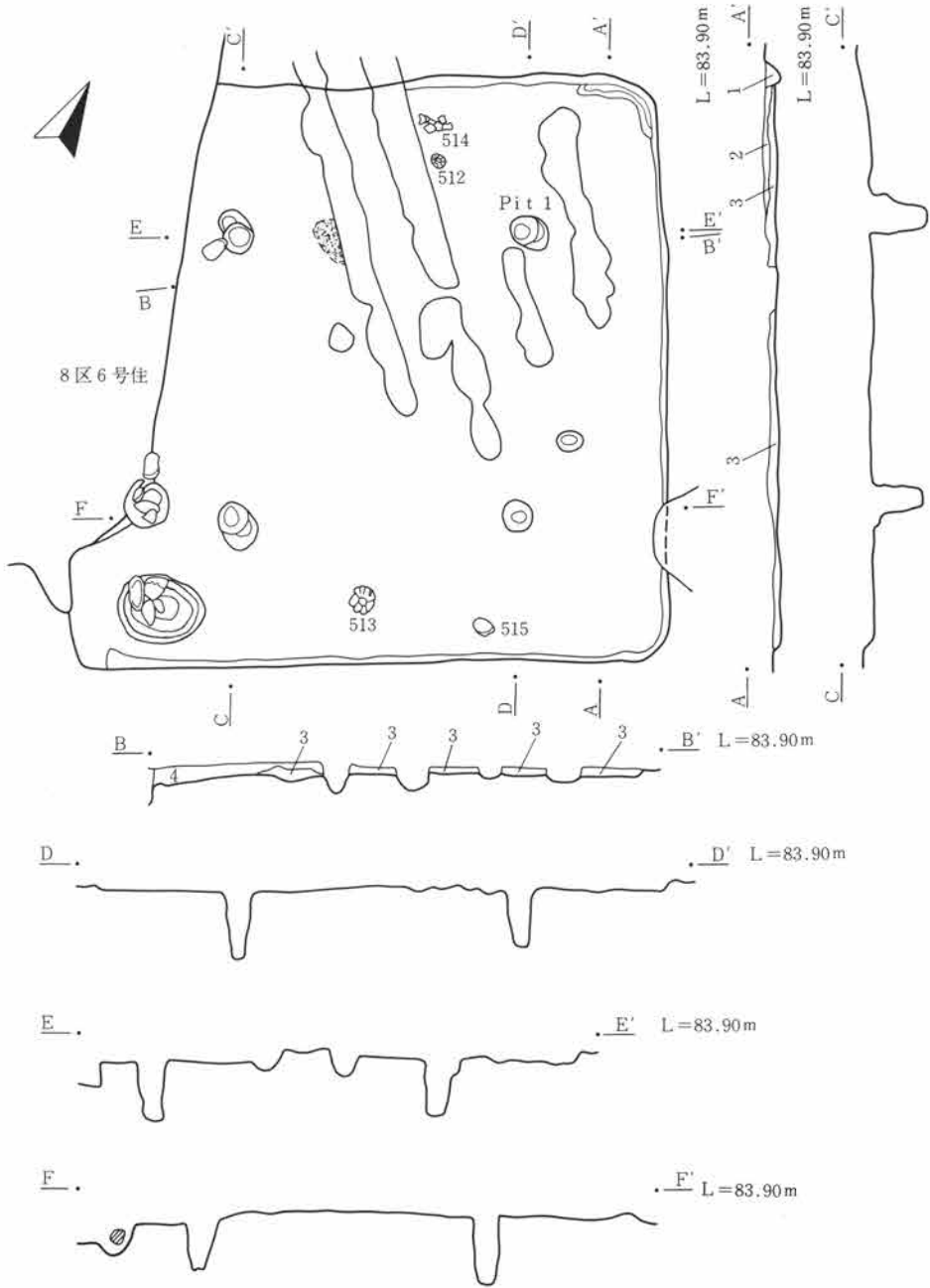
当住居跡は、8区6号住居跡と重複する。新旧関係は、8区6号住居跡の南東部分の壁・床が当住居跡の北西部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、西側が確認できなかったために確定できないが、南北約4.6mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。主軸は不明である。確認面までの壁の立ち上がりは、約5~10cmであり、残存状態は悪い。床面は、比較的硬く、ほぼ平坦であるが、北東部分は現代の耕作により、部分的に破壊されている。壁溝は検出できなかった。

炉は、北側柱穴の中間に築かれている。東半分は現代の耕作により破壊されているが、焼土・灰の堆積を確認することができた。支柱穴は4基である。規模は、長軸約25~35cm・短軸約20~30cm・床面からの深さ約40~60cmであり、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴は、住居内の南西隅に築かれている。規模は、長軸約70cm・短軸約55cm・床面からの深さ約50cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴内部からは、拳大~人頭大の河原石が出土した。

遺物は、土師器の埴・高杯の他、用途不明石製品が出土している。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は5世紀前半である。



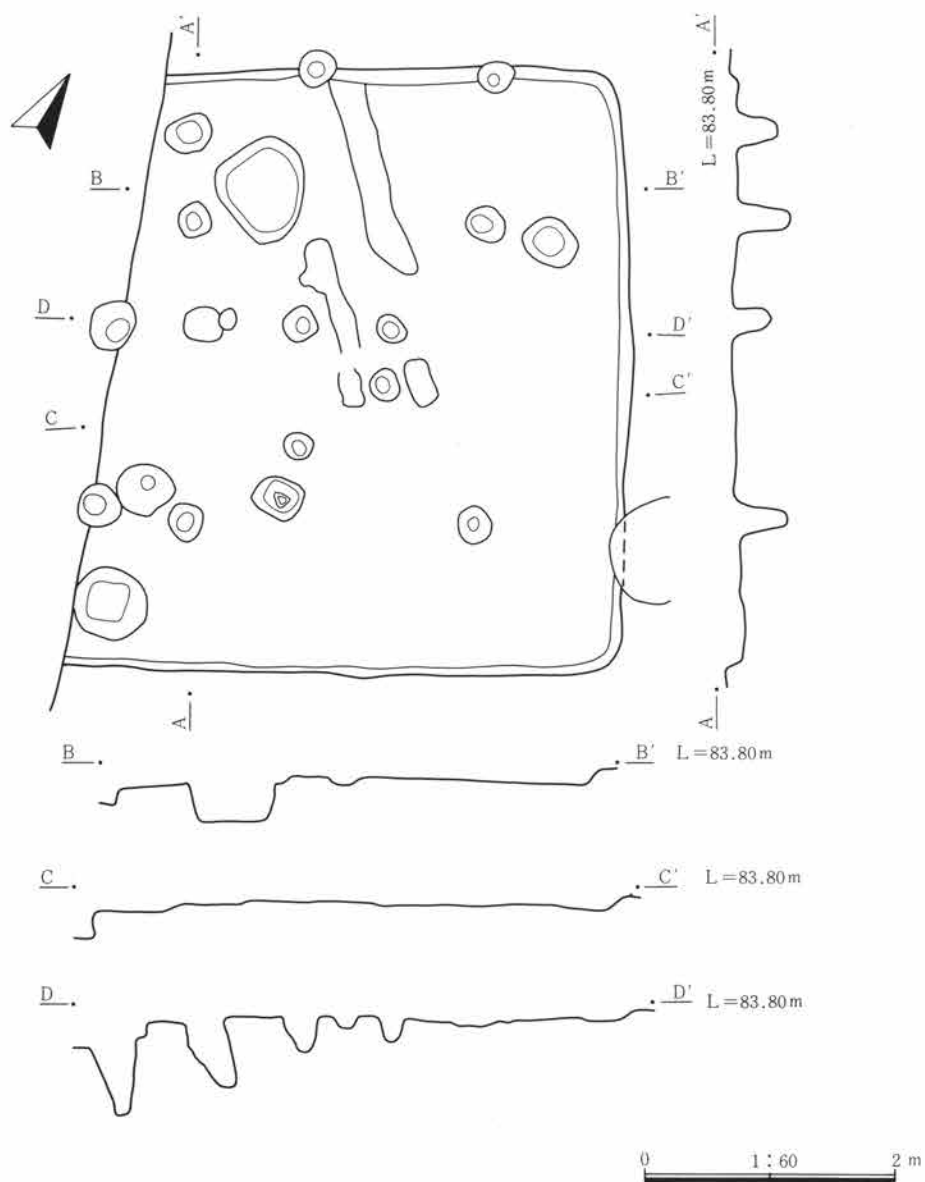


8区17号住居跡土層説明

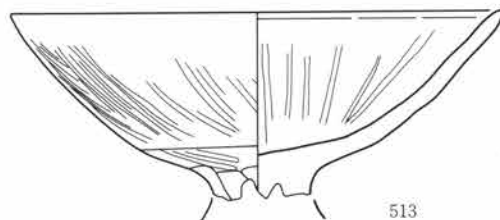
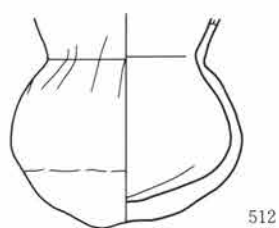
- 1 褐色土：やや多量のローム粒子を含み、粘性が強い。
- 2 褐色土：ローム粒子・軽石・焼土粒子を含む。
- 3 暗褐色土：ローム小ブロックを含む。
- 4 黒褐色土：少量のローム粒子・灰白色土粒子を含む。

0 1:60 2 m

第271図 8区17号住居跡

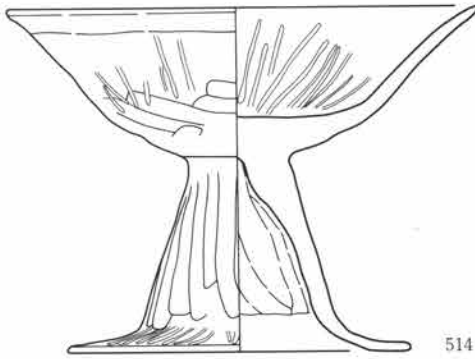


第272図 8区17号住居跡掘形

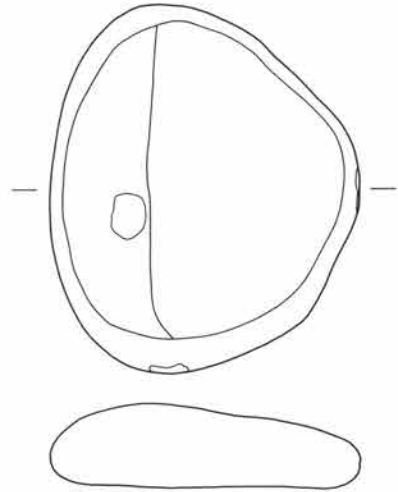


第273図 8区17号住居跡出土遺物①

0 1:3 6 cm



514



515

0 1:3 6 cm

第274図 8区17号住居跡出土遺物②

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
512	埴 土師器	器高:[84mm] 口径:— 底径:— 口縁部下半 ~底部4/5残。	径2~3mmの砂粒を含む。軟質。酸化。赤橙。	口縁部は「く」字状に外湾。丸底。内面:口縁部下半~底部はなで。外面:口縁部下半~体部上端は篋なで、体部~底部はなで。	住居内北東部床直。内外面に油煙付着。
513	高杯 土師器	器高:[75mm] 口径: 199mm 脚径:— 口縁部 ~脚部上端3/4残。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。軟質。酸化。明赤褐。	体部~口縁部は直線的に開く。内面:口縁部は横なで、体部はなで後縦篋磨き、底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋磨き、脚部上端は篋なで。	住居内南壁中央脇床直。内外面に油煙付着。
514	高杯 土師器	器高:138mm 口径: (190mm) 脚径:139mm 口縁部~底部3/4欠。	径2~3mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。赤褐~明褐。	体部~口縁部は直線的に開く。口縁端部は僅かに外湾。脚部は漏斗状に開く。内面:口縁部は横なで、体部は横なで後縦篋磨き、底部はなで、脚部上半は指なで、脚部下半は横なで。外面:口縁部は横なで、体部はなで後縦篋磨き、体部下端~脚部上半は篋削り、脚部下半は横なで後縦篋磨き。	住居内北壁中央脇床直。内外面に油煙付着。二次炎を受けている。
515	用途不明 石製品	長:148mm 幅:125mm 厚:43mm 重:1000g	粗粒安山岩。		住居内南壁東寄り脇床直。

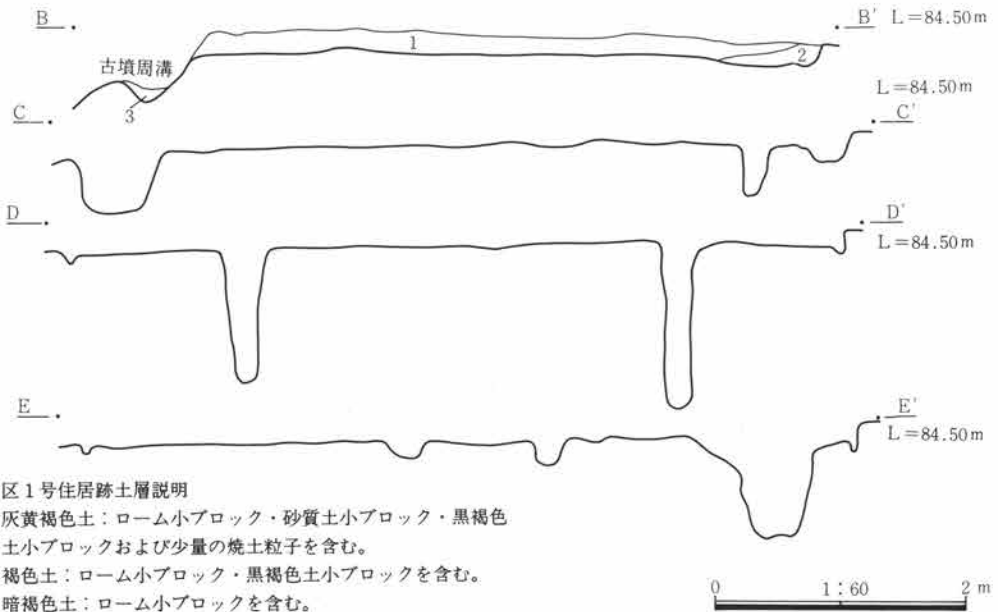
### 9区1号住居跡

当住居跡は、9区1号古墳と重複する。新旧関係は、当住居跡の確認面が9区1号古墳の墳丘下になることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、東西約6.3m・南北約7.0mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-44°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約20~30cmであるが、北西部は9区1号古墳の周堀に破壊されており、確認できなかった。床面は比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝は、東壁の中央から、南壁に沿い、西壁の中央付近までの南半から検出できた。規模は、幅約5~10cm・床面からの深さ約5~10cmである。

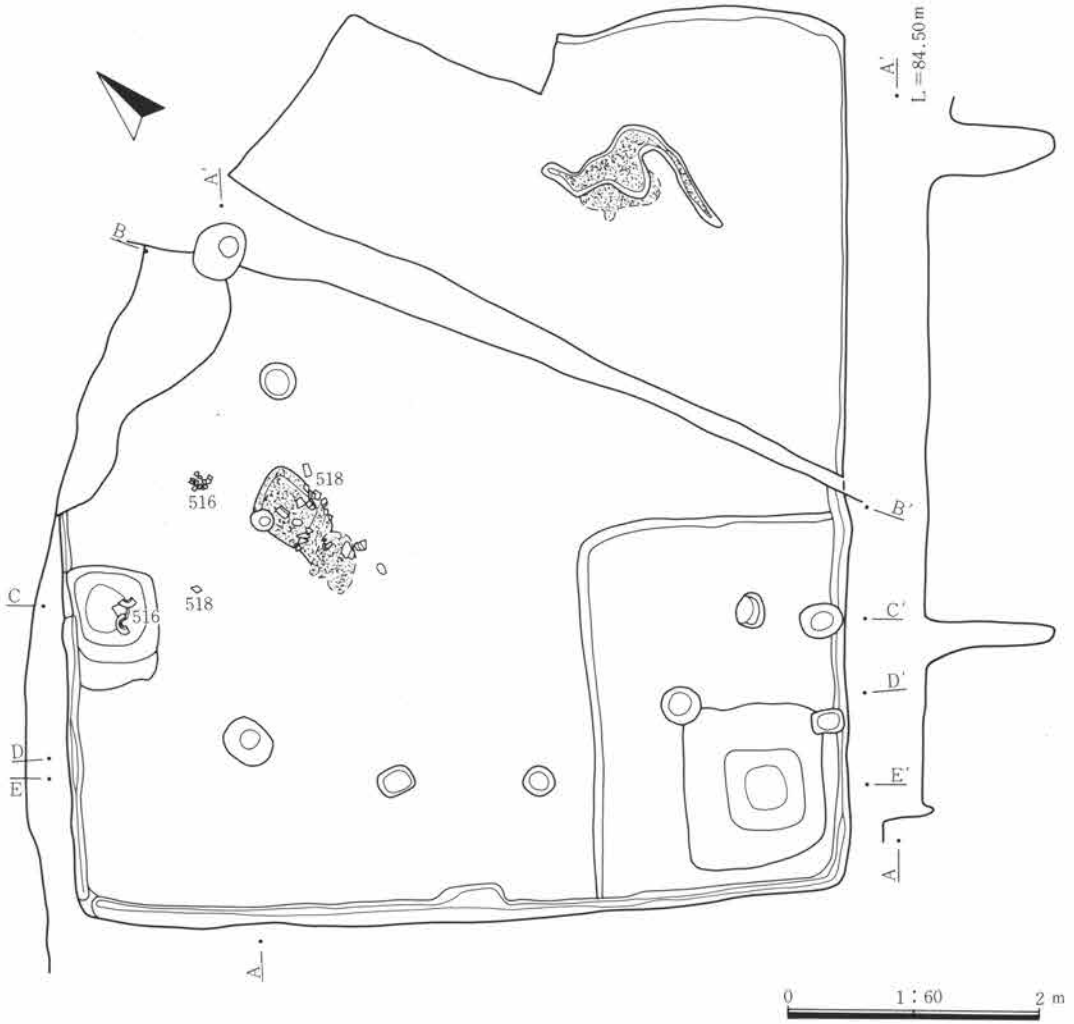
炉は、西側柱穴の中間やや中央よりから検出できた。炉からは、焼土・灰の堆積と、囲みに使用したと考えられる河原石が確認できた。主柱穴は4基と考えられるが、検出できたのは3基であり、北東柱穴は検出できなかった。規模は、長軸約30~50cm・短軸約25~40cmであり、床面からの深さは90~100cmを測り、平面形は不整形な楕円形ないしは不整形な円形を呈する。貯蔵穴と考えられるピットは、南東隅と西壁脇のやや南よりから、計2基検出できた。西壁脇のやや南よりから検出できた貯蔵穴の規模は、長辺約90cm・短辺約70cm・床面からの深さ約50cmであり、平面形は不整形な長方形を呈する。同貯蔵穴からは、土師器の高杯が出土している。南東隅から検出できた貯蔵穴の規模は、上段では長辺約130cm・短辺約110cmで、平面形は長方形を呈し、中段では一辺約60cm・底面では一辺約35cmで、平面形は正方形を呈する。床面からの深さは約80cmを測る。同貯蔵穴周辺の床面は、南東隅を基準に東西約2.0m・南北約3.0mの範囲で周囲の床面より約2~3cm高くなっている。

掘形は、中央部が床面の高さとはほぼ同じであり、壁に沿った周囲が低く掘り込まれる形態である。掘り込みの規模は、幅約100~150cm・床面からの深さ約5~20cmである。遺物は、土師器の甕・高杯などが出土している。周囲の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は4世紀末~5世紀初頭である。

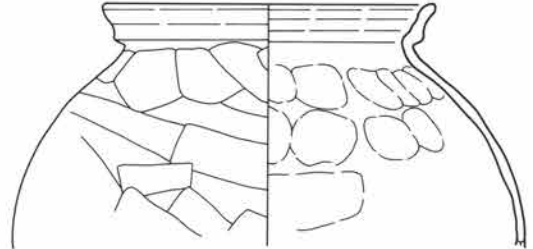
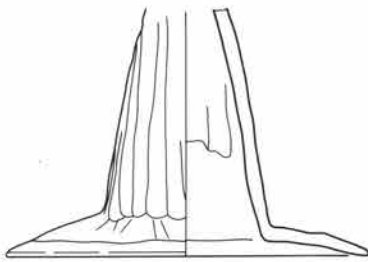


第275図 9区1号住居跡断面図・エレベーション図

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(9区1号住)

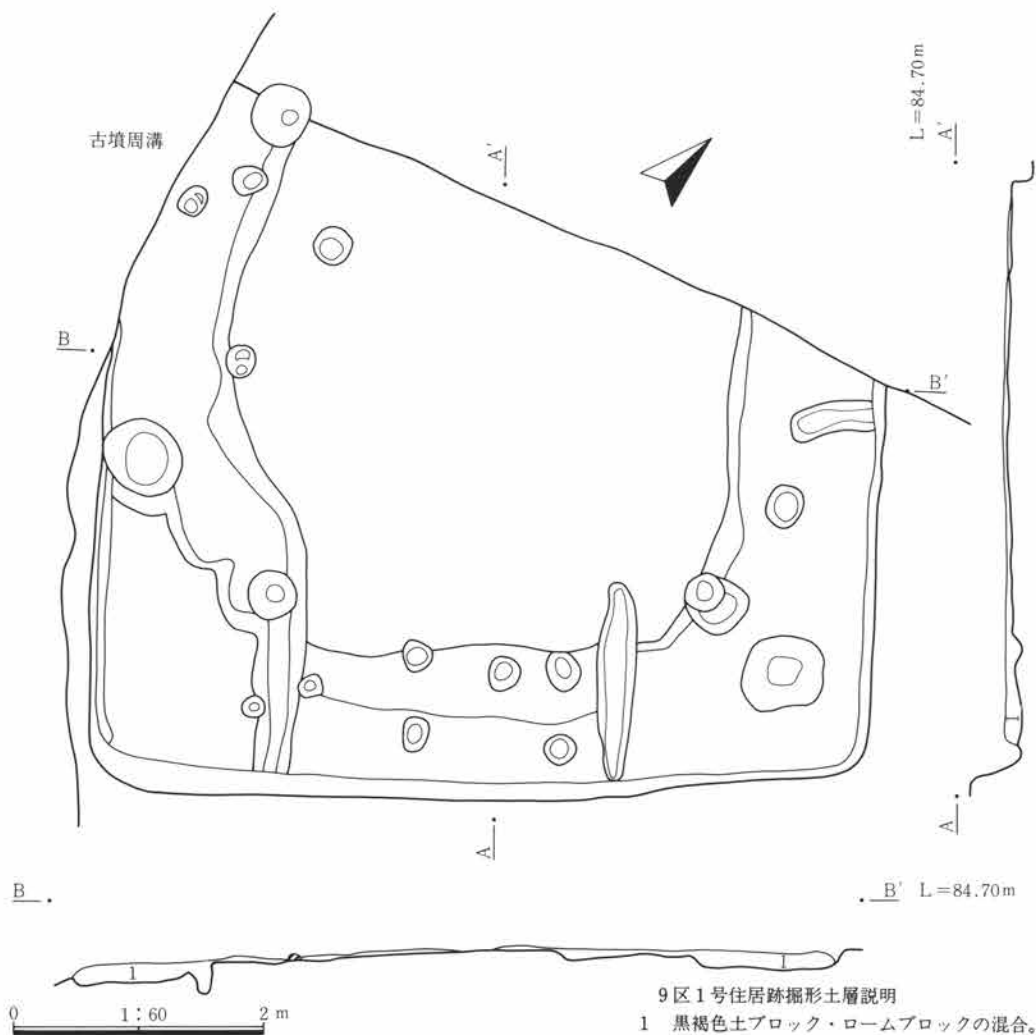


第276図 9区1号住居跡

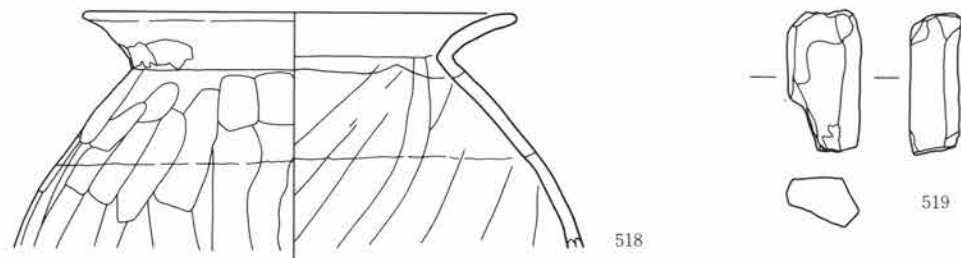


第277図 9区1号住居跡出土遺物①





第278図 9区1号住居跡掘形



第279図 9区1号住居跡出土遺物②

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(9区1・2号住)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
516	高杯 土師器	器高:[99mm] 口径:— 脚径:146mm 脚部残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。赤褐。	脚部は漏斗状に開く。内面:脚部上半は篋削り、脚部下半はなで、刷毛目が部分的に残る。外面:脚部上半は篋削り、脚部下半は篋なで、脚部下端は横なで。	西壁貯蔵穴内他。内外面に油煙付着。
517	台付甕 土師器	器高:[96mm] 口径: 134mm 脚径:— 口縁部~体部上半1/2残。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。軟質。酸化。赤褐。	口縁部は「S」字状。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで、指頭痕が残る。外面:口縁部は横なで、体部上半は篋削り。	住居内覆土。内外面に油煙付着。
518	甕 土師器	器高:[94mm] 口径: 175mm 底径:— 口縁部~体部上半3/4残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に鋭く屈曲。内面:口縁部はなで、体部上半は篋なで。外面:口縁部はなで、体部上半は篋削り。	炉直上他。内外面に油煙付着。二次炎を受けている。
519	砥石	長:[57mm] 幅:29mm 厚:17mm 重:40g	凝灰岩。	使用面は4面。端部が欠けている。	住居内床直。

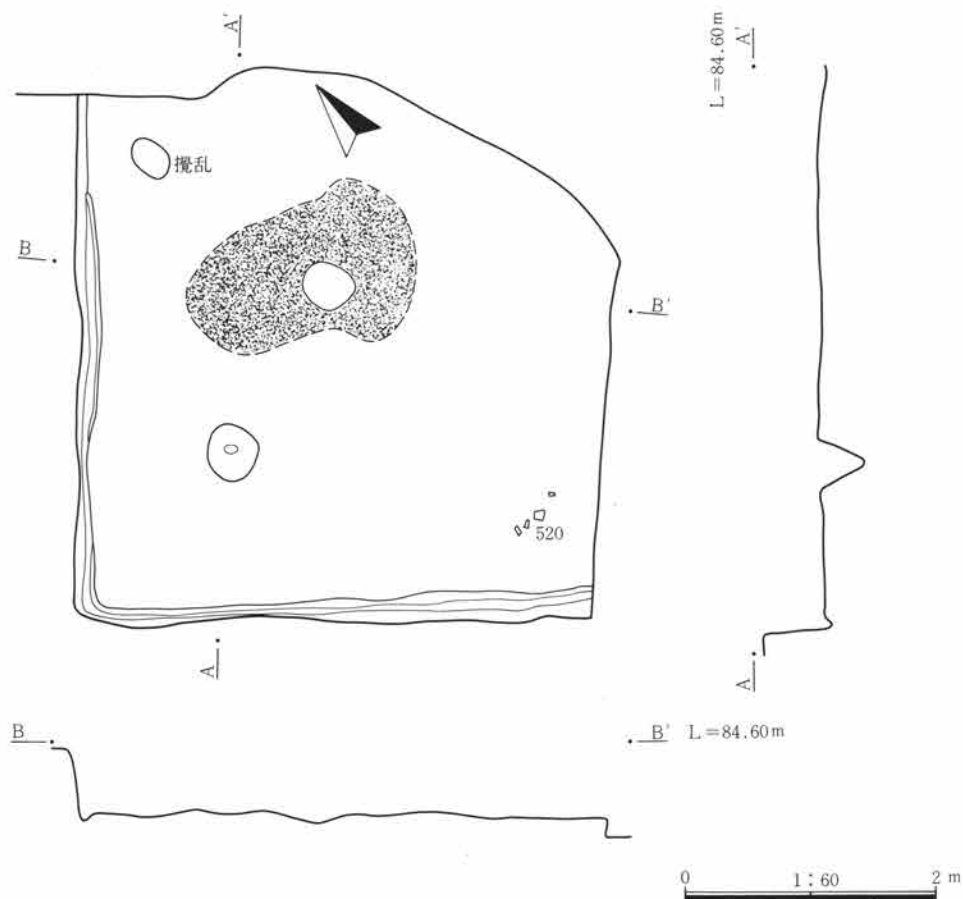
### 9区2号住居跡

当住居跡は、9区1号古墳と重複する。新旧関係は、当住居跡の確認面が9区1号古墳の墳丘下になることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、北側と東側が9区1号古墳の周堀により破壊されているために不明であるが、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。主軸は不明である。確認面までの壁の立ち上がりは、50cmを測り、住居検出部分の残存状態は比較的良好である。床面は硬く、ほぼ平坦である。壁溝は、南壁から西壁の中央付近までは検出できた。規模は、幅約5~15cm・床面からの深さ約5cmである。

炉は、住居内中央部のやや西よりから検出できた。長軸約180cm・短軸約100cmの範囲から焼土・灰の堆積が確認でき、囲みに使用されたと考えられる河原石が検出できた。焼土・灰の範囲の中央部分からは、皿状のピットが1基検出できた。規模は、長軸約40cm・短軸約35cm・床面からの深さ約5~10cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。炉の中心部分と考えられる。主柱穴は4基と推定されるが、検出できたのは1基である。規模は、長軸約45cm・短軸約40cm・床面からの深さ約40cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴は検出できなかった。

遺物の出土は非常に少なく、土師器の高杯が出土しているだけである。周辺の遺構との関係、遺物から推定される当住居跡の時期は5世紀前半である。



第280図 9区2号住居跡



第281図 9区2号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
520	高杯 土師器	器高: [53mm] 口径: (170mm) 脚径: 一杯 部1/3残。	径1~2mmの砂粒を含む。 軟質・酸化・赤褐。	体部~口縁部は直線的に開く。内面:口 縁部~体部は横なで後縦範磨き、底部 はなで。外面:口縁部は横なで、部分的 に縦範磨きが残リ、体部~底部はなで。	南壁中央脇床直。

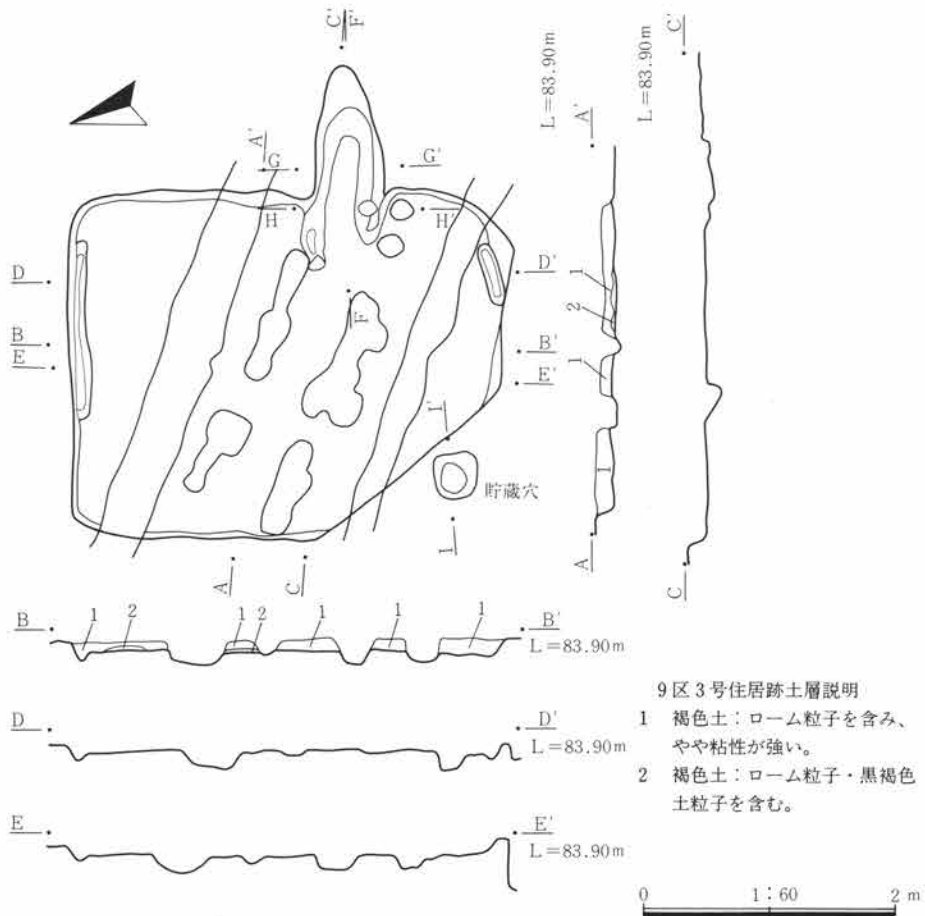


9区3号住居跡

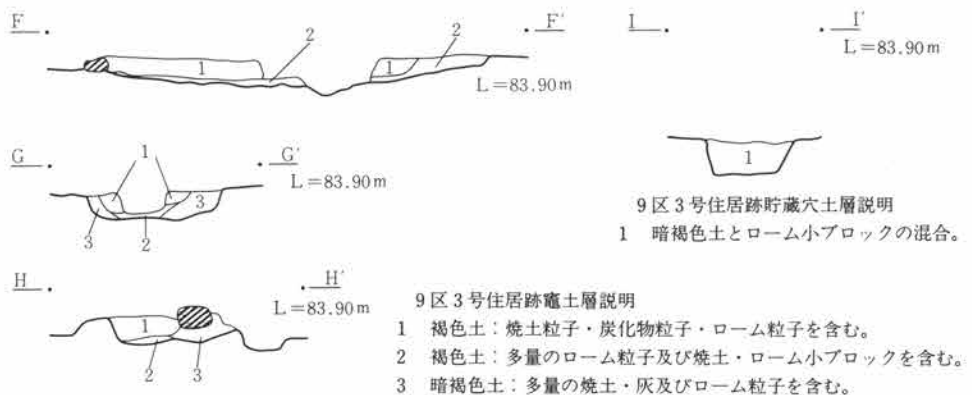
当住居跡は、8区6号住居跡・8区17号住居跡が近接するが、重複はない。当住居跡の規模は、東西約2.8m・南北約3.5mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-107°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約5~10cmであり、残存状態は悪い。床面は、所々現代の耕作により破壊されているが、竈を中心に比較的硬く、ほぼ平坦である。壁溝は、北壁の東より部分と南壁の南東隅付近から検出できた。規模は、幅約10~15cm・床面からの深さ約5cmである。

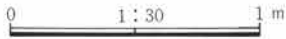
竈は、東側壁のやや南よりに築かれている。袖は大部分が破壊されていたが、左袖の先端部と右袖の基部は、河原石を用いて固めていた。煙道部の壁外への張り出しは約100cmであり、燃烧部からは焼土・灰の堆積・煙道部からは焼土が検出できた。柱穴は検出できなかった。住居跡内の南西隅からはピットが1基検出できた。規模は、一辺約35cm・床面からの深さ約40cmであり、平面形は不整形な方形を呈する。貯蔵穴と考えることも可能である。

当住居跡からは遺物の出土も無く、時期の限定は困難であるが、住居跡の形態・周囲の遺構との関係から推定する当住居跡の時期は、平安時代である。



第282図 9区3号住居跡



第283図 9区3号住居跡竈断面図、貯蔵穴断面図 

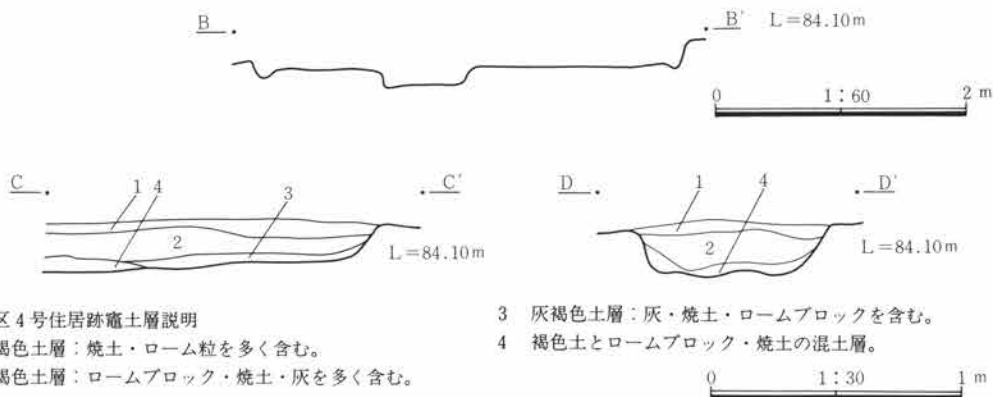
### 9区4号住居跡

当住居跡は、9区11号土坑と重複する。新旧関係は、当住居跡の方が古い。西隅は調査区の境であり、コーナーは検出できなかった。また、西壁から竈前にかけては攪乱が入っている。

規模は東西約3.3m・南北約3.6mであり、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-117°-Eである。残存壁高は14~22cmを測る。柱穴は確認されない。周溝は竈部分を除き全周する。竈前の床面は硬くつき固めている。床面には深さ20cmの土坑が確認されているが、床下土坑と考えられる。

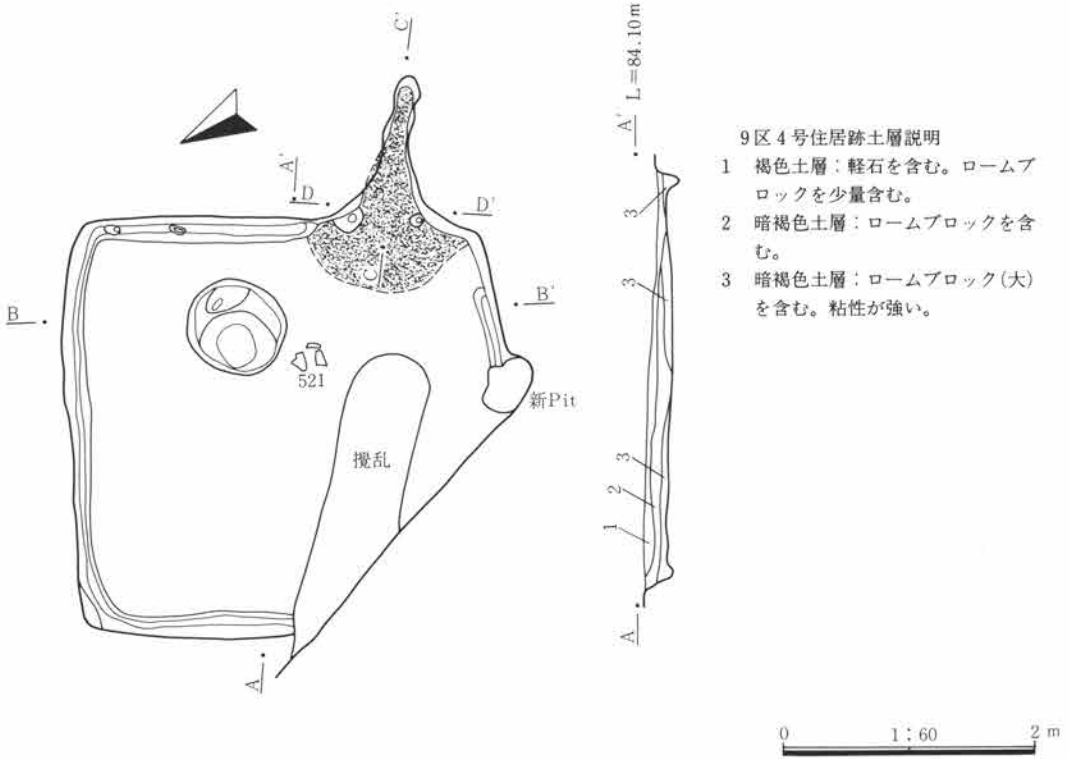
竈は東壁南隅に構築されており、燃烧部は壁外に設けている。煙道は壁外に117cm張り出している。住居壁との境には、袖石の抜き取り穴が認められる。竈内と竈前は焼土化が進んでいる。

出土遺物は少なく、図示できるものは土釜（521）一点のみである。

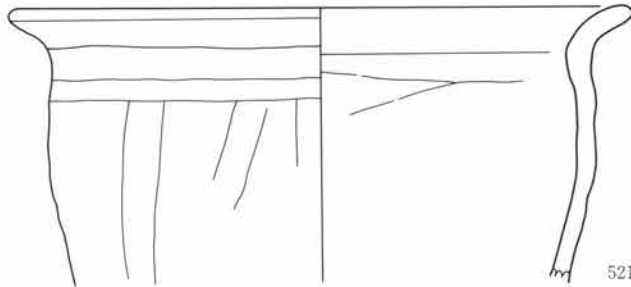


第284図 9区4号住居跡エレベーション図、竈断面図 

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(9区3・4号住)



第285図 9区4号住居跡



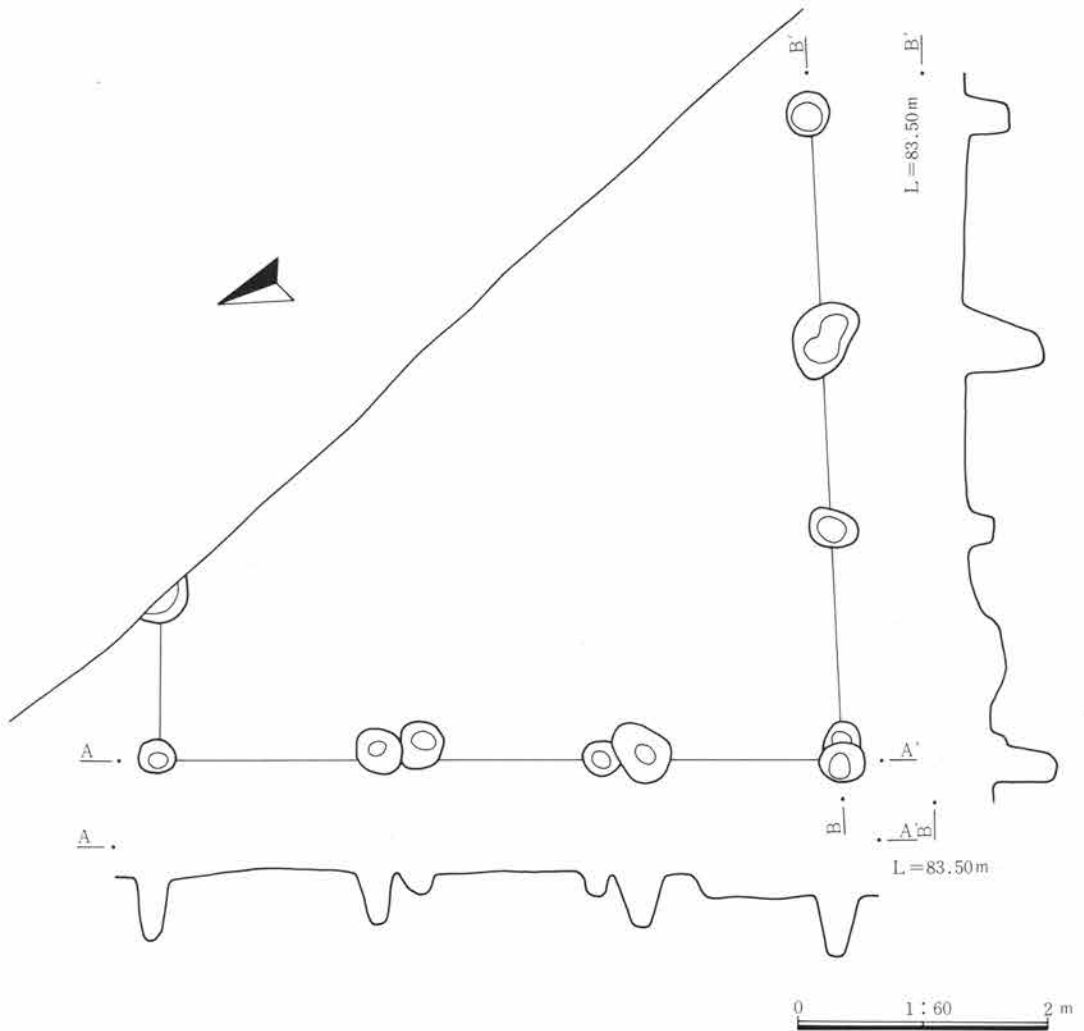
第286図 9区4号住居跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
521	土釜	器高:[110mm] 口径: (250mm) 1/6残。	細砂～径3mmの礫多く 含む。軟質。橙。	口縁部は外反する。口縁部は横なで。体 部内面はなで。体部外面は篋削り?	中央。器壁外面は 摩滅する。

6区1号掘立柱建物跡

ピット・土坑との重複があるが、新旧関係は不明である。

規模は確認部分で3間×3間であるが、東側が調査区外のため梁行・桁行は不明である。西側の柱筋はややずれている。柱穴の形状から、立て替えが行われていると推定される。柱穴内からの出土遺物はなく、時期は不明である。

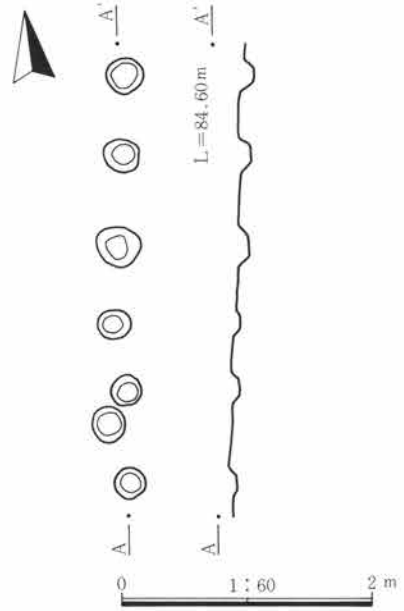


第287図 6区1号掘立柱跡

10区1号柱穴列

当柱穴列は、当遺跡の北端で検出され、他遺構との重複はない。

ピットは6基確認され、深さは6~10cmを測る。主軸方位はN-15°-Eである。付近にはピットが4基存在するがいずれも当柱穴列とは覆土が異なり、別遺構である。

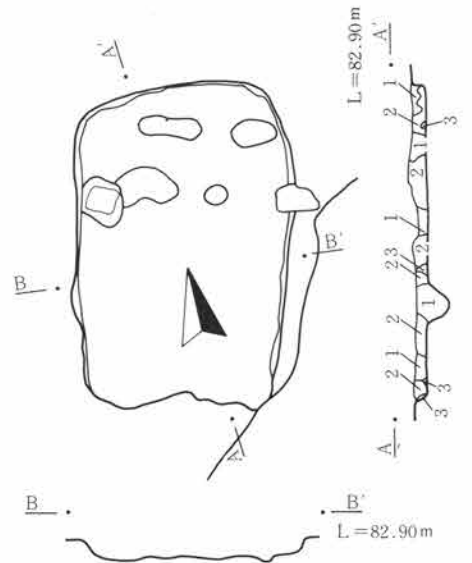


第288図 10区1号柱穴列

1区1号小竪穴跡

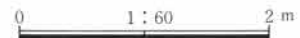
当小竪穴跡は、他遺構との重複はないが、1区2号溝に0.9mと近接する。

規模は東西1.6m・南北2.5m・深さ10~16cmを測る。主軸方位はN-9°-Eである。底部は攪乱により凹凸があるものの、概ね平坦である。出土遺物はなく、時期は不明である。



1区1号小竪穴跡土層説明

- 1 耕作土層。
- 2 暗褐色粘質土層：炭化物・ローム粒を含む。
- 3 暗黄褐色粘質土層。



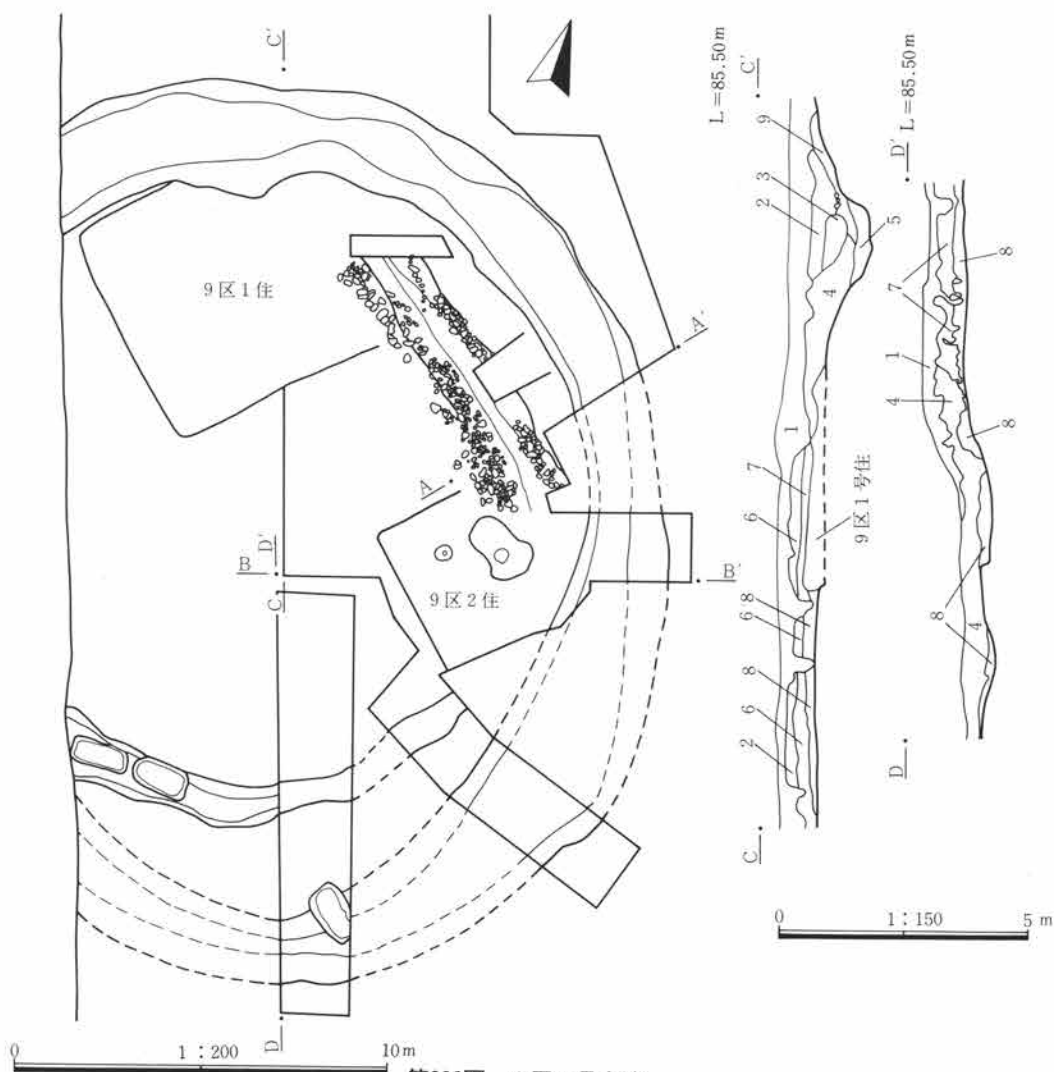
第289図 1区1号小竪穴跡

9区1号古墳

当古墳は、9区1号住居跡・9区2号住居跡と重複する。9区1号住居跡との新旧関係は、同住居跡の確認面が当古墳の墳丘下になることから、当古墳の方が新しい。9区2号住居跡との新旧関係は、同住居跡の確認面が当古墳の墳丘下になることから、当古墳の方が新しい。

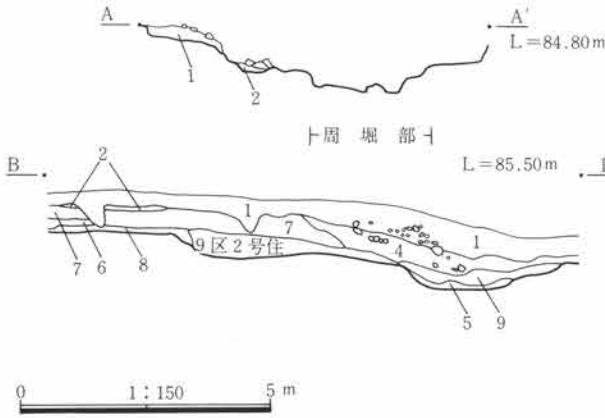
当古墳の規模は、墳丘径約20m・周堀を含めた径約25mであり、円墳と推定される。周堀の規模は、確認面での幅約2~3m・確認面からの深さは最大で約1.2mである。墳丘部は大部分が削平されているために、主体部を検出することはできなかった。墳丘の北東部からは葦石の残りと考えられる拳大から径40~50cmの河原石が検出でき、周堀内からは葦石が崩れたものと考えられる河原石が検出できた。

遺物は、周堀内から円筒埴輪・形象埴輪が出土している他、手捏土器などが出土している。周囲の遺構との関係・古墳の形態・遺物等から推定する当古墳の時期は6世紀である。



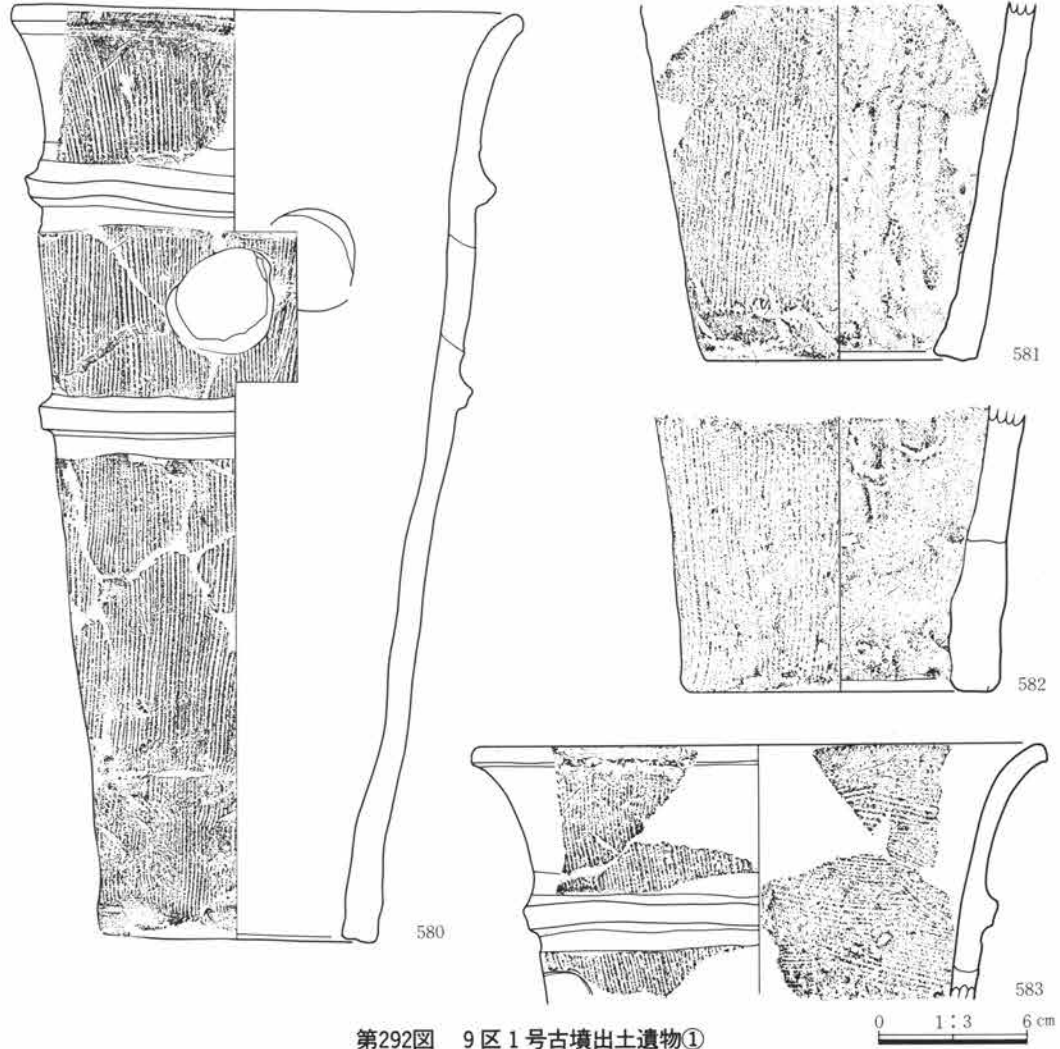
第290図 9区1号古墳

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(9区1号古墳)

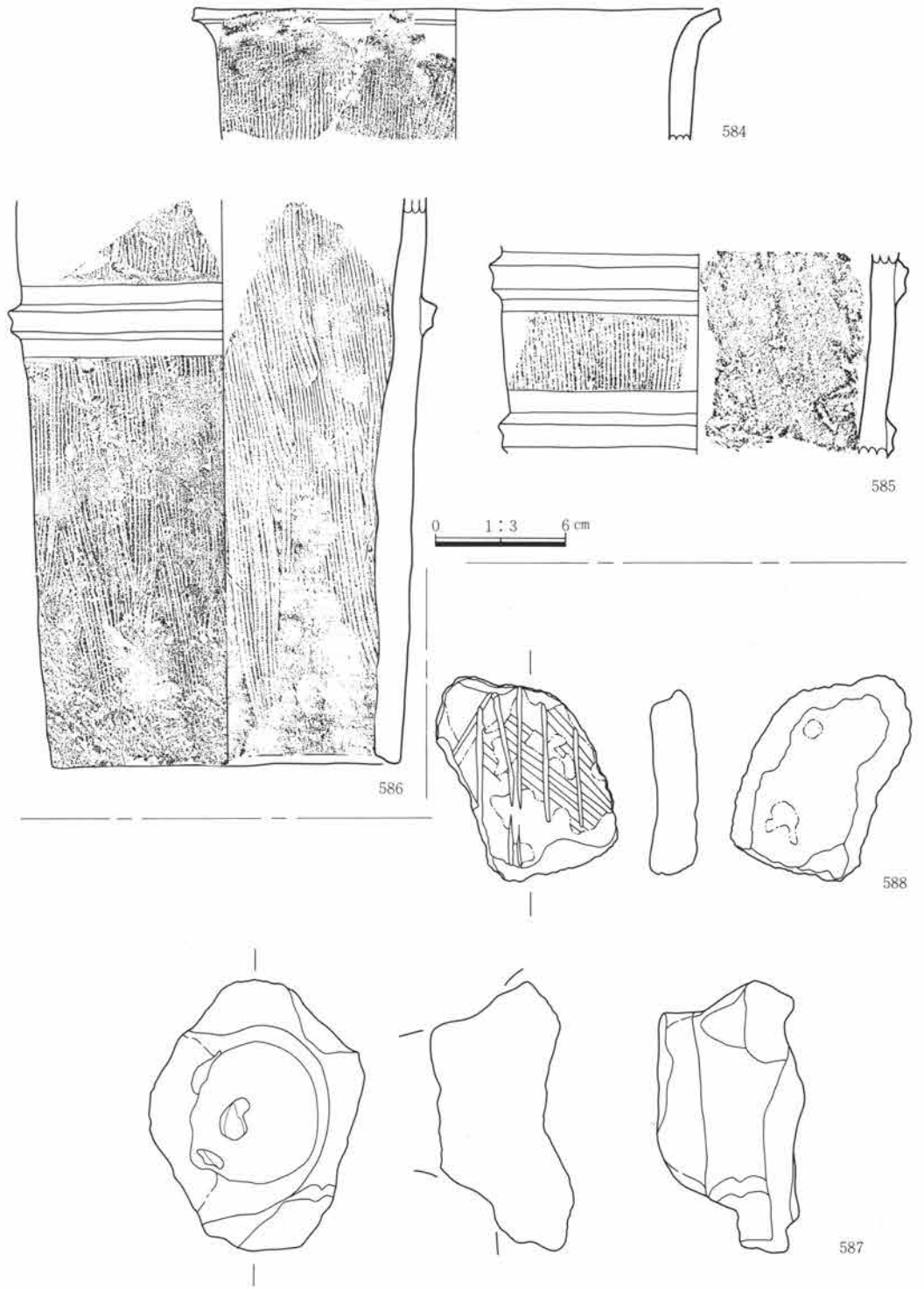


- 9区1号古墳土層説明
- 1 暗灰色砂質土：多量の軽石および小礫を含む。耕作土。
  - 2 暗褐色砂質土：少量の軽石および小礫を含む。
  - 3 黒褐色砂質土：少量の軽石およびローム粒子を含む。
  - 4 褐色砂質土：少量の礫・円礫を含む。
  - 5 褐色粘質土：ロームブロック・黒褐色土ブロックを含む。
  - 6 黄褐色粘質土。
  - 7 黒褐色粘質土。
  - 8 ソフトローム。
  - 9 茶褐色粘質土：軽石を少量含む。

第291図 9区1号古墳断面図



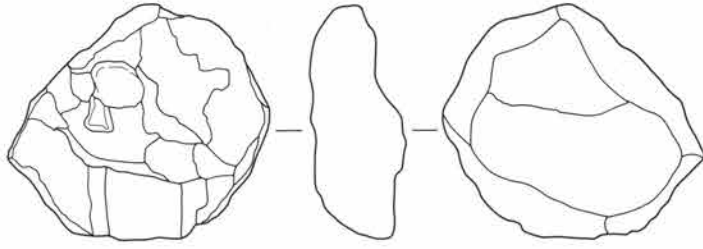
第292図 9区1号古墳出土遺物①



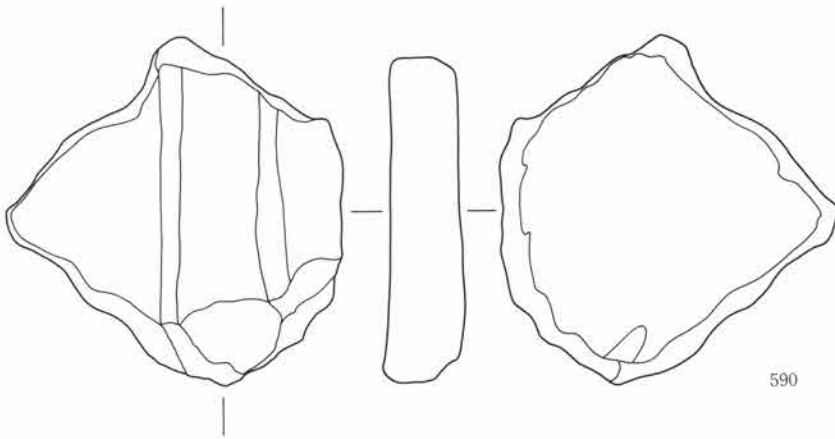
第293図 9区1号古墳出土遺物②

0 1:2 4 cm

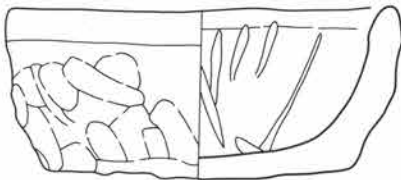




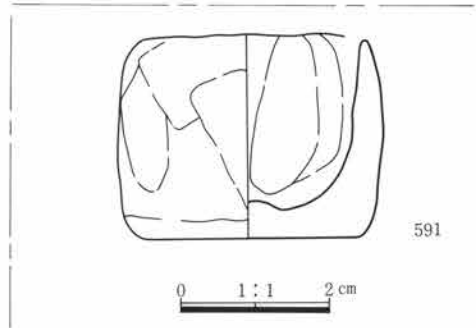
589



590



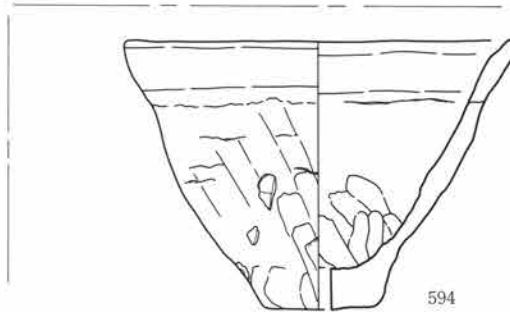
593



591

0 1:2 4 cm

0 1:1 2 cm



594

第294図 9区1号古墳出土遺物③

0 1:3 6 cm

第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
580	埴 円 輪 筒	器高:373mm 口径: (207mm) 底径:111mm 口縁部～底部3/4残。	径4～5mmの小石及び砂 粒を含む。やや硬質。酸 化。橙。	口縁端部はやや外湾。箍は2段。箍の 間に円形透かし2カ所。内面はなで、外 面は縦刷毛目。	周溝北側覆土。
581	埴 円 輪 筒	器高:[143mm] 口径: — 底径:110mm 体部 下半～底部3/4残。	径4～5mmの小石及び砂 粒を含む。やや硬質。酸 化。橙。	内面はなで、外面は縦刷毛目。	周溝。
582	埴 円 輪 筒	器高:[115mm] 口径: — 底径:123mm 体部 下半～底部2/3残。	径4～5mmの小石及び砂 粒を含む。やや硬質。酸 化。橙。	内面はなで、外面は縦刷毛目。内面に輪 積み痕が残る。	周溝。
583	埴 円 輪 筒	器高:[103mm] 口径: (234mm) 底径:— 口 縁部～体部上端1/8残。	径3～4mmの小石及び砂 粒を含む。やや硬質。酸 化。鈍い橙。	口縁端部はやや外湾。箍は上段部分の み残り、円形透かしも1カ所のみ残る。 内面は横刷毛目。外面は縦刷毛目。	周溝。
584	埴 円 輪 筒	器高:[60mm] 口径: (244mm) 底径:— 口 縁部1/8残。	径4～5mmの小石及び砂 粒を含む。やや硬質。酸 化。鈍い黄橙。	口縁端部は外湾。箍・透かしは不明。内 面は横刷毛目。外面は縦刷毛目。	埴丘覆土。
585	埴 円 輪 筒	器高:[92mm] 口径:— 底径:— 体部小片。	径3～4mmの小石及び砂 粒を含む。やや硬質。酸 化。鈍い黄橙。	箍は2段残る。内面はなで。外面は縦刷 毛目。	周溝。
586	埴 円 輪 筒	器高:[260mm] 口径: — 底径:(162mm) 体 部～底部1/6残。	径4～5mmの小石及び砂 粒を含む。やや硬質。酸 化。明赤褐。	箍は1段残る。透かしは不明。内外面共 に体部～底部は縦刷毛目。	内外面に油煙付 着。
587	埴 形 輪 象	小片。	径2～3mmの砂粒を含 む。硬質。酸化。明赤褐。	人物又は動物埴輪の一部か?	周溝内南部。
588	埴 形 輪 象	小片。	径2～3mmの砂粒を含 む。硬質。酸化。橙。	外面に赤色顔料塗布。器材埴輪の一部 か?	
589	埴 形 輪 象	小片。	径3～4mmの小石及び砂 粒を含む。硬質。酸化。 赤褐。	外面に黒色顔料塗布。人物埴輪の一部 か?	
590	埴 形 輪 象	小片。	径3～4mmの小石及び砂 粒を含む。硬質。酸化。 鈍い赤褐。	内面はなで。器材埴輪の一部か?	
591	手づくね 土器	器高:27mm 口径:(32 mm) 底径:30mm 口縁 部～底部2/3残。	径1～2mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。橙。	口縁部は僅かに内湾。内面:口縁部～底 部は指なで、指頭痕が残る。外面:口縁 部～体部は指なで指頭痕が残り、底部 はなで。	
593	鉢 土師器	器高:47mm 口径:105 mm 底径:84mm 口縁 部～底部1/2残。	径1～2mmの砂粒を含 む。軟質。酸化。浅黄橙。	手づくね土器に近い製法。内面:口縁部 は横なで、体部はなで後縦篋磨き、底部 はなで。外面:口縁部は横なで、体部は 指なで、指頭痕が残り、底部は木葉痕。	周溝内北。

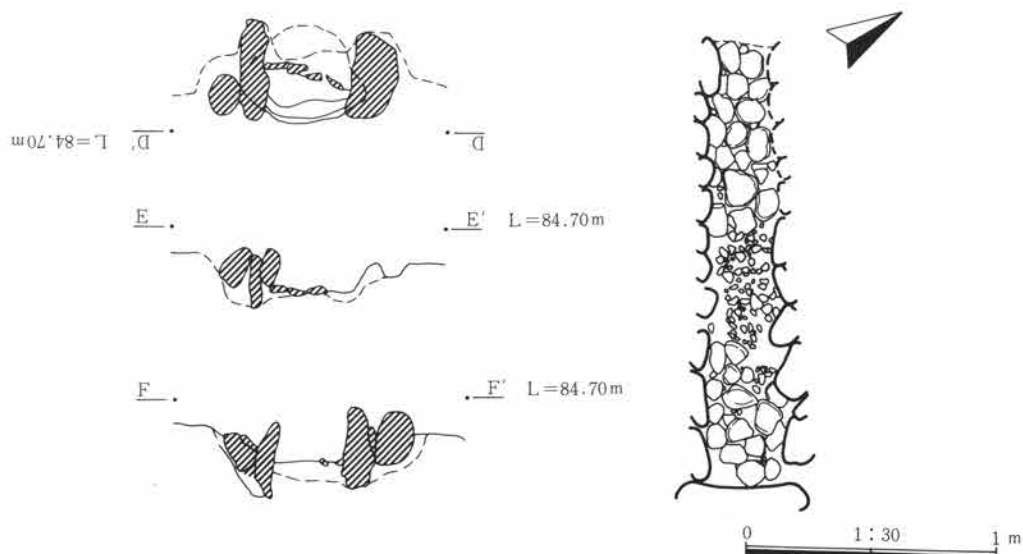
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
594	甑 土師器	器高:108mm 口径: (158mm) 底径:47mm 孔径:7mm 口縁部~底 部1/3残。	径2~3mmの砂粒を含 む。軟質。酸化。鈍い褐。	体部~口縁部は直線的に開く。底部は 焼成前の穿孔。内面:口縁部は横なで、 体部はなで、体部下端~底部は指なで、 指頭痕が残る。外面:口縁部は横なで、 体部~底部はなで。	周溝内北。内外面 に油煙附着。

### 10区1号石槨

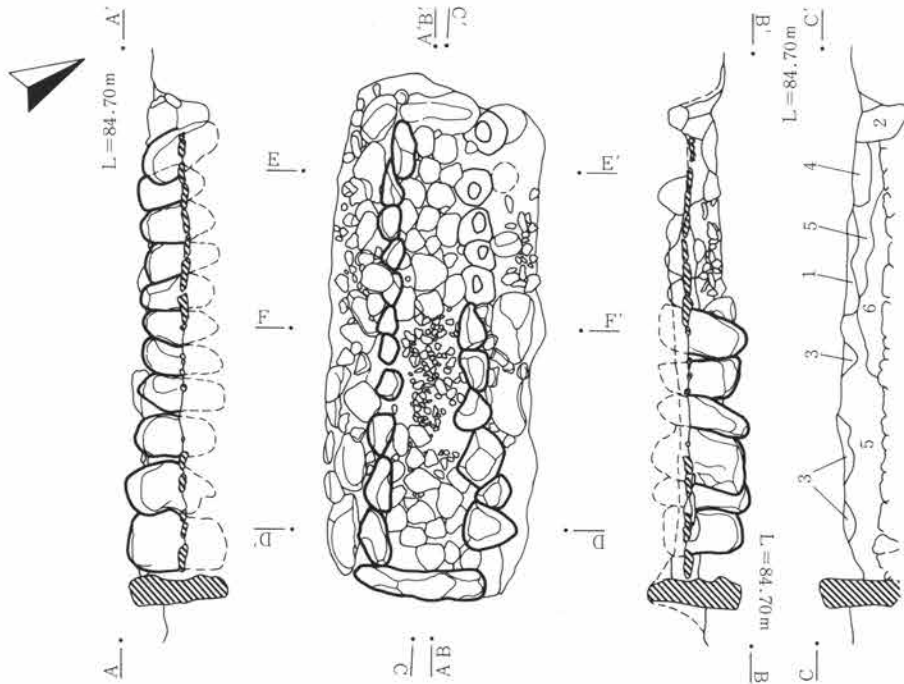
当石槨は、9区1号溝・10区2号溝が近接するが、重複は無い。当石槨の規模は、東西約0.8m・南北約2.1mであり、石槨内部の規模は、東西約0.25~0.35m・南北約1.75mである。石槨内部の平面形は、西側が狭く、東側が広がった長方形を呈する。主軸はN-62°-Wである。

石槨は、上部は破壊されており、側壁の最下段・底面の敷石・裏込め石を確認することができた。側壁は、板状に近い大きな石を石槨内部の底面から約15~20cm地山に埋め込んでおり、東側の側壁は長軸約55cm・短軸約40cmの石を使用していた。側壁のうち西側と北側の西半分は石が引き抜かれており、検出できなかったが、石を埋め込んだ穴を確認することができた。側壁の外側は、拳大~径25cmを越える石を裏込めとして用い、側壁の補強としている。また、側壁内部の底面は、拳大の石から径15cmの平な石を敷き詰めてあるのを確認できた。

掘形の規模は、東西約0.85m・南北2.25mであり、石槨内部の底面部分が高く、側壁・裏込め部分で掘り込まれているのを確認できた。当石槨からは遺物の出土がなく、時期は不明である。

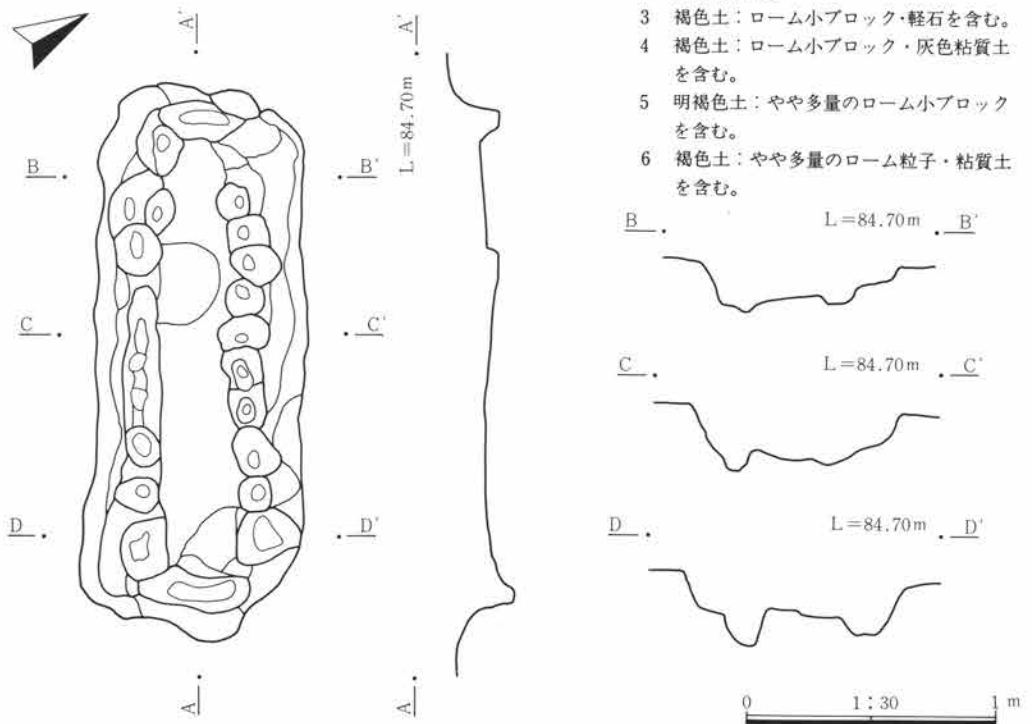


第295図 10区1号石槨平面図・断面図



10区1号石柵土層説明

- 1 暗灰褐色土：軽石・灰色粘質土を含む。
- 2 暗褐色土：ローム粒子・褐色粘質土ブロック・灰色粘質土ブロックを含む。側壁の抜き穴。
- 3 褐色土：ローム小ブロック・軽石を含む。
- 4 褐色土：ローム小ブロック・灰色粘質土を含む。
- 5 明褐色土：やや多量のローム小ブロックを含む。
- 6 褐色土：やや多量のローム粒子・粘質土を含む。

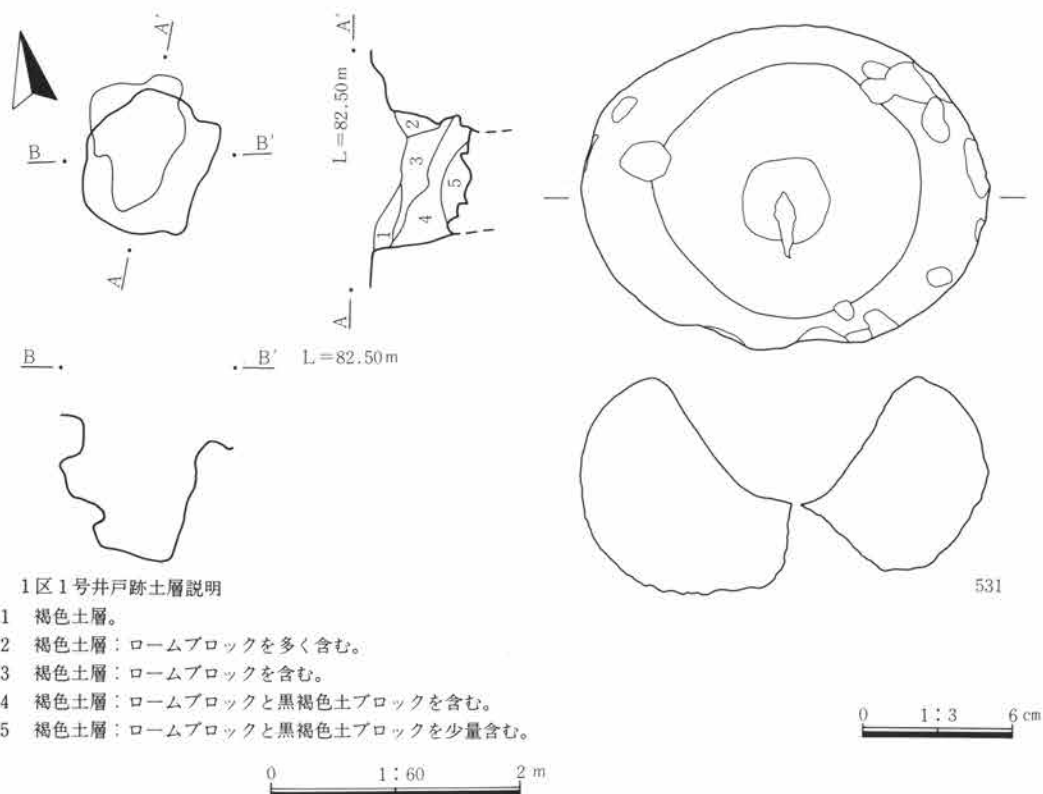


第296図 10区1号石柵平面図・側面図・断面図、掘形平面図・エレベーション図

### 1区1号井戸跡

当井戸は、1区3号溝内に位置し、同溝と重複する。溝との新旧関係は不明である。

平面形は長軸1.1m・短軸0.9mの不整楕円形である。深さは溝底部から1.12m、溝の確認面からでも1.5mと浅い。出土遺物は、中世の所産と考えられる用途不明軽石製品(531)のみである。



1区1号井戸跡土層説明

- 1 褐色土層。
- 2 褐色土層：ロームブロックを多く含む。
- 3 褐色土層：ロームブロックを含む。
- 4 褐色土層：ロームブロックと黒褐色土ブロックを含む。
- 5 褐色土層：ロームブロックと黒褐色土ブロックを少量含む。

第297図 1区1号井戸跡

第298図 1区1号井戸跡出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
531	用途不明 石製品	長:164mm 幅:131mm 厚:87mm 重:1000g 下面中央一部欠。	軽石(二ツ岳)。	楕円形を呈する軽石の一面にくぼみを造る。くぼみ内面は凹凸があり、磨ってくぼんだものではない。	覆土。

7区1号井戸跡

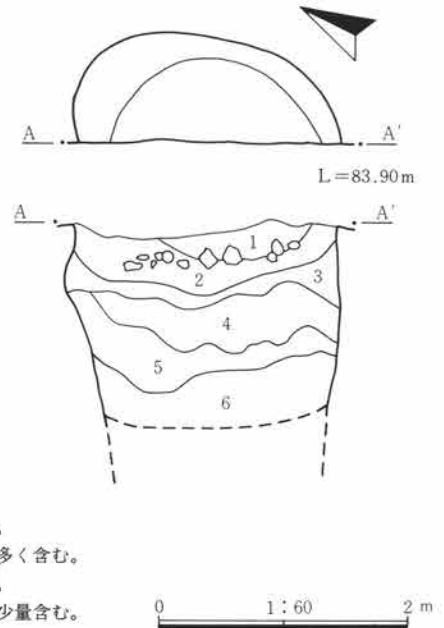
当井戸は、他遺構との重複はないが、7区5B号住居跡に20cmと近接する。

西側が調査区外のため、規模・平面形は不明であるが、径2.1m前後の円形を呈していたと考えられる。安全上の問題から完掘出来なかったため、深さは不明である。出土遺物はなく時期は不明。

7区1号井戸跡土層説明

- 1 暗褐色土層：軽石と礫を多く含む。
- 2 暗褐色土層：軽石を多く含む。
- 3 黒褐色土層：黒色土とロームブロックを含む。
- 4 黒褐色土層：黒色土とロームブロックをやや多く含む。
- 5 黄褐色土層：ロームを主体とし、4層を含む。
- 6 黄褐色土層：ロームを主体とし、暗褐色土を少量含む。

第299図 7区1号井戸跡

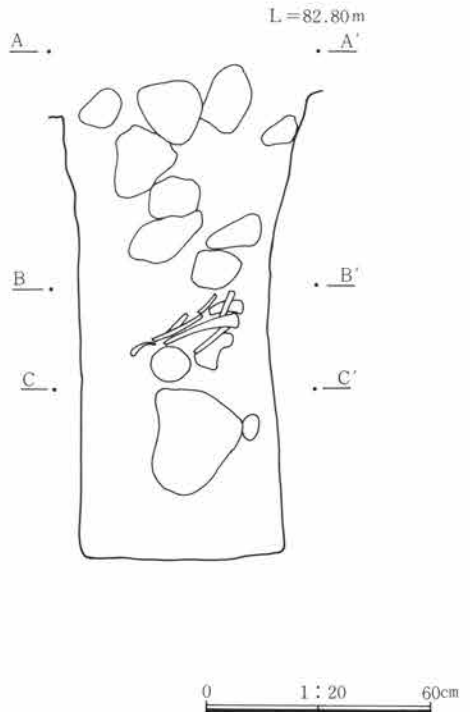


6区1号墓壇

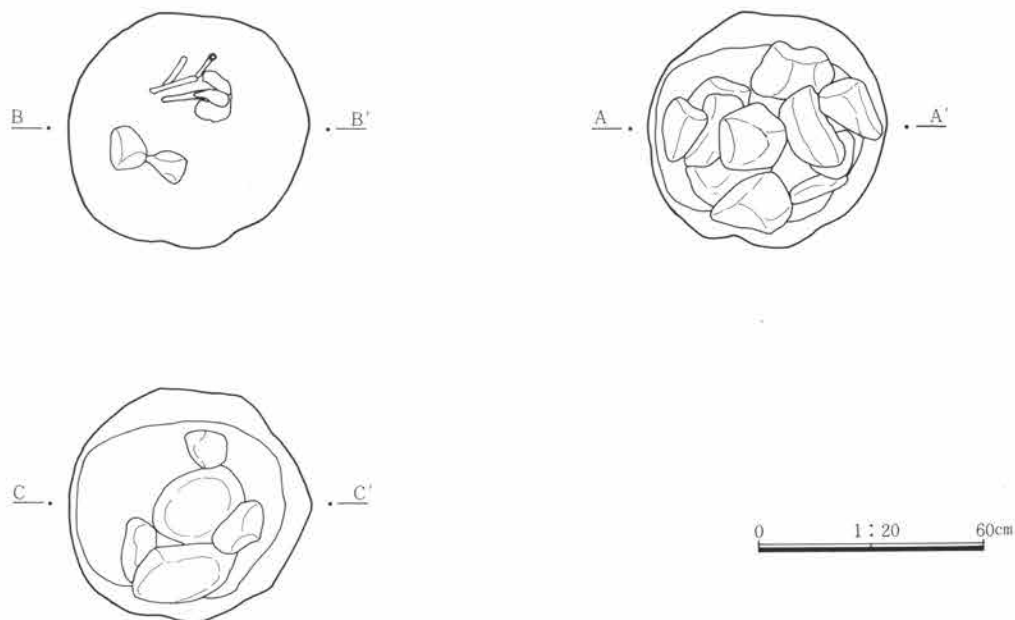
当墓壇は、他遺構との重複はないが、6区3号住居跡に1m、6区5号住居跡に40cm、6区3号溝に1.2mと近接する。

平面形は径85cmの円形を呈し、深さは1.64mを測る。人骨は底部から63～93cmの間で検出されており、底面からはかなり浮いている。骨の出土状態から、埋葬体位は側臥屈曲位と推定される。

埋葬人骨の出土状態から、当遺構は本来墓壇として構築されたものではなく、井戸墓として利用されたと考えられる。副葬品や出土遺物はない。



第300図 6区1号墓壇断面図

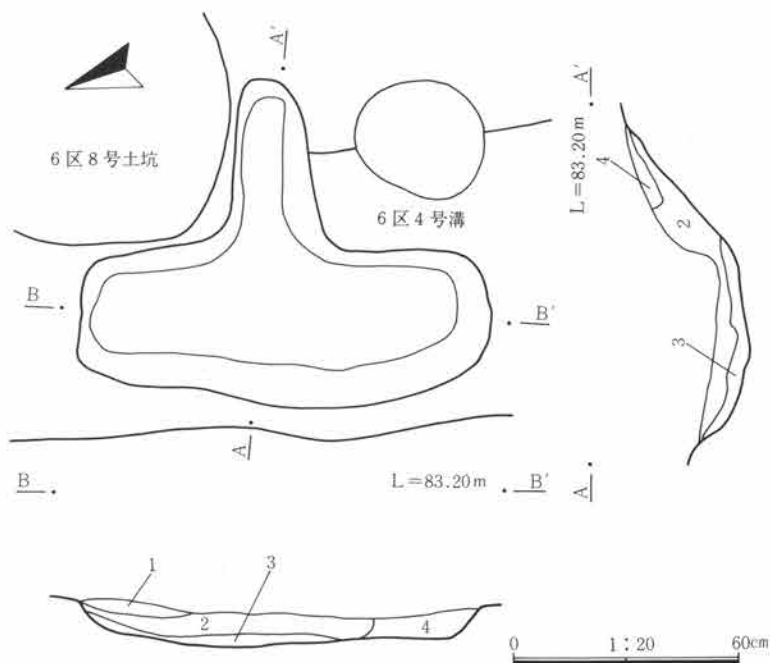


第301図 6区1号墓墳平面図

### 6区1号火葬跡

当火葬墓は、6区4号溝と重複し、6区8号土坑と近接する。新旧関係は、当火葬墓の方が古い。

平面形は、長方形土坑の長辺に煙道部を付けたT字形を呈する。方形部の規模は、長軸1.1m・短軸32~40cmを測る。残存壁高は10cmである。土坑部の主軸方位はN-19°-Eである。煙道部は壁外に43cm張り出し、底面は40°の角度を有している。煙道部確認面と土坑底面の比高差は31cmを測り、重複がなければ30cm



### 6区1号火葬跡土層説明

- 1 ロームブロックと灰・褐色土・焼土ブロックの混土層。
- 2 灰褐色土層：灰・炭化物・焼土を含む。
- 3 炭化物と灰の混土層。
- 4 ロームブロックと褐色土の混土層。

第302図 6区1号火葬跡

前後の深さを有していたと考えられる。

煙道部と、土坑部の煙道部付近は強く焼土化している。また、土坑の底部には灰と炭化物が多量に堆積し、中には骨片が認められた。

### 3区4号土坑

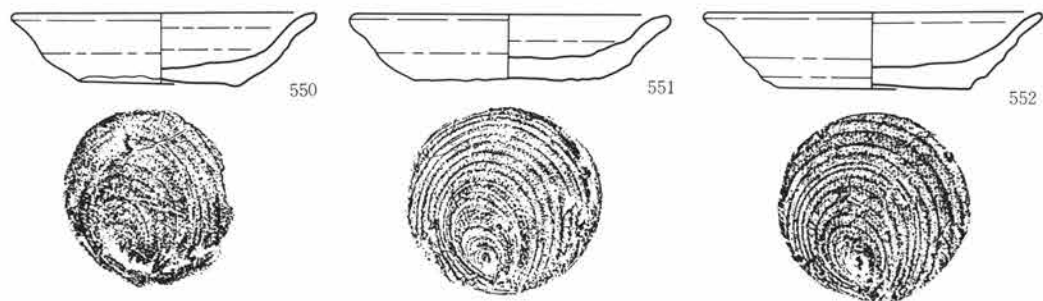
当土坑は、他遺構との重複はないが、3区2号溝に10cmと近接する。

西側半分は調査区外のため、規模・平面形は不明である。深さは22cmを測る。底部には、灰・焼土・炭化物と共に多くの皿形土器（549～556）や椀（557）が出土している。

当土坑は、調査時には3区1号墓とされていたが、土器の出土状態は、いずれも据え置かれた状態ではなく、骨も確認されていないため本報告では土坑として扱った。



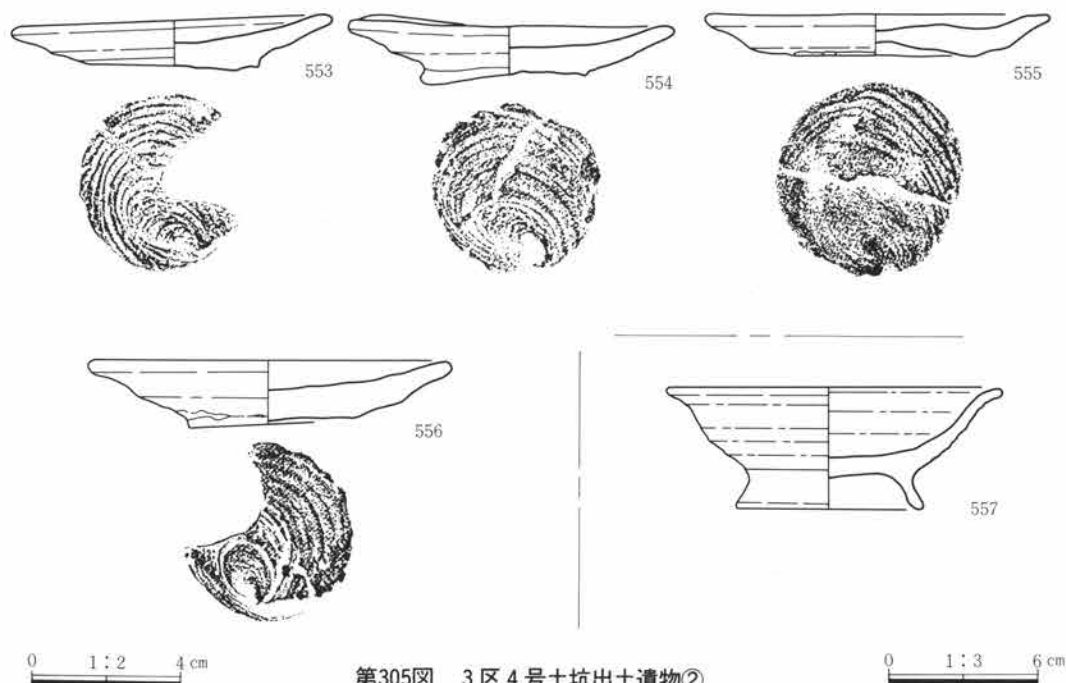
第303図 3区4号土坑



第304図 3区4号土坑出土遺物①



第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3区4号土坑・6区1号火葬跡)



第305図 3区4号土坑出土遺物②

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
549	皿 土師質土器	器高:22mm 口径:(94mm) 底径:56mm 口縁部1/5残・底部完形。	細砂～粗砂多く含む。普。浅黄橙。	口縁部は直線的に延びる。底部外面は糸切りの後、なで。	底面。
550	皿 土師質土器	器高:20mm 口径:80～83mm 底径:43mm 完形。	細砂～径2mmの礫含む。普。浅黄橙。	口縁部は外反する。底部外面右回転糸切り無調整。	底面。
551	皿 土師質土器	器高:18mm 口径:87mm 底径:50mm 口縁部一部欠。	細砂～径1mmの粗砂含む。普。浅黄橙。	口縁部は外反する。底部外面右回転糸切り無調整。	底面。
552	皿 土師質土器	器高:20mm 口径:91mm 底径:51mm 完形。	細砂～粗砂含む。普。淡黄。	口縁部は外反する。底部外面右回転糸切り無調整。	底面。
553	皿 土師質土器	器高:12mm 口径:82mm 底径:46mm 1/4欠。	細砂～粗砂含む。普。酸化。灰白。	口縁部は直線的に開く。底部外面右回転糸切り無調整。	底面。
554	皿 土師質土器	器高:13～19mm 口径:87mm 底径:44mm 完形。	細砂～粗砂含む。普。浅黄橙。	口縁部は直線的に開く。底部外面右回転糸切り無調整。底部の接合部は隙間があり、焼成前にひびが入っていたと思われる。	底面。

第IV章 発見された遺構と遺物

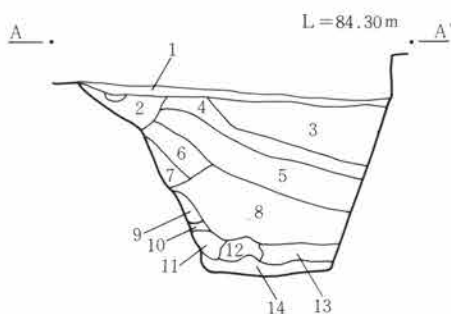
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
555	皿 土師質土器	器高:11mm 口径:92mm 底径:47mm 完形。	細砂～粗砂含む。普。浅黄橙。	口縁端部は外反する。底部外面右回転糸切り無調整。底部の接合部は隙間があり、焼成前にひびが入っていたと思われる。	底面。
556	皿 土師質土器	器高:17mm 口径:97mm 底径:55mm 1/4残。	細砂～粗砂含む。普。浅黄橙。	口縁端部は外反する。底部外面右回転糸切り無調整。	底面。
557	椀 土師質土器	器高:49mm 口径:135mm 底径:75mm 口縁部1/4欠。	細砂～径3mmの礫含む。やや軟質。浅黄橙。	口縁部は外反する。体部は内湾する。高台は高い。高台貼り付け時に糸切り痕、殆どまで消す。	底面。

9区10号土坑

当土坑は、深さ3～5cmを測る竪穴状遺構と重複し、9区4号住居跡に70cmと近接する。新旧関係は、当土坑の方が新しい。

当土坑は、短軸で3.5mを測る大型土坑であり、深さも1.4mと深い。平面形は東側が調査区外のため不明であるが、楕円形を呈すると考えられる。土坑の底部は硬く平坦で、平面形は長方形を呈する。

土坑底部と覆土中層には焼土や炭化物が多く認められたが、壁は焼土化しておらず土坑内で火を焚いたとは考えられない。遺物はすべて古式土師器であり、中層の焼土・炭化物層(4層)より上層(1～3層)から出土している。



- 5 暗褐色土層：ローム粒を含む。
- 6 褐色土層：黒色土ブロックを含む。
- 7 褐色土層：黄褐色砂質土ブロックを含む。
- 8 暗褐色土層：ロームブロックと炭化物を含む。
- 9 7層と同様である。
- 10 暗褐色土層：ローム粒と炭化物を含む。
- 11 7層と同様である。
- 12 褐色土層：黒色土ブロックと焼土ブロックを含む。
- 13 明褐色粘質土層。
- 14 暗褐色土ブロック・明褐色砂ブロック・焼土ブロック・炭化物・ロームブロックの混土層。

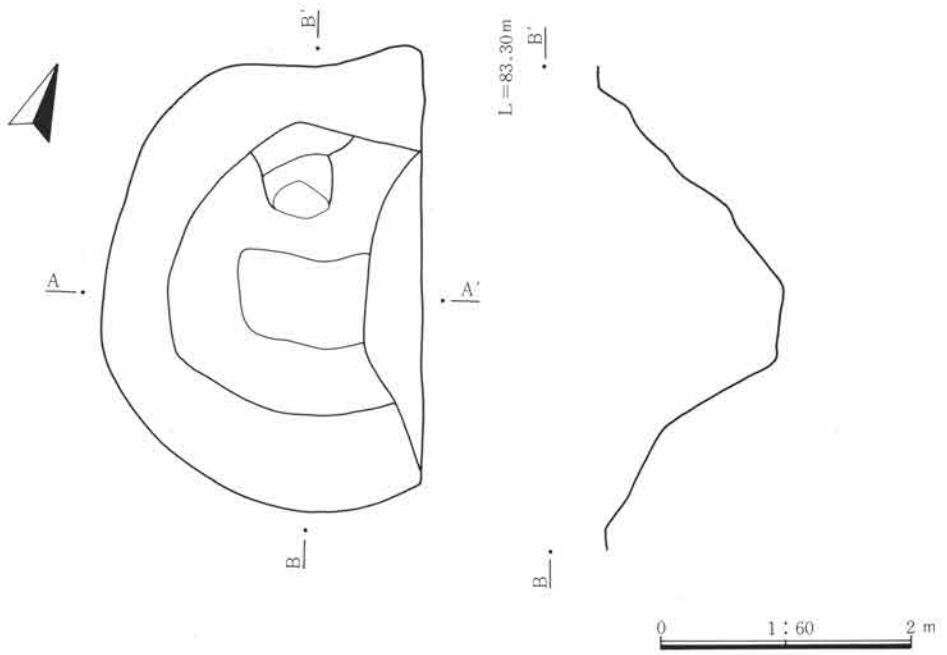
9区10号土坑土層説明

- 1 黒褐色土層：軽石を含む。ロームブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土層：ロームブロックを含む。
- 3 黒褐色土層：軽石とローム粒を含む。
- 4 暗褐色土層：炭化物と焼土粒を多く含む。

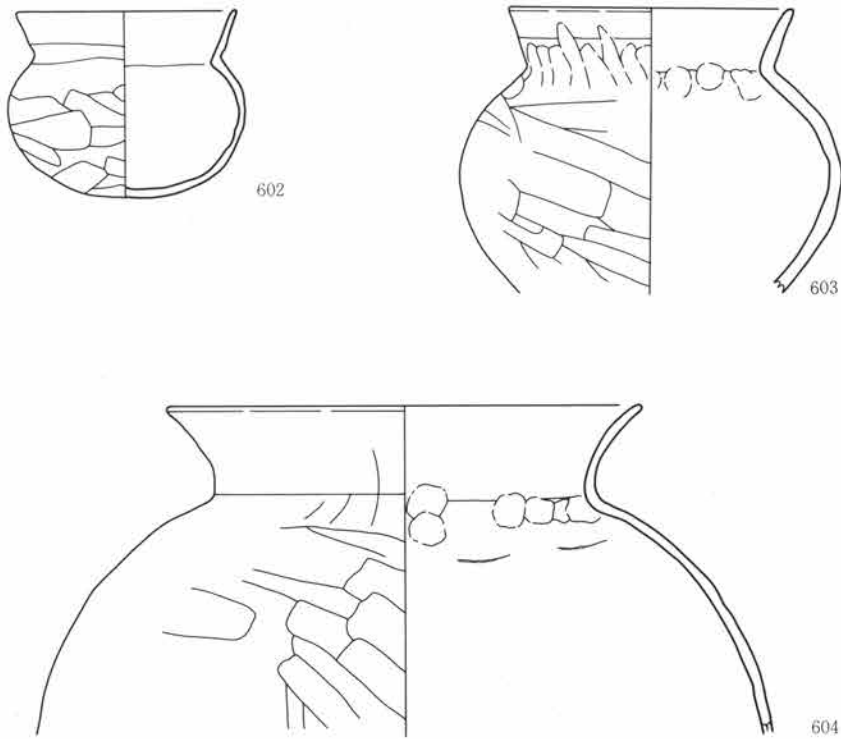


第306図 9区10号土坑断面図

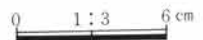
第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(9区土坑)



第307図 9区10号土坑



第308図 9区10号土坑出土遺物



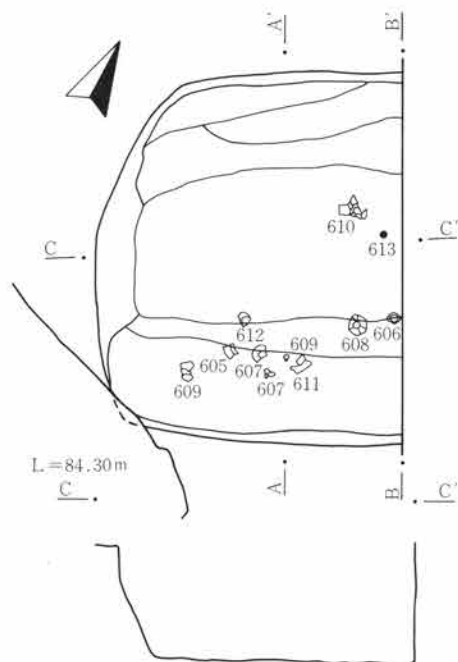
第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
602	柑 土師器	器高:75mm 口径:89mm 底径:— 最大径:95mm ほぼ完形。	径2~3mmの砂粒を含む。硬質。酸化。鈍い黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾。丸底。最大径は体部上半。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで、一部指なで、指頭痕が残る。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	土坑内覆土。
603	甕 土師器	器高:[114mm] 口径: (114mm) 底径:— 最大径:(154mm) 口縁部~体部1/3残。	径3~4mmの小石及び砂粒を含む。軟質。酸化。赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部上半。内面:口縁部は横なで、頸部は指なで、指頭痕が残る、体部はなで。外面:口縁部上半は横なで、口縁部下半~頸部は篋なで、体部は篋削り。	土坑内覆土。内外面に油煙付着。
604	甕 土師器	器高:[131mm] 口径: 192mm 底径:— 口縁部~体部上半1/3残。	径2~3mmの砂粒を多量に含む。やや軟質。酸化。鈍い赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで、頸部に指頭痕が残る。外面:口縁部は横なで、体部上半は篋削り。	土坑内覆土。外面に油煙付着。

9区11号土坑

当土坑は、9区10号土坑の北約3.1mに位置し、9区4号住居跡と重複する。新旧関係は、当土坑の方が古い。

平面形は東側が調査区外のため不明であるが、短軸2.9mの長方形を呈すると考えられる。深さは86cmを測る。底部は平坦で、長方形を呈する。底部と覆土中層(4層)には炭化物と焼土が多く認められ、中層の炭化物層より上層(2・3層)からは多量の遺物が出土している。



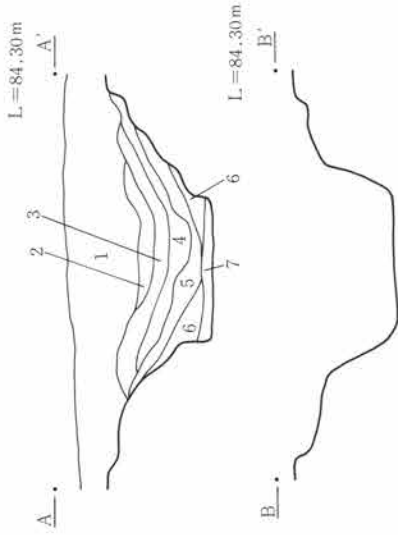
第309図 9区11号土坑

9区10号土坑同様、出土土器はすべて古式土師器であり遺存率も高い。土器以外では管玉(613)が出土している。

当土坑は、9区10号土坑と規模・主軸方位をほぼ同じくし、覆土・遺物の出土層位・遺物の時期等共通点が多く、同時期に同じ目的で構築されたものと考えられる。

9区10・11号土坑上層の古式土師器は、遺存率が高いうえにかなりまとまって出土しており、これらの土坑に伴う可能性が高い。

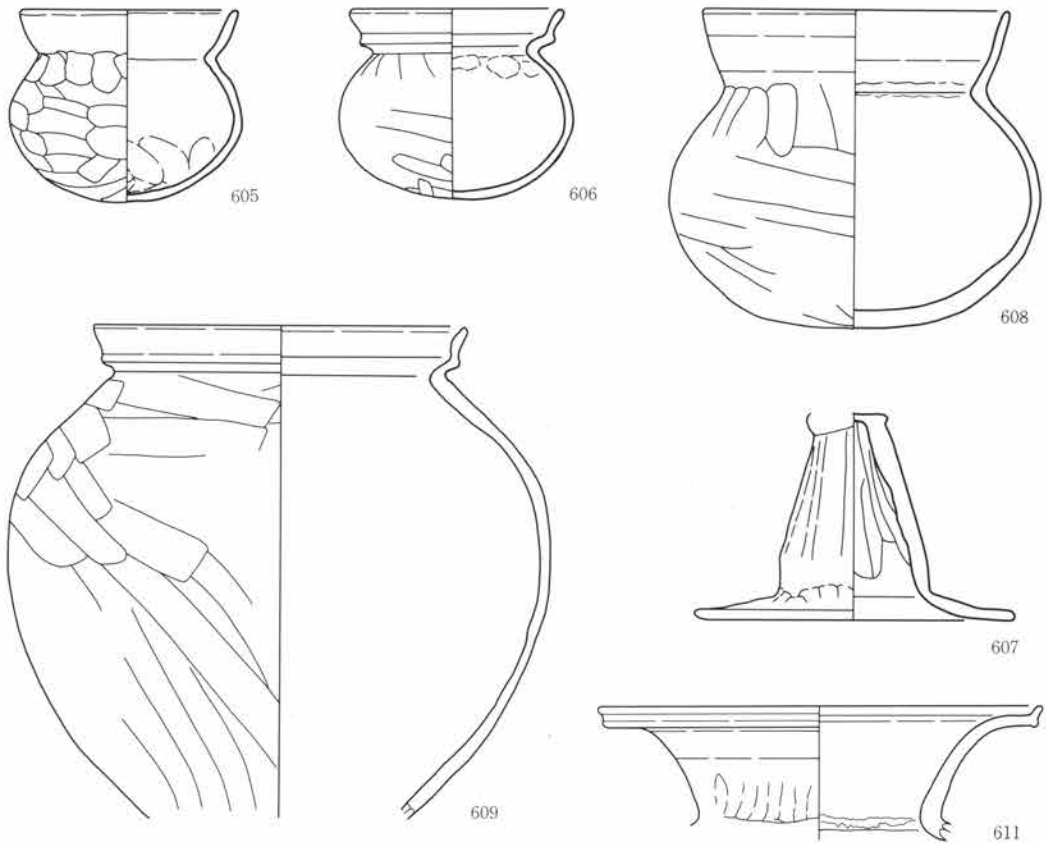
第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(9区土坑)



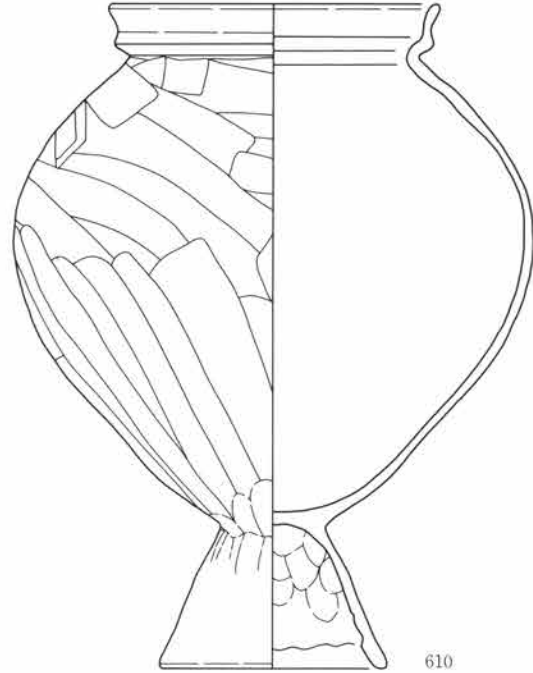
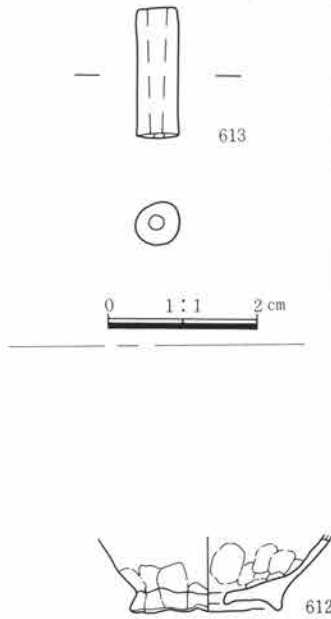
9区11号土坑土層説明

- 1 暗褐色土層：軽石を含む。
- 2 暗褐色土層：軽石を少量含む。焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土層：ロームブロックを含む。
- 4 黒褐色土層：炭化物を多く含む。
- 5 暗褐色土層：炭化物粒とローム粒を含む。
- 6 褐色土層：ロームブロックと炭化物粒を含む。
- 7 暗褐色土層：炭化物を多く含む。焼土粒を含む。

第310図 9区11号土坑断面図・エレベーション図



第311図 9区11号土坑出土遺物①



第312図 9区11号土坑出土遺物②

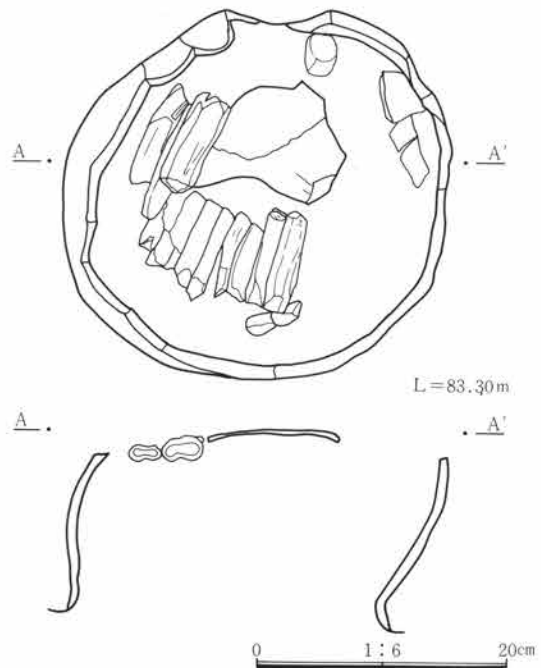
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
605	埴 土師器	器高:77mm 口径:88mm 底径:— 最大径:94mm 完形。	径1~2mmの砂粒を含む。硬質。酸化。明赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾。丸底。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部はなで、底部は指なで、指頭痕が残る。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	土坑内南西部。内外面に油煙付着。
606	埴 土師器	器高:77mm 口径:(86mm) 底径:— 最大径:95mm 口縁部~底部2/3残。	径1~2mmの砂粒を多量に含む。やや硬質。酸化。黄橙。	口縁部は「S」字状。丸底。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。	土坑内中央部。内外面に油煙付着。二次炎を受けている。
607	高杯 土師器	器高:[83mm] 口径:— 脚径:130mm 底部~脚部残。	径2~3mmの砂粒を含む。硬質。酸化。橙。	脚部は漏斗状に開く。内面:脚部上半は指なで、指頭痕が残り、脚部下半は篋削り。外面:底部はなで、脚部上半は篋削り後なで、脚部下半は横なで。	土坑内南西部。内外面に油煙付着。二次炎を受けている。
608	埴 土師器	器高:128mm 口径:123mm 底径:— 最大径:151mm 口縁部~底部残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。丸底。最大径は体部中央。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで。	土坑内中央部。
609	台付甕 土師器	器高:[197mm] 口径:152mm 脚径:— 最大	径1~2mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍	口縁部は「S」字状。最大径は体部上半。内面:口縁部は横なで体部はなで。外	土坑内南西部。内外面に油煙付着。

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3区1号馬骨埋納甕・9区土坑)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
610	台付甕 土師器	径:(220mm) 口縁部～ 体部1/2残。 器高:266mm 口径:134 mm 脚径:92mm 最大 径:210mm 口縁部～脚 部3/4残。	い褐。 径2～3mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。橙。	面:口縁部は横なで、体部は篋削り。 口縁部は「S」字状。最大径は体部上半。 脚部は「ハ」字状に開き、脚部下端は折 り返し。内面:口縁部は横なで、体部～ 底部はなで、脚部上半は指なで、指頭痕 が残り、脚部下半は横なで。外面:口縁 部は横なで、体部～脚部上半は篋削り、 脚部下半はなで。	二次炎を受けてい る。 土坑内中央部。内 外面に多量の油煙 付着。二次炎を受 けている。
611	壺 土師器	器高:[51mm] 口径: (180mm) 底径:一 口 縁部～体部上端1/3残。	径1～2mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。鈍 い黄橙。	口縁部は大きく外湾する。口縁端部は 外縁帯を持つ。内面:口縁部は横なで、 体部上端はなで。外面:口縁部上半は横 なで、口縁部下半～体部上端は縦篋な で。	土坑内中央部。
612	甌 土師器	器高:[30mm] 口径:一 底径:62mm 孔径:15mm 体部下端～底部残。	径1～2mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。鈍 い橙。	底部は凹状。穿孔は焼成前。内外面共に 体部下端はなで、底部は指なで、指頭痕 残る。	土坑内中央部。内 外面に油煙付着。 二次焼成を受けて いる。
613	管玉	長:18mm 径:6mm 孔 径:2mm 重:0.92g	変玄武岩。		土坑内中央部。

3区1号馬骨埋納甕

3区中央付近に位置するが、図面に若干不備があったため詳細な位置や方位は不明である。獣骨を入れた甕は単独で検出され、土坑等の掘り込みは確認されていない。甕は逆位で体部上位から口縁部が遺存しており、中には馬の歯が遺存していた。出土状態から土師器甕内に馬の顎骨を収めたものと考えられる。土師器甕と馬歯は所在不明のため、詳細は不明である。



第313図 3区1号馬骨埋納甕

土 坑

前項では、時期の明確な土坑について個別に説明を行ったが、本項では時期の不明確な土坑を一括して表で説明する。なお、表は検出された土坑総てを掲載しているが、平面図の掲載に際しては選択を行っている。

1区4号、3区1号、6区10号、7区8・9号、9区4号土坑は、不整形または不整長方形を呈する大型の土坑である。これらのうち1区4号、6区10号土坑は短辺の一方が浅くなり、3区1号、7区8号、9区4号土坑は長辺の一方が浅くなっている。また、6区10号、7区8・9号、9区4号土坑の覆土には、ローム層を主体とした層や崩壊したローム層が認められるなどの共通点があり、地下式土坑の可能性も考えられる。遺物は6区10号土坑から軟質陶器鉢、3区1号土坑から軟質陶器鉢と軟質陶器内耳鍋が出土しており、これらの土坑は形態・覆土・遺物から中世の所産とすることができる。9区1～3号土坑、9区5・6号土坑はいずれも土坑内に礫を充填しており、土坑の掘形は、9区2・3号土坑が楕円形・不整長方形であるのに対し、9区1・5・6号土坑は長方形である。これらの集石土坑は、分布と掘形の形態から、前者と後者の2群に分類できる。しかし、両者共に礫に混じって近世陶磁器が出土しており、構築時期に大きな隔たりはないと考えられる。

他の土坑については、時期・機能ともに不明である。

区	番号	平面形	方位	規 模(m)		遺 物	備 考	図番号
				長軸×短軸×深さ				
1	1	不整長方形	N-90°-E	1.1 × 0.6 × 0.62		なし		第314図
1	2	不整円形		2.7 × 2.7 × 0.97		須恵器杯・軟質陶器鉢		第314図
1	3	長 方 形?	N-70°-E	1.5 × 1.1' × 0.89		なし	不整形土坑と重複か?	第314図
1	4	不 整 形		3.4 × 2.4 × 1.41		なし		第314図
1	5	円 形?				なし		第314図
1	6	円 形		1.0 × 0.88 × 0.21		なし		第315図
1	7	楕 円 形	N-59°-W	0.81 × 0.7 × 0.72		なし		第315図
2	1	長 方 形	N-8°-W	4.12 × 1.32 × 0.31		なし	南東隅は調査区外。	第315図
2	4	不 整 形		0.89 × 0.46 × 0.2		なし	2区3号住居跡に近接する。	なし
2	5	長 方 形	N-26°-W	2.22 × 1.09 × 0.4		なし		第315図
3	1	不 整 形		4.42 × 3.42 × 1.4		軟質陶器鉢・内耳鍋・砥石	覆土上部には河原石が多く認められた。底平坦面は長方形を呈する。	第316図
3	5	不 明		? × 0.86 × ?		なし	6号土坑と重複し、本土坑が古い。	第316図
3	6	楕 円 形?		? × 0.9 × ?		土師質土器椀	5号土坑と重複し、本土坑が新しい。	第316図
3	7	不整円形		0.66 × 0.58 × ?		須恵器?杯		第316図



第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(土坑一覧表)

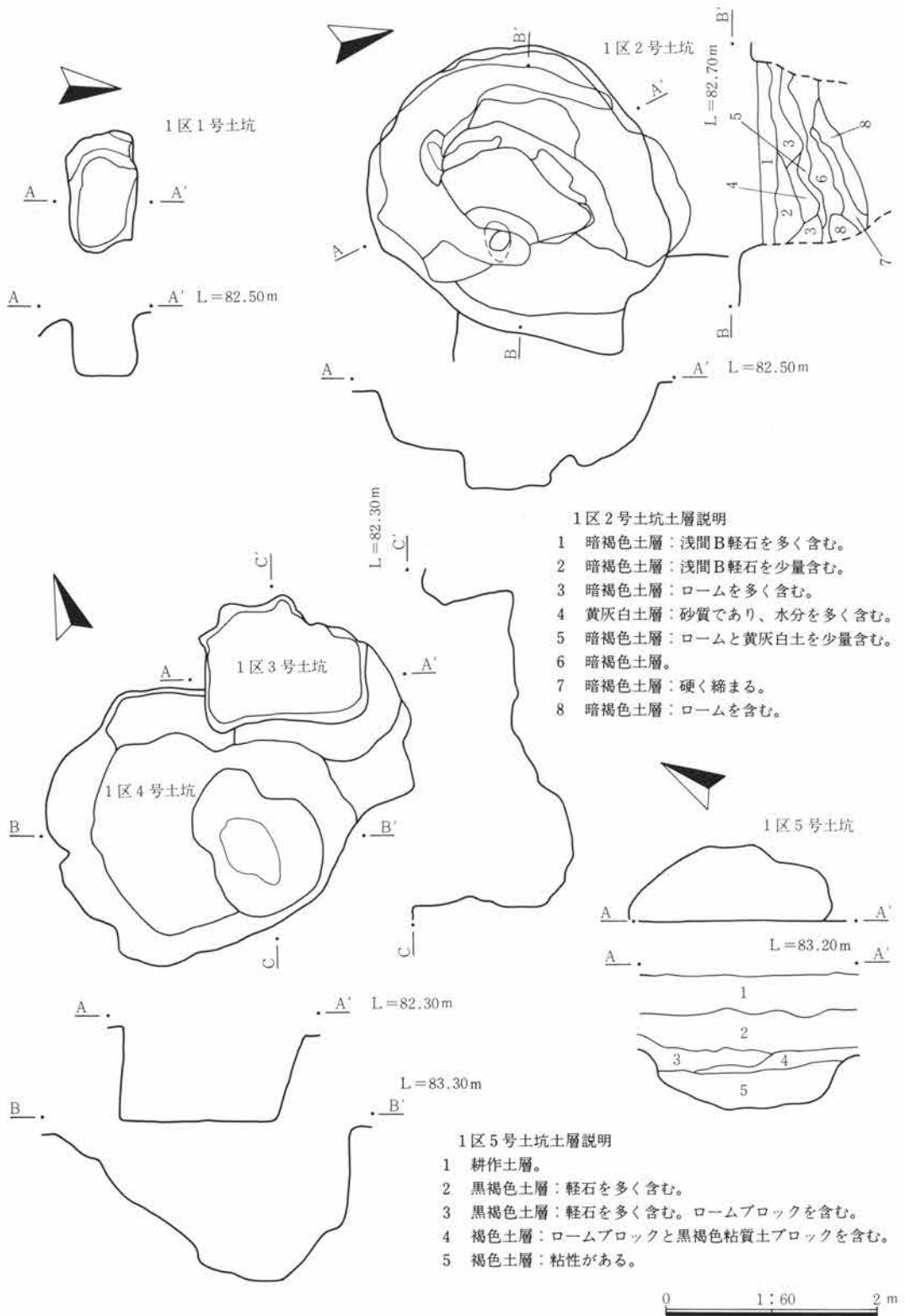
区	番号	平面形	方位	規模(m)	遺物	備考	図番号
				長軸×短軸×深さ			
4	1	楕円形?		1.83×1.36×0.14	軟質陶器壺	浅いためプランは不明瞭。	第317図
4	2	不整形	N-80°-W	1.71×1.34×0.32	なし		第317図
4	4	不整形		1.0 × 0.96 × 0.11	なし		なし
4	5	不整形		? × 0.7 × 0.28	なし		なし
4	6	円形		0.97×0.84×0.31	なし		第317図
4	7	不整形	N-1°-W	1.82×0.57×0.15	土師質土器皿	4区8号土坑と重複する。新旧は不明。	第317図
4	8	不整形		1.57×1.23×0.1	土師器埴・器台	4区7号土坑と重複する。新旧は不明。	第317図
4	9	楕円形	N-17°-W	1.11×0.85×0.28	なし		第317図
4	10	楕円形	N-4°-W	1.84×1.24×0.33	なし	4区1号溝と重複する。本土坑が古い。	第317図
5	1	長方形?		? × 0.9 × 0.12	須恵器椀	4区3号溝と重複する。新旧は不明。	第318図
5	2	円形		1.1 × 0.98 × 0.26	なし	ピット・土坑と重複する。新旧は不明。	第318図
5	3	円形		1.3 × 1.22 × 0.3	なし	5区9号住居跡と重複する。本土坑が古い。	第318図
5	4	不整形		1.42×1.24×0.22	なし	6区15号住居跡と重複する。新旧は不明。	第318図
5	5	円形		1.12×0.98×0.28	なし		第318図
5	6	不明		1.5 × ? × 0.14	なし	5区10号住居跡と重複する。新旧は不明。	第318図
5	7	不整形		? × 0.7 × 0.18	なし	ピットと重複する。新旧は不明。	第318図
6	1	不整形		2.12 × ? × 0.32	なし	西側は調査区外。	第319図
6	2	長方形	N-26°-W	0.8 × 0.6 × 0.49	なし	土坑と重複する。新旧は不明。	第319図
6	3	長方形	N-69°-W	1.36×0.9 × 0.44	なし		第319図
6	4	円形		0.9 × 0.9 × 0.13	なし		第319図
6	5	不整形	N-17°-W	1.23×0.3 × 0.06	なし		第319図
6	6	不整形	N-7°-E	0.93×0.7 × 0.11	なし	6区4号溝・ピットと重複する。新旧は不明。	第319図
6	7	楕円形	N-79°-W	0.9 × 0.5 × 0.92	なし	ピットと重複する。新旧は不明。	第319図
6	8	長方形	N-22°-E	0.78×0.66×0.24	なし	6区4号溝と重複する。新旧は不明。	第319図
6	9	不明		? × 0.8 × 0.04	なし	東は調査区外。	なし
6	10	不整形		3.16×2.4 × 1.23	軟質陶器鉢・土師器甕	6区5号住居跡と重複する。新旧は不明。底部の凹凸は著しい。	第319図

第IV章 発見された遺構と遺物

番号 区	平面形	方位	規模(m)		遺物	備考	図番号		
			長軸×短軸×深さ						
7	1	楕円形	N-5°-E	1.24×0.7	×0.08	なし	7区12号住居跡と重複する。新旧は不明。	第320図	
7	2	楕円形	N-54°-W	1.95×1.7	×0.46	なし	7区6号土坑と重複する。新旧は不明。	第320図	
7	3	不整長方形	N-89°-W	?	×1.9	×0.12	滑石製勾玉	7区5号土坑と重複し、本土坑が古い。西側は調査区外。	第320図
7	5	不明				なし	7区3号土坑と重複し、本土坑が新しい。	第320図	
7	6	長方形	N-89°-W	?	×1.05	×0.21	なし	7区2号土坑と重複する。新旧は不明。	第320図
7	7	不明		?	×?	×0.19	なし	ピットと重複し、本土坑が古い。土坑と重複する。新旧は不明。西側は調査区外。	第320図
7	8	不整長方形		3.52×2.7	×1.44	なし	6区5号溝・6区17号住居跡と重複する。6区17号住居跡より新しい。	第321図	
7	9	不明		?	×?	×1.32	なし	6区5号溝と重複する。新旧は不明。	第321図
7	10	不明		?	×0.8	×0.06	なし		第320図
7	11	長方形	N-77°-W	1.4	×1.1	×0.12	なし	ピットと重複する。新旧は不明。	第320図
7	12	不整長方形	N-6°-E	1.39×1.28	×0.53	なし	7区17号住居跡と重複する。	なし	
8	1	不整形		0.98×?	×0.2	なし	ピット・土坑と重複する。新旧は不明。	第322図	
8	2	不明		?	×?	×0.13	なし	西側は調査区外。	なし
8	3	不明		?	×0.55	×0.05	なし	8区1号土坑と重複する。新旧は不明。	なし
8	4	不整形		2.84×2.0	×0.28	なし	8区5号土坑・ピットと重複する。新旧は不明。	第322図	
8	5	長方形?		?	×0.86	×0.1	皇宋通寶	8区4号土坑と重複する。新旧は不明。	第322図
8	6	不明		?	×?	×0.16	なし	西側は調査区外。	なし
8	8	不整長方形	N-10°-W	1.2	×0.8	×0.16	なし	8区4号溝と重複する。新旧は不明。	第322図
8	9	円形		0.61×0.56	×0.31	なし		なし	
8	10	長方形?		?	×1.3	×0.28	なし	ピットと重複する。新旧は不明。西側は調査区外。	第322図
8	11	楕円形		?	×0.58	×0.21	土師器埴	ピットと重複する。新旧は不明。	第322図
8	12	不整形		?	×1.31	×0.19	なし	西側は調査区外。	なし
8	13	長方形?		?	×1.5	×0.19	なし	8区4号溝・8区8号土坑と重複する。新旧は不明。	なし
8	15	長方形?		?	×1.02	×0.56	なし	東半は不明。	第322図

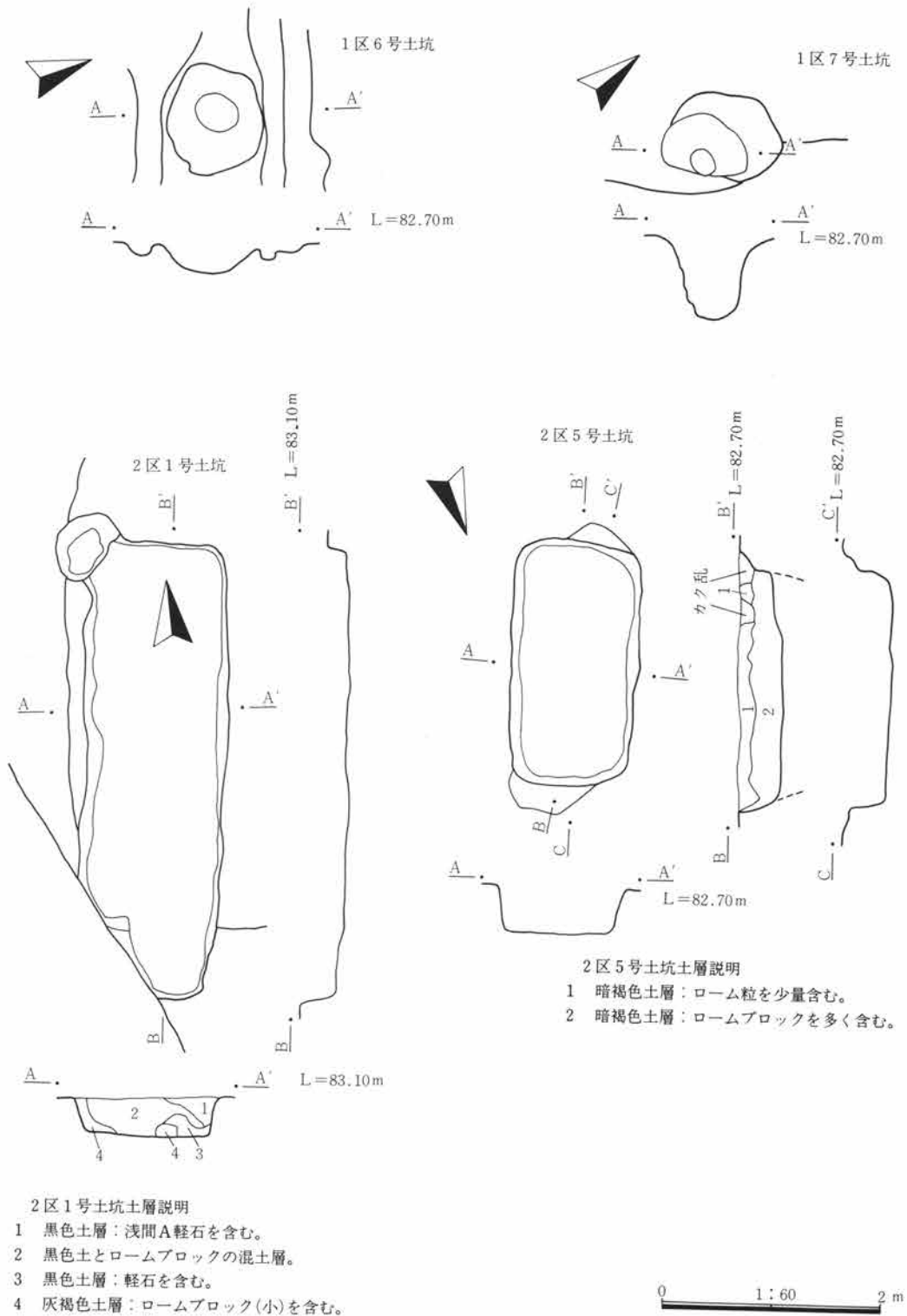
第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(土坑一覧表)

区	番号	平面形	方位	規模(m)	遺物	備考	図番号
				長軸×短軸×深さ			
8	16	長方形?		? × 1.0 × 0.4	なし	西側は調査区外。	第322図
8	17	楕円形	N-57°-W	1.7 × 0.66 × 0.19	なし	底部は凹凸がある。	第322図
8	18	楕円形	N-2°-E	0.82 × 0.7 × 0.04	なし		第322図
8	19	楕円形	N-8°-E	0.69 × 0.56 × 0.11	なし		第322図
8	20	円形		0.94 × 0.8 × 0.07	なし	8区17号住居跡と重複する。新旧は不明。	第322図
8	21	円形		2.16 × 2.0 × 0.66	なし	8区1号溝と重複する。新旧は不明。	第322図
9	1	長方形	N-66°-E	1.85 × 1.25 × 0.35	陶器播鉢	磑で埋められる。	第323図 第324図
9	2	楕円形		1.0 × 0.75 × 0.24	陶器碗、陶器花生	磑で埋められる。	第323図 第324図
9	3	不整形		1.92 × 0.56 × 0.1	なし	磑で埋められる。	第323図 第324図
9	4	不整形		3.27 × 3.13 × 1.43	なし	底部は長方形を呈する。9区14号土坑と重複する。本土坑が新しい。	第325図
9	5	長方形	N-86°-W	1.48 × 0.74 × 0.55	陶器土瓶?、陶器台付受け皿	磑で埋められる。	第323図 第324図
9	6	長方形	N-84°-E	1.47 × 0.67 × 0.4	陶器三島手鉢	磑で埋められる。	第323図 第324図
9	7	楕円形	N-42°-W	0.78 × 0.63 × 0.09	なし	9区8号土坑と近接する。	なし
9	8	楕円形	N-58°-W	1.11 × 0.78 × 0.26	なし	9区7号土坑と近接する。9区9号土坑と重複する。新旧は不明。	なし
9	9	楕円形	N-4°-E	0.65 × 0.55 × 0.19	なし	9区8号土坑と重複する。新旧は不明。	なし
9	14	不整形		2.11 × ? × 0.36	なし	9区4号土坑と重複する。本土坑が古い。	第325図
9	15	不整形	N-67°-W	1.25 × 0.8 × 0.15	なし	磑で埋められる。	第323図 第324図
9	16	不明		? × 0.86 × 0.07	なし	磑で埋められる。	第323図 第324図
10	1	長方形	N-39°-E	1.0 × 0.8 × 0.46	なし		第325図
10	2	不整形		1.26 × 0.6 × 0.12	なし		第325図
10	3	長方形?		? × ? × 0.3	なし		第325図
10	4	長方形	N-40°-W	3.56 × 0.86 × 0.1	なし		第325図
10	5	楕円形?		? × 0.96 × 0.11	なし	西側は調査区外。	第325図

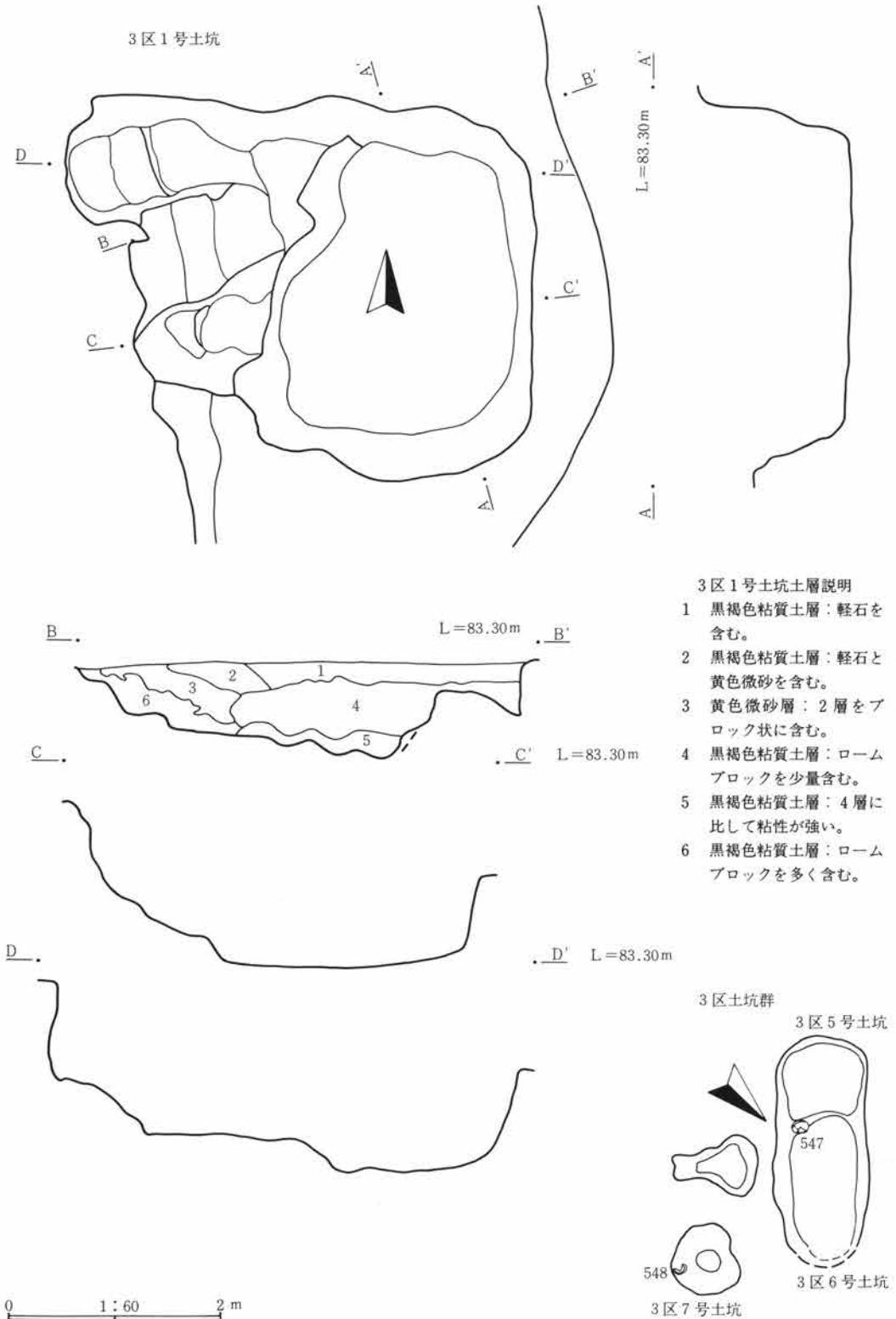


第314図 1区1号土坑・2号土坑・3号土坑・4号土坑・5号土坑

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(1・2区土坑・3区土坑・土坑群)

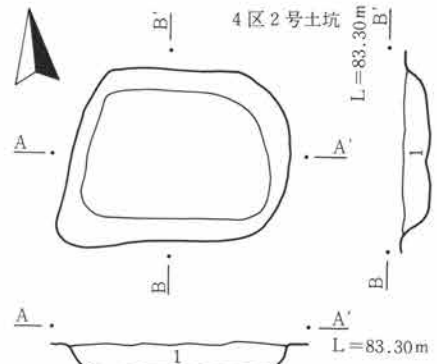
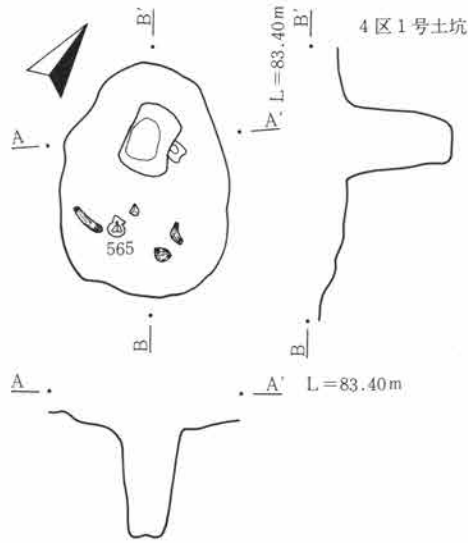


第315図 1区6号土坑・7号土坑、2区1号土坑・5号土坑



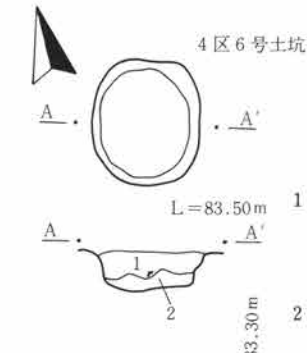
第316図 3区1号土坑・5号土坑・6号土坑・7号土坑

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(3・4区土坑)



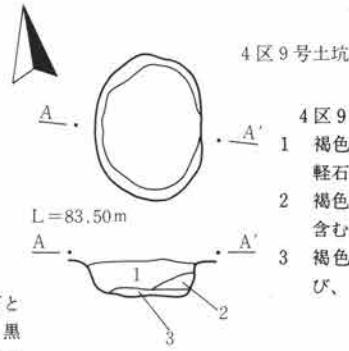
4区2号土坑土層説明

- 1 褐色土層：浅間B軽石とロームブロックを含む。



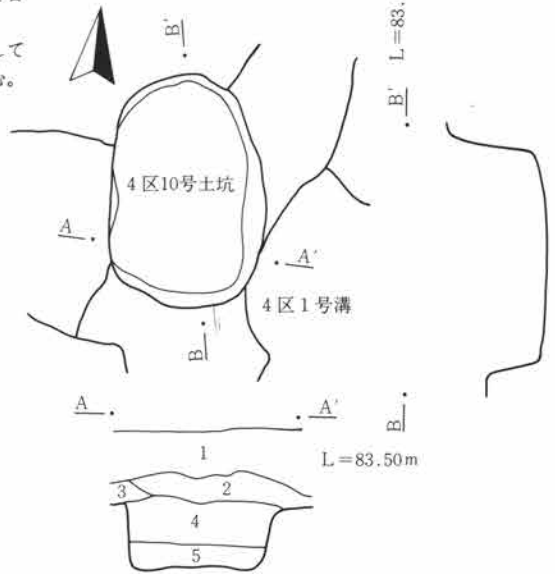
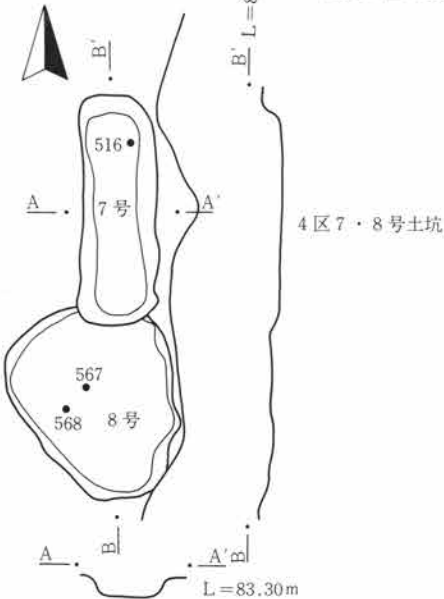
4区6号土坑土層説明

- 1 褐色土層：浅間B軽石とロームブロック(小)・黒褐色粘質土ブロックを含む。  
2 褐色土層：1層に比して浅間B軽石を少量含む。



4区9号土坑土層説明

- 1 褐色土層：ロームブロックと軽石を含む。  
2 褐色土層：ロームブロックを含む。  
3 褐色土層：やや灰色味を帯び、ロームブロックを含む。



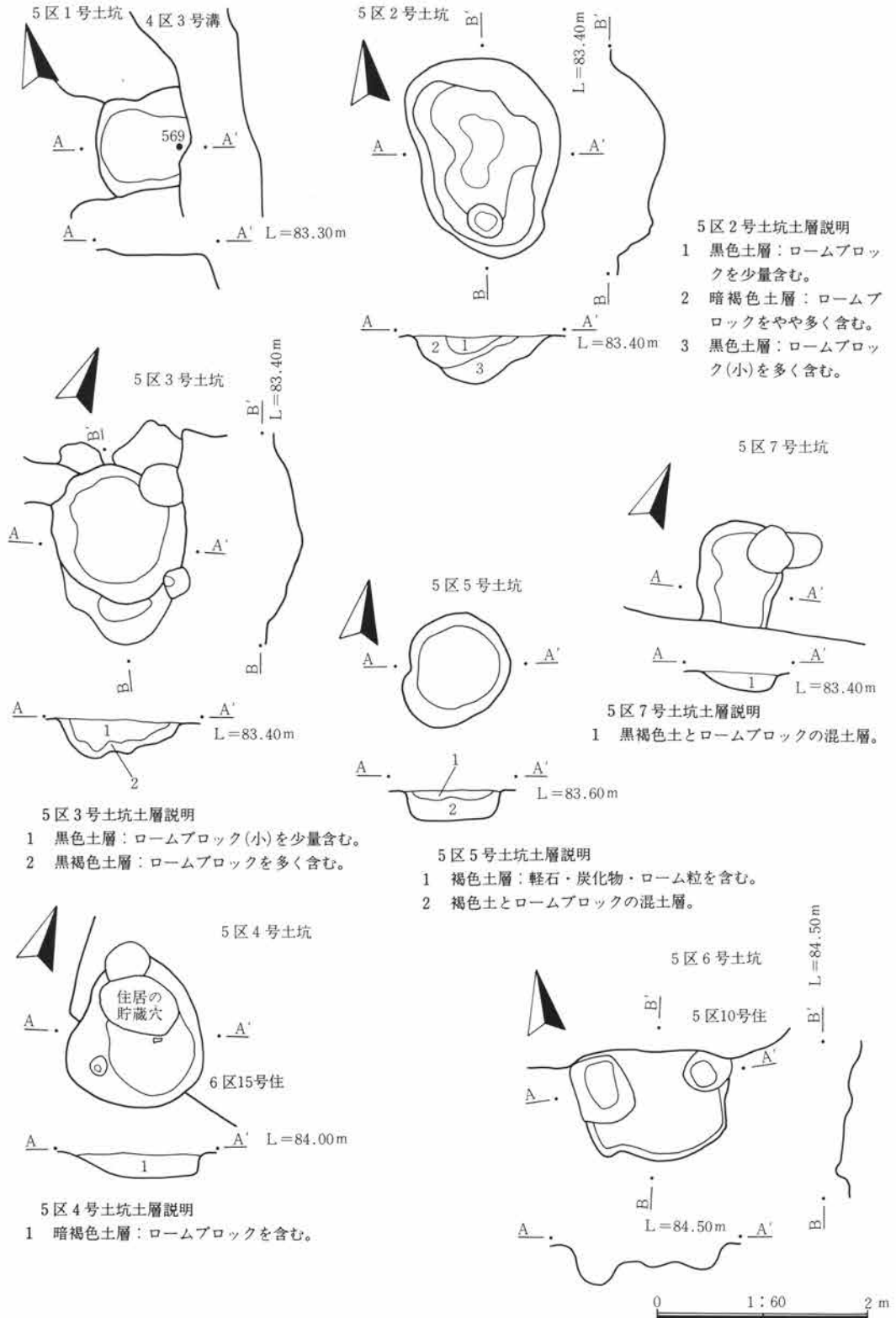
4区10号土坑土層説明

- 1 褐色土層：軽石を含む。溝覆土。  
2 褐色土層：軽石と細砂ブロックを含む。溝覆土。  
3 褐色土層：2層と同様であるが、細砂ブロックが少ない。溝覆土。  
4 黒褐色土層：ロームブロックを含む。10号土坑覆土。  
5 黒褐色土層：ロームブロックと細砂ブロックを含む。10号土坑覆土。

0 1:60 2 m

第317図 4区1号土坑・2号土坑・6号土坑・7号土坑・8号土坑・9号土坑・10号土坑

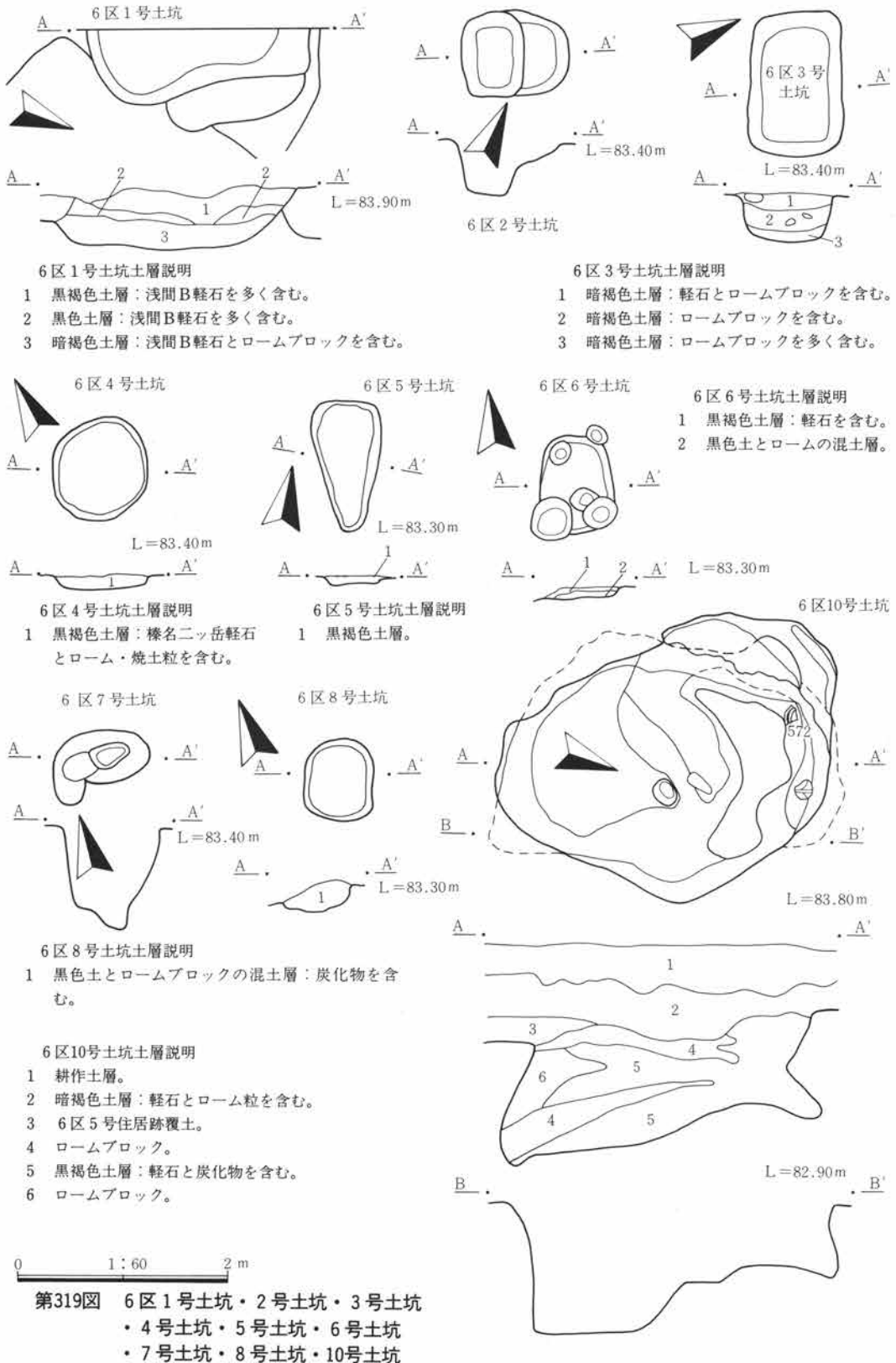
第IV章 発見された遺構と遺物



第318図 5区1号土坑・2号土坑・3号土坑・4号土坑・5号土坑・6号土坑・7号土坑

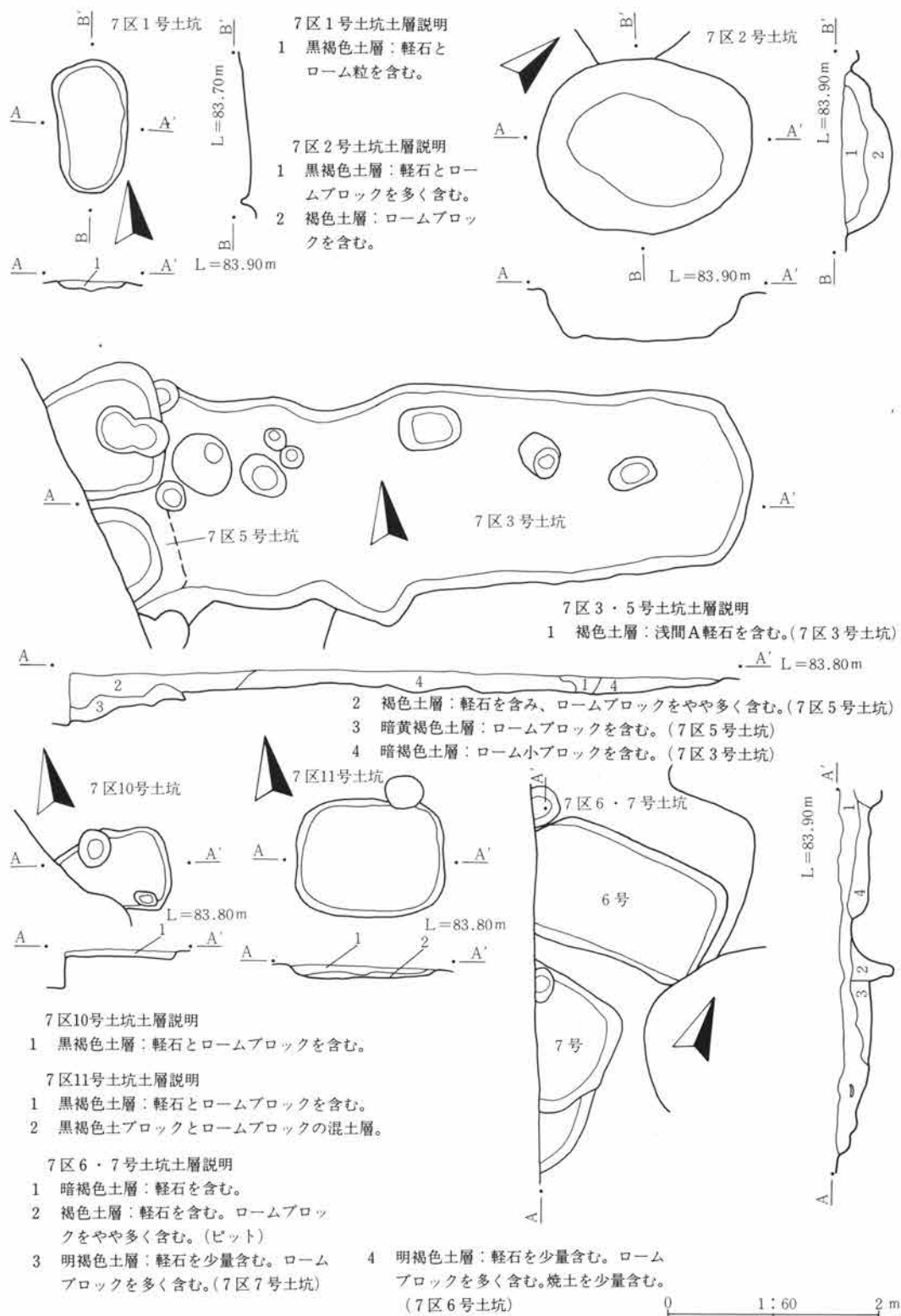


第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(5・6区土坑)



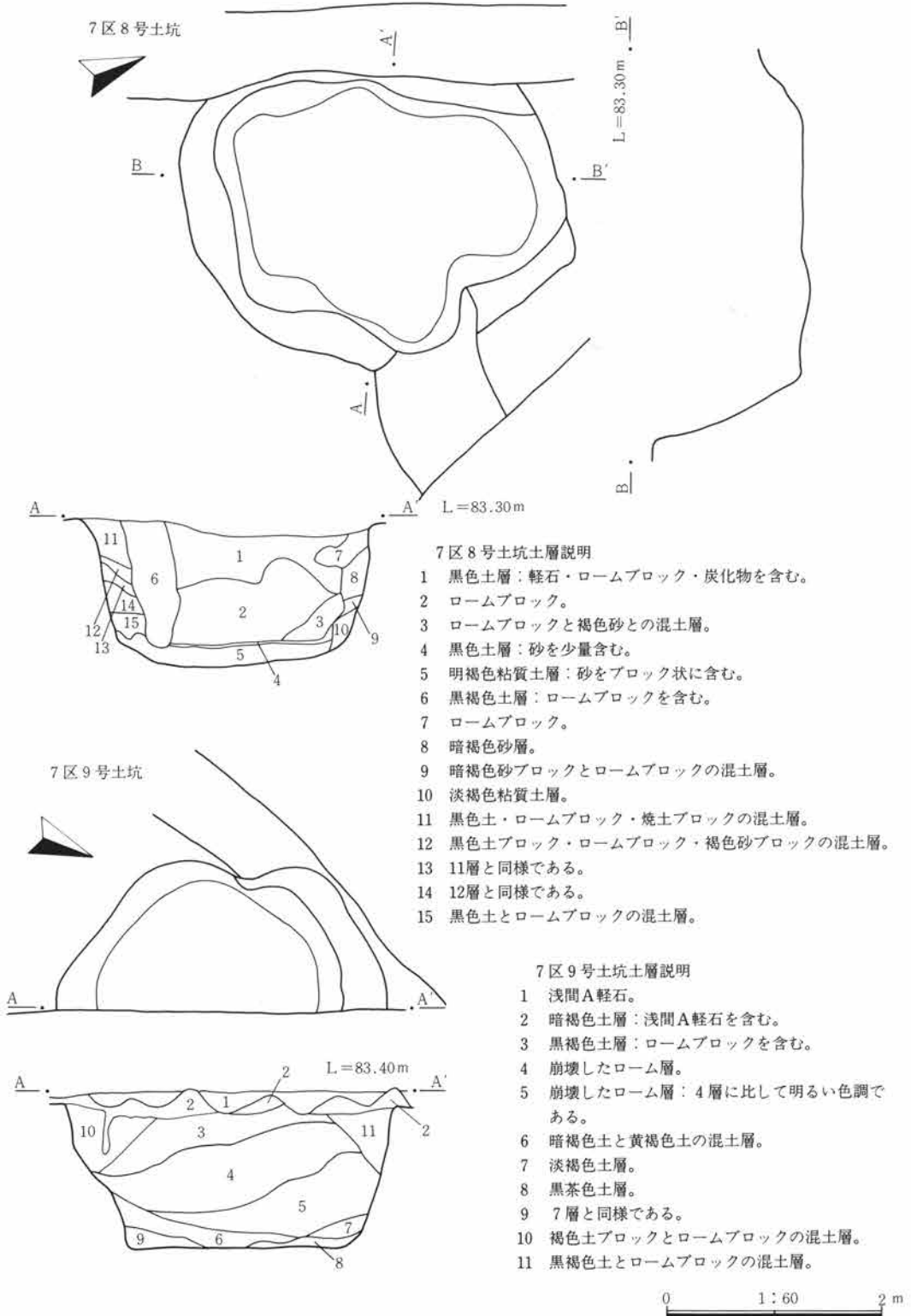
第319図 6区1号土坑・2号土坑・3号土坑  
・4号土坑・5号土坑・6号土坑  
・7号土坑・8号土坑・10号土坑

第IV章 発見された遺構と遺物



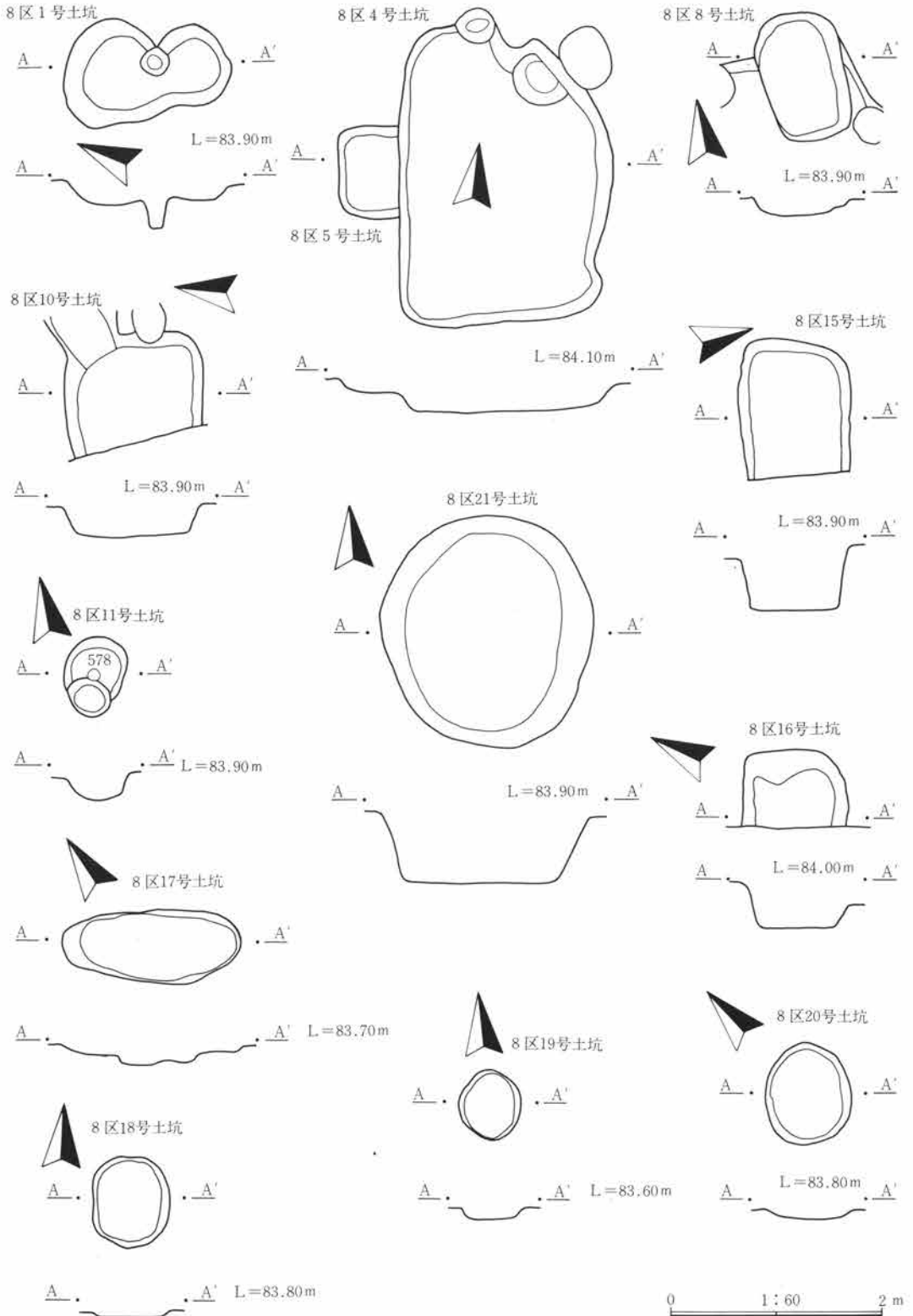
第320図 7区1号土坑・2号土坑・3号土坑・5号土坑・6号土坑・7号土坑・10号土坑・11号土坑

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7区土坑)



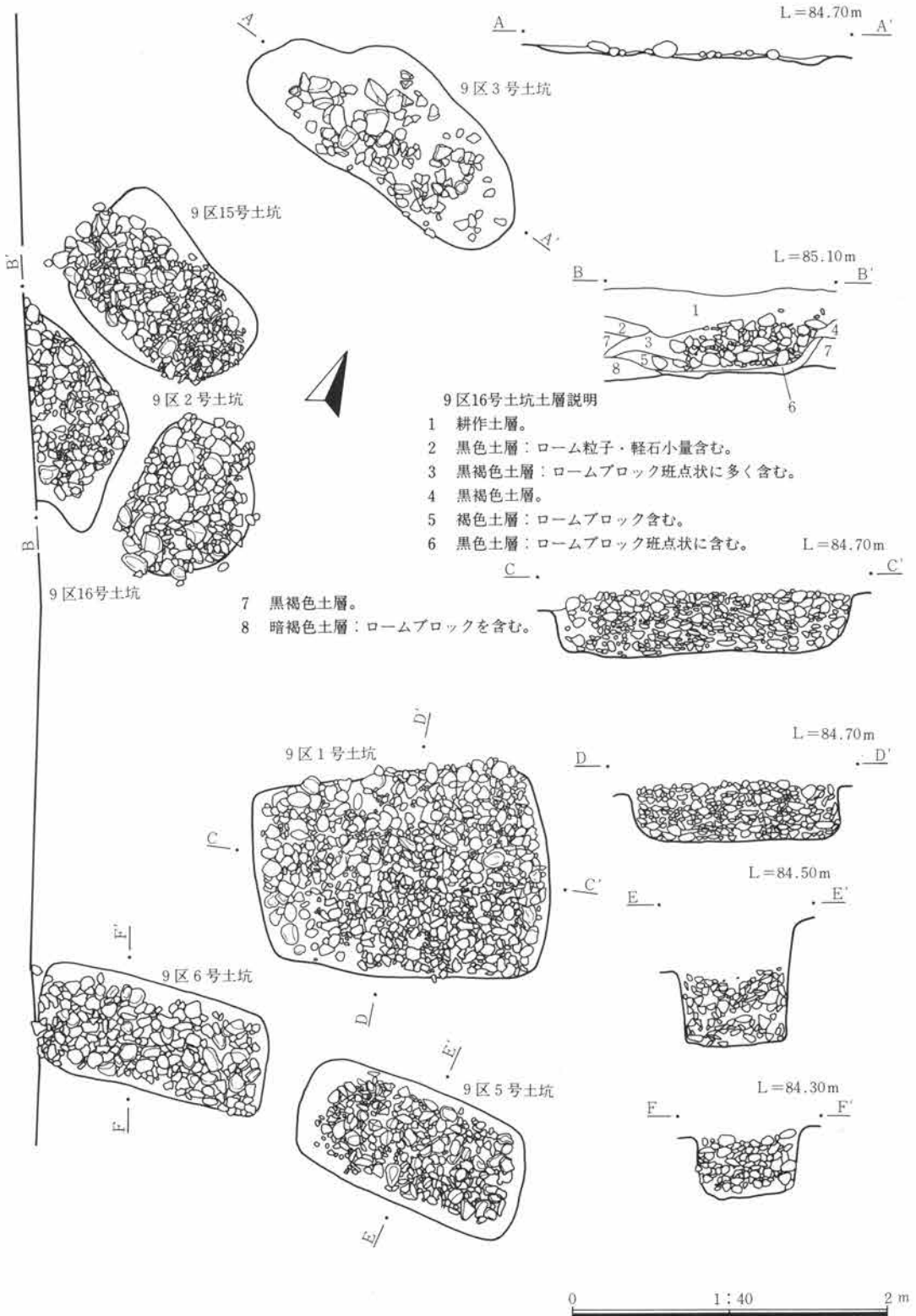
第321図 7区8号土坑・9号土坑

第IV章 発見された遺構と遺物

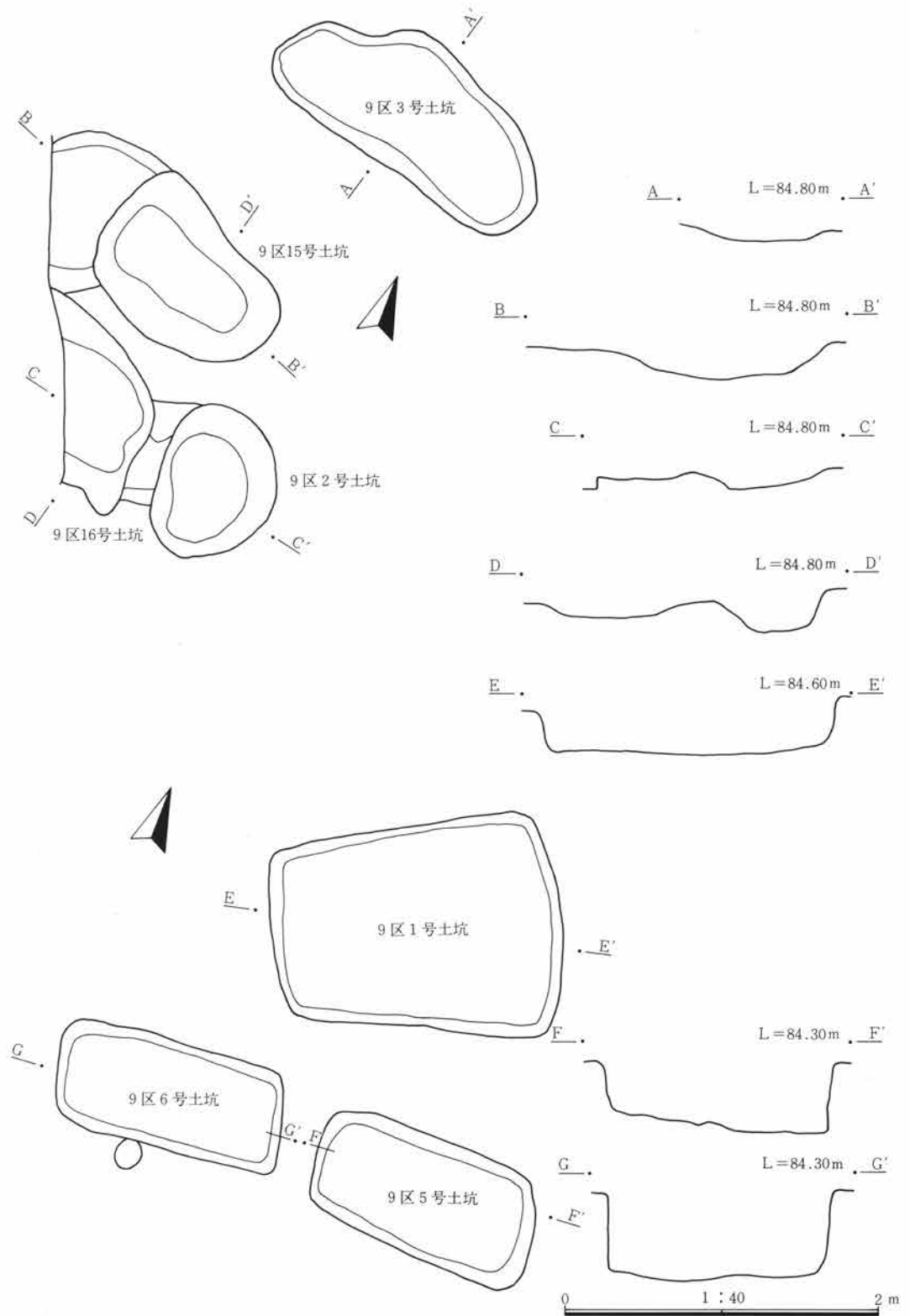


第322図 8区1号土坑・4号土坑・5号土坑・8号土坑・10号土坑・11号土坑・15号土坑  
・16号土坑・17号土坑・18号土坑・19号土坑・20号土坑・21号土坑

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(8区土坑・9区土坑・平面・断面図)

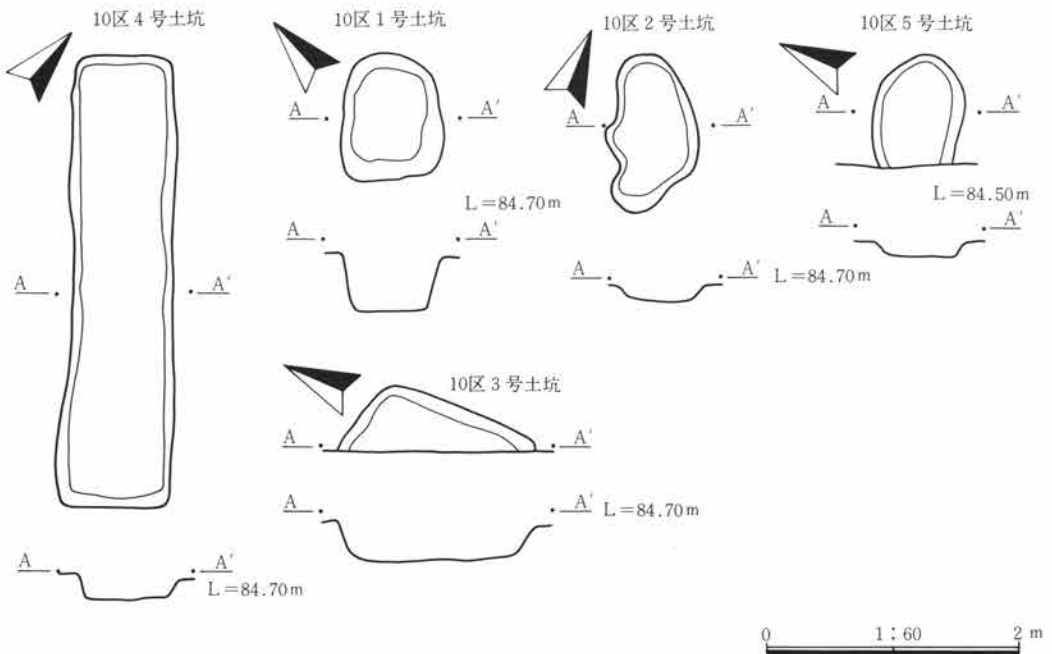
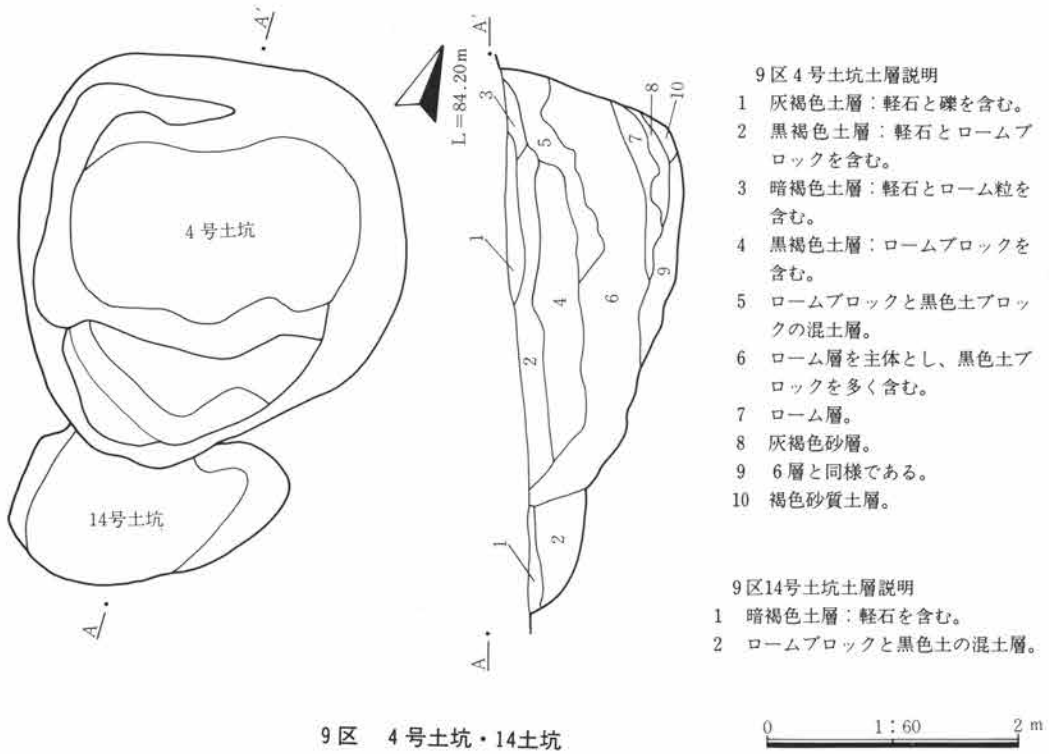


第323図 9区1号土坑・2号土坑・3号土坑・5号土坑・6号土坑・15号土坑  
・16号土坑石出土状態平面図・断面図

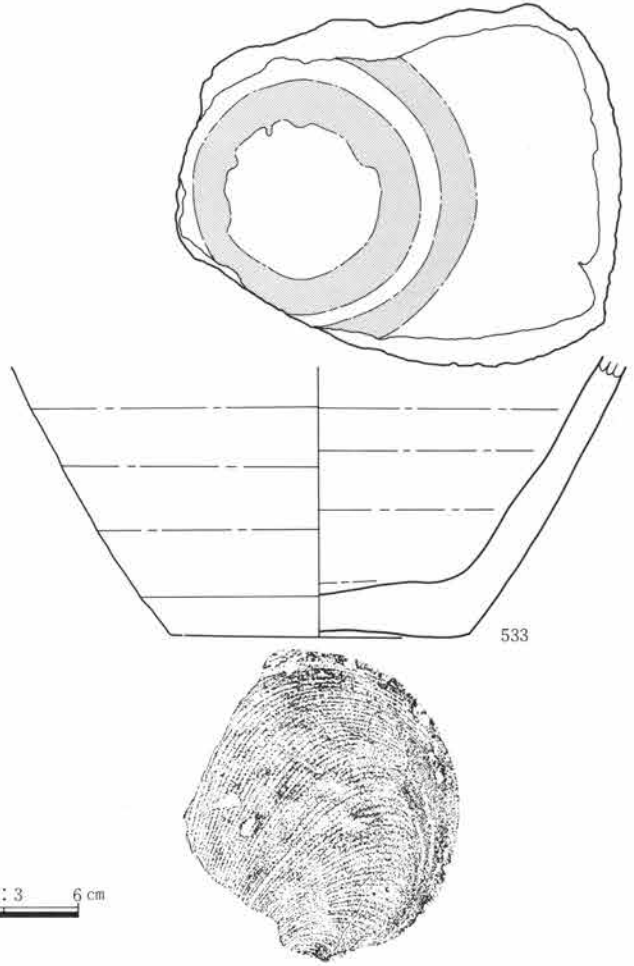
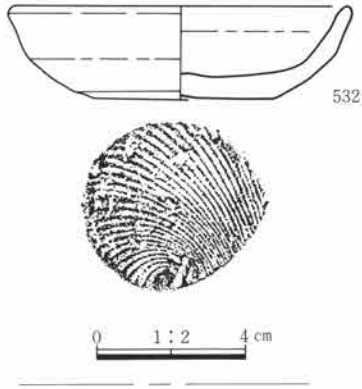


第324図 9区1号土坑・2号土坑・3号土坑・5号土坑・6号土坑・15号土坑・16号土坑

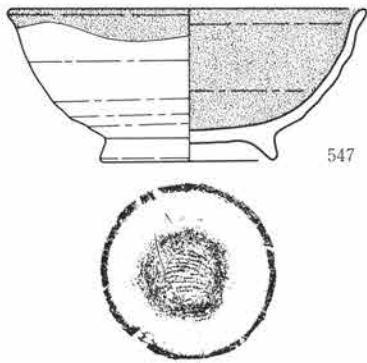
第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(9・10区土坑)



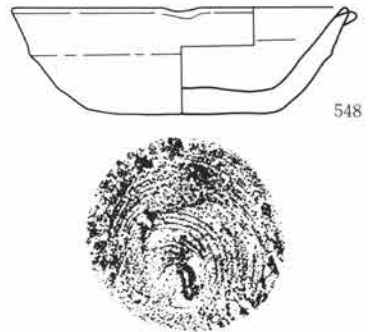
第325図 9区4号土坑・14号土坑、10区1号土坑・2号土坑・3号土坑・4号土坑・5号土坑



1区2号土坑



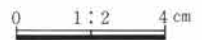
3区6号土坑



3区7号土坑

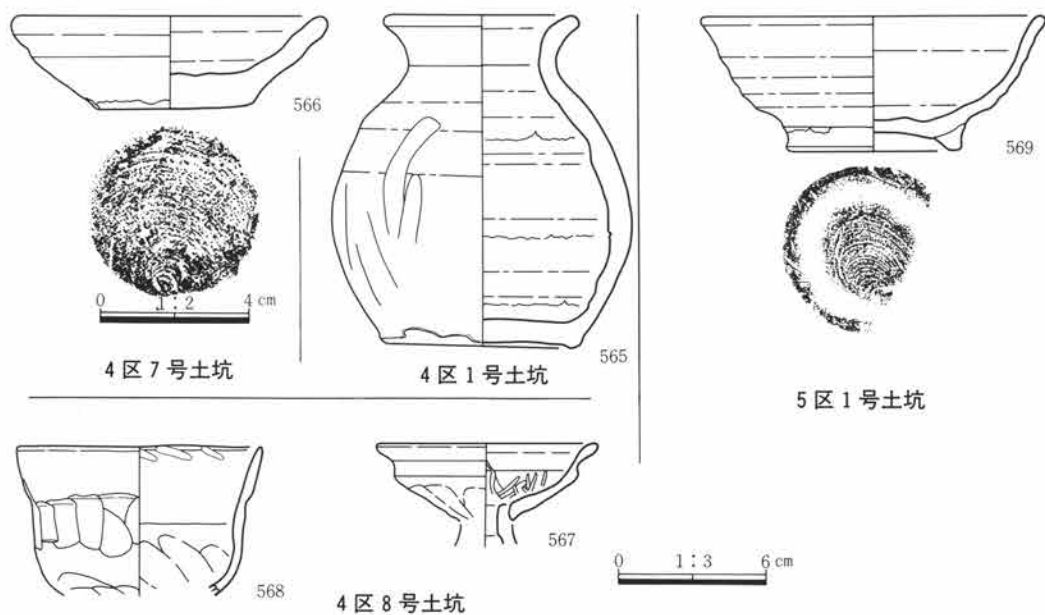
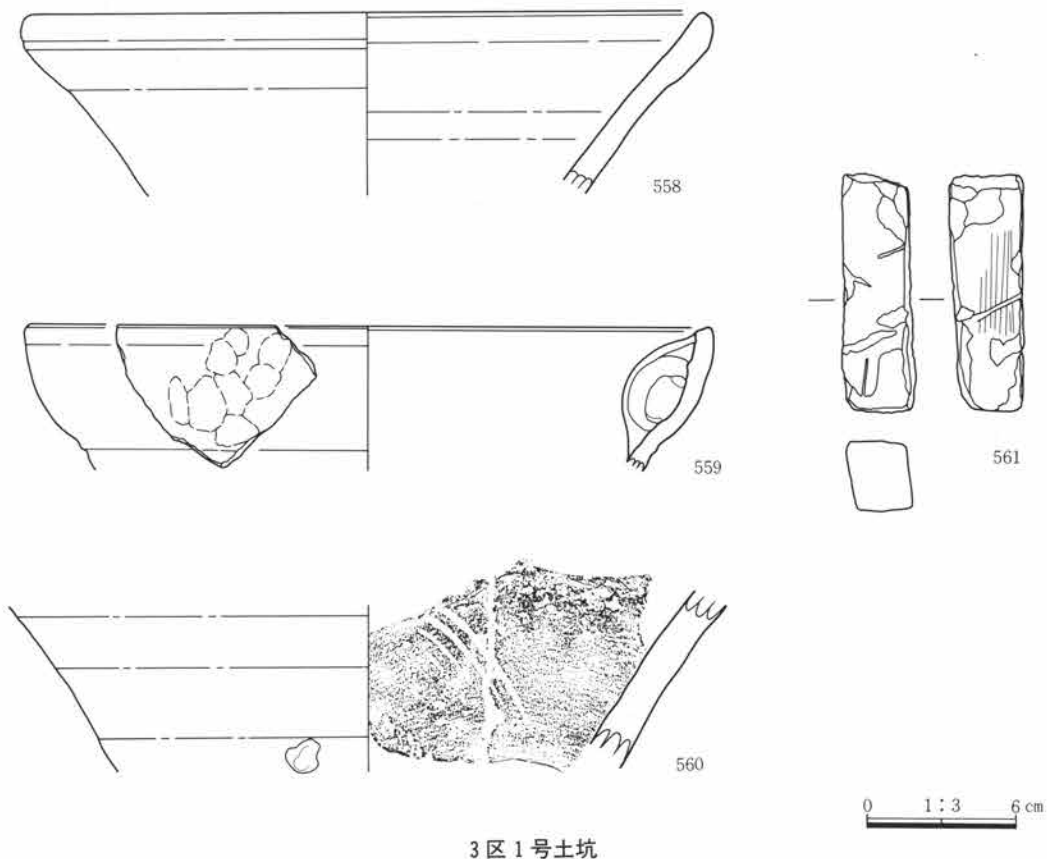


第326図 1区2号土坑、3区6号土坑・7号土坑出土遺物

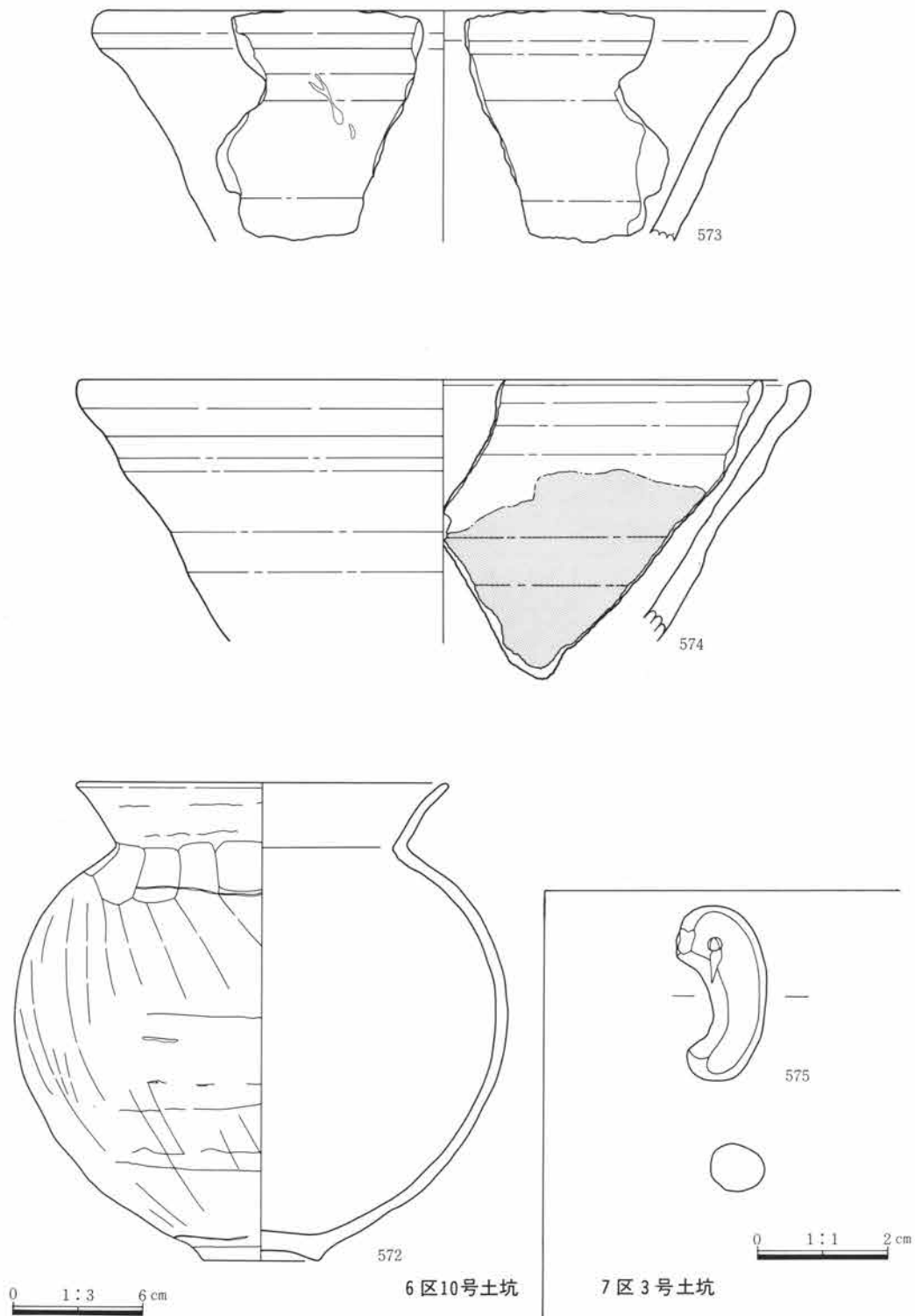




第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(1・3・4・5区土坑)

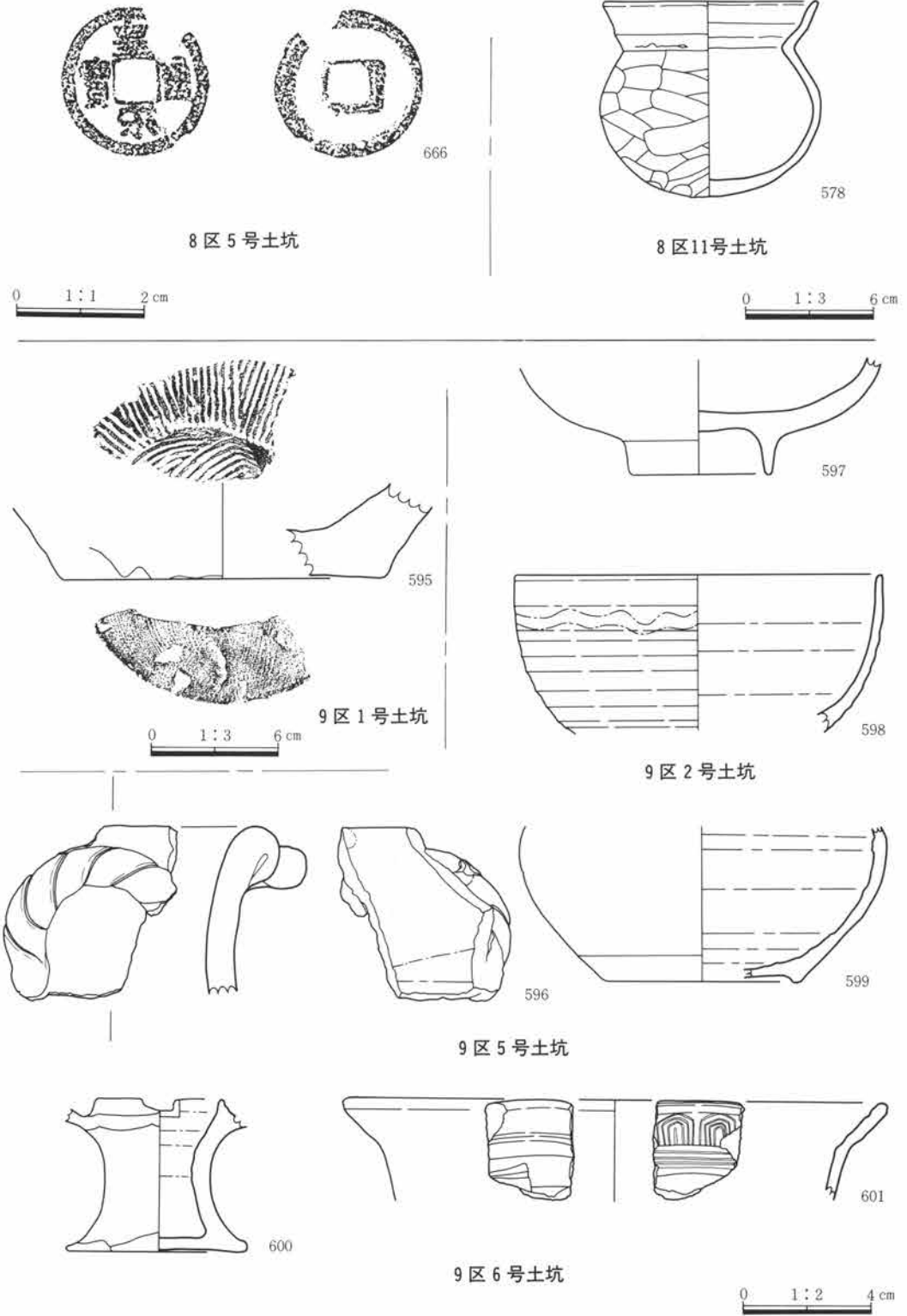


第327図 3区1号土坑、4区1号土坑・7号土坑・8号土坑、5区1号土坑出土遺物



第328図 6区10号土坑、7区3号土坑出土遺物

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(6・7・8・9区土坑)



第329図 8区5号土坑・11号土坑、9区1号土坑・2号土坑・5号土坑・6号土坑出土遺物

第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
<b>0 1区0 2号土坑</b>					
532	杯 須恵器	器高:25mm 口径:(92mm) 底径:47mm 口縁部1/2欠。	細砂～粗砂含む。普。鈍い褐。	体部は内湾する。口縁端部は僅かに外反する。底部外面は左回転糸切り無調整。	覆土。
533	片口鉢 軟質陶器	器高:[113mm] 底径:122mm 体部1/4・底部完形。	細砂多く含む。粗砂少量含む。軟質。灰。	底部内面口縁・体部内面下位は使用により、摩滅する。内面に播目はない。底部外面は左回転糸切り後無調整。体部外面下端は回転篋削り。	覆土。在地製。14C。
<b>0 3区0 1号土坑</b>					
558	播鉢 軟質陶器	器高:[73mm] 口径:(140mm) 小片。	細砂～粗砂含む。やや硬質。褐灰。断面は鈍い褐。	口縁部は僅かに受け口状を呈する。体部下位は使用により摩滅する。	
559	内耳鍋 軟質陶器	器高:[57mm] 口径:(280mm) 小片。	細砂～径3mmの礫含む。軟質。還元褐灰。	口縁部はやや内湾する。耳は張り付ける。	
560	播鉢 軟質陶器	小片。	細砂～径4mmの礫含む。還元軟質。褐灰。	播目は幅広く、4条一単位。体部内面は使用により摩滅する。	
561	砥石	長:[96mm] 幅:27mm 厚:28mm 重:140g 上小口欠。	砥沢石。	表・裏の二面を使用する。浅い条線は小口と両側面に認められ、砥石の調整痕と考えられる。	
<b>0 3区0 6号土坑</b>					
547	碗 土師質土器	器高:61mm 口径:146mm 底径:73mm 口縁部一部欠。	細砂～径3mmの礫含む。やや軟質。口縁端部内面・外面黒。他は橙。	口縁端部は外反する。体部は内湾する。内面は篋磨き。高台は貼り付け時に糸切り痕をほとんどで消す。外面の器表は剥離する。	覆土。
<b>0 3区0 7号土坑</b>					
548	杯 須恵器	器高:28mm 口径:90mm 底径:48mm 口縁部1/3欠。	細砂～粗砂多く含む。普。橙。	体部は僅かに内湾する。底部外面は右回転糸切り無調整。口縁部は小さく片口状をなす。轆轤右回転。	覆土。
<b>0 4区0 1号土坑</b>					
565	壺 須恵器?	器高:133mm 口径:80mm 底径:80mm 体部一部欠。	細砂～径3mmの礫多く含む。普。黄灰。断面黄。橙。	口縁部は丸みを持って外反する。体部上位は回転なで、口縁部は回転横なで。底部外面は砂少量附着する。	中央。
<b>0 4区0 7号土坑</b>					
566	皿 土師質土器	器高:25mm 口径:86mm 底径:43mm 完形。	細砂～粗砂多く含む。普。浅黄橙。	口縁部は外反する。全体に器壁は厚い。底部外面右回転糸切り無調整。	南東隅。
<b>0 4区0 8号土坑</b>					
567	器台 土師器	器高:[31mm] 口径:(90mm) 脚径:一 口縁部～底部1/3残。	径1～2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。鈍い赤褐。	口縁部下端に稜をもつ。口縁部は外湾。底部は焼成前の穿孔。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで後篋磨き。外面:口縁部～体部上端は横なで、体部～底部は篋なで。	土坑内覆土。

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(土坑観察表)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
568	埴 土師器	器高:[60mm] 口径: (100mm) 底径:一 口 縁部~体部1/3残。	径1~2mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。鈍 い橙。	口縁部は僅かに外反。内面:口縁部は横 なで、体部は指なで、指頭痕が残る。外 面:口縁部は横なで、体部は篋削り。	土坑内中央部。
05区01号土坑					
569	椀 須恵器	器高:54mm 口径:140 mm 底径:65mm 底部 一部欠・口縁部1/7残。	細砂~径1mmの粗砂多 く含む。やや硬質。鈍い 黄橙。	口縁部は外反する。体部は内湾する。右 回転糸切り後高台貼り付け。	覆土。
06区10号土坑					
572	甕 土師器	器高:219mm 口径:172 mm 底径:(54mm) 最 大径:(228mm) 口縁部 ~底部1/2残。	径2~3mmの砂粒を含 む。やや軟質。酸化。鈍 い赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾。底部は凹状。 最大径は体部上半。内面:口縁部は横な で、体部~底部はなで。外面:口縁部は 横なで、体部~底部は篋削り。	土坑内覆土。
573	播鉢 軟質陶器	器高:[106mm] 口径: (323mm) 小片。	細砂~粗砂多く含む、 やや粗い。黒。断面鈍い 褐。	口縁部は内湾する。体部は外湾する。体 部外面下位の調整は粗い。	覆土。在地製。14 C。
574	播鉢 軟質陶器	器高:[120mm] 口径: (342mm) 小片。	細砂~径1mmの粗砂含 む。やや軟質。褐灰。	口縁端部は直立する。口縁部以下の外 面は調整粗い。	覆土。外面体部下 位煤付着。在地製。 14C。
07区03号土坑					
575	勾玉	長:26mm 幅:10mm 厚:7mm 孔径:1.5mm 重:0.92g	滑石。	先端部一部欠。	土坑内覆土。
08区05号土坑					
666	銭		「皇宋通寶」。		覆土。
08区11号土坑					
578	埴 土師器	器高:91mm 口径:101 mm 底径:一 最大径: 104mm 完形。	径3~4mmの小石及び砂 粒を含む。硬質。酸化。 鈍い黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾。丸底。最大径 は体部中央。内面:口縁部は横なで、体 部~底部はなで。外面:口縁部は横な で、体部~底部は篋削り。	土坑内覆土。外面 に油煙付着。
09区01号土坑					
595	播鉢 陶器	器高:[44mm] 底径: (150mm) 小片。	細砂少量含む。黒色粒 子多く含む。暗赤褐。	器壁非常に厚い。播目は9本+ $\alpha$ 。底部 外面は回転糸切り無調整。錆釉。底部底 面の釉は拭い取る。播目摩滅する。	覆土。瀬戸・美濃 系?。18~19C。
09区02号土坑					
596	花生 陶器	小片。	やや粗い。硬質。灰白。	口縁部により紐状の取っ手を貼り付け る。口縁部内面~外面に灰釉を施す。貫 入が入る。	覆土。瀬戸・美濃 系。16~17C。
597	碗 陶器	器高:[35mm] 底径:44 mm	緻密。硬質。浅黄。	高台は高い。高台端部を除き、灰釉を施 す。貫入が入る。	覆土。唐津系。18 C。
598	碗 陶器	器高:[49mm] 口径: (116mm)	粗砂少量含む。硬質。淡 黄。	外面は口縁部まで篋削りを行う。鉛釉 を施し、口縁部のみ薬灰系の灰釉を流 す。	覆土。瀬戸・美濃 系。18C中。

第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
09区05号土坑					
599	土瓶? 陶器	器高:[50mm] 底径: (70mm) 1/4残。	黒色粒子を含む。緻密。 器質に焼き締まる。灰。	底部は削り出しにより、碁笥底状をなす。内面と高台脇を除き、灰釉を施す。細かい貫入が入る。	覆土。製作地不祥。 19C。
600	台付受皿 陶器	器高:[48mm] 底径:57 mm 口縁部欠。脚部一部欠。	緻密。硬質。黄灰。	受け部端部は無釉。底部内外面は無釉。灰白釉を施す。細かい貫入が入る。	覆土。製作地不祥。 18C後半~19C。
09区06号土坑					
601	三島手鉢 陶器	器高:[46mm] 口径: (258mm) 小片。	緻密。硬質。鈍い橙。	口縁部は外反する。白土を雑に施し、長石釉系の透明釉を施す。	覆土。唐津系。18 C。

溝の概要

当遺跡からは溝が30条検出されているが、本線部と側道部の調査年度が異なるため、調査区の境で溝が途切れている場合が多い。また、溝の重複関係など把握できないものが多い。

1区1・2号溝、2区1号溝、3区2号溝、4区1号溝、6区3号溝、9区1号溝は直線的な走行で、方位はN-60°~87°-Wとほぼ東西方向に掘削されている。また、2区2号溝、3区1号溝、4区3号溝、6区1号溝、6区4号溝、7区1号溝、10区2号溝は直線的な走行であり、方位はN-6°~18°-Eとほぼ南北に掘削されており、前者と交差又は接している。出土遺物は全体に少なく、図示し得たものは1区3号溝、2区1号溝、3区1号溝、4区1号溝、6区3号溝のみである。このうち2区1号溝からは、近世の播鉢が出土している。また、図示していないが7区1号溝からも近世の陶器片が出土している。他の溝には近世の遺物は認められず、1区1号溝、3区2号溝、4区1号溝、6区3号溝、3区1号溝には小片を含めて中世の遺物が出土している。他の溝は形状・走行・方位が前述した溝と異なり、機能的には異なると考えられる。遺物を図示していない溝のうち、2区1号溝、3区3号溝、8区1号溝には中世の軟質陶器や焼締陶器小片が認められ、時期的には中世に属する溝が多いと考えられる。なお、溝番号には欠番があるが、報告時に番号の付け変えは行っていない。

1区1号溝

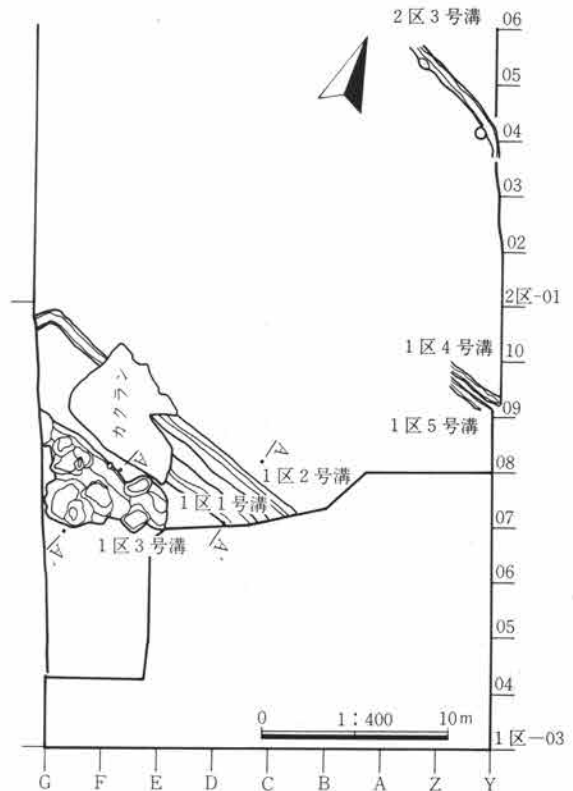
1区2号溝と3号溝間に位置し、長さ6mにわたって確認された。走行方位はN-73°-Wである。幅は1.1~1.3m、深さは24~32cmを測る。図示していないが、軟質陶器小片が出土している。

1区2号溝

1区1号溝の北60cmにほぼ平行して掘削されている。走行方位はN-72°-Wである。溝は調査区西端で屈曲する。幅は0.7~1.1m、深さは12~52cmを測る。溝の中間は削平が著しく、検出できなかった。

1区3号溝

1区1号溝の南にほぼ平行して掘削されている。土坑との重複が多いため、形状は不明瞭である。幅は1.3m、深さは12~52cmを測る。本溝からは軟質陶器鉢(525・526)、内耳鍋(527)、焼締陶器甕(528・529)な



第330図 1区溝跡

どが出土している。

**1区4号溝**

1区北東隅に位置し、2.5mが確認された。幅は30~50cmを測るが、深さは図面が紛失しているため不明である。出土遺物はない。

**1区5号溝**

1区北東隅に位置し、3.5mが確認された。幅は30~50cmを測るが、深さは図面が紛失しているため不明である。出土遺物はない。

**2区1号溝**

2区北側中央に位置し、長さ8mにわたって確認された。走行方位は $N-82^{\circ}-W$ である。幅は1.6~2.0m、深さは86~90cmを測る。底部は東側が低く、比高差は4cmである。2区2号溝と重複するが、新旧は不明である。2区2号溝との重複部からは、近世の陶器播鉢(534)が出土しているが、本溝に伴うものかどうか明確でない。

**2区2号溝**

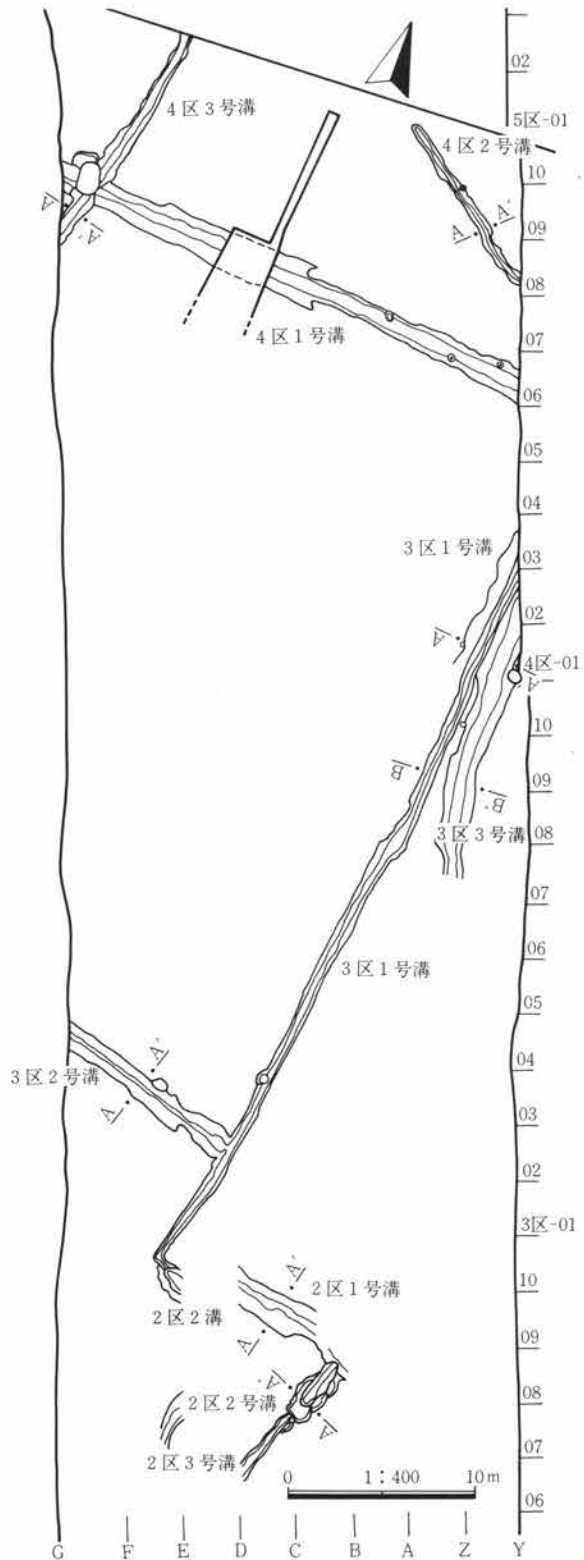
2区北側中央に位置し、2区1号溝と重複する。長さは8m、幅は40~70cm、深さは40cmを測る。走行方位は $N-18^{\circ}-E$ である。底部は北側が低く、比高差は17cmである。出土遺物はない。

**2区3号溝**

2区南東に位置する。長さは7.5m、幅は60cm、深さは4~15cmを測る。

**3区1号溝**

2区北端から4区南東端の43mにわたって確認された。走行方位は $N-6^{\circ}-E$ である。南端はほぼ直角に折れ、1.5m程延びている。幅は40~90cm、深さは27~94cmを測る。3区2号溝と重複しており、本溝が古い。遺物は軟質陶器鉢(535・537)、内耳鍋(536)、土



第331図 2区・3区・4区溝跡



師質土器皿(539・540)が出土している。

### 3区2号溝

3区1号溝の南に位置し、北西に11m延びる。走行方位は $N-76^{\circ}-W$ である。幅は1.1~1.5m、深さは59~68cmを測る。3区1号溝が新しい。遺物は図示していないが、中世の軟質陶器鉢や瓦の小片が出土している。

### 3区3号溝

3区1号溝の東に接し、長さ25.5mにわたって確認された。溝の走行は弧を描いており、両端は直線的でない。幅は1~1.6m、深さは31~59cmを測る。重複関係は、本溝が古い。本溝からは、中世に類例のある不明軽石製品(542)が出土している。他に図示していないが、軟質陶器と焼締陶器小片が出土している。

### 4区1号溝

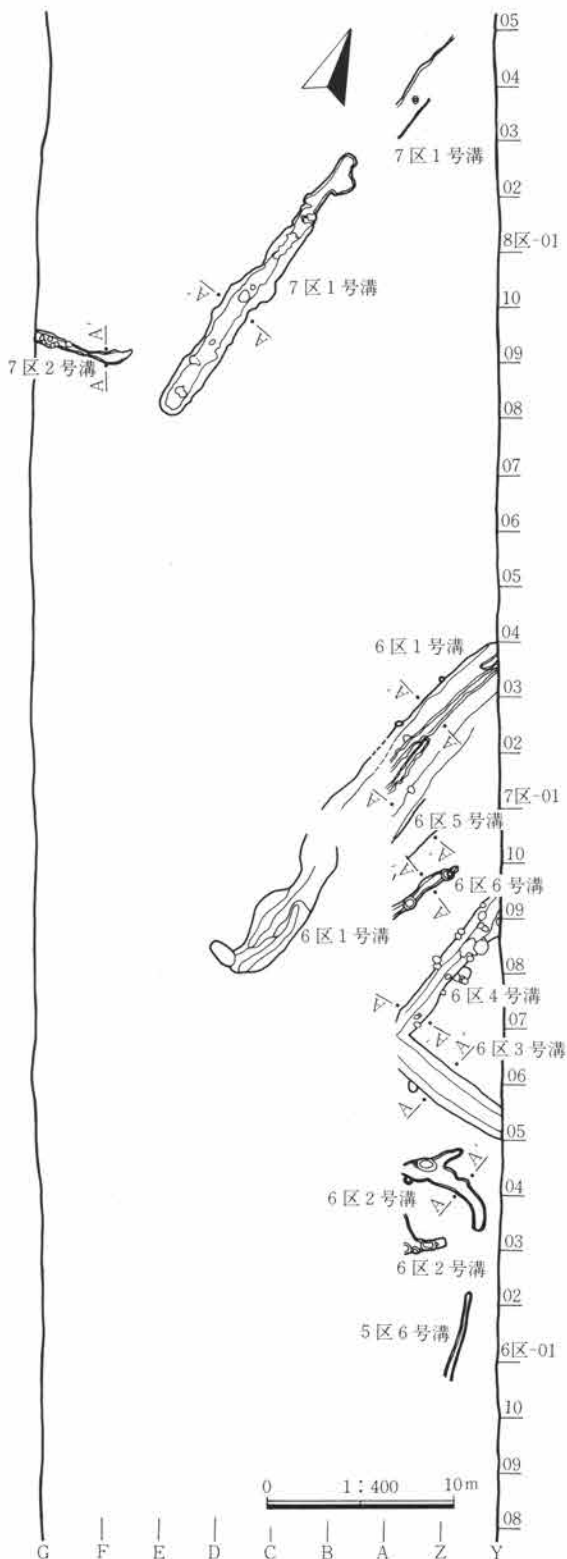
4区西側中央から北西隅の27mにわたって確認された。4区3号溝と交差し、3区1号溝とも交差すると考えられる。走行方位は $N-87^{\circ}-W$ である。幅は1.8~2.2m、深さは62~76cmを測る。本溝からは軟質陶器鉢(562~564)が出土している。

### 4区2号溝

4区北東に位置し、10.5mにわたって確認された。走行方位は $N-55^{\circ}-W$ である。幅は40~55cm、深さは23~34cmを測る。底部は東側が深く、比高は11cmである。

### 4区3号溝

4区北西端から5区にかけて、13m確認された。走行方位は $N-12^{\circ}-E$ である。幅は0.8~1.2m、深さは80~84cmを測る。4区1号溝との重複関係は不明であるが、4区10号



第332図 5区・6区・7区溝跡

土坑のセクションを見る限り、本溝が新しいということはない。

**6区1号溝**

6区中央北から7区南東にかけて22m確認された。走行方位はN-18°-Eである。幅は1.5m、深さは29~32cmを測る。底部には礫が多く、鉄分の沈着が認められ、流水のあったことが推定される。礫の集中部と溝の最深部とは位置がずれており、本溝は掘り直しが行われていると考えられる。礫のある溝は掘り直し後の溝であろう。北側中央部は礫の入り方が乱れているうえ、番線等が出土しており攪乱が多く入っていると考えられる。

**6区2号溝**

6区東側南寄りに位置し、5.7m確認された。幅は0.5~1m、深さは3~5cmを測る。土坑等との重複が多く、形状は乱れている。

**6区3号溝**

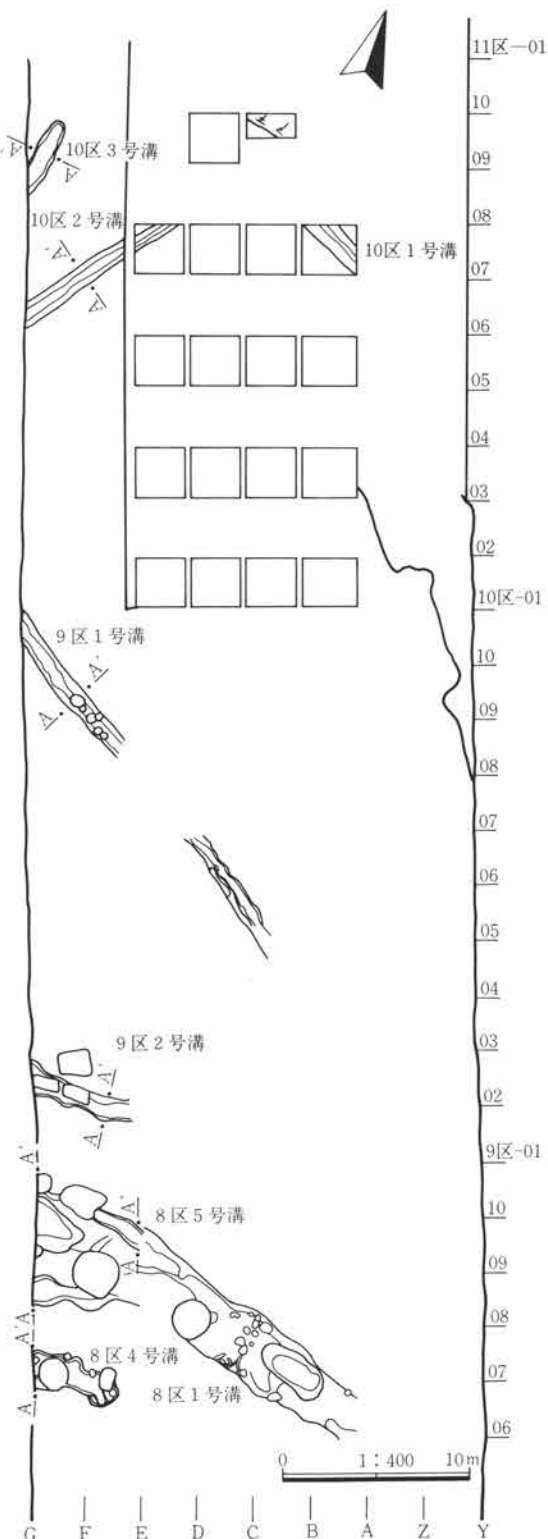
6区東側中央に位置し、走行方位はN-75°-Wである。長さは7m、幅は1.6~1.9m、深さは40~47cmを測る。底部は東側がやや低い。6区4号溝とつながるが、同一溝か他溝との重複かは不明である。本溝からは内耳鍋(571)が出土している。

**6区4号溝**

6区東側中央から北東にかけて10m確認された。走行方位はN-15°-Eである。幅は1.3~1.8m、深さは26~40cmを測る。底部は東側が低く、比高は14cmである。

**6区5号溝**

6区と7区の境に9mにわたって確認された。幅は22~25cm、深さは26~40cmを測る。



第333図 8区・9区・10区溝跡

### 6区6号溝

6区4号溝と6区1号溝の中間に位置するが、走行方向は異なる。長さは4.5m、幅は35～60cm、深さは26～40cmを測る。底部は西側が低い。

### 7区1号溝

7区北側中央から8区南にかけて13.5mが確認された。走行方位はN-14°-Eである。幅は0.7～1.8m、深さは10～14cmを測る。溝幅は一定していないが走行は直線的である。図示していないが、18世紀の瀬戸・美濃系腰鍔碗の小片が出土している。

### 7区2号溝

7区北西隅に位置する。長さは5.3m、幅は35～70cm、深さは5～9cmを測る。

### 8区1号溝

8区北側に位置し、13.5mにわたって確認された。幅は2.3～3.5m、深さは1～12cmを測る。本溝は浅いうえ、土坑との重複が多いため形状・規模は不明瞭である。図示していないが、軟質陶器の小片が出土している。

### 8区4号溝

8区中央西側に位置し、4.3mにわたって確認された。幅は1.2m、深さは33cmを測る。土坑との重複が多く、形状は乱れている。

### 8区5号溝

8区1号溝の北西に位置し、8区1号溝と重複する。本溝は8区1号溝より新しい。長さは3m、幅は60～80cm、深さは5～20cmを測る。出土遺物はない。

### 9区1号溝

9区北西端から9区中央にかけて23m確認された。走行方位はN-60°-Wである。幅は0.6～1.1m、深さは28～31cmを測る。中央で古墳の周溝と重複し、本溝が新しい。底部に比高差はない。

### 9区2号溝

9区南西に位置し、6.5mにわたって確認された。幅は1～1.2m、深さは3～10cmを測る。9区5・6号土坑と重複するが、新旧は不明である。調査時の所見では浅間B軽石以降とされている。

### 10区1号溝

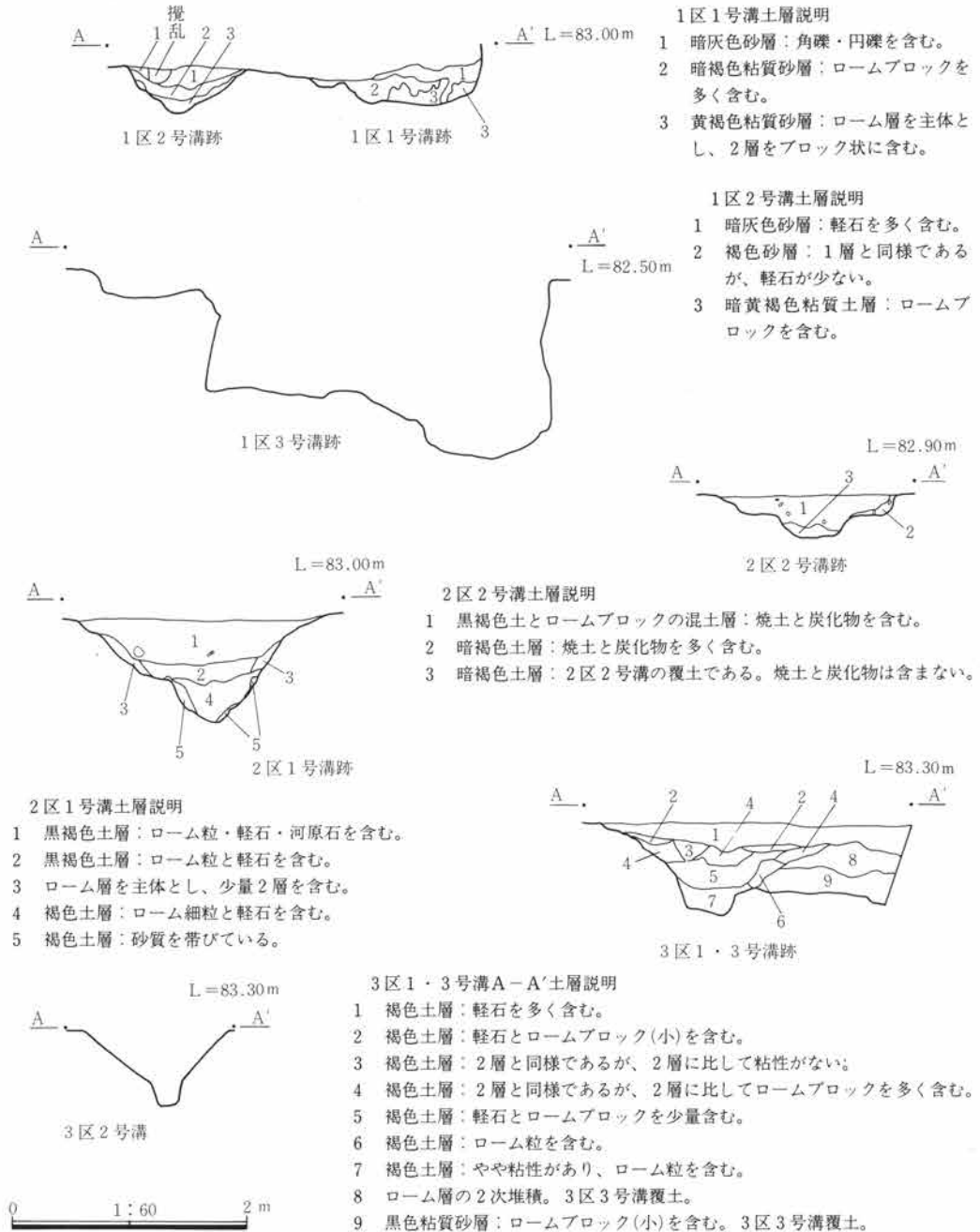
10区中央東側に位置し、4mにわたって確認された。幅は1.2mを測るが、実測図が紛失しているため深さは不明である。溝は地形の傾斜に沿って走行している。

### 10区2号溝

10区中央西側に位置し、10mにわたって確認された。走行方位はN-33°-Eである。幅は50cm、深さは42～55cmを測る。10区北端のグリッドで10区1・2号溝が確認されていないことから、両溝は屈曲して続くものと考えられる。

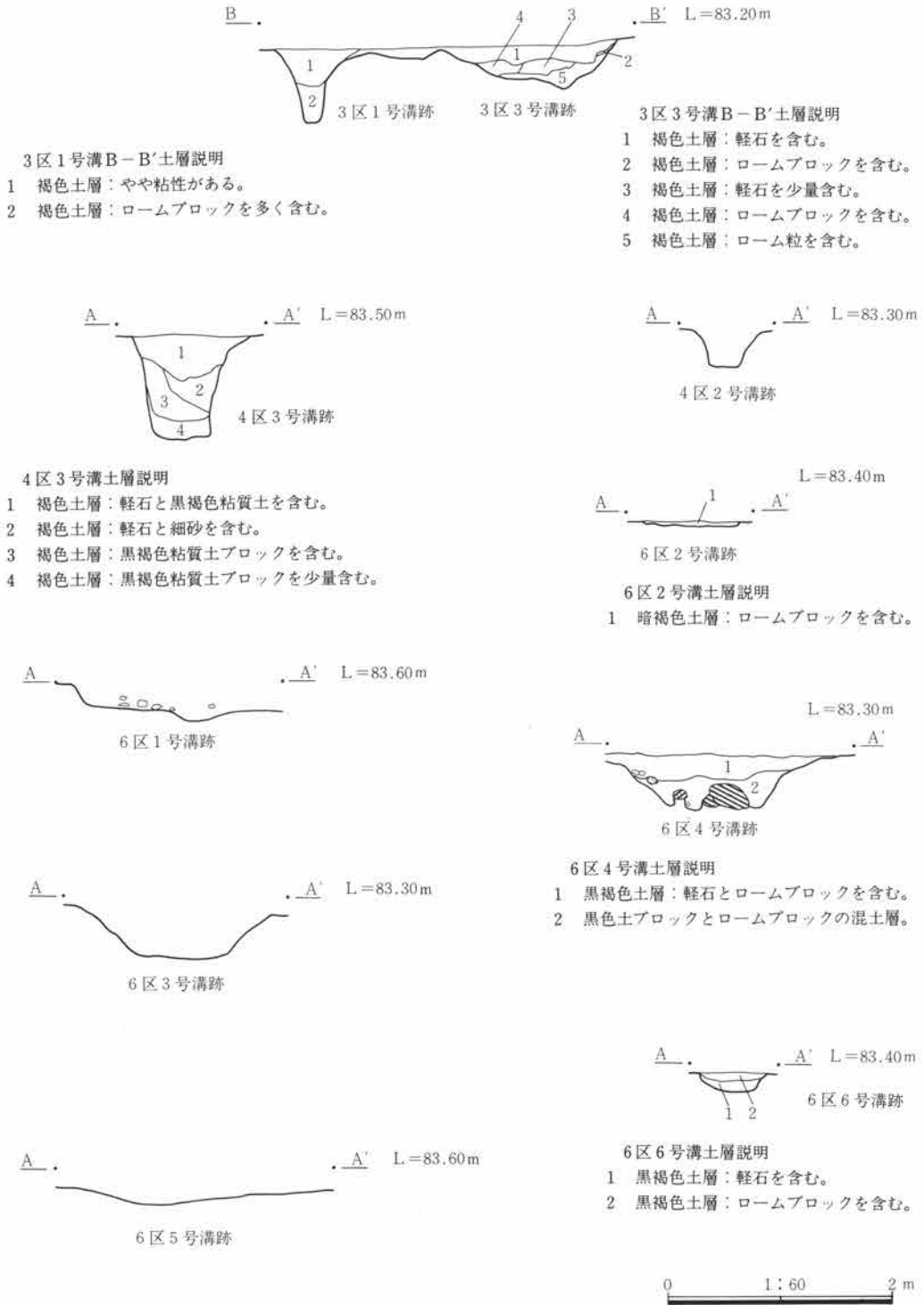
10区3号溝

10区北西に位置し、4mにわたって確認された。幅は35~45cm、深さは4~22cmを測る。底部は西側が深く、比高差は18cmである。



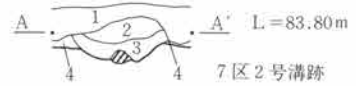
第334図 1区1号溝跡・2号溝跡・3号溝跡、2区1号溝跡・2号溝跡、3区1号溝跡・2号溝跡・3号溝跡断面図・エレベーション図

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(1・2・3・4・6区溝断面)



第335図 3区1号溝跡・3号溝跡、4区1号溝跡・2号溝跡、6区1号溝跡・2号溝跡・3号溝跡・4号溝跡・5号溝跡・6号溝跡断面図・エレベーション図

第IV章 発見された遺構と遺物



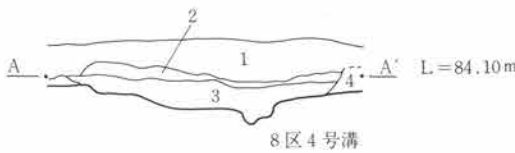
7区2号溝土層説明

- 1 褐色土層：浅間A軽石を含む。
- 2 暗褐色土層：軽石を含む。
- 3 褐色土層：ロームブロック(小)を含む。
- 4 ロームブロックを主体とし、少量褐色土を含む。



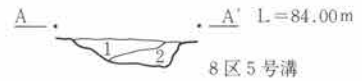
8区1号溝土層説明

- 1 黒褐色土層。
- 2 暗褐色土層：ローム粒を含む。
- 3 褐色土層：ローム粒を含む。
- 4 暗褐色土層：ロームブロックを多く含む。
- 5 明褐色土層：ローム層を多く含む。



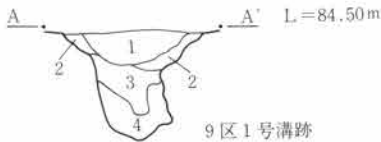
8区4号溝土層説明

- 1 暗褐色土層：浅間A軽石を多く含む。
- 2 褐色土層：浅間A軽石とローム粒を少量含む。
- 3 暗褐色土層：ロームブロックを多く含む。
- 4 暗褐色土層：ロームブロックを含む。



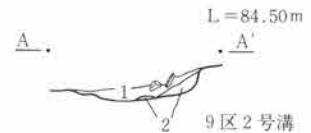
8区5号溝土層説明

- 1 黒褐色土層：ロームブロックを含む。
- 2 暗褐色土層：ロームブロックを含む。



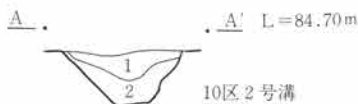
9区1号溝土層説明

- 1 褐色土層：浅間B軽石とロームを含む。1号溝覆土。
- 2 明褐色土層：ロームブロックを多く含む。1号溝覆土。
- 3 褐色土層：ロームブロックを多く含む。ピット覆土。
- 4 暗褐色土層：ロームを含む。ピット覆土。



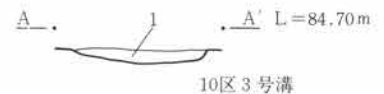
9区2号溝土層説明

- 1 黒褐色土層：軽石を含む。
- 2 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土層。



10区2号溝土層説明

- 1 褐色土層：軽石とロームブロックを含む。
- 2 褐色土層：板状のロームブロックを含む。



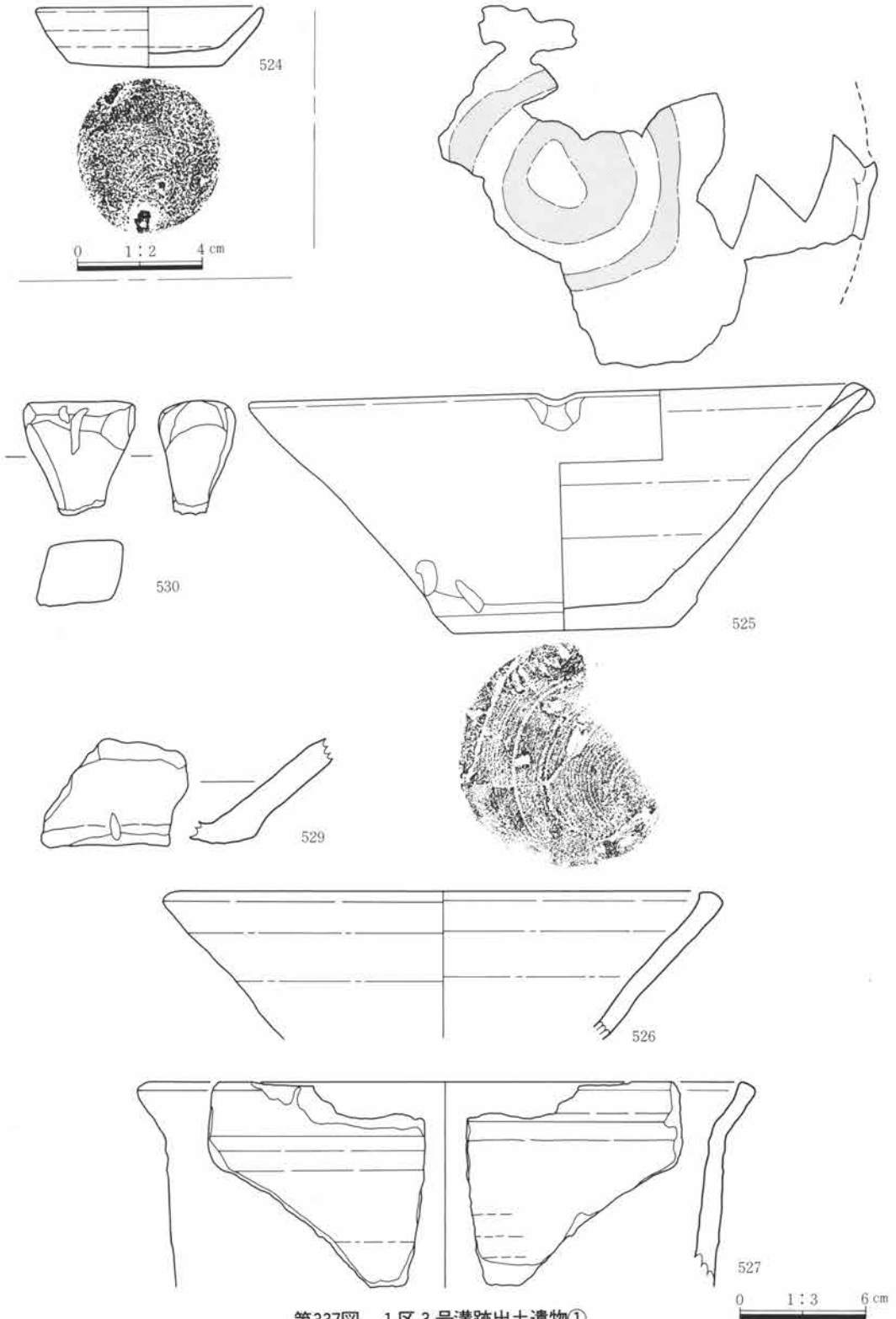
10区3号溝土層説明

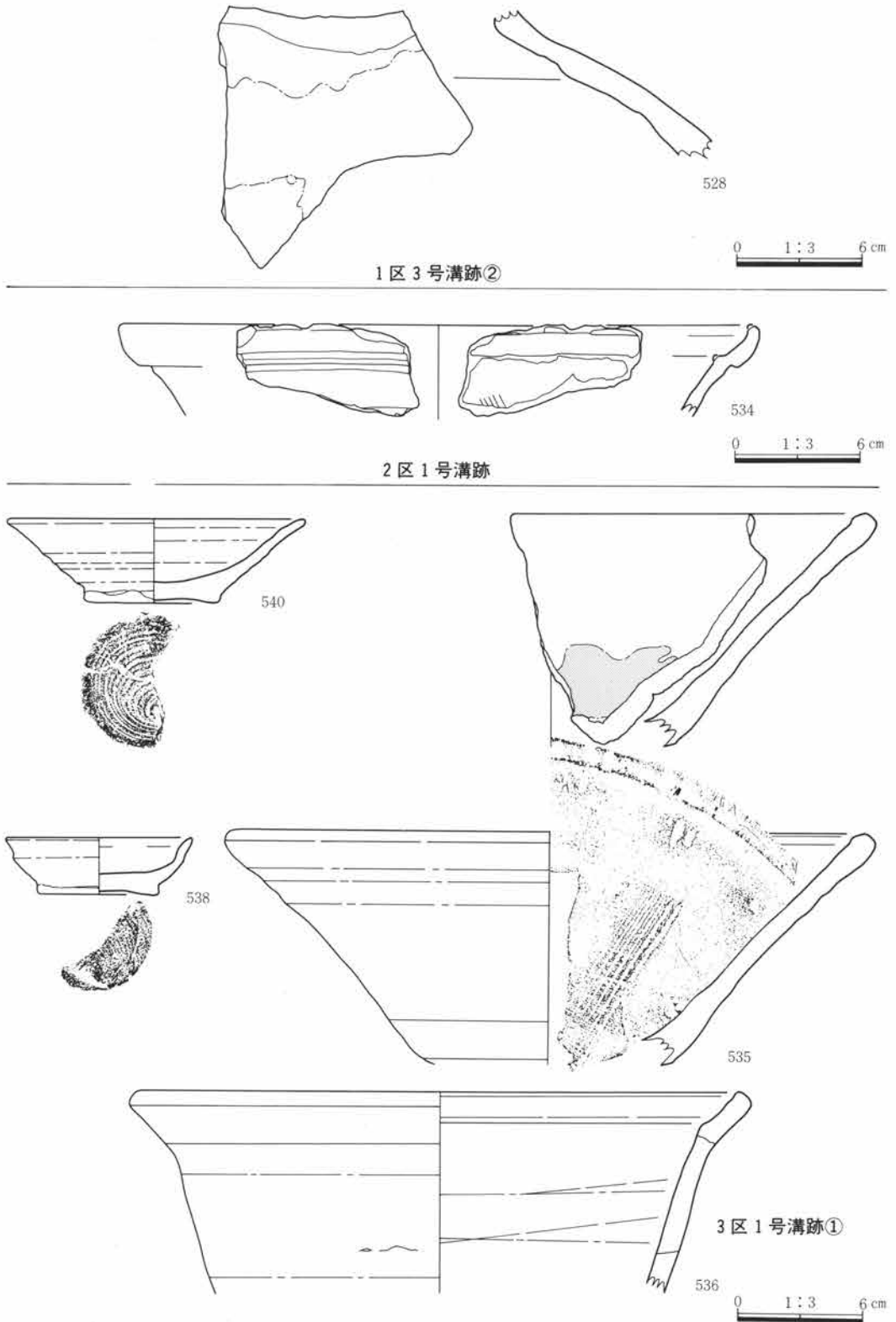
- 1 褐色土層：ロームブロックを含む。



第336図 7区1号溝跡・2号溝跡、8区1号溝跡・4号溝跡・5号溝跡、9区1号溝跡・2号溝跡、10区2号溝跡・3号溝跡断面図・エレベーション図

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(7・8・9・10区溝断面図・1区3号住居)

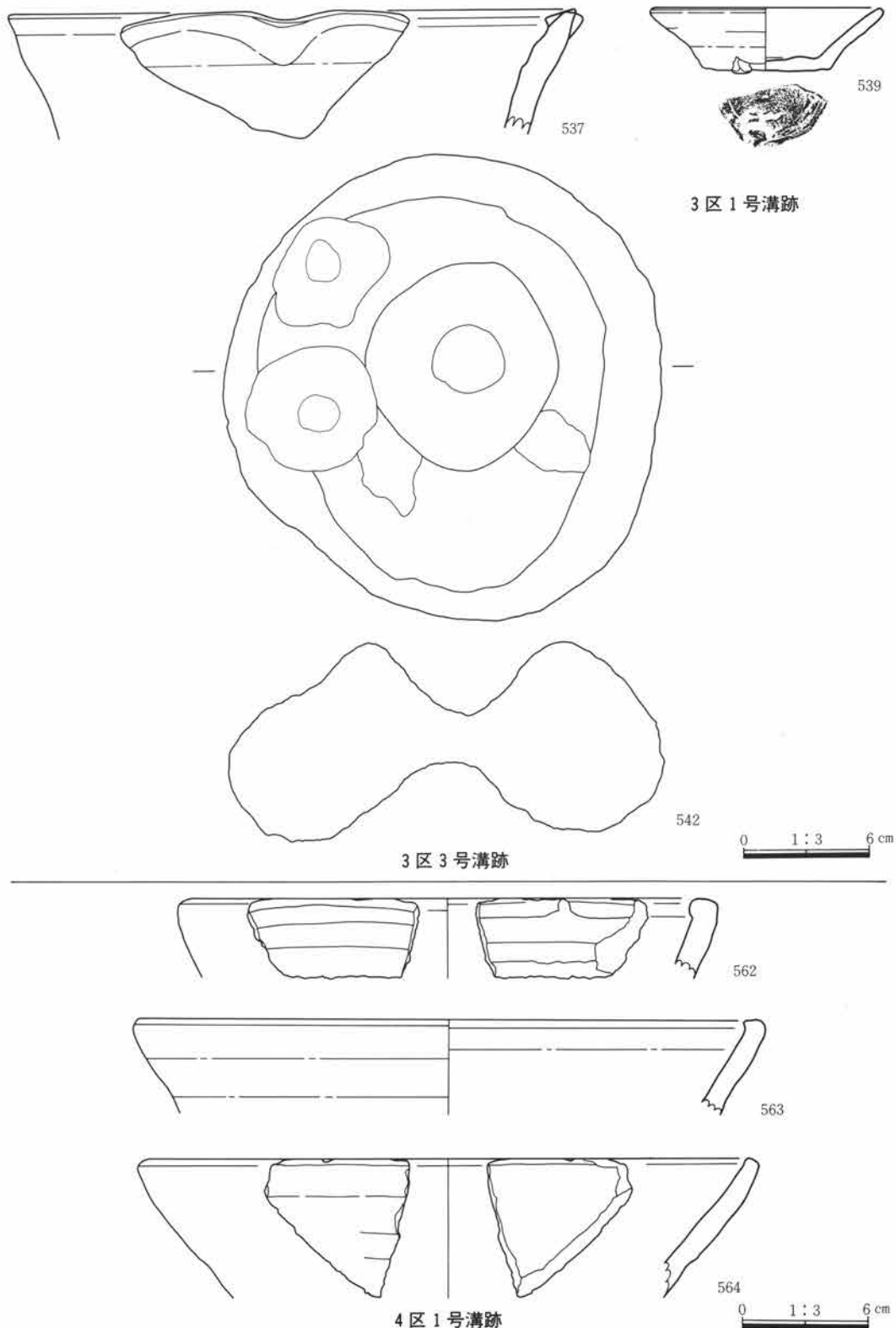




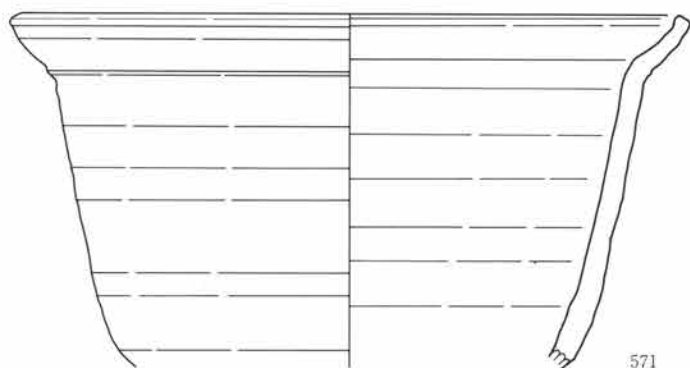
第338図 1区3号溝跡出土遺物②、2区1号溝跡出土遺物、3区1号溝跡出土遺物①



第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(1区3号住・2区1号住・3区1・3号住・4区1号住)



第339図 3区1号溝跡出土遺物②、3区3号溝跡出土遺物、4区1号溝跡出土遺物



第340図 6区5号溝跡出土遺物

0 1:3 6 cm

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
<b>0 1区0 3号溝</b>					
524	皿 土師質土器	器高:19mm 口径:74mm 底径:50mm 口縁部一部欠。	細砂含む。やや軟質。黒褐。	口縁部は直線的に開く。体部外面左回転糸切り無調整。	覆土。内外面に煤附着。
525	片口鉢 軟質陶器	器高:113mm 口径: (297mm) 底径:106mm 口縁部・体部一部、底部2/3残。	細砂多く含む。軟質。灰。底部外面のみ黄褐。	体部は緩く外湾する。一か所片口部を造る。底部外面左回転糸切り無調整。体部外面下端は篋削り。底部内面・体部内面下端は摩滅する。	覆土。在地製。15C前半。
526	片口鉢 軟質陶器	器高:[70mm] 口径: (270mm) 1/5残。	細砂多く含む。軟質。黒。断面灰白。	体部は緩く外湾する。口縁端部内面は内側に突き出る。内面・口縁部外面の調整は丁寧。	2坑覆土。在地製。14C後半。
527	内耳鍋 軟質陶器	器高:[98mm] 口径: (284mm) 小片。	細砂多く含む。粗砂少量含む。黒色粒子含む。灰。	口縁部は外反する。口縁端部内面は内側に小さく突き出る。口縁部の調整は丁寧。	覆土。在地製。15C。
528	甕 焼締陶器	肩部小片。	粗砂含み、やや粗い。硬質。灰～灰白。	外面は緑灰色の灰釉が掛かる。	覆土。東海製。13～15C。
529	甕 焼締陶器	底部小片。	粗砂多く含むが、緻密。硬質。赤灰。	底部外面には砂が付着する。外面は酸化により、鈍い赤褐色を呈する。	覆土。常滑製。13～15C。
530	砥石	重:120g 1/2欠。	砥沢石。	4面とも多用する。研ぎ減りが著しい。	覆土。
<b>0 2区0 1号溝</b>					
534	播鉢 陶器	器高:[43mm] 口径: (310mm) 小片。	粗砂を少量含み、やや粗い。普。胎土は淡い黄。	口縁部は受け口状をなす。錆釉を施す。	2溝付近の覆土。瀬戸・美濃系。18C中。

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(1・2・3・4・6区溝)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
<b>03区01号溝</b>					
535	播鉢 軟質陶器	器高:[111mm] 口径: (313mm) 1/6残。	細砂～径4mmの礫少量 含む。黒色粒子含む。軟 質。灰。断面は灰白。	体部は緩く外反する。内面と口縁部外 面の調整は丁寧。6条を一単位とした播 目を施す。体部下位は使用により摩滅 する。	覆土。在地製。15C 後半～16C前半。
536	内耳鍋 軟質陶器	器高:[96mm] 口径: (300mm) 小片。	細砂～径4mmの礫少量 含む。黒色粒子含む。や や軟質。灰。	口縁部は外反する。口縁端部は受け口 気味になる。	覆土。在地製。15 C。
537	播鉢 軟質陶器	器高:[60mm] 口径: (272mm) 小片。	細砂～径3mmの礫少量 含む。黒色粒子含む。や や軟質。灰。	口縁部は外反する。口縁端部は内側に 突き出る。片口部は指などでにより造る。	覆土。在地製。14C 後半～15C前半。
538	杯 須恵器	器高:27mm 口径:(90 mm) 底径:(59mm) 1/2 残。	細砂～径1mmの粗砂含 む。やや軟質。灰白。	体部は内湾する。口縁部は外反する。底 部外面は右回転糸切り無調整。	覆土。当溝には伴 わない可能性が高 い。
539	皿 土師質土 器	器高:30mm 口径:(111 mm) 底径:(61mm) 1/ 3残。	細砂～粗砂含む。赤色 粒子少量含む。普。鈍い 橙。	体部は外反する。底部内面周縁はくぼ む。底部外面は左回転糸切り無調整。	覆土。
540	皿 土師質土 器	器高:40mm 口径:(142 mm) 底径:60mm 1/2 残。	細砂～径2mmの礫含む。 赤色粒子含む。普。鈍い 橙。	体部は直線的に開く。口縁部は外反す る。底部外面は右回転糸切り無調整。	覆土。
<b>03区03号溝</b>					
542	用途不明 軽石製品	径:220mm 厚さ:93mm		両面を深くくぼませる。周縁は2カ所浅 くくぼむ。	覆土。
<b>04区01号溝</b>					
562	播鉢 軟質陶器	器高:[38mm] 口径: (260mm) 小片。	細砂～粗砂多く含む。 やや硬質。灰。	口縁端部は内側に折り曲げる。	覆土。在地製。14C 後半。
563	播鉢 軟質陶器	器高:[45mm] 口径: (300mm) 小片。	細砂～粗砂多く含む。 軟質。黒褐。断面鈍い 褐。	口縁端部は内側に折り曲げる。	覆土。在地製。14C 後半。
564	播鉢 焼締陶器	器高:[66mm] 口径: (300mm) 小片。	細砂～粗砂含む。普。赤 褐。断面鈍い赤褐。	口縁部は僅かに内湾する。体部下位内 面は使用により摩滅する。	覆土。製作地不祥 14～15C。
<b>06区03号溝</b>					
571	内耳鍋 軟質陶器	器高:[142mm] 口径: (274mm) 小片。	細砂～粗砂含む。やや 硬質。内面灰オリーブ・ 外面黒・断面鈍い褐。	口縁部は外反する。口縁端部は受け口 状を呈する。	南東隅。外面煤付 着。在地製。15C。

### 表土出土の遺物

当遺跡内からは多量の遺物が出土している。そのうち各遺構に属する遺物・各遺構覆土の遺物を除いたものを表土出土の遺物とした。表土からも多くの遺物が出土しているが、僅かではあるが特徴的な遺物を取り出して掲載した。

414・476・659は剣形の石製模造品である。付近には古墳が散在し、崖上の下佐野遺跡には多くの古墳が築造されている。それらの古墳と関係するものと推定している。詳しくは別に触れているので説明は省く。635・636・637・638・639は古墳時代前期の土師器の壺である。635は刷毛目を施した後に「八」沈線を刻み、最後に赤色顔料を塗布してある壺である。636・637・638・639は口縁部の形態の異なった壺を掲載した。636は口縁端部・頸部に櫛状工具による刺突文があり、単口縁である。637は口縁端部に外縁帯を持ち、有段口縁である。638は折り返し口縁を持ち、639は口縁端部に外縁帯を持つものである。642・643・644は古墳時代後期の須恵器の甕・杯である。644は外縁帯を持ち、口縁部・口縁端部に波状文・沈線を施している。642・643は杯身であり、642の方が古い形態を持っている。641は古墳時代後期の土師器の小型甕である。640は古墳時代末と推定される土師器の杯であり、646は奈良時代と考えられる土師器の杯である。649・650は平安時代の灰釉陶器の椀であり、651は平安時代の緑釉陶器の瓶である。645は平安時代の杯である。647は平安時代の椀である。664は平安時代の椀であり、内黒である。653は古代布目瓦であり、住居跡覆土から出土している小片とほぼ同時期（8C～9C）と考えられる。544・648・654・655はいずれも中世の所産である。654は内面に片切り彫りの文様を有する龍泉窯系青磁碗であり、当遺跡における中世の中国陶磁唯一の例である。（しかも、注記には「11-C-2P内」とあり、前橋台地上の11区から出土したと考えられ、遺構の検出された台地下の中世遺構を考えるうえで重要な資料である。）544は在地製軟質陶器播鉢である。544は内面に播目を入れられないタイプであり、従来「鉢」と称されていたものである。しかし、当遺跡においては播目を施すタイプとの間に使用痕の違いが認められないために、当報告書では「播鉢」とした。660は時期不明の粗粒安山岩製の砥石である。652は全面に筥磨きを施した時期不明の土師器である。656・657・658は土錘であるが、時期は不明である。661の「永樂通寶」は土壙墓に副葬されていたものと推定される。662は角釘の一部であり、663は鎌の刃の先端部と考えられる。

## 舟橋遺跡出土の滑石製品について

ここでは、混入遺物として遺構外の扱いとなった2点の滑石製模造品を主として、当遺跡出土の17点の滑石製品について述べる。その内訳は、管玉2点・勾玉4点・紡錘車3点・剣形品3点・刀子1点・不明1点・原石2点である。これらは、出土した遺構の時期に対応する特徴を持ち、おおよそ古墳時代前期から後期に位置付けられるが、遺構外とした刀子と剣形品の2点は、県内出土例からすると中期古墳副葬品中に多出するものであり、古墳の存在を暗示したものといえる。また、残る遺物は、例えば管玉に見る紐ずれの様に、集落内に供給を受けて消費されたものと思われるが、2点の大型原石の存在は工具類・剥片等の共伴が明確でないが、集落内で消費する小規模な生産工房の存在を暗示している。

414の刀子は、青灰色で良質な滑石製。全体は、断面方形の偏平、薄手で、表裏とも削りにより成型し、柄部側面を除いた周縁に粗い研磨を施す。完存で、全長51mm、刀身と柄部とは一条の浅い刻線を施して区別する。刀身は、長さ33mm・幅15mm・厚さ4mmで、棟は反り身を持ち、耳は三角状に突起し、刃側にやや間隔をおいて2孔があいている。柄部は、長さ18mm・幅11mm・厚さ4mm、稜に柳葉形の細い削りを施して丸さを表現している。また、柄尻は丸く削りだしている。

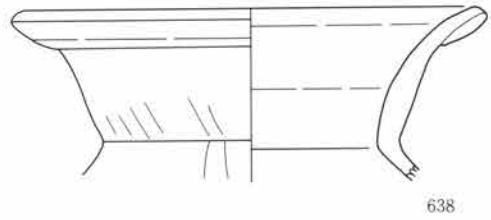
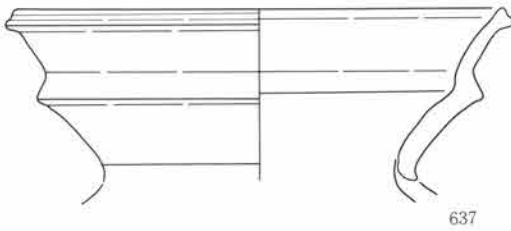
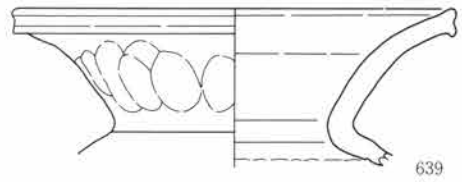
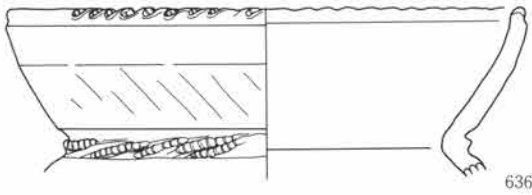
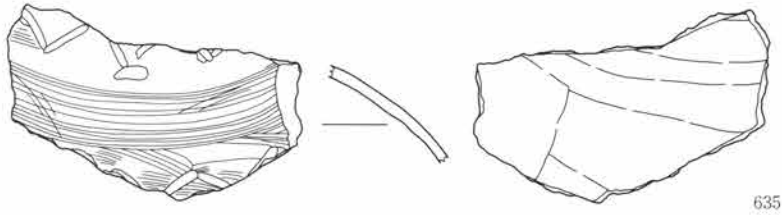
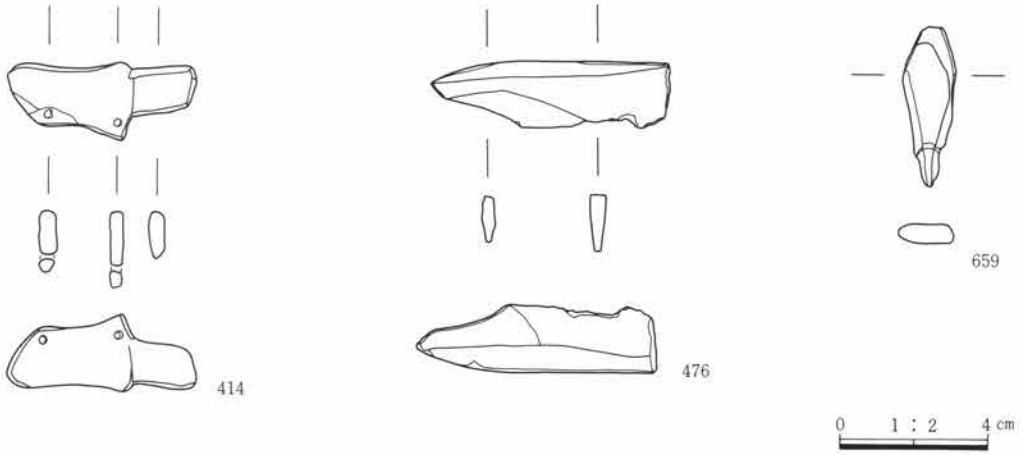
476の剣形は、同じ青灰色でも414に比較して、硬質の滑石製。切先部分を折損するが、残長で65mmを測り、全長では100mm前後と推定される。成形は、研磨を全体に施したもので、その方向を変えることで柄部を始めとする各部位の特徴を簡略に表現している。刃身は、長さ45mm・幅18mm・厚さは刃側1mm・棟側5mmを測る。研磨による鑄の表現とともに、その方向を変えて刃側が意識されている。柄部は、刃側に続く部位を弧状に削りこむとともに、棟とは研磨の方向を約90度変えて区別している。長さ20mm・幅5～7mm・厚さ1～5mmである。表裏の研磨は、刃身部と同様で目釘穴の表現は省略されている。

659は、滑石の剣形品である。長さ44mm・最大幅15mm・厚さ4mmの完存。全体は、粗い研磨で成形されているが、穿孔はない。その特徴は、6世紀代の粗製化したものである。

以上が、各特徴である。414は、細部の表現がされているものの、薄さを感じさせる偏平な作りからは、やや後出する印象を受ける。県内の類例としては、高崎市剣崎天神山古墳出土品が求められ、5世紀後半頃とできる。一方476は、鞘や目釘等の表現はないが、研磨を多用した鑄や棟の作り方は近い年代観が与えられる。5区11号住居跡の267の剣形も近い年代観の例である。

4区2号住居跡出土の124・125・126の3点の勾玉は、同一の石材と技法を用い、法量の点で近似することから規格品ともいえる。特徴は、強い「C」字形の反り身と頭部を少し大きめに表現した形状にある。長さは22～27mm・厚さは6～8mm、断面方形、両面穿孔が特徴である。

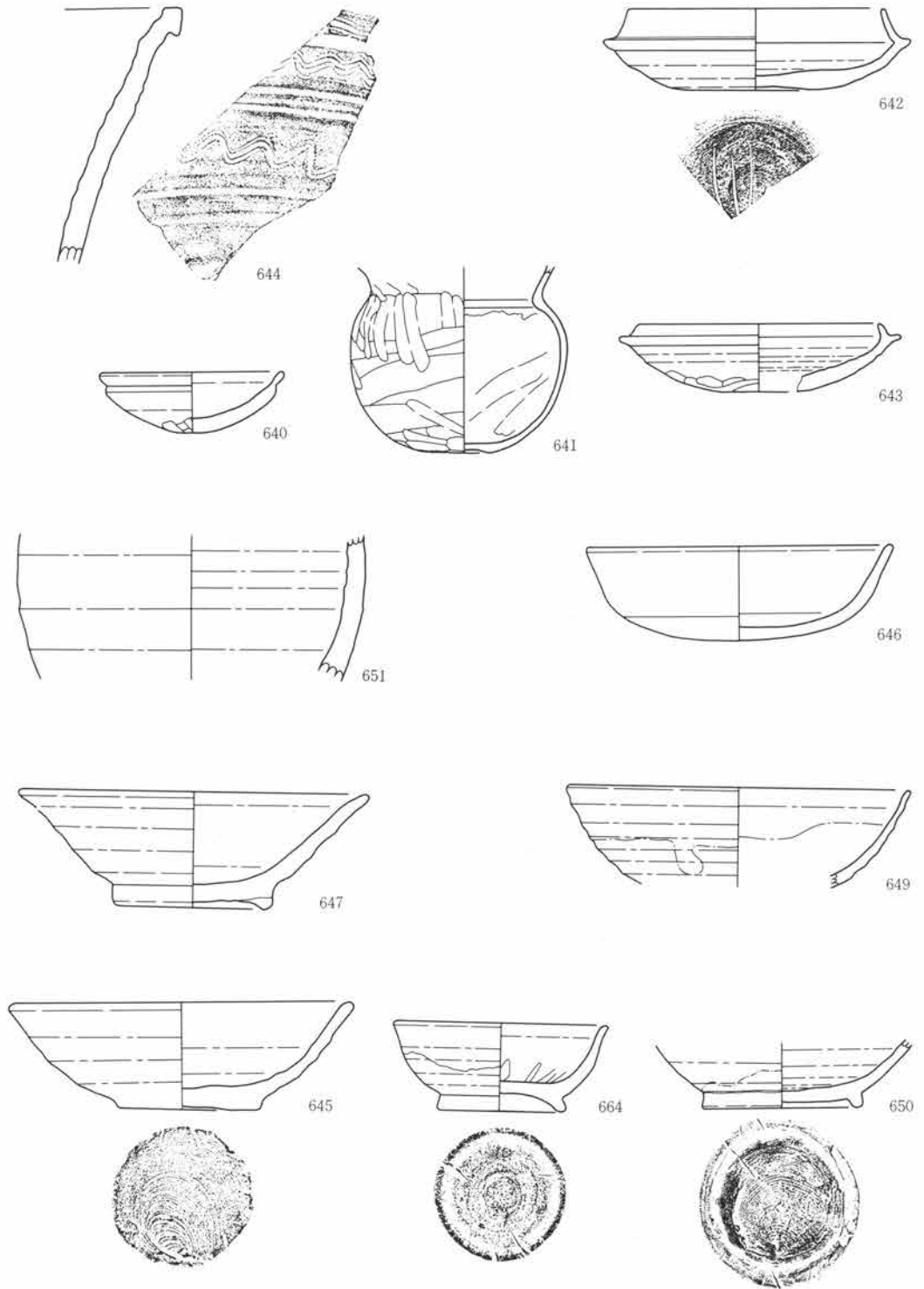
3区7号住居跡・4区1号住居跡出土の2点の原石は、長さ100mm近い板状剥片で粗割りにより板状の剥片を得ている。3区7号住居跡出土品は、中央に分割用の刻みがあり、紡錘車の素材とも考えられる。



第341図 表土出土遺物①

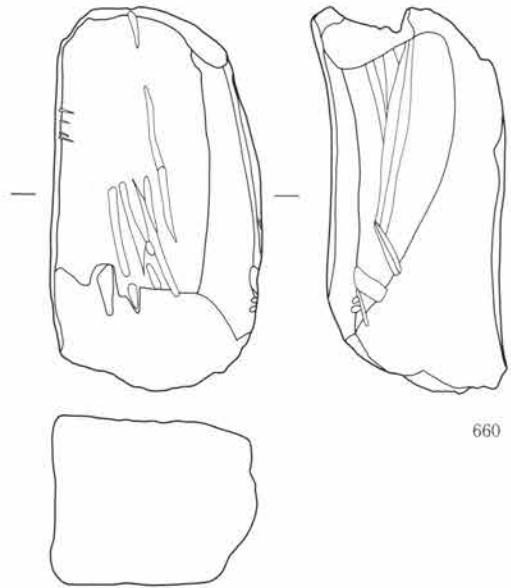
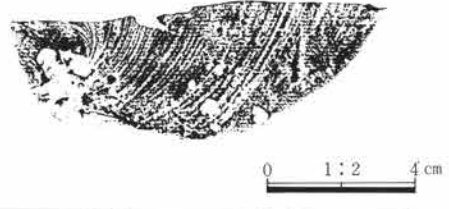
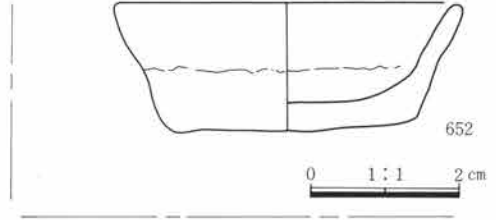
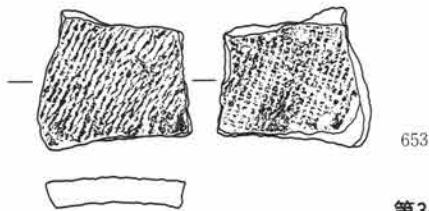
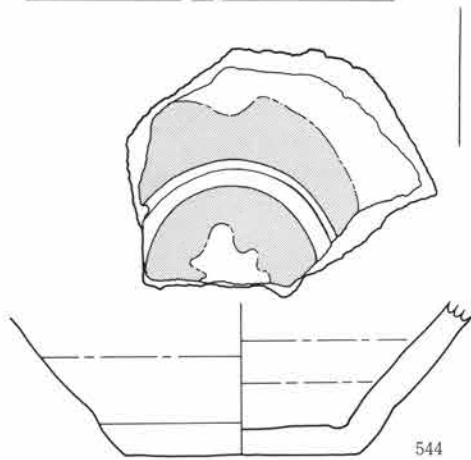
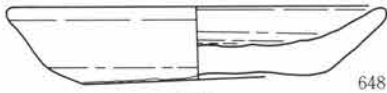
0 1 : 3 6 cm

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(表土出土遺物)

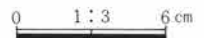


第342図 表土出土遺物②

0 1:3 6 cm

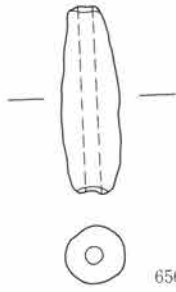


第343図 表土出土遺物③

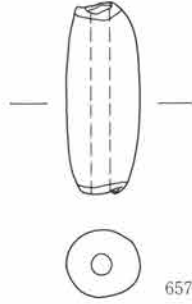




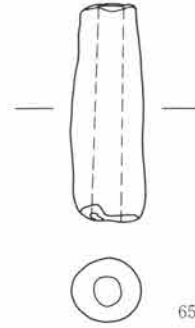
第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(表土出土遺物)



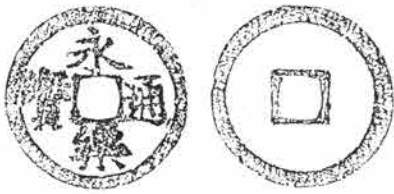
656



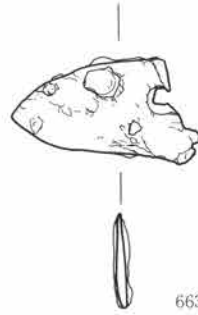
657



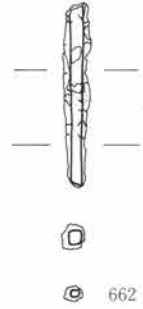
658



661



663



662



第344図 表土出土遺物④

第IV章 発見された遺構と遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
414	石製模造品	長:50mm 幅:21mm 厚:4mm 孔径:1.5mm 重:6.91g	滑石。	刀子の模造品。幅広く短い身に把の付いた形。身の刃方に2カ所の穿孔有り。	7区。
476	石製模造品	長:[64mm] 幅:18mm 厚:5mm 重:9.35g	滑石。	把が欠けている。刃部は両面から擦られている。	8区。
544	播鉢 軟質陶器	器高:[60mm] 底径: (109mm) 底部1/2・体 部1/4残。	細砂～粗砂含む。赤色 粒子を含む。鈍い黄橙。	底部外面左回転糸切り無調整。底部内 面周縁・体部内面下端は使用により摩 滅する。	3区。外面煤付着。
635	壺 土師器	器高:— 口径:— 底 径:— 体部小片。	径1～2mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。鈍 い黄橙。	内面:なで。外面:刷毛目後に篋状工具 による「八」形の沈線を施す。沈線部分 には赤色顔料を塗布。	6区。
636	壺 土師器	器高:[67mm] 口径: (210mm) 底径:— 口 縁部～体部上端1/8残。	径1～2mmの砂粒を含 む。硬質。酸化。灰黄。	口縁部は「く」字状に外湾し、口縁端部 はやや内湾する。内面:口縁部は横な で。外面:口縁端部及び頸部に櫛状工具 による刺突文、口縁部は横なで。	6区。
637	壺 土師器	器高:[69mm] 口径: (204mm) 底径:— 口 縁部1/10残。	径1～2mmの砂粒を含 む。硬質。酸化。鈍い橙。	有段口縁。口縁端部は外縁帯を持つ。内 外面共に口縁部は横なで。	4区。
638	壺 土師器	器高:[70mm] 口径: (192mm) 底径:— 口 縁部～体部上端1/6残。	径1～2mmの砂粒を含 む。硬質。酸化。鈍い黄 橙。	口縁部は「コ」字状に外湾し、口縁端部 は折り返し。内面:口縁部は横なで、体 部上端はなで、一部指頭痕が残る。外 面:口縁部上半は横なで、口縁部下半～ 体部上端は篋削り。	
639	壺 土師器	器高:[63mm] 口径: (180mm) 底径:— 口 縁部～体部上端1/2残。	径1～2mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。鈍 い橙。	口縁部は「く」字状に外湾し、外縁帯を 持つ。内面:口縁部は横なで、体部上端 はなで。外面:口縁部～体部上端は横な で後一部篋なで。	7区。
640	杯 土師器	器高:28mm 口径:86mm 底径:— 口縁部～底 部3/4残。	径1～2mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。灰 黄。	外面口縁部下端に稜を持つ。丸底。内 面:口縁部～体部上半は横なで、体部下 半～底部はなで。外面:口縁部～体部上 半は横なで、体部下半～底部下半は篋 なで。	7区。
641	甕 土師器	器高:[85mm] 口径:— 底径:33mm 口縁部～ 底部3/4残。	径1～2mmの砂粒を含 む。やや硬質。酸化。浅 黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾。内面:口縁部 はなで、体部上半は指なで、指頭痕が残 り、体部下半～底部は篋なで。外面:口 縁部はなで、体部上半は篋削り後篋な で、体部下半～底部は篋削り。	3区。内外面に油 煙付着。二次炎を 受けている。
642	杯 須恵器	器高:38mm 口径:(120 mm) 底径:(60mm) 最 大径:(142mm) 口縁部 ～底部1/4残。	径1～2mmの砂粒を含 む。硬質。還元。灰白。	口縁部は内傾し、受け部はほぼ水平。最 大径は受け部。内面:口縁部～底部は回 転なで。外面:口縁部～体部は回転な で、体部下端～底部は回転篋削り。	4区。外面底部に 篋記号有り。

第1節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物(表土出土遺物)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
643	杯 須恵器	器高:[31mm] 口径: (114mm) 底径:— 最大 径:(130mm) 口縁部 ~体部1/4残。	砂粒を少量含む。硬質。 還元。灰。	口縁部は内傾し、受け部はほぼ水平。最大径は受け部。内面:口縁部~体部は回転なで。外面:口縁部~体部上半は回転なで、体部下半は篋削り。	
644	甕 須恵器	器高:— 口径:— 底 径:— 口縁部小片。	砂粒を少量含む。硬質。 還元。淡黄。	口縁端部は外縁帯を持つ。内面:口縁部回転なで。外面:口縁部は回転なで後、外縁帯・口縁部上半・口縁部中央に波状文を施す。	10区。
645	杯	器高:50mm 口径:160 mm 底径:67mm ほぼ 完形。	砂粒を少量含む。やや 軟質。酸化。橙。	体部~口縁部は僅かに内湾しつつ広がる。轆轤右回転。底部は回転糸切り。内面:口縁部~体部は回転なで一部縦なで、底部はなで。外面:口縁部~底部は回転なで。	3区。内外面に油煙付着、特に外面多量の油煙付着。二次炎を受けている。
646	杯	器高:43mm 口径:(142 mm) 底径:— 口縁部 ~底部1/2残。	径1~2mmの砂粒を含む。硬質。酸化。明赤褐。	口縁部は直線的に開く。丸底。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。外面:口縁部は横なで、体部~底部は観察不能。	
647	椀	器高:53mm 口径:(162 mm) 底径:74mm 口縁 部~高台部1/3残。	径2~3mmの砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い橙。	体部~口縁部は直線的に開く。底部は貼り付け高台。内面:口縁部~体部は回転なで、底部はなで。外面:口縁部~体部は回転なで。	7区。
648	杯	器高:20mm 口径:103 mm 底径:66mm 口縁 部~底部3/4残。	径1~2mmの砂粒を含む。やや硬質。酸化。橙。	轆轤左回転。底部は回転糸切り。内面:口縁部~底部は回転なで。外面:口縁部~体部は回転なで。	7区。
649	椀 灰釉陶器	器高:[46mm] 口径: (160mm) 底径:— 口 縁部~体部1/3残。	鉱物粒子を含む。やや 硬質。還元。灰白・灰オ リーブ。	体部~口縁部は内湾しつつ開く、内外面共に丁寧な轆轤なで。釉は浸し掛け。	5区。
650	椀 灰釉陶器	器高:[30mm] 口径:— 底径:74mm 体部下半 ~高台残。	鉱物粒子を含む。硬質。 還元。灰白。	轆轤右回転。底部は回転糸切り後、高台貼り付け。内面は底部近くまで釉が掛かっている。内面:体部下半~底部は轆轤なで。外面:体部下半は轆轤なで。	
651	瓶 緑釉陶器	体部小片。	緻密。やや軟質。灰白 色。	外面のみ施釉する。釉色にはムラがある。	8区
652	不明 土師器	器高:17mm 口径:47mm 底径:34mm 口縁部一 部欠。	緻密。普。黒。	全面篋磨き。体部に接合痕残る。	8区
653	平瓦	厚:13mm 小片。	細砂含む。径2mmの礫少 量含む。普。灰。	表面に布目残る。裏面には縄目叩きが残る。	4区
654	碗 青磁	小片。	緻密。硬質。灰。	内面に片切り彫りで文様を施す。灰オリーブ色の青磁釉。	11c2p。龍泉窯系。 14C。
655	おろし皿	底径:(111mm) 1/4残。	やや粗く、径2mmの礫小	内面には、おろし目をいれる。底部外面	表採。瀬戸・美濃

第IV章 発見された遺構と遺物

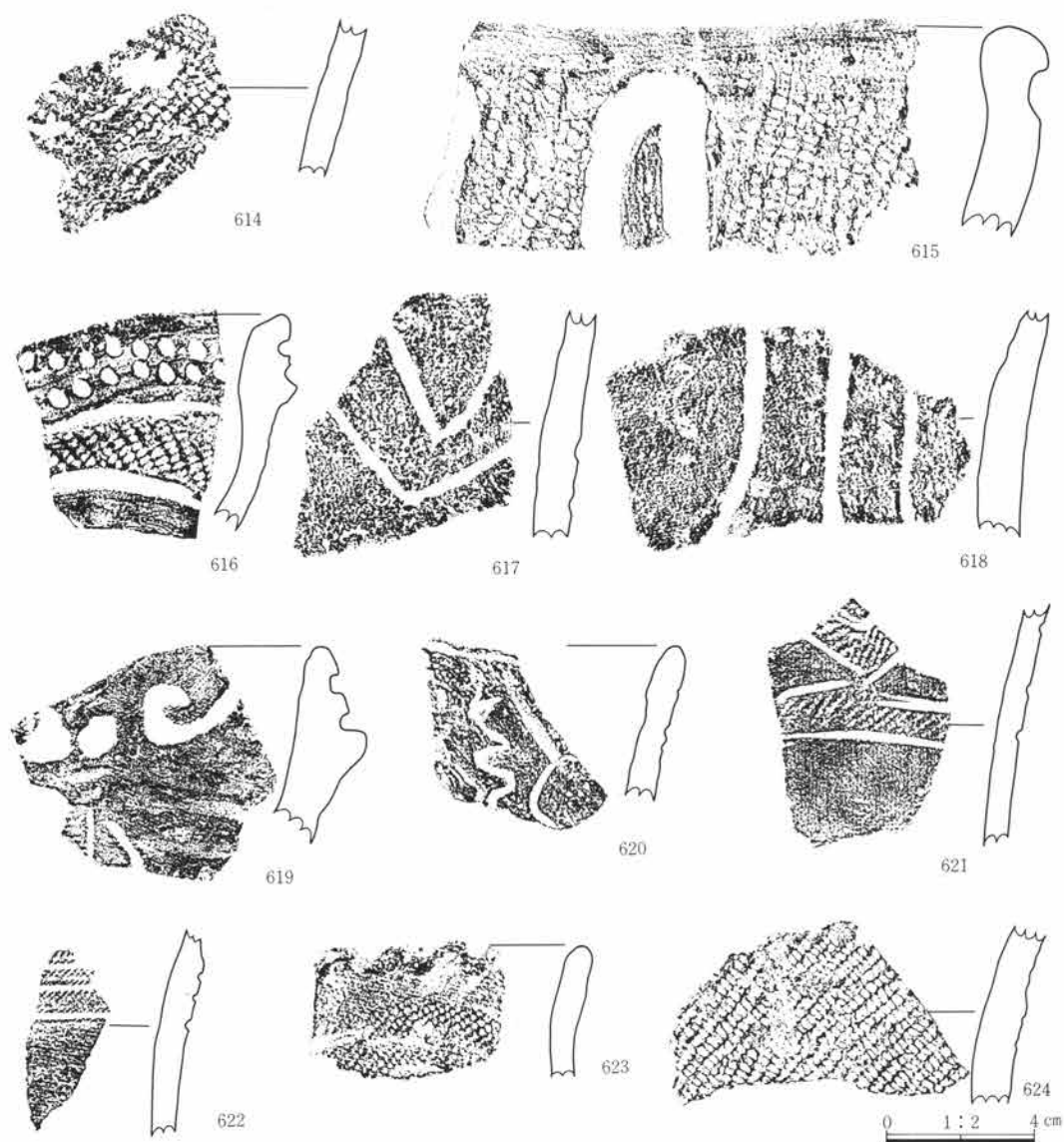
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴他	出土状態 備考
656	陶器 土 錘	長:50mm 幅:16~9mm 完形。	量含む。硬質。灰白。 細砂~粗砂多く含む。 硬質。灰。	右回転糸切り無調整。底部外面を除き 灰釉を施す。 両端はなで。	系。16C。 表採。
657	土 錘	長:51mm 幅:20mm 端 部一部欠。	細砂~粗砂多く含む。	両端はなで。	表採。
658	土 錘	長:58mm 幅:15~20.6 mm 完形。	細砂~粗砂多く含む。 硬質。黄灰。	両端は篋切り。	表採。
659	石製模造 品	長:43mm 幅:15mm 厚:5mm 重:3.39g	滑石。	刀子の模造品。身の中央の幅が広く、両 端が狭くなる。	7区。
660	砥石	長:[155mm] 幅:85mm 厚:67mm 重:980g	粗粒安山岩。	4面使用されている。	5区。
661	銭			「永樂通寶」	
662	角釘 鉄製品	長:[53mm] 幅:[2~3 mm]		上部が太く、下部が細い。角釘と推定。	
663	鎌 鉄製品	長:[50mm] 幅:[27mm] 厚:[2mm]		鎌の先端部。	
664	椀 土師質土 器	器高:40.5mm 口径: 100mm 底径:60mm 完 形。	細砂~粗砂含む。普。内 面は黒。外面はにぶい 黄橙。	内面は篋磨き。高台張り付け時に、底部 切り難し痕なで消す。	6区ピット3。

## 第2節 縄文時代・弥生時代の遺物

舟橋遺跡からは、遺構は検出されなかったが、少量の縄文時代から弥生時代の遺物(第345・346図)が出土している。以下、概要を記す。

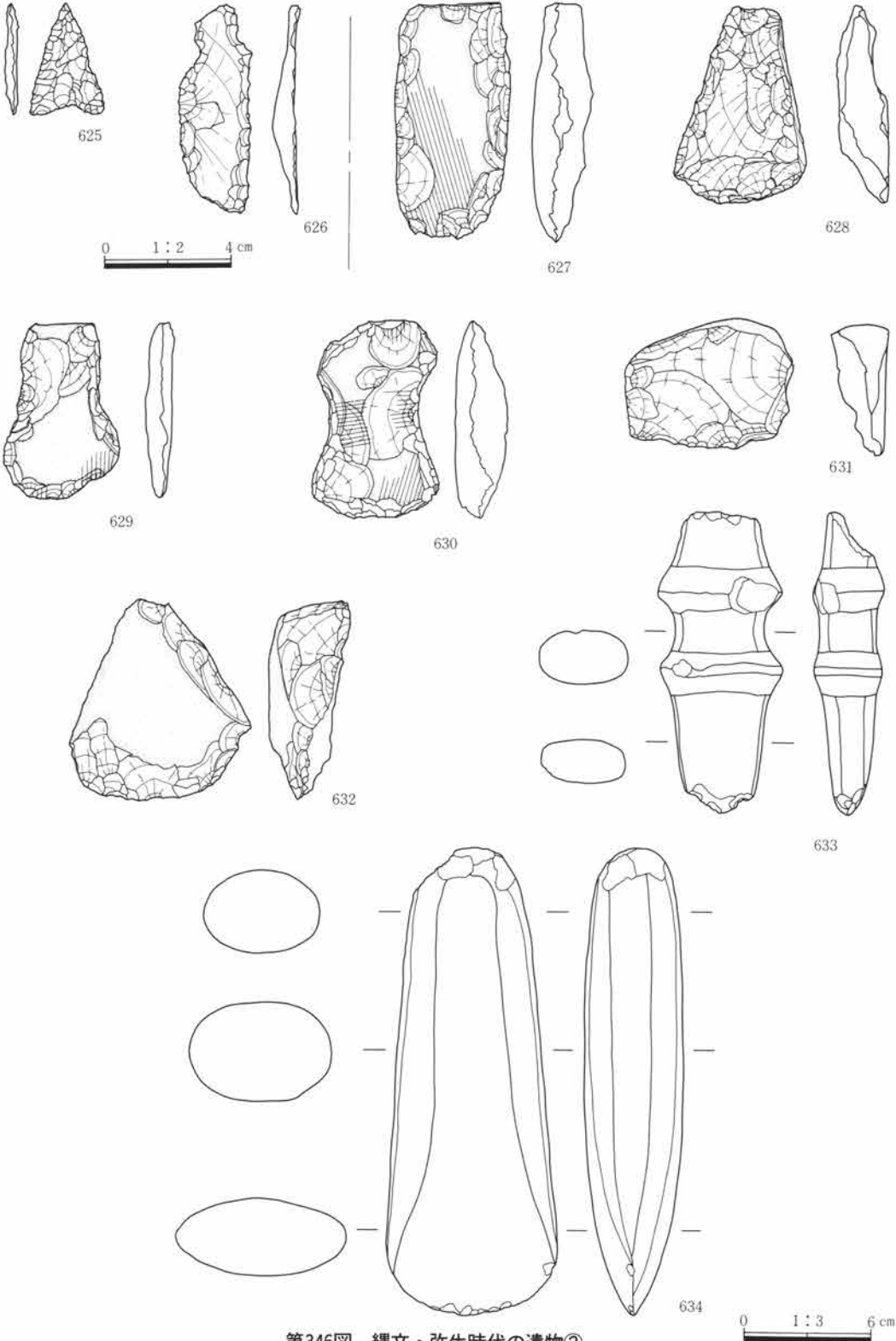
614は胴部破片で繊維を含む。LR・RL縄文を横位に施文し、羽状構成をなす。黒浜式土器に相当する。615は口縁部の破片で僅かに内湾し、端部内面が肥厚する。地文にLR縄文を斜位に施文後、波状をなすと考えられる太い沈線を巡らし、沈線間を磨り消している。加曾利E3式土器後半に相当する。616は波状をなす口縁部の破片で、内湾し、端部内面が肥厚する。口縁形状に沿って隆帯と沈線が1条ずつ巡り、端部には平行する連続刺突文概要を2条施され、地文にRL縄文を充填する。加曾利E3式土器後半に相当する。617・618は同一個体の胴部破片である。沈線によりJ字文を構成すると見られる。称名寺2式土器に相当する。619は口縁突起部の破片で「く」の字状に屈曲している。口縁部には沈線と刺突による文様が施され、頸部に垂下・斜行する細い沈線が配されている。堀之内1式土器に相当する。620は口縁部の破片で内面端部は肥厚し、段を有する。口唇部に1条の沈線が施され、直下より蛇行する細い沈線が垂下する。また、粗にRL縄文が施されている。堀之内1式土器に相当する。621は胴部破片で、平行する沈線により、三角形文あるいは菱形文を構成する。沈線間には直前段半燃りLL縄文が施されている。堀之内2式土器に相当する。622は胴部破片で下半に4本の平行沈線が配され、LR縄文が施されている。堀之内2式土器に相当する。623は口縁部の破片で僅かに「く」の字状に屈曲している。口唇部は棒状工具の押圧により山形をなしている。口縁下部にLR縄文を横位に施している。弥生中期の所産と考えられる。624は胴部破片で、多条縄文のLR1<sup>3</sup>が施されている。硬質な焼成で、623と同様に弥生中期の土器と考えられる。

625は無茎の石鏃で側縁部の一部が破損している。長さ35mm・幅23mm・厚さ3mm・重さ2.20gである。626は縦形の石匙で横長剥片を用いている。長さ65mm・幅22mm・厚さ6mm・重さ9.56gである。627は短冊形打製石斧で基部を欠損する。表面は自然面を大きく残し、使用による擦痕が斜行している。裏面には粗い剥離が加えられ、側縁部は細かく潰されている。刃部は丸く、使用による割れが見られる。残存長112mm・幅55mm・厚さ25mm・重さ215.5gである。628は撥形の打製石斧である。表面は一次剥離面を残し、裏面は自然面を大きく残している。側縁部の片面は細かく潰しているが、他方の面は剥離面が厚く残っている。刃部は丸く、一方向より剥離が加えられ、鈍角である。長さ94mm・幅63mm・厚さ23mm・重さ130.2gである。629は撥形の打製石斧で、刃部が丸く、基部は矩形をしている。表面は自然面を大きく残し、裏面も一次剥離面を大きく残している。側縁部は細かく潰され、刃部は一方向より剥離が加えられている。長さ83mm・幅55mm・厚さ12mm・重さ67.4gである。630は分銅形の打製石斧である。表面は自然面を残し、裏面は粗い剥離が加えられ、側縁部は細かく潰されている。刃部は丸く、使用による割れや擦痕が見られる。また、柄れ部にも柄装着による擦痕が見られる。長さ94mm・幅61mm・厚さ25mm・重さ165.4gある。



第345図 縄文時代の遺物①

631は剥片石器で側縁部に自然面を残し、刃部は平刃で、一方向より剥離が加えられている。長さ63mm・幅81mm・厚さ27mm・重さ139.9gである。632も剥片石器で、表面に大きく自然面を残し、刃部は丸く、一方向より剥離が加えられている。長さ95mm・幅84mm・厚さ32mm・重さ244.1gである。633は独鈷石両頭部とも使用による割れが見られるが、欠損後も使用の痕跡が認められる。両頭部ともに丁寧に研磨され、柄装着部は敲打による加工が加えられている。長さ141mm・幅57mm・厚さ32mm・重さ345.4gである。634は蛤刃をなす大型の磨製石斧で、基部の一部を欠損し、刃部には使用による細かい割れが見られる。長さ220mm・幅80mm・厚さ47mm・重さ1,340gで、弥生時代の所産と考えられる。



第346図 縄文・弥生時代の遺物②

## 第V章 調査の成果と問題点

### 第1節 舟橋遺跡の古墳時代土器と集落について

井川 達雄

#### 1. はじめに

当遺跡は、下佐野遺跡・万福寺遺跡などが分布する台地よりも一段下がった、烏川東岸の微高地上に立地している。当遺跡の住居跡の時期は、大きく古墳時代と平安時代にわかれる。古墳時代と考えられる住居跡は44軒であるが、遺物が出土し時期を推定できた住居跡は40軒である。住居跡の分布は、10区以北を除きほぼ調査区域の全域にわたっている。この住居跡出土の土器を主体に分類したのが、第347図～第352図である。当遺跡の土器編年の試案として7期に分類した。

#### 2. 遺構と遺物の分類

##### I期

当期は、「S」字状の口縁と体部から脚部にかけての刷毛目調整を特徴とする台付甕が多く出土する時期である。古墳時代前期の土師器で、群馬県では石田川の型式名で呼ばれている。当遺跡では、2区1号・2区2号・3区2号・3区6号・3区8号・3区10号・4区6号・4区9号・5区8号・5区15号・7区5B号・7区16号住居跡の12軒である。

土器の組み合わせは、甕・壺・台付甕・甑・高杯・器台・埴などである。63・64・395・397・665の台付甕は当期の指標となる土師器で、「S」字状口縁と体部から脚部にかけて施された刷毛目が特徴である。しかし、665は刷毛目が殆どなくなっており、僅かに体部下端から脚部上端にかけて認められるだけである。また、397は「S」字状口縁の端部が極端に広がった形態である。665の調整は、刷毛目調整の終末的な状態を示すのではないだろうか。83は体部から口縁部へ緩やかに内湾しながら立ち上がる、小型の甑である。外面の調整は篋削りである。8は「く」字状口縁をもち、体部の調整は篋削りの甕である。37・279・407は壺であるが、その口縁部の特徴は多様である。37は口縁端部が屈曲して立ち上がる、外縁帯を持つ壺である。279は口縁部中央に段を持つ有段口縁の壺であり、口縁部下半の内外面には篋磨きが施されている。407は口縁端部に櫛状工具による刺突文を持つ壺であり、口縁部の外面には篋磨きが施されている。277は体部上半が直立し、口縁部が「く」字状に外反する鉢である。80・156は高杯である。80は665の台付甕を体部中央で切断した下半そのままの形であり、特異な形態をしているが、高杯の部類にいった。156は口縁部が大きく広がる形態であり、調整は内外面に篋磨きが施されている。6・81は器台である。杯部は体部上端で屈曲し、短い口縁部は直立に近く、脚部は「ハ」字状に開く形態である。脚部には円形の孔が3カ所穿たれている。調整は杯部・脚部の内外面に篋磨きが施されることが多いが、6の



脚部の内外面は刷毛目である。61・149・150・247・393・450は埴である。61はやや大型であり、149・150・247は小型である。器形の特徴は丸みを持つ体部と、「く」字状に屈曲し、大きく広い口縁である。口縁部の内外面には、篔磨きが施されることが多い。393・450は口縁部も小さく、小型の甕に近い形態であり、調整は篔削りが主体であるが、393の外面には刷毛目が施されている。

I期は、前述のように「S」字状口縁の台付甕が指標となる時期であるが、665のように刷毛目調整が殆どなくなった台付甕や、149のような頸部の屈曲が深く、体部の小さい埴が共伴しており、古墳時代前期でも終末に近い時期と考えられる。また、当期の3区6号・3区8号・3区10号住居跡は重複しており、細区分できる可能性が大きい。

## II期

I期の指標であった「S」字状口縁で刷毛目調整の台付甕の特徴が崩れてくる時期である。住居跡は、4区8号・7区1号・7区13号・8区15号・9区1号住居跡の5軒であるが、土師器を焼成したとも考えられる9区10号土坑・9区11号土坑を加えることができる。

土器の組み合わせは、甕・台付甕・壺・高杯・埴などである。363・364・443・517・610は台付甕である。刷毛目調整はなくなっており、外面の調整は斜め方向の篔削りである。363・517・610の口縁部は「S」字形が残っているが、364・443は口縁部が「く」字形に変化している。II期の台付甕は、全体的な形態としてはI期の台付甕の形態を踏襲しているが、細部は変化してきているのである。518は頸部の縊れの大きい「く」字状口縁の甕であり、基本的にI期の甕8と変化がない。366・444は球胴型の壺・甕である。I期の37・279・407等の系譜を引くものと考えられるが、口縁部に見られた外縁帯や櫛状工具による刺突文は見られなくなっている。258・359の高杯は、杯部の底部上端から体部下端にかかる部分で屈曲し、口縁部が広がり、脚部の下端が大きく開き、ラッパ状を呈することを特徴とする。杯部の調整は、篔磨きが施されることが多い。494は器台であるが、443・610の台付甕の体部下端から脚部を切り取ったような特殊な形態をしている。II期は、I期に多く見られた器台が姿を消す時期であるが、494のような特殊な形態として残っているものもある。360・361・441・442・602・605・606は埴である。442は大型の埴であり、球形の体部、大きく縊れた頸部、大きな口縁部に特徴がある。また、442の体部下半は篔磨きにより文様が描かれており、特殊な用途が想定される。360・361・441は小型の埴であり、大型の442と同様に球形の体部、大きく縊れた頸部、大きな口縁部を特徴とする。しかし、360・441は丸底であるが、361は平底であり、I期の149の系統を引くと考えられ、変化が見られる。602・605・606は埴の中に含めたが、小型丸底の甕と呼んでもよい形態である。360・361・441・442に比べ、頸部の縊れも口縁部も小さくなっている。606は台付甕に見られた「S」字形の口縁部が見られる。

II期は、器台が消滅する時期であり、I期の特徴をもつ台付甕と次に述べるIII期に多く見られる高杯・小型の埴が共伴する時期と考えることができる。即ち、古墳時代前期から古墳時代中期への過渡期と考えることが可能ではないだろうか。

## III期

当期は、I期以来の特徴であった台付甕が姿を消す時期と考えられる。しかし、台付甕が変わって脚付甕が出現してくるのであるが、南側の台地の上に広がる下佐野遺跡<sup>注1</sup>II地区ではII期の台付甕と脚付甕が同居しており、台付甕と脚付甕の時期が重なることは事実である。住居跡は、4区11号・5区11号・6区1号・7区9号・9区2号である。

土器の組み合わせは甕・壺・脚付甕・高杯・埴などであり、特に高杯・埴の出土が多い。167・263は脚付甕である。当遺跡では、脚部全体の資料は発見されていないが、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部は「く」字状に外反する。166・265・287・288は球胴型の甕である。共に「く」字状に外湾する口縁部を持つが、166・265は平底であり、胴部がやや長くなっており、287・288は丸底であり、II期の壺の変化と考えることも可能である。調整は、縦方向・斜め方向の篋削りが主体であるが、288の胴部上半には刷毛目が施されている。266・429はI期・II期の壺の系統を引くものと考えられる。口縁端部に外縁帯の痕跡が見られるのが特徴である。168・265は底部から体部にかけて屈曲する杯部と、下半がラッパ状に開く脚部を特徴とする。杯部の内外面には篋磨きが施されることが多い。165・286はII期の442の系譜を引く埴である。球形の体部、大きく縊れる頸部、大きな口縁部を特徴とする。口縁部の内外面には篋磨きが施されることが多い。164・261・262・283・423は小型の埴である。器形の特徴は大型の埴と同じであり、調整も口縁部の内外面には篋磨きが施されることが多い。また、全体的な形態はほぼ同じであるが、262・423は丸底であり、164・261・283は平底に近い。機能的な差があるのであろうか。

III期は、I期からの特徴であった台付甕・器台が完全に姿を消し、埴・高杯の量が増える時期とすることができる。

#### IV期

III期に現れた球胴甕の胴がやや長くなる時期と考えられる。甕の長胴化は甕の出現を予測させるが、当遺跡において甕を持つ古墳時代中期の住居跡は検出されていない。住居跡は、3区14号・4区2号・4区14号・5区1号・5区5号・5区7A号・8区16号・8区17号住居跡であり、前述のように甕が検出された住居はないが、4区2号・5区1号・8区17号住居跡からは、埴が検出されている。

96・120・203は脚付甕である。96はIII期の167の系譜を引くと考えられるが、頸部の縊れが大きくなり、口縁部も大型化している。120・203はIII期の263の流れが考えられるが、胴部上半から中央にかけて丸みを持ち、口縁部はやや小型化している。97・123・240・523はIII期の166・265・288の流れと考えられる。4個体共に胴部中央が膨らみ最大径となり、口縁部が「く」字状に外湾する形態であるが、97・123は丸底であり、240・523は平底である。機能・用途の違いが想定される。外面の調整は、縦方向・斜め方向の篋削りである。511は甕と同じ形態を持つ甗である。98はIII期の266の流れと考えられる壺である。胴部から底部の形態が不明であるが、266とほぼ同じ外形をなすものと推定している。188・221・230は高杯である。221・230はIII期の168・285の流れの中で理解できるものであり、底部から体部にかけて屈曲し、脚部下半がラッパ状に開く形態である。188は、ラッパ状に開く脚部の下半は類似しているが、杯部の底部から口縁部にかけて直線的に広

がる形態は前二個体とは異なっている。時間的な差か地域的な差かについては、今後さらに検討する必要がある。杯部の内外面には、篋磨きが施されることが多い。224・225・227・239・508・509は埴である。227・509はⅢ期の165・286の流れの中で理解できる大型の埴であり、大きく縊れる頸部、大きな口縁部の基本的な形態は同じである。しかし、体部はやや偏平になっており、227は平底、509は丸底であり、Ⅲ期の小型の埴に見られた傾向が現れている。508は小型丸底の埴であり、基本的にはⅢ期の小型埴と同じ形態であるが、出土数は減少の傾向にあると考えられる。224・225・239は小型の甕に近い形態を持つが埴の部類と考えておく。形態は、胴部が緩やかな丸みを持ち、口縁部は「く」字状に外反する。224は丸底、225は平底、239は丸底と平底の中間の形態である。224・225・239はⅡ期の602・605の流れが想定されるが、Ⅲ期に同種の埴の出土がないので確定はできない。また、当遺跡ではⅣ期に続くと考えられる時期の住居跡の検出はないが、224・225・239は内稜（内斜口縁）を持つ杯につながるのではないかと考えられる。

前述のように、Ⅳ期に於ける甕の長胴化は竈の出現を想定させるが、当遺跡では竈は出現していない。これらの甕は、炉から竈へ変化する時期の過渡期の形態と想定できるのではないか。

#### V期

V期はⅣ期からの継続性はなく、当遺跡においては新たに出現する時期である。住居跡は竈を持ち、甕の長胴化が顕著になる時期であり、須恵器も出土しており、古墳時代後期の後半と考えられる時期である。住居跡は、3区1号・3区7号・6区3号・6区12号・8区3号住居跡である。

28・66は長胴化傾向が見られる甕である。形態は僅かな丸みを持つ胴と「く」字状に外反する口縁部が特徴であるが、28は胴部下半がやや膨らむ古い形態の残存とも考えられる。外面の調整は、縦方向の篋削りである。344・345は胴部中央が大きく膨らむ、球胴型の甕である。67は甗である。胴部は中央やや下部で屈曲し、胴部上半はほぼ垂直に立ち上がるが、下半は大きく窄まる形態である。22・23・65・306・307・342は須恵器模倣形態の土師器杯である。306・342は須恵器蓋杯の杯身の模倣形態である。23・65は須恵器蓋杯の蓋の模倣形態であるが、口縁部に段を持ち、内面の体部から底部にかけて篋磨きが施されている。22・307は須恵器模倣形態のなかで最も多く見られるものであが、307は口縁端部の調整が沈線状になっており、初期の須恵器模倣杯の特徴を持っている。26・27は長脚二段透かしの須恵器有蓋高杯である。杯部の口縁部は比較的長く、受部はやや短い。また、脚部は非常に長く、3列の二段透かしが穿たれている。308・466は須恵器蓋杯の杯身である。口縁部・受部の特徴は、高杯の杯部と同じであるが、外面の体部から底部は回転篋削りで調整されている。24・25・465は高杯・杯と対になる須恵器の蓋である。口縁部は直線的に開き、天井部下端から口縁部上端で屈曲し、屈曲部分には沈線が一条入る。外面天井部の調整は回転篋削りである。309は須恵器の短頸壺である。形態は丸底であり、体部上半が内湾し、口縁部は直立する。

V期は、Ⅳ期からは年代的に大きく掛け離れており、長胴甕と須恵器模倣形態の土師器杯を土器の特徴とする人々が、新たに住み着いたものと考えられる。

## VI期

VI期はV期からの流れでとらえることのできるものであり、古墳時代後期の後半の末に近い時期と推定される。住居跡は、2区4B号・3区5号・4区1号・6区2号である。

50・51は長胴の甕である。甕の全体の形態は把握できなかったが、V期よりも更に長胴化が進む時期と考えられるが、50は胴部に膨らみを持ち、古い形態が残存している。外面の調整は、口縁部が横なでであり、胴部は縦方向の篔削りである。300・301は球胴型の甕である。300はV期の97・123からの流れでとらえることができるが、301はやや小型化した丸胴の甕であり、当遺跡においては系譜をたどることはできなかった。114は小型の甕である。口縁部は「く」字状に外反し、調整は口縁部は横なで、丸い胴部は横方向の篔削りである。49・303・304は甗である。303・304はV期の67からの流れでとらえることのできる大型の甗である。304は胴部中央の屈曲が殆どなくなった形態であり、303は胴部中央の屈曲が67と304の中間の形態である。その他の形態・調整技法にV期からの大きな変化はない。49は緩やかに内湾しながら広がる形態の小型の甗である。外面の調整技法は、口縁部が横なでであり、体部から底部は篔削りである。49の系譜は、当遺跡においてはたどることができなかった。14・43・44・45・46・47・48・112・113は土師器の杯である。形態は須恵器杯蓋の模倣形態であり、外面の調整技法は口縁部が横なで、体部から底部が横方向の篔削りである。形態・調整技法は基本的に同じである。43は、大型の杯であり、鉢としてもおかしくないものである。43・44の杯は、V期の口縁部に段を持つ形態の23・65からの流れで考えられるものである。14・45・46・47・112・113は、最も普遍的に見られる須恵器模倣形態の土師器杯であるが、14・45がやや大型の形態である。299は半球形をしており、須恵器模倣形態とは、やや異なっている。

VI期は、V期からの連続的な段階としてとらえることのできる時期である。大きな特徴は、前述のように甕の長胴化が進むこと、V期に見られた須恵器杯身の模倣形態の杯が消滅していることなどである。

## VII期

当遺跡でVII期に分類されたのは、2区4A号住居跡1軒だけであり、出土遺物も須恵器杯蓋の模倣形態の系譜をひく土師器杯13・15だけで時期分類することには危険が伴う。しかし、15の杯は口縁部が狭くなっており、須恵器模倣形態杯の退化したものと考え、時期分類した。

### 3. 遺物の年代について

古墳時代の遺物の年代は、年代の根拠となる遺物が少なく危険を伴うものであるが、分類した集落の村落論への昇華、古墳の分類と総合した地域社会論や古代国家論への挑戦のためには避けて通ることができないものである。最近では、古墳時代の年代根拠として埼玉県稲荷山古墳の鉄剣の銘文などが出土してきている<sup>注2</sup>。群馬県内でも古墳時代の遺物の分類作業は進んできており、最近では橋本博文氏・加部二生氏は群馬県における古墳時代全体の土器を分類・編年し、年代を与えている<sup>注3</sup>。坂口一氏は住居内須恵器の出土例と大阪「陶邑」出土の須恵器を対比し、群馬県内

の古墳時代中期・後期の土器を分類・編年し、年代を与えている。<sup>注4、注5</sup>また、志村哲氏は、藤岡市堀ノ内遺跡群出土の土器を分類・編年し、年代観を与えている。<sup>注6</sup>これらの編年の年代を参考にしながら、当遺跡の遺物の年代を考えて見る。

当遺跡のⅠ期からⅣ期の遺物は連続し、Ⅴ期からⅦ期の遺物も連続すると考えられるが、Ⅳ期とⅤ期の間には断絶があり、Ⅰ期からⅣ期とⅤ期からⅦ期の遺物年代は分けて考える必要がある。Ⅰ期からⅣ期は、遺物の形態から古墳時代前期から古墳時代中期に当たるのは确实であり、古墳時代中期の住居跡からは竈が検出できないことから、古墳時代中期でも前半に当たると考えられる。また、古墳時代前期に当たる土器は、655のような刷毛目がなくなりかけている台付甕が含まれ、Ⅱ期への連続的变化が認められることから古墳時代前期の後半に位置付けることが可能であろう。古墳時代前期の年代は、その根拠となる遺物が大変少なく確定はできないが、概ね4世紀と考えられている。この年代観に従えば、当遺跡Ⅰ期の年代は4世紀後半に入ることになる。

坂口一氏は「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」<sup>注7</sup>のなかで、5世紀の土器をⅠ段階からⅣ段階の4期に分類し、陶邑の編年と対比している。陶邑編年の対比からⅡ段階の土器をTK216型式、Ⅲ段階の土器をTK208型式、Ⅳ段階の土器をTK47型式に平行するとし、それぞれ4世紀の第2四半期・第3四半期・第4四半期の年代を与えている。当遺跡では古墳時代前期から中期の土器に須恵器の共伴はなく、平行関係の確認はできない。従って、坂口編年による土師器の比較によれば、当遺跡のⅡ期は坂口編年のⅠ段階に、Ⅲ・Ⅳ期は竈を持たないので、坂口編年のⅡ段階にあたりと考えられる。坂口編年のⅠ段階は5世紀の第1四半期の年代が与えられているが、当遺跡のⅡ期はⅠ期からの連続性が認められるので、4世紀末から5世紀初頭と考えておく。また、Ⅲ・Ⅳ期は、坂口編年によれば共に5世紀の第2四半期になるが、やはり連続的变化が認められることから、それぞれ5世紀の第1四半期・第2四半期の年代を与えておく。

Ⅴ期は、前述のようにⅣ期からの連続的变化は認められず、断絶している。Ⅴ期の土器の組成・個々の土器の形態は、三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第4分類期<sup>注8</sup>に当たり、Ⅵ期の土器は第5分類期に、Ⅶ期の土器は第6分類期に当たると考えられる。また、Ⅴ期の土器の組成の中には、須恵器の有蓋高杯・蓋杯・蓋が含まれており、高杯の脚部先端など細部に違いがあるが、陶邑のTK10型式からTK43型式<sup>注9、注10</sup>に平行すると考えられる。TK10型式の年代については、6世紀の中葉が想定されており、TK43型式の年代については、6世紀の第3四半期から第4四半期<sup>注11</sup>が想定されている。しかし、TK43型式の年代については、その初現<sup>注12</sup>が6世紀中葉にさかのぼるとする意見もある。当遺跡のⅤ期の年代は、不確定な要素は残るが、概ね田辺編年<sup>注13</sup>に従い6世紀の第3四半期の年代を与えておく。坂口編年によれば、三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第4分類期の年代は、TK10型式との平行関係から6世紀の第2四半期の年代が与えられている。しかし、当遺跡では三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第4分類期と平行関係にあると考えられる土師器は、TK43型式に近い形態の須恵器を共伴し、年代は新しい年代を取ることとする。

Ⅵ期・Ⅶ期は、土器の形態にⅤ期からの連続性が認められることから、それぞれに6世紀の第4

四半期・7世紀の第1四半期の年代を与えておく。最近、国分寺中間地域遺跡から飛鳥ⅠからⅡにあたると考えられる土師器が検出された。<sup>注15</sup> 共伴の土師器杯は、須恵器模倣形態の流れの中でも、後出する形であり、6世紀後半から7世紀前半の須恵器蓋模倣杯の形態をしている。土師器杯は、年代幅が広く、細分の決め手になるのは、竈脇から出土している土師器の長胴甕である。この長胴甕は、長胴化の最盛期の甕であり、三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡の第6分類期にあたと考えられる。<sup>注16</sup> 坂口編年によれば、三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡の第6分類期の土師器に共伴する須恵器はTK43型式に平行すると考えられているが、TK209型式からTK217に平行するのではないかと考える。<sup>注17</sup> 田辺氏の編年によれば、TK209型式・TK217型式はそれぞれ7世紀の第1四半期・第2四半期と考えられている。<sup>注18</sup> ここでは、この編年に従うことにする。しかし、陶邑の須恵器の年代もまだ議論されている最中である。特に、7世紀前半の飛鳥Ⅰから飛鳥Ⅱの土器と平行関係にあるとされるTK209型式からTK217型式の須恵器の年代は、研究者により相違がある。白石太一郎氏は、豊浦寺の創建年代を福山敏男氏の説に従い7世紀の第2四半期から中葉とし、飛鳥Ⅰから飛鳥Ⅱの土器の年代を7世紀の第2四半期から中葉としている。<sup>注19</sup>

年代観は、不確定な要素が多く今後の発掘調査の成果・研究で修正されなければならないことは当然である。また、群馬県における須恵器と陶邑須恵器との関係の研究・年代の推定は、坂口氏によって始められたばかりである。今後の資料の増加により検討されるべき重要な課題であることは事実である。特に、窯跡の調査とその研究により、群馬県内の須恵器生産の序列が作成され、年代を修正し、確立されて行く必要がある。

#### 4. 集落の持つ意味について

舟橋遺跡の集落を遺物から見た場合、前述のように5世紀中葉から6世紀中葉の約100年間断絶があり、当然の帰結として、集落も同様の断絶があることになる。集落の範囲を周囲の同時期の下佐野遺跡・倉賀野万福寺遺跡<sup>注20、注21</sup>に広げてみても同様である。<sup>注22</sup> 下佐野遺跡Ⅱ地区の場合は、古墳時代前期から中期の住居跡は舟橋遺跡Ⅱ期で終わっており、住居跡が再び現れるのは古墳時代の後期、当遺跡Ⅴ期前後である。下佐野遺跡Ⅰ地区の場合、古墳時代前期の住居跡はあるが、中期の住居跡はなく、住居跡が再び現れるのはやはり古墳時代の後期、舟橋遺跡Ⅴ期前後である。倉賀野万福寺遺跡では、古墳時代前期の住居跡以外確認されていない。周辺の遺跡をあわせても、やはり5世紀中葉から6世紀中葉の約100年間、集落は断絶するのである。

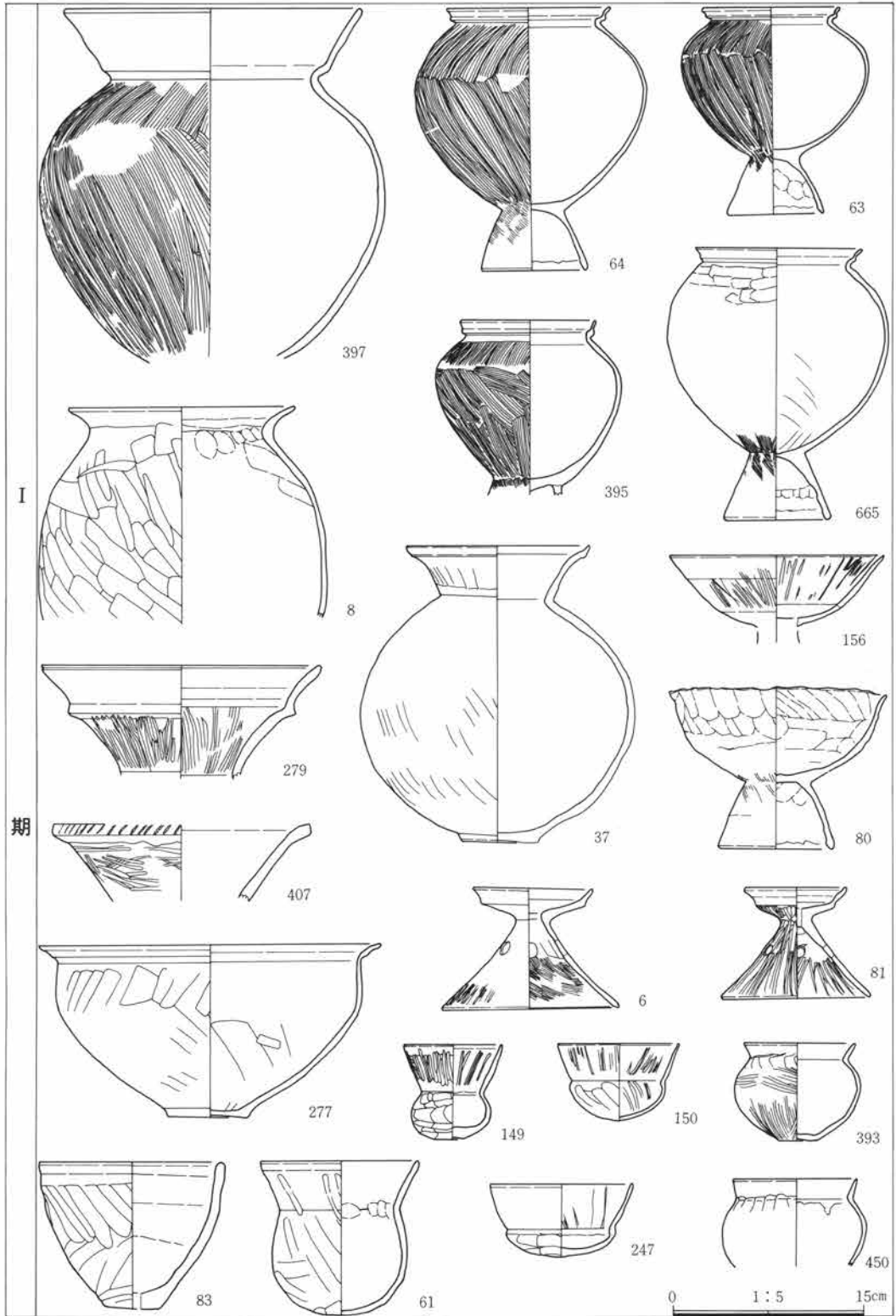
下佐野・倉賀野地区は浅間山古墳・大鶴巻古墳など墳丘長100mを越える大型の前方後円墳をはじめ、小鶴巻古墳・漆山古墳などの中型前方後円墳や多くの円墳が分布している。浅間山古墳・大鶴巻古墳の年代について、梅沢重昭氏は浅間山古墳の方が古いとし、<sup>注23</sup> 田島桂男氏は大鶴巻古墳の方が古いとしており、<sup>注24</sup> 前後の関係で意見の相違はあるが5世紀の前半と考えられている。また、下佐野遺跡Ⅰ地区からは4世紀末～5世紀初頭の築造と考えられるA区1号古墳(長者屋敷天王山古墳)・A区2号古墳なども検出されており、4世紀後半の築造と考えられる方形周溝墓も数多く検出されている。<sup>注25</sup> 集落との関係で考えれば、これらの方形周溝墓や古墳と集落は佐野・倉賀野地区で

営まれていたことになる。しかし、浅間山古墳・大鶴巻古墳のような大型の古墳を支える生産基盤としては、佐野・倉賀野地区の集落だけではなく、もっと大きな範囲を考える必要があるのは当然である。

集落が断絶する5世紀後半から6世紀の前半にも古墳は築造されている。小鶴巻古墳は5世紀の後半から6世紀の前半と考えられている。倉賀野万福寺遺跡の3号古墳・5号古墳の周濠からは6世紀前後と考えられる内稜を持つ杯が検出されている。この時期の古墳が作られたとすれば、それらを支える生産基盤としての集落がどこにあるのかが問題となるであろう。<sup>注26</sup>

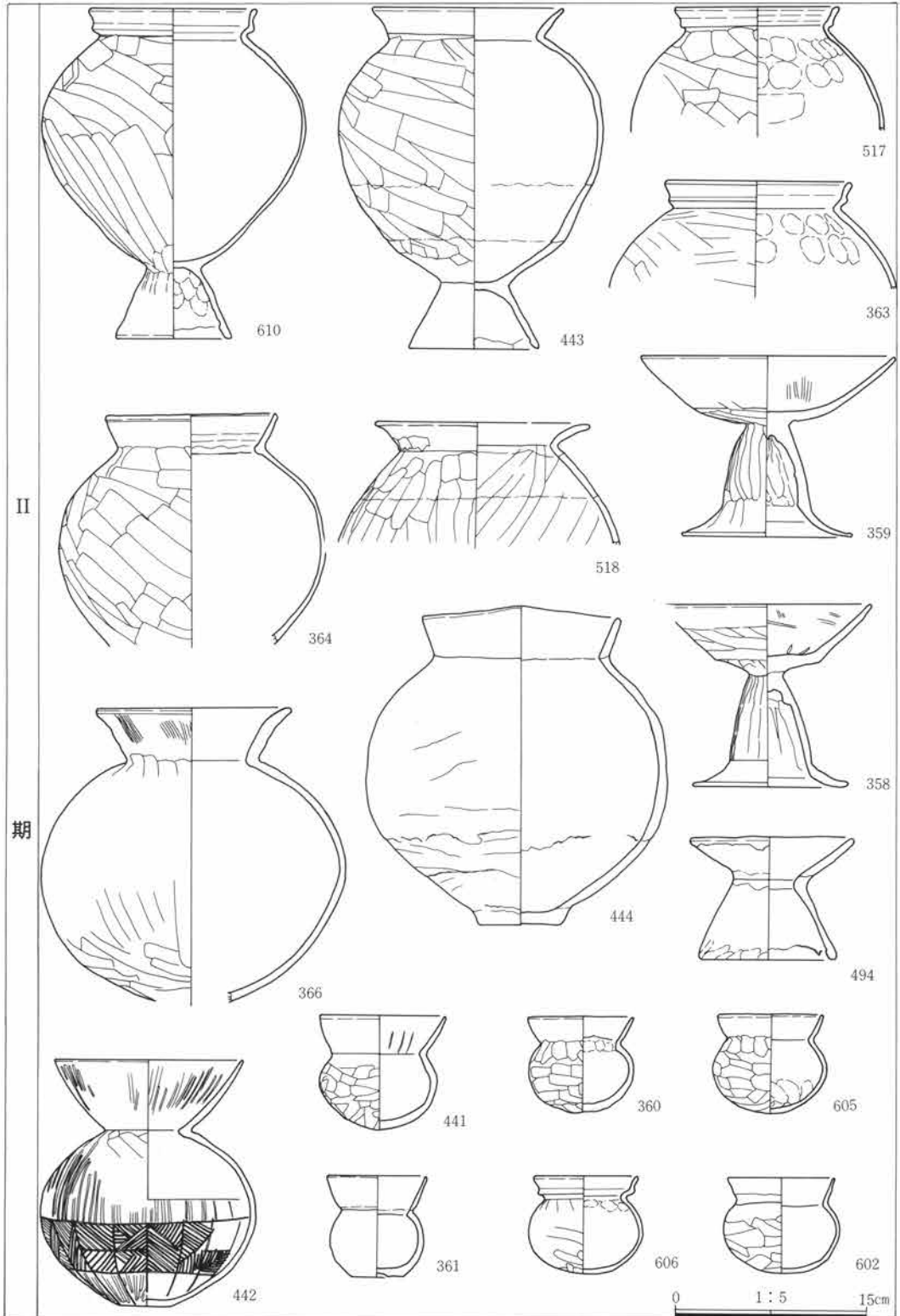
また、再び集落が現れる6世紀後半以降は、横穴式石室を持つ円墳が数多く見られる時期であり、下佐野遺跡Ⅰ地区・下佐野遺跡Ⅱ地区でも確認されている。また、横穴式石室を持つ漆山古墳は6世紀後半と考えられる。この佐野地区の終末古墳と佐野屯倉を関係付ける考えもある。<sup>注27</sup>佐野・倉賀野地区の集落の変遷と古墳の関係は、今後考えて行かなければならない課題が多いと言える。

- 1 勸群馬県埋蔵文化財調査事業団「下佐野遺跡Ⅱ地区 上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第6集」1986
- 2 埼玉県教育委員会「埼玉稲荷山古墳」1981
- 3 橋本博文・加部二生「古墳時代土器の研究 IV群馬県」古墳時代土器研究会 1984
- 4 坂口一「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要4』勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- 5 坂口一「古墳時代後期の土器の編年」『群馬文化208』1986
- 6 志村哲「堀ノ内遺跡群における出土土器の編年」『A1・堀ノ内遺跡群』藤岡市教育委員会 1982
- 7 注4に同じ
- 8 井川達雄「古墳時代・奈良時代の土器について」『三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳 上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第5集』勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 9 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- 10 中村浩、他『陶器Ⅲ』大阪府教育委員会 1978
- 11 注9に同じ
- 12 川上邦彦「藤ノ木古墳の被葬者像」『藤ノ木古墳が語るもの』季刊考古学・別冊1 檀原考古学研究所編 雄山閣 1989
- 13 注9に同じ
- 14 注5に同じ
- 15 桜岡正信「上野国分僧寺・尼寺中間地域出土畿内産土師器」『群馬文化 218』1989
- 16 注8に同じ
- 17 注5に同じ
- 18 注9に同じ
- 19 白石太一郎「年代決定論(一)―弥生時代以降の年代決定―」『日本の考古学1 研究の方法』岩波書店 1985
- 20 勸群馬県埋蔵文化財調査事業団「下佐野遺跡Ⅱ地区」上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 1986
- 21 勸群馬県埋蔵文化財調査事業団「下佐野遺跡Ⅰ地区」上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 1989
- 22 高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会・山武考古学研究所「倉賀野万福寺遺跡」1983
- 23 梅沢重昭「表4 群馬県各地域における主要古墳の編年」『日本の古代遺跡 16 群馬東部』保育社 1987
- 24 田島桂男『日本の古代遺跡 17 群馬西部』保育社 1984
- 25 注21に同じ
- 26 下佐野遺跡Ⅰ地区の報告書で下佐野遺跡の古墳築造と共に集落が消えると述べたが、古墳築造期の集落が舟橋遺跡に見いだされたことになる。しかし、古墳が造営されている台地の上には舟橋遺跡Ⅱ期の住居跡が僅かに発見されただけであり、集落の中心は台地の下に移っている。古墳築造と共に台地の上は墓域とされたのであろうか。本文に述べたように、大型の前方後円墳を支える生産基盤としては貧弱であり、大きな範囲を考える必要があるが、墓域の問題ももっと大きな範囲を考慮に入れる必要がある。
- 27 甘粕健・小宮まゆみ「前方後円墳の消滅」『考古学研究 89』1978

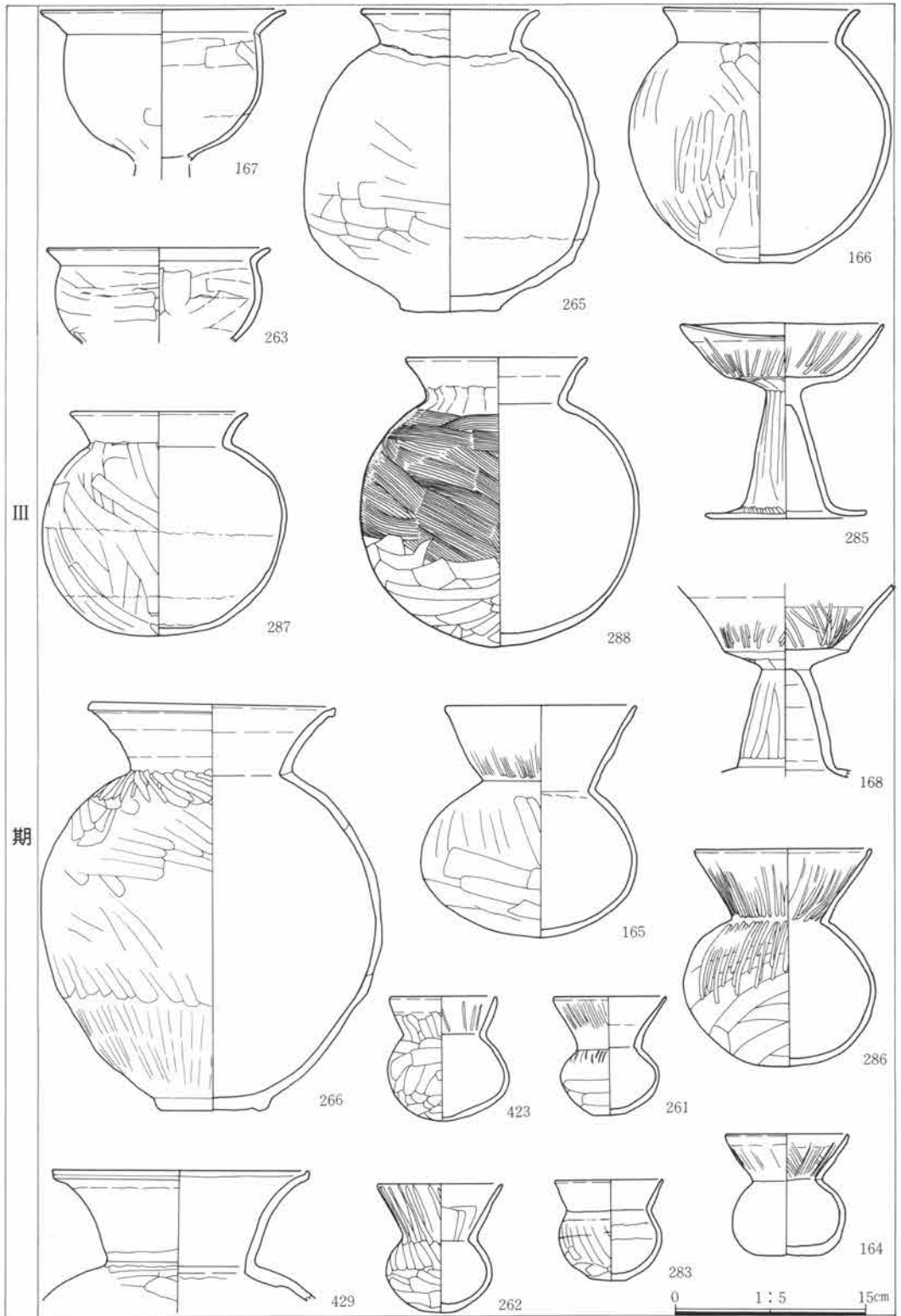


第347図 舟橋遺跡出土古墳時代土器分類表①

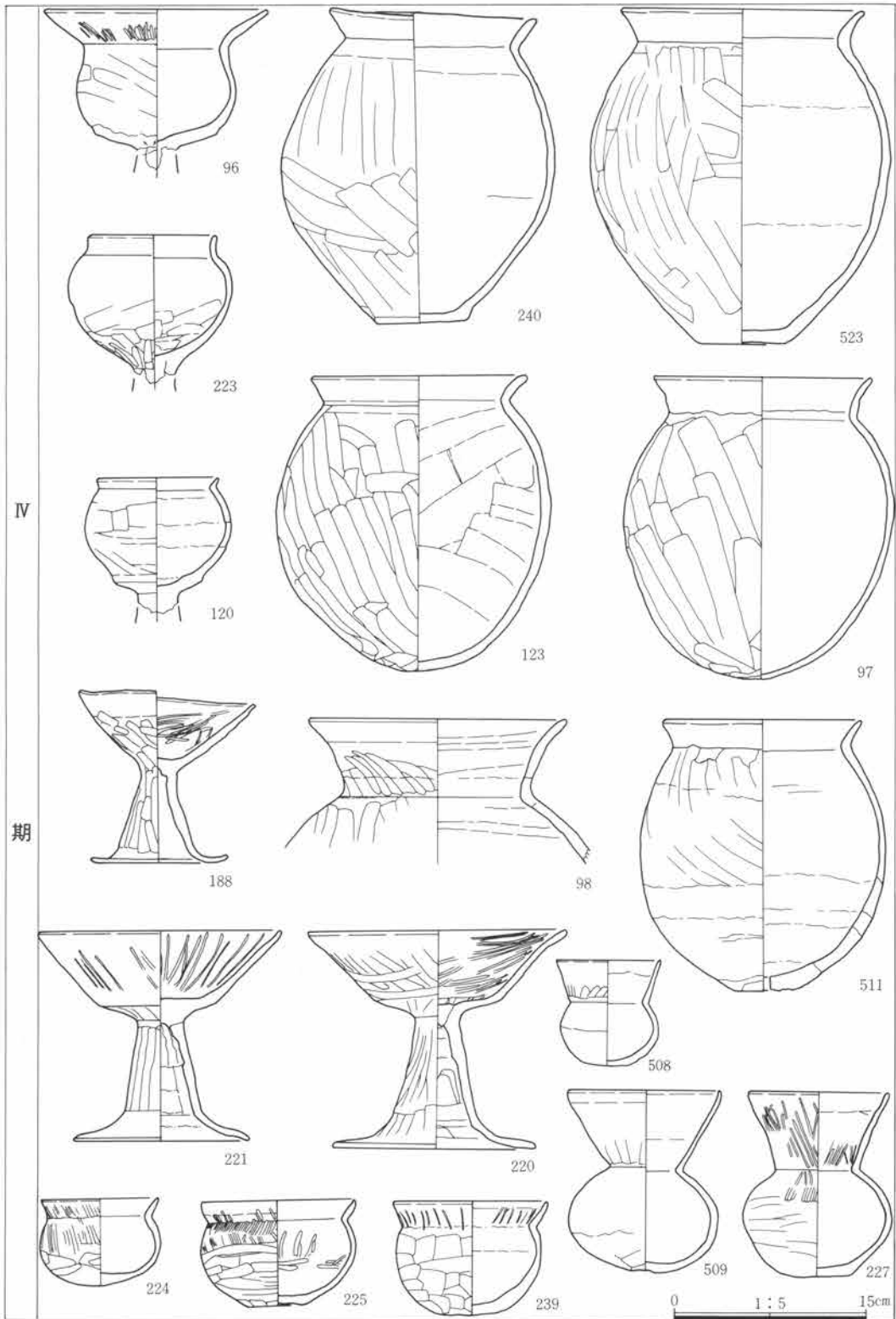




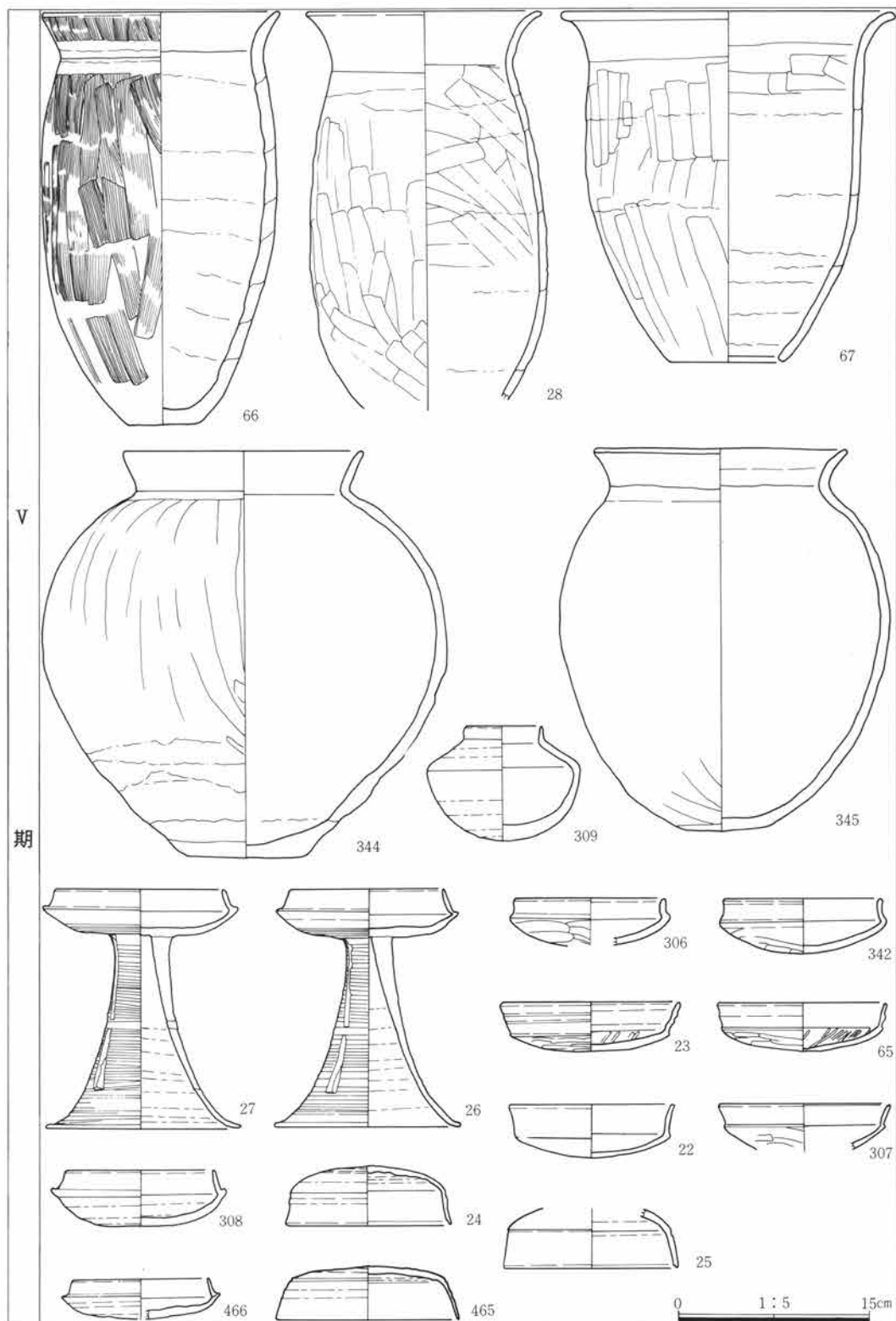
第348図 舟橋遺跡出土古墳時代土器分類表②



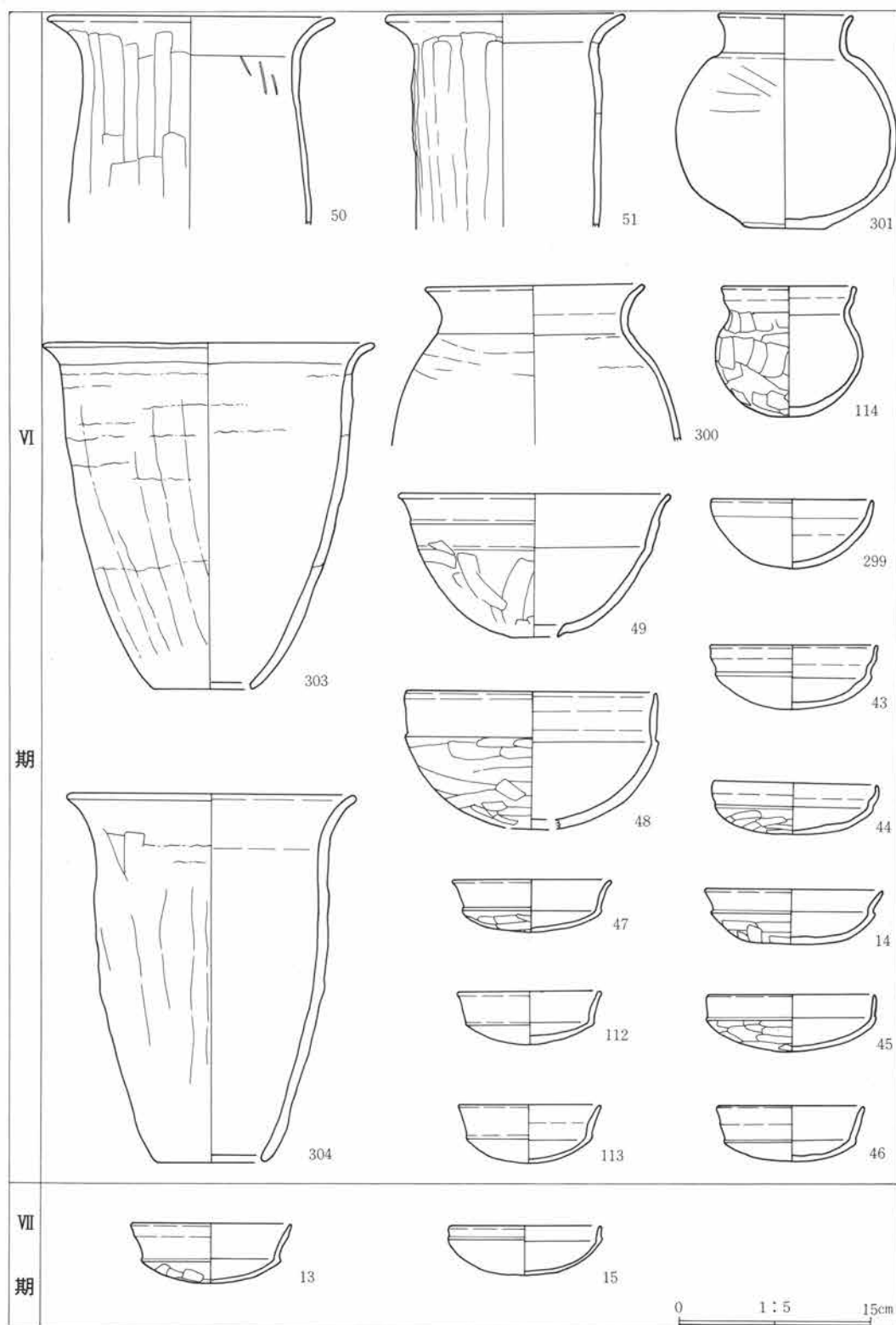
第349図 舟橋遺跡出土古墳時代土器分類表③



第350図 舟橋遺跡出土古墳時代土器分類表④



第351図 舟橋遺跡出土古墳時代土器分類表⑤



第352図 舟橋遺跡出土古墳時代土器分類表⑥

## 第2節 舟橋遺跡出土の白磁について

大西雅広

### 1. 出土状態

白磁碗は3区15号住居跡南西隅の覆土中から出土している。3区15号住居跡は3区16号住居跡南西隅と重複し、3区15号住居跡が新しい。白磁碗が重複部分の出土であること、3区16号住居跡は在地製土器の年代から9世紀後半、3区15号住居跡は10世紀後半と考えられ、どちらの住居跡から出土しても時期的におかしくないため、3区15号住居跡に伴うとは断定できない。しかし、本資料は遺存率が高いうえ、長期の使用によると思われる器表の摩滅が認められること等から、白磁碗は3区15号住居跡に伴う可能性が高く10世紀後半に廃棄されたと推定される。<sup>注1</sup>

### 2. 白磁碗の個体説明

白磁碗は直線的に開く体部と、小さい玉縁口縁を有しており、口縁端部断面には折り返し時の小孔が認められる。高台は壘付幅が広く、蛇ノ目高台となる。胎土は緻密・純白であり、釉は体部と高台境の釉溜まり部で僅かに水色味を帯びる程度の白磁釉を高台境付近まで施す。釉厚は均一であるが、底部内面と体部外面下位には釉垂れがあり、この部分は摩滅している。特に口縁端部外面の摩滅は著しく、釉厚は半分程度になっている。化粧土や貫入はない。

上記の特徴は太宰府分類の白磁碗Ⅰ-1類（以下本節で使用する分類は注2文献による）と一致し、唐末～五代の製品である。<sup>注2</sup>この種の白磁碗は、太宰府では9～10世紀に出土し9世紀代に中心をもつとされており、平安京では9世紀中頃の土器と相伴している。<sup>注3</sup>また、下限に近い実年代の判明する例として、天禄4(973)年の火災で焼失した奈良県薬師寺西僧坊跡が知られている。<sup>注4</sup>本遺跡出土白磁碗は他地域の年代と器表の摩滅から、9世紀代に入手したと推定することも可能である。

### 3. 関東・東北出土の初期貿易陶磁

初期貿易陶磁出土遺跡については、1985年に服部実喜氏により関東地方出土の貿易陶磁が集成<sup>注5</sup>され、6遺跡の初期貿易陶磁出土遺跡が確認されている。またこの前後には土橋理子、亀井明徳、森田勉氏によって全国的な集成が行われている。<sup>注6</sup>これらの成果によると1986年現在で約300箇所・約180遺跡が確認されている。関東・東北地方の初期貿易陶磁の出土遺跡は、1986年段階で14遺跡が上げられている。東北地方では秋田県秋田城跡、岩手県胆沢城跡、山形県城輪柵跡、同後田遺跡、<sup>注7</sup>宮城県多賀城跡、同五万崎遺跡、の6遺跡である。関東地方は栃木県下野国府跡、千葉県向台遺跡、同上総国分寺跡、同荒久遺跡、東京都日野落川遺跡、同武蔵国分寺遺跡、神奈川県四之宮下郷遺跡、<sup>注8</sup>同中原上宿遺跡の8遺跡が上げられている。また、その後東京都武蔵国府関連遺跡においても出土<sup>注9</sup>している。遺跡の性格は国府、国分僧・尼寺、城輪柵などの国家機構関連遺跡が殆どである。これらのうち、荒久遺跡は上総国分僧寺の東に接した集落で、約280軒の竪穴式住居跡が検出され、竪穴式住居跡から白磁が出土している。<sup>注10</sup>また、日野落川遺跡は遺構・遺物等から官衙や寺院の要素は伺えず、出土背景を地方武士団の発生に求めている。<sup>注11</sup>このように東日本では特に希少性が高

く、非常に限られた場所と人々のみが所有し得たことが伺える。

#### 4. 県内出土の初期貿易陶磁と出土遺跡<sup>注14</sup>

##### ① 推定上野国府域<sup>注15</sup>及びその周辺

##### A. 閑泉樋遺跡<sup>注16</sup>

閑泉樋遺跡は前橋市元総社町2丁目に所在し、調査地点は推定上野国府域(以下国府域と略す)の北端にあたる。調査ではN-89°-Wに走行する上幅7m、深さ2m前後の大溝が確認され、溝内に堆積した浅間B軽石下から6世紀～11世紀の遺物と共に白磁碗の体部下位小片が1点出土している。胎土は白色を呈し、若干硬質である。釉は透明感のない白磁釉を内面と体部下位まで施している。小片であるため器形の特徴は不明であるが、胎土・釉調から北宋前半代頃と推定される。

##### B. 寺田遺跡<sup>注17</sup> (第354図1)

寺田遺跡は前橋市元総社町に所在し、調査地点は国府域内にあたる。調査では国府に関連する遺構は検出されなかったが、遺構外から越州窯系青磁碗が1点出土している。青磁碗は口縁部から体部下位にかけて1/3程の破片で、体部外面には焼成前の釉の掻き取りがある。胎土は緻密で青灰色を呈し、化粧土は認められない。釉は全面に施し、オリーブ灰色に発色している。口縁端部には使用痕と思われる擦れが認められる。越州窯系青磁碗I-1類に属する。

##### C. 元総社明神遺跡<sup>注18</sup>VI

元総社明神遺跡は寺田遺跡の東方に位置し、調査地点は国府域の東端を含んでいる。調査区内からは101軒の竪穴式住居跡が検出され、5軒から白磁の出土が報じられている。

##### D. 天神遺跡<sup>注19</sup> (第354図2～6)

天神遺跡は前橋市元総社町早道・天神に所在し、調査地点は国府域南端付近に位置する。1600㎡という狭い調査範囲ながら31軒の平安時代竪穴式住居跡が検出された。これらのうち約1/6にあたる5軒の住居跡から白磁が出土しており、出土率は県内で最も高い。3～5は小さい玉縁口縁を有する碗の口縁部小片である。いずれも胎土は白色を呈し、乳白色の釉を施している。化粧土や貫入は認められない。また、すべての口縁端部には、使用によると思われる摩滅が認められ、4・5には口縁折り返しの小孔がある。2は蛇ノ目高台の小片であり、胎土は僅かに灰色味を帯び、乳濁した白磁釉を高台外面まで施す。釉は釉溜まり部では若干水色味を帯びる。これら4点は白磁碗I類に属する。6は輪高台を有する碗で、体部は直線的に低く開く。高台内部は水平に削り、底部の器厚は薄く均一である。黄白色の釉を体部下位まで施し、化粧土や貫入は認められない。7は以上の点から白磁碗IX類に属すると考えられる。

##### E. 鳥羽遺跡<sup>注20</sup> (第354図7、25、26)

鳥羽遺跡は、国府域外の西縁に沿うように調査されている。竪穴式住居跡は全体で800軒程検出されており、大規模な鍛冶工房跡も確認されている。整理は現在も継続中であり、全体数は不明であるが、既報告のJ区33号住居跡から青磁破片の出土が報じられている<sup>注21</sup>。また、鍛冶工房跡部分からは、やや玉縁の肥大した白磁碗が出土している(25)。25は胎土はやや灰色味を帯び、黒色

粒子を含んでいる。ヘラケズリは外面口縁部下より始めており、釉は若干くすんでいるが乳白色を呈している。他に比して時期が下がり北宋後半代に入る可能性もある。現在整理中のL区120号住居跡からは、白磁が1点が出土している。白磁は玉縁口縁碗の口縁部細片であり、玉縁はやや発達しているが薄く短い。口縁部は丸みを帯びず直線的に開くと思われる。胎土はやや灰色味を帯び、黒色粒子を少量含み、やや硬質である。乳濁した釉を施す。口縁端部外面には釉ムラがあり、厚い部分は摩滅している。細片であるため詳細は不明であるが、白磁碗Ⅰ-4類に属する可能性が高い。

② 上野国分僧寺・尼寺とその周辺<sup>注22</sup>

A. 上野国分僧・尼寺中間地域（第354図8～21、23、24）

8～11はいずれも小さい玉縁を有する碗の口縁部破片であり、9を除き断面には折り返し時の小孔が認められる。胎土は白色で硬質感はなく、乳白色の白磁釉を施す。9は内面に白土掛けを行っている。8を除いて口縁端部を中心に使用によると推定される擦れが認められる。12、13は蛇ノ目高台を有する白磁碗であり、12の畳付幅はやや狭く、13の高台周辺はヘラで圏線状に削り込んでいる。胎土は白色で硬質感はなく、乳白色の白磁釉を全面に施した後畳付の釉を削り取っている。なお、高台内には釉の掛からない部分もある。両者の底部内面と、12の体部外面釉垂れ部分には擦れが認められる。14、15は白磁碗の体部である。胎土は白色を呈するが15は若干硬質感があり、僅かに灰色を帯びている。<sup>注23</sup>14は内面に白土掛けを行った後、体部下位を除き乳白色の釉を施している。16は器壁の薄い輪花碗である。胎土は硬質感のない白色を呈し、乳白色の釉を全面に施す。口縁端部には使用によるとと思われる擦れが顕著に認められる。釉が不透明であるため不明瞭であるが、外面は口縁部下よりヘラケズリ痕が観察される。口縁端部と体部外面のヘラケズリ部分には顕著な擦れが認められる。17～19は白磁托と考えられるもので、1984年の集成では、太宰府と秋田城の2遺跡で出土しているのみであり、全国的にも希少性の高い資料である。いずれも胎土は白色で硬質感はなく、全面に乳白色の白磁釉を施す。18、19の釉が厚く掛かる部分は気泡が目立ち、色調は水色味を帯びている。また、内面には白堆を行っており、18は白堆に沿って沈線が引かれている。18、19は胎土・釉調から同一個体の可能性も考えられる。18の受け部端部から端部内面にかけて、17の面取り部分には擦れが顕著に認められる。<sup>注24</sup>20は越州窯系青磁の小片であり、傾きとロクロ目から瓶類の体部と考えられる。胎土は灰白色で、釉は酸化気味に焼き上がったせいかオリーブ黄色を呈している。化粧土はなく釉厚は非常に薄い。21は輪高台を有する越州窯系青磁碗の底部であり、高台内には白色の目痕が残っている。胎土は灰色で、全面に薄くオリーブ灰色の青磁釉を施している。化粧土はなく、底部内面には擦れが認められる。

23は器壁が薄く、口縁端部が小さく外反する白磁碗である。胎土は白色を呈するがやや粗く、釉は透明感があり僅かに緑色味を帯びる。釉には粗い貫入が入っている。24は白磁碗の体部片であり、緑色味を帯びた透明感のある釉を高台脇まで施す。体部外面下位はヘラケズリを行っている。体部内面下位と外面ヘラケズリ部分には顕著な擦れがある。23、24は北宋後半代の可能性もある。



## ③ 寺院

## A. 山王廃寺

山王廃寺は前橋市総社町総社に所在する7世紀から10世紀頃まで存続した寺院であり、山上碑文と『上野国交替実録帳』に見える「放光寺」と考えられている。放光寺は『上野国交替実録帳』によれば定額寺となった時期があり、その運営・管理には国司が深く関与していた。<sup>注26</sup>山王廃寺では報告されていないが、第5次調査において包含層より越州窯系青磁碗の口縁部片が1点出土している。<sup>注27</sup>西日本では定額寺からも初期貿易陶磁の出土が知られ、定額寺であった時期にもたらされた可能性が高い。

## ④ その他

## A. 雨壺遺跡 (第354図22)

雨壺遺跡は高崎市大八木町に所在し、調査により54軒の古代竪穴式住居跡や9世紀後半～11世紀頃の道が検出されている。調査区内には官衙・寺院的性格を示す遺構・遺物は確認されておらず、竪穴式住居跡(29号住居跡)から越州窯系青磁碗が1点出土している。青磁碗は、口縁部から体部下位にかけて1/5程の破片である。胎土は緻密で灰白色を呈し、釉はオリーブ灰色に発色し、細かい貫入がある。化粧土はなく、体部下位の釉下にはヘラケズリ痕が認められる。越州窯系青磁碗I類と考えられる。

## 5. まとめ

初期貿易陶磁器の主体を占めるのは越州窯系青磁と定・邢窯系白磁であり、これらの比率については土橋理子氏の論考があり、九州と本州とでは越州窯系青磁、特にII類とされる粗製品の出土量に大きな差があり、これは「緑釉陶器を比較的容易に入手できる東方の買い手に粗製品が敬遠されたため」と推測されている。<sup>注56</sup>また、この論文に付載された表をもとに各地域毎に白磁と青磁の比率を計算してみると、九州が1:9.86、中国地方が1:7.2、関東・東北地方が1:1.38と精製品が主体となる地域を比較しても東になるほど越州窯系青磁が少ない傾向がある。今回集成した群馬県内の資料は白磁18点、青磁5点であり、<sup>注29</sup>白磁と青磁の比率は1:0.38となり非常に越州窯系青磁が少ない。緑釉陶器は、蛇ノ目高台、腰折れ椀、水注、唾壺など越州窯系青磁を模倣したものが多く、<sup>注30</sup>関東地方では緑釉陶器の多く搬入された群馬県においては、他県に比してあまり越州窯系青磁の需要は多くなかったと考えられる。

県内の初期貿易陶磁は、竪穴式住居出土を主とするものの推定国府域、国分僧寺・尼寺中間地域に集中しており、関東・東北地方の出土傾向と一致する。また、舟橋・雨壺両遺跡例は、日野市落川遺跡同様、遺構・遺物に官衙・寺院的要素が認められず、前者とは異なった出土背景を求めなければならない。

全国で出土する初期貿易陶磁を含む唐物貿易は、当初太宰府鴻臚館のみにおいて官貿易が行われ、その余剰品が私貿易の対象となっていた。その後9世紀後半には、「諸宮、諸王臣家、太宰府官人、郭内富豪輩」が「官吏未到之前」に「競買他物」、「遣使争買」といった状態となり、前代

とは逆の状況が生じていた。<sup>注31</sup>これ以降、私貿易はしだいに活発になっていったと考えられるが、初期貿易陶磁の出土量と出土遺跡数をみると、北九州と九州西岸、平安京、平城京に集中しており、官貿易のみでなく私貿易品もこれらの地域で殆ど消費されているようである。また、関東・東北地方の出土遺跡は、先に述べたようにその殆どが国府、国分二寺、城輪柵関連遺跡であり、広域に分布する灰釉陶器や緑釉陶器同様、商品として東日本に流通していたとは現段階では考えにくい。国府、国分僧・尼寺寺域内及び近接しているという位置関係を重視すれば、<sup>注32</sup>太宰府と同様に国府、国分僧・尼寺、定額寺などに運ばれるルートの中に寄生する形で入手した可能性と<sup>注33</sup>国府、国分僧・尼寺が衰退する過程で流出していった二者が想定される。

雨壺遺跡の付近では熊野堂遺跡Ⅰ地区、Ⅲ地区が報告されているが、いずれも官衙・寺院などを想定させる資料はない。時期的にはやや先行するが、各遺跡からは8世紀中頃から9世紀前半頃の瓦が少量出土しており、いずれも秋間古窯跡群からの一元的供給が行われ、その供給形態は民的色彩が強いことが指摘されている。<sup>注34</sup>熊野堂遺跡の東方には群馬町福島古瓦散布地があること、雨壺遺跡では東山道から分岐すると推定される古代道が検出されており、推定東山道と雨壺古道に近接して瓦葺建物があった可能性<sup>注34</sup>がある。また、遺跡の所在する高崎市大八木町・小八木町あたりは、『倭名抄』の「群馬郡八木郷」に比定され、『上野国交替実録帳』に見える「八木院」と国分尼寺のものと思われる寺田、「群馬郡 八木郷肆町肆段」との関連も想起される。<sup>注35</sup>

舟橋遺跡は集落としての開始時期は古墳時代前期であり、その後5世紀中頃から6世中頃まで中断し、7世紀前半まで継続するが、その後8世末までは空白となっている。8世紀末の住居跡は2軒のみであり、その後住居跡は増加し12世紀頃まで継続したようである。舟橋遺跡は、調査区内の所見からすれば拠点的な集落ではなく、8世紀末を上限として他からの移動が推定される。舟橋遺跡の南に近接する下佐野遺跡では、8世紀末に再び集落となりはじめ、9世紀後半に「南東部から北西部への分村的移動」があり、10世紀代は「集落の発展充実期」であると<sup>注36</sup>されている。舟橋遺跡にもほぼ共通する点が認められ、舟橋遺跡における8・9世紀代の住居跡が非常に希薄であることからすれば、下佐野遺跡からの移動も考えられる。加えて下佐野遺跡全体では南東から北西に集落が拡大している傾向も認められ、下佐野集落は「条里水田の末端開発強化と、占有領域の拡大をめざしたもの」<sup>注36</sup>と考えられている。

佐野地区の南、烏川の対岸には物部氏が居住する多胡郡が存在する。8世紀末から9世紀前半とされる国分僧寺補修・修造に使用された文字瓦で「郷名十人名」のものは多胡郡内<sup>注37</sup>が殆どであり、郷名の筈書された一群の中には「山物マ(部)子成」、「山物マ(部)乙亡」という個人名を書いた瓦も認められる。これは多胡郡内の地方豪族と地方に於ける国家権力との関連の深さ・富裕さと共に、山字郷を本拠とする物部氏がこれに関連していたことを示している。<sup>注37</sup>多胡郡に地方の国家権力につながるのある「富豪・殷富の輩」が存在していたことは想像にかたくなく、初期貿易陶磁を入手し得る可能性がある。下佐野遺跡・舟橋遺跡ともに奈良時代は空白であることや集落が南東から北西に拡大していくこと、高崎市矢中町村東遺跡から「物部私印」<sup>注38</sup>が出土している事

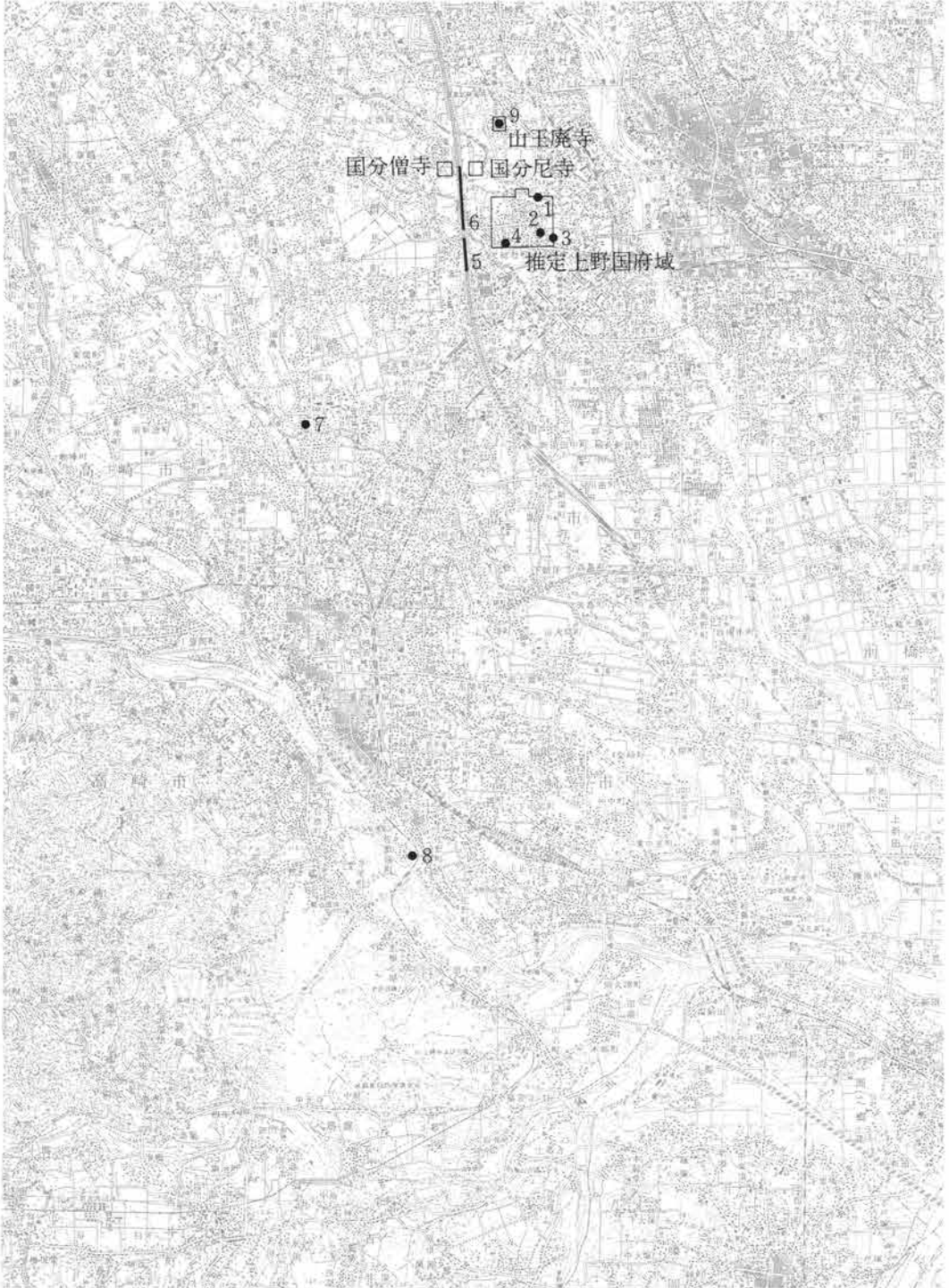
から、下佐野遺跡や舟橋遺跡などを含め、前橋台地西部の条里的水田の開発もしくは再開発に、多胡郡に居住していた物部系氏族が深く関わっていたと推定される。舟橋遺跡から出土した白磁は、この地の開発または再開発に携わった物部系氏族の「富豪・殷富の輩」が所有していたとは考えられないだろうか。また、舟橋遺跡の所在する上佐野町と下佐野町・倉賀野町付近は「群馬郡小野郷」に比定されている。小野郷には、先の雨壺遺跡のある八木郷同様分散設置された正倉と考えられる「□(小)野院」<sup>注39</sup>と国分尼寺の寺田と思われる「群馬郡小野郷参町玖段」があり、これらとの関連も否定できない。このため現段階では、両者の可能性を考えておきたい。<sup>注40</sup>

## 注

- 1 住居跡出土の初期貿易陶磁器と伴出する在土器の年代については、最も出土量の多い上野国分僧・尼寺中間地域遺跡が整理継続中であるためここでは触れず、この点に関しては機会を改めたい。
- 2 山本信夫「北宋期貿易陶磁器の編年—太宰府出土例を中心として—」『貿易陶磁研究8』日本貿易陶磁研究会 1988
- 3 百瀬正恒「平安京出土の中国陶磁—10~11世紀の白磁・青磁を中心として—」『貿易陶磁研究6』日本貿易陶磁研究会 1986
- 4 「薬師寺西僧坊地区の調査」『奈良国立文化財研究所年報』奈良国立文化財研究所 1975
- 5 服部実喜「関東地方出土の輸入陶磁器」『神奈川考古第20号』神奈川考古同人会 1985
- 6a 土橋理子「奈良・平安時代の中国陶磁—西日本を中心として—」奈良県橿原考古学研究所付属博物館 1984
- b 土橋理子「晩唐から北宋時代の中国陶磁出土状況の定量的分析試論」『中近世土器の基礎研究II』日本中世土器研究会 1986
- c 亀井明徳「初期輸入陶磁器の名称と実態」『初期貿易陶磁器の諸問題』同朋舎出版 1986
- d 亀井明徳「日本出土の越州窯陶磁器の諸問題」『初期貿易陶磁器の諸問題』同朋舎出版 1986
- e 森田 勉「中国・朝鮮陶磁器の流通について」『中近世土器の基礎研究II』日本中世土器研究会 1986
- 7 城輪柵遺跡は、9世紀初頭から10世紀後半まで出羽国府である。
- 8 川崎利夫「城輪柵遺跡とその周辺—国府を中心とした古代地方都市圏の形成—」『古代集落の諸問題』玉口時雄先生古稀記念事業会 1988 によると後田遺跡は、出羽国府の東約800mに位置する国府官人の住居跡にしている。
- 9 五万崎遺跡は多賀城跡の外郭部にあたる。
- 10 四之宮下郷遺跡出土白磁碗のうち10世紀代と報告された2-715・2-628については、既に服部実喜氏が疑問を示しておられるが、この碗は写真図版では別個に掲載されているうえ、底部の2-715内面には「蛇ノ目軸ハギ」が認められ、底部中央が厚くなるなど中世に属する白磁碗の特徴を有していると思われる。
- 11 「武蔵国府関連遺跡調査報告VI—高倉・三好町地域の調査2」府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 1986
- 12 「荒久遺跡」『南向原』上総国分寺台遺跡調査団 1976
- 13 福田健司「日野市落川遺跡出土の磁器—その出土背景—」『貿易陶磁研究8号』日本貿易陶磁研究会 1988
- 14 現段階では群馬県に於ける貿易陶磁器需要の明確な画期は、同安窯系青磁が出現する12世紀末から13世紀前半頃と考えられ、本来ならばこの時期までを対象とすべきであるが、北宋後半代の白磁に未発表資料が多いうえ同安窯系青磁を多く出土した遺跡が未整理であるため今回は対象外とした。このため本節では、北宋前半又は初頭とされている白磁と越州窯系青磁を対象とした。
- 15 本節で使用する推定上野国府域は、川原喜久治氏の御教示による。また、未発表であるが、推定国府域内において川原喜久治氏が表採された資料のなかに北宋前半以前と考えられる白磁碗がある。
- 16 「閑泉橋遺跡」『昭和57年度文化財調査報告書第13集』前橋市教育委員会 1983 本遺跡出土資料を含め、前橋市教育委員会保管資料の実見に際しては、前原豊、加部二生両氏に御便宜をはかっていた。
- 17 「寺田遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986
- 18 「元総社明神遺跡VI」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988  
10世紀代として報告されているH8号住居跡出土白磁碗は、高台の畳付幅が広く「蛇ノ目高台」のように見える。しかし、高台の削り出しは粗く非常に浅いうえ、胎土は黒色粒子を含み、灰白色を呈し硬質感がある。また、透明感のある灰色味を帯びた釉を体部下位まで施し、釉下には全面にわたってヘラケズリ痕が観察できる。器形は底部が厚く、底部内面には平坦面がない。底部付近の内面に段や沈線がない点を除けば、太宰府分類の白磁碗IV-1類に近く、12世紀頃まで下り得る可能性が高く、本節では除外した。しかし、これ以外にも7点ほどの白磁が出土しており、これらのうち2点は北宋前半以前の可能性が高い。
- 19 「天神遺跡」前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1987  
報告書では第354図6をIV類かVIII類としているが、底部が薄く体部が低く広がること、見込みの沈線が高台の直上にあること、高台畳付外側がやや浮いていることや胎土・釉調から太宰府分類の白磁碗XI類と考えられ、第354図3・4・

## 第V章 調査の成果と今後の問題点

- 5はII類と報告されているが、I類の可能性が高いと判断したため図示した。また、3号井戸出土の中国陶磁を越州窯系青磁としているが、胎土・釉共にガラス質であるうえに釉は厚く、明らかに後出するものである。
- 20 『鳥羽遺跡 I・J・K区』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988  
第354図7の白磁碗は、現在整理中の資料であるが、掲載にあたって整理担当の綿貫邦男氏には便宜をはかっていた。
- 21 この資料については実見できなかった。
- 22 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(1)』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986  
『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987  
『上野国分僧寺・尼寺中間地域(3)』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988  
整理担当者である木津博明・桜岡正信氏には既発表資料の再実測と整理中の資料の掲載にあたり便宜をはかっていた。
- 23 第354図14は報告書刊行後、約70m離れたG区48号住居跡出土資料とF区33号住居跡出土資料の接合関係が判明し、再実測を行ったものである。G区48号住居跡出土資料には擦れが僅かに認められる程度なのに対し、F区33号住居跡出土資料は内外面に本来の釉色が分からない程の擦れがある。摩滅の度合いが全く異なる資料が離れた住居跡から出土する意味については今後の課題である。この点に関しては今後、国分僧寺・尼寺中間地域を中心に資料の増加が見込まれるが、ある程度資料が揃った段階で初期貿易陶磁同様、10世紀初頭から11世紀初頭にかけて住居跡から単独出土する例の多くなる緑釉陶磁碗・皿の出土状態や使用痕なども含めて考える必要があらう。
- 24 第354図14は報告書において碗として扱っているが体部内面の欠損部に釉溜が認められ、欠損部が上方に延びていることが分かる。また、体部外面はやや下方に延びており、外面は欠損部付近でくびれる器形を呈していることから托と判断した。なお、欠損部付近の器形・器厚は9と同じである。
- 25 第354図20は既報告資料であるが、内面にロクロ目が顕著に認められ瓶類の可能性が高いため再実測を行った。
- 26 松田猛「山王廃寺の性格をめぐって」群馬県史研究20 群馬県史編さん委員会 1984
- 27 加部二生氏の御教示による。なお、この資料については実見して確認している。また、『第5次発掘調査概報』において「青磁」が報告されているが、実見したところ龍泉窯系青磁であった。
- 28 『熊野堂遺跡Ⅲ地区 雨壺遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 29 白磁の点数は、元総社明神遺跡Ⅵの資料が細片で後日改めて確認する必要があるため、図示した資料の18点とした。越州窯系青磁については、図示したものは4点であるが山王廃寺資料を含め5点とした。なお、本節に挙げた以外にも西田健彦ほか「群馬県における地方史研究の動向(2)ー考古ー」『群馬文化216号』群馬県地域文化研究協議会 1988 によれば、柏川村の宇通遺跡から10・11世紀の「舶載磁器片」の出土が報じられているが、柏川村教育委員会調査部分の調査報告が行われていないため今回は扱わなかった。
- 30 矢部良明「日本出土の唐宋時代の陶磁」『日本出土の中国陶磁』東京国立博物館 1978
- 31 亀井明德、崔淳雨、矢部良明「宋代の輸出陶磁」『世界陶磁全集12ー宋ー』小学館 1977  
注5d文献による。
- 32 亀井明德「初期輸入陶磁器の受容構造的特質」『日本貿易陶磁史の諸問題』同朋舎出版 1986 によれば「唐物の国内交易を前後二つの画期とするが、その後者においても基本的には官貿易である。延喜9(909)年以降若干の曲折をへて、太宰府が実質的な貿易管理権を獲得した段階において管内の官吏が貿易に参画しても、それは太宰府官貿易の枠内にいわば寄生しての活動である。この寄生はしだいに自己増殖しながら11世紀末まで続く」としている。
- 33 木津博明「上野国分寺々地考」『群馬の考古学ー創立十周年記念論集ー』1988 によれば、国分僧寺と同様の瓦のほか「僧寺か尼寺の仏像・仏具に係わる部品・断片(金銅製品)・金属製品等が多数」出土している。神谷佳明「奈良三彩陶について」『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987 によると、奈良三彩小壺も国分寺が衰退する過程で流出したと考えられている。
- 34 大江正行「出土古瓦について」『熊野堂遺跡(1)』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1984
- 35 注28文献において、熊野堂遺跡をも含めて「八木院」に関連する可能性のある遺跡であることが指摘されている。
- 36 外山政子「調査の成果と問題点ー平安時代ー」『下佐野遺跡Ⅰ地区』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1989
- 37 『史跡上野国分寺跡発掘調査概要4』群馬県教育委員会 1984  
『史跡上野国分寺跡発掘調査概要7』群馬県教育委員会 1987  
前沢和之「史料と遺構の狭間を旅してー史跡上野国分寺の調査に思うことー」『ほりだされた下野の古代ー出土品が語る東国の古代史ー』栃木県立博物館特別展図録 1986  
石川正之助「物部君、磯部君、石上部君」『群馬県立歴史博物館紀要第9号』群馬県立歴史博物館 1988
- 38 『矢中村東遺跡ー矢中村東遺跡群(VII)ー』高崎市教育委員会 1984  
前沢和之「藪田遺跡出土の印章」『藪田遺跡』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1985
- 39 尾崎喜左雄「上野国郡郷成立の一考察」『信濃第20巻第1号』信濃史学会 1968  
前沢和之「『上野国交替実録』郡衙項についての覚書」『群馬県史研究7』群馬県史編さん委員会 1978
- 40 現在、多胡郡・甘楽郡郡域において関越自動車道上越線に伴う発掘調査と整理が進行中であり、この成果によってどちらの可能性が高いかある程度判明するであらう。

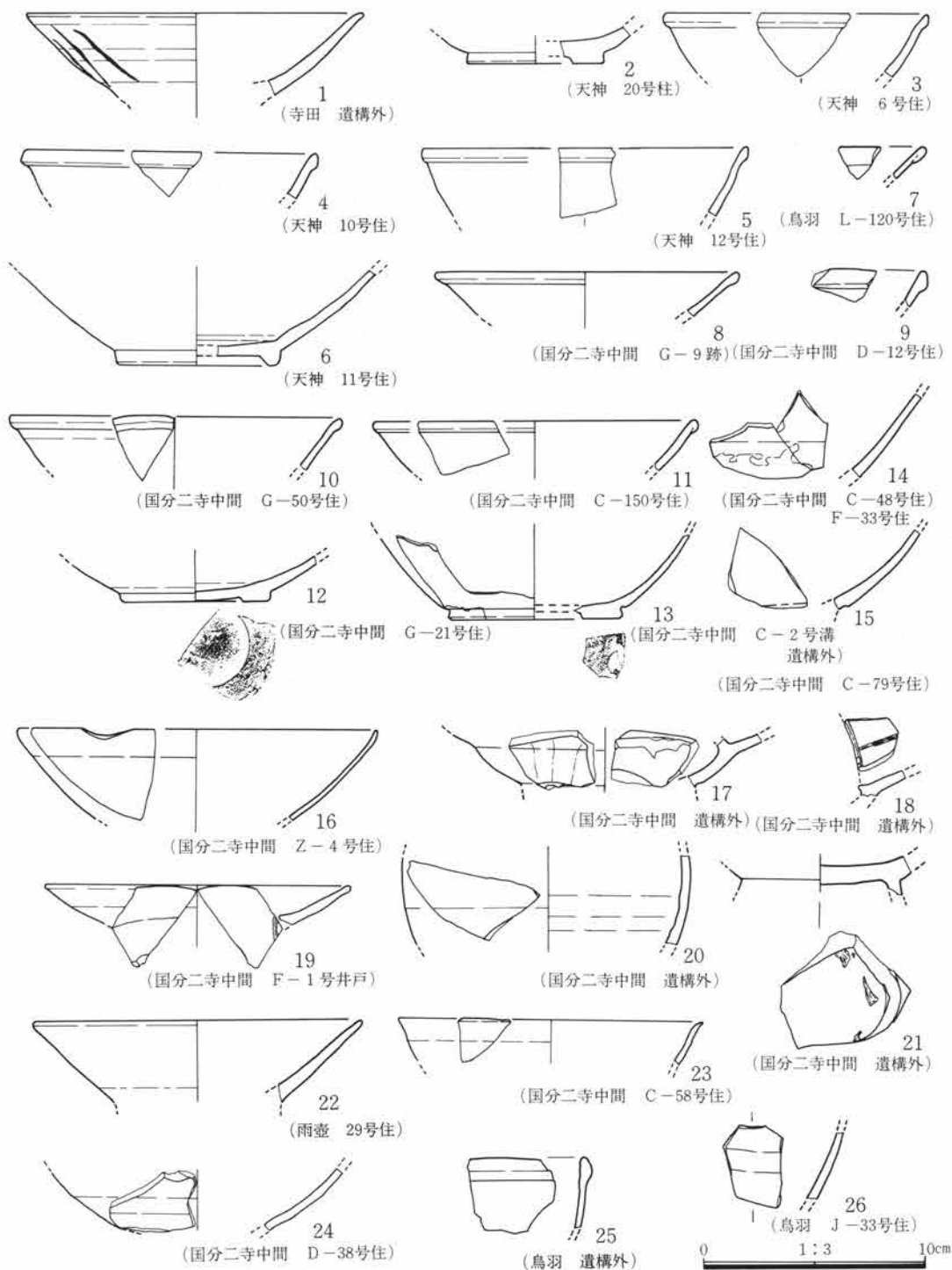


第353図 初期貿易陶磁出土遺跡位置図

(10万分の1)(国土地理院発行2万5千分の1「前橋、榛名山、高崎、富岡」を使用)

1. 閑泉樋遺跡 2. 寺田遺跡 3. 元総社明神遺跡 4. 天神遺跡 5. 鳥羽遺跡 6. 上野国分僧・尼寺中間地域  
7. 雨壺遺跡 8. 舟橋遺跡 9. 山王廃寺

(推定国府は川原嘉久治氏の御教示による。また、国分僧・尼寺、山王廃寺寺域については厳密なものではない)



第354図 群馬県内出土の初期貿易陶磁器

1は「寺田遺跡」、2～6は「天神遺跡」、8、10、12、19は「上野国分僧・尼寺中間地域(2)」  
 22は「熊野堂遺跡、第三地区・雨壺遺跡」、25、26は「鳥羽遺跡I・J・K区」の各報告書より  
 トレース(1部加除筆)を行った。

# 写 真 图 版







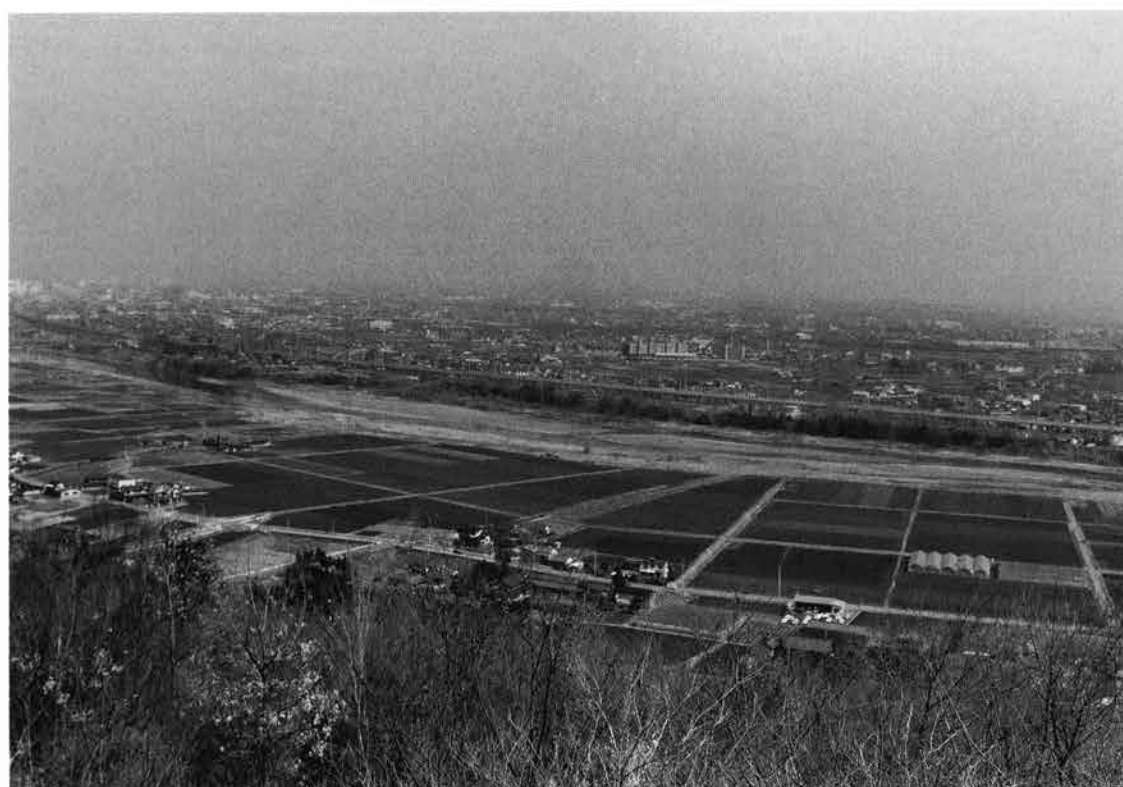
遺跡遠景（南東より遺跡を望む）



遺跡遠景（佐野崖上より遺跡を望む）



遺跡遠景（佐野崖上より遺跡を望む）



遺跡遠景（烏川対岸より佐野地区遺跡群を望む）



遺跡遠景（烏川対岸より遺跡を望む）



発掘調査風景



発掘調査風景



発掘調査風景



発掘調査風景



発掘調査風景



発掘調査風景



発掘調査風景



発掘調査風景



発掘調査風景



発掘調査風景



1区・2区東側道全景（南より）





3区本線全景（南より）



4区左側道全景（南より）



5区～10区東側道全景（北より）



5区～10区西側道全景（北より）



5区・6区東側道全景（北より）



5区・6区東側道全景（南より）



5区・6区・7区西側道全景（北より）



7区～10区東側道全景（北より）



7区～10区東側道全景（南より）



7区本線全景（北より）



7区・8区本線全景（北より）



8区西側道全景（北より）



8区本線北半部全景（北東より）



10区西側道全景（南より）



11区全景（東より）

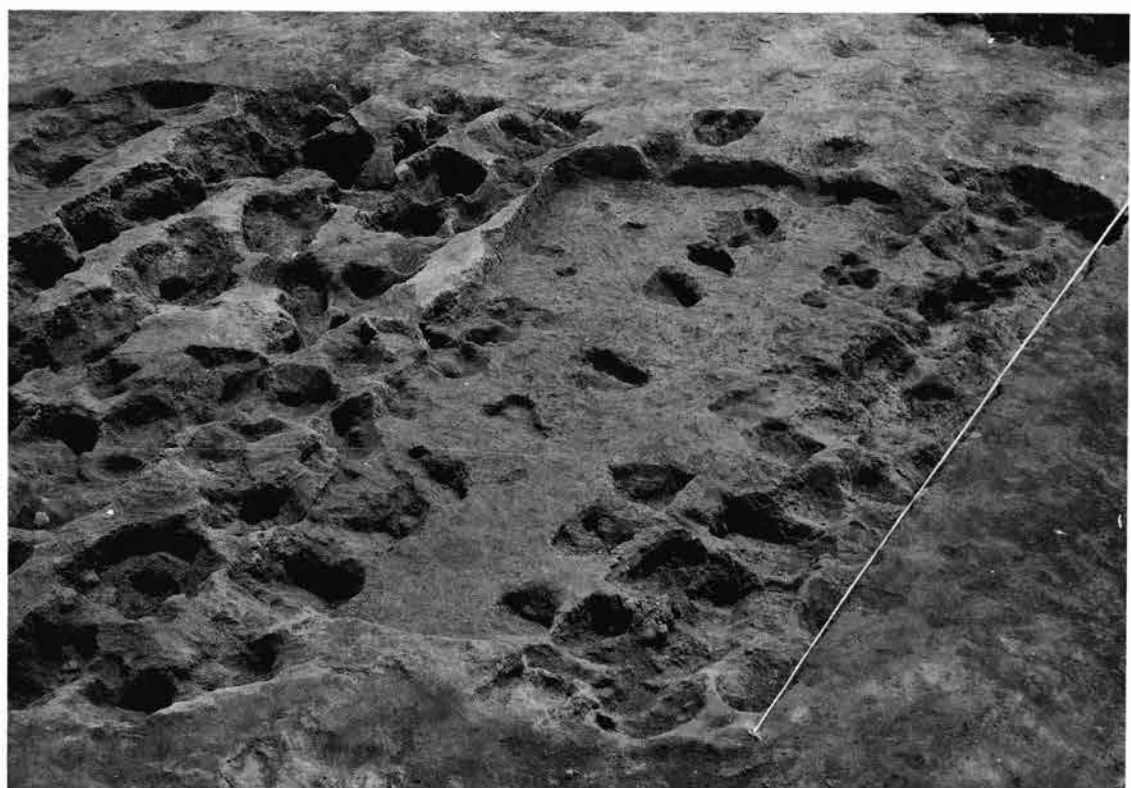


1区1A号住居跡・1B号住居跡東半部全景





1区1A号住居跡・1B号住居跡西半部遺物出土状態全景



1区2号住居跡全景



2区1号住居跡全景



2区2号住居跡遺物出土狀態全景



2区3号住居迹全景



2区4A号住居迹·4B号住居迹·4C号住居迹·5A号住居迹·1号土坑全景



2区4A号住居跡・4B号住居跡遺物出土状態全景



2区4A号住居跡・4B号住居跡・4C号住居跡全景



2区5A号住居跡・1号土坑遺物出土状態全景



2区5A号住居跡・5B号住居跡・1号土坑全景



3区1号住居跡・2号住居跡西半部遺物出土状態全景



3区1号住居跡東半部遺物出土状態全景



3区1号住居跡東半部全景



3区1号住居跡竈



3区1号住居跡貯藏穴遺物出土状態

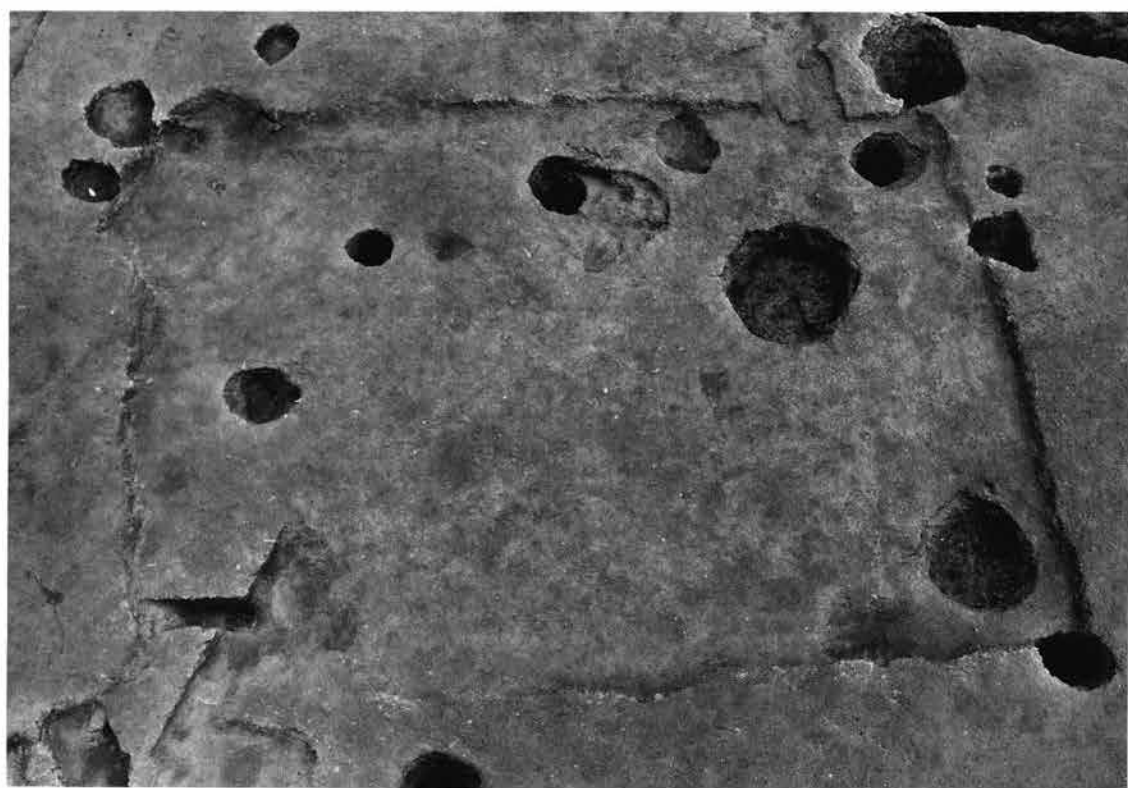


3区2号住居跡貯藏穴周辺遺物出土状態





3区3号住居跡遺物出土状態全景



3区3号住居跡全景



3区4号住居跡西半部全景



3区5号住居跡遺物出土状態全景



3区5号住居跡全景



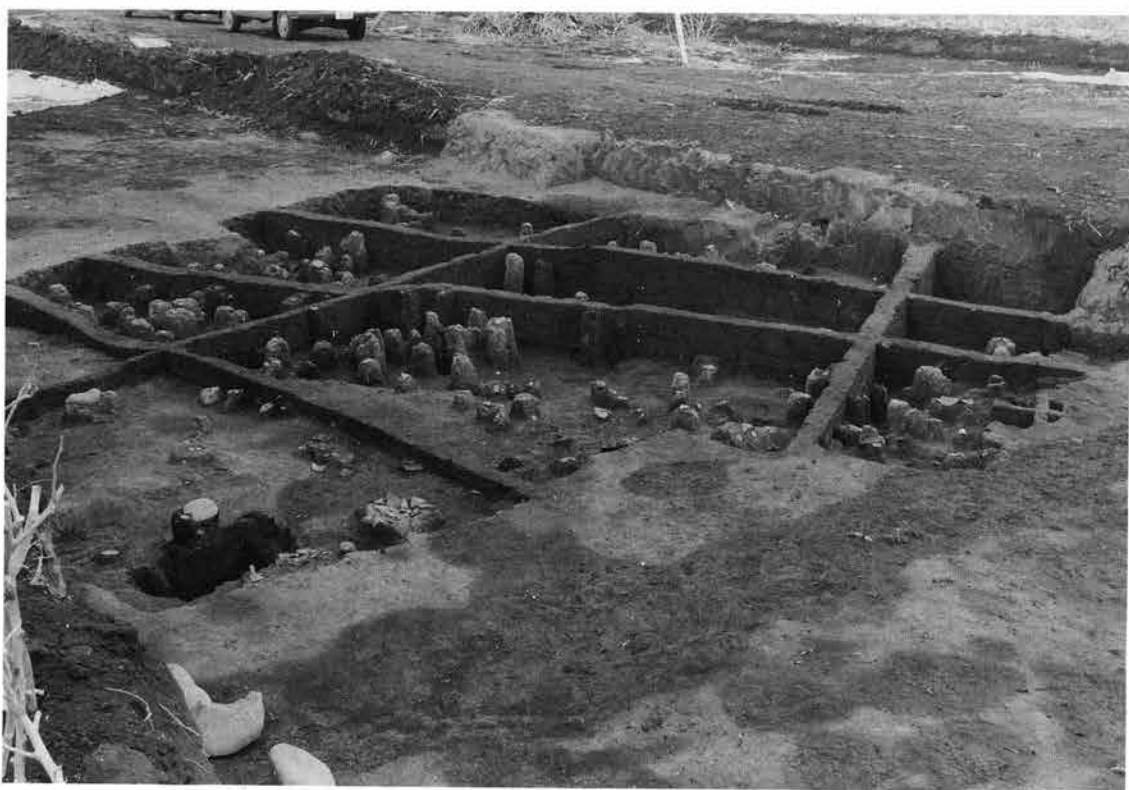
3区5号住居跡竈



3区6号住居跡遺物出土状態全景



3区7号住居跡・8号住居跡・9号住居跡・12号住居跡・13号住居跡・14号住居跡・2号溝跡全景



3区7号住居跡・8号住居跡・13号住居跡・14号住居跡断面及び遺物出土状態全景



3区7号住居跡・8号住居跡・13号住居跡・14号住居跡遺物出土状態全景



3区7号住居跡・8号住居跡・13号住居跡・14号住居跡全景



3区7号住居跡全景



3区7号住居跡竈



3区8号住居跡東半部遺物出土状態全景



3区9号住居跡西半部・12号住居跡遺物出土状態全景



3区9号住居跡東半部遺物出土状態全景





3区9号住居跡竈



3区10号住居跡遺物出土状態全景



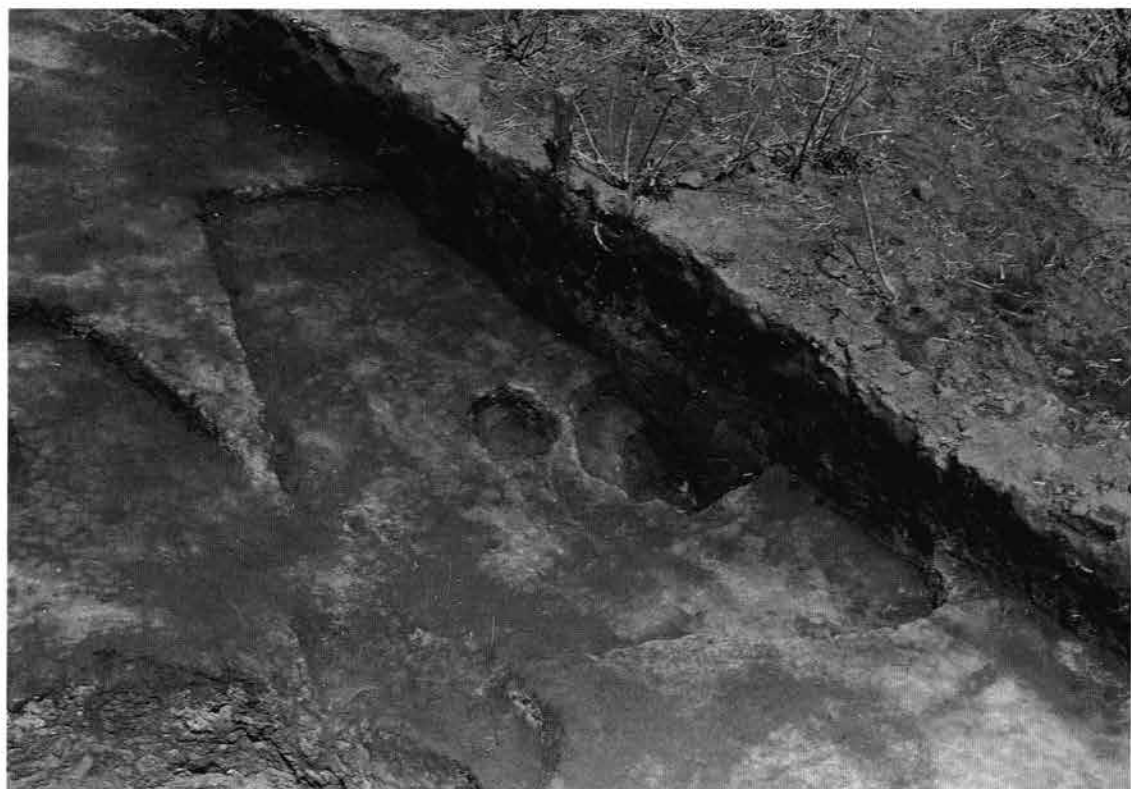
3区11号住居跡遺物出土状態全景



3区11号住居跡全景



3区12号住居跡貯藏穴遺物出土狀態



3区15号住居跡全景



3区16号住居跡全景



4区1号住居跡・2号住居跡・3号住居跡全景



4区1号住居跡全景



4区2号住居跡西半部遺物出土状態全景



4区2号住居跡東半部遺物出土状態全景



4区2号住居跡遺物出土状態

4区2号住居跡西半部全景



4区2号住居跡東半部全景





4区4号住居跡・11号住居跡遺物出土状態全景

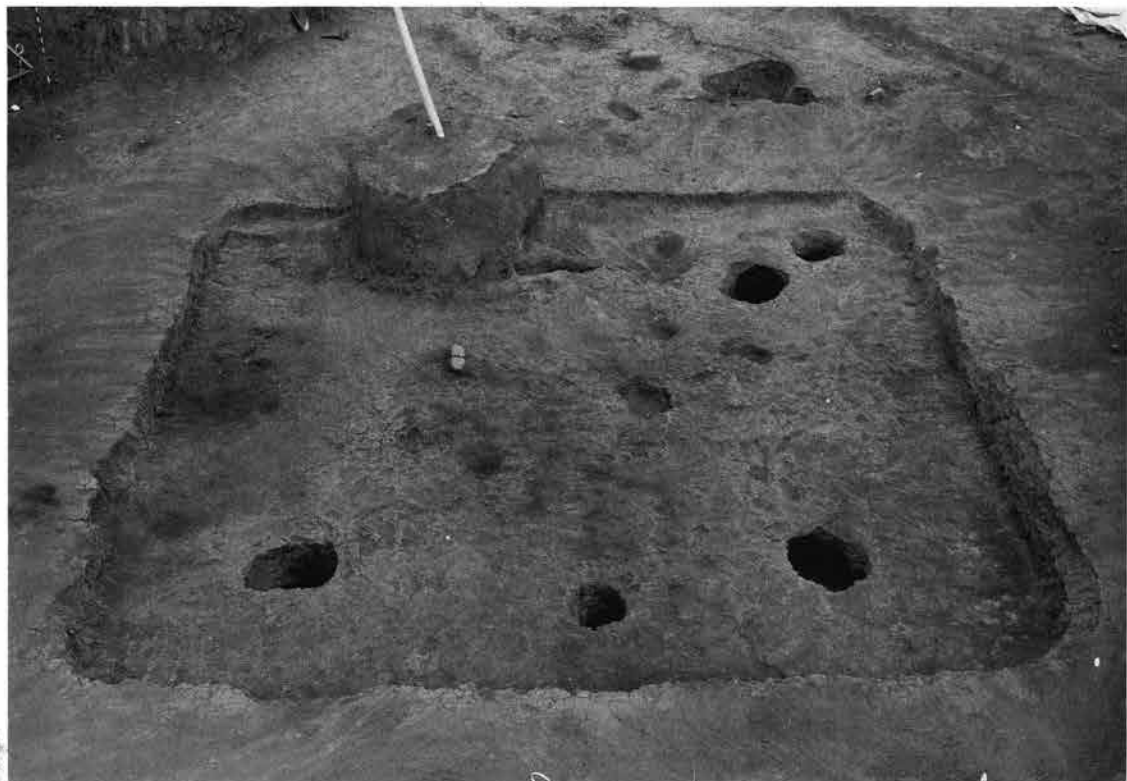


4区4号住居跡・11号住居跡東半部掘形全景





4区5号住居跡西半部遺物出土状態全景



4区6号住居跡全景



4区6号住居跡貯藏穴遺物出土狀態



4区8号住居跡・9号住居跡遺物出土狀態全景



4区8号住居跡・9号住居跡・1号溝跡東部分全景



4区9号住居跡全景



4区10号住居跡・11号住居跡・12号住居跡全景



4区10号住居跡全景



4区10号住居跡竈



4区12号住居跡遺物出土状態全景



4区12号住居迹全景



4区13号住居迹西半部掘形全景



4区14号住居跡・1号溝跡西部分・3号溝跡・6号土坑・9号土坑・10号土坑全景



4区14号住居跡遺物出土状態



5区1号住居跡・2号住居跡遺物出土状態全景



5区1号住居跡・2号住居跡全景





5区3号住居跡遺物出土状態全景



5区3号住居跡遺物出土状態



5区4号住居跡遺物出土状態全景



5区5号住居跡南東部遺物出土状態



5区5号住居跡南東部



5区7A号住居跡遺物出土状態



5区7A号住居跡・7B号住居跡  
南半部遺物出土状態全景



5区7A号住居跡・7B号  
住居跡南半部全景



5区6号住居跡南西部遺物出土状態



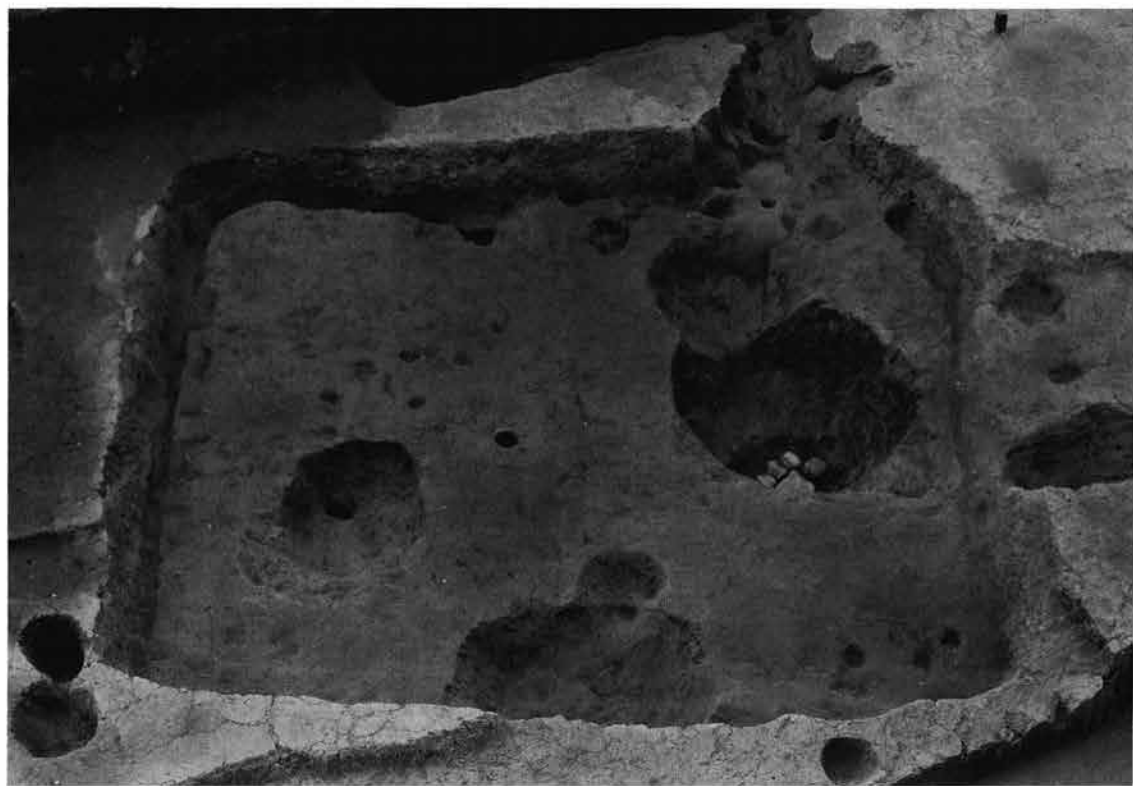
5区8号住居跡東半部・9号住居跡・2号土坑・3号土坑全景



5区8号住居跡東半部・9号住居跡・2号土坑・3号土坑掘形全景



5区10号住居跡遺物出土状態全景



5区10号住居跡掘形全景



5区11号住居跡・14号住居跡・15号住居跡遺物出土状態全景

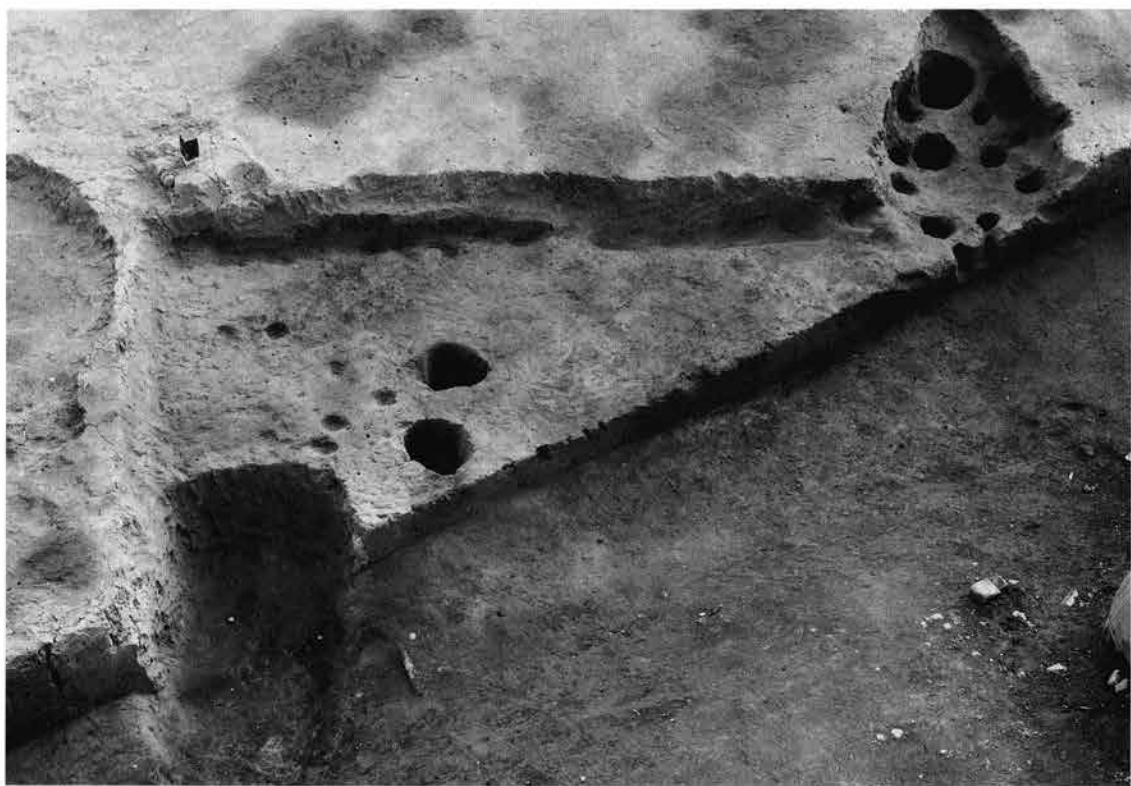


5区11号住居跡全景



5区15号住居跡北西部全景

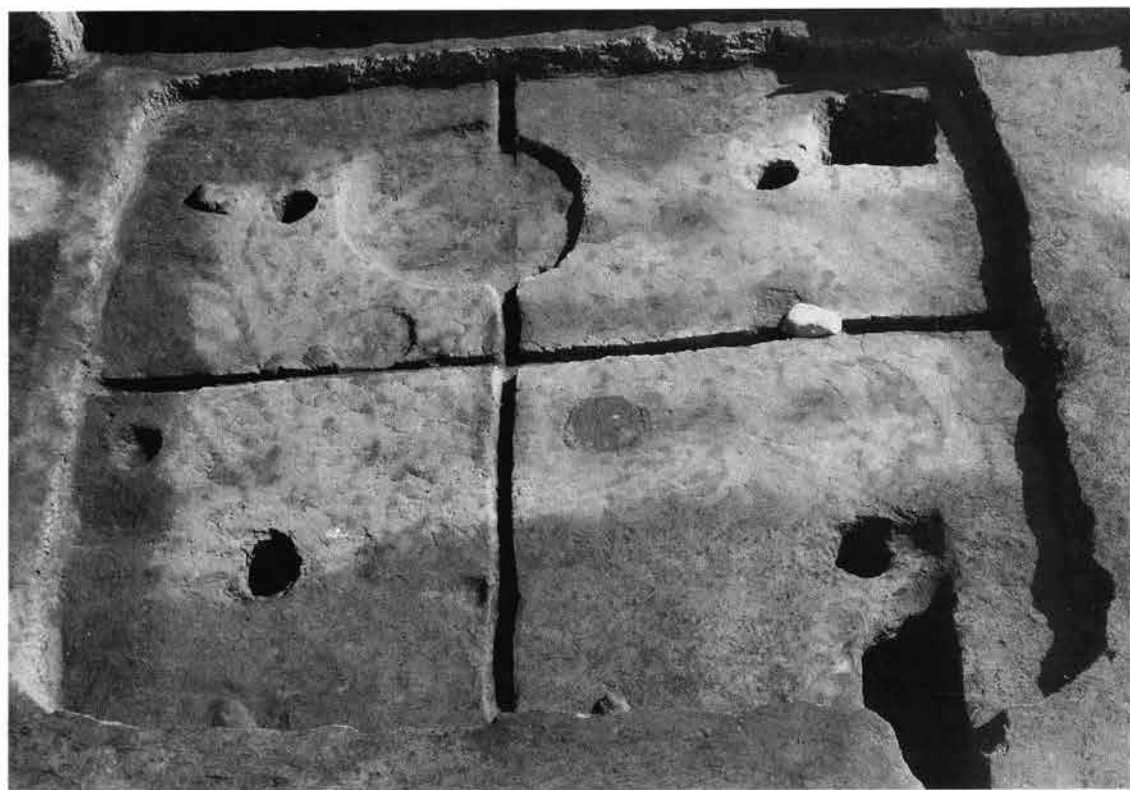




5区17号住居跡東半部全景



6区1号住居跡遺物出土状態全景



6区1号住居跡全景



6区1号住居跡貯藏穴遺物出土状態

6区2号住居跡竈遺物出土状態



6区2号住居跡・8号住居跡  
東半部遺物出土状態全景





6区2号住居跡西半部全景



6区3号住居跡遺物出土状態全景



6区3号住居跡全景



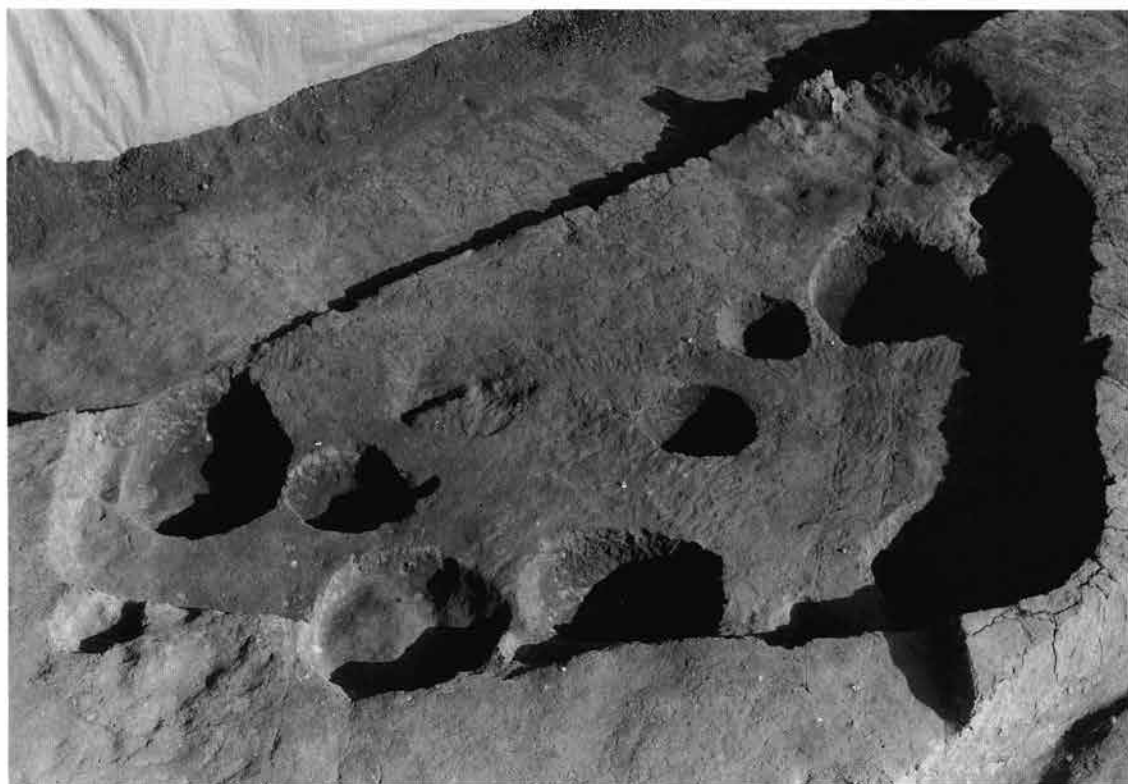
6区3号住居跡遺物出土状態



6区4号住居跡東半部全景



6区6号住居跡全景



6区6号住居跡掘形全景



6区6号住居跡竈付近遺物出土状態

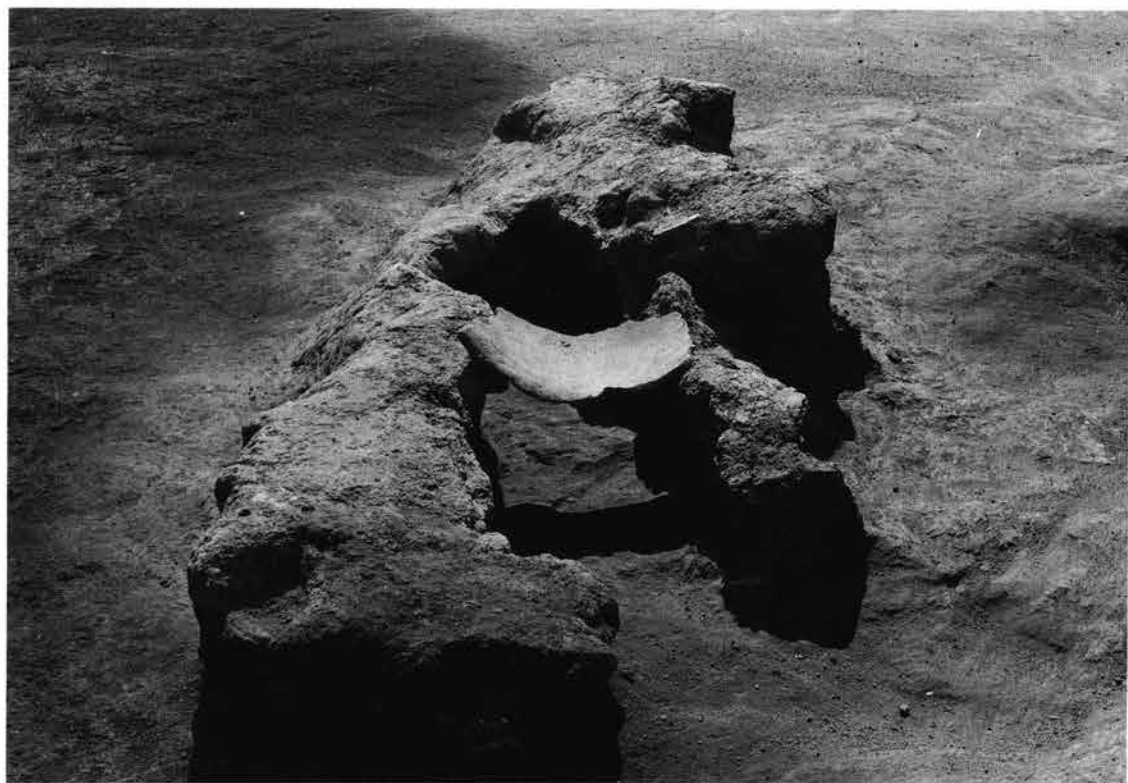


6区7号住居跡遺物出土状態全景



6区8号住居跡竈遺物出土状態

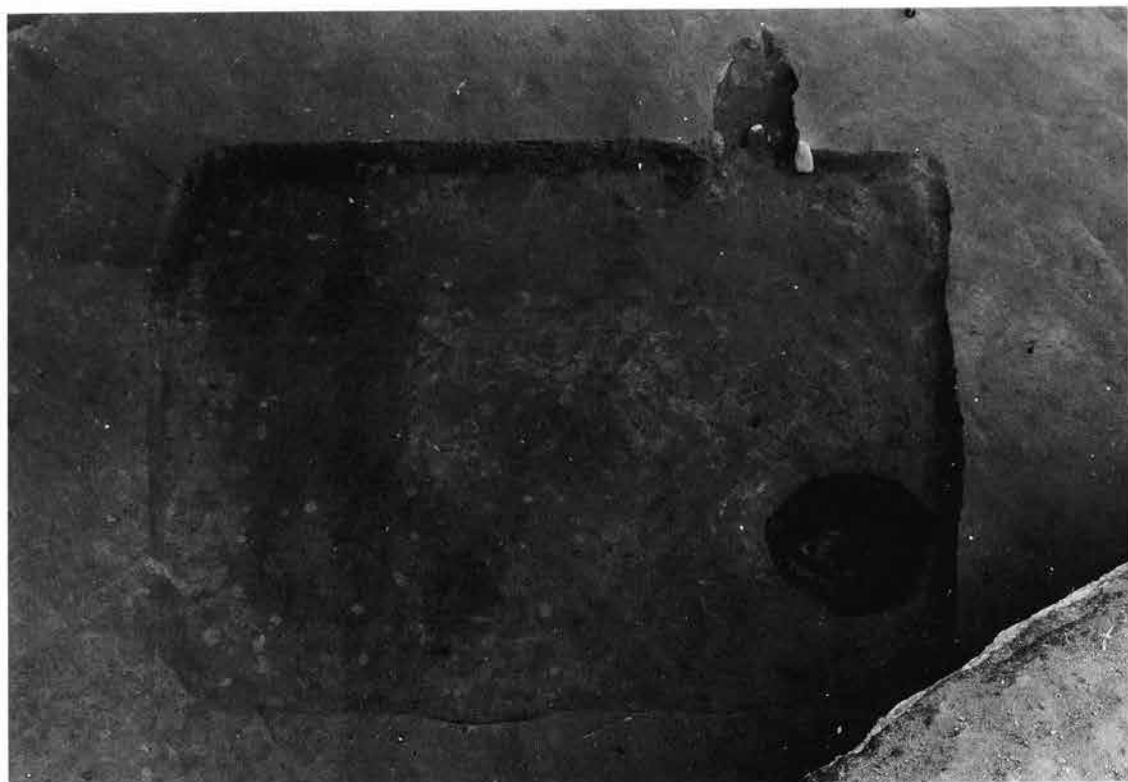




6区9号住居跡竈遺物出土状態



6区11号住居跡遺物出土状態全景



6区11号住居跡全景



6区11号住居跡竈遺物出土状態



6区12号住居跡東半部遺物出土状態全景



6区12号住居跡東半部全景



6区13号住居跡遺物出土状態全景



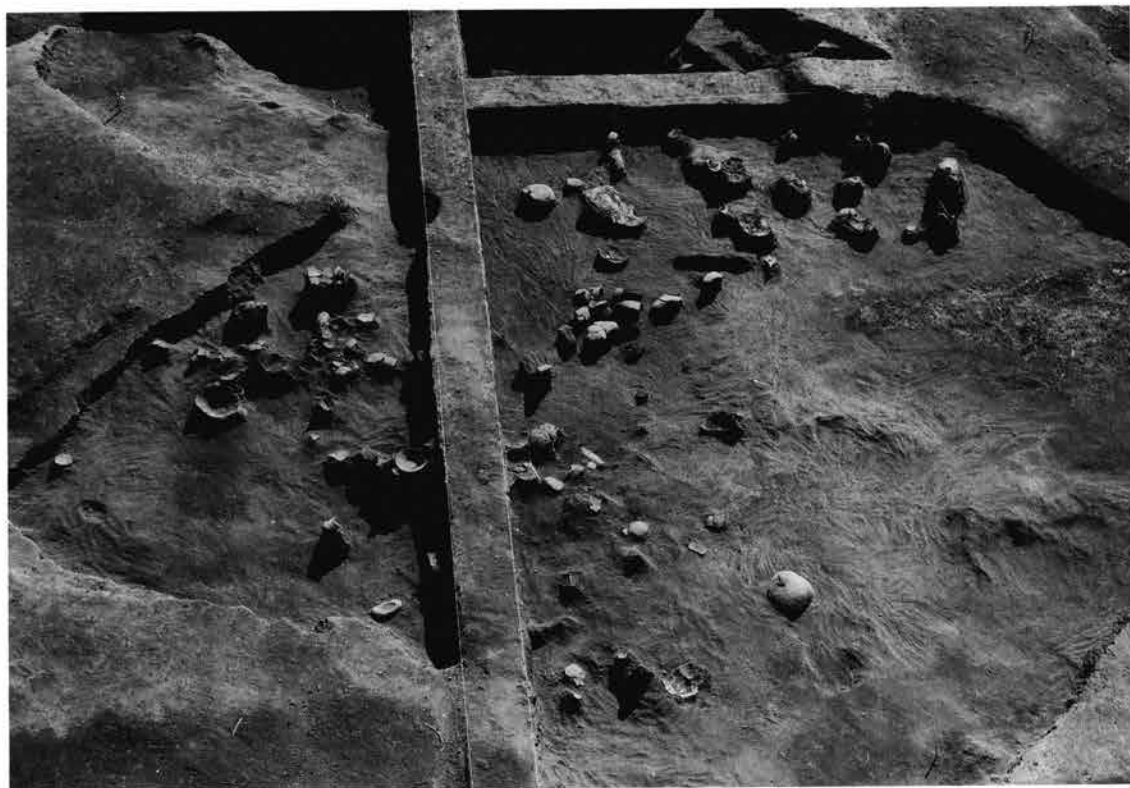
6区14号住居跡北東部全景



6区15号住居跡西半部掘形全景



7区1号住居跡・7A号住居跡・7B号住居跡全景



7区1号住居跡遺物出土状態全景



7区1号住居跡遺物出土状態



7区2号住居跡東半部遺物出土狀態全景



7区2号住居跡西半部全景



7区2号住居跡竈



7区3号住居跡全景





7区3号住居跡窖遺物出土狀態



7区3号住居跡貯藏穴



7区4A号住居跡・4B号住居跡東半部遺物出土狀態全景



7区5A号住居跡・5B号住居跡東半部全景



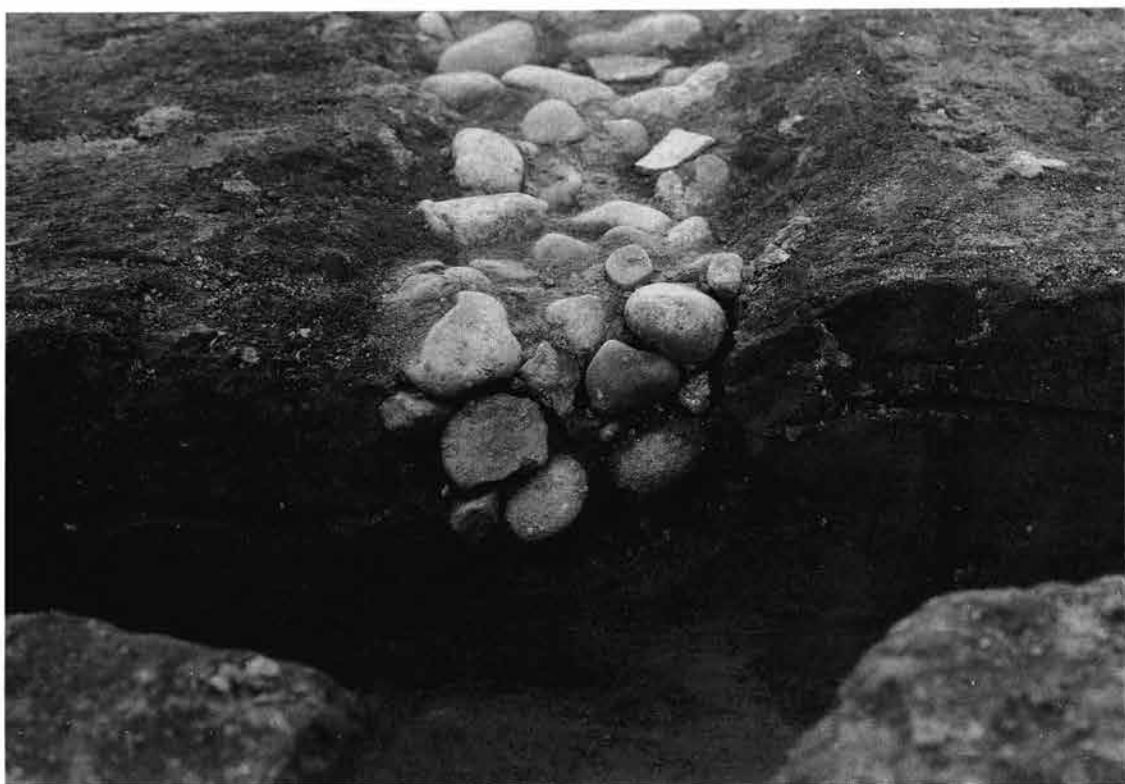
7区5A号住居跡竈遺物出土状態



7区5B号住居跡全景



7区5B号住居跡内溝



7区5B号住居跡内溝断面



7区5B号住居跡貯藏穴遺物出土狀態



7区6号住居跡西半部遺物出土狀態全景



7区6号住居跡東半部全景



7区7B号住居跡竈



7区9号住居跡遺物出土状態全景



7区9号住居跡掘形全景



7区10号住居跡・11号住居跡東半部遺物出土状態全景



7区10号住居跡・11号住居跡東半部掘形全景





7区10号住居跡竈遺物出土状態



7区12号住居跡全景



7区13号住居跡全景



7区13号住居跡掘形全景



7区13号住居跡貯藏穴周辺遺物出土状態



7区15号住居跡西半部遺物出土状態全景



7区15号住居跡・16号住居跡全景



7区15号住居跡・16号住居跡掘形全景



7区17号住居跡遺物出土状態全景



7区17号住居跡竈



7区17号住居跡掘形全景



7区18号住居跡西半部遺物出土狀態全景



8区1号住居跡東半部遺物出土狀態全景



8区1号住居跡東半部全景



8区2号住居跡・3号住居跡全景

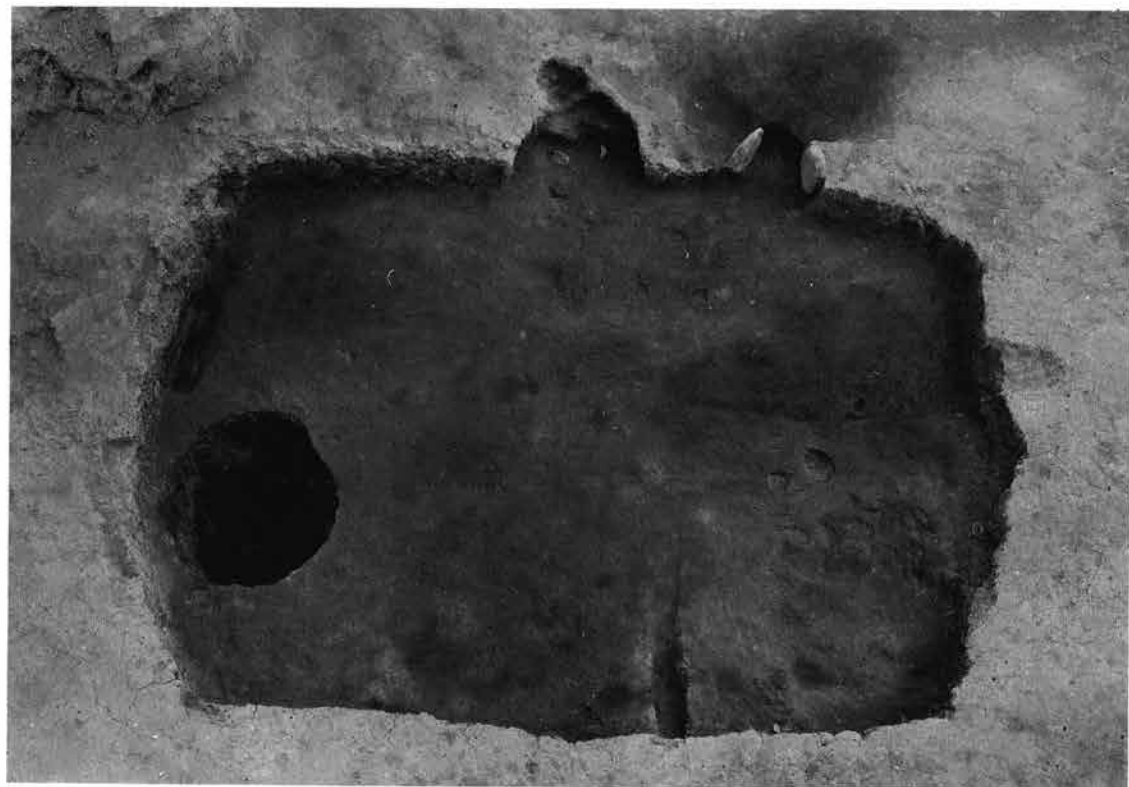


8区2号住居跡遺物出土状態全景





8区4号住居跡遺物出土状態全景



8区4号住居跡全景



8区4号住居跡竈遺物出土状態



8区5号住居跡竈



8区6号住居跡西半部遺物出土状態全景



8区6号住居跡竈遺物出土状態



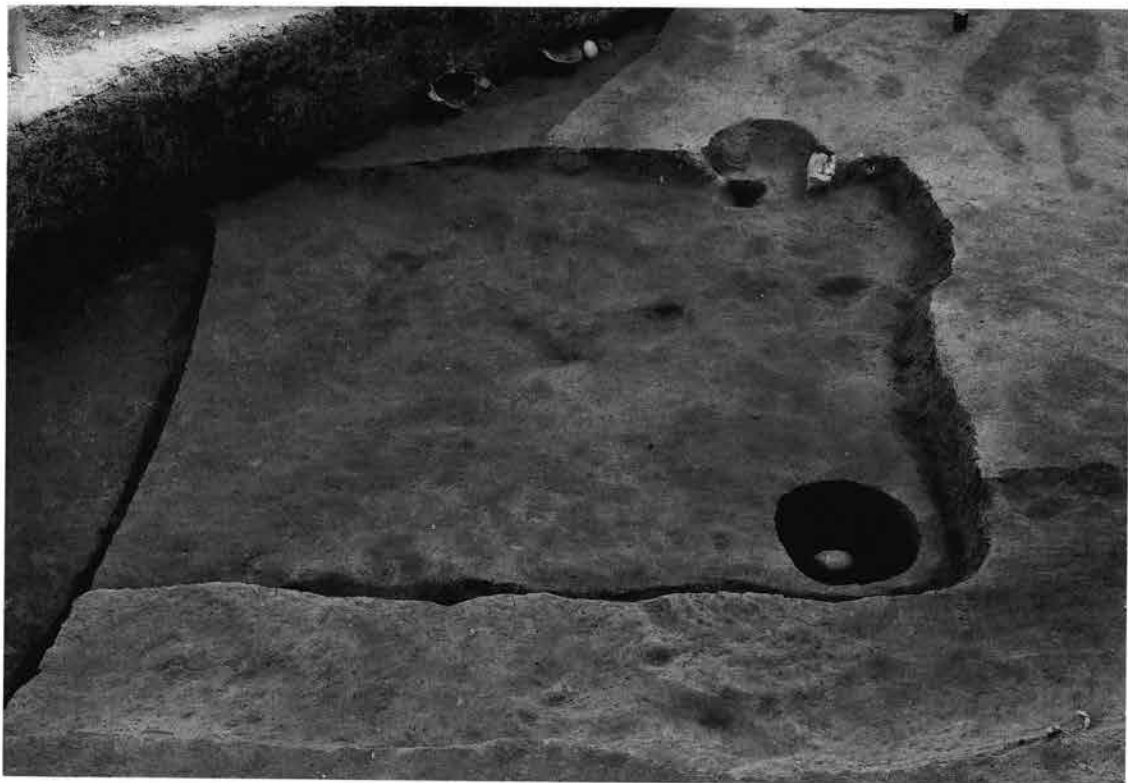
8区7号住居跡遺物出土狀態全景



8区11号住居跡西半部遺物出土狀態全景



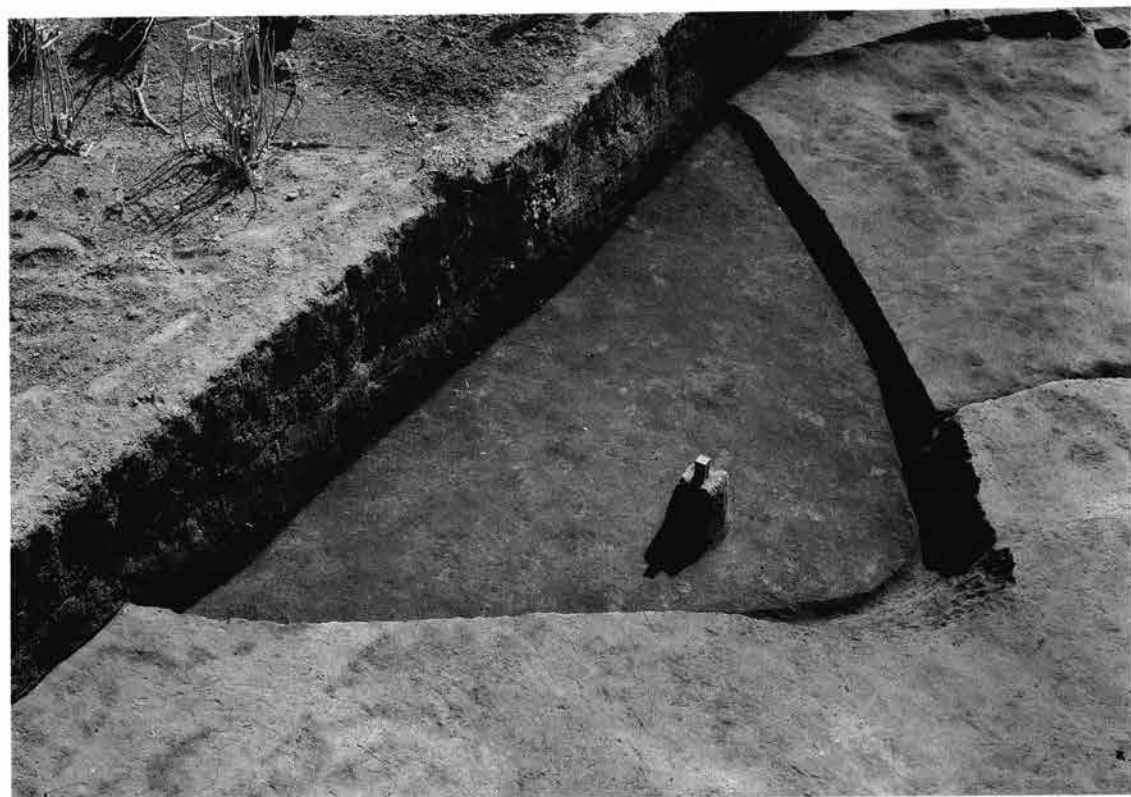
8区11号住居跡竈遺物出土状態



8区12号住居跡全景



8区12号住居跡竈遺物出土状態



8区13号住居跡西半部全景



8区15号住居跡遺物出土状態全景



8区15号住居跡全景



8区15号住居跡遺物出土状態



8区17号住居跡掘形全景





9区1号住居跡西半部遺物出土狀態全景



9区1号住居跡南東隅貯藏穴遺物出土狀態



9区1号住居跡北壁脇貯藏穴遺物出土状態



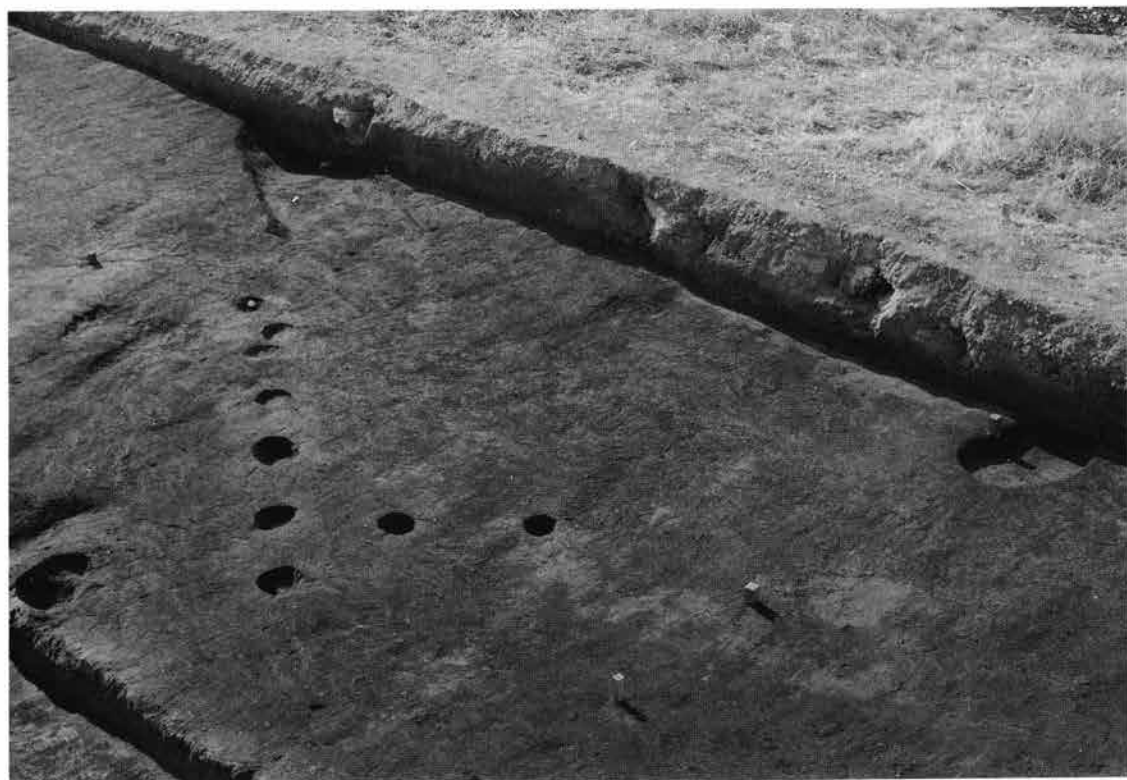
9区2号住居跡北西部全景



9区3号住居跡全景



9区4号住居跡全景



10区1号柱列・5号土坑・3号沟迹全景



9区1号古墳墳丘全景



9区1号古墳北東部全景（北東より）



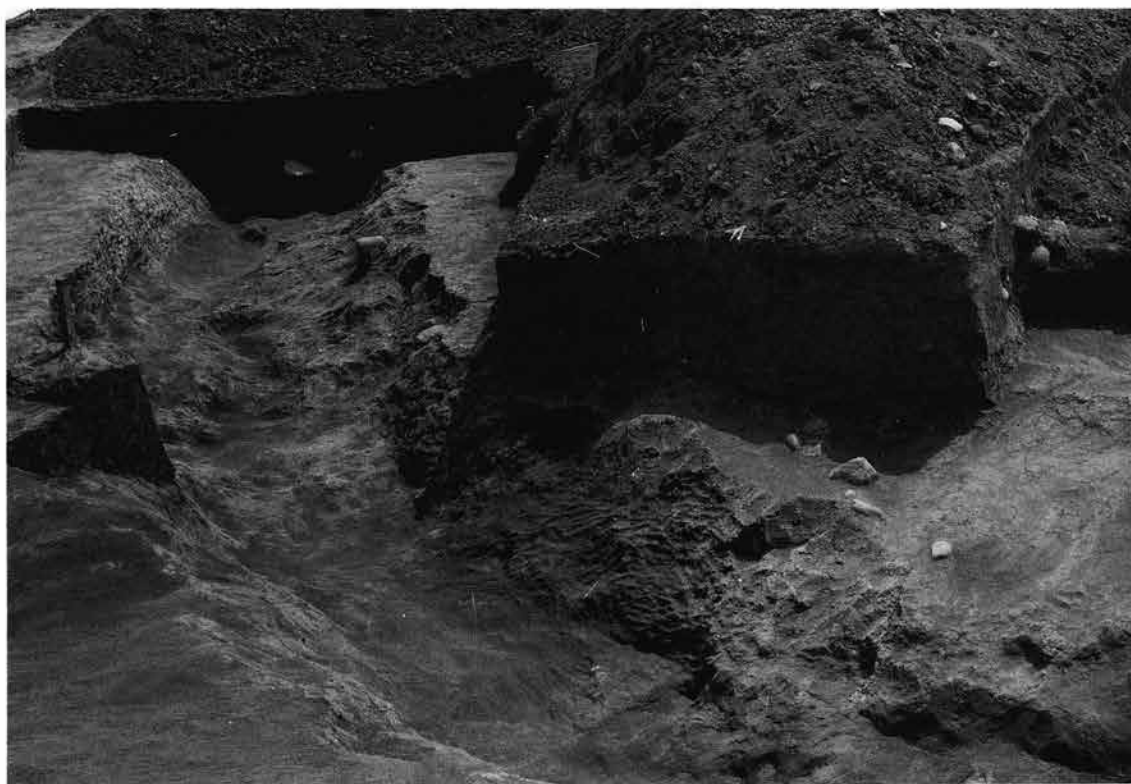
9区1号古墳北東部葺石（南東より）



9区1号古墳北東部周濠（北東より）



9区1号古墳北東部周濠（北より）



9区1号古墳北東部周濠（北より）



9区1号古墳北東部周濠（南東より）

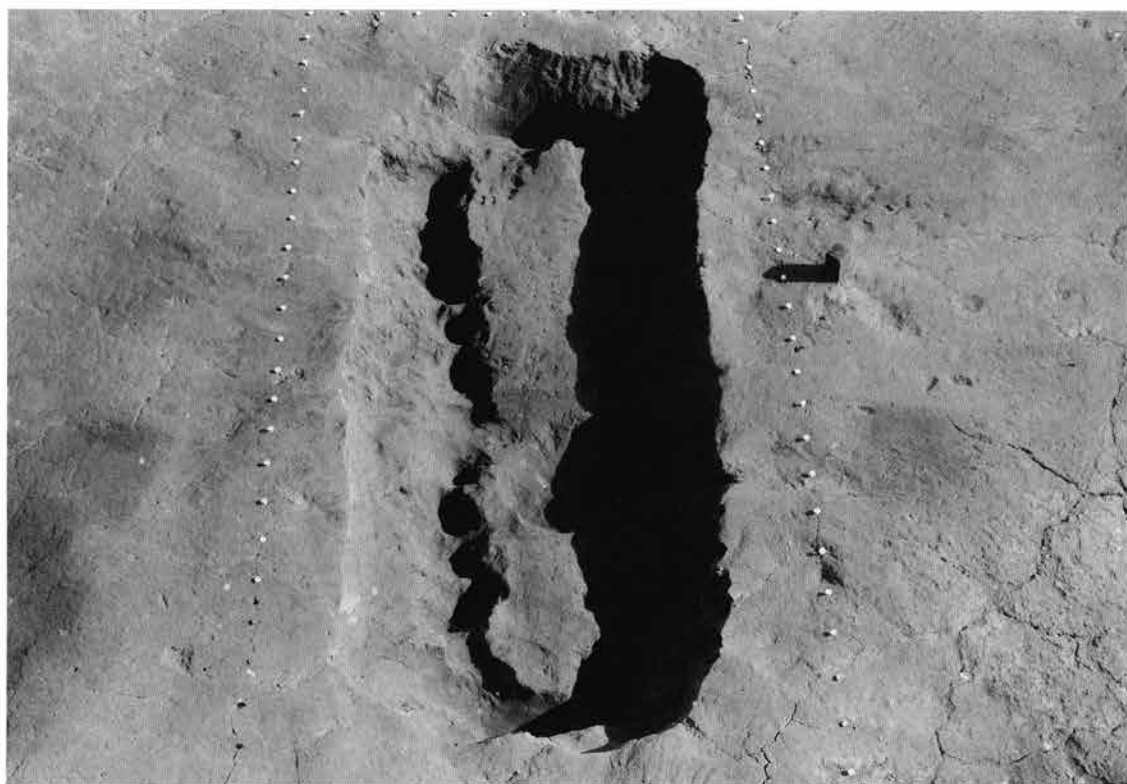


9区1号古墳埴輪出土状態



10区1号石槨全景

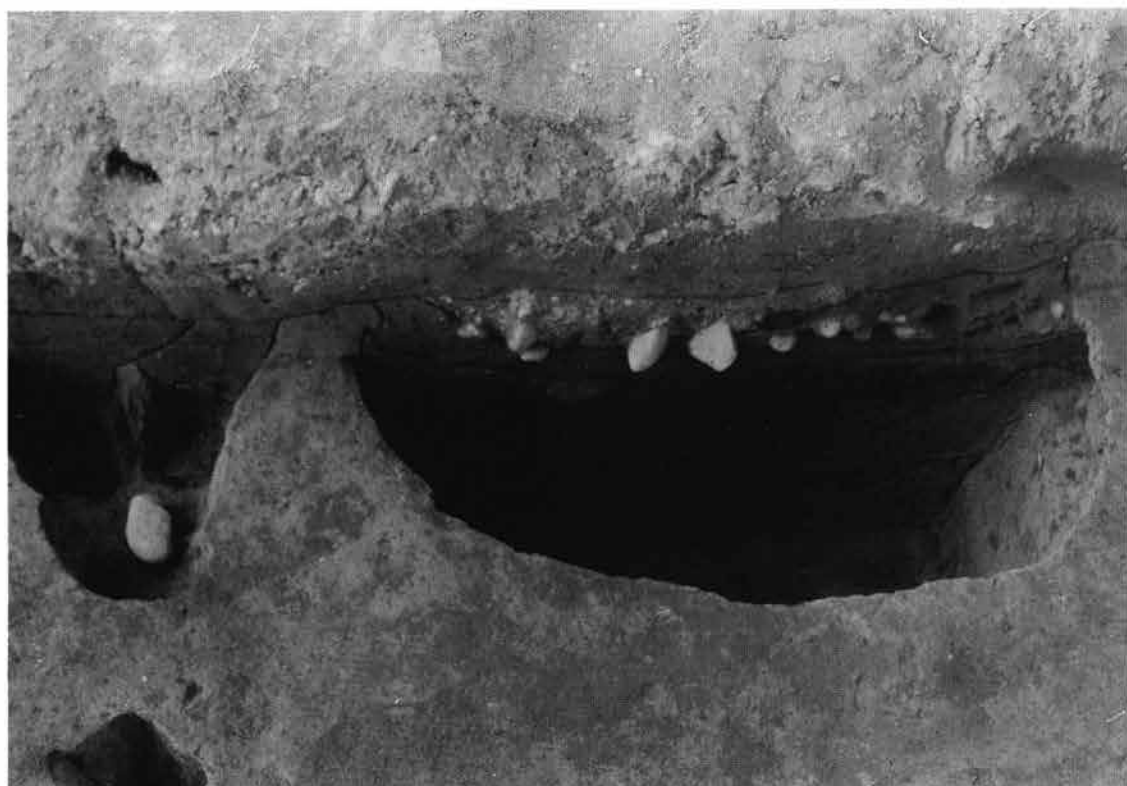




10区1号石柶掘形全景



1区1号井戸跡遺物出土状態全景



7区1号井戸跡全景



6区1号墓墳(井戸墓)人骨出土状態全景



3区4号土坑遗物出土状态全景



9区10号土坑全景



9区11号土坑全景



9区11号土坑遺物出土狀態



3区1号馬齒埋納甕



3区1号馬齒埋納甕



1区1号井戸跡・1号土坑・2号土坑・3号土坑・4号土坑・5号土坑・3号溝跡全景



2区5号土坑全景



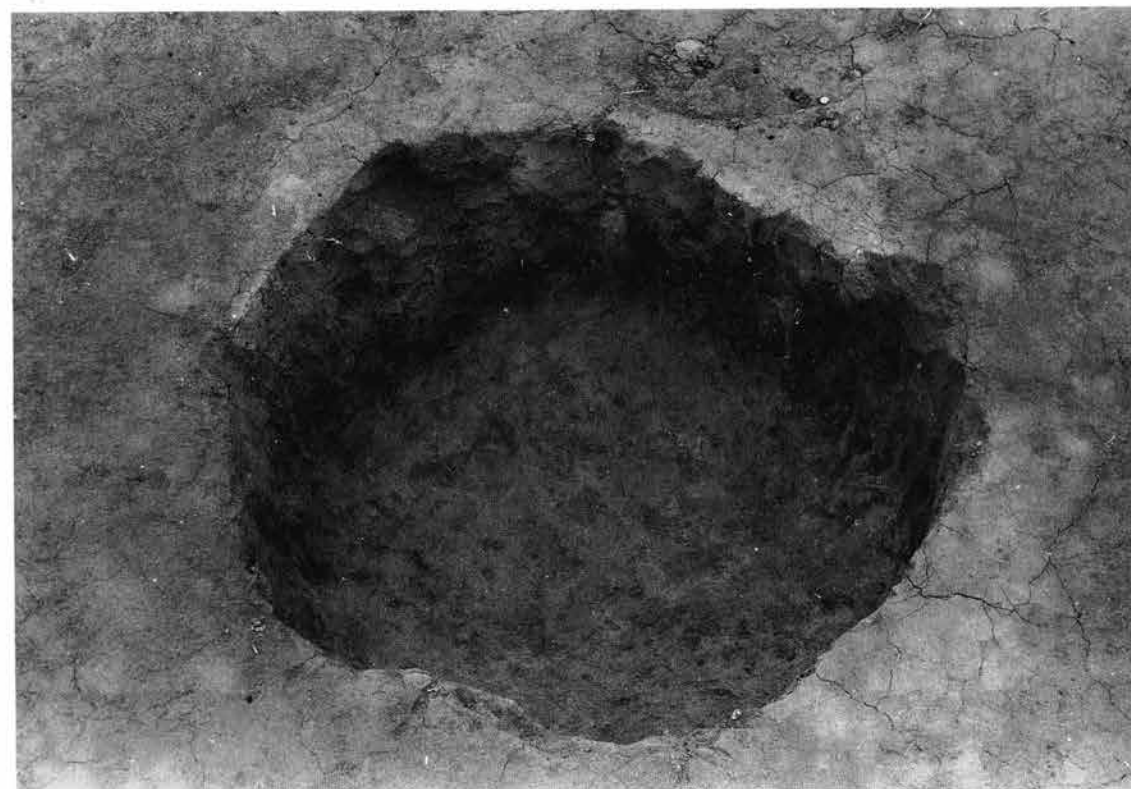
3区1号土坑全景



4区1号土坑遗物出土状态全景



4区2号土坑全景



4区6号土坑全景

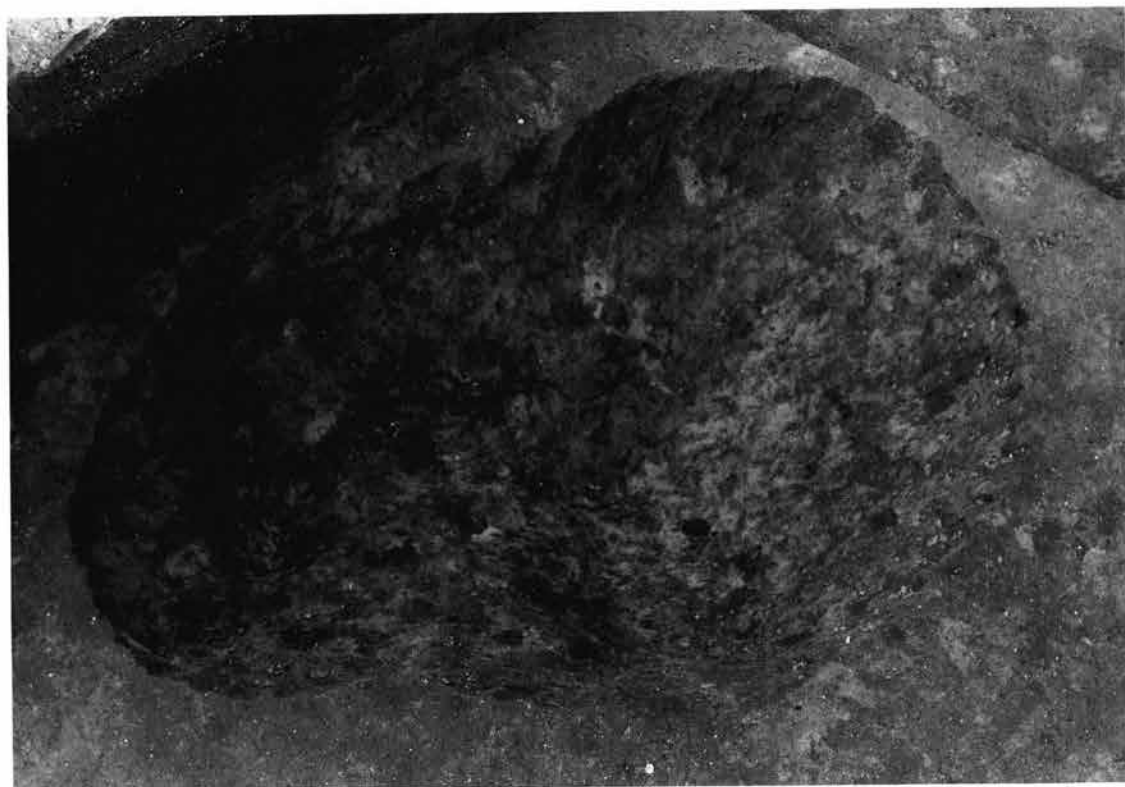




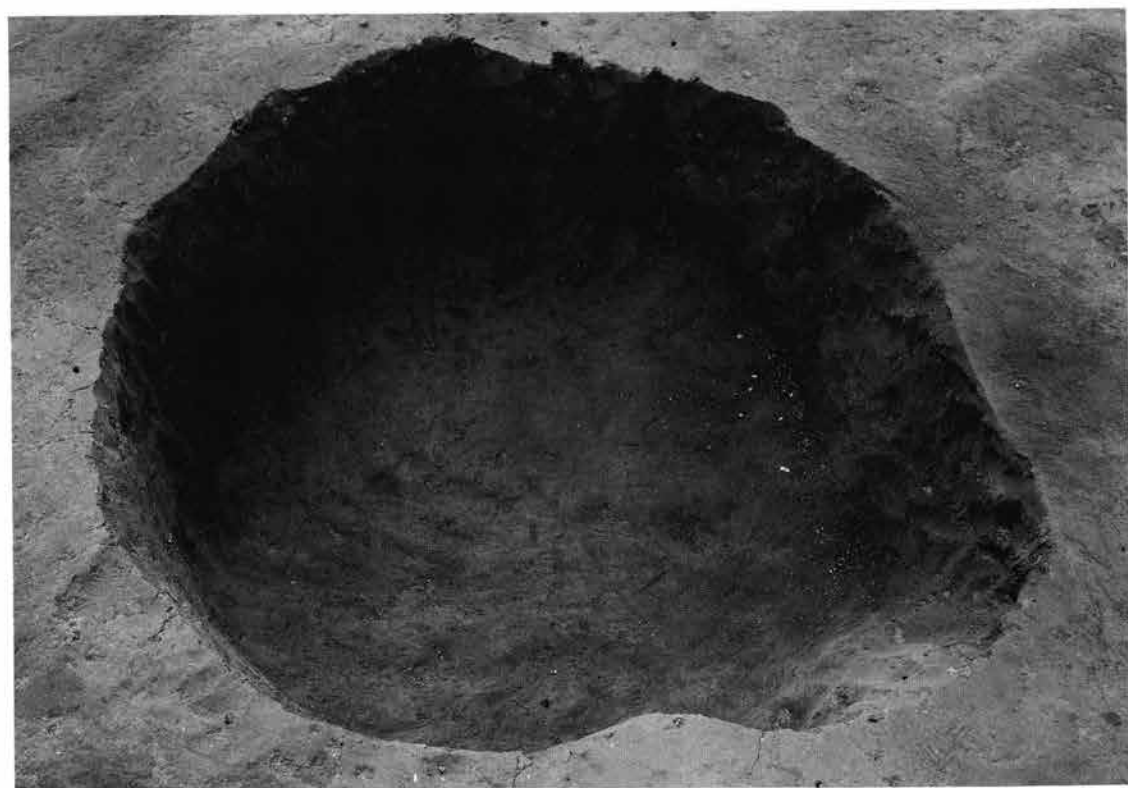
4区9号土坑全景



4区10号土坑全景



5区2号土坑全景



5区5号土坑全景



5区7号土坑全景



6区10号土坑全景



7区2号土坑·3号土坑·5号土坑·6号土坑·7号土坑全景



8区17号土坑遺物出土狀態全景



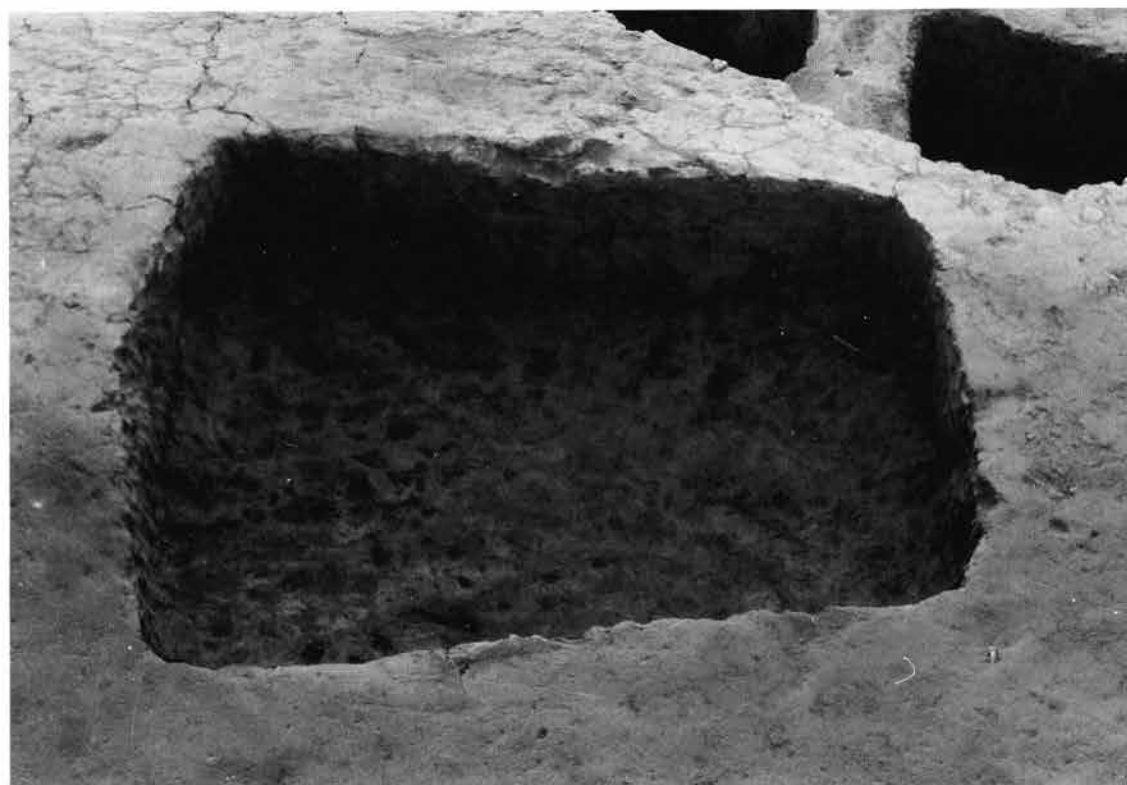
8区11号土坑遗物出土状态全景



8区21号土坑遗物出土状态全景



9区1号土坑石出土状态全景



9区1号土坑全景



9区2号土坑·15号土坑·16号土坑石出土状态全景



9区2号土坑·15号土坑·16号土坑全景



9区3号土坑石出土状态全景



9区4号土坑全景





9区5号土坑全景



9区6号土坑全景



10区 1号土坑全景



10区 4号土坑全景

2区1号沟迹全景



2区2号沟迹全景

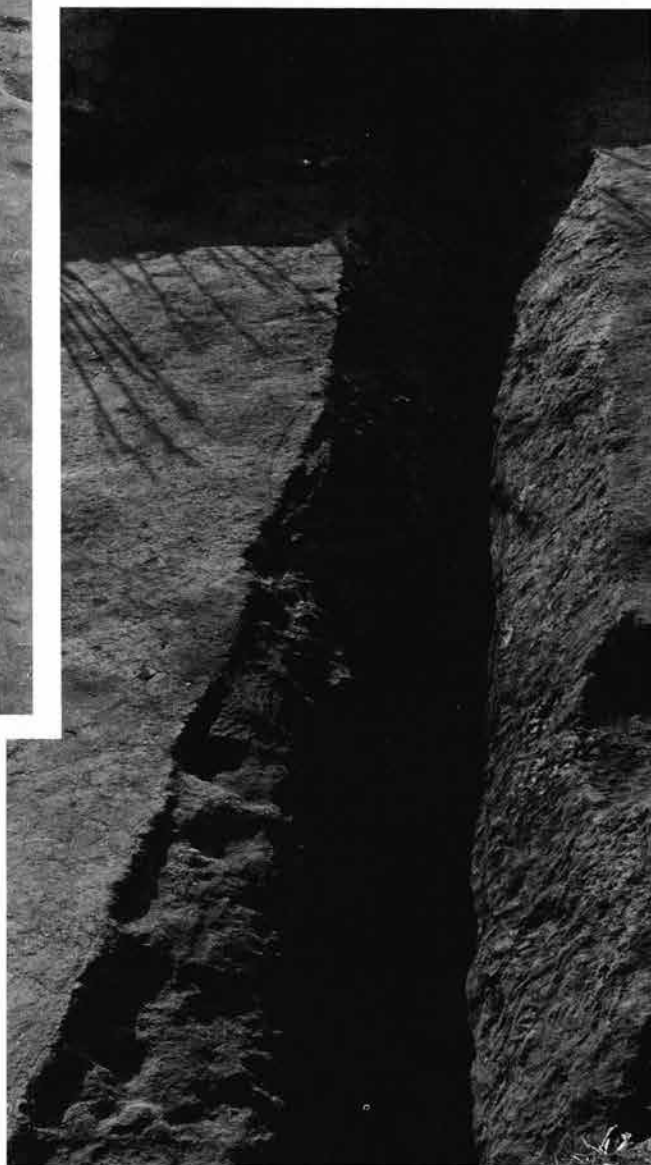


3区1号沟迹东部分·3号沟迹全景



3区1号沟迹全景

3区1号沟迹全景



3区2号沟迹全景



4区2号沟迹全景



4区3号沟迹全景

6区1号沟迹南西部全景



6区1号沟迹东部遗物出土状态全景





6区3号沟迹·4号沟迹全景



9区1号沟迹遺物出土状态全景





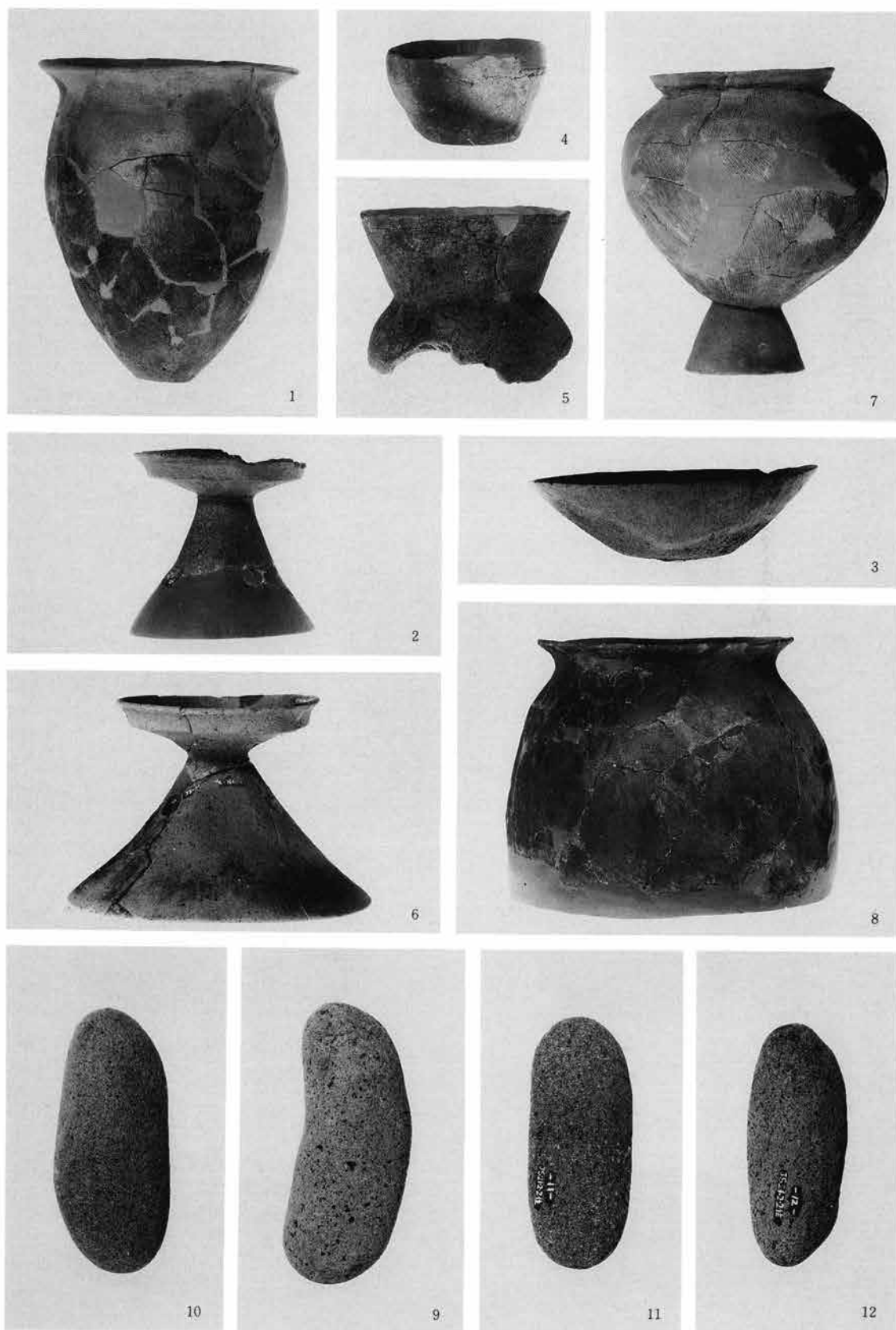
9区2号沟迹·1号土坑·2号土坑·3号土坑·5号土坑·6号土坑·15号土坑·16号土坑遺物出土状态全景



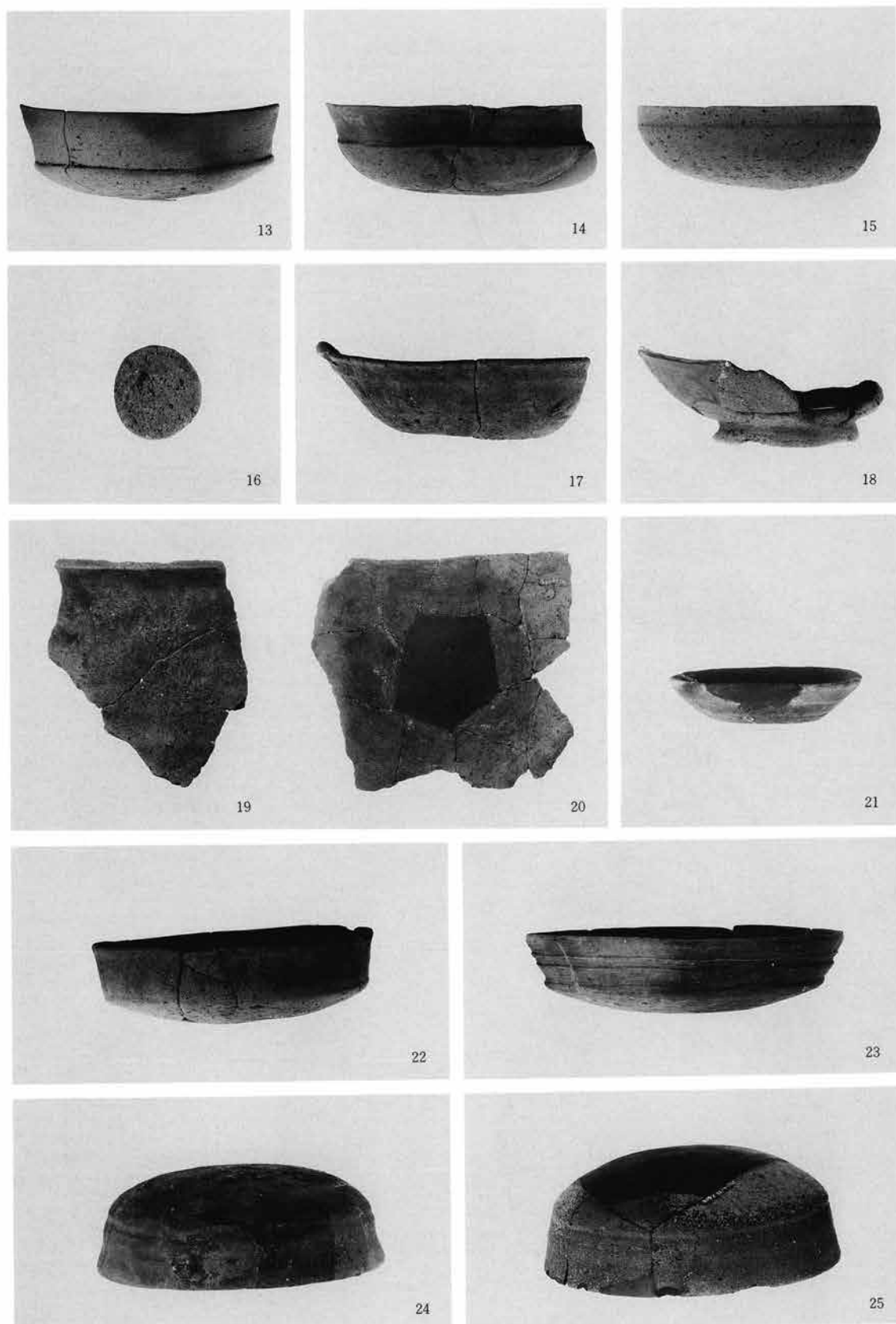
9区2号沟迹·1号土坑·2号土坑·5号土坑·6号土坑·15号土坑·16号土坑全景



10区2号沟迹全景



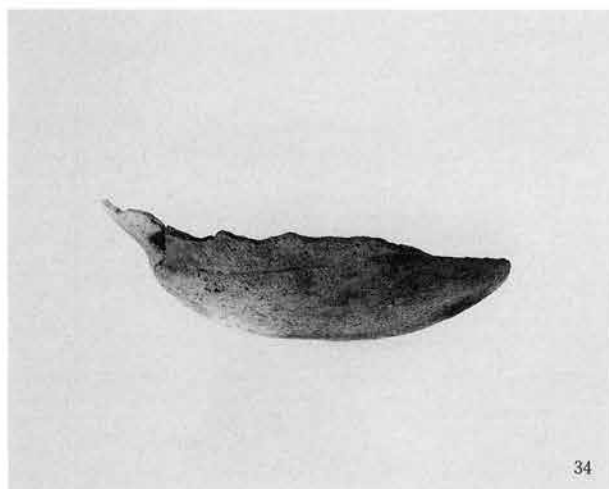
1区1A号住居跡、2区1号住居跡・2号住居跡出土遺物



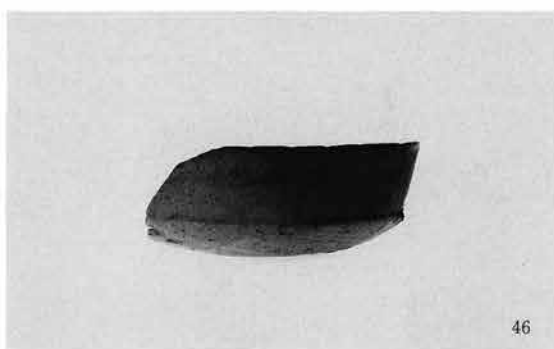
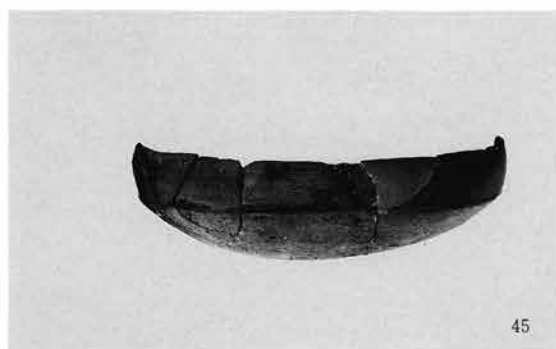
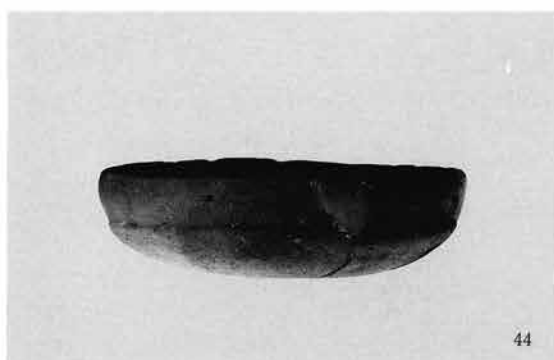
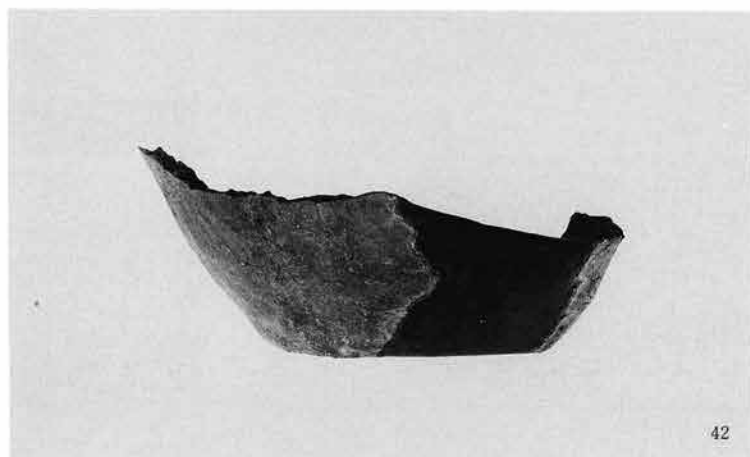
2区4A号住居跡・4B号住居跡・5A号住居跡・5B号住居跡、3区1号住居跡出土遺物



3区1号住居跡出土遺物



3区2号住居跡出土遺物

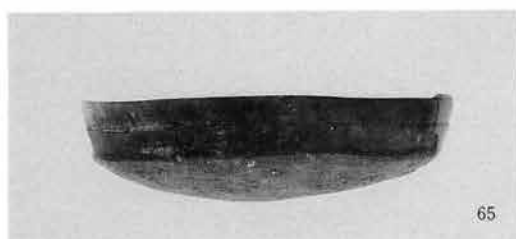


3区3号住居跡・5号住居跡出土遺物

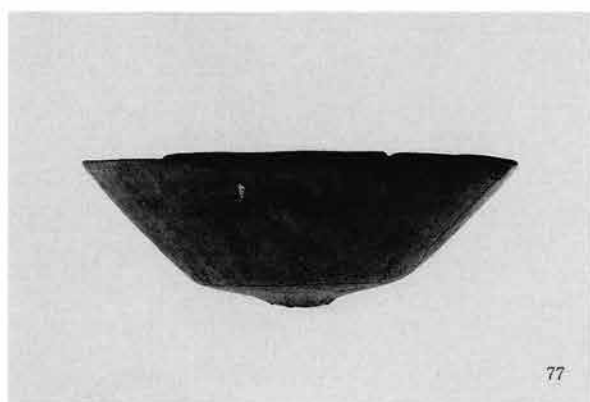
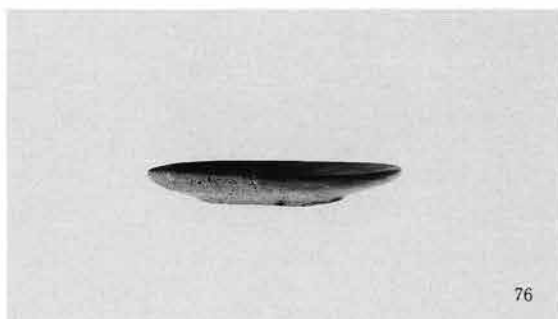
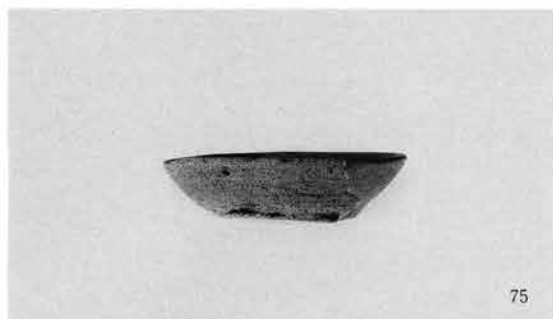


3区5号住居跡・6号住居跡出土遺物

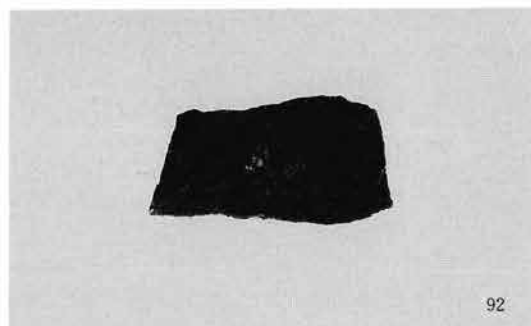
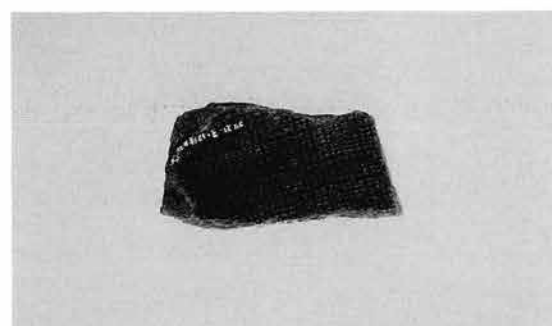
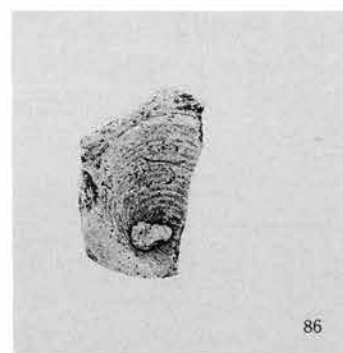
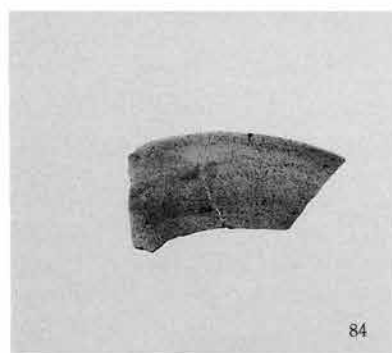
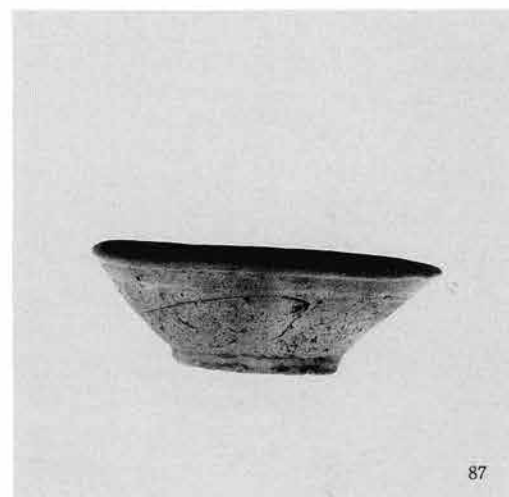




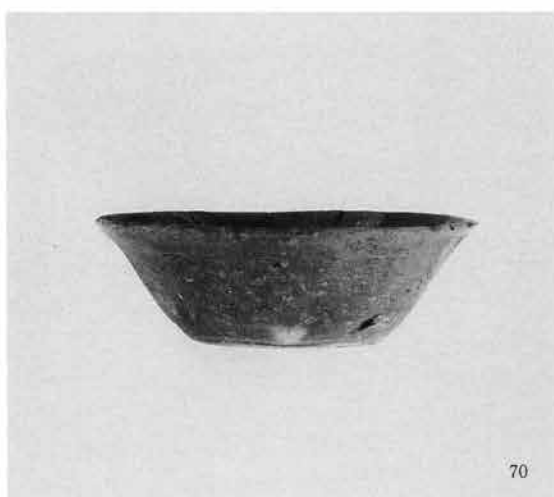
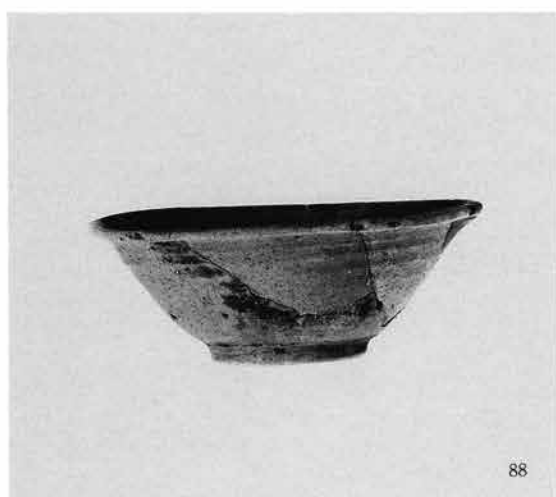
3区6号住居跡・7号住居跡出土遺物

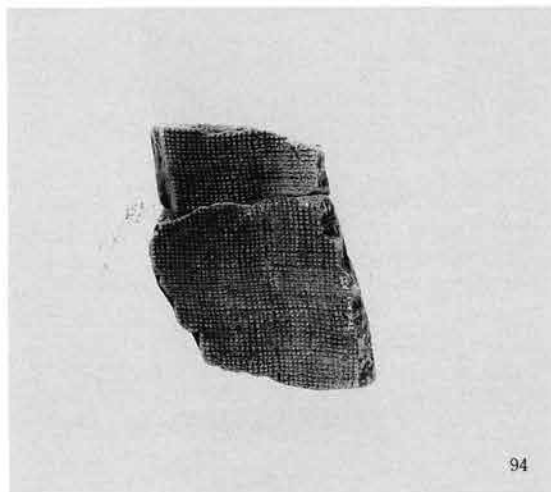


3区8号住居跡・9号住居跡・10号住居跡出土遺物

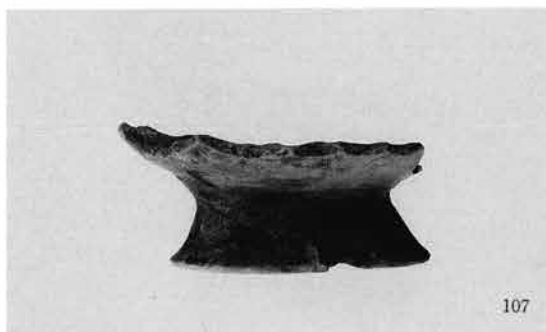
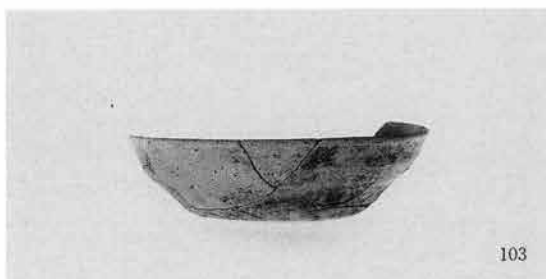
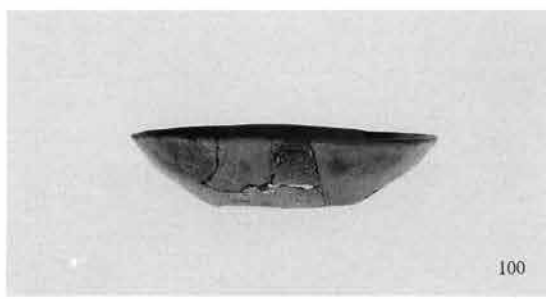
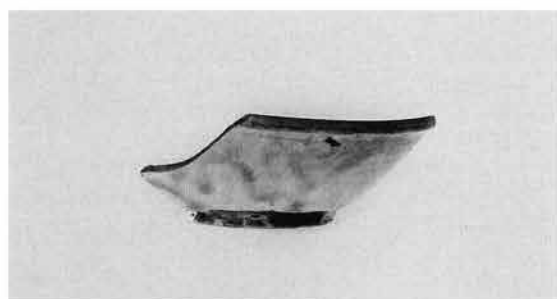


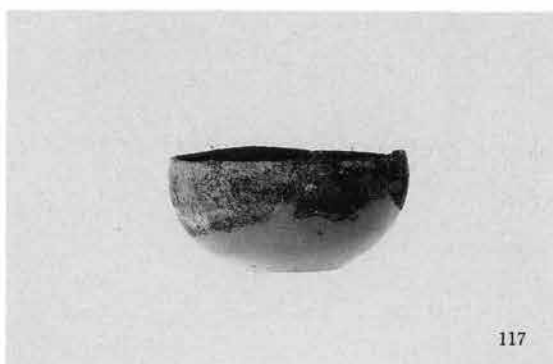
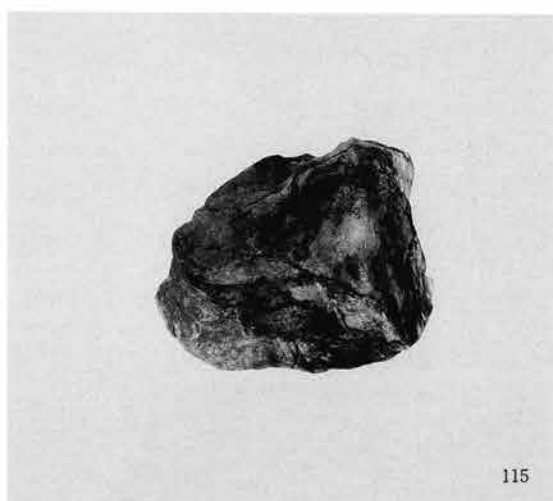
3区10号住居跡・11号住居跡・12号住居跡出土遺物



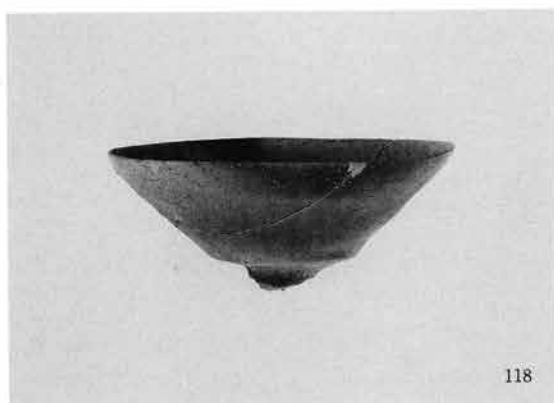


3区13号住居跡・14号住居跡出土遺物



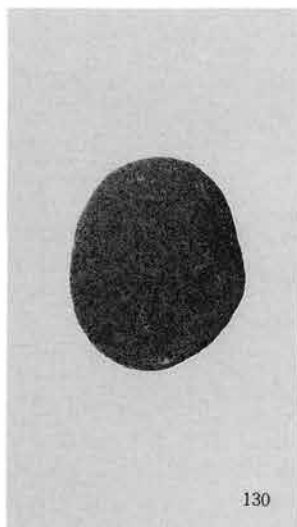
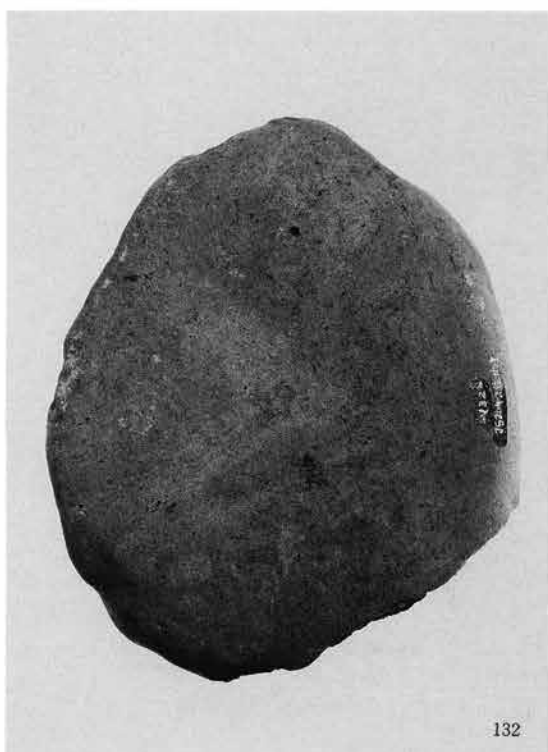
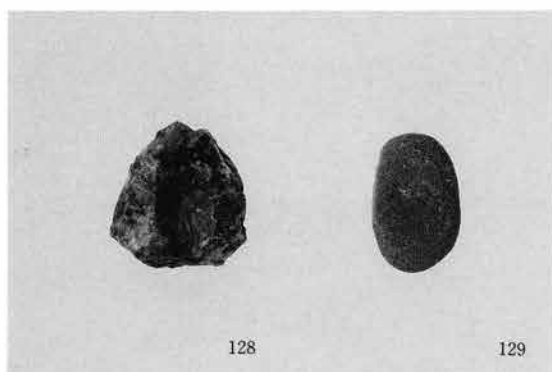
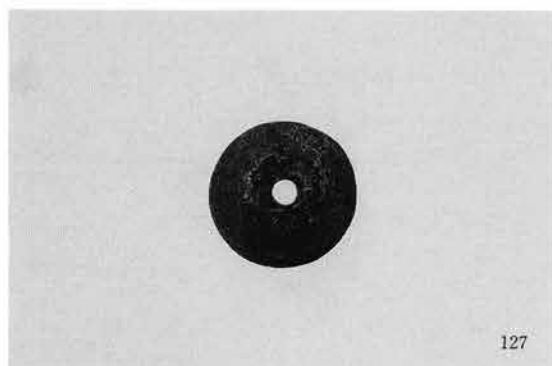
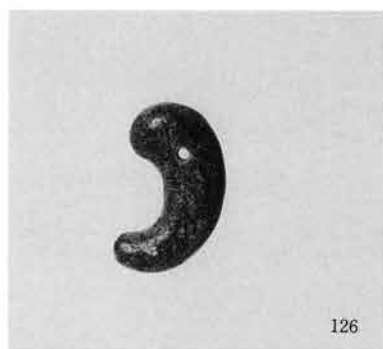
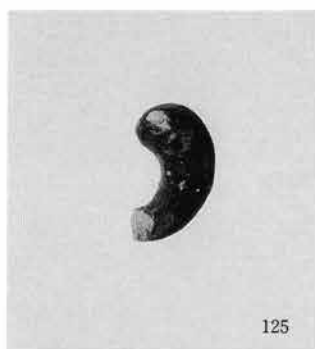
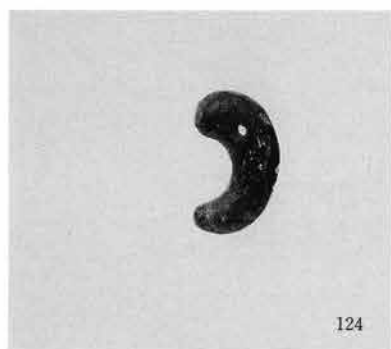


3区16号住居跡、4区1号住居跡・2号住居跡出土遺物

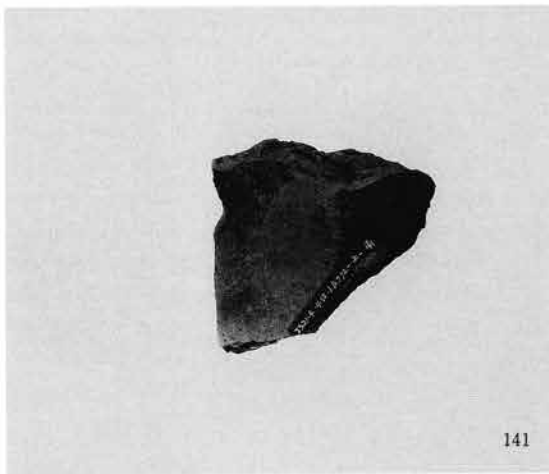
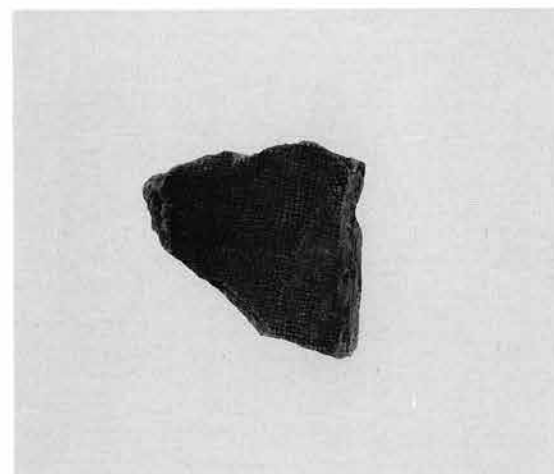
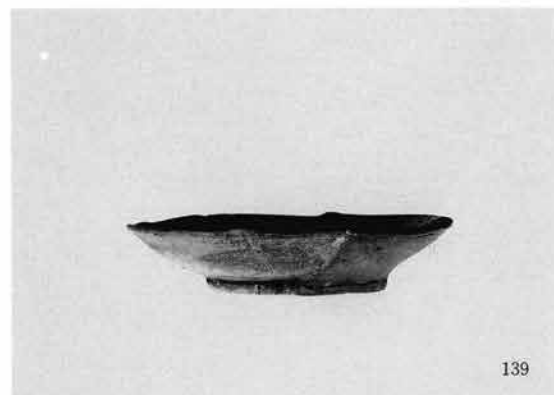
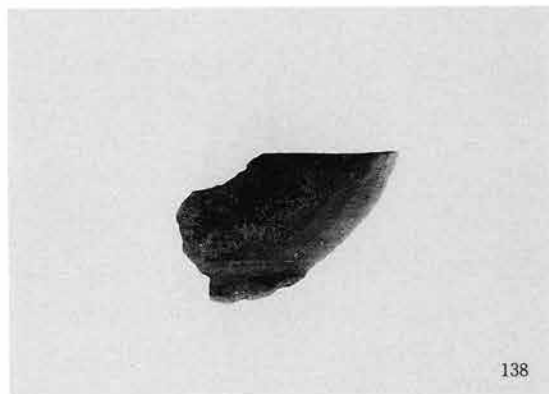
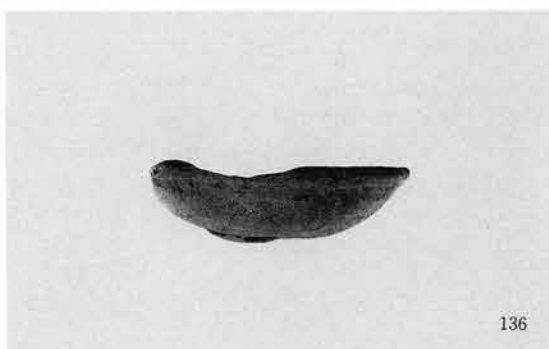
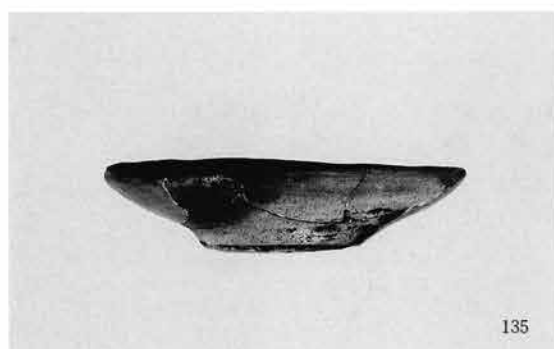


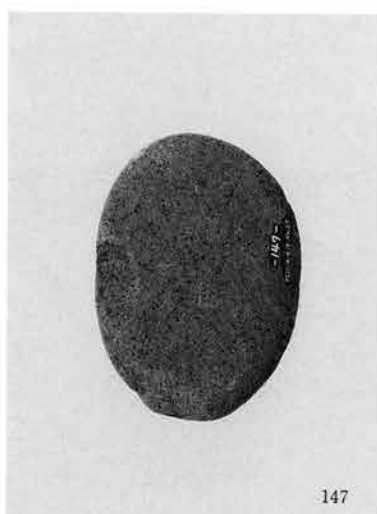
4区2号住居跡出土遺物





4区2号住居跡出土遺物

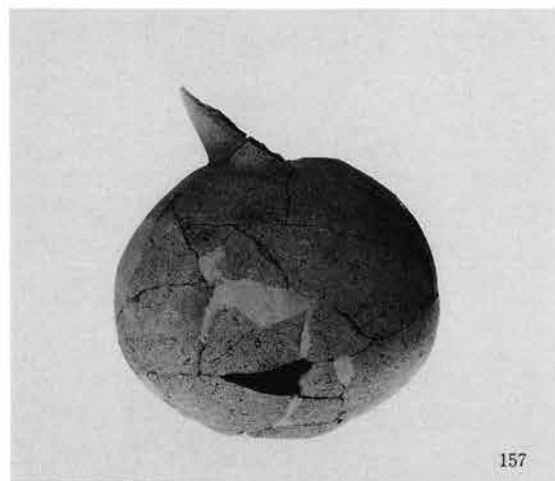
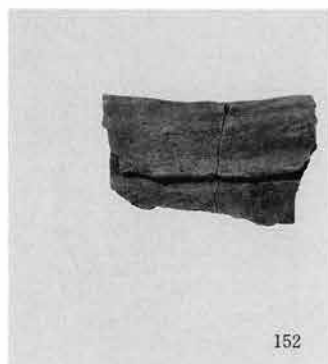




4区4号住居跡出土遺物



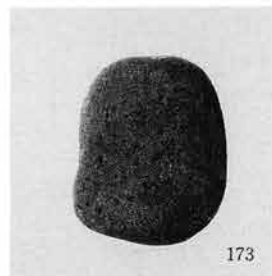
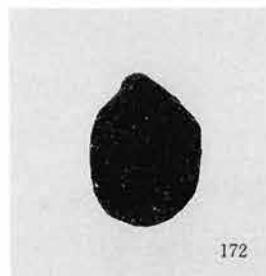
4区4号住居跡・6号住居跡出土遺物

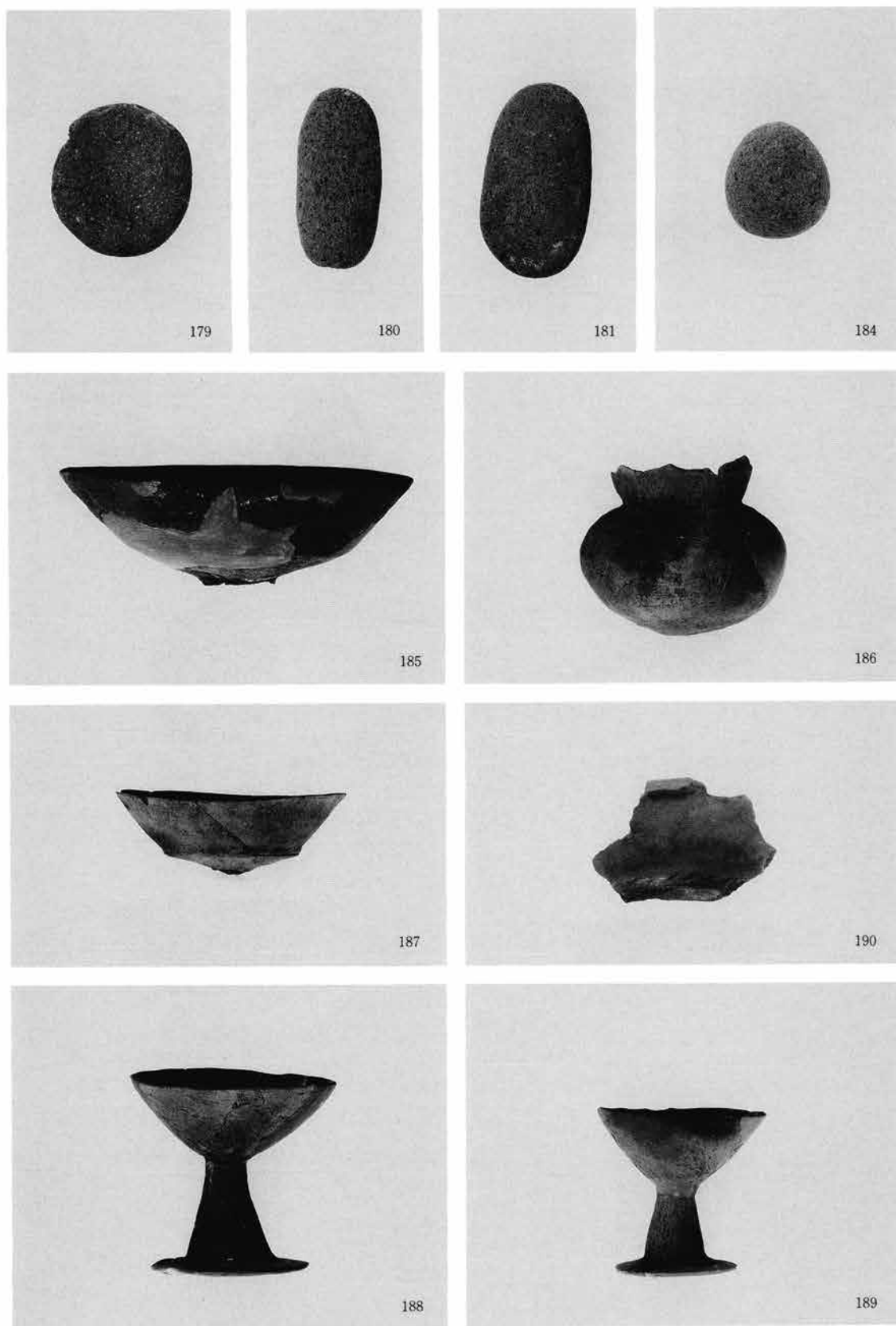


4区7号住居跡・8号住居跡・9号住居跡・10号住居跡出土遺物



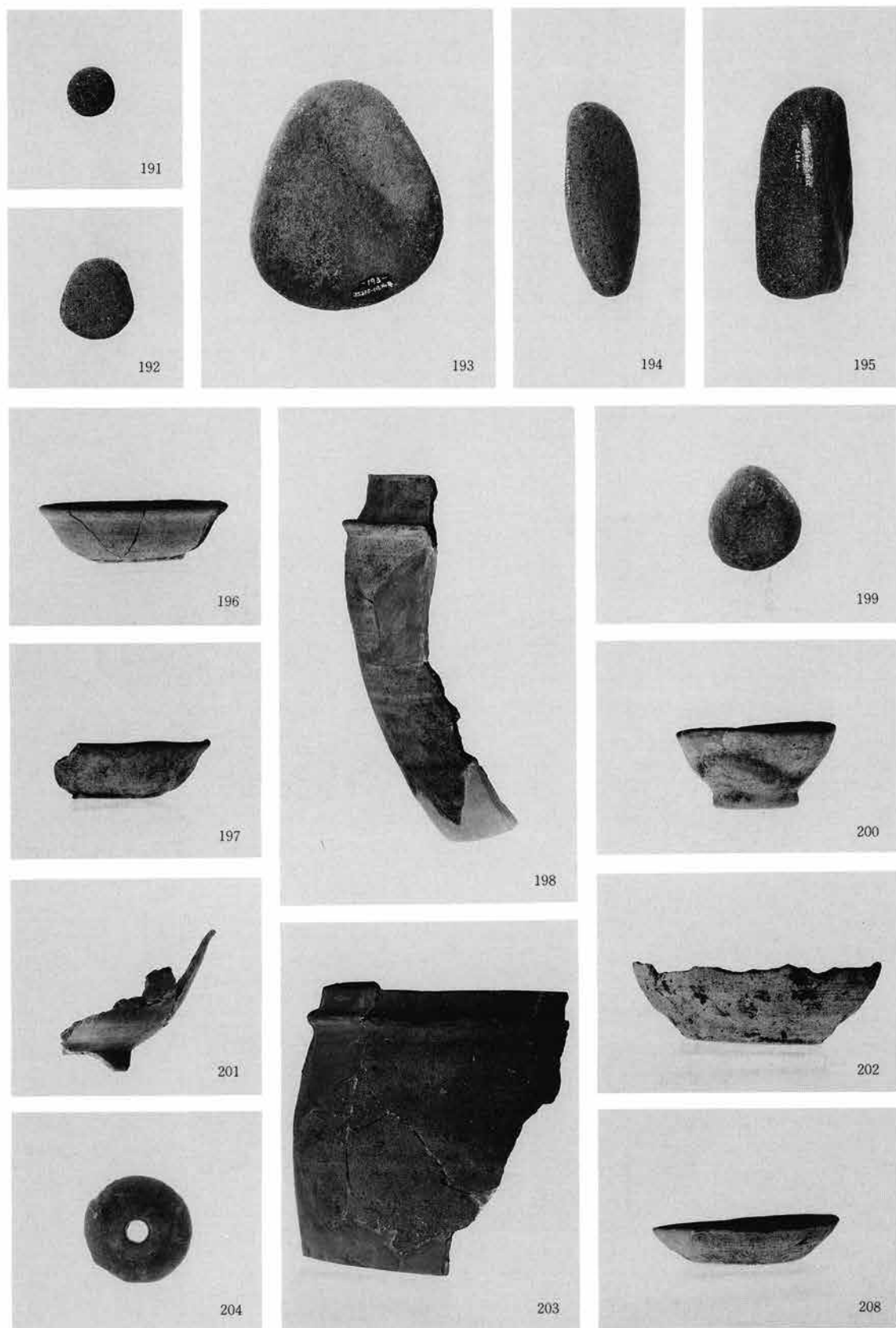
4区10号住居跡・11号住居跡出土遺物





4区12号住居跡・14号住居跡、5区1号住居跡出土遺物

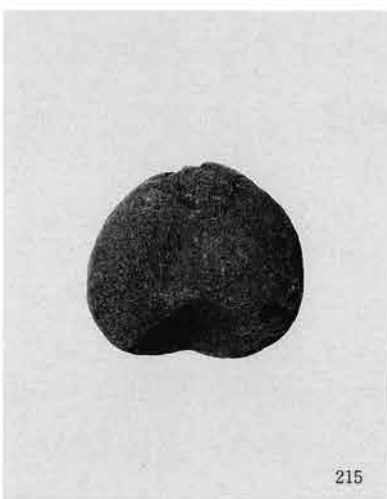




5区1号住居跡・2号住居跡・3号住居跡出土遺物



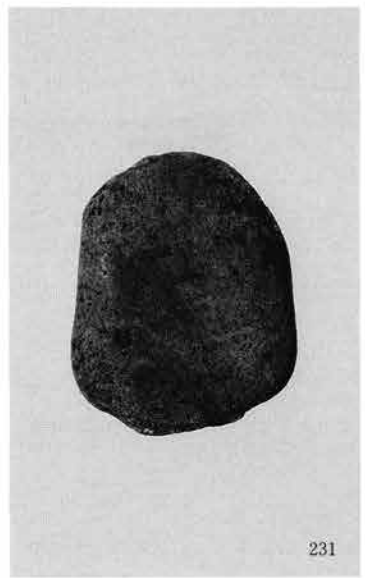
5区3号住居跡・4号住居跡出土遺物



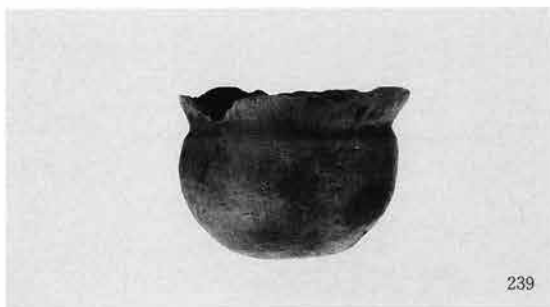
5区4号住居跡・5号住居跡出土遺物



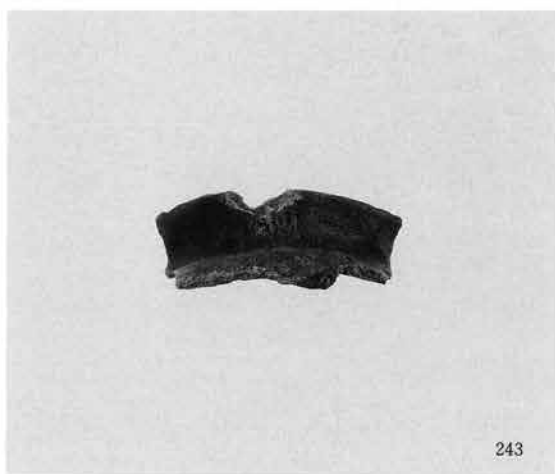
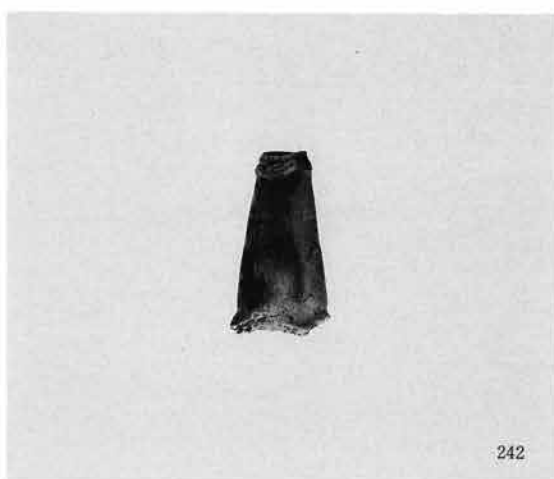
5区5号住居跡出土遺物



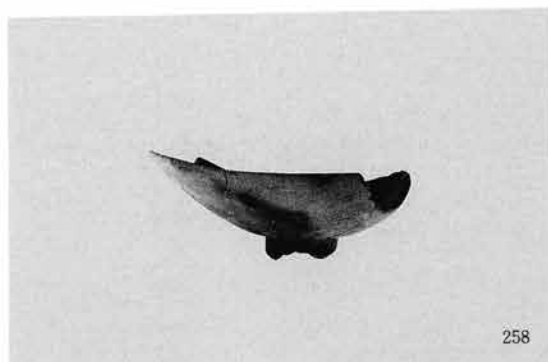
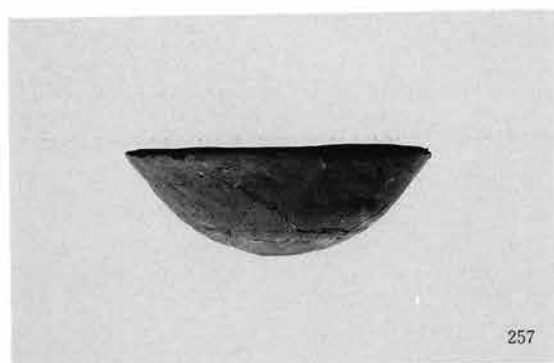
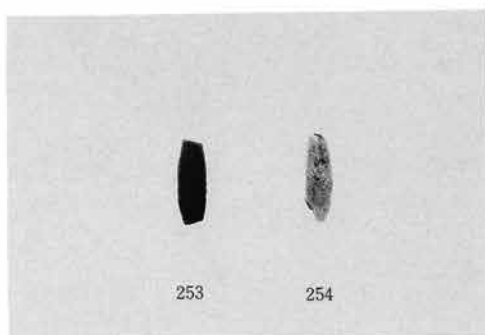
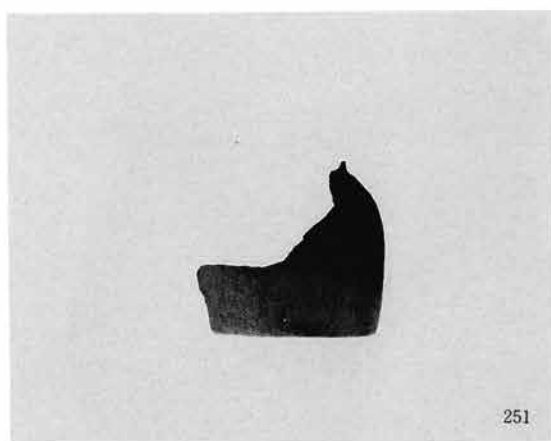
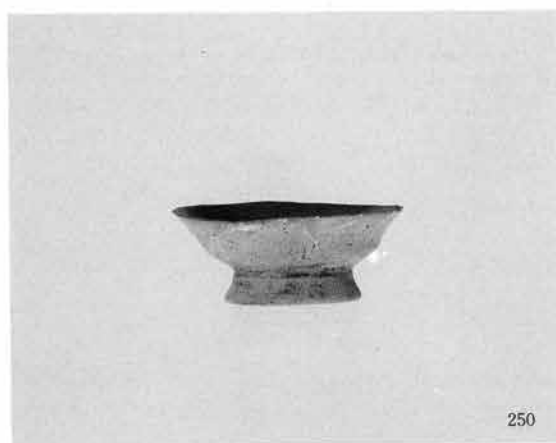
5区5号住居跡・6号住居跡出土遺物



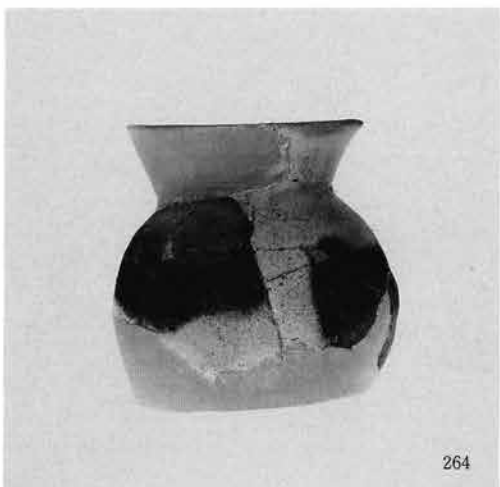
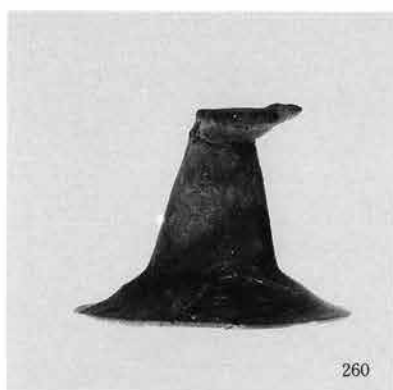
5区6号住居跡・7A号住居跡出土遺物



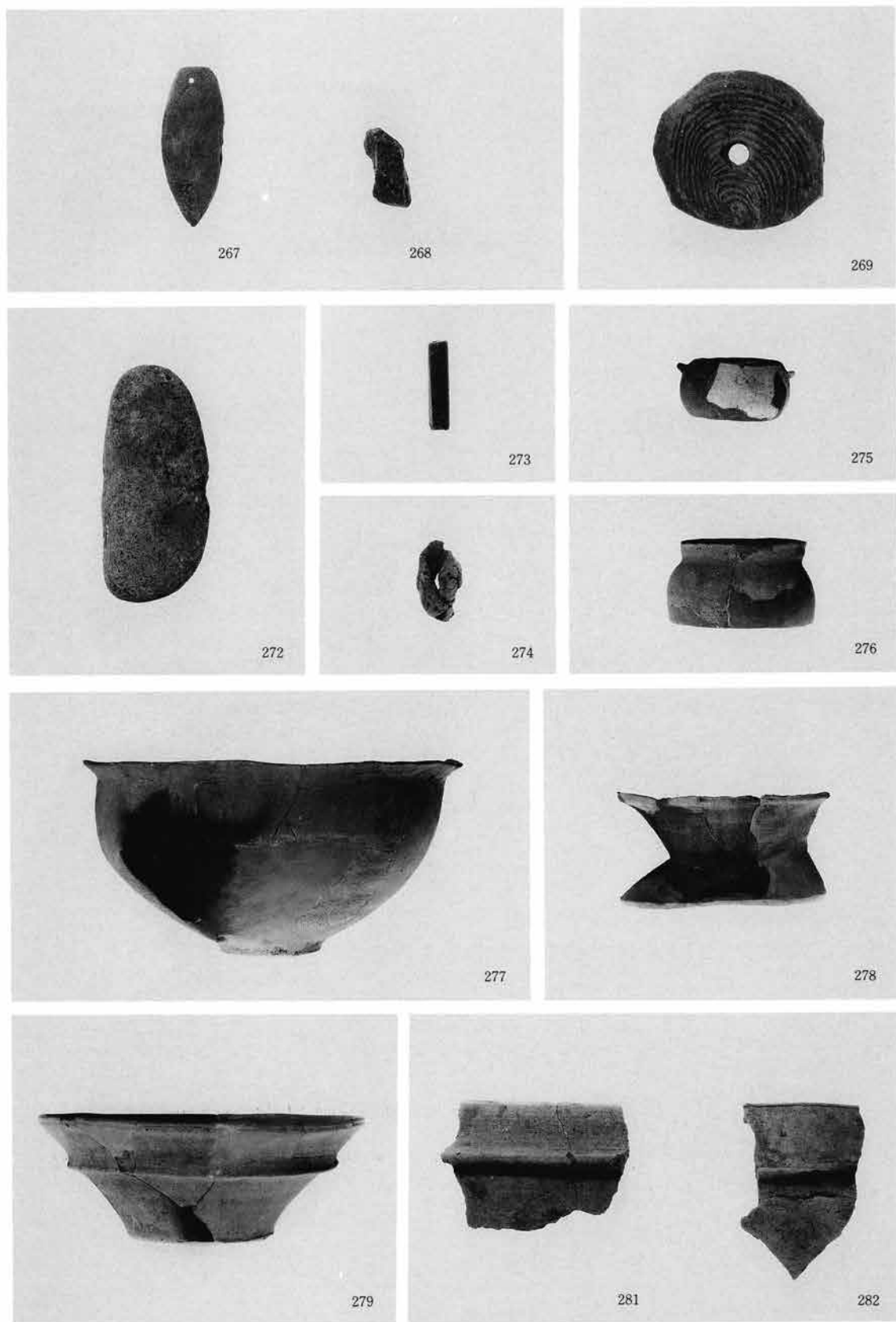
5区7A号住居跡・7B号住居跡・8号住居跡・9号住居跡・10号住居跡出土遺物







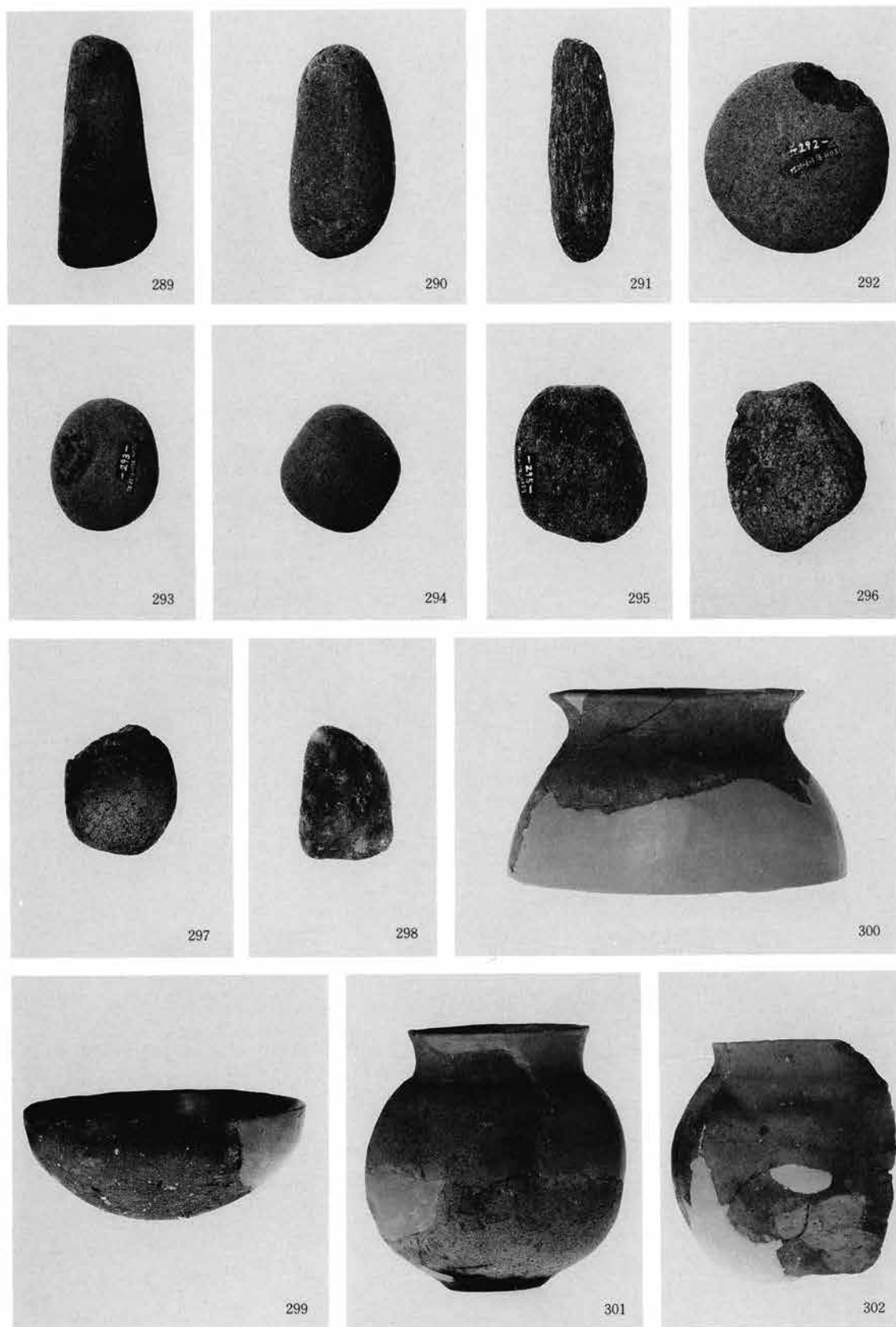
5区11号住居跡出土遺物



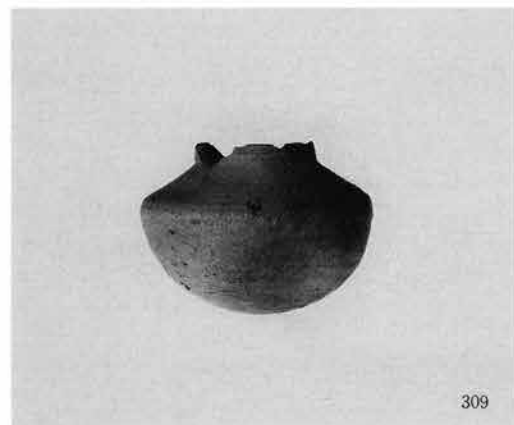
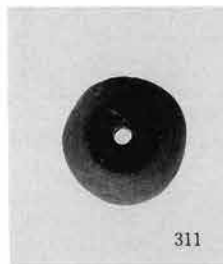
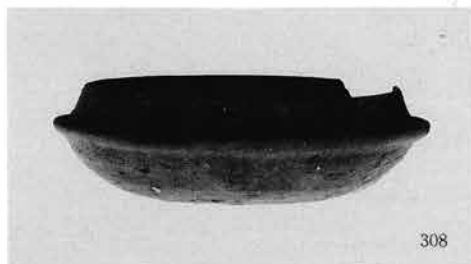
5区11号住居跡・14号住居跡・15号住居跡・17号住居跡出土遺物



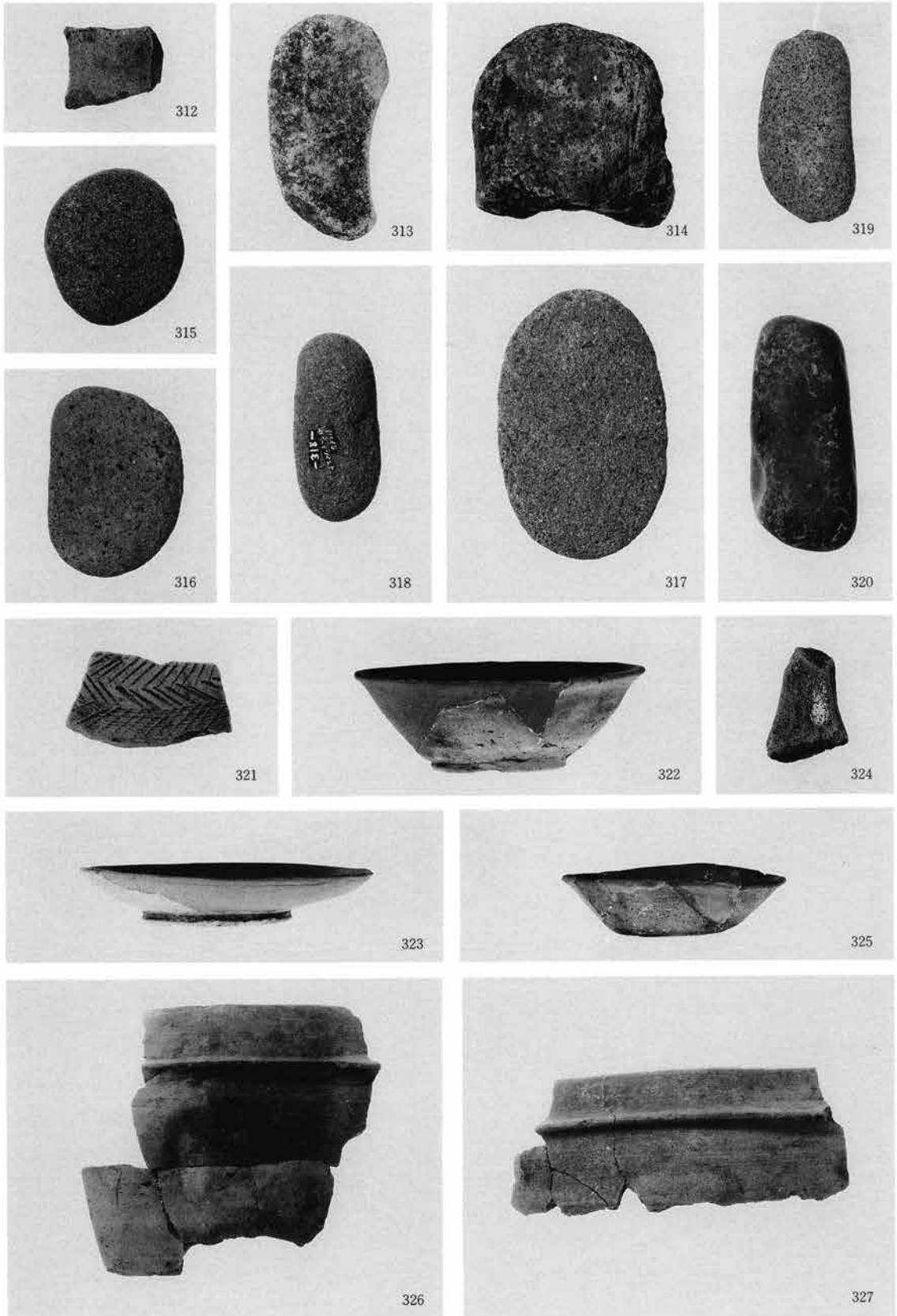
6区1号住居跡出土遺物



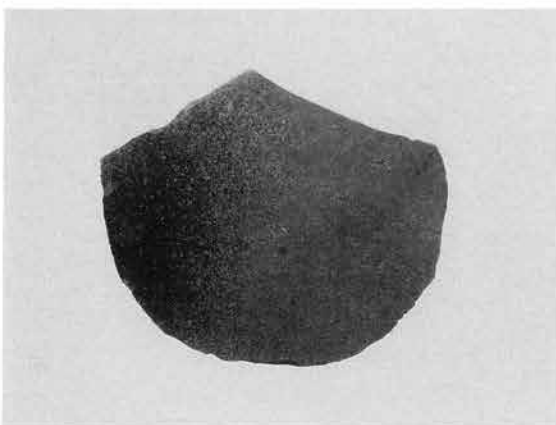
6区1号住居跡・2号住居跡出土遺物



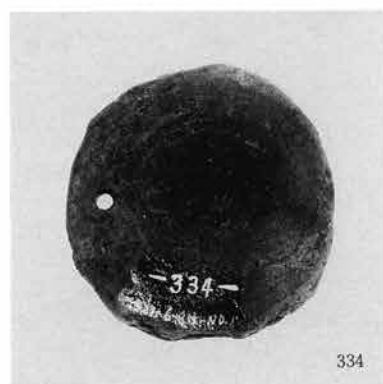
6区2号住居跡・3号住居跡出土遺物



6区3号住居跡・4号住居跡・5号住居跡・6号住居跡出土遺物

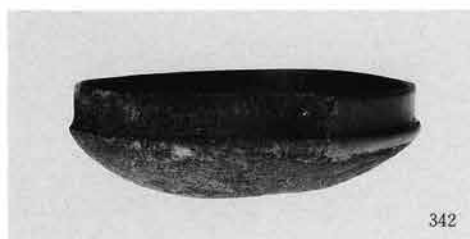


6区6号住居跡・7号住居跡・8号住居跡出土遺物

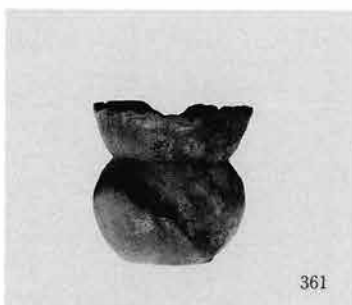
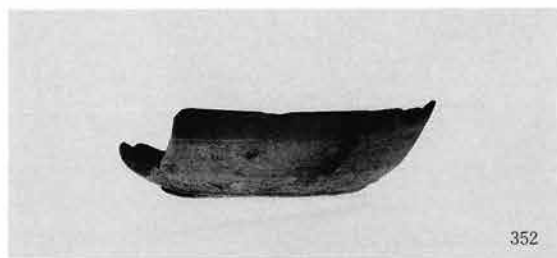
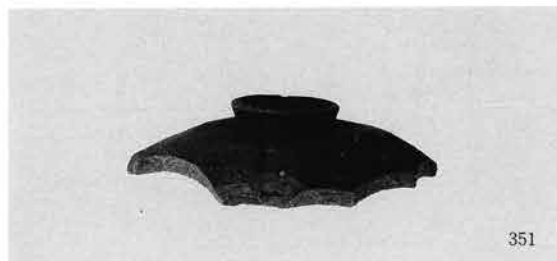
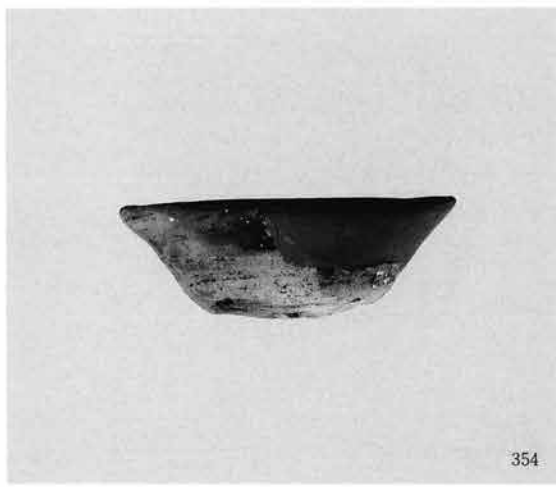


6区8号住居跡・9号住居跡・11号住居跡出土遺物





6区12号住居跡・13号住居跡出土遺物



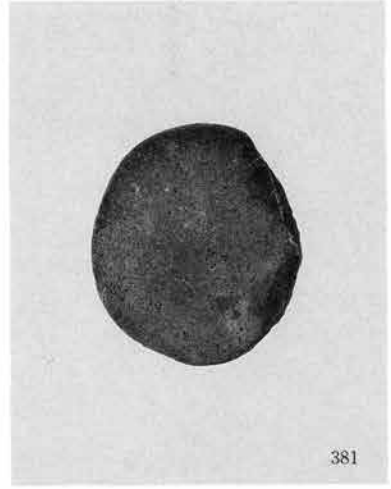
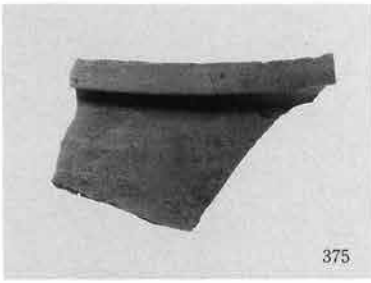
6区14号住居跡・16号住居跡・17号住居跡、7区1号住居跡出土遺物



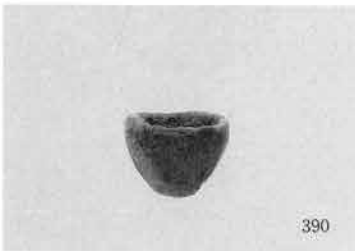
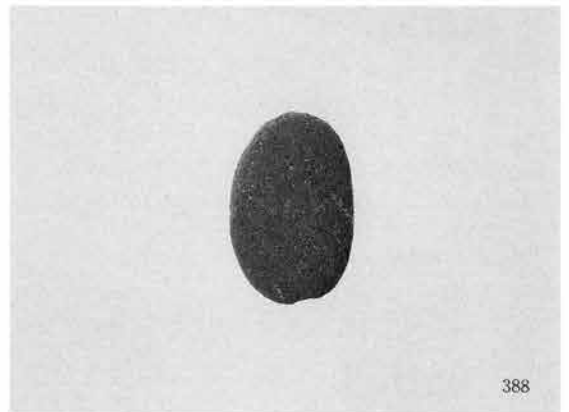
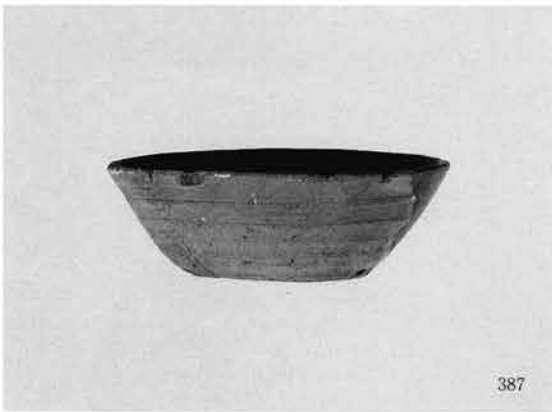
7区1号住居跡出土遺物



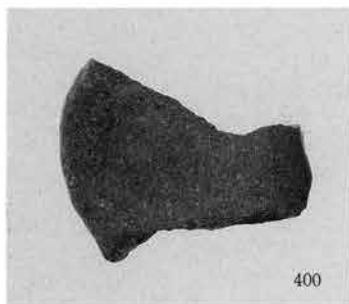
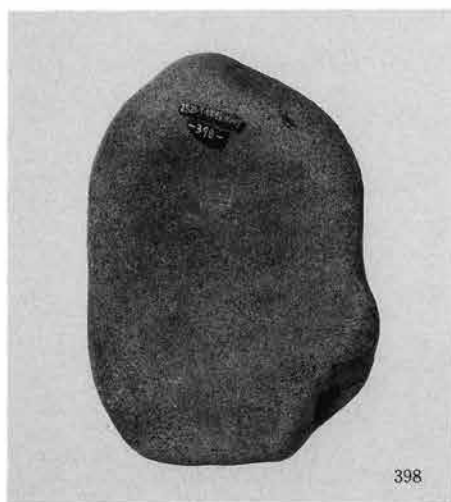
7区1号住居跡・2号住居跡・3号住居跡出土遺物



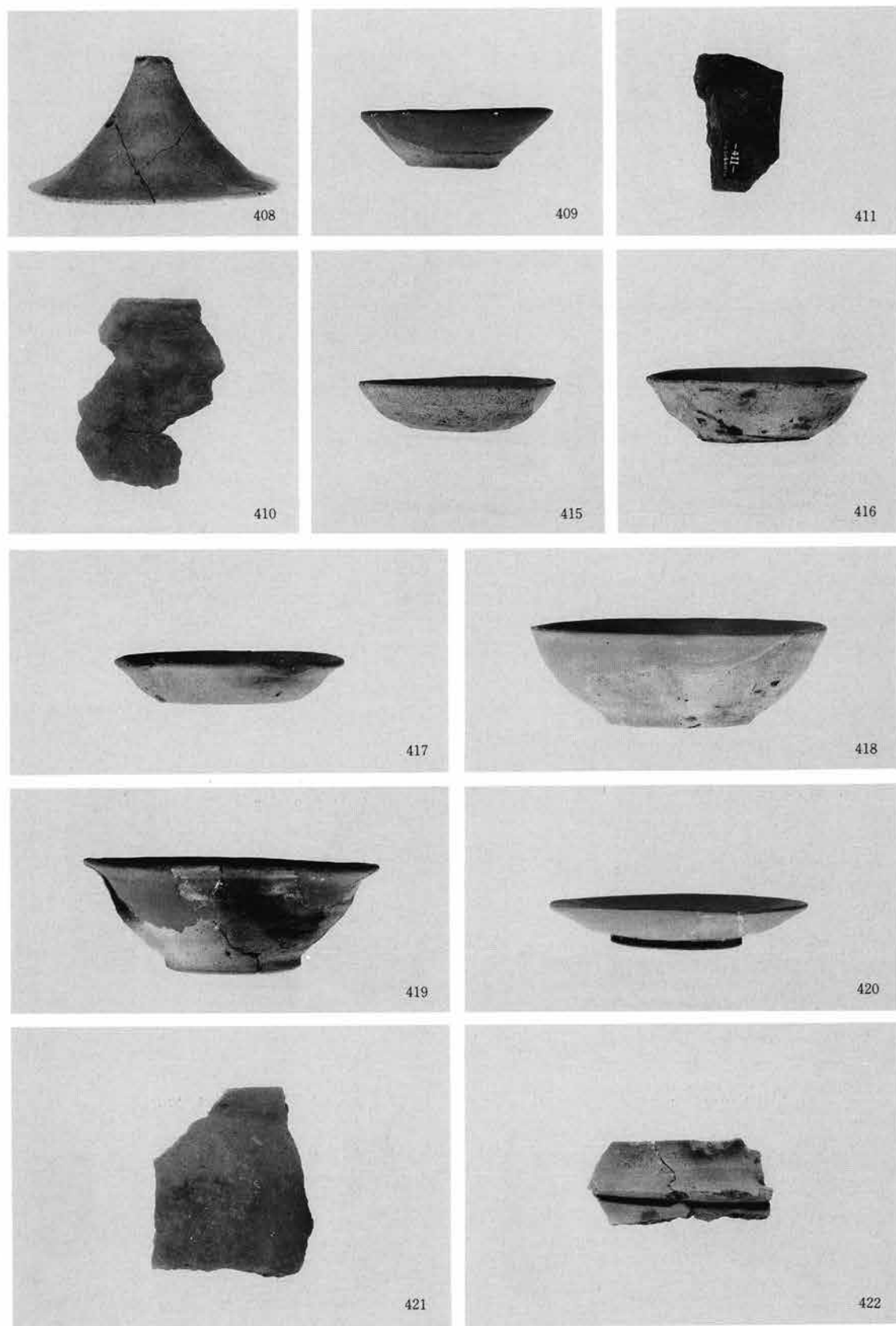
7区3号住居跡・4A号住居跡出土遺物



7区5A号住居跡・5B号住居跡出土遺物



7区5B号住居跡出土遺物

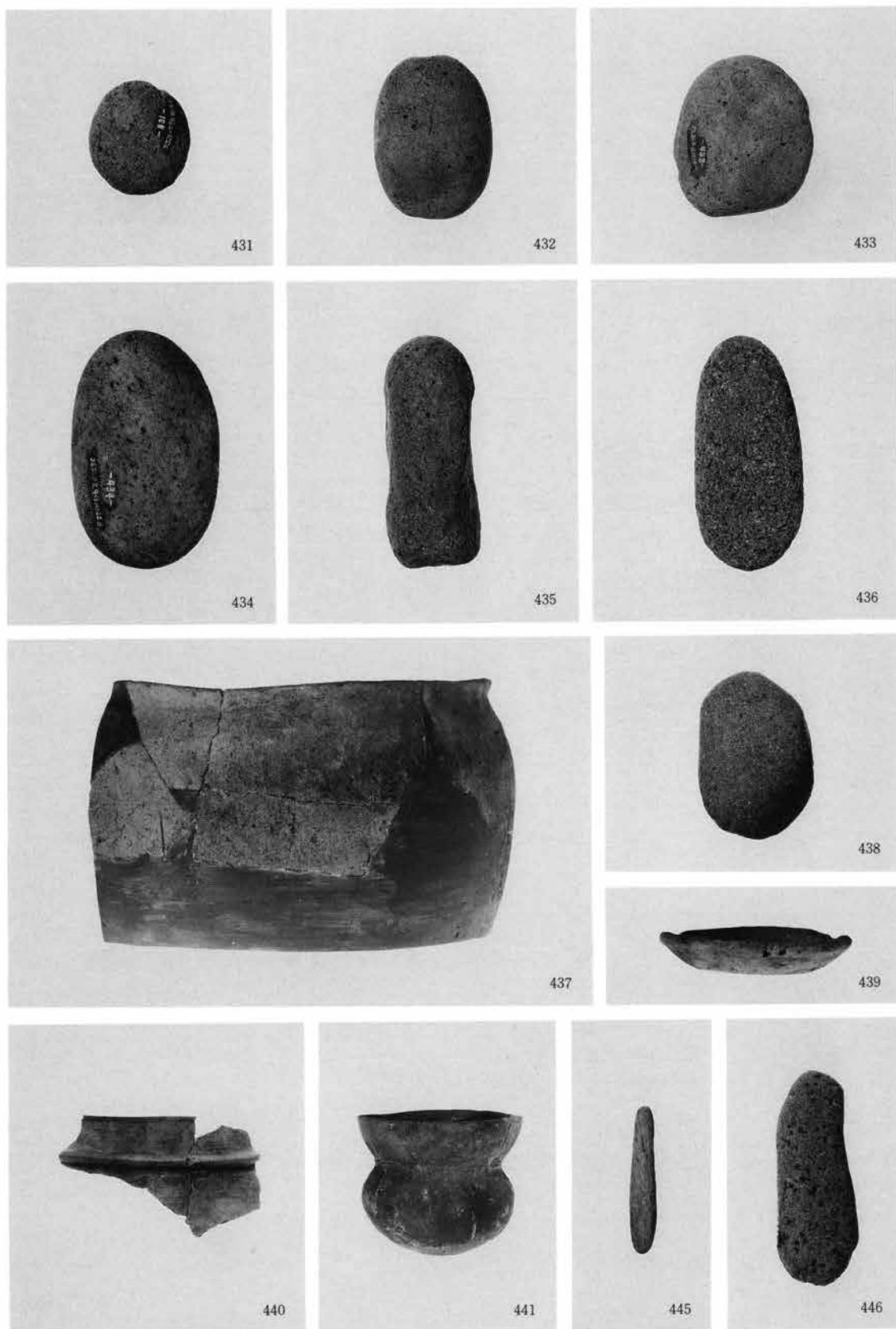


7区5B号住居跡・6号住居跡・7B号住居跡出土遺物

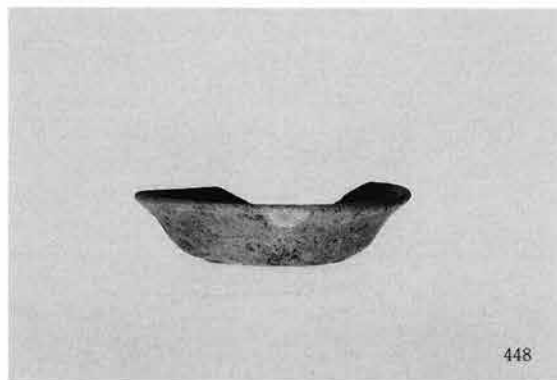
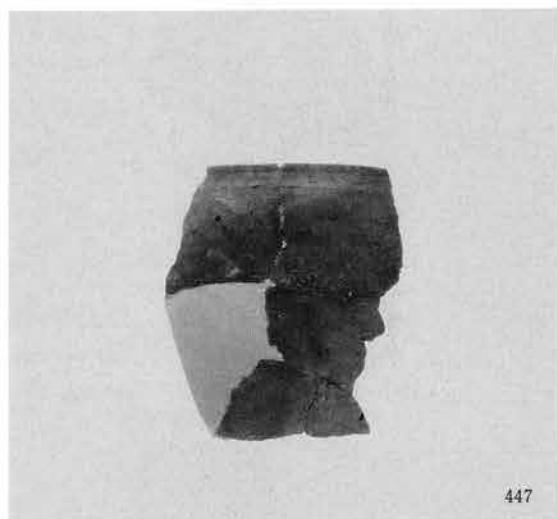




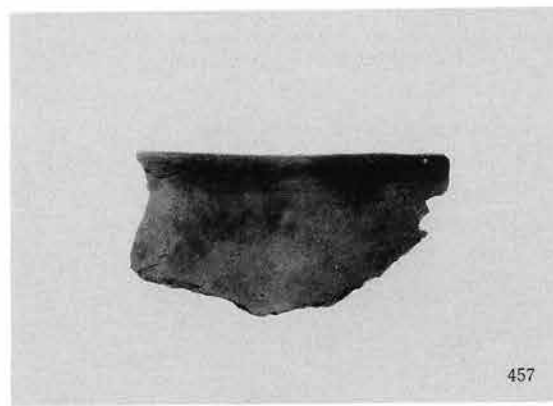
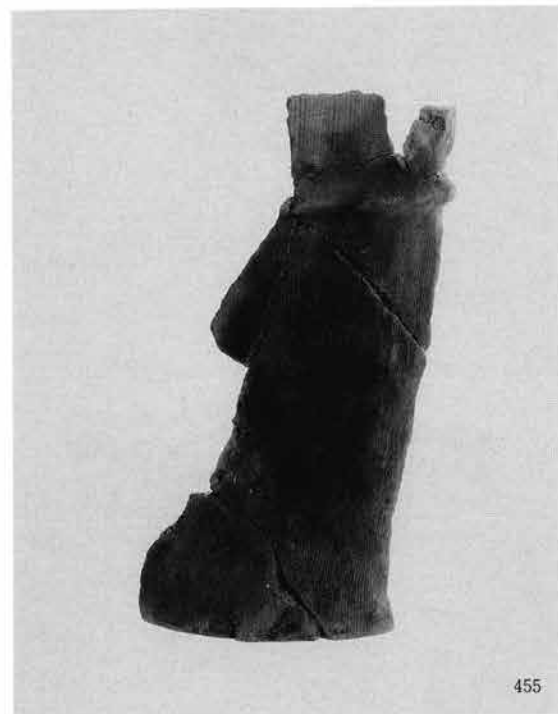
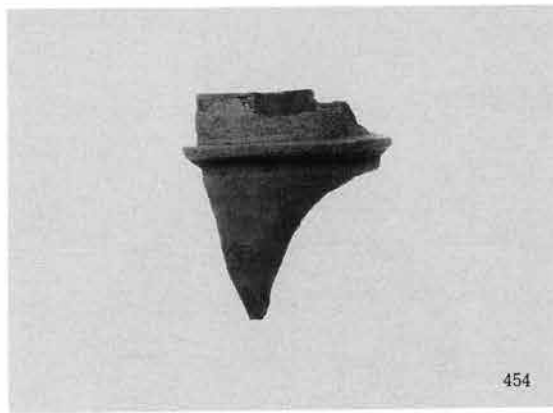
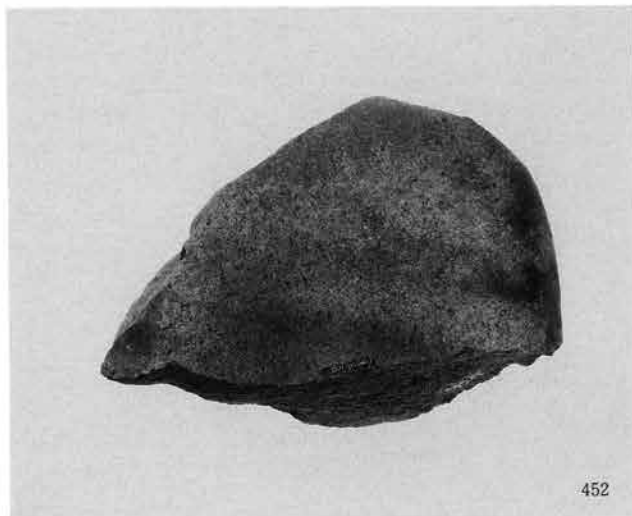
7区9号住居跡出土遺物



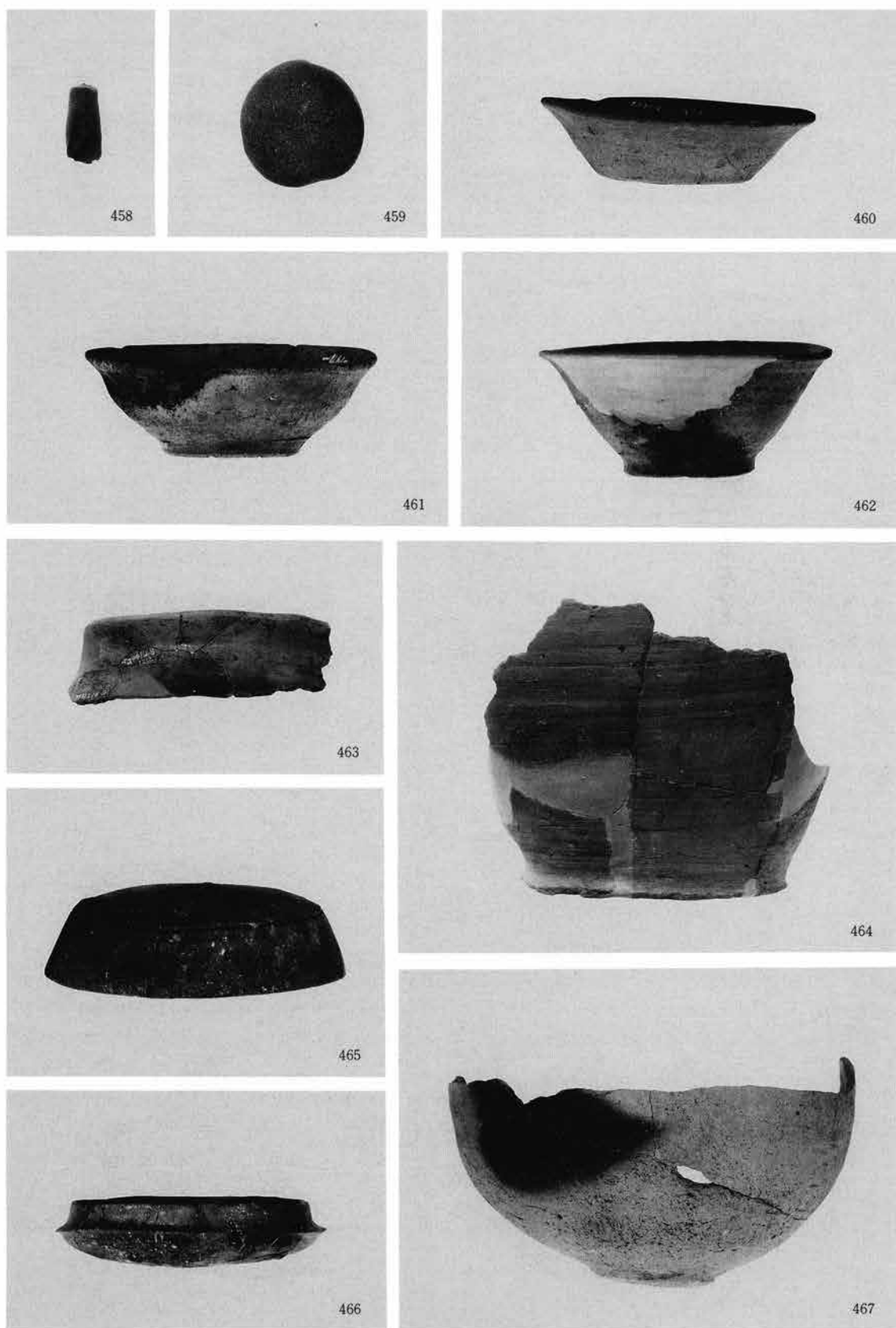
7区9号住居跡・10号住居跡・11号住居跡・12号住居跡・13号住居跡出土遺物



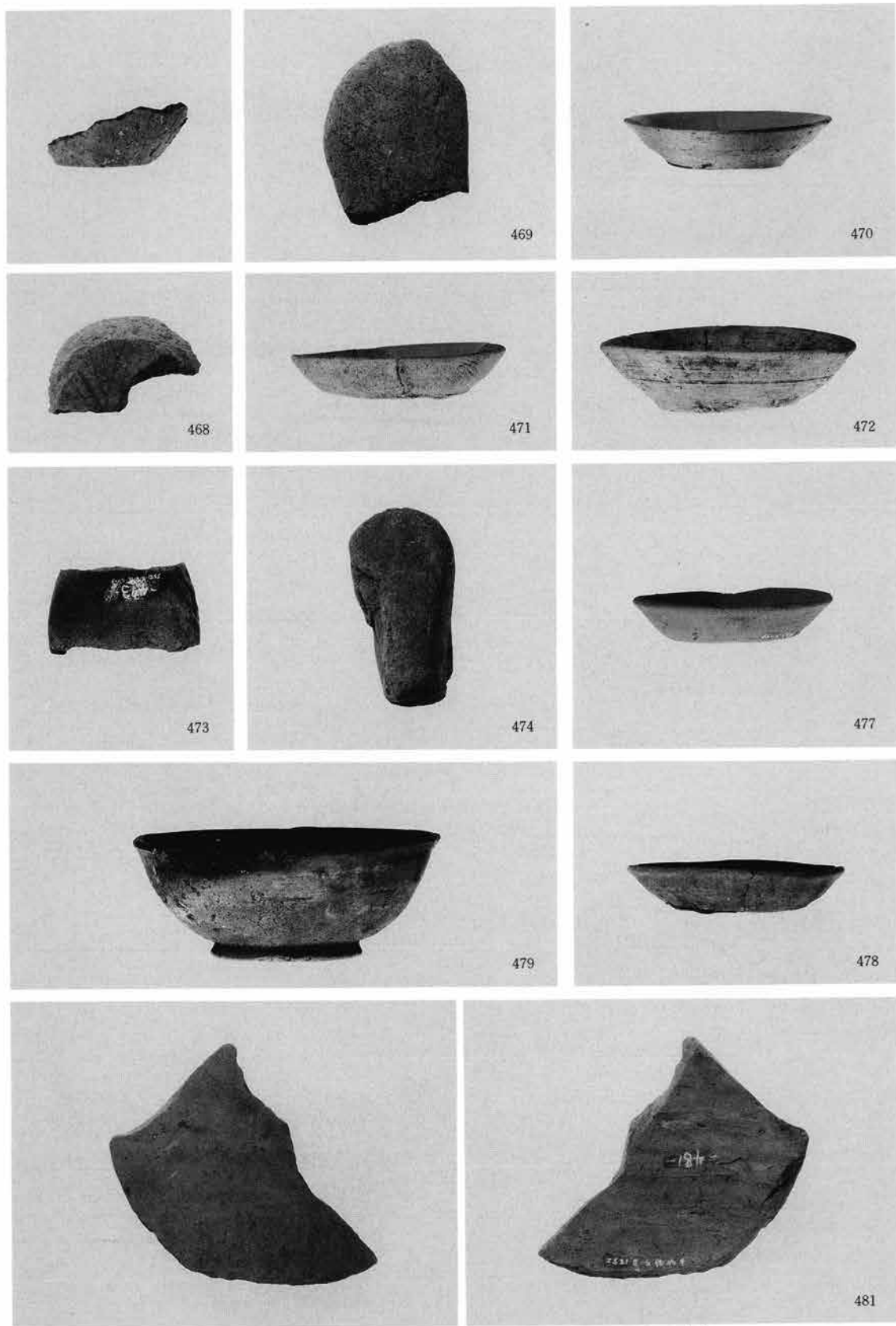
7区13号住居跡・14号住居跡・15号住居跡出土遺物



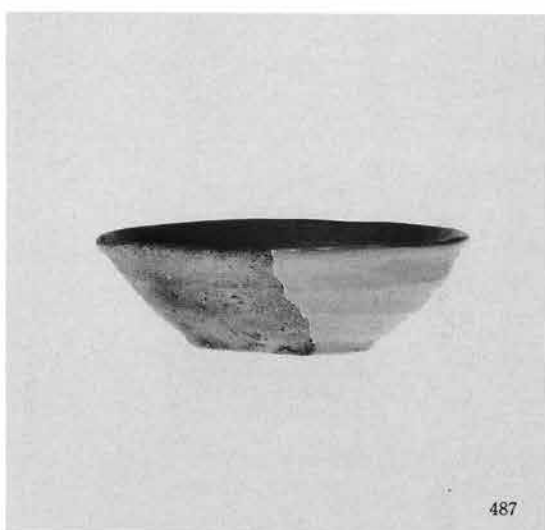
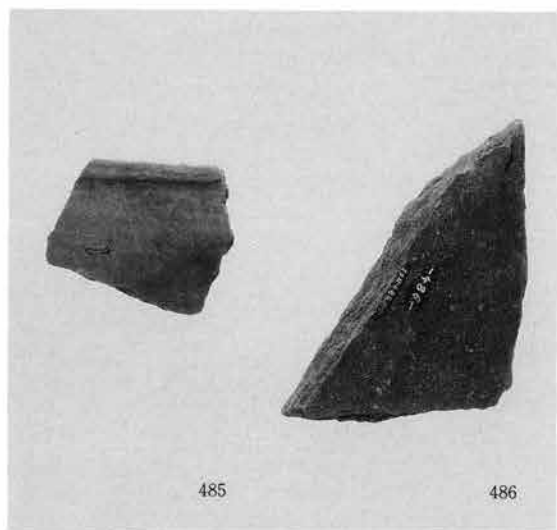
7区16号住居跡・17号住居跡・18号住居跡、8区1号住居跡出土遺物



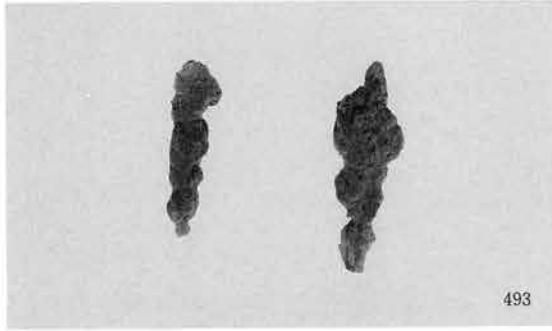
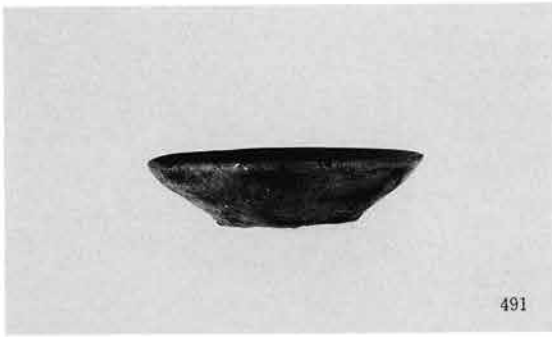
8区1号住居跡・2号住居跡・3号住居跡出土遺物



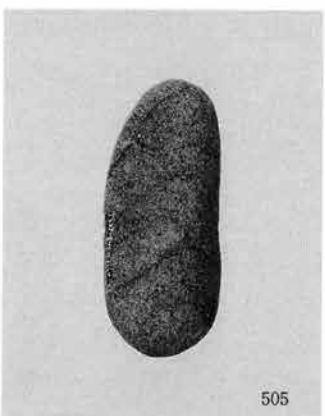
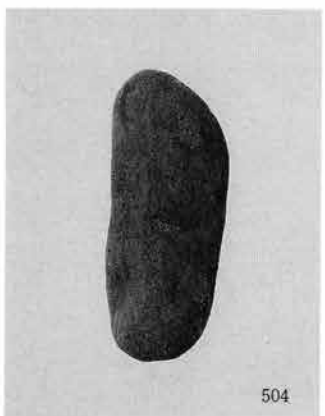
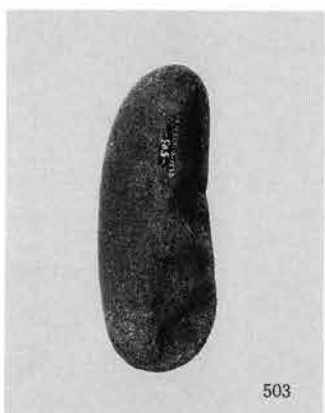
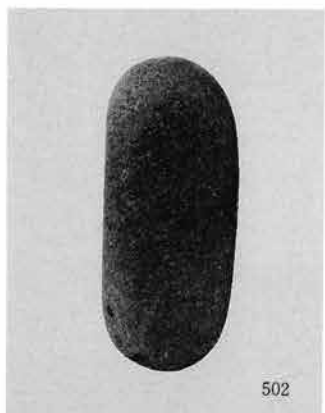
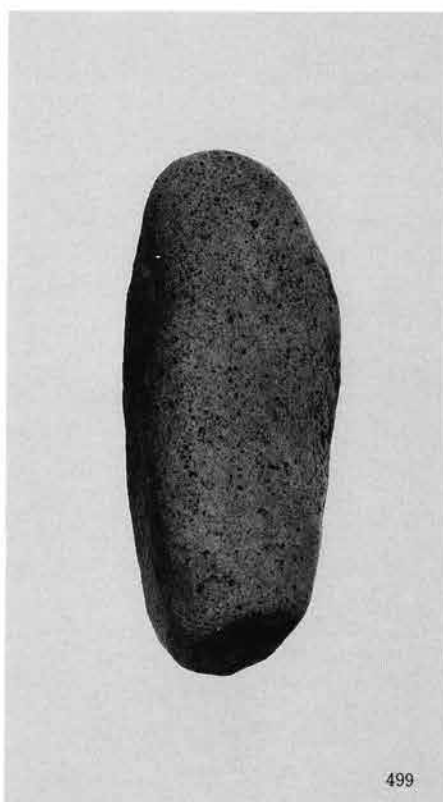
8区3号住居跡・4号住居跡・5号住居跡・6号住居跡出土遺物



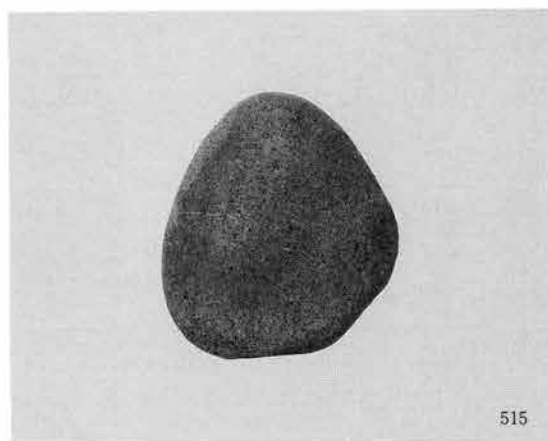
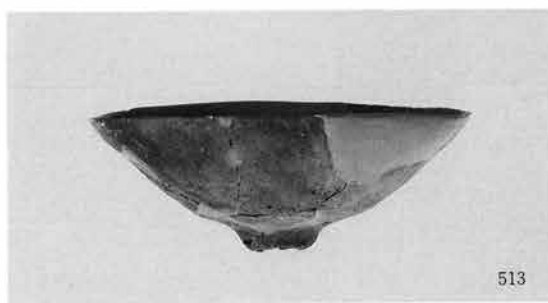
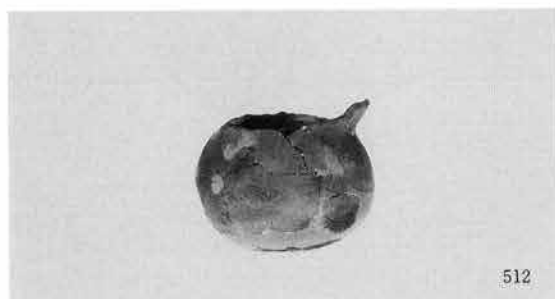
8区6号住居跡・7号住居跡・11号住居跡・12号住居跡出土遺物



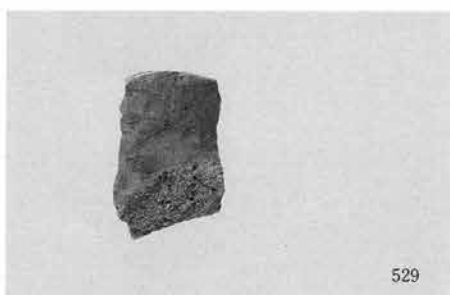
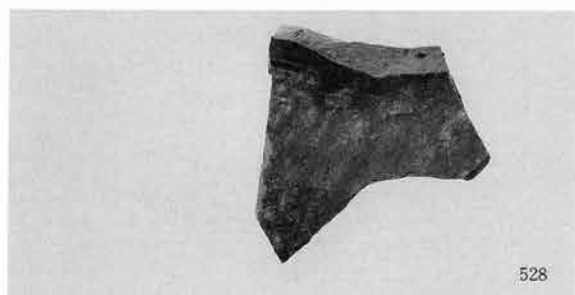
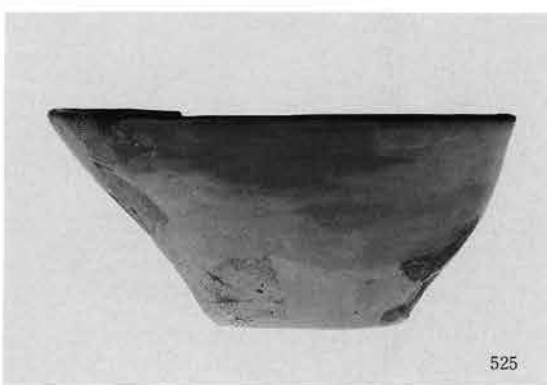
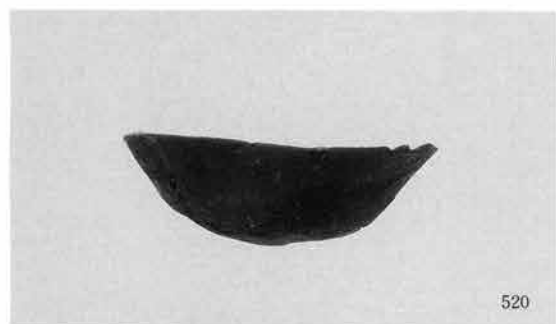




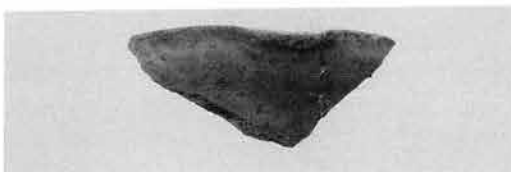
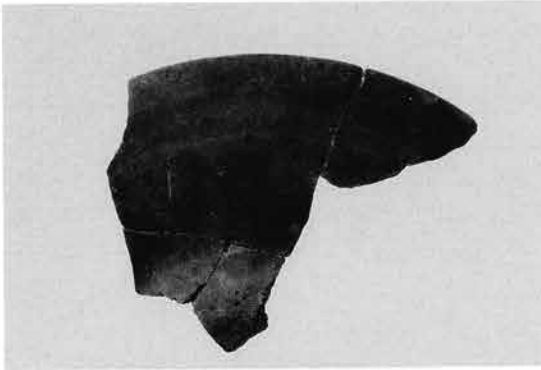
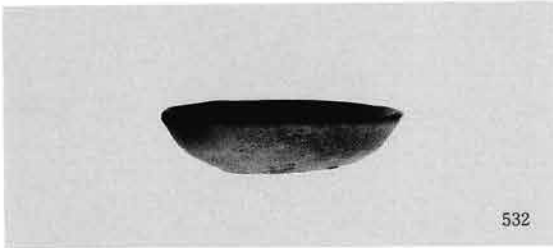
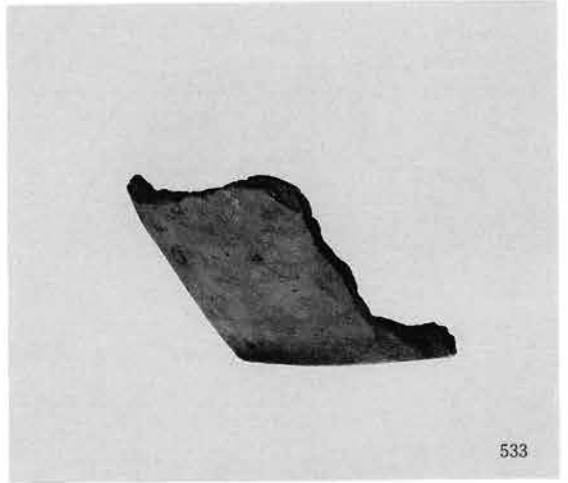
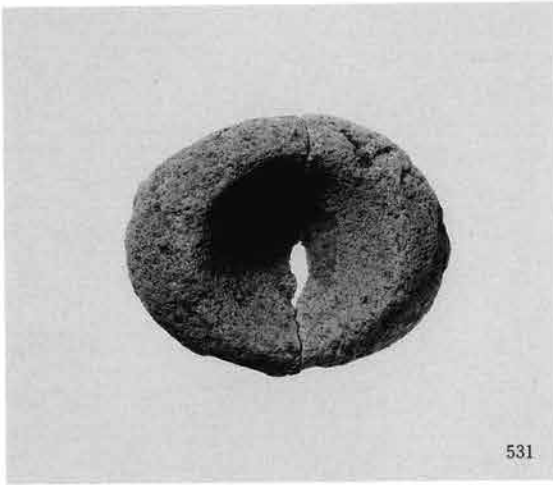
8区15号住居跡・16号住居跡出土遺物



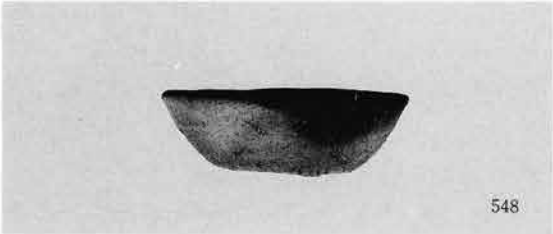
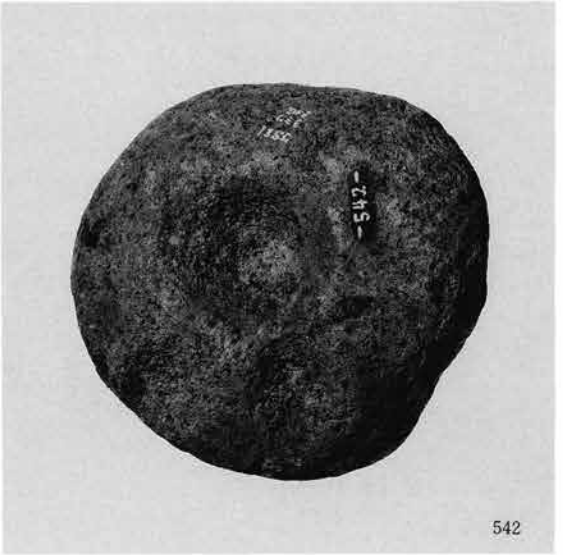
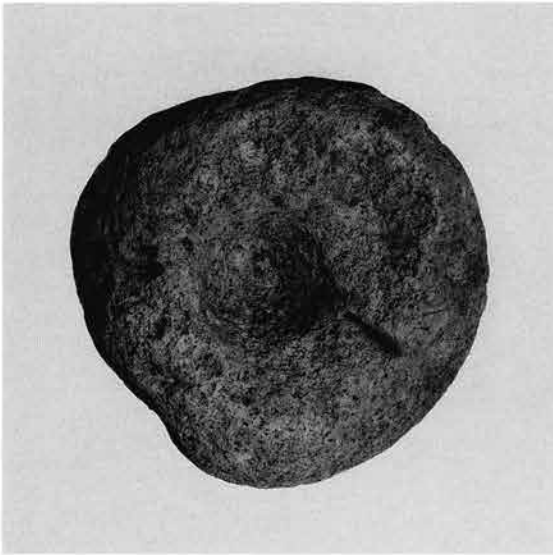
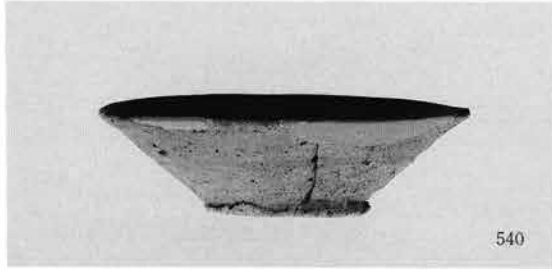
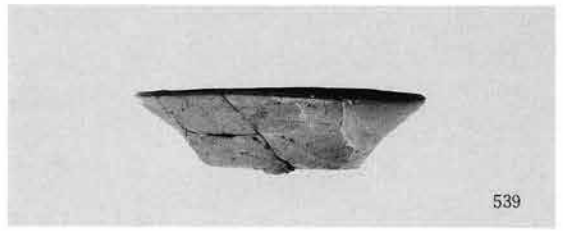
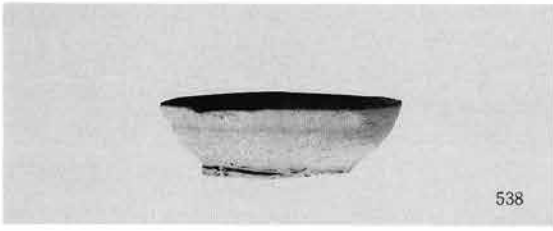
8区16号住居跡・17号住居跡、9区1号住居跡出土遺物



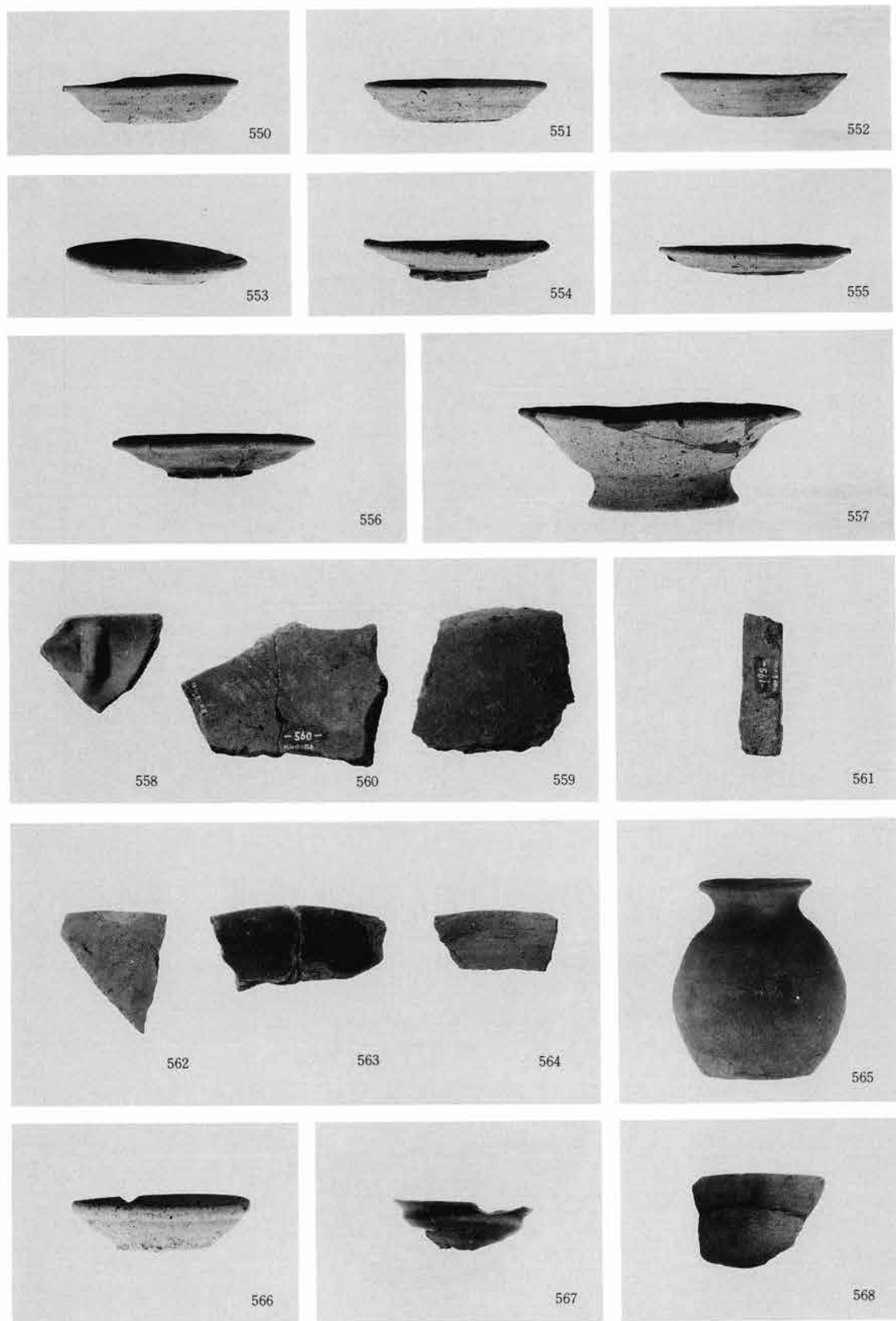
9区1号住居跡・2号住居跡・4号住居跡、1区3号溝跡出土遺物



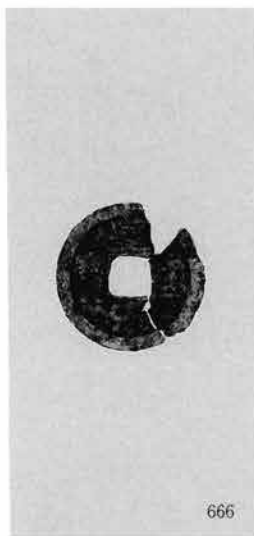
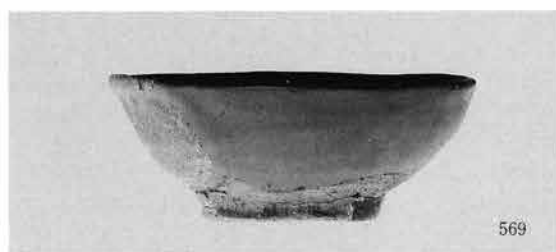
1区1号井戸跡・2号土坑、2区1号溝跡、3区1号溝跡出土遺物



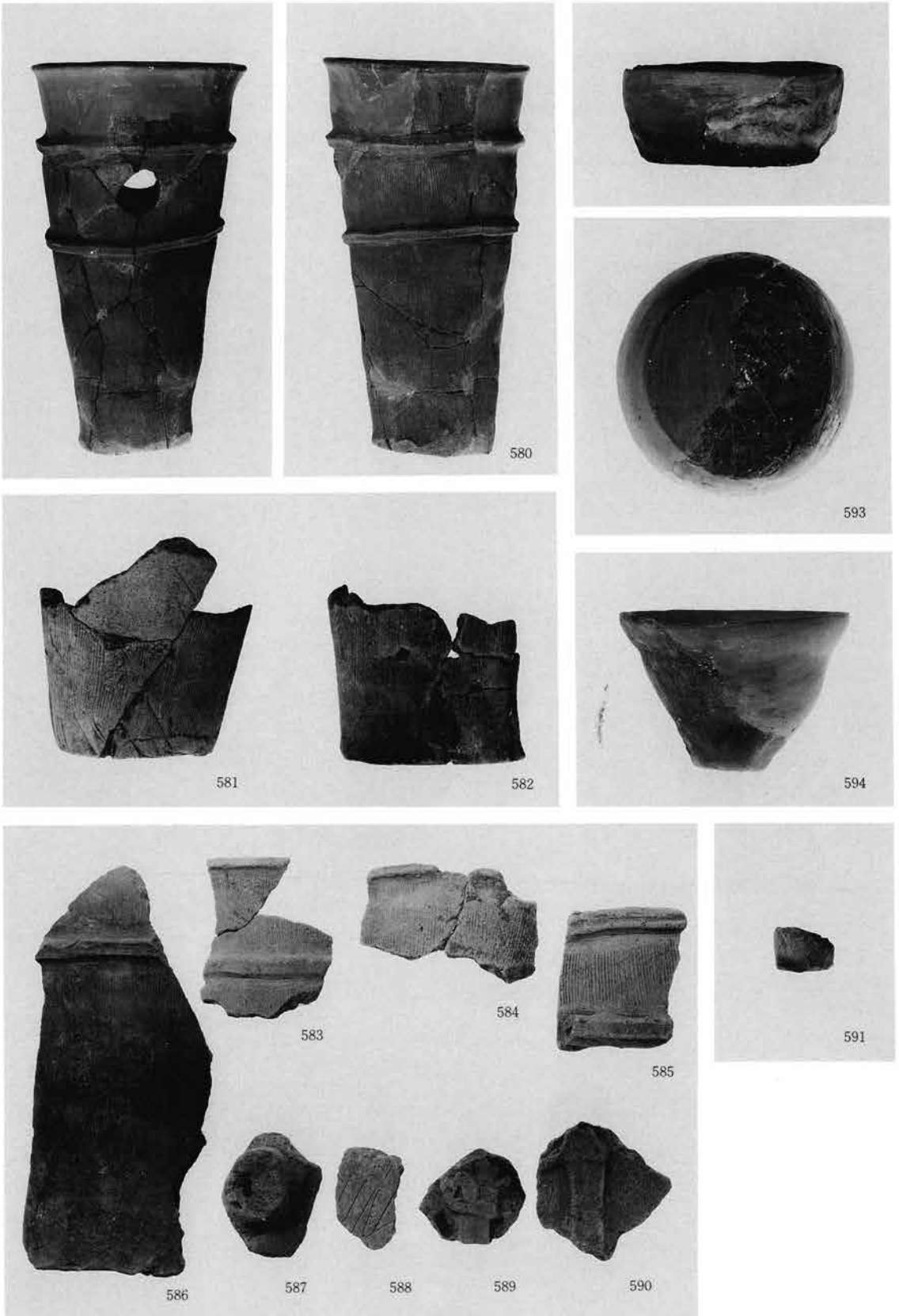
3区1号沟跡・3号沟跡・4号土坑・6号土坑・7号土坑出土遺物



3区1号土坑·4号土坑、4区1号沟迹·1号土坑·7号土坑·8号土坑出土遗物

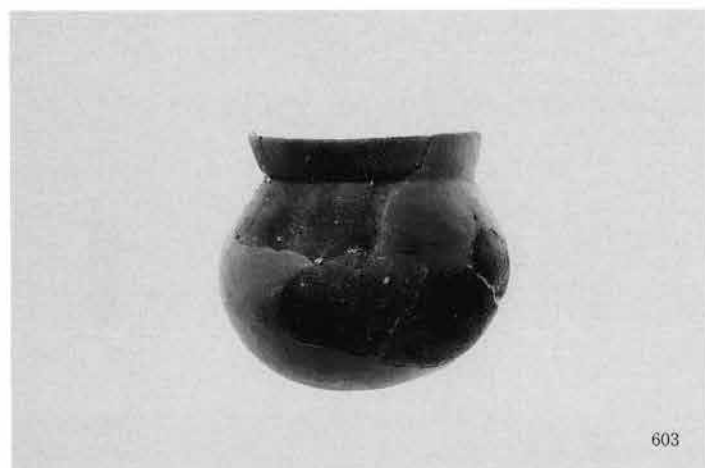
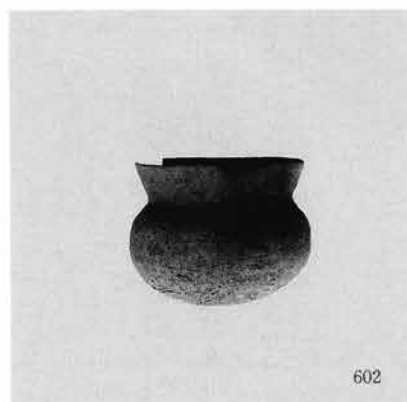
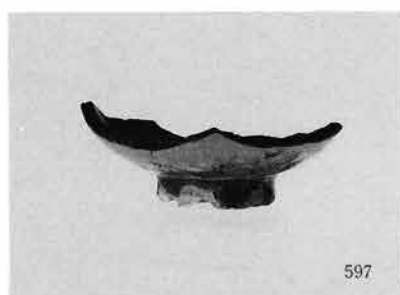
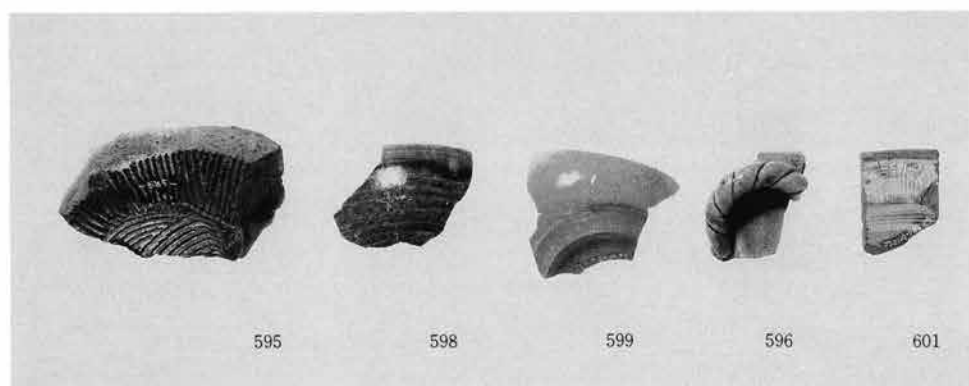


5区1号土坑、6区3号沟迹·10号土坑、7区3号土坑、8区5号土坑·11号土坑出土遗物

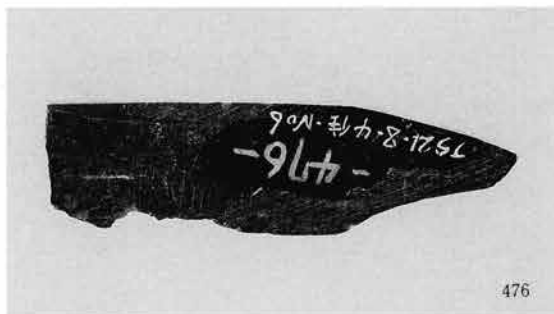
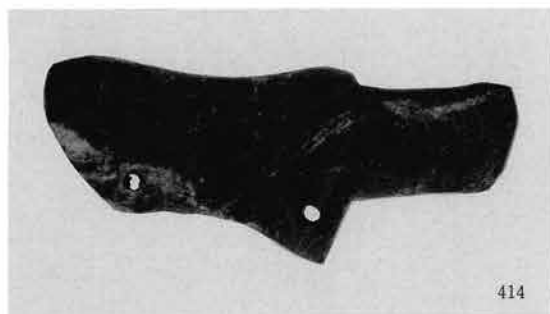
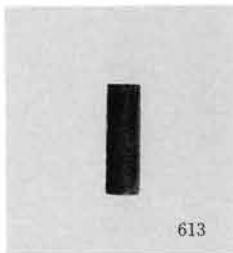


9区1号古墳出土遺物

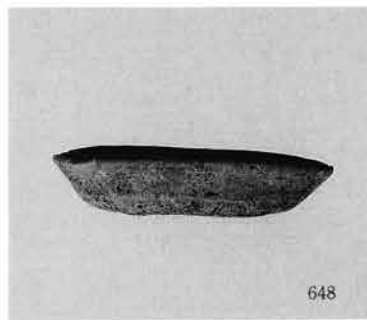
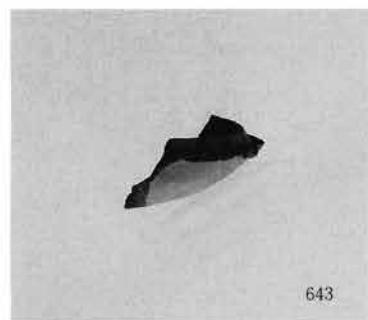
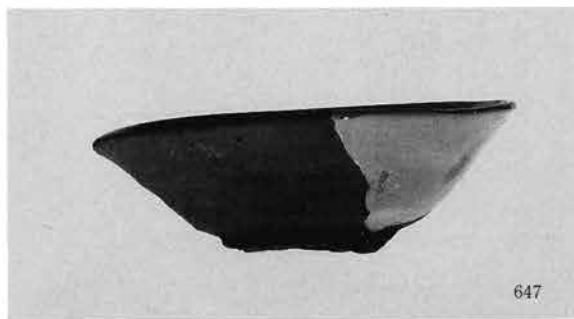
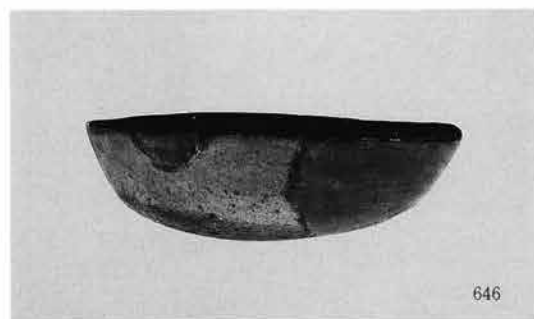
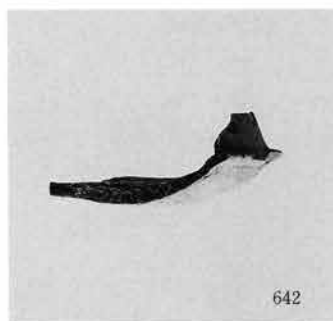
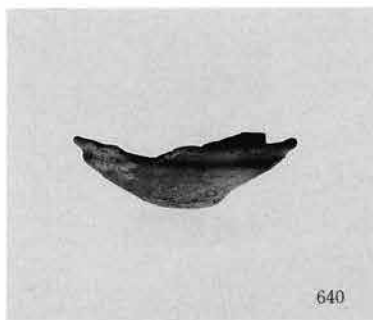
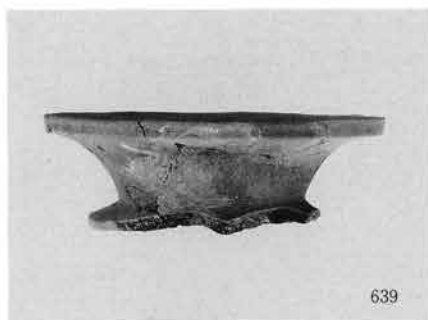
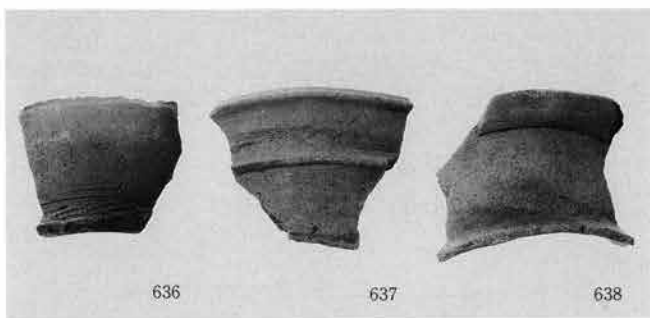
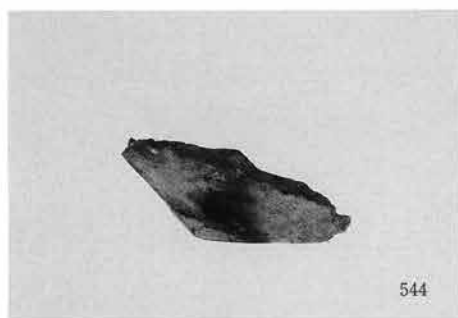




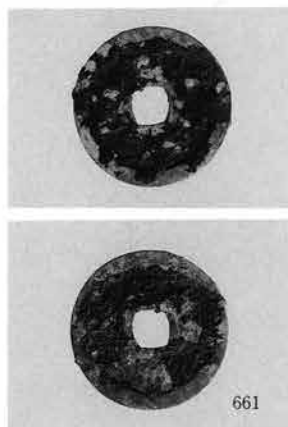
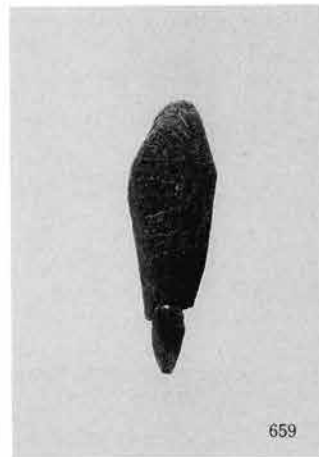
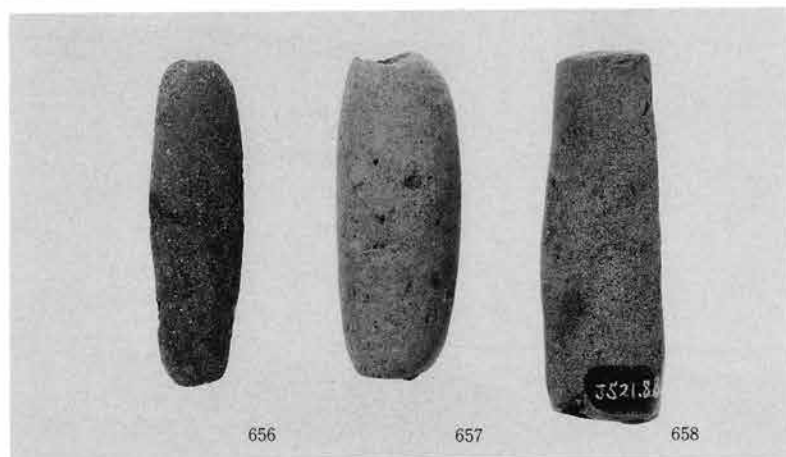
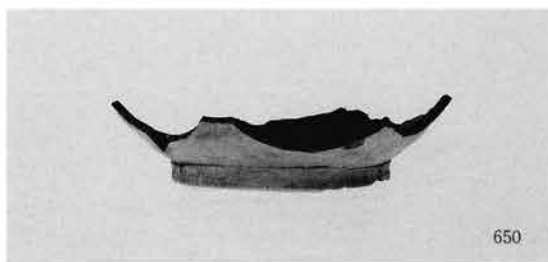
9区1号土坑·2号土坑·5号土坑·6号土坑·10号土坑·11号土坑出土遺物



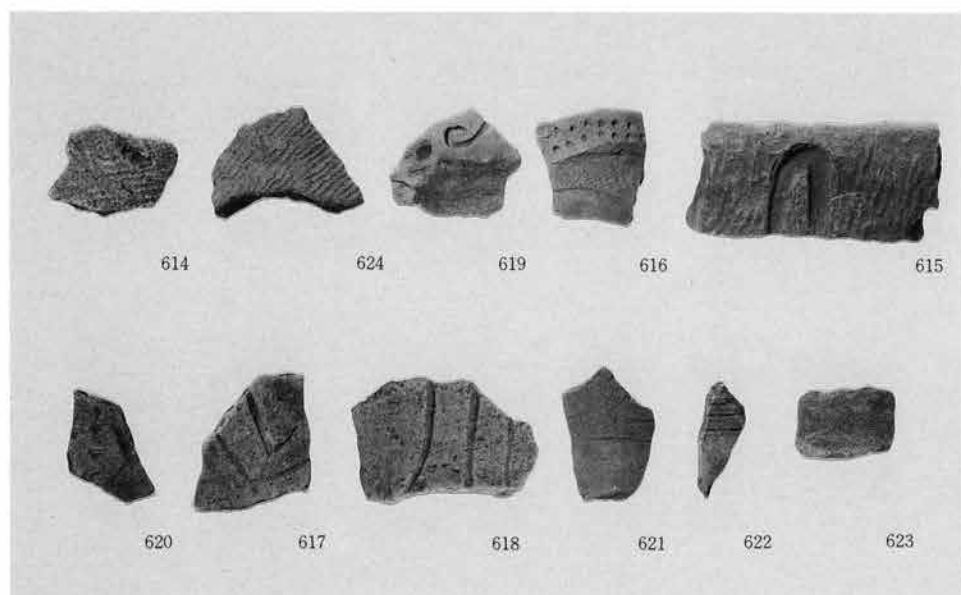
9区11号土坑・表土出土遺物



表土出土遺物



表土出土遺物



財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
発掘調査報告第92集

## 舟橋遺跡

一上越新幹線関係埋蔵文化財  
発掘調査報告書 第12集一

平成元年9月25日 印刷

平成元年9月30日 発行

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

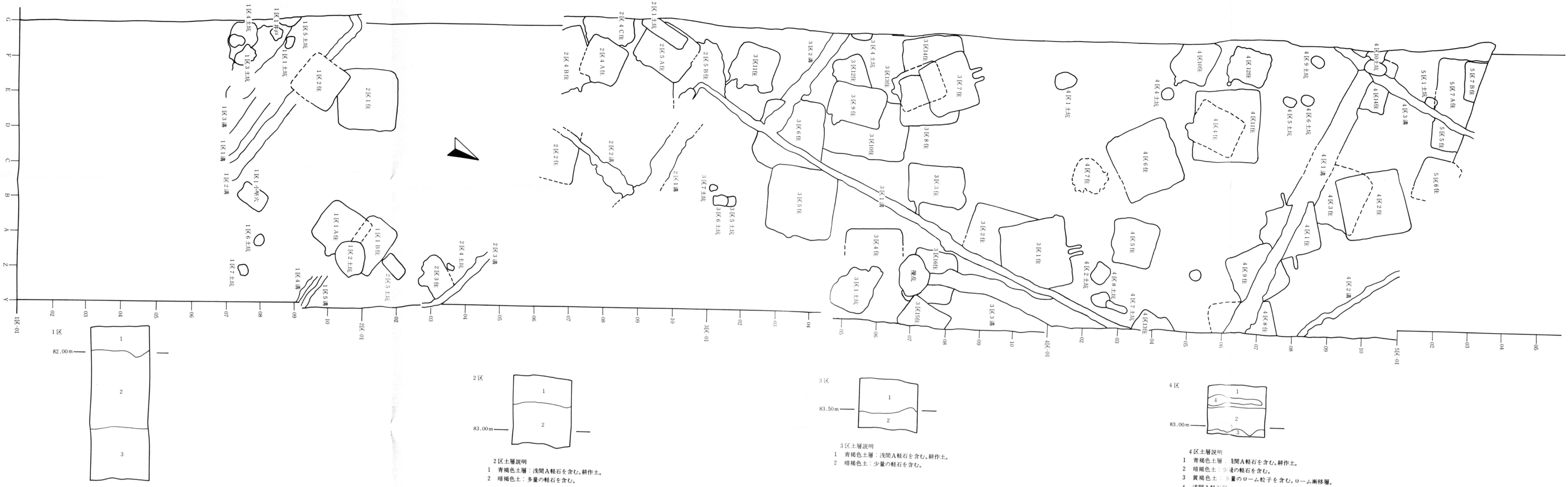
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社

前橋市天川大島町305-1

電話(0272)24-6245(代表)



1区土層説明  
 1 青褐色土層：多量の浅間A軽石を含む。耕作土。  
 2 褐色土：軽石を含み、鉄分の沈着あり。硬くしまっている。  
 3 暗褐色土：鉄分・少量の軽石を含む。

2区土層説明  
 1 青褐色土層：浅間A軽石を含む。耕作土。  
 2 暗褐色土：多量の軽石を含む。

3区土層説明  
 1 青褐色土層：浅間A軽石を含む。耕作土。  
 2 暗褐色土：少量の軽石を含む。

4区土層説明  
 1 青褐色土層：浅間A軽石を含む。耕作土。  
 2 暗褐色土：少量の軽石を含む。  
 3 黄褐色土：少量のローム粒子を含む。ローム層移層。  
 4 浅間A軽石層。



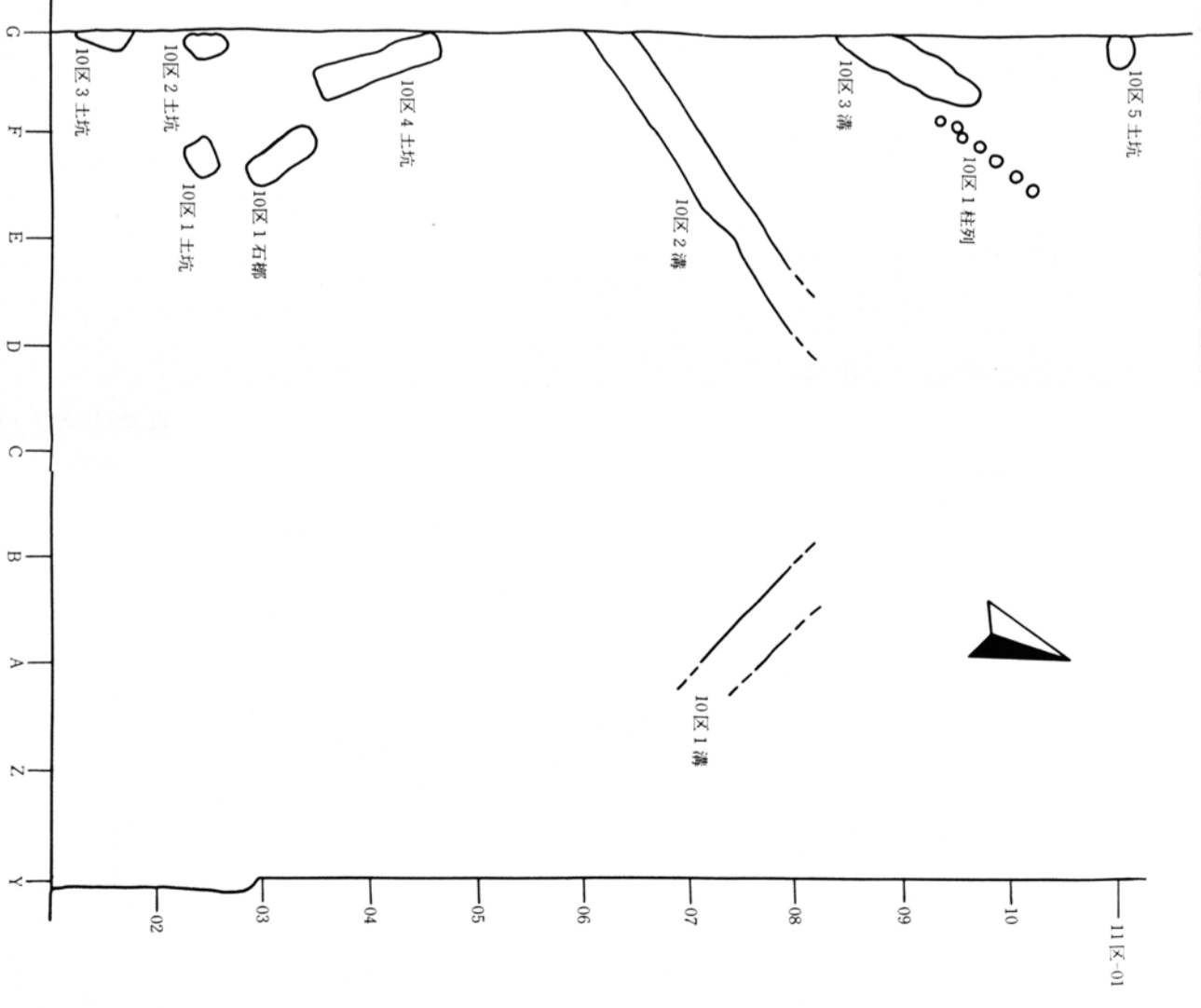
5区土層説明  
 1 青褐色土層：浅間A軽石を含み、粘性がやや強い。  
 2 暗褐色土：少量の軽石を含む。  
 3 暗褐色土：ローム小ブロックを含む。

6区土層説明  
 1 青褐色土層：浅間A軽石を含み、粘性がやや強い。  
 2 暗褐色土：少量の軽石を含む。  
 3 暗褐色土：ローム小ブロックを含む。

7区土層説明  
 1 暗褐色土：少量の軽石を含む。  
 2 暗褐色土：ローム小ブロックを含む。

8区土層説明  
 1 暗褐色土：少量の軽石を含む。  
 2 暗褐色土：少量のローム小ブロックを含む。

9区土層説明  
 1 暗褐色土：少量の軽石を含む。  
 2 暗褐色土：ローム小ブロックを含む。



10区土層説明  
 1 暗褐色土：少量の軽石を含む。  
 2 暗褐色土：ローム小ブロックを含む。

# 舟橋遺跡遺構全体図

